阿久尻遺跡

―― 県営金沢工業団地建設に伴う造成工事に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

1993

茅野市教育委員会

阿久尻遺跡

―― 県営金沢工業団地建設に伴う造成工事に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

1993

茅野市教育委員会

序

茅野市の位置する八ヶ岳西山麓一帯は、国特別史跡尖石遺跡、国史跡上之段遺跡を始め、多くの縄文時代の遺跡が発見、調査されています。ここに報告する阿久尻遺跡も、縄文時代前期を代表する茅野市の遺跡として上げられるものです。

平成２年、この阿久尻遺跡の地が県営工業団地として造成されることとなり、茅野市教育委員会で分布調査を行ったところ、遺跡地として確認され、調査を行うこととなりました。

阿久尻遺跡は、原村地籍内にある国史跡阿久遺跡に隣接することから、調査開始当初から注目され、阿久遺跡との関係が注目されていました。２年度にわたる調査の結果、阿久遺跡と阿久尻遺跡との間には、約300mにわたって遺構や遺物の検出されない箇所のあることが確認されたものの、本遺跡からも阿久遺跡で検出された縄文時代前期前半の住居址や方形柱穴列が多数検出され、阿久尻遺跡と阿久遺跡とが密接な関係にあったことが実証されています。

その様な中で、事業者である県商工部振興課・県土地開発公社を始め、東洋バルヴ株式会社には遺跡の重要性に御理解を示され、造成工事の設計変更を行って頂き、阿久遺跡に近いＡ区4,000㎡を保存して頂くこととなりました。関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

阿久尻遺跡の調査と同時に行われた下原山茂佐久保遺跡の調査では、長野県埋蔵文化財センターから、多忙な中２名の調査研究員を１ヶ月間にわたり派遣頂いています。

また、研究会「阿久尻集落の方形柱穴列をめぐって」の開催にあたっては、地元の宮坂光昭氏を始め、石井　寛氏、秋元信夫氏、南　久和氏、小杉　康氏の各氏には、御多忙中にもかかわらず、快く講師の依頼を引き受けて頂き、遠路茅野市へおいで頂きました。また、コーディネーターを務めていただいた戸沢充則明治大学教授には、調査における指導など、多大な御協力を頂いています。合せて感謝いたします。

平成５年３月

茅野市教育長

両角　昭二

例　言

1．本書は、県営金沢工業団地建設に伴う、造成工事に係る阿久尻（あきゅうじり）遺跡と下原山茂佐久保（しもはらやまもさくぼ）遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、長野県土地開発公社の委託により、委託金を得て茅野市教育委員会が実施した。

3．阿久尻遺跡の試掘調査は、平成２年８月１日から同12日までと11月16日から同19日まで行った。発掘調査は、平成２年度が９月19日から11月22日まで、平成３年度が４月12日から８月９日まで茅野市教育委員会が行った。

茂佐久保遺跡の試掘調査は、平成２年８月１～３日、10月29･31日、11月19･21日に長野県教育委員会によって行われ、発掘調査は、平成３年７月８日から８月３日まで長野県埋蔵文化財センター調査研究員の派遣を受け、茅野市教育委員会が行った。

整理作業は、平成４年５月20日から平成５年３月31日まで行った。

4．出土品の整理及び報告書の作成は、尖石考古館で実施した。整理作業にあたっては、尖石考古館の小平恭館長を始め、職員の協力を得た。

本報告書に係る出土品・諸記録は、茅野市文化財調査室に保管されている。

5．本調査において、航空測量を中央航業株式会社に、土壌分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に、断層調査を松島信幸・寺平　宏氏に、広域テフラの分析を町田　洋氏に委託した。

6．本報告書の執筆は、第Ⅴ章を上田典男と町田勝則、第Ⅵ章をパリノ・サーヴェイ株式会社、第Ⅶ章を松島信幸・寺平　宏、その他を小林深志が行い、全体の編集を小林深志が行った。

7．本報告の記述中、外部に委託した文章の中に、例えばＣ７号方形柱穴列をＣ７柱穴列などと略称を用いている箇所もあるが、レイアウトの関係で内容のわかるものについては、そのまま訂正を加えていない。また、区名のＣを省略してある箇所もある。

8．発掘調査から本書作成に至る過程で、下記の方々に指導・助言を得た。

会田　進	秋元信夫	井口慶久	石井　寛	市沢英利	今泉俊文	岩崎孝治
上田典男	小坂英文	小池　孝	小池幸夫	小池春夫	小島正裕	小杉　康
児玉卓文	小林公明	五味一郎	五味裕史	佐藤信之	寒川　旭	渋谷昌彦
島田哲夫	白沢勝彦	関　孝一	高見俊樹	武居幸重	田中　琢	土屋　積
勅使河原彰	寺平　宏	戸沢充則	永峯光一	林　茂樹	樋口昇一	樋口誠司
平出一治	平林とし美	細川光貞	増沢一徳	町田勝則	町田　洋	宮坂　清
松島信幸	南　久和	宮坂光昭	百瀬長秀	森島　稔	武藤雄六	矢崎勝郎
矢崎澪子						

この他、同僚の文化財調査室の諸氏には、各自の調査の合間をぬっての平面図作成等の他、報告書の作成に多くの助言・協力があった。

9．調査の体制

本調査は茅野市教育委員会文化財調査室が実施した。組織は以下の通りである。

調査主体者　両角昭二（茅野市教育委員会教育長）

事　務　局　原　　充（茅野市教育委員会教育次長）

長田　篤（茅野市教育委員会文化財調査室長）平成３年度まで

永田光弘（茅野市教育委員会文化財調査室長）平成４年度から

金子　強（茅野市教育委員会文化財調査室次長）平成２年度まで

鵜飼幸雄（茅野市教育委員会文化財調査室係長）平成２年度調査担当

両角一夫（茅野市教育委員会文化財調査室主任）

大月三千代（茅野市教育委員会文化財調査室主事補）平成４年度から

調 査 担 当　守矢昌文（茅野市教育委員会文化財調査室主任）平成２年度調査担当

小林深志（茅野市教育委員会文化財調査室指導主事）平成２・３年度調査担当

小池岳史（茅野市教育委員会文化財調査室主事）平成３年度調査担当

功刀　司（茅野市教育委員会文化財調査室主事）平成２年度調査担当

百瀬一郎（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

小林健治（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

山崎貴弘（茅野市教育委員会文化財調査室嘱託）

五味みゆき（茅野市教育委員会文化財調査室嘱託）平成２年度調査担当

上田典男（長野県埋蔵文化財センター派遣調査研究員）平成３年７月８日から１ヶ月間

町田勝則（長野県埋蔵文化財センター派遣調査研究員）平成３年７月８日から１ヶ月間

調査補助員　赤堀彰子　伊藤千代美　牛山市弥　牛山徳博　占部美恵　小松とよみ

関　喜子　武居八千代　原　敏江　堀内　潭　矢崎つな子　矢嶋恵美子

発掘調査・整理作業協力者

青木久子	伊藤京子	牛山明久	牛山静子	牛山豊子	遠藤角治郎	大島英子
大島邦子	大宮和美	小川アサ	小沢一二	小沢けさし	小澤貞美	折井智保香
片岡久男	金子清春	唐木秀明	菊原参之輔	工藤保男	小池真志	小池千恵子
小平　健	小林作衛	小林久子	小林吉也	小松紀代子	小松光子	五味ふみ
坂口浩司	佐藤　啓	繁野瑞穂	繁野陽介	清水園恵	下園義之	白旗スエ子
菅野トモコ	相場一子	相場忠雄	立岩貴江子	田中洋子	田中洋二郎	出羽秀雄
中島ふさえ	長田　尚	長田フジ子	長田　真	中村一人	名取つた江	名取房子
林　初男	原口秀之	藤森藤平	古川　務	堀田桜子	本間千恵	村上末太郎
目黒恵子	守屋真光	守屋春彦	山田規矩	和田佐一		

発掘調査の作業員募集にあたり、地元金沢地区の各区区長、茅野市シルバー人材センター、東洋バルヴ株式会社、宮川建設株式会社、協和建設株式会社に協力を得た。

目　次

序　　茅野市教育長　両角昭二
例　言

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境 …… 1

第Ⅱ章　調査経緯 …… 3

第１節　調査に至るまでの経過 …… 3
第２節　調査の方法と経過 …… 3
第３節　遺跡の保護 …… 15

第Ⅲ章　遺跡の層序 …… 16

第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 20

第１節　縄文時代 …… 20
(1)　住居址 …… 20
(2)　方形柱穴列 …… 55
(3)　土坑・集石土坑・集石 …… 103
第２節　平安時代 …… 104
(1)　住居址 …… 104

第Ⅴ章　下原山茂佐久保遺跡の調査 …… 105

第１節　調査の方法と経過 …… 105
第２節　調査概要 …… 106

第Ⅵ章　方形柱穴列柱痕の土壌化学分析報告 …… 107

第１節　はじめに …… 107
第２節　分析調査課題の設定 …… 107

第3節　試　　料 ……108
第4節　分析項目と方法 ……108
(1)　分析試料の調製 ……108
(2)　炭素含量、窒素含量およびC／N比(炭素率)の測定 ……108
(3)　腐植分析 ……108
(4)　リン分析 ……113
第5節　結果・考察 ……113
(1)　C7号方形柱穴列 ……114
(2)　C9号方形柱穴列 ……118
第6節　柱材の痕跡について ……141

第Ⅶ章　阿久尻遺跡の地形地質 ……142

第1節　阿久尻遺跡の地形的な位置 ……142
第2節　阿久尻遺跡に発見された地割れ群 ……143
第3節　地割れの形態 ……145
(1)　C10号方形柱穴列を切る地割れ ……145
(2)　開口落下型の地割れ－C18号方形柱穴列の場合 ……145
(3)　正断層の地割れ－C14号住居址の場合 ……150
(4)　地割れと広域テフラの産状 ……155
(5)　2組の開口落下型地割れが並ぶ－C9号方形柱穴列の場合 ……155
第4節　地割れの傾向 ……157
第5節　地割れはいつできたか ……158
(1)　地割れ内を充塡する黒土中の広域テフラ ……158
(2)　阿久尻遺跡のテフラについて ……158
第6節　阿久尻遺跡の地割れ群と糸魚川－静岡構造線の活動 ……160
(1)　糸魚川－静岡構造線と諏訪盆地の形成 ……160
(2)　茅野市を通る糸静線の茅野断層について ……161
(3)　阿久尻の地割れ群と糸静線活断層系の活動について ……161
(4)　地割れの成因と糸静線との関係 ……163
第7節　ま と め ……164

第Ⅷ章　ま と め ……166

第1節　縄文時代前期前半の住居址 ……166
(1)　平面形態 ……166
(2)　長軸方向 ……170
(3)　覆土の状態 ……170

第2節　方形柱穴列 ……171
(1)　方形柱穴列の名称 ……171
(2)　方形柱穴列の時期 ……172
(3)　調査の方法 ……172
(4)　柱穴数と規模 ……172
(5)　構造上の特徴 ……175
(6)　長軸方向 ……175
(7)　各柱穴の掘り方 ……176
(8)　柱　痕 ……176
(9)　柱穴以外の施設 ……176
(10)　方形柱穴列の性格と上屋構造 ……176
第3節　阿久尻遺跡における縄文時代前期前半の集落 ……177
第4節　阿久尻遺跡の縄文時代中期の遺構について ……177
第5節　阿久尻遺跡の断層について ……178
第6節　下原山茂佐久保遺跡について ……178
あとがき ……179
参考文献 ……180

挿図目次

第１図　阿久尻遺跡(231)・下原山茂佐久保遺跡(232)の位置(1/25,000)……2
第２図　地形と発掘区域(1/5,000)……4
第３図　遺跡の層序(1/60)……16
第４図　遺構分布図(1/1,000)……17・18
第５図　Ａ１号住居址(1/60)……20
第６図　Ａ２号住居址(1/60)……21
第７図　Ａ３号住居址(1/60)……22
第８図　Ａ４号住居址(1/60)……23
第９図　Ａ５号住居址(1/60)……24
第10図　Ａ６号住居址(1/60)……25
第11図　Ａ７号住居址(1/60)……26
第12図　Ａ８号住居址(1/60)……27
第13図　Ａ10号住居址(1/60)……28
第14図　Ａ11号住居址(1/60)……29
第15図　Ａ12号住居址(1/60)……30
第16図　Ａ13号住居址(1/60)……31
第17図　Ａ14号住居址(1/60)……31
第18図　Ａ15号住居址(1/60)……32
第19図　Ａ16号住居址(1/60)……33
第20図　Ｂ１号住居址(1/60)……34
第21図　Ｂ２号住居址(1/60)……35
第22図　Ｂ３号住居址(1/60)……36
第23図　Ｂ４号住居址(1/60)……36
第24図　Ｂ５号住居址(1/60)……37
第25図　Ｂ６号住居址(1/60)……38
第26図　Ｃ７号住居址(1/60)……39
第27図　Ｃ８号住居址(1/60)……41
第28図　Ｃ９号住居址(1/60)……42
第29図　Ｃ10号住居址(1/60)……43
第30図　Ｃ11号住居址(1/60)……45
第31図　Ｃ12号住居址(1/60)……46
第32図　Ｃ13号住居址(1/60)……47
第33図　Ｃ14号住居址(1/60)……48
第34図　Ｃ15号住居址(1/60)……49
第35図　Ｃ16号住居址(1/60)……50
第36図　Ｃ17号住居址(1/60)……51
第37図　Ｃ19・20号住居址(1/60)……52
第38図　Ｃ21号住居址(1/60)……52
第39図　Ｃ22・23号住居址(1/60)……53
第40図　Ｂ24号住居址(1/60)……54
第41図　Ｂ25号住居址(1/60)……54
第42図　Ａ１号方形柱穴列・Ａ７・Ａ９号土坑(1/60)……56
第43図　Ｂ１号方形柱穴列(1/60)……58
第44図　Ｂ２号方形柱穴列(1/60)……61
第45図　Ｂ３号方形柱穴列(1/60)……62
第46図　Ｂ４号方形柱穴列(1/60)……64
第47図　Ｃ５号方形柱穴列(1/60)……66
第48図　Ｃ６号方形柱穴列(1/60)……68
第49図　Ｃ７号方形柱穴列(1/60)……71
第50図　Ｃ８号方形柱穴列(1/60)……74
第51図　Ｃ９号方形柱穴列(1)(1/60)……76
第52図　Ｃ９号方形柱穴列(2)(1/60)……77
第53図　Ｃ10号方形柱穴列(1/60)……80
第54図　Ｃ11号方形柱穴列(1/60)……84
第55図　Ｃ12号方形柱穴列(1/60)……86
第56図　Ｃ13号方形柱穴列(1/60)……88
第57図　Ｃ14号方形柱穴列(1/60)……90
第58図　Ｃ15号方形柱穴列(1/60)……93
第59図　Ｃ16号方形柱穴列(1/60)……95
第60図　Ｃ17号方形柱穴列(1/60)……98
第61図　Ｃ18号方形柱穴列(1/60)……101
第62図　Ｃ19号方形柱穴列(1/60)……102
第63図　Ａ９号住居址(1/60)……104
第64図　Ｃ７号方形柱穴列の分析試料採取層位……109
第65図　Ｃ９号方形柱穴列の分析試料採取層位……110
第66図　腐植酸の分類図……111
第67図　Ｃ７号方形柱穴列ｏ－２の土壌理化学性…115・116
第68図　Ｃ７号方形柱穴列ｎ－３の土壌理化学性…119・120
第69図　Ｃ９号方形柱穴列ｅ－２の土壌理化学性…123・124
第70図　Ｃ９号方形柱穴列ｍ－２の土壌理化学性…127・128
第71図　Ｃ９号方形柱穴列ｃ－２の土壌理化学性…131・132
第72図　Ｃ９号方形柱穴列ｏ－２の土壌理化学性…135・136
第73図　Ｃ９号方形柱穴列ｄ－２の土壌理化学性…139・140
第74図　諏訪盆地周辺の糸魚川－静岡構造線と阿久尻遺跡の位置……142
第75図　阿久尻遺跡(1991年調査Ｃ区)の遺構と地割れの分布…144
第76図　阿久尻遺跡Ｃ10号方形柱穴列を切る地割れの平面図…145
第77図　地割れのスケッチと広域テフラ試料採取地点(1) 149
第78図　地割れのスケッチと広域テフラ試料採取地点(2) 153

第79図　雁行状割れ目の配列 ……157
第80図　C14号住居址のトレンチにおけるテフラ柱状図 159
第81図　阿久尻遺跡近傍のテフラ露頭 ……160
第82図　茅野断層坂室における変位地形と阿久尻周辺の地形…162
第83図　主断層と副次的に生じる断裂系 ……164
第84図　A区住居址の形態(1/120)……167
第85図　B・C区住居址の形態(1/120)……168
第86図　A区住居址の規模 ……169
第87図　B・C区住居址の規模 ……169
第88図　A区住居址の長軸方向 ……170
第89図　B・C区住居址の長軸方向 ……170
第90図　A4・5号住居址覆土堆積状態(1/120)……170
第91図　C8・9号住居址覆土堆積状態(1/120)……171
第92図　方形柱穴列の形態(1)(1/120)……173
第93図　方形柱穴列の形態(2)(1/120)……174
第94図　方形柱穴列の規模 ……175
第95図　方形柱穴列の長軸方向 ……175

表一覧表

第1表　C7号方形柱穴列の腐植分析とリン分析の結果 117
第2表　C9号方形柱穴列の腐植分析とリン分析の結果
……122・126・130・134・138
第3表　地割れを充填する黒土の分析結果 ……154
第4表　地割れを充填する黒土中の火山ガラスの屈折率 155
第5表　地割れに落ち込んだAT火山ガラスの深さ ……155
第6表　糸静線トレンチ調査等で識別されたイベント年代と阿久尻の地割れ年代との対比 ……162
第7表　住居址一覧表……181～184
第8表　方形柱穴列一覧表 ……185
第9表　方形柱穴列個別柱穴一覧表……186～198

写真図版目次

図版1 (1) 阿久尻遺跡全景
図版2 (1) A区全景
図版2 (2) B区全景
図版3 (1) B・C区全景
図版3 (2) A1号住居址(南西から)
図版4 (1) A2号住居址
図版4 (2) A2号住居址遺物出土状態
図版4 (3) A2号住居址遺物出土状態
図版4 (4) A2号住居址遺物出土状態
図版4 (5) A2号住居址遺物出土状態
図版5 (1) A3号住居址(北から)
図版5 (2) A3号住居址遺物出土状態
図版5 (3) A3号住居址炭化柱
図版5 (4) A3号住居址礫出土状態
図版5 (5) A3号住居址
図版6 (1) A4号住居址(北から)
図版6 (2) A4号住居址投込みロームの状態
図版6 (3) A4号住居址セクション
図版6 (4) A4号住居址遺物出土状態
図版6 (5) A4号住居址遺物出土状態
図版7 (1) A5号住居址
図版7 (2) A5号住居址投込みロームの状態
図版7 (3) A5号住居址遺物出土状態
図版7 (4) A5号住居址セクション
図版7 (5) A5号住居址セクション(部分)
図版8 (1) A6号住居址(南から)
図版8 (2) A6号住居址遺物出土状態
図版9 (1) A7号住居址(南から)
図版9 (2) A10号住居址(南西から)
図版10 (1) A8号住居址(南から)
図版10 (2) A8号住居址両尖匕首出土状態
図版11 (1) A9号住居址(南から)
図版11 (2) A9号住居址カマド(南から)
図版12 (1) A11号住居址
図版12 (2) A12号住居址
図版13 (1) A13号住居址(北から)
図版13 (2) A13号住居址黒曜石集中個所
図版14 (1) A14号住居址(北から)
図版14 (2) A14号住居址遺物出土状態
図版15 (1) A15号住居址(南西から)
図版15 (2) A16号住居址
図版16 (1) B1号住居址(南から)

図版16 (2) Ｂ２号住居址(南から)
図版17 (1) Ｂ３号住居址(南から)
図版17 (2) Ｂ４号住居址(南から)
図版18 (1) Ｂ５号住居址(南から)
図版18 (2) Ｂ６号住居址(北から)
図版19 (1) Ｃ７号住居址(北から)
図版19 (2) Ｃ８号住居址(北から)
図版20 (1) Ｃ９号住居址(北から)
図版20 (2) Ｃ13号住居址(北から)
図版21 (1) Ｃ10号住居址(北から)
図版21 (2) Ｃ10号住居址遺物出土状態(北から)
図版22 (1) Ｃ11号住居址(北から)
図版22 (2) Ｃ11号住居址(東から)
図版23 (1) Ｃ12号住居址焼土掘り下げ前(北から)
図版23 (2) Ｃ12号住居址(北から)
図版24 (1) Ｃ14号住居址(南から)
図版24 (2) Ｃ14号住居址(北から)
図版24 (3) Ｃ14号住居址遺物出土状態(北から)
図版24 (4) Ｃ14号住居址部分(東から)
図版24 (5) Ｃ14号住居址炉
図版25 (1) Ｃ15号住居址(南から)
図版25 (2) Ｃ16号住居址(南から)
図版26 (1) Ｃ17号住居址(南から)
図版27 (1) Ｃ19・20号住居址(南から)
図版27 (2) Ｃ19・20号住居址土層断面(西から)
図版28 (1) Ｃ21号住居址(南から)
図版28 (2) Ｃ21号住居址土層断面(西から)
図版29 (1) Ｃ22・23号住居址(南から)
図版29 (2) Ｃ22・23号住居址土層断面(西から)
図版30 (1) Ｃ24号住居址(南から)
図版30 (2) Ｃ25号住居址(南から)
図版31 (1) Ａ１号方形柱穴列(東から)
図版31 (2) Ｂ１号方形柱穴列(西から)
図版32 (1) Ｂ１号方形柱穴列ａピット断面柱痕確認(北から)
図版32 (2) Ｂ１号方形柱穴列ｂピット断面柱痕確認(西から)
図版32 (3) Ｂ１号方形柱穴列ｃピット断面柱痕確認(東から)
図版32 (4) Ｂ１号方形柱穴列ｅピット平面柱痕確認(東から)
図版32 (5) Ｂ１号方形柱穴列ｅピット断面柱痕確認(東から)
図版32 (6) Ｂ１号方形柱穴列ｇピット断面柱痕確認(南から)
図版32 (7) Ｂ１号方形柱穴列ｈピット断面柱痕確認(東から)
図版32 (8) Ｂ１号方形柱穴列ｈピット断面柱痕確認(西から)
図版33 (1) Ｂ１号方形柱穴列ｉピット断面柱痕確認(東から)
図版33 (2) Ｂ１号方形柱穴列ｊピット断面柱痕確認(西から)
図版33 (3) Ｂ１号方形柱穴列ｉ・ｊ(前)ピット断面柱痕確認(東から)
図版33 (4) Ｂ１号方形柱穴列ｊ②ピット断面柱痕確認(西から)
図版33 (5) Ｂ１号方形柱穴列ｋピット断面柱痕確認(西から)
図版33 (6) Ｂ１号方形柱穴列ｎ・ｍ・ｌピット断面柱痕確認(西から)
図版33 (7) Ｂ１号方形柱穴列ｎ・ｍ・ｌピット断面柱痕確認(西から)
図版34 (1) Ｂ２号方形柱穴列(南から)
図版34 (2) Ｂ号２方形柱穴列ｇピット断面柱痕確認(東から)
図版34 (3) Ｂ２号方形柱穴列ｋピット断面柱痕確認(西から)
図版34 (4) Ｂ２号方形柱穴列ｌピット断面柱痕確認(西から)
図版34 (5) Ｂ２号方形柱穴列ｍピット断面柱痕確認(西から)
図版35 (1) Ｂ３号方形柱穴列(南から)
図版35 (2) Ｂ３号方形柱穴列ｂ・ａピット断面柱痕確認(北から)
図版35 (3) Ｂ３号方形柱穴列ａピット断面柱痕確認(北から)
図版35 (4) Ｂ３号方形柱穴列ｂピット断面柱痕確認(北から)
図版35 (5) Ｂ３号方形柱穴列ｉピット断面柱痕確認(北から)
図版36 (1) Ｂ１～３号方形柱穴列(南から)
図版36 (2) 手前からＢ３・２・１号方形柱穴列(北西から)
図版37 (1) Ｂ４号方形柱穴列(西から)
図版37 (2) Ｂ４号方形柱穴列ピットａ(左)ｂ(右)断面柱痕確認(南から)
図版37 (3) Ｂ４号方形柱穴列ｃピット断面柱痕確認(南から)
図版37 (4) Ｂ４号方形柱穴列ｄピット断面柱痕確認(東から)
図版37 (5) Ｂ４号方形柱穴列ｅピット断面柱痕確認(東から)
図版38 (1) Ｃ５号方形柱穴列(北から)
図版38 (2) Ｃ６号方形柱穴列(東から)
図版39 (1) Ｃ７号方形柱穴列(北から)
図版39 (2) Ｃ７号方形柱穴列ａピット断面柱痕確認(北から)
図版39 (3) Ｃ７号方形柱穴列ｂピット断面柱痕確認(北から)
図版39 (4) Ｃ７号方形柱穴列ｃピット断面柱痕確認(北から)
図版39 (5) Ｃ７号方形柱穴列ｄピット断面柱痕確認(北から)
図版40 (1) Ｃ７号方形柱穴列ｄピット断面柱痕確認(南から)
図版40 (2) Ｃ７号方形柱穴列ｋピット断面柱痕確認(南から)
図版40 (3) Ｃ７号方形柱穴列ｎ－３ピット断面柱痕確認(西から)
図版40 (4) Ｃ７号方形柱穴列ｏ－２ピット断面柱痕確認(西から)
図版40 (5) Ｃ８号方形柱穴列
図版41 (1) Ｃ９号方形柱穴列(北から)
図版41 (2) Ｃ９号方形柱穴列ｄピット断面柱痕確認(北から)
図版41 (3) Ｃ９号方形柱穴列ｋピット断面柱痕確認
図版41 (4) Ｃ９号方形柱穴列ｍピット断面柱痕確認
図版41 (5) Ｃ９号方形柱穴列ｏピット断面柱痕確認

図版42 (1) C10号方形柱穴列(北から)
図版42 (2) C10号方形柱穴列(東から)
図版43 (1) C11号方形柱穴列(西から)
図版43 (2) C11号方形柱穴列(手前)・C16号住居址(東から)
図版44 (1) C12号方形柱穴列(東から)
図版44 (2) C13号方形柱穴列(北から)
図版45 (1) C14号方形柱穴列(北から)
図版45 (2) C14号方形柱穴列iピット断面柱痕確認
図版45 (3) C14号方形柱穴列jピット断面柱痕確認(南から)
図版45 (4) C14号方形柱穴列mピット断面柱痕確認(南から)
図版45 (5) C14号方形柱穴列pピット断面柱痕確認(西から)
図版46 (1) C15号方形柱穴列(北から)
図版46 (2) C16号方形柱穴列(北から)
図版47 (1) C17号方形柱穴列
図版47 (2) C17号方形柱穴列mピット断面柱痕確認(西から)
図版48 (1) C18号方形柱穴列(北から)
図版48 (2) C19号方形柱穴列(北から)
図版49 (1) A1号土坑一括土器
図版49 (2) A33号土坑(東から)
図版49 (3) B1号土坑完掘(南から)
図版49 (4) B3号土坑
図版49 (5) B4号土坑(西から)
図版49 (6) B5号土坑(北から)
図版49 (7) B6号土坑(北から)
図版49 (8) B7号土坑(西から)
図版50 (1) B8号土坑(北側斜面)(東から)
図版50 (2) B9号土坑(北側斜面)陥し穴(東から)
図版50 (3) B6号住居址内土坑(北から)
図版50 (4) C11号土坑(北から)
図版50 (5) C12号土坑(北から)
図版50 (6) C13・14・15号土坑(北から)
図版50 (7) C16号土坑(東から)
図版50 (8) C17号土坑
図版51 (1) C18号土坑
図版51 (2) C19号土坑(南から)
図版51 (3) C20号土坑
図版51 (4) C21号土坑(北から)
図版51 (5) C22号土坑(北から)
図版51 (6) C23号土坑(北から)
図版51 (7) C24号土坑(上から)
図版51 (8) C25号土坑(南から)
図版52 (1) C10号方形柱穴列断層(東から)
図版52 (2) C10号方形柱穴列断層(北東から)
図版53 (1) 断層調査
図版53 (2) 断層調査
図版54 (1) 断層調査
図版54 (2) C11号住居址(東から)
図版55 (1) C9号方形柱穴列cピット土壌サンプルの採取前
図版55 (2) C9号方形柱穴列cピット土壌サンプルの採取(北から)
図版55 (3) C9号方形柱穴列dピット土壌サンプルの採取
図版55 (4) C9号方形柱穴列eピット土壌サンプルの採取
図版55 (5) C9号方形柱穴列mピット土壌サンプルの採取前(南から)
図版55 (6) C9号方形柱穴列mピット土壌サンプルの採取後(南から)
図版55 (7) C9号方形柱穴列oピット土壌サンプルの採取前(西から)
図版55 (8) C9号方形柱穴列oピット土壌サンプルの採取後

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

阿久尻遺跡（231）は茅野市金沢木舟に所在する。ＪＲ茅野駅からは南東へ４㎞、青柳駅からは北西へ３㎞ほどの位置にある。茅野市域では南にあたり、諏訪郡原村との境界にも近い。蓼科や白樺湖といった観光ルートから離れていたため、開発の手から免れていたが、中央自動車道西ノ宮線の建設に伴い、本遺跡から南西４㎞の所に諏訪南インターチェンジが開設されたため、諏訪南インター林間工業団地など工業団地の造成・進出が多く、開発の進んできた地域である。

八ケ岳の泥流や火砕流によって形成された八ケ岳西南麓は、宮川に合流する弓振川、前沢川、小早川、大早川、阿久川、金山沢川などの河川の浸食によって区切られているが、その山麓は糸魚川－静岡構造線による断層崖で断ち切られている。

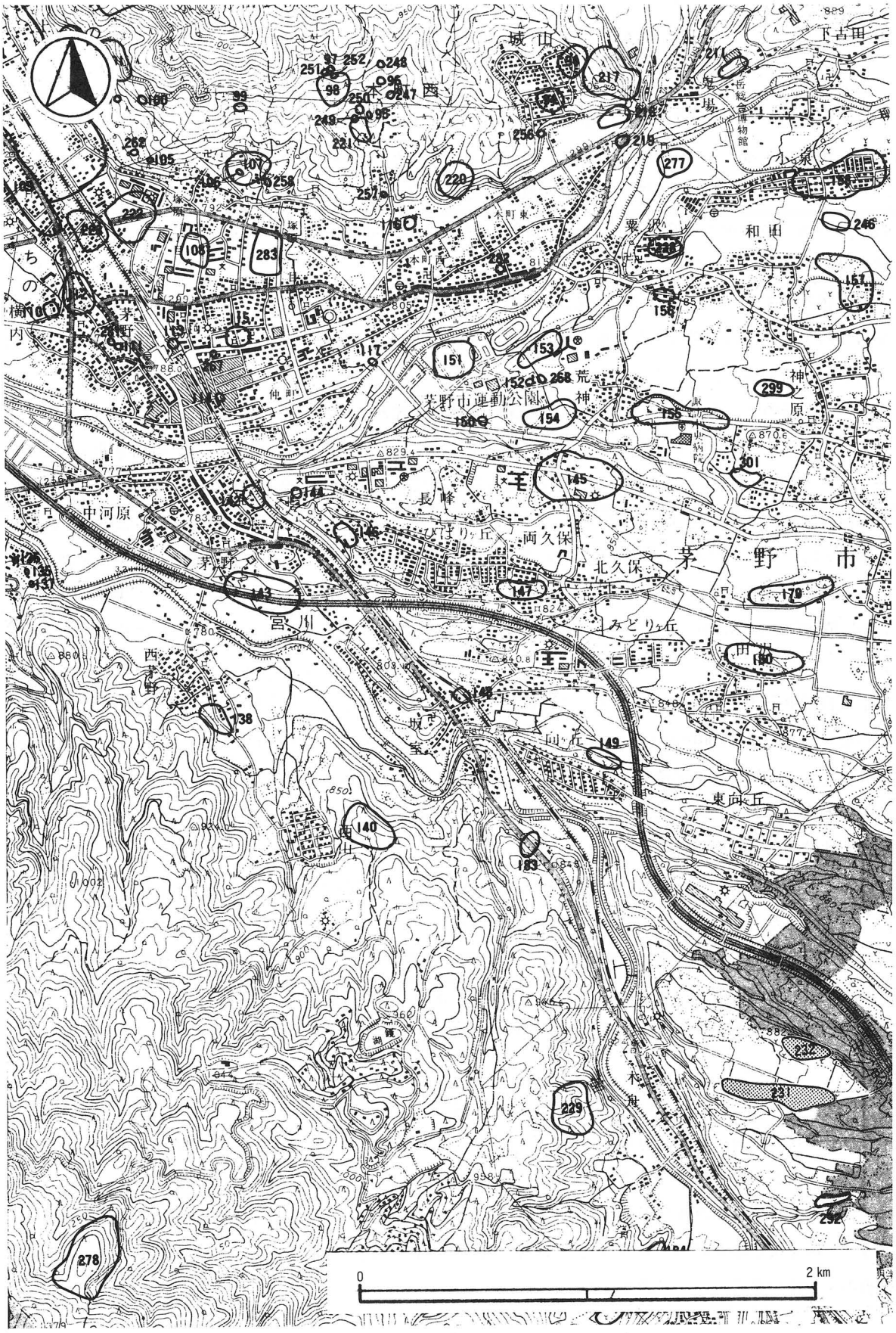
阿久尻遺跡のある台地の南には、阿久川が東から西へと流れているが、本遺跡のほぼ中央で最も台地に近付き、この後かなりな比高差をもって台地の西側を巻くようにして宮川と合流し、茅野市内を北上して諏訪湖に至っている。西には宮川を挟んで赤石山脈が連なっている。中央本線と国道20号線は、この八ケ岳山麓と赤石山脈に挟まれたところを宮川に沿って建設されている。中央自動車道西ノ宮線は１㎞ほど東へ離れた山麓側をほぼ平行して走り、茅野市街に入る手前でこれを横切り、赤石山脈の北端である守屋山系側に移る。阿久尻遺跡と下原山茂佐久保遺跡は、この八ケ岳山麓が断層崖と宮川によって断ち切られる先端に位置している。遺跡内の標高は860m程で、遺跡からは東に八ケ岳、北西方向に諏訪湖が望める景色の良いところである。

中央自動車道西ノ宮線の建設に伴って調査され、後に国の史跡となった原村の阿久遺跡は、本遺跡の東端から東へ直線距離で300mの距離に有り、同一台地上に有る。阿久遺跡からは尾根が３ヵ所に分れているが、中央の痩せた尾根に阿久尻遺跡が有る。この尾根には、ほぼ直交する形で幾つかの小さな谷が北へ、あるいは南へと入っており、阿久遺跡からは何個所かくびれて途切れる個所も有る。阿久尻遺跡はその狭い台地の中でも比較的広い場所を選んで占有している。

阿久尻遺跡のある尾根の先端に近い南側斜面は、かなりの急斜面となっているが、阿久川の氾濫などで削平されていったもので、当時はもっと緩やかな傾斜をもっていたものと思われる。特にＢ′区とした地点は、阿久川の氾濫に伴う改良工事のため、人為的な削平が行われているとの話も調査中に耕作者よりお聞きしている。また、阿久尻遺跡のある尾根と阿久川の間の低地にある水田部分の試掘調査も行ったが、かなり大きな礫が耕土の下から出土し、阿久川が現在よりも尾根に近い場所を流れていた時期のあったことも確認している。

下原山茂佐久保遺跡（232）は、阿久遺跡の西に隣接し、阿久尻遺跡のある尾根の一つ北側の尾根の南斜面にある。尾根の中央にある農道が市村境となっており、北側が原村となっている。尾根の北側に宮川の支流である大早川があるが、かなりの比高差をもっている。

阿久尻遺跡・下原山茂佐久保遺跡の周辺には、前述の阿久遺跡の他にも柏木南遺跡、居沢尾根遺跡、大石遺跡、上前尾根遺跡を始め、多くの大小の遺跡があり、阿久遺跡群を形成しており、その幾つかは中央自動車道西ノ宮線の建設に伴って調査されている。



第１図　阿久尻遺跡（231）・下原山茂佐久保遺跡（232）の位置（1/25,000）

第II章　調査経緯

第1節　調査に至るまでの経過

諏訪広域市町村圏は、テクノハイランド信州構想の諏訪テクノレイクサイド圏域として、中核都市ゾーン、ハイテクインダストリアルパークゾーン等4つのゾーンとその中に諏訪南ハイテクインダストリアルパークエリア、レイクサイド・エリア等6つのコアを設定し、ハイテク高度技術都市圏の形成を目指している。

諏訪南ハイテクインダストリアルパーク・エリアには、諏訪南インター林間工業団地、諏訪南インター原村工業団地を始め、幾つかの企業により工業集積が進んでおり、このエリアに、より工業集積を推進させるための事業の一環として、県営により工業団地を整備することとなった。

こうした状況の中で、平成元年9月、金沢木舟字茂佐久保他の当地19.1haが、県営金沢工業団地の用地として選定された。

平成2年1月6日開催された、県工業立地研究会において、文化課では、当地が国史跡阿久遺跡の隣接地であること、及び、埋蔵文化財の存在の可能性のあることから好ましい地ではないことを意見している。この研究会により、文化課から市教育委員会、原村教育委員会へ連絡があり、意見聴取が行われている。市教育委員会が今回の県営工業団地の造成を知ったのはこの時点であった。

当地は、茅野市の遺跡地図に載っておらず、遺跡としては登録されていなかった。しかし、阿久遺跡の隣接地であり、同じ台地上であることから、遺跡が広がっている可能性が十分考えられたため、市教育委員会では、平成2年4月24日、開発予定地内の遺跡分布調査を行い、23地点よりそれぞれ数点の遺物の散布を見、新発見の遺跡として阿久尻遺跡、下原山茂佐久保遺跡を県に届け出ている。

平成2年5月17日には長野県教育委員会文化課、長野県商工部振興課、長野県土地開発公社、茅野市工業振興課と、本遺跡と隣接する国史跡阿久遺跡を持つ原村教育委員会を交え、保護協議を行なった。協議では、今まで調査されたことがない地域なので、試掘調査を行い、遺跡の性格を見ることとなった。

試掘調査は8月1日から同12日まで、県教育委員会文化課の指導の下に行なわれた。調査は、地形にそって25m毎に設定された測量杭をもとに、2m幅のトレンチを井桁状にあけ、遺物包含層の確認と、遺構の有無を確認する方法をとった。

試掘調査の結果、調査区の東側からは住居址が15軒検出され、西側からは3軒の住居址が検出された。なお、調査区の東側については、試掘調査終了後、引続き調査区内の全面の表土層を剝ぎ、遺構の検出を行なった。その結果をもとに、8月29日、再度協議を行い、進入路建設等で早く造成を行わなければならない東側については発掘調査を本年度に行い、西側については来年度調査を行うこととなった。なお、調査を進めていく中で、西側についても出来るだけ調査をしてほしいとの要望が出、一部を調査している。

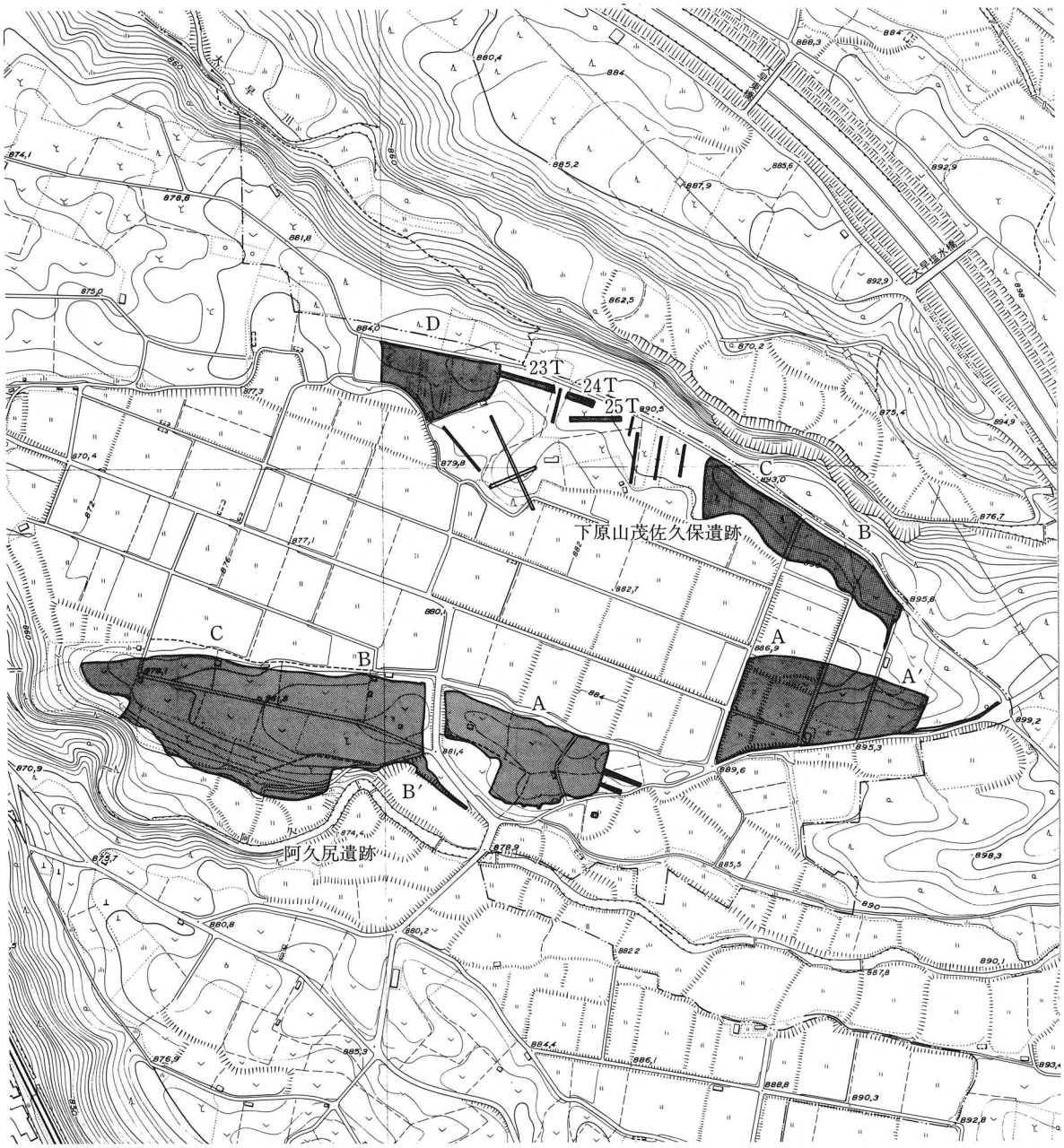
第2節　調査の方法と経過

阿久尻遺跡は、阿久遺跡から続く東西に痩せた尾根上にあるが、この台地のほぼ中央を、南北に切る道路が横切っている。この箇所で尾根が「く」の字状に折れ曲っており、地形測量のために打った杭の軸線方向もずれていた他、8月の初めに行った試掘調査の結果、ちょうどこの場所に南と北に延びる2つの谷が入っていたため、調査にあたっては、この道路を境に阿久遺跡に近い東側をA区、西側をB区と呼称した。調査

の結果も、A区の西端に有るA区第14号住居址とB区の東端に有るA区第１号住居址の間が約80m離れており、その間には遺構のまったく検出されない箇所が有ったため、阿久尻遺跡が２つの集落に分れていることが確認されている。また、A区とB区の境に有り、一段下がった南側に有る個所をB′区とした。なお、B区の西側にあり、次年度調査を行った個所が約7、000㎡あるが、これをC区と呼んでいる。

遺構の番号を付す時には、A区・B区それぞれ１号から呼称した。C区の名称については、保護協議を行なう中でB区西側の次年度調査箇所について用いられ、本報告書でも用いているが、調査年度が異なるだけで、集落的にはB区とつながりが見られるため、遺構番号についてはB区からの連番とし、単に遺跡内における位置関係と調査年度を示す意味で、C区を用いている。

本報告の中で、B区やC区の他にB・C区の名称を用いることが有るが、B区やC区としたときには、単



第２図　地形と発掘区域（1/5,000）

に遺跡に於ける位置関係と、調査年度の違いを示し、B・C区としたときにはA区の集落に対するもう一方の集落を指す意味で用いている。

平成2年度の調査

発掘調査は9月19日から行った。

9月19日（水）曇り後雨

昼までで、上見遺跡の1次調査を終了し、機材を現地へ搬入する。午後よりさっそく試掘調査で検出されていたA区東端の2・15号住居址の掘り下げに入る。

3時過ぎ、台風の影響で雨となり、中止。

9月20日（木）晴れ

前日に引き続き、A区2・15号住居址の掘り下げ。調査区南端の農道沿いで、平安時代の住居址を検出する。

9月21日（金）

A区2・15号住居址の完掘と写真撮影。9号住居址（平安時代）の完掘と写真撮影。1・11号住居址の掘り下げ開始。

9月25日（火）

A区7・11号住居址の掘り下げ。

9月27日（木）晴れ

A区1・11号住居址写真撮影。A区8号住居址の掘り下げ。

9月28日（金）曇り

A区7号住居址写真撮影。A区3号住居址掘り下げ。

9月29日（土）曇り後雨

遺構の掘り下げを行うが、雨のため2時に解散となる。

10月1日（月）晴れ

遺構の掘り下げ。

10月2日（火）曇り

A区4号住居址のロームブロック埋設状態の写真撮影。A区12号住居址完掘写真。6号住居址掘り下げ。

10月3日（水）

A区4・5・14号住居址掘り下げ。

10月4日（木）曇り

A区5号住居址掘り下げ。各土坑の掘り下げ。

10月5日（金）曇り

A区各土坑掘り下げと土層観察。

10月9日（火）

県埋蔵文化財センター白沢勝彦調査研究員来跡。A区3号住居址の炭化材の保存について、指導を受ける。

本日よりB区の遺構掘り下げに入る。

10月11日（木）晴れ

B区2・3・4・5・6号住居址の掘り下げ。B区の方形柱穴列の検出は、3基となる。

10月12日（金）

B区１・２・３・４・５号住居址の床面精査と写真撮影。６号住居址掘り下げ。測量用の杭打ち作業。
県教育委員会文化課市沢指導主事来跡。
10月16日（火）B区６号住居址完掘写真撮影。B区１・２・３・４・５・７号土坑の半截と断面図作成。B区１・２・３号方形柱穴列半截開始。
10月17日（水）
B区５・６号土坑の完掘と写真撮影。７号土坑の完掘。１・２・３号方形柱穴列の掘り下げ。
原村平出一治氏、平林とし美氏来跡。方形柱穴列の調査方法について、指導を受ける。
10月18日（木）晴れ
B区１・２・３号方形柱穴列の掘り下げ。新たにB４号方形柱穴列を検出。B区南斜面の栗林に２本のトレンチを入れ、遺構の有無を確認することにする。
10月19日（金）
B区１・２・３号方形柱穴列完掘写真撮影。１号土坑完掘写真撮影。B区４号方形柱穴列の調査開始。B区南斜面の栗林からは、新しそうな落込みが検出されただけであった。
宮坂光昭氏、平出一治氏来跡。金沢小学校４～６年生見学。
10月20日（土）晴れ
B区４号方形柱穴列の土層断面図作成と完掘。エレベーション図作成。B区南東の、一段低い畑の調査に入る（B′区）。撚糸文土器、押型文土器が出土。尖石友の会藤森栄子氏、藤森美和氏、田中洋二郎氏発掘調査に参加。
平出一治氏、富士見町小林公明氏、樋口誠司氏来跡。
10月22日（月）晴れ
B区４号方形柱穴列の写真撮影。B′区の掘り下げ。
10月23日（火）
A区各住居址のセクションポイント・炉の範囲を平面図に図化。A区南に張り出す水田部分を一部掘り下げ、遺構の有無を確認するが、検出できなかった。A区から航空測量の準備に入る。
この日、保護協議が行われ、下原山茂佐久保遺跡にかかる工事計画に基づき、試掘確認調査を県教育委員会が主体となって行うことになる。なお、本調査については、平成３年度に行うこととなった。
宮坂光昭氏、原村平出一治氏、平林とし美氏、諏訪市五味裕史氏来跡。県教育委員会文化課、県商工部振興課来跡。南信日日新聞社取材。
10月24日（水）
航空測量の準備のため、A区から清掃に入る。
市文化財審議委員北原昭氏、県埋蔵文化財センター中沢道彦氏、原村五味一郎氏来跡。
10月25日（木）晴れ
A・B区の清掃を行う中で、掘り足りない箇所が数箇所見つかり、図面再実測等を行う。
ＬＣＶ９チャンネル取材。
10月26日（金）雨のため、午後４時に終了。
B′区掘り下げ。
この日、県教育委員会と県考古学会の懇談があり、阿久尻遺跡の保護措置について、県考古学会から要請があった。

勅使河原彰氏、平出一治氏、平林とし美氏、細川光貞氏、井口慶久氏来跡。

10月28日（日）

県考古学会、明治大学教授戸沢充則教授による合同現地視察があり、重要な遺跡であるので、遺跡の保存方法については「長野県遺跡調査指導委員会」の判断を受けるように決定した。

10月29日（月）

B′区掘り下げ。県教育委員会文化課市沢指導主事下原山・茂佐久保遺跡の試掘調査。

平出一治氏、平林とし美氏来跡。

10月31日（水）

B′区掘り下げ。A区3号住居址の炭化柱穴の保存処理。県埋蔵文化財センター白沢勝彦調査研究員指導のため来跡。

県教育委員会文化課百瀬長秀指導主事下原山・茂佐久保遺跡の調査。

11月1日（木）

B′区掘り下げ。A区3号住居址の炭化柱穴の保存処理。県埋蔵文化財センター白沢勝彦氏指導のため来跡。

B区の航空測量のための清掃。

11月2日（金）

B′区掘り下げ。平出一治氏、平林とし美氏、長野市博物館山口明氏来跡。

11月5日（月）晴れ

航空測量のための清掃を行う。A3号住居址の炭化材を尖石収蔵庫へ搬出。

長野県文化財保護指導委員会樋口昇一氏、林茂樹氏、宮坂光昭氏、森島稔氏、県教育委員会文化課関孝一係長、児玉卓文指導主事、市教育委員会両角教育長、原教育次長、長田課長、鵜飼係長、両角主任、守矢主任現地視察の後、市役所で協議を行う。その中で、阿久尻遺跡は阿久遺跡を解明する上で貴重な遺跡であると判断されるため、保存方法としては、記録保存を改め、現状保存をされたい。阿久尻遺跡の未調査部分の調査を早急に行い、遺跡の全容を明らかにする。遺跡保存の最終的な結論は、遺跡の全容が明らかになった時点で改めて協議する等の判断が下された。

平出一治氏、平林とし美氏来跡。

11月6日（火）快晴

航空測量を実施する。B区5号住居址北に新たに土坑が検出される（B8号土坑）。B′区掘り下げ。

金沢村史編纂委員会視察。信濃毎日新聞、南信日々新聞社取材。八ケ岳総合博物館田村館長視察。

11月7日（水）

A区、B区、B′区の再精査。

11月8日（木）

B区東側谷の土層断面図作成。B′区掘り下げ。

平出一治氏、平林とし美氏来跡。

11月11日（日）快晴。

午後、遺跡見学会。 140名参加。

11月13日（火）快晴

A区3号住居址炉周辺ピットの調査。B′区調査。

11月14日（水）快晴

B′区の調査をほぼ終了する。本日から遺構の埋め戻しに入る。

武居幸重氏来跡。

11月15日（木）晴れ

B′区写真撮影。B区の埋め戻しを終了し、A区の埋め戻しに入る。

11月16日（金）

A区埋め戻し作業。

県教育委員会文化課市沢指導主事C区の試掘調査に入る。2m幅のトレンチを4m間隔で広げていく。数軒の住居址が検出される。

県商工部振興課、市助役、工業振興課長来跡。

11月17日（土）晴れ

埋め戻し作業を中断し、県教育委員会文化課市沢指導主事の行う、C区試掘調査の遺構確認の手伝いを行う。B区北側斜面で、新たに土坑2基を検出する。

岡谷市会田進氏、小坂英文氏、原村平出一治氏、山梨文化財研究所櫛原功一氏、甲府市信藤祐仁氏来跡。

11月19日（月）

A区埋め戻し作業。B区土坑掘り下げ。県教育委員会文化課市沢指導主事、C区の試掘調査。総計7軒の住居址を確認。県教育委員会文化課児玉指導主事、下原山・茂佐久保遺跡のトレンチ調査。

11月21日（水）

A区埋め戻し作業とシート掛け。B区9・10号土坑の掘り下げと実測・写真撮影。

11月22日（木）

B区埋め戻し作業。午前中に作業を終了し、上見遺跡と尖石収蔵庫へ機材の搬出を行う。本年度の調査を終了する。

平成2年度の調査終了後、阿久尻遺跡に関して、以下の動向・活動があった。

12月2日（日）

井戸尻考古館で長野県考古学会諏訪地区会主催による阿久尻遺跡、阿久遺跡などを中心とした縄文時代前期前半の勉強会があった。

12月18日（火）

長野県考古学会より茅野市長・茅野市教育長宛に「茅野市金沢地籍県営工業団地建設に係る阿久尻遺跡の保護についての要望書」提出される。

12月27日（木）

遺跡の保護について、県教育委員会と協議。

平成3年1月9日（水）

県教育委員会文化課、商工部振興課とA区保存地域の線引・杭打ちを行なう。

1月20日（日）

茅野市郷土研究会で阿久尻遺跡の調査のついて発表。

3月18日付けで県教育委員会より阿久尻遺跡のA区4,000㎡の保存が決定した旨、通知がある。

平成３年度の調査

作業は４月10日から始められた。前年度に試掘調査を行ない、遺構の分布範囲、耕作土の厚さなどの把握を行なっていたため、重機による表土剥ぎを開始する。表土剥ぎはＢ区隣の北東隅から開始した。

バックフォーだけでは廃土の処理がはかどらないため、ブルドーザーを入れることとする。

４月12日（金）

本日よりブルドーザーが入り、バックフォーと２台で作業を行なう。住居址の可能性のある箇所が２ヵ所ほど検出される。

４月15日（月）

本日より作業員が入る。本日は５名。

４月16日（火）

Ｂ区３号方形柱穴列の北西約６ｍの箇所に、新たに方形柱穴列が検出される。

４月17日（水）

方形柱穴列が新たに２基検出され、３基となる。また、規模の小さいものも認められ、その性格に興味がもたれる。

４月18日（木）

雨のため、作業を中止する。表土剥ぎはバックフォーのみ作業を行なう。

４月19日（金）晴れ、午前中は北風で寒い

人数が少なくはかどらない。

市工業振興課藤森課長、大蔵係長来跡。

４月20日（土）

重機による表土剥ぎ、作業員による遺構検出作業を行なう。遺構の検出なし。

４月22日（月）晴れ、暖か

重機による表土剥ぎ、作業員による遺構検出作業を行なう。遺構は土坑が３基検出された。

４月23日（火）晴れ

作業員全員休み。重機による表土剥ぎのみを行なう。

４月24日（水）小雨、寒い

重機による表土剥ぎ、作業員による遺構検出作業を行なう。Ｃ区ほぼ中央で、方形柱穴列を１基検出する。

4月25日（木）小雨後晴れ、寒い

重機による表土剥ぎは、本日で終了。作業員による遺構検出作業。

４月26日（金）晴れ、暖か

遺構検出作業。住居址１基を検出する。

４月30日（火）晴れ、風強く寒い

作業員17名。遺構検出作業。台地先端の50m程は遺構がなさそうなので、北側斜面の遺構検出を先に行なうこととし、西側から精査に入る。方形柱穴列１基を確認する。県教育委員会文化課市沢指導主事、小池指導主事が来跡する。

５月１日（水）

遺構検出作業。方形柱穴列は本日だけで４基確認され、Ｃ区だけで９基となる。住居址も８軒確認されているが、住居址は主に北斜面に環状に並び、その内側に方形柱穴列がやはり環状に並びそうである。中央に何

も検出されない空間があり、広場となるか。土坑も検出されない。

5月2日（木）非常に寒く、あられが降る

小規模な方形柱穴列が北斜面で検出され、計10基となる。

C区中央溝の北側で、黒曜石の集中するところがあり、精査を行なう。

5月7日（火）

遺構検出作業。方形柱穴列を1基検出。計11基となる。

5月8日（水）

遺構検出作業。

5月9日（木）雨

遺構検出作業。方形柱穴列を1基検出。計12基となる。雨が次第に強くなったため、午前中で作業を中止する。

5月10日（金）

遺構検出作業。本日より遺構の掘り下げに入る。

掘り下げはB区6号住居址に隣接する2基の住居址から行なうこととする。遺構名はB区と同一の台地上にあり、遺跡もつながると考えられるため、地区名はC区を用いるが遺構番号はB区の続きとしC区7・8号住居址と命名する。

5月13日（月）晴れ

遺構検出作業及び7・8・9号住居址の掘り下げ。

7号住居址は南壁際の周溝の内側にもう1本が検出され、建て変えの可能性がある。3基の住居址とも掘り込みが深く、立派な住居址である。

5月14日（火）晴れ

本日より方形柱穴列の掘り下げを始める。

宮坂光昭氏来跡。南信日日新聞社取材。

5月15日（水）曇り夕方雨

遺構掘り下げ。雨のため4時で作業中止。

5月16日（木）曇り

長野県文化財保護委員会委員長、田中　琢奈良国立文化財研究所文化財センター所長来跡。県教育委員会文化課関孝一係長、市沢指導主事同伴。

5月17日（金）晴れ

遺構掘り下げ。

5月18日（土）晴れ

遺構掘り下げ。7・8号住居址の土層断面図作成。鴨田遺跡調査作業員見学。

5月20日（月）

10号方形柱穴列の掘り下げ中、昨年夏の試掘時に検出された溝との重複が確認される。溝はかなり深く、完掘できなかった。

5月21日（火）晴れ、強風

10号方形柱穴列の北辺は、昨日の調査では溝と重複している様子であったが、本日の調査の結果、断層となっていることが判明した。柱穴の北半分が、下がっていることから、方形柱穴列の時期よりも新しいことが

確認される。
14号住居址のプラン確認を行なった後掘り下げに入る。遺構確認の段階から黒曜石の剝片や砕片が多く出土したため、覆土をすべて持ち帰りフルイにかけることとする。
5月22日（水）曇り
10号方形柱穴列の北辺が断層によって切られていることは、昨日の調査によって確認されたが、試掘時に縄文時代の溝としてとらえられた遺構はその北側に東西に平行するように走っているため、その溝が遺構であるのかあるいは断層になるのかを確認するため、掘り下げを行なう。その結果、断層であることが確認される。調査範囲内には、同じ様に東西に延びる断層が、3～4本確認されているが、現在確認されている遺構と切り合う遺構がほとんどであるので、その調査の結果を見て、その後の調査方法を検討することにする。同じ様な断層の跡が、14号住居址でも確認されているが、規模は小さい。
14号住居址では、遺構内の覆土をすべて持ち帰り、フルイにかけて遺物の出土状況を調べることとしたが、遺構の掘り込みが以外と浅い他、断層によって切断されていることがほぼ間違いない状況となった。本遺跡に残されている住居址と考えられる遺構は13号住居址と、調査範囲の南側にある15号住居址（現時点で住居址として命名を行なっていない）だけであるが、この内、13号住居址の調査方法について、作業終了後、調査員の功刀・小池と話合う。
5月23日（木）晴れ、風がなく暑い
住居址の掘り下げ（9・14号住居址）、方形柱穴列（14・15・16号方形柱穴列）の半截掘り下げ作業を行なう。16号方形柱穴列は耕作による攪乱が激しく、覆土の観察が出来そうにないため、柱穴を半截することなく、掘り下げを行なうこととする。
本日より方形柱穴列（7号方形柱穴列）の土層断面図作成に入る。土層の観察からは、柱痕の検出できたものの方が少ないが、今後覆土のスライスを繰返すことによって、確認できる柱穴が増えるものと思われる。
県教育委員会市沢・小池両指導主事来跡。
5月24日（金）晴れ、強風
14号住居址掘り下げ。本住居址は断層によって切られているものの、柱穴はほぼ予測した位置にあり、断層が縦断層であることが分る。ここでも尾根の中央の方が下がっているようである。
17・18号方形柱穴列掘り下げ。溝No.3（断層）掘り下げ。
5号方形柱穴列北側・東側土層断面図作成。
県遺跡調査指導委員会が午前11時から現地で開かれる。森島稔県考古学会会長、樋口昇一氏、宮坂光昭氏、関孝一県教育委員会文化課係長、児玉卓文指導主事参集。
午後、戸沢充則明治大学教授、宮坂光昭氏来跡。今後の調査について、全国の方形柱穴列を調査したことのある方々に集っていただき、調査方法や、性格などを話合う機会を設けたらどうかと助言をいただく。
夕方、岩崎孝治氏来跡。
5月27日（月）曇時々雨、風強く非常に寒い
7・8・9号住居址の清掃と写真撮影（北から撮影）。
炉址の検出ができていなかった8号住居址で、炉址が確認される。
18号方形柱穴列の掘り下げ。
5・10号方形柱穴列の土層断面の観察。
中日新聞取材。

5月28日（火）晴れ

18号方形柱穴列完掘。

7・17号方形柱穴列の柱痕の検出できなかった柱穴について、スライスを継続して行なう。ほとんどの柱穴で柱痕が検出できず、引続き完掘を行なう。

5・12号方形柱穴列で土層断面図作成。

C区北斜面に検出されていた、小形の方形柱穴列の掘り下げを行なう。底面が凹凸が激しく柱穴とは言い難いものとなった。覆土はどれも暗褐色土で、ローム粒子の非常に多く含まれる土層。粒子は細かく、粘性も比較的強い。炭化物などの混入は見られなかった。

信濃毎日新聞取材。

5月29日（水）曇後晴れ

7・17号方形柱穴列の半截。7号方形柱穴列は、土層のスライスにより、2ヵ所で柱痕が検出できた。

12号方形柱穴列は柱痕が確認できないまま、礫の出土した柱穴を除き完掘。

5号方形柱穴列の土層説明。

6号方形柱穴列の土層説明（d・e）。当初1辺に3本しか柱穴がなく、柱穴自体も細かったため、方形柱穴列となるか疑わしかったが、柱穴はしっかりしており、方形柱穴列としてよいと思われる。北辺の柱穴には、断層が絡みそうである。柱穴aからは、黒曜石製の石匙が出土している。

11号方形柱穴列の土層断面図作成と、土層説明。8・10号方形柱穴列は、土層断面図作成のための清掃。

午後両角教育長、断層を見学に来る。

県土地開発公社3名見学。

5月30日（木）

5・16・17号方形柱穴列の覆土スライスによる柱痕検出作業。

5号方形柱穴列は、東辺でスライスを継続するが、柱痕は検出できなかった。また、半截時で各柱穴の間がつながっており、数個の柱穴が同時に掘られた様な土層堆積状態であったが、完掘していくと、内側(西側)部分では各柱穴間に張り出しがあり、それぞれが意識して区切られていたと理解される。

16号方形柱穴列は、北辺、東辺の清掃を行なう。北辺では柱痕らしき痕跡が認められたため、そのまま土層断面図の作成を行なうこととし、東辺は柱痕らしい痕跡が認められないため、もう10cmほど内側（西側）にスライスすることとする。

9号方形柱穴列の土層断面図作成のための清掃。東辺の一番北側の柱穴で、柱痕の痕跡を検出するが、他には見当らない。

6号方形柱穴列は土層断面図作成・土層説明の後、完掘作業に入る。各辺3本の柱穴があるが、東西の柱穴が張り出している。

富士見町小林公明氏、樋口誠司氏見学。

5月31日（金）曇後雨

5号方形柱穴列（k～o）柱痕検出作業。

14号方形柱穴列（a～g）柱痕検出作業。b・cで柱痕と思われる痕跡が確認された。

16号方形柱穴列柱痕検出作業。

6号方形柱穴列掘り下げ。完掘。

15号方形柱穴列b・e土層観察。c・d・i・lで柱痕が検出されている。

午前10時頃から小雨が降り始めたが、仕事は継続する。午後作業開始直後から雨が激しく降り始めたが、今までの好天続きで地面の乾燥が激しいため、遺構の乾燥を防ぐために掛けていたシートを取外し、雨に濡らすこととする。シートを外し終わった午後１時半過ぎ作業を中止する。

午後は方形柱穴列の土層観察表のまとめと、コンピューター入力。月末のための賃金の整理などを行なう。

６月１日（土）晴れ

各方形柱穴列の半截と土層断面図の作成。

５号方形柱穴列は各辺をスライスしながら柱痕の検出に努めたが、確認できないまま完掘することとする。北辺に亀裂または断層が走り、各柱穴を区切るブリッジが壊されていることが確認された。また、各辺の柱穴は３個単位で連結されているようだが、各隅にやや内側に入る独立した柱穴がある。

13号方形柱穴列の半截、清掃。

15号方形柱穴列土層断面図作成。

16号方形柱穴列土層観察と線引。

17号方形柱穴列は柱痕を検出しながらのスライス。西辺は半截時に検出されたｆ以外に柱痕は検出されず、完掘することとする。

島田市渋谷昌彦氏、坂巻隆一氏、太田直樹氏、群馬県埋蔵文化財調査事業団谷藤保彦氏、下諏訪町宮坂清氏、山本千秋氏来跡。

玉川小学校小池春夫氏来跡。断層について。

６月３日（月）雨

雨のため作業中止。八ケ岳総合博物館で土器洗い作業、図面整理を行なう。

午後松島信幸氏と阿久尻遺跡の断層の調査。

６月４日（火）曇り後晴れ

通産省地質研究所寒川　旭氏来跡。諏訪市教育委員会高見俊樹氏同伴。

６月５日（水）

長野県遺跡調査指導委員永峯光一国学院大学教授、長野県埋蔵文化財センター土屋　積氏、富士見町教育委員会小林公明氏、原村教育委員会平出一治氏、県教育委員会文化課児玉・市沢両指導主事と今後の阿久尻遺跡の調査の方法について指導を受ける。鵜飼係長・小林が出席。

６月22日（土）小雨

午後２時より阿久尻遺跡見学会。約200名参加。

６月24日（月）雨

文化庁岡村道雄調査官来跡。原村平出一治氏来跡。

６月25日（火）雨

教育委員会視察。長田課長同伴。

６月27日（木）雨後晴れ

文化庁原田昌幸文部技官来跡。富士見町小林公明・樋口誠司氏来跡。

６月28日（金）晴れ

通産省地質研究所寒川　旭氏、山梨大学今泉俊文氏来跡し、断層視察。

原村平出一治氏、平林とし美氏、諏訪市高見俊樹氏来跡。

６月29日（土）

翌日の研究会講師、現地視察。

6月30日（日）

研究会「阿久尻集落の方形柱穴列をめぐって」開催。

7月1日（月）

県埋蔵文化財センター小林秀夫氏・臼田武正氏、県埋蔵文化財センター職員の派遣の件で来跡。

7月5日（金）雨後晴れ

午前、県教育委員会文化課市沢・小池指導主事来跡。

午後、県教育委員会文化課、商工部振興課、県土地開発公社、市工業振興課視察。

7月8日（月）

本日より県埋蔵文化財センター上田典男・町田勝則両調査研究員が1ケ月の予定で派遣される。下原山・茂佐久保遺跡調査開始。

7月14日（日）曇り

長野県考古学会諏訪地区会主催による阿久尻遺跡の勉強会があり、小林が出席。

7月26日（金）

A・B区の間について、再度遺構確認を行なう。建物跡を検出したが、柱痕跡から砥石・釘が出土しており、新しい時期のものと考えられる。

7月29日（月）晴れ

航空測量のため、遺跡内の草刈作業を行なう。

方形柱穴列のエレベーション図作成のためのレベル計測を行なう（6・8・10・12号方形柱穴列）。

7月30日（火）

航空測量入札。中央航業が落札。8月6日（火）に実施予定とする。また、断層調査は7日とする。雨の場合はそれぞれ1日遅れ。

各遺構のシートを剝がす作業を行なう。雨のため半日で作業を中止する。

8月3日（金）

下原山茂佐久保遺跡の調査終了。

8月5日（月）

翌日の航空測量に備え、遺跡内の清掃・草刈りを実施する。

8月6日（火）

朝方より天気が悪く航空測量を翌日に延期する。

14号住居址の覆土をフルイにかけ、黒曜石チップを探す。

8月7日（水）

諏訪地方は曇りで、晴れ間も見える状況であったが、関東地方の雲が低く、航空測量を延期する。

14号住居址の覆土をフルイにかけ、黒曜石チップを探す。

県埋蔵文化財センター派遣上田典男・町田勝則調査研究員は本日まで。

8月8日（木）晴れ

現地は朝から良い天気であったが、関東地方が雲が低く、ヘリコプターが飛べず、航空測量の実施が危ぶまれる。午後12時30分現地を出発したとの連絡があり、遺跡内に水の散布を行う。午後1時30分から約30分かけて航空測量を実施する。

14号住居址の覆土をフルイにかけ、黒曜石チップを探す。

8月9日（金）晴れ

前日の航空測量の写真撮影が成功したとの連絡が中央航業より入る。

断層の断ち割を行う。松島信幸氏、寺平　宏氏、山梨大学今泉俊文氏調査。断層および開口割れ目は予想以上に深く入り込んでおり、ローム面下3.5m以上となる。

本日で発掘調査を終了し、業者に引き渡す。

武居幸重氏、富士見町小林公明氏、樋口誠司氏来跡する。

第3節　遺跡の保護

本遺跡は、調査開始当初より、国史跡阿久遺跡に隣接することから、その関係が注目されていた。原村教育委員会で行った阿久遺跡の範囲確認調査も、この地が茅野市に含まれることから調査が及んでおらず、更に範囲の拡大する可能性も残されていた。

調査の結果、阿久遺跡と本遺跡との間には、約300mにわたって遺構や遺物の検出されない箇所のあることが確認されたものの、本遺跡からも阿久遺跡で検出された縄文時代前期前半の住居址や方形柱穴列が多数検出されるに至り、本遺跡と阿久遺跡とが密接な関係にあったことが実証されている。また、阿久遺跡の調査範囲のほとんどが縄文時代前期後半の遺構検出面で調査を終わっているため、阿久遺跡の縄文時代前期前半を理解する上にも、本遺跡の重要性は高く評価された。

その様な中で、遺跡の全面保存とまでは至らなかったが、事業関係者の理解のもと、阿久遺跡に近いA区4,000㎡を保存して頂くこととなった。A区の保存にあたっては、事業者である県商工部振興課・県土地開発公社を始め、東洋バルヴ株式会社に御理解頂き、設計の変更を行って頂いた。特に記して感謝したい。なお、保存のための盛土工事は、平成3年9月に行われた。

その間、長野県教育委員会文化課には、事業者と調査を行う市教育委員会の間に入り、精力的に保護協議を繰り返し行って頂いた。また、長野県考古学会は、本遺跡の重要性を早くから取り上げ、部分的な保存になってしまったものの、A区の保存に大いに貢献頂いている。

第Ⅲ章　遺跡の層序

本遺跡の層序は、台地平坦面ではほとんどが耕作土である表土の下が直ちにローム漸移層あるいはローム層となっている。その表土も20cm以下の所が多く、ローム漸移層やローム層にまで耕作の影響が及んでいる。

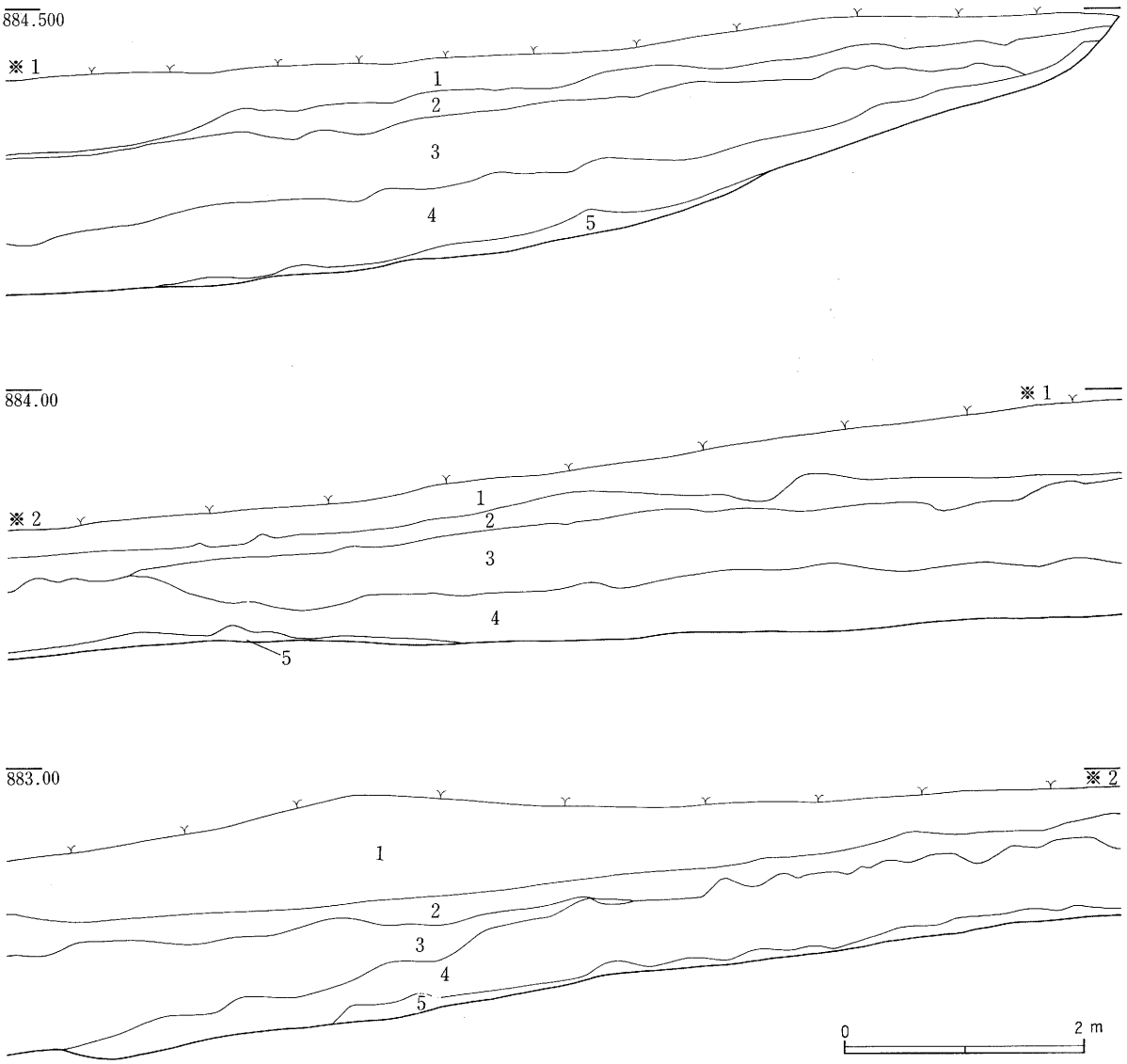
図示した土層断面図は、B区東側の北へ広がる谷のものである。

1層は、表土（耕作土）で、黒褐色土。一部ロームが横位に層になって堆積する。耕作を行う際に、徐々に谷を埋め、平坦面を広くしていったものと考えられる。

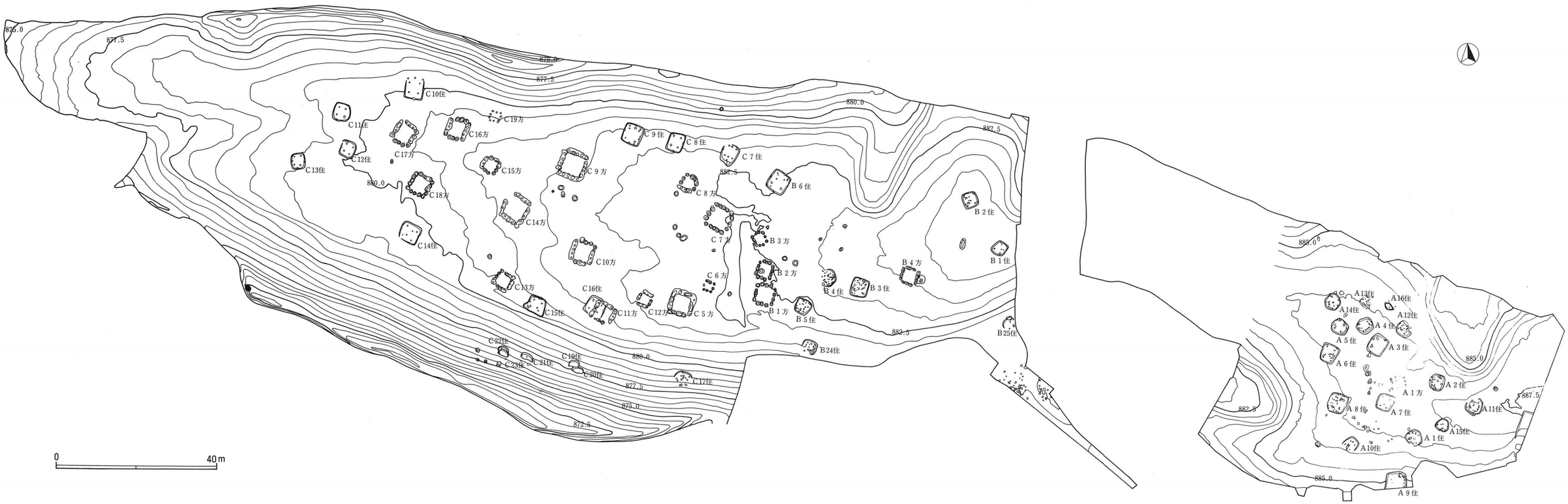
2層は、黒褐色土で、以下に述べる3層に1層が混じったもの。

3層は黒色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性に乏しい。微細な焼土粒子、ローム粒子を稀に含む。

4層は、やや赤味を帯びた暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性に乏しい。微細なローム粒



第3図　遺跡の層序（1/60）



第4図　遺構分布図（1/1,000）

子を稀に含む。

5層は、ローム漸移層で、明褐色土。

3層の黒色土は、本遺跡の住居址覆土に多くみられる黒色土と同じ土層ではないかと考えられる。この土層が谷に入り込んでいることから、本遺跡の集落が営まれた時期には、この谷は埋りかけてはいるものの、まだ大きく台地をえぐった状態になっていたと考えられる。

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代

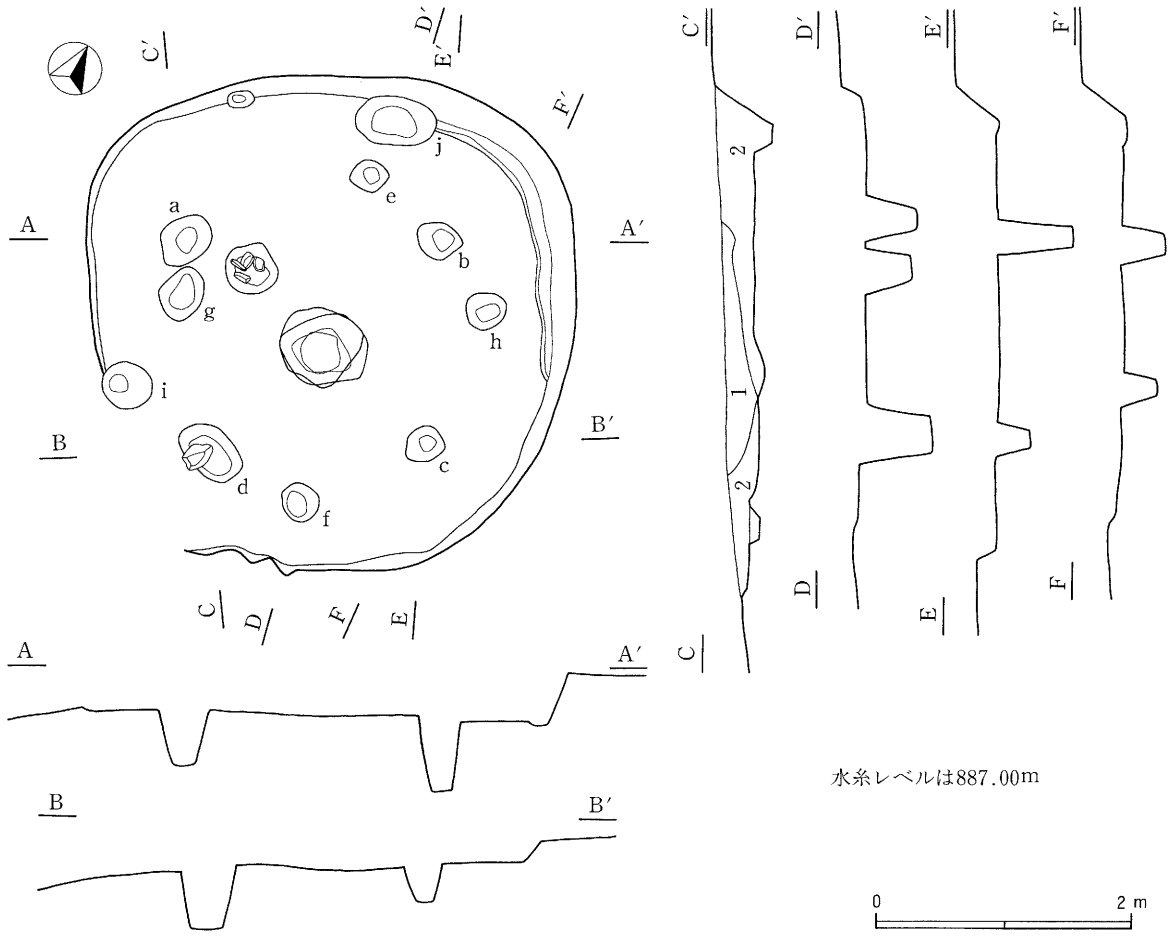
縄文時代の遺構には、住居址、方形柱穴列、土坑、集石土坑、集石がある。

(1)　住居址

縄文時代の住居址は、Ａ区に15軒、Ｂ・Ｃ区に24軒の、計39軒が検出された。Ａ区で検出された縄文時代の住居址は、すべてが前期前半のものと考えられるものである。Ｂ・Ｃ区で検出された住居址は、早期と考えられる住居址が１軒、前期前半と考えられる住居址が16軒、中期と考えられる住居址が７軒である。

ｌ　Ａｌ号住居址（第５図、図版３－２）

本住居址は、台地の平坦部から南の斜面に掛かる所に位置している。南のコーナー付近の壁を流失しているが、平面形態は円形を呈するものと考えられる。規模は長径388cm、短径383cm、壁高32cmを測る。長軸方向はＮ－29°－Ｗを指す。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが43cm、ｂが55cm、ｃが24cm、ｄが50cmを測る。ａ・ｂ間のやや外側にｅ、ｃ・ｄ間のやや外側にｆがあり、棟持ち柱になるのではないかと考えられる。床面からの深さはｅが33cm、ｆが50cmを測る。ｇ・ｈはそれぞれａ・ｂの補助または



第５図　Ａ１号住居址（1/60）

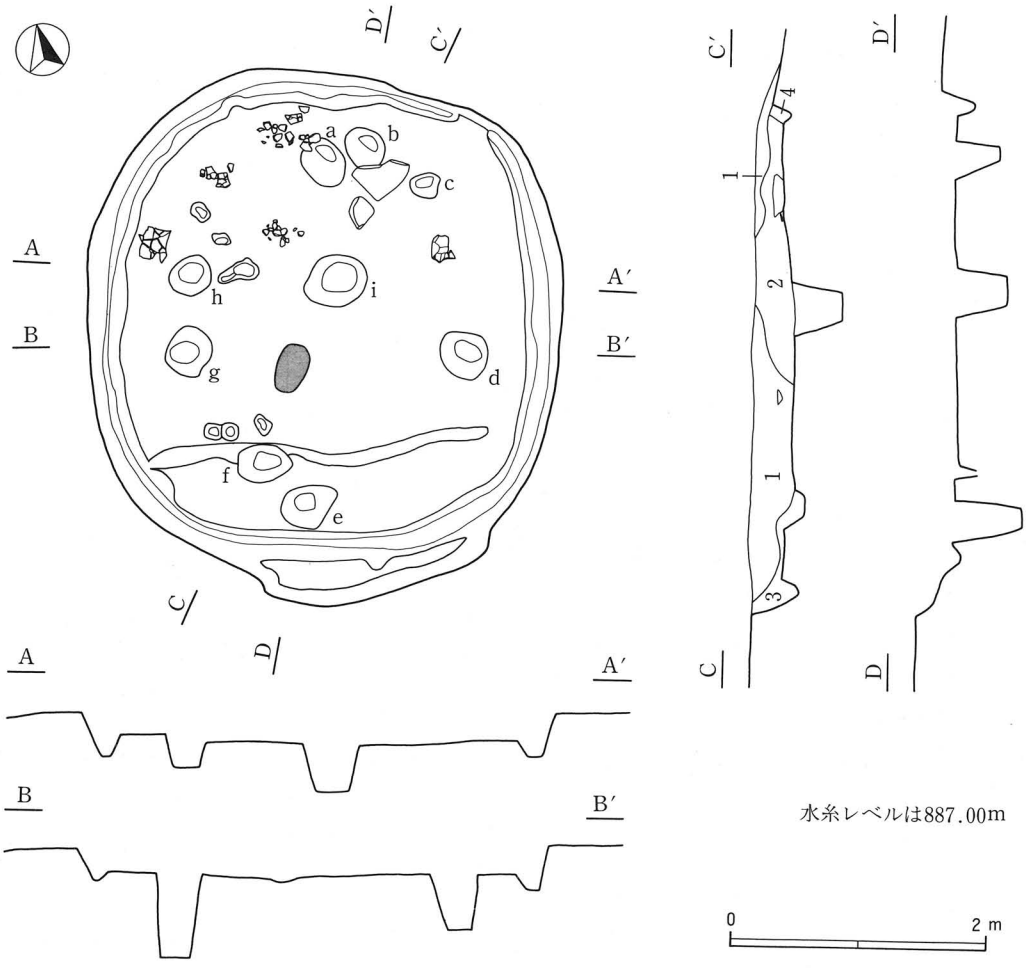
立替えと考えられる。床面からの深さはｇが40cm、ｈが37cmを測る。他に西壁際と北壁にｉ・ｊがあるｏ床面からの深さはｉが23cm、ｊが21cmを測る。炉は中央に位置すると思われ、やや凹んでいるが、焼土は見られない。周溝は北東隅にだけ見られる。

覆土は２層に分層できる。１層は黒色土で、ローム粒子が混入する。２層は暗褐色土で、５㎜ほどのロームブロックが混入する。

主な遺物には石匙があり、３点が出土している。掘り下げを開始して直ちに出土したが、覆土の浅い箇所であり、床面からも近い。

２　Ａ２号住居址（第６図、図版４－１）

本住居址は、東から西に延びる台地の北側にあり、台地に直交し北へ開く谷に掛かる所に位置する。南側に東西方向にクラックが走っている他、南壁が崩れているのか段差をもって張り出している。平面形態はやや南北に長い円形を呈する。規模は長径423cm、短径368cm、壁高34cmを測る。長軸方向はＮ－19°－Ｅを指す。柱穴はａ～ｉの９本が検出されている。床面からの深さは、ａが43cm、ｂが42cm、ｃが53cm、ｄが47cm、ｅが62cm、ｆが21cm、ｇが74cm、ｈが32cm、ｉが50cmを測る。入口は北になると考えられる。炉は地床炉で、中央よりやや南側に寄っている。床面は皿状になっている。周溝は北側の一部が切れている他は全周している。



第６図　Ａ２号住居址（1/60）

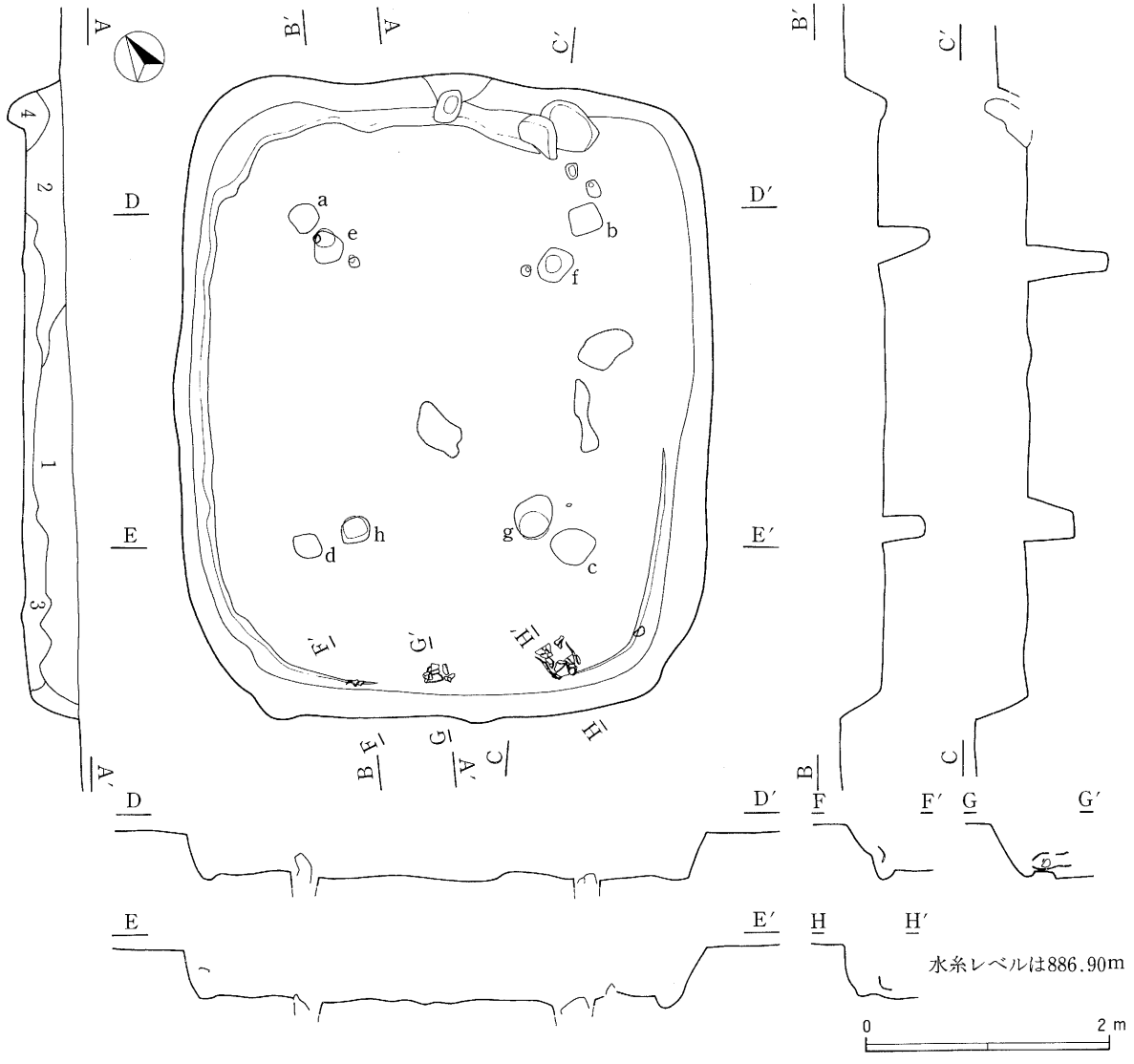
覆土は４層に分層できる。１層は黒色土で、ローム粒子の混入がある。２層は暗褐色土で、２～３㎜のローム粒子、１㎝以下のロームブロックを多量に含む。３層は暗黄褐色土で、ローム粒子の混入は更に多い。４層は黄褐色土で、ロームの崩れによると思われる。

遺物はかなりの土器片が出土しているが、一括土器は北側に集中している。平石は北側に１ある。

3　Ａ３号住居址（第７図、図版５）

本住居址は台地の平坦部に位置しており、掘り込みも深く、プランもしっかりしている。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は長径525㎝、短径445㎝、壁高42㎝を測る。長軸方向はＮ－35°－Ｅを指す。主柱穴は４本と考えられる。それぞれ２本ずつあるが、炭化した柱が外側の柱穴に見られたところから、一度内側の柱穴を用いて建てられた住居址を、外側の柱穴を用いて建て直し、その後焼失したものと考えられる。炉は地床炉で、中央にある。周溝は全周していたものと思われる。

覆土は３層に分層できる。１層は黒色土で、ローム粒子と炭化物粒子及び焼土を稀に含む。２層は暗褐色土で、ローム粒子と１㎝以下の球状のロームブロックを多量に含み、炭化物粒子・焼土を稀に含む。また、小炭化材をごく稀に含む。３層との境界で焼けた礫が数点出土している。３層は黒褐色土で、ローム粒子・



第７図　Ａ３号住居址（1/60）

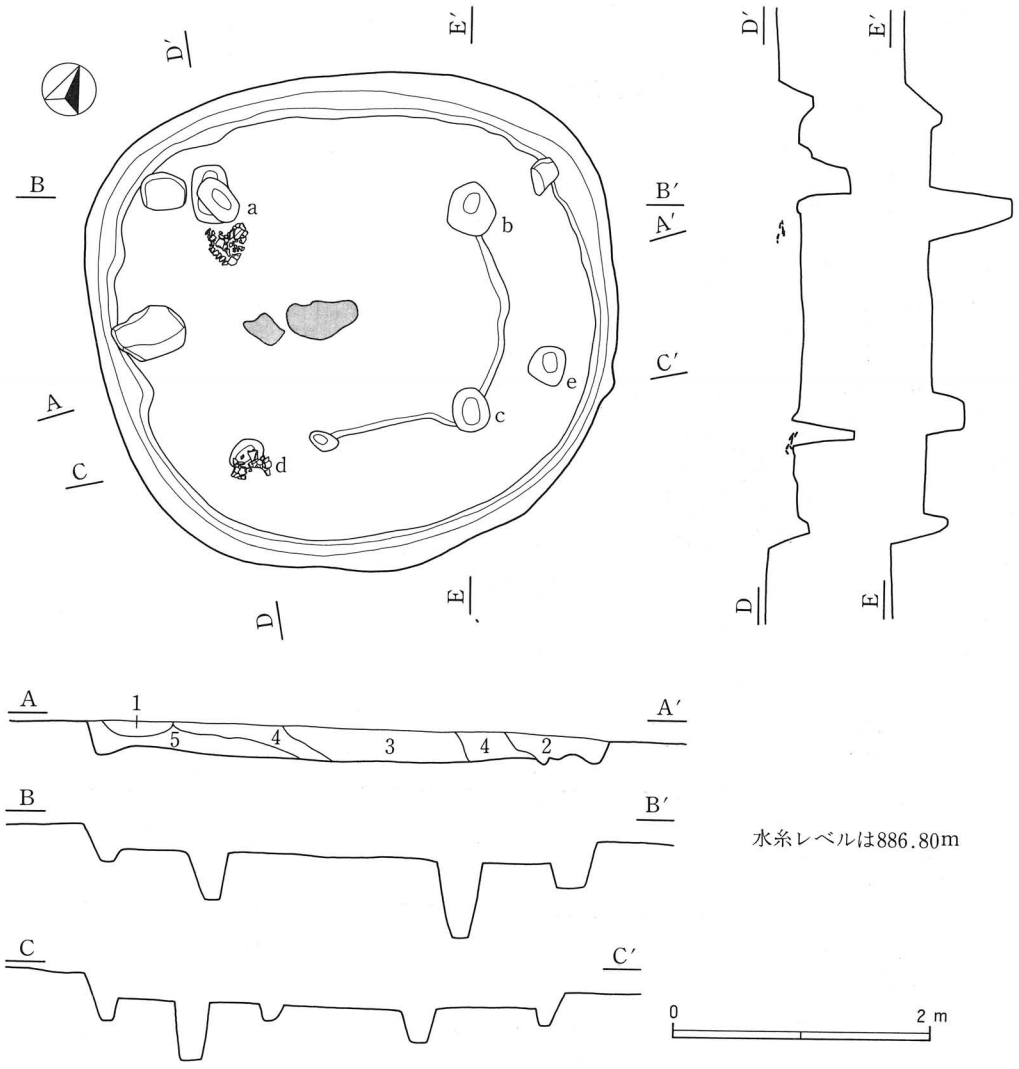
1.5cmのロームブロックを多量に含む。ロームブロックは集中する傾向にある。炭化物粒子・炭化材を多量に含み、炭化材は形状が分るものも多い。焼土粒子を多く含み、焼土塊は床面まで達する。床面に焼土塊が多いことから焼失住居と考えられる。柱穴に炭化材が残っていたことから、樹種の鑑定のため保存処置を行ったが、分析結果についてはまだ明らかにされておらず、今回の本報告に間に合わなかった。いずれ何等かの方法で公表していきたいと考えている。

遺物は、南壁際に一括土器が3点出土している。平石は北側に2ある。

4　A4号住居址（第8図、図版6）

本住居址は台地の平坦面の北側に位置している。平面形態は円形を呈する。規模は長径415cm、短径400cm、壁高25cmを測る。長軸方向はN－57°－Eを指す。床面はやや荒れており、一段低くなっている。主柱穴はa～dの4本が考えられる。床面からの深さはaが36cm、bが64cm、cが25cm、dが36cmを測る。支柱穴は2本あり、東壁と柱穴cの間のeは18cm、柱穴cとdの間のfは15cmを測る。炉は地床炉で、中央よりやや西に寄っている。周溝は全周している。

覆土は5層に分層できる。1層は黒褐色土、2層は暗褐色土で、他の住居址の土層と変りない。3層は明



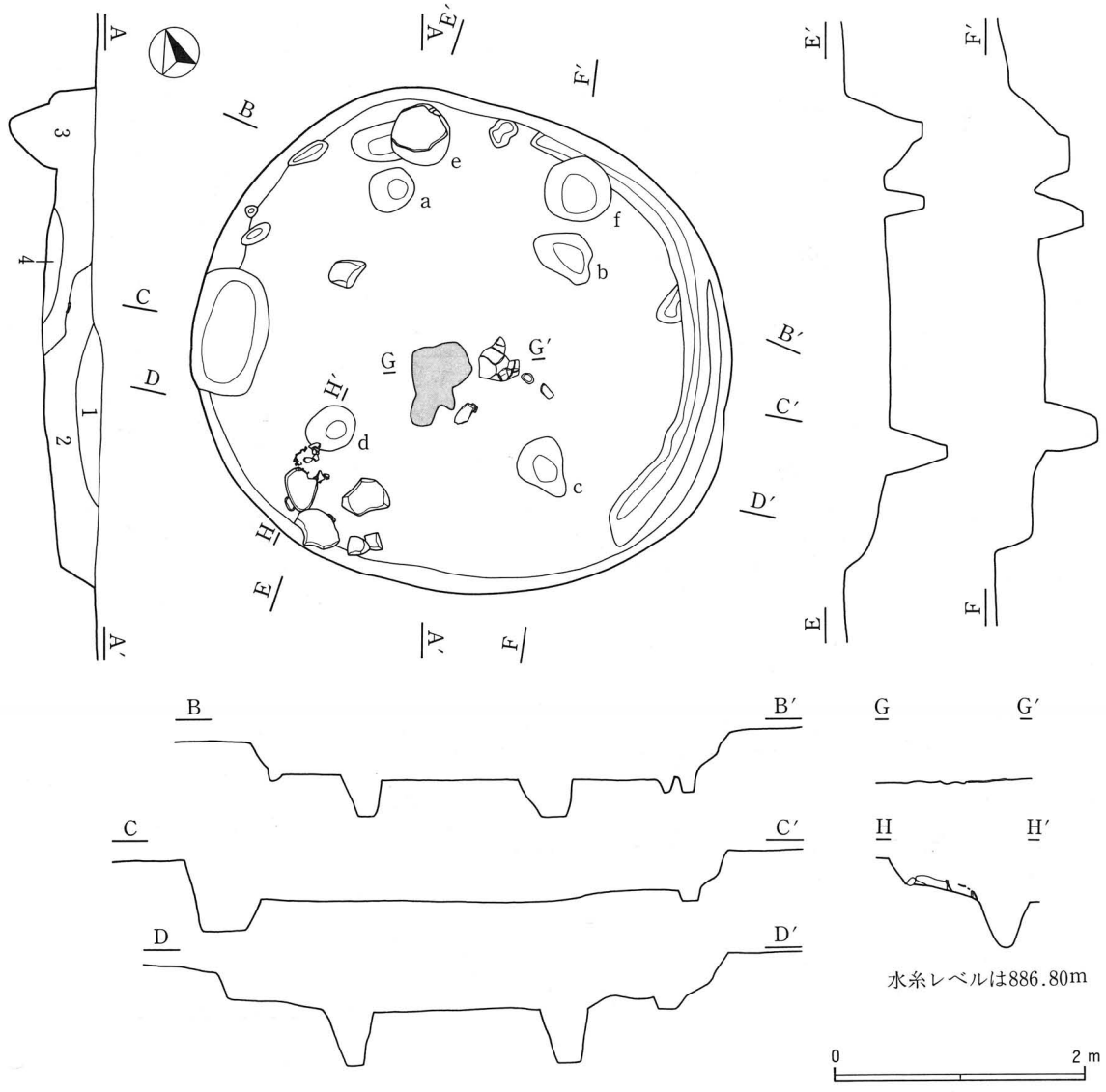
第8図　A4号住居址（1/60）

褐色土、４層は黄褐色土で、拳大のロームブロックが入る。ロームブロックの混入の多さから若干含んでいる３層と多量に含む４層に分けたが、どちらも人為的な投げ込みと考えられる。５層は暗褐色土で、１層とほとんど変りない。図中に示した以外にも大礫がかなり出土している。

遺物は一括土器が２個体出土している。南西から出土した土器は床面から12cmほど高い位置から出土しており、南西隅から出土した土器は床面に密着し、柱穴の中に落込むような形で出土している。このことから２つの土器の間には若干の時期差があると考えられるが、覆土が人為的な投込みと考えられることから、その差はそんなに考えなくてもよいと考えられる。他に石皿が出土している。平石は北東隅、北西隅及び西壁際中央に各1個ある。

5　Ａ５号住居址（第９図、図版７）

本住居址は、台地の平坦部に位置する。平面形態はやや東西に長い円形を呈する。規模は長径445cm、短径403cm、壁高32cmを測る。長軸方向はＮ－58°－Ｗを指す。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが43cm、ｂが44cm、ｃが53cm、ｄが47cmを測る。支柱穴は北東壁際に２本あり、深さは床面からｅが

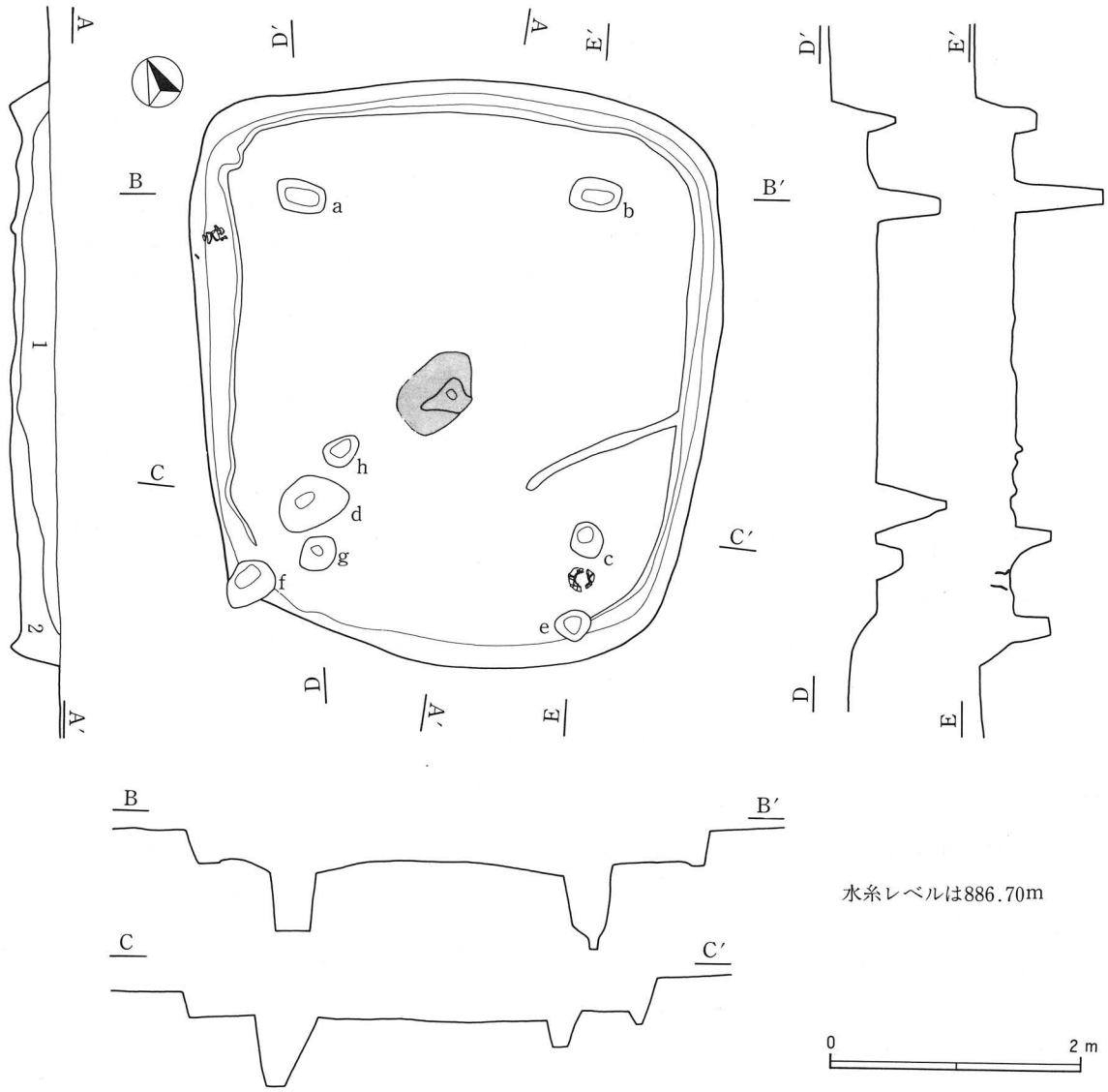


第９図　Ａ５号住居址（1/60）

37㎝、ｆが31㎝と主柱穴よりも若干浅くなっている。入口は北東になるものと考えられるが、この２本の支柱穴がそれに伴うと考えられる。また、北西の壁際に土坑状の掘り込みがある。別の土坑とも考えられるが、新旧関係は明らかでない。炉は地床炉で、中央にある。周溝は東側1/3に見られる。

覆土は４層に分層できる。１層は暗褐色土で、５㎝ほどのロームブロックを多量に含む他、大礫が混じっている。人為的な投込みと考えられる。２層は黒色土で、１～２㎝のロームブロックを稀に含む。南側下層の方が漆黒に近い。本層の上面に一括土器が出土している。また、本層最下部、床面直上からも一括土器が出土している。３層は暗褐色土で、５㎝ほどのロームブロックを多量に混入する。１層とほとんど同じであるが、間層があることから、僅かな時間差があると考えられる。４層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っている。微細なローム粒子が混入しており、粘性もある。覆土の中層に大礫、北西隅の柱穴ｅに礫が数個入る。南西の柱穴ｄと壁との間にも大礫が数点見られた。

遺物は、中層と床面直上に一括土器が出土している。床面に密着しているものから、壁から崩れ落ちた感じで傾斜しているものまであるが、本住居址を埋める際に同時に投込まれたものもあると考えられる。床面に密着しているものの中には石皿もあった。



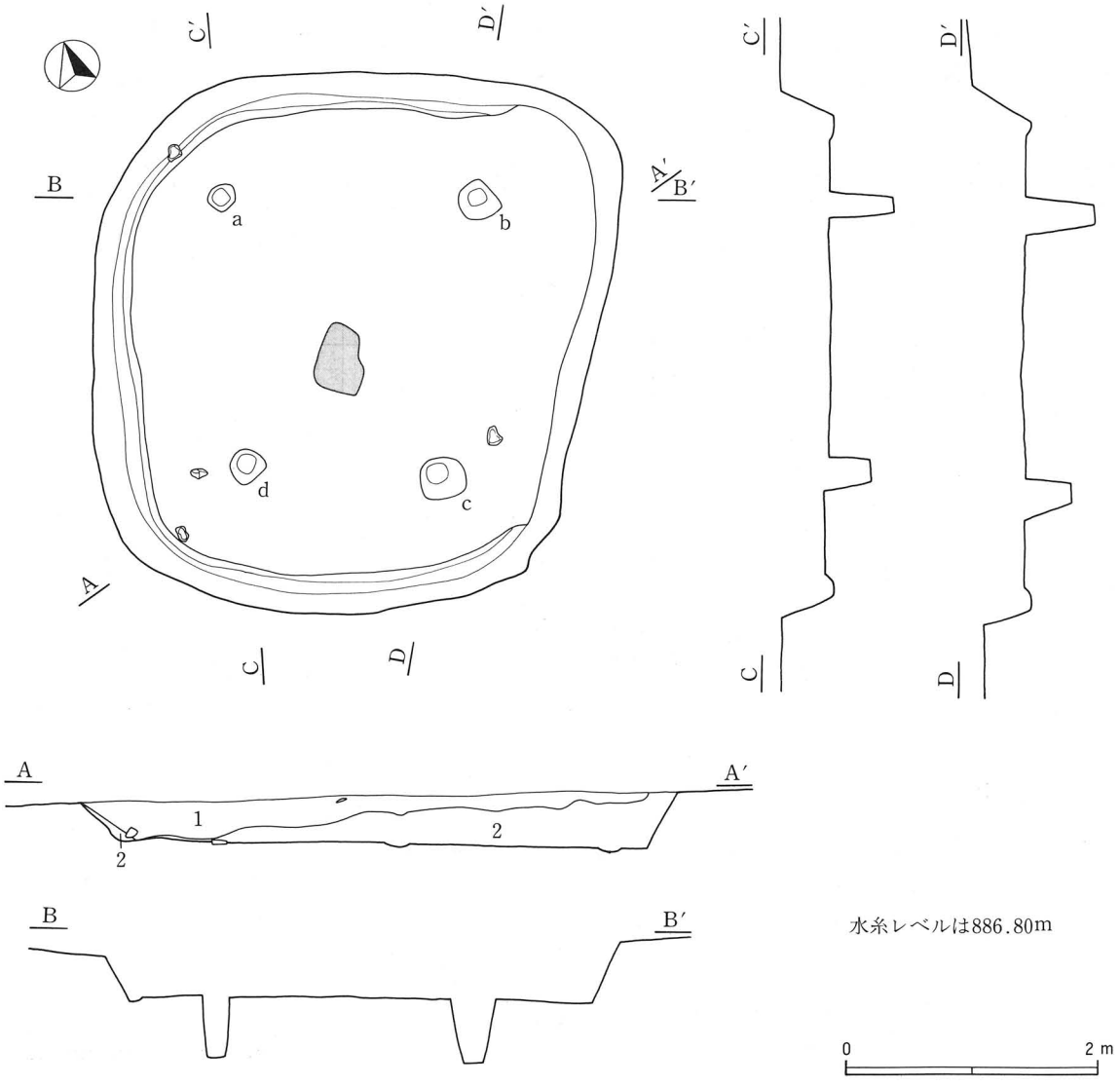
第10図　Ａ６号住居址（1/60）

6　Ａ６号住居址（第10図、図版８）

本住居址は、台地の平坦部に位置する。クラックが東西に走るが、平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は長径480cm、短径438cm、壁高32cmを測る。長軸方向はＮ－27°－Ｅを指す。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが59cm、ｂが71cm、ｃが30cm、ｄが57cmを測る。支柱穴は４本あり、南側に集中している。南壁東側の柱穴ｅは34cm、南壁西側のｆは42cmを測る。他の２本は主柱穴ｄの南北にあり、南にあるｇは22cm、北にあるｈは24cmと、他の柱穴より浅い。入口は南になると考えられる。炉は地床炉で、中央にある。周溝は南壁を除く各壁にある。

覆土は２層に分層できる。１層は黒色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。ローム粒子、１cm以下のロームブロックを含む。下層の暗褐色土が斑状に入るが、黒色土の割合が多い。２層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っており、粘性も強い。全体にローム粒子を多く含み、褐色味が強い。

主な遺物には、南東隅柱穴ｃとｅの間から伏甕が出土したほか、西壁北寄りに黒曜石の集中する箇所が見られた。

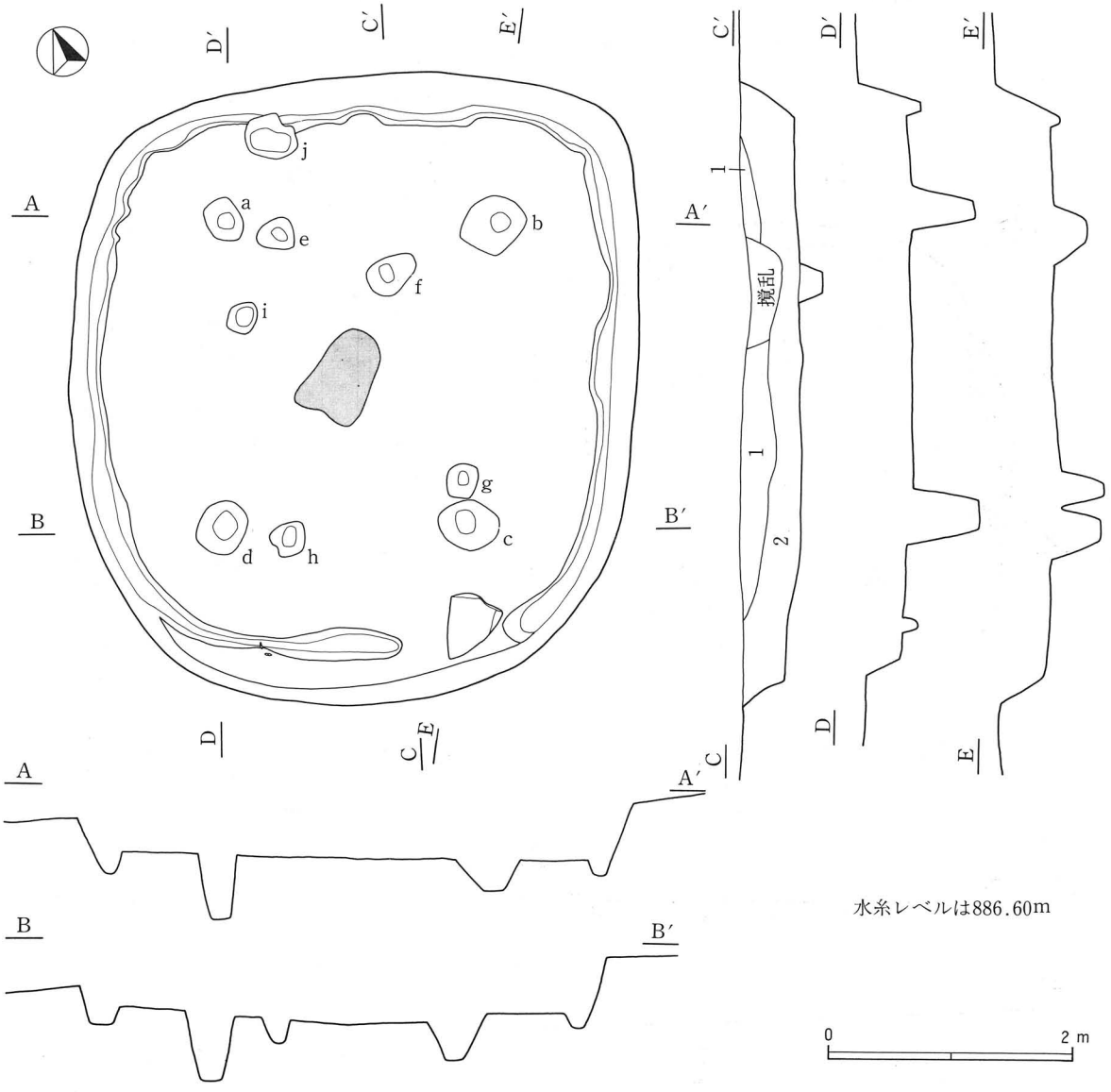


第11図　Ａ７号住居址（1/60）

7　A７号住居址（第11図、図版９－１）

本住居址は、台地平坦面の中央に位置する。掘り込みも深く、プランもはっきりしている。平面形態はやや南北に長い隅丸方形を呈する。規模は長径447cm、短径415cm、壁高47cmを測る。長軸方向はＮ－24°－Ｅを指す。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが50cm、ｂが53cm、ｃが37cm、ｄが33cmを測る。炉は地床炉で、中央よりやや南に寄っている。炉の南側に深さ12cmの小ピットがある。周溝は北東隅と東壁を除く各壁にある。

覆土は２層に分層できる。１層は黒色土で、締りはない。ローム粒子を僅かに含む。２層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っている。２～３㎜のローム粒子を全体に含んでいる。確認面から20cm程で黒色土から暗褐色土に変るが、その面で黒曜石コアが数点出土している。



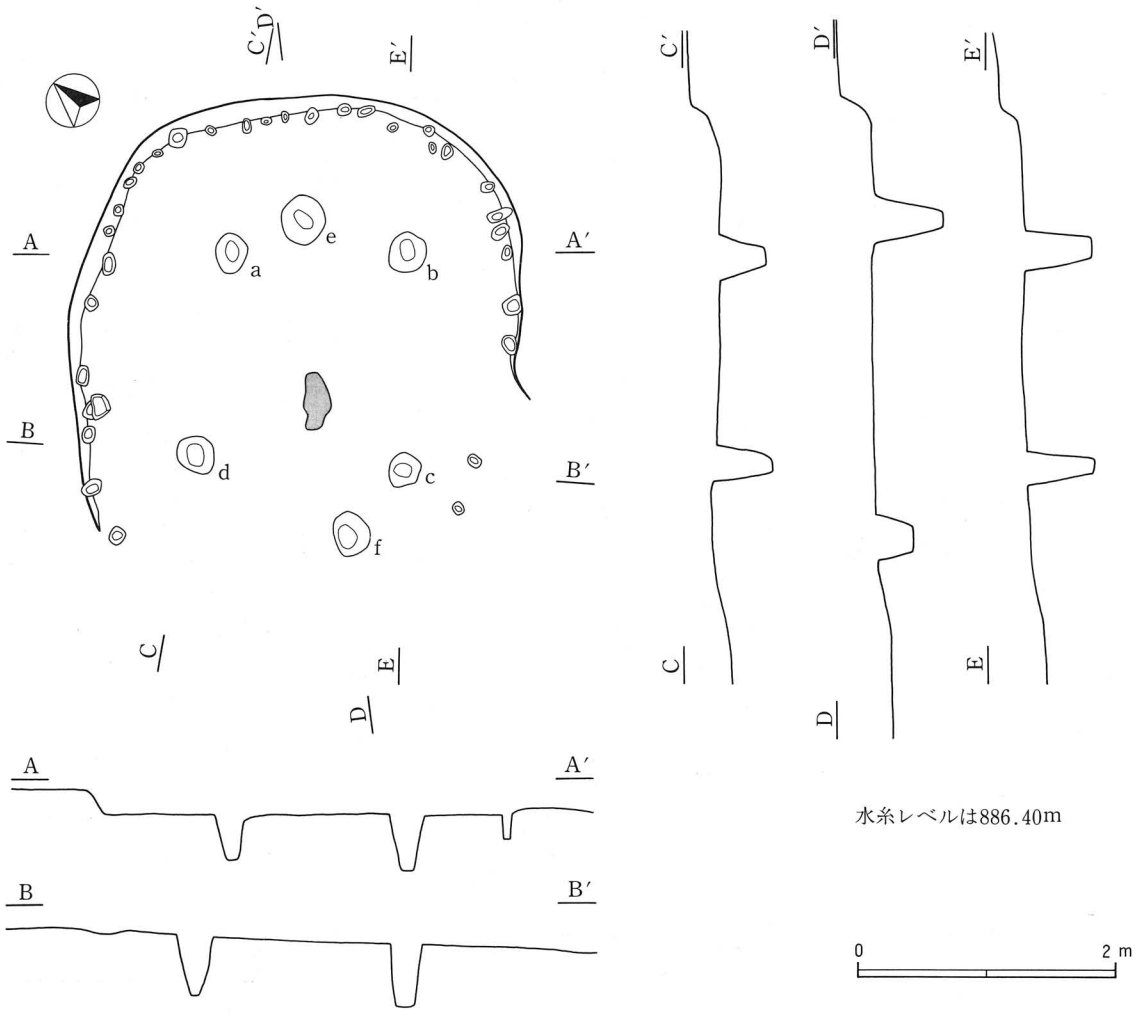
第12図　Ａ８号住居址（1/60）

8　Ａ８号住居址（第12図、図版10）

本住居址は、台地平坦面の南側に位置する。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は長径528cm、短径470cm、壁高50cmを測る。長軸方向はＮ－23°－Ｅを指す。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが56cm、ｂが28cm、ｃが40cm、ｄが50cmを測る。支柱穴はｅ～ｊの６本ある。ｅは柱穴ａの東にあり、床面からの深さは21cm、ｆは柱穴ｂと炉の間にあり、深さ32cm、ｇは柱穴ｃの北側にあり、深さ36cm、ｈは柱穴ｄの東側にあり、深さ22cm、ｉは柱穴ａとｄの間にあり、深さ36cm、ｊは北壁際やや西寄りにあり、深さ20cmを測る。炉は地床炉で、中央にある。床面は皿状となるが、外周は平坦で高い。周溝は南壁東側が切れている他は、ほぼ全周している。

覆土は攪乱を除き、２層に分層できる。１層は黒色土で、締りはない。１～３㎜のローム粒子を僅かに含む。２層は暗褐色土で、床面から10cmほど上までは、踏み固めたように硬く締っている。１～５㎜のローム粒子を多く含む他、１cmほどのロームブロックを稀に含む。

主な遺物には抉入部のある両尖匕首が２本、周溝上周溝の底から11cm、床面から３cmの高さの所から出土している。平石は南東隅に１ある。



第13図　Ａ10号住居址（1/60）

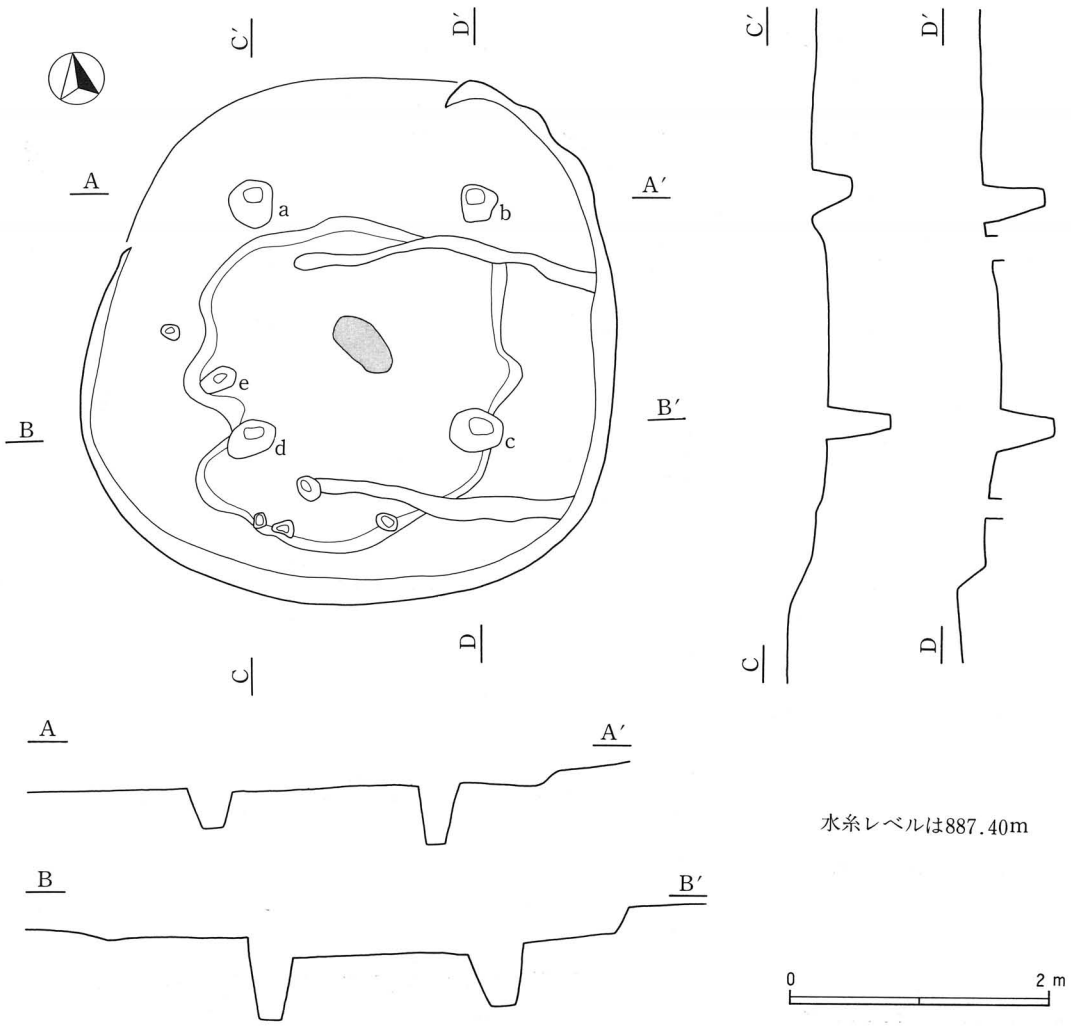
9　A10号住居址（第13図、図版９－２）

本住居址は、台地平坦面の南側斜面に掛かる所に位置する。南西側が斜面で流失しているが、平面形態は長円形を呈するものと考えられる。そのため長径は不明であるが、短径357cm、壁高は最も遺存の良いところで23cmを測る。長軸方向はＮ－5°－Ｅを指す。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが35cm、ｂが34cm、ｃが51cm、ｄが47cmを測る。支柱穴は長軸の軸線から少し外れるが、主柱穴を短軸方向に結んだ外側にある。ｅは55cm、ｆは27cmを測る。この２本が棟持ち柱になると考えられる。炉は地床炉で、中央よりやや南西に寄っている。床面は皿状となるが、外周は平坦で高い。周溝は見られないが、壁際に小ピットが並ぶ。

覆土は、黒褐色土の単一層である。

10　A11号住居址（第14図、図版12－１）

本住居址は、台地の平坦面から北側斜面に掛かる所に位置している。本遺跡Ａ区の住居址中、最も東端で検出されている。東西にクラックが２本走っており、平面形態は明らかでないが、円形を呈するものと考えられる。規模は長径430cm、短径410cm、壁高27cmを測る。長軸方向はＮ－13°－Ｅを指す。床面は中央が一段低くなっている。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが22cm、ｂが34cm、ｃが42cm、



第14図　A11号住居址（1/60）

dが54cmを測る。支柱穴は主柱穴のaとdを結んだ線の外側に深さ17cmのeがある。炉は地床炉で、中央にある。周溝は見られない。遺物の出土は少ない。

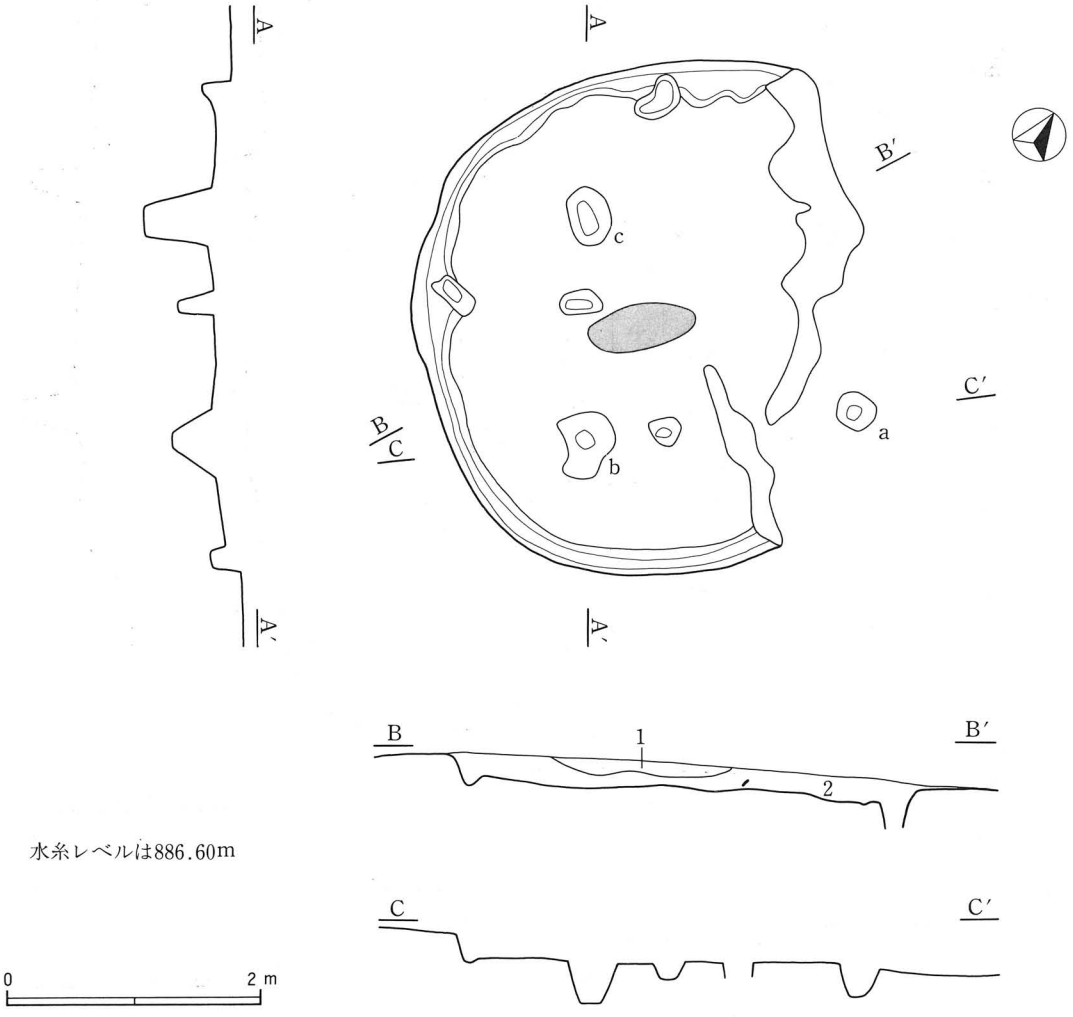
11　A12号住居址（第15図、図版12－2）

本住居址は、台地平坦面から北側斜面に掛かる所に位置している。南東から北西に向かってクラックが走っており、斜面の低い方に向かう北側が逆に高くなっている。平面形態は明らかでないが、円形を呈するものと考えられる。規模は長径は不明であるが、短径405cm、壁高28cmを測る。長軸方向はN－48°－Eを指す。主柱穴は4本あったと考えられるが、クラックにより1本が消滅している。床面からの深さはaが22cm、bが28cm、cが48cmを測る。炉は地床炉で、中央よりかなり南西にあり、柱穴b・c間の軸線近くにまで寄っている。周溝は斜面によって流失している北西側を除き見られることから、全周していたものと考えられる。

覆土は2層に分層できる。1層は黒色土で、締っている。ローム粒子と炭化物粒子を若干含む。2層は暗褐色土で、よく締っている。2～3㎜のローム粒子、炭化物粒子を若干含む。

12　A13号住居址（第16図、図版13）

本住居址は、平坦面から北側斜面に掛かる所に位置している。斜面のためほとんどが流失している他、クラックが走っているため、形状ははっきりしないが、円形を呈していたと思われる。規模も明らかでない。長軸方向も不明。柱穴は3本が検出されているが、1本は支柱穴あるいは立替えた痕跡かと思われる。床面



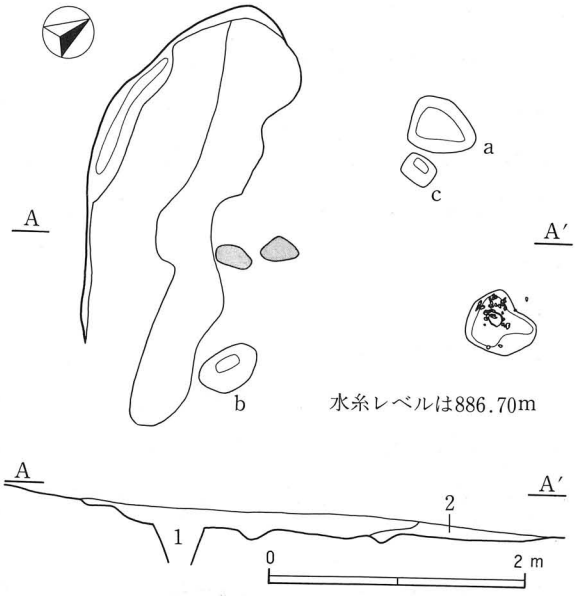
第15図　A12号住居址（1/60）

からの深さはaが22cm、bが45cm、cが32cmを測る。炉は地床炉で、南西壁から1.2mの箇所に2ケ所に別れてある。ピットの位置からすると、かなり南西側に寄っていると考えられる。周溝は南西隅に一部見られるが、クラックの可能性もある。

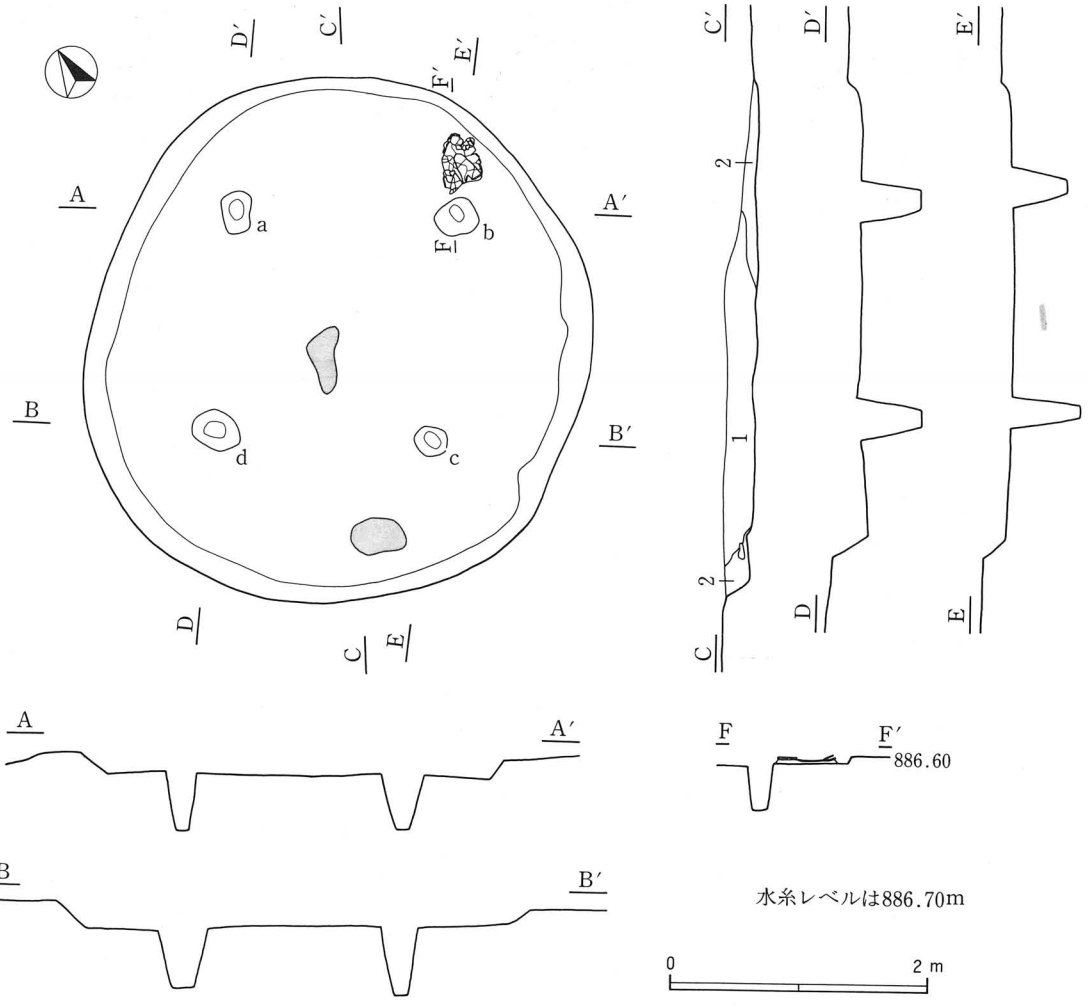
覆土は2層に分層できる。1層は黒色土で、ローム粒子や炭化物粒子を含み、遺物の出土も多い。炉址の上部は焼土粒子の混入も多い。2層は黄褐色土で、ローム粒子が多く黄味が強い。

遺物は遺構の遺存状態の割に多い。

主な遺物には黒曜石の原石・剥片等の集積がある。遺存している範囲は少ないが、炉になると考えられる焼土と、幾つかの柱穴、黒曜石を40点集積してあるピットなどから、住居址と考えて差し支えないものと考えた。黒曜石を集積したピットの深さは、11



第16図　A13号住居址（1/60）



第17図　A14号住居址（1/60）

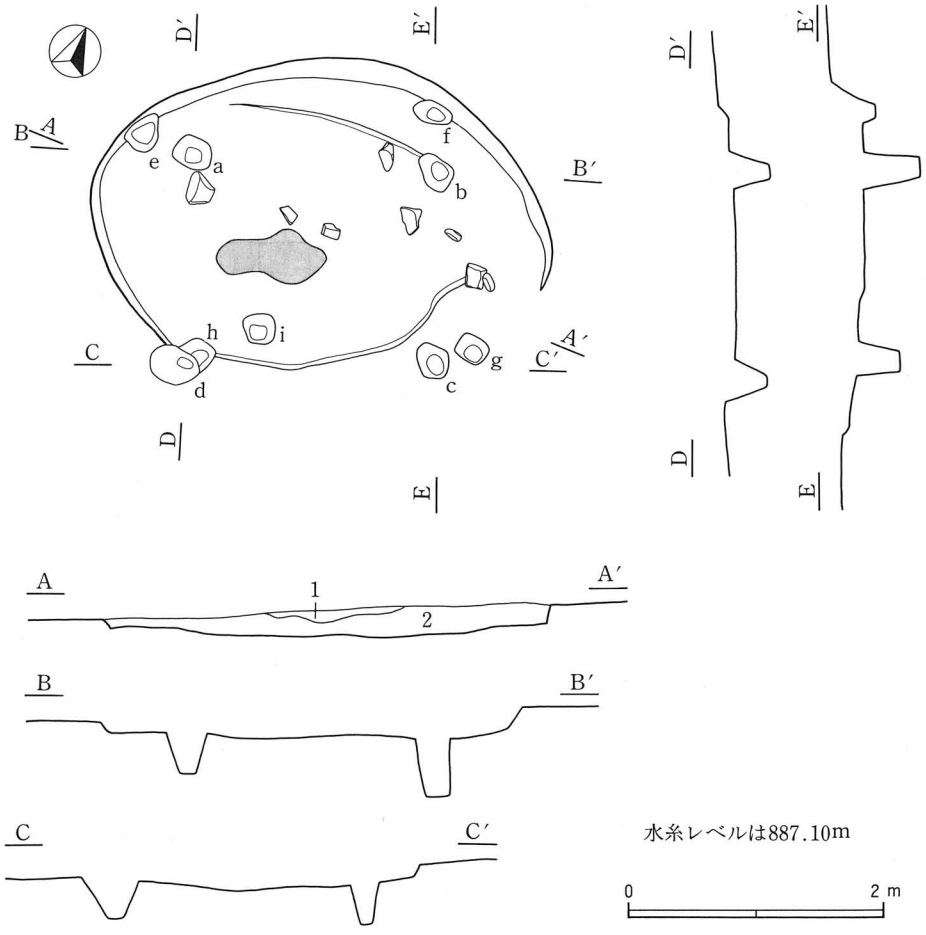
cmであるが、床面からの深さを推測すると20cmほどとなる。

13　A14号住居址（第17図、図版14）

本住居址は、台地平坦面にある。本遺跡A区で検出された住居址の中では最も西に位置し、B区の東端に位置するB１号住居址との間には、80m以上の距離がある。掘り込みは浅いものの、プランはしっかりしている。平面形態は円形を呈する。規模は長径426cm、短径382cm、壁高24cmを測る。長軸方向はN－44°－Eを指す。主柱穴はa～dの４本が考えられる。床面からの深さはaが47cm、bが43cm、cが58cm、dが51cmを測る。炉は地床炉で、中央にある。周溝は見られない。

覆土は２層に分層できる。１層は黒色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。ローム粒子、1.5cm以下のロームブロック、炭化物粒子を多量に含む他、炭化材を少量含む。２層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っており、粘性も強い。全体にローム粒子を多く含み、床面及び壁際にロームブロックが多い。炭化物粒子も多く含まれている。焼土塊も本層に見られる。焼失住居と考えられ、覆土全体に焼土・炭化物が多い。

主な遺物には北東隅に一括土器がある。他に大礫が１あるが、床面からはかなり浮いており、傾斜もしているため、住居址が埋没する過程で投込まれたものと考えられる。



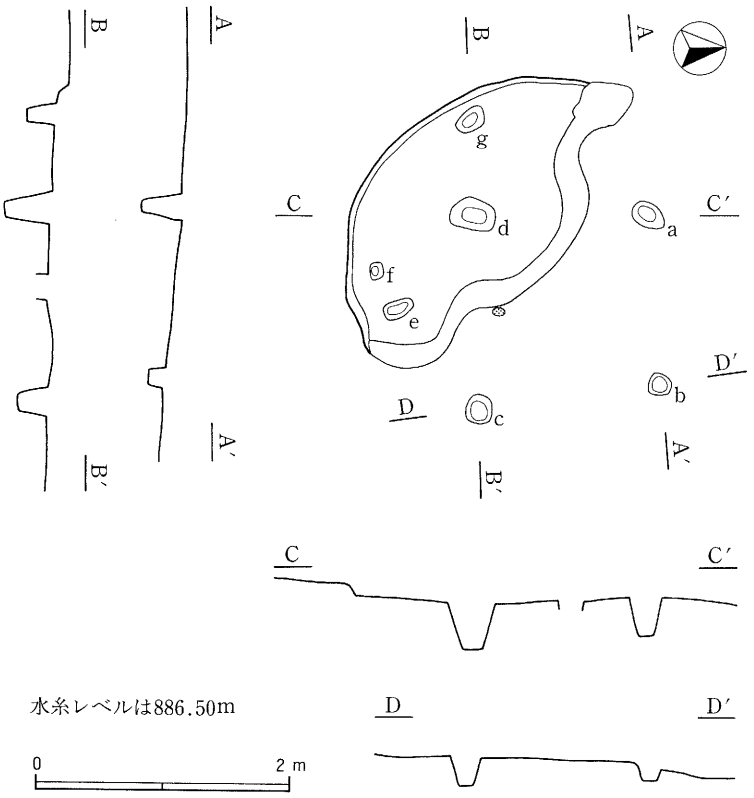
第18図　A15号住居址（1/60）

14　A15号住居址（第18図、図版15－1）

本住居址は、台地平坦面から南へ傾斜している所に位置している。斜面のため南側を流失しており、平面形態は不整形を呈する。規模は不明であるが、壁高は最も遺存の良い所で24cmを測る。長軸方向は不明。床面は、中央が一段低くなっている。床面上に数点の礫が見られた。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが29cm、ｂが47cm、ｃが30cm、ｄが25cmを測る。支柱穴はｅ～ｉの５本がある。床面からの深さはｅが７cm、ｆが13cm、ｇが12cm、ｈが11cm、ｉが18cmを測る。炉は地床炉で、４本の主柱穴の中央よりやや西側に寄っている。周溝は見られない。

覆土は２層に分層できる。１層は黒色土。２層は暗褐色土で、粒子の細かいローム粒子が混入する。２～５mmのロームブロックも全体に見られるが、量は少ない。炉の上部には焼土粒子が僅かに混じる。

遺物は、出土は有るものの、一括での出土はない。30cmほどの礫が、柱穴ａに隣接してある。



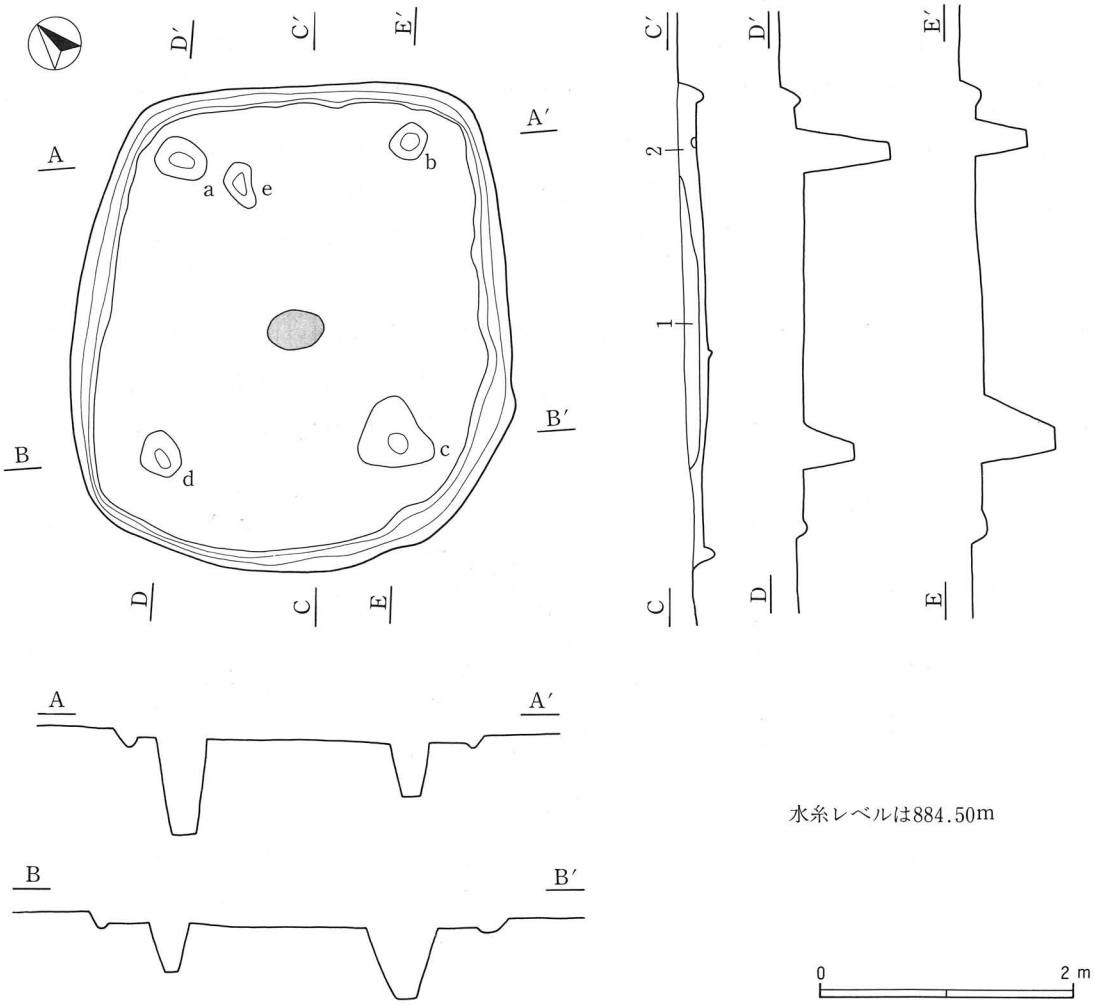
第19図　A16号住居址（1/60）

15　A16号住居址（第19図、図版15－2）

台地の北へ向かう斜面にあるためほとんどが流失している他、南東から北西に向かってクラックが走っている。平面形態ははっきりしないが、円形を呈していたと思われる。長径・短径とも不明であるが、壁高は11cmを測る。長軸方向は不明。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが33cm、ｂが28cm、ｃが28cm、ｄが43cmを測る。支柱穴はｅ～ｇの３本がある。床面からの深さはｅが15cm、ｆが18cm、ｇが24cmを測る。炉は地床炉で、４本の主柱穴の中央よりかなり南側に寄っている。焼土範囲も径10cmほどと小さいが、流失している可能性が強い。周溝は見られない。

16　Ｂ１号住居址（第20図、図版16－1）

本住居址は、台地平坦面に位置する。また、本址はＢ区の東端にあたる。平面形態は南壁がやや張る隅丸方形を呈する。規模は長径388cm、短径350cm、壁高11cmを測る。長軸方向はＮ－43°－Ｅを指す。主柱穴はａ



第20図　Ｂ１号住居址（1/60）

～ｄの４本が考えられる。床面からの深さは、ａが73㎝、ｂが41㎝、ｃが56㎝、ｄが40㎝である。支柱穴は柱穴ａの内側にｅがあり、床面からの深さ68㎝を測る。柱穴はどれも中央側に傾斜している。炉は地床炉で、中央にある。周溝は全周している。壁際は周溝とともに壁柱穴が連続する。

覆土は２層に分層できる。１層は暗褐色土で、ローム粒子を多く含む他、１～２㎝のロームブロックも散見される。２層は明褐色土で、２～３㎜のローム粒子、0.5～１㎝のロームブロックを多く含む。

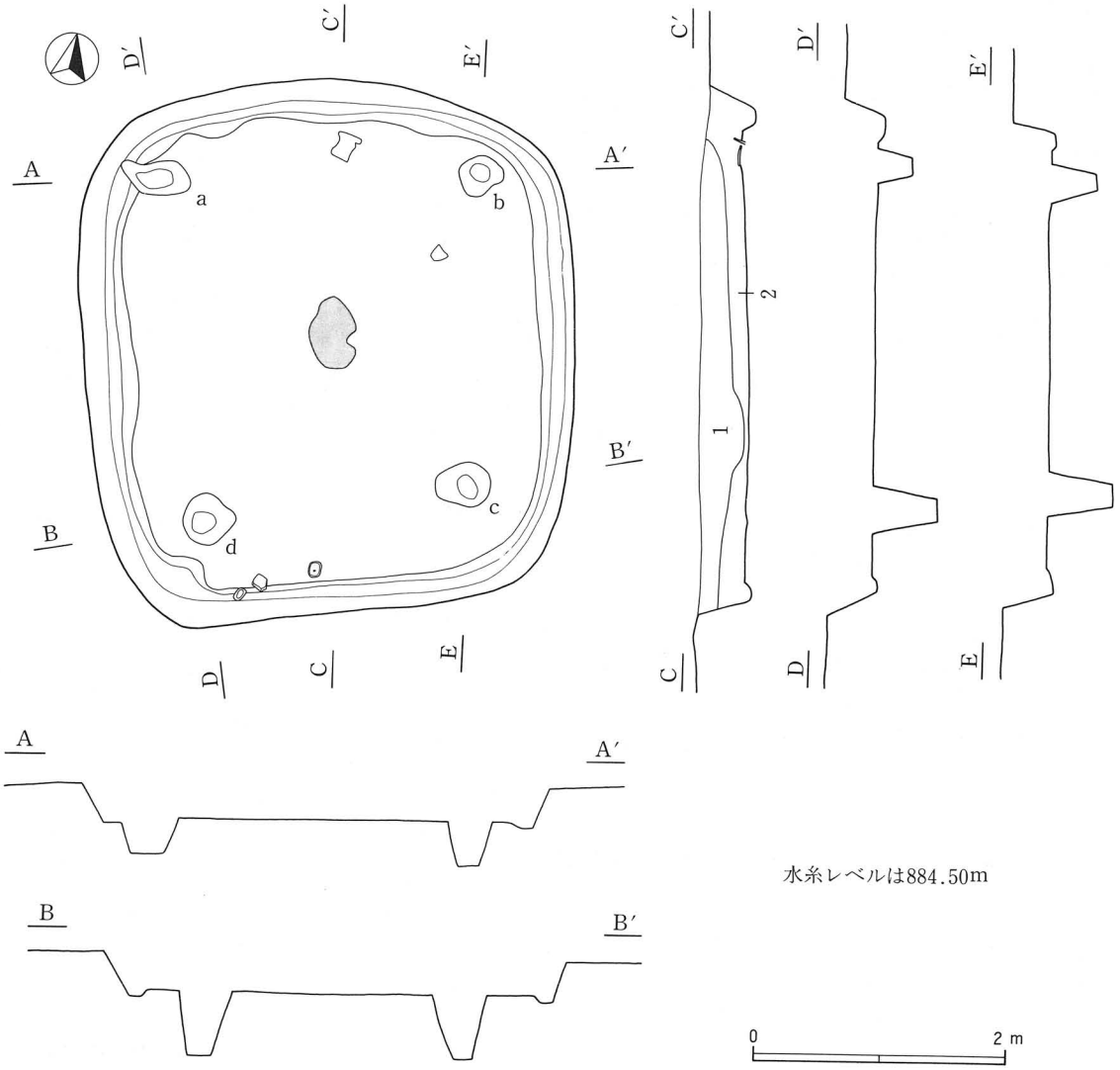
主な遺物には凹石がある。

17　Ｂ２号住居址（第21図、図版16－２）

本住居址は、東西に延びる台地に直交する北へ開く二つの谷の間に張り出した平坦になったところにある。平面形態はやや南北に長い隅丸方形を呈する。規模は長径428㎝、短径394㎝、壁高35㎝を測る。長軸方向はＮ－17°－Ｗを指す。床面は凹凸が激しく、小ピットが多数有る。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが29㎝、ｂが36㎝、ｃが52㎝、ｄが52㎝を測る。東南の柱穴ｃは、内側にロームを詰めた痕跡が有る。柱の径は柱穴の径の半分ほどである。炉は地床炉で、中央にある。周溝は全周している。

覆土は２層に分層が可能である。１層は黒色土で、１～５㎜のローム粒子を多く含む。２層は暗褐色土で、ローム粒子を多く含む。また、特に壁際には１㎝ほどのロームブロックを含む。

遺物は、北壁際中央に一括土器がある。東壁際にも一括土器があるが、床面から５㎝ほど浮いている。南



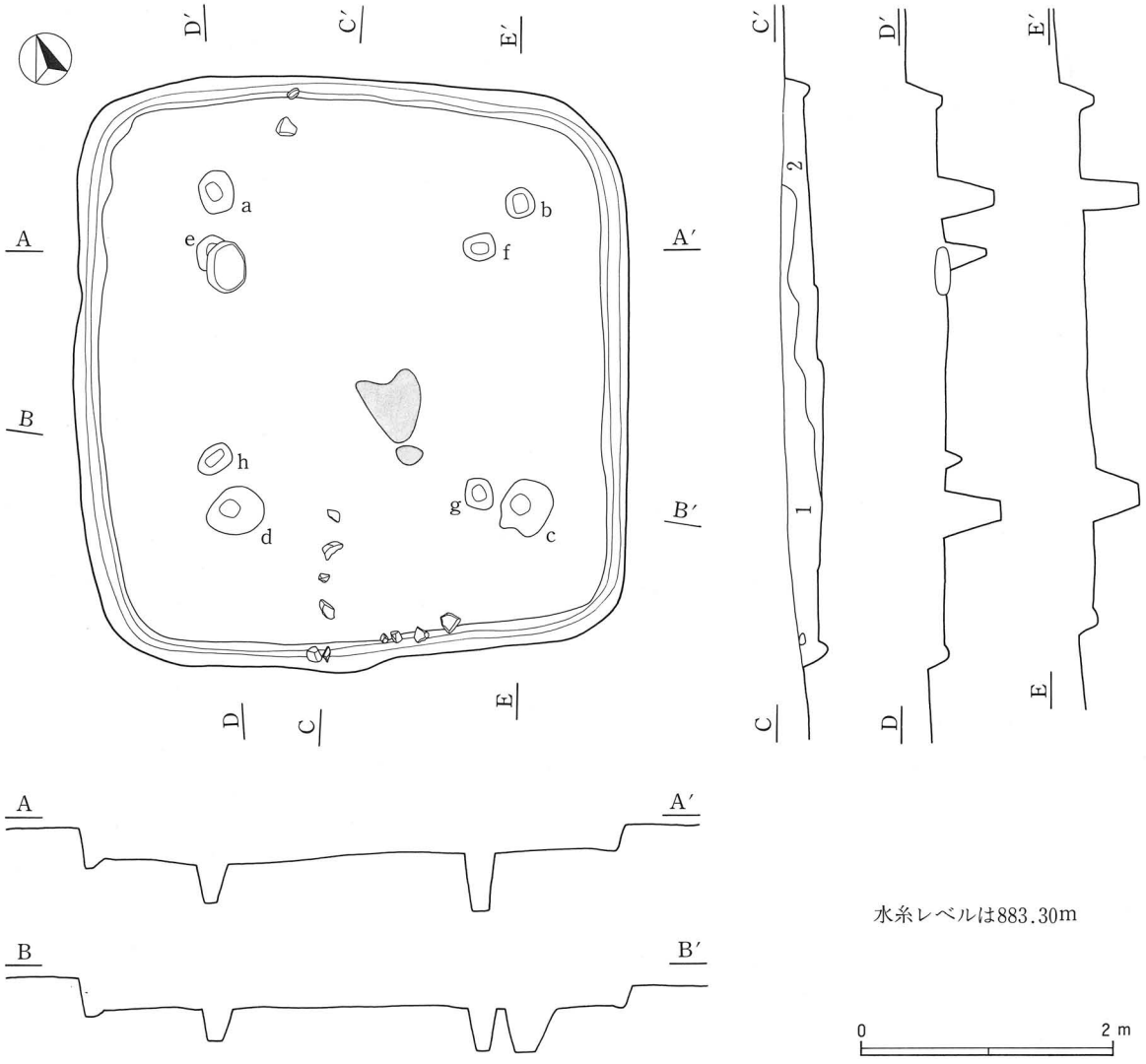
第21図　B２号住居址（1/60）

壁際西寄り床面から凹石が出土している。また、南西の柱穴ｄ内から花崗岩が出土した。

18　B３号住居址（第22図、図版17－１）

本住居址は、東西に延びる台地の平坦面から南の斜面に掛かる所に位置している。掘り込みは浅かったが、プランははっきりとしており、容易に検出が出来た。平面形態はやや南北に長い隅丸方形を呈する。規模は長径478㎝、短径447㎝、壁高24㎝を測る。長軸方向はＮ－17°－Ｅを指す。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが45㎝、ｂが47㎝、ｃが41㎝、ｄが46㎝を測る。この他に各柱穴の内側に４本の柱穴がある。これは柱穴ｅの上に礫が乗っていた事から支柱穴というよりは建て直しが行われる以前の主柱穴と考えられる。床面からの深さは、ｅが33㎝、ｆが47㎝、ｇが37㎝、ｈが26㎝を測る。炉は地床炉で、中央のやや南寄りに位置する。周溝は全周している。

覆土は２層に分層が可能である。１層は黒色土で、ローム粒子や５～10㎜のロームブロックを少量含む他、焼土・炭化物粒子を稀に含む。締り・粘性は共に弱く、粒子は細かい。２層は暗褐色土で、ローム粒子・５～10㎜のロームブロックを多く含み、焼土粒子・炭化物粒子を稀に含む。締り・粘性は共に強く、粒子は細かい。２層の下部は、ロームブロックが多く、極めて硬く締っている。

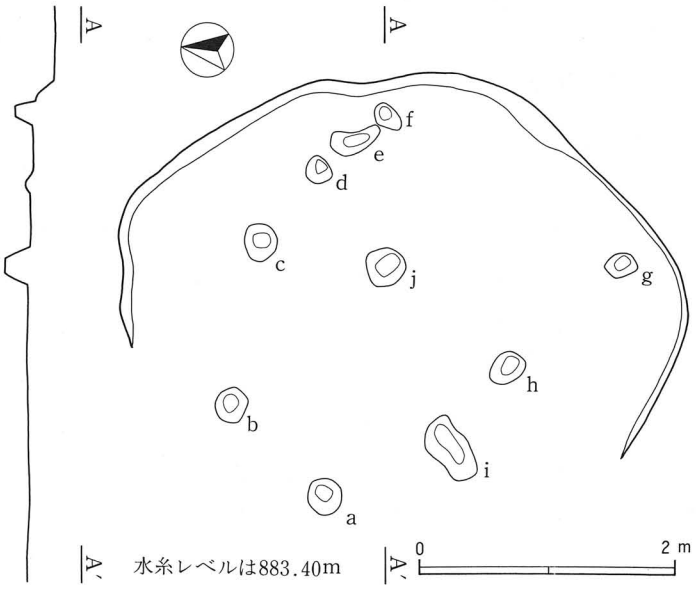


第22図　B 3 号住居址（1/60）

遺物は上層の黒色土と下層の暗褐色土の境から黒曜石が出土している。また、中央床から約10cm上から黒曜石石匙が出土している。南壁際の床から５cm上に礫が10点出土した。柱穴ｅの上に径40cmほどの礫が置かれていた。

19　B 4 号住居址（第23図、図版17-2）

本住居址は、B 3 号住居址の西にあり、台地平坦面から南斜面に掛かる所に位置している。平面形態は円形を呈すると考えられるが、西壁側を流失している。規模は長径457cm、短径は不明、壁高は16cmを測る。長軸方向は不



第23図　B 4 号住居址（1/60）

明。柱穴は図示したａ～ｊの10本が検出された。比較的深いものであるが、他にも10cm未満のピットは多数認められる。各柱穴の床面からの深さは、ａが22cm、ｂが20cm、ｃが21cm、ｄが14cm、ｅが10cm、ｆが12cm、ｇが13cm、ｈが21cm、ｉが26cm、ｊが20cmを測る。炉は検出出来なかったが、流失しているのではなく、最初からなかった可能性もある。また、周溝も見られない。

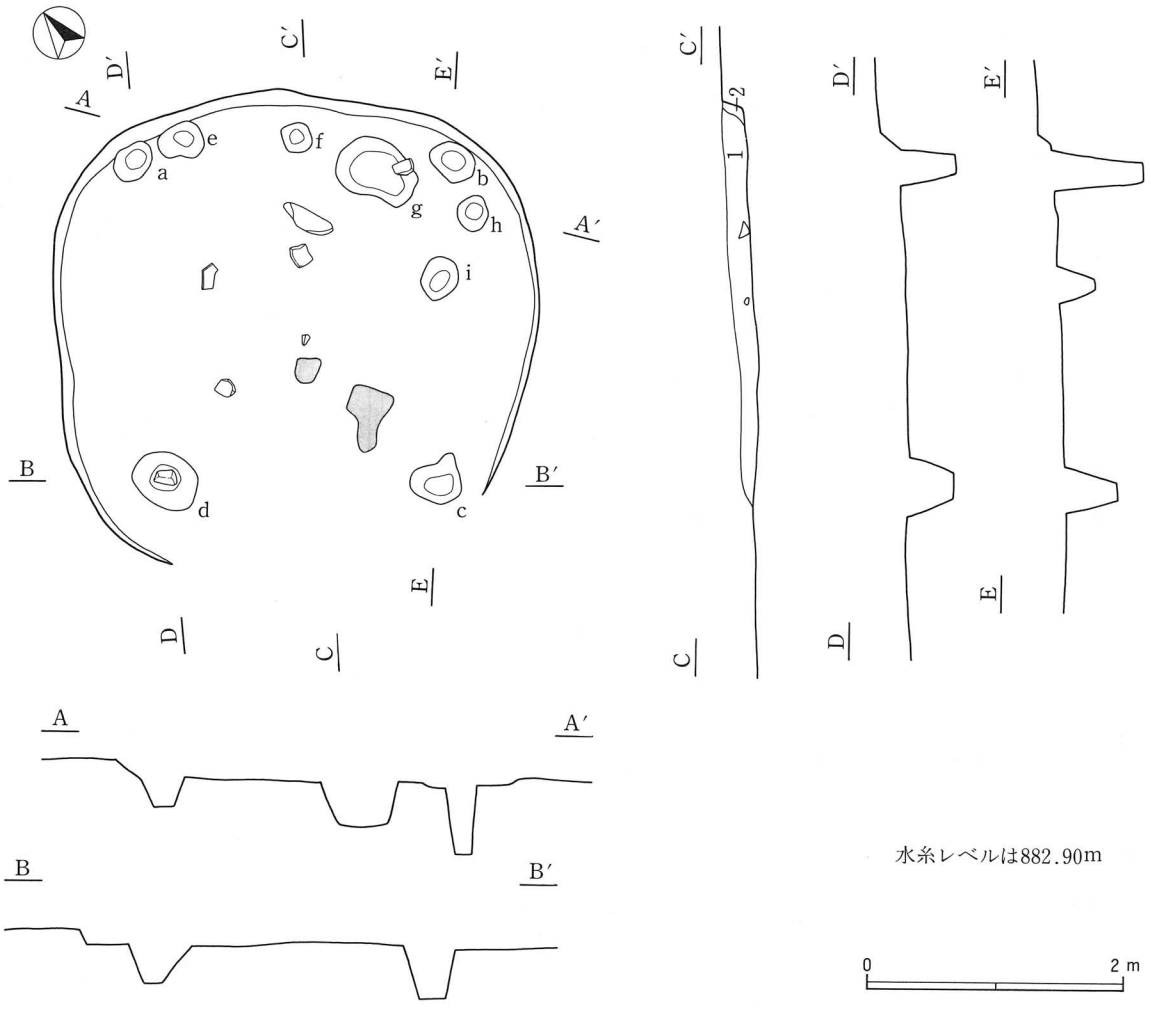
覆土は暗褐色の単一層である。１cm以下のロームブロック・微細なローム粒子を全体に含む。粒子は細かく、良く締っているが、粘性に乏しい。

主な遺物には押型文土器があるが、量は少ない。

20　Ｂ５号住居址（第24図、図版18－１）

本住居址は緩やかな南斜面に位置する。これより斜面の傾斜は急となっている。南壁を流失しているが、平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は長径380cm、短径380cm、壁高10cmを測る。長軸方向はＮ－39°－Ｅを指す。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが43cm、ｂが75cm、ｃが42cm、ｄが31cmを測る。支柱穴はｅ～ｉの５本がある。床面からの深さはｅが25cm、ｆが20cm、ｇが35cm、ｈが56cm、ｉが31cmを測る。炉は地床炉で、中央のやや南寄りにある。周溝は見られない。

覆土は２層に分層が可能である。１層は５～10㎜のロームブロックを多く含む。また、ローム粒子や炭化物粒子、焼土粒子を稀に含む。２層は黄褐色土で、壁際に認められる。１層に比してロームブロックが多く、

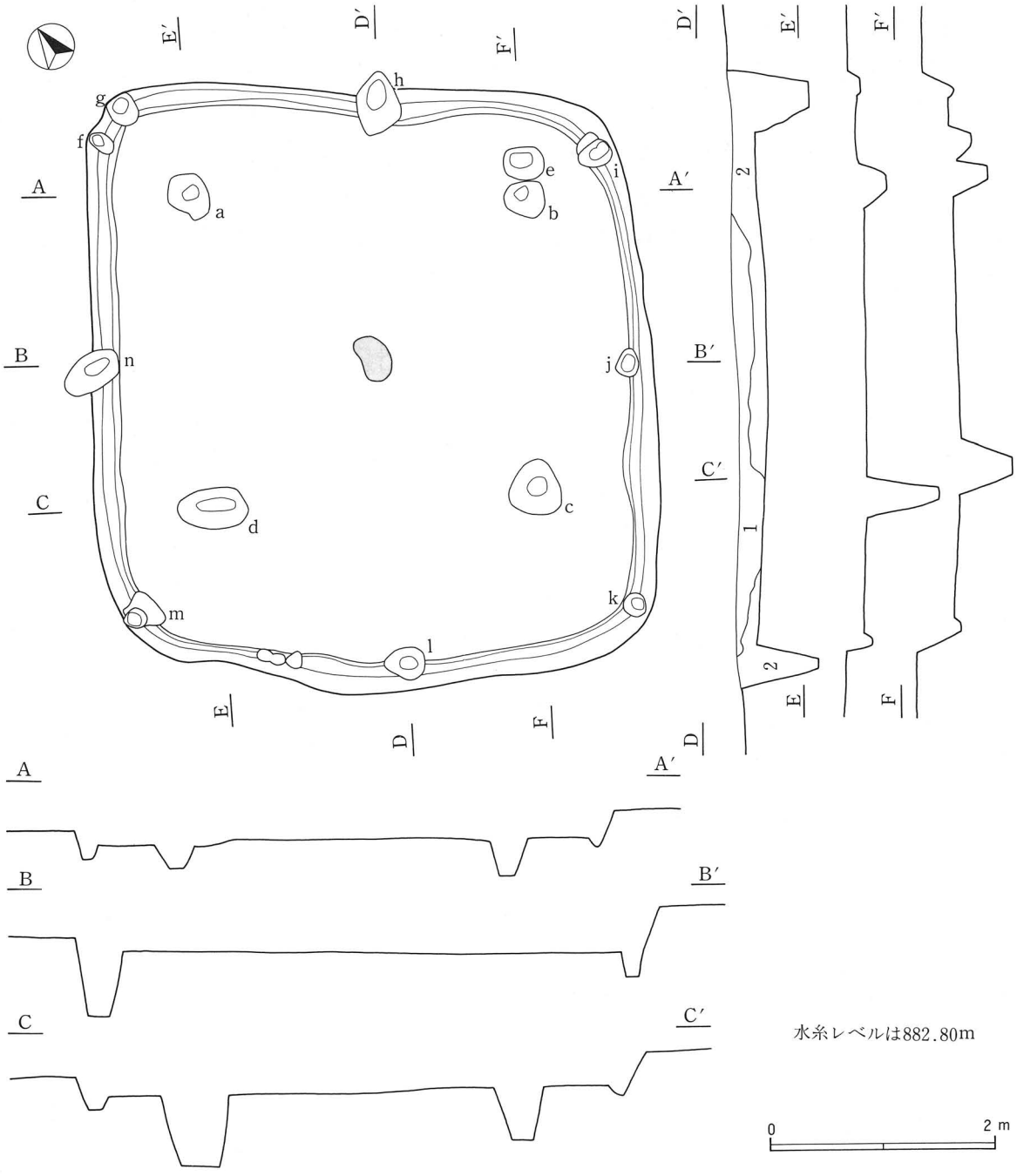


第24図　Ｂ５号住居址（1/60）

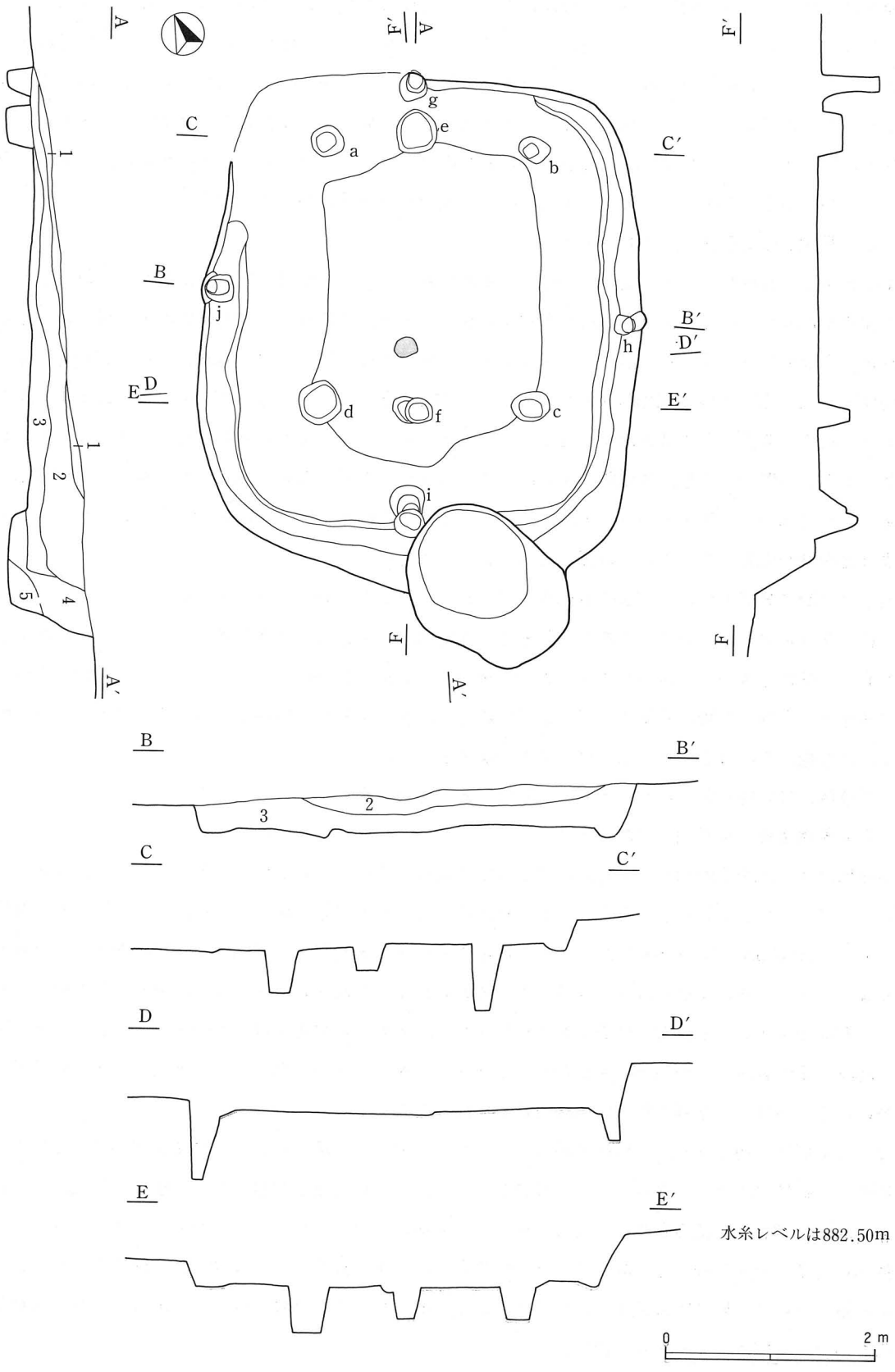
硬く締っている。

21　B６号住居址（第25図、図版18－２）

本住居址は、台地平坦面から北斜面に掛かる所に位置している。斜面の低い方にあたる北側は掘り込みが浅いが、プランはしっかりしており、容易に検出できた。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長径547cm、短径515cm、壁高40cmを測る。長軸方向はＮ－34°－Ｅを指す。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが22cm、ｂが33cm、ｃが48cm、ｄが66cmを測る。また、柱穴ｂに隣接して柱穴ｅがあるが、床面からの深さは20cmを測る。支柱穴は壁際に９本検出された。床面からの深さはｆが51cm、ｇが38cm、ｈが50cm、ｉが34cm、ｊが24cm、ｋが15cm、ｌが56cm、ｍが46cm、ｎが60cmを測る。入口は北になると考えられる。



第25図　Ｂ６号住居址（1/60）



第26図　C 7 号住居址（1/60）

炉は地床炉で、中央にある。周溝は全周している。

覆土は2層に分層が可能である。1層は黒色土で、上層ほどローム粒子の混入が少なく、漆黒に近い。下層にいくにしたがって1cm以下のロームブロックやローム粒子が多く混じるようになる。下層の暗褐色土に漸次変っていくが、黒色土の混じっているまでを1層とした。2層は暗褐色土で、硬くよく締っている。1～2cmのロームブロックを多く混入する。1・2層を通じて焼土や炭化物の混入はまったく認められない。柱穴内の覆土は、ローム粒子の混入は認められるものの、ロームブロックの混入は少ない。2層との分層は難しく、同一層として扱った。また、未焼成の粘土塊が南壁周溝の西寄りに認められた。

22　C7号住居址（第26図、図版19－1）

本住居址は、台地平坦面から北斜面に掛かる所に位置している。斜面の低い方にあたる北側は掘り込みが浅く北壁が流失している。南壁で土坑と重複するが、土層断面の観察から本住居址の方が新しいことが理解される。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は長径507cm、短径430cm、壁高57cmを測る。長軸方向はN－25°－Eを指す。床面は主柱穴に囲まれた内側が周辺より硬くなっている。主柱穴はa～dの4本が考えられる。床面からの深さはaが51cm、bが69cm、cが35cm、dが49cmを測る。支柱穴は主柱穴aとbの間、cとdの間にある他、各壁際の中央にある。床面からの深さはeが26cm、fが34cm、gが61cm、hが35cm、iが42cm、jが70cmを測る。入口は北になると考えられる。炉は地床炉で、中央やや南寄りにある。周溝は北西隅が流失しているが、全周していたものと考えられる。

覆土は3層に分層される。1層は黄褐色土で、粒子は細かく、締りも有るが、粘性はない。1㎜以下のローム粒子を少量含む。2cmほどの礫が混じる他、炭化物を少量含む。2層は黒褐色土で、粒子は細かく、締りも有り、粘性も強い。1㎜以下のローム粒子を少量、5㎜ほどのロームブロックを稀に含む。5㎜以下の炭化物を稀に含む。3層は暗褐色土で、粒子は細かく、締りも有り、粘性も強い。1㎜ほどのローム粒子を多量に含む他、5㎜ほどのロームブロックを少量含む。

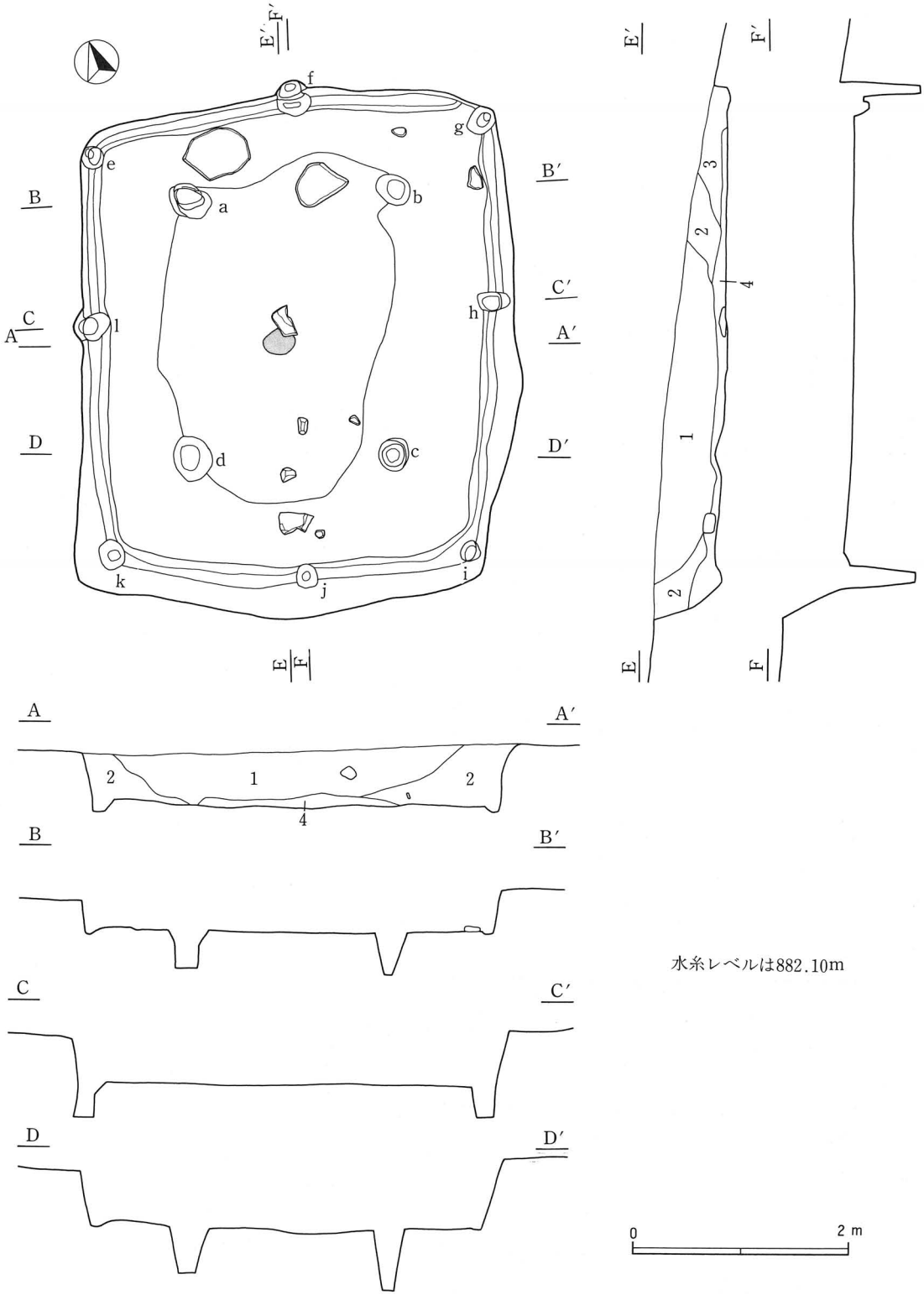
主な遺物には黒曜石製の石匙、チャート製の石匙などがある。

23　C8号住居址（第27図、図版19－2）

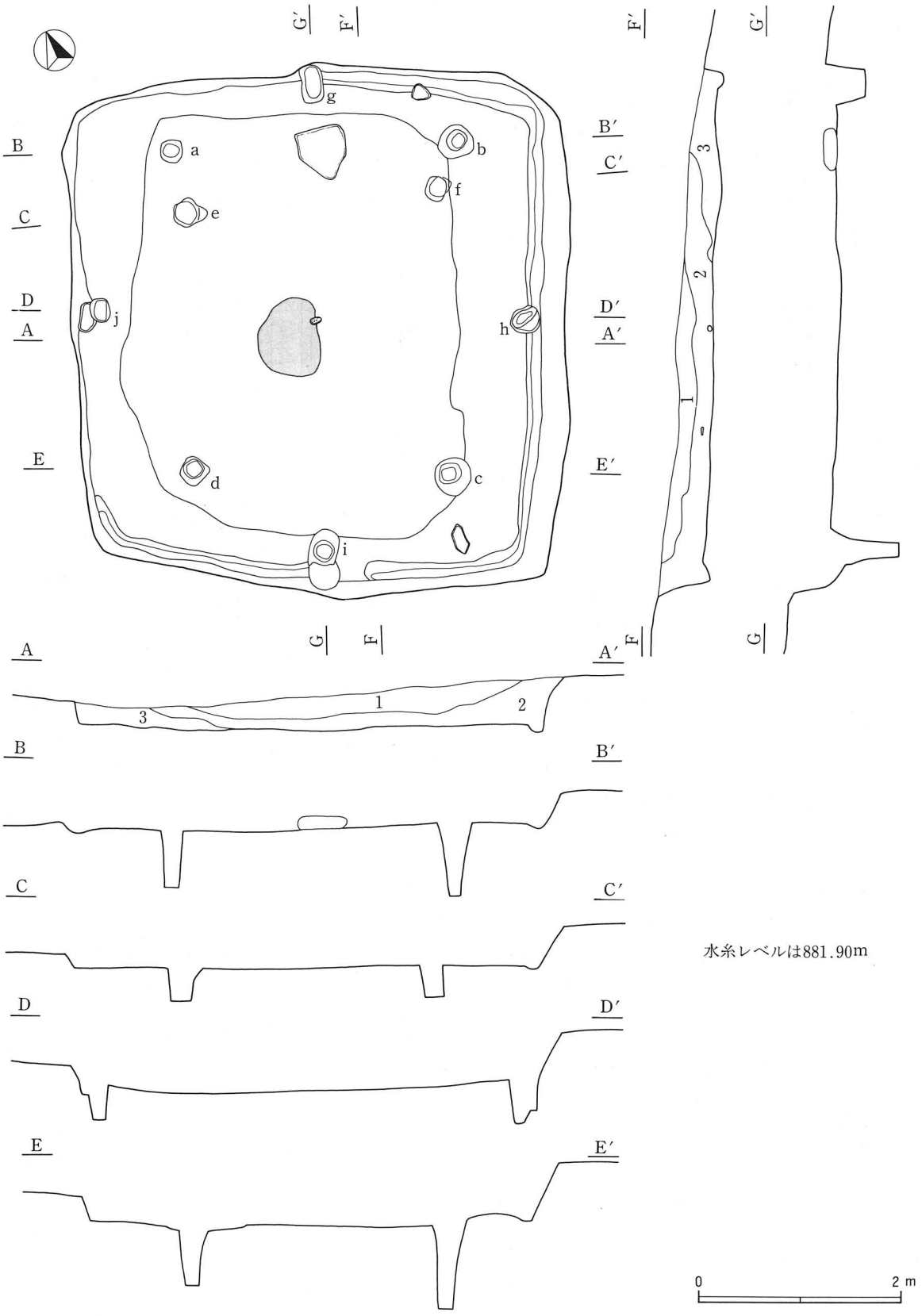
本住居址は、台地平坦面から北斜面に掛かる所に位置している。斜面の低い方にあたる北側は掘り込みが浅いが、プランはしっかりしており、容易に検出できた。平面形態は南北に長い長方形を呈する。規模は長径509cm、短径415cm、壁高58cmを測る。長軸方向はN－17°－Eを指す。床面は主柱穴に囲まれた内側が周辺より硬くなっている。主柱穴はa～dの4本が考えられる。床面からの深さはaが38cm、bが44cm、cが63cm、dが40cmを測る。支柱穴は壁際に8本検出された。床面からの深さはeが42cm、fが64cm、gが54cm、hが30cm、iが44cm、jが73cm、kが42cm、lが41cmを測る。入口は北になると考えられる。炉は地床炉で、中央にある。周溝は北東隅で僅かに切れている他は、全周している。

覆土は4層に分層できる。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、締りも有り、粘性も強い。1㎜以下のローム粒子、5㎜ほどのロームブロックを少量含む。3㎜ほどの炭化物も少量含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っており、粘性も強い。同じ2層中でも北側ほどローム粒子の混入が多く、明るく感じる。3層は黄褐色土で、粒子は細かく、締っており、粘性も強い。1㎜以下のローム粒子、5㎜以下のロームブロックを多量に含む。4層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っており、粘性も強い。1㎜以下のローム粒子、5㎜以下のロームブロックを多量に含む。

主な遺物には磨石がある他、平石が北に2ある。住居址の東側隅からは黒曜石の剥片の集中する箇所もみられた。



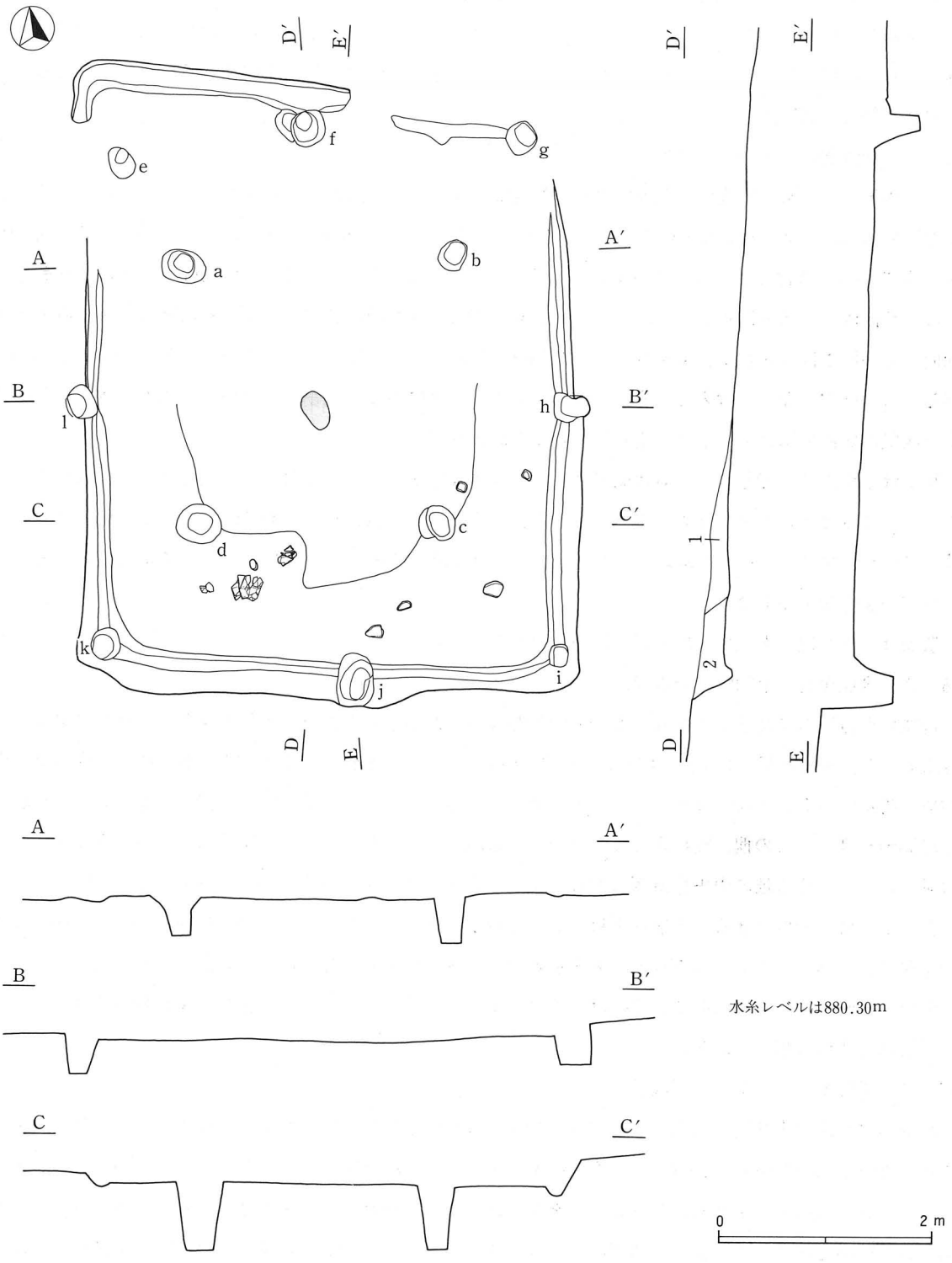
第27図　C 8 号住居址（1/60）



第28図　C 9 号住居址（1/60）

24　C９号住居址（第28図、図版20－１）

本住居址は、台地平坦面から北斜面に掛かる所に位置している。斜面の低い方にあたる北側は掘り込みが浅いが、プランはしっかりしており、容易に検出できた。平面形態はやや南北に長い隅丸方形を呈する。規模は長径535cm、短径493cm、壁高45cmを測る。長軸方向はＮ－23°－Ｅを指す。床面は主柱穴に囲まれた内側が周辺より硬くなっている。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが61cm、ｂが73cm、



第29図　C10号住居址（1/60）

cが92cm、dが61cmを測る。支柱穴は主柱穴aとbの内側にそれぞれ1本の柱穴がある他、各壁際の中央に1本ずつ認められる。床面からの深さはeが31cm、fが32cm、gが28cm、hが37cm、iが75cm、jが36cmを測る。入口は北になると考えられる。炉は地床炉で、中央やや西寄りにある。周溝は東壁と南壁及び北壁の東半分に見られる。

覆土は3層に分層できる。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、締っており、粘性も強い。1㎜以下のローム粒子、3㎜ほどのロームブロックを少量含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っており、粘性も強い。1㎜以下のローム粒子、5㎜から1cmのロームブロックを少量含む。3層は黄褐色土で、粒子は細かく、締っており、粘性も強い。ローム粒子やロームブロックを多量に含む他、炭化物も稀に見受けられる。

主な遺物は、北壁際中央に平石が1ある。

25　C10号住居址（第29図、図版21）

本住居址は、台地平坦面から北斜面に掛かる所に位置している。北側1/3は流失しており、周溝と柱穴が残るだけである。平面形態は長方形を呈する。規模は長径590cm、短径460cm、壁高32cmを測る。長軸方向はN－10°－Eを指す。床面は、主柱穴に囲まれた内側が周辺より硬くなっている。主柱穴はa～dの4本が考えられる。床面からの深さはaが42cm、bが50cm、cが62cm、dが68cmを測る。支柱穴は壁際に8本検出された。床面からの深さはeが42cm、fが47cm、gが33cm、hが27cm、iが42cm、jが39cm、kが30cm、lが39cmを測る。入口は北になると考えられる。炉は地床炉で、中央にある。周溝は北側の掘り込みが浅く、北壁の東半と西壁の北側で切れているが、全周していたと思われる。

覆土は2層に分層できる。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、締っており、粘性も強い。1㎜以下のローム粒子、3㎜ほどのロームブロックを少量含む他、炭化物を少量含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っており、粘性も強い。1㎜以下のローム粒子、3㎜から1cmのロームブロックを多量に含む。また、2㎜ほどの炭化物を多く含む。

遺物は、床面直上南壁寄りに一括土器が出土した。

26　C11号住居址（第30図、図版22）

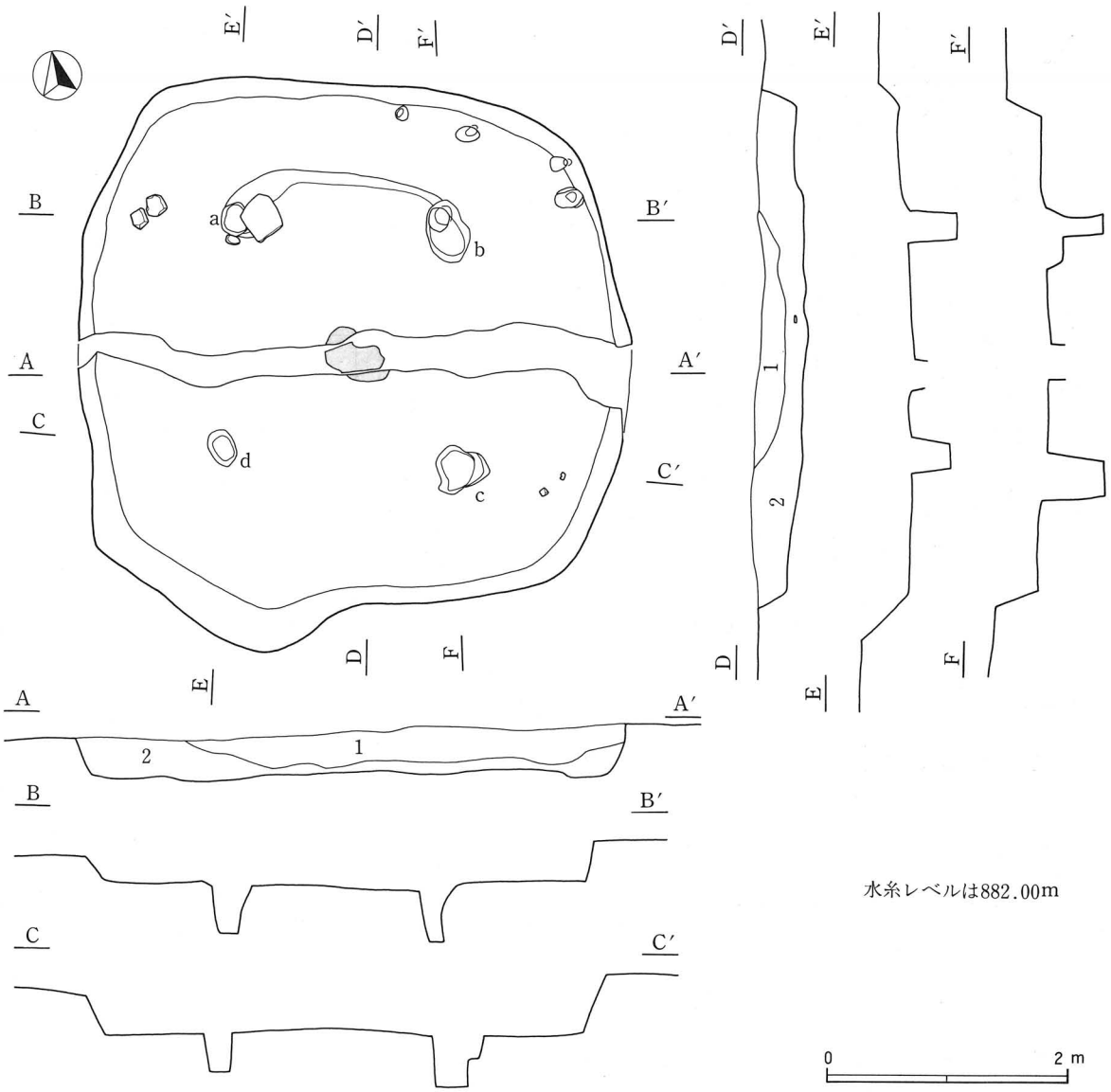
台地の平坦面の先端近くに位置する。平面形態は隅丸方形を呈するが、南壁の西半分が張り出すように膨らんでいる。規模は長径460cm、短径435cm、壁高40cmを測る。長軸方向はN－15°－Eを指す。床面は、中央がやや凹んでいる。主柱穴はa～dの4本が考えられる。床面からの深さはaが45cm、bが50cm、cが51cm、dが33cmを測る。この他、支柱穴ではないが、北東隅にピットが4ある。炉は地床炉で、中央にある。周溝は見られない。住居址の中央を東西方向にクラックが入っており、焼土や遺物が落込んでいる。

覆土は2層に分層できる。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。1㎜以下のローム粒子、5㎜ほどのロームブロックを少量含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。1㎜以下のローム粒子、5㎜ほどのロームブロックを多量に含む。また、炭化物を少量含む。

平石は北西柱穴脇に1ある。

27　C12号住居址（第31図、図版23）

台地の平坦面の先端近くにあり、C11号住居址の南に位置する。平面形態はやや南北に長い隅丸方形を呈する。規模は長径398cm、短径368cm、壁高40cmを測る。長軸方向はN－27°－Eを指す。東西方向に2本のクラックが入っている。主柱穴はa～dの4本が考えられる。床面からの深さはaが45cm、bが49cm、cが59cm、dが65cmを測る。この他、北西隅に柱穴が重複してあり、床面からの深さは共に26cmを測る。炉は地床炉で、中央にある。周溝は北・東・南壁のすべてと西壁の南半に見られる。



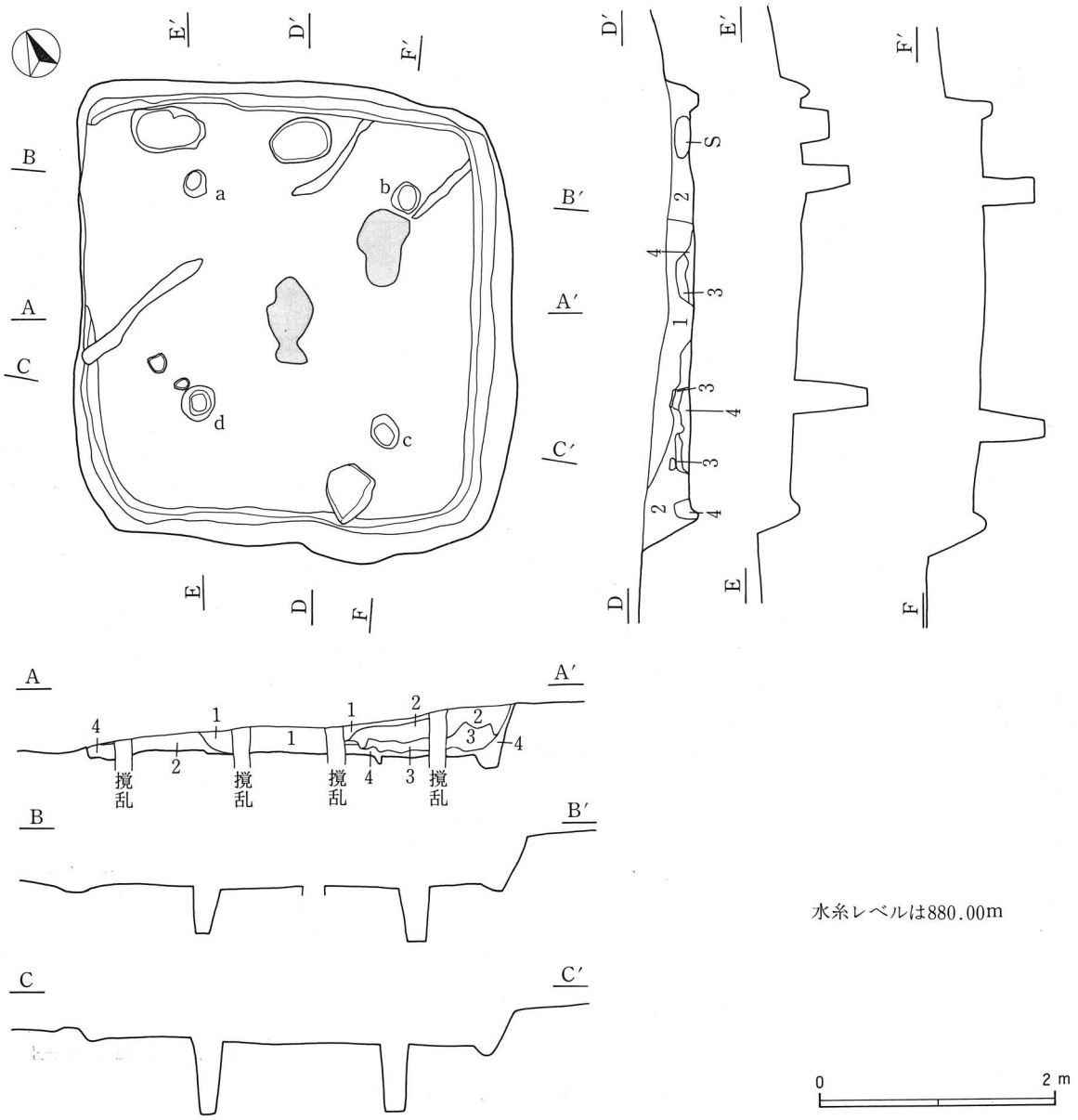
第30図　C11号住居址（1/60）

覆土は３層に分層できる。焼失住居で、下層に行くにしたがって炭化物や焼土の混入が多くなっている。１層は漆黒土で、粒子は細かいが締りはなく、粘性も弱い。２㎜以下のローム粒子、１㎝以下のロームブロックを少量含む他、炭化物を少量含む。２層は黒褐色土で、粒子は細かいが締りはなく、粘性も弱い。焼土粒子と炭化物を多く含む。３層も黒褐色土で、粒子は細かいが締りはなく、粘性も弱い。焼土粒子・ブロック・炭化物を多量に含む。

主な遺物に一括土器があるが、地文に縄文を施したものが認められる。平石は南北に各１ある。

28　C13号住居址（第32図、図版20－２）

台地の平坦面の先端近くにあり、C12号住居址の西に位置する。本遺跡の住居址中、最も西端にある住居である。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は長径427㎝、短径397㎝、壁高35㎝を測る。長軸方向はN－03°－Eを指す。北壁近くを断層が東西に走っている。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが49㎝、ｂが50㎝、ｃが63㎝、ｄが64㎝を測る。支柱穴は東壁・南壁・西壁の各辺の壁際中央にある他、北西隅と北東隅にも各１本認められる。各柱穴の床面からの深さはｅが42㎝、ｆが18㎝、ｇが34㎝、ｈが71㎝、ｉが31㎝を測る。また、ｈに隣接して浅いピットがあり、凹石が出土している。炉は地床



第31図　C12号住居址（1/60）

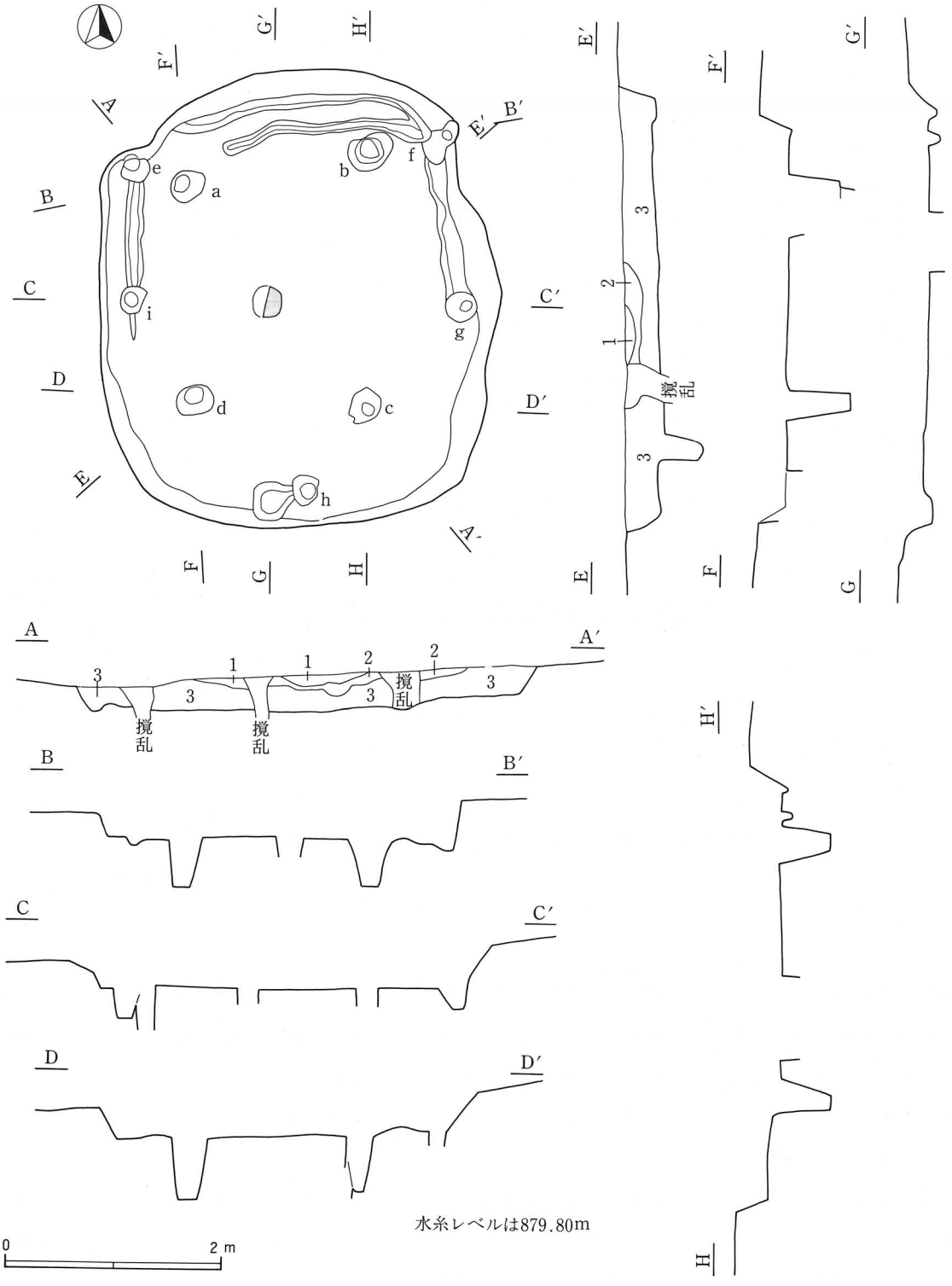
炉で、中央やや西寄りにある。周溝は北壁と東西壁の北半にある。

覆土は3層に分層できる。1層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。1㎜以下のローム粒子、3㎜以下のロームブロックを少量含む他、炭化物を稀に含む。2層は黒褐色土で、粒子は細かいが締りはなく、粘性も弱い。1㎜以下のローム粒子、2㎜ほどのロームブロックを少量含む。また、1㎜ほどの炭化物を稀に含む。3層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。3㎜以下の炭化物を少量含む。

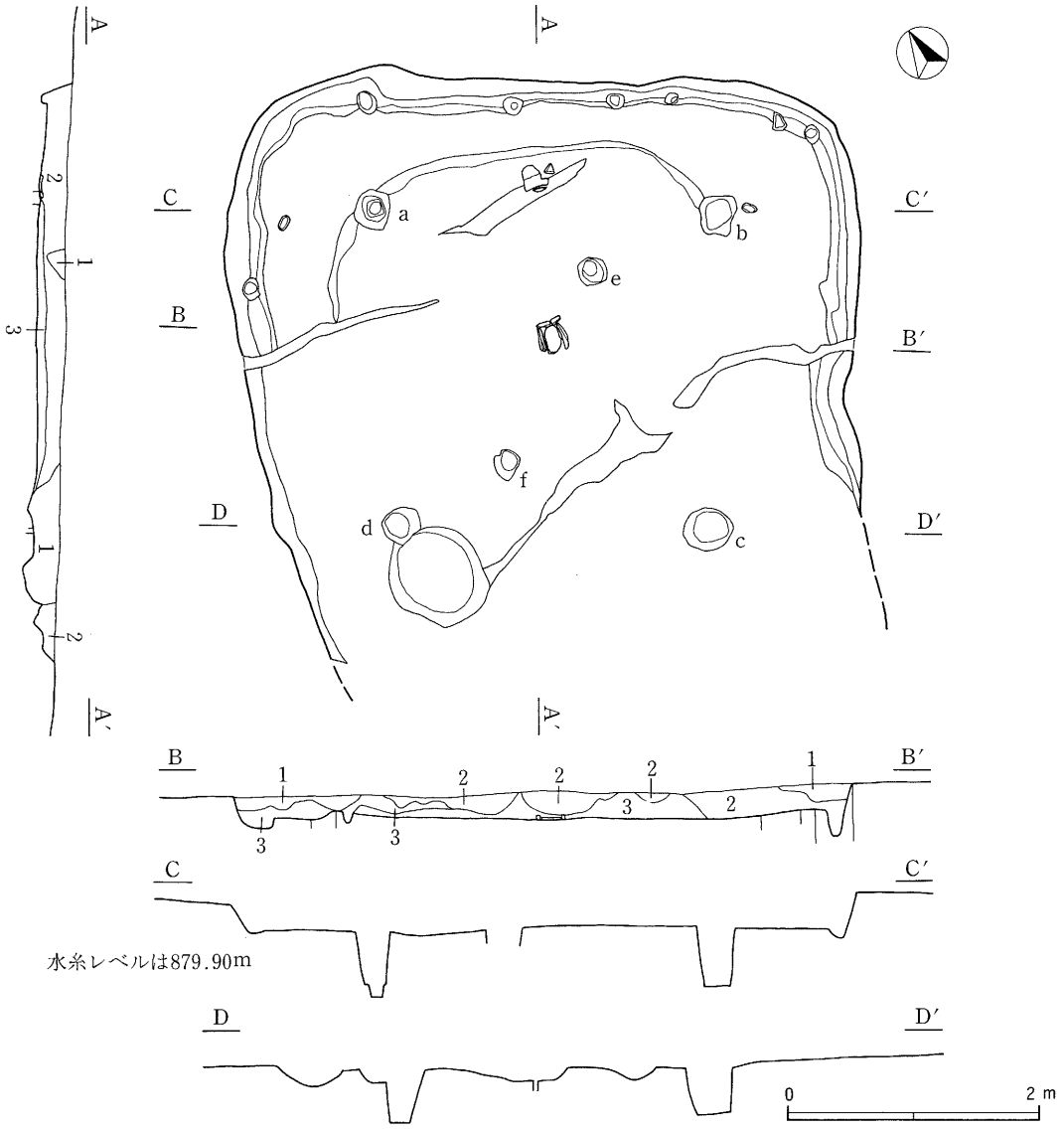
主な遺物には凹石がある。

29　C14号住居址（第33図、図版24）

台地の平坦面から南斜面に掛かる所に位置している。南壁側が流失しており、全体の形状は不明であるが、5m前後の隅丸方形になるものと考えられる。規模は長径495㎝、短径は不明、壁高は30㎝を測る。長軸方向はN－32°－Eを指す。床面は、北側の主柱穴に囲まれた内側が一段低くなっている。また、東西に2本の断層が走っており、斜面の下側である南側の方が、若干高くなっている。主柱穴はa～dの4本が考えられる。



第32図　C13号住居址（1/60）



第33図　C14号住居址（1/60）

床面からの深さはaが56cm、bが49cm、cが42cm、dが43cmを測る。この他、主柱穴の内側、炉の近くに2本のピットが見られる。床面からの深さはeが31cm、fが43cmを測る。他に周溝内にも小ピットが見受けられる。また、柱穴dに隣接して長径85cm、短径75cm、床面からの深さ19cmの土坑がある。炉は安山岩の板状になったもの（当地方では鉄平石と呼んでいる）で囲んだ小さな石囲炉で、中央やや北寄りにある。周溝は北壁及び東西壁の北側にある。

覆土は3層に分層できる。1層は漆黒土で、粒子は細かいが、締りはなく、粘性も弱い。1㎜以下のローム粒子、5㎜以下のロームブロックを少量含む。2層は黒褐色土で、粒子は細かいが締りはなく、粘性も弱い。1㎜以下のローム粒子を多く含むが、3cm以下のロームブロックは稀に含まれるだけである。炭化物も若干見受けられる。3層は暗褐色土で、粒子は細かいが締りはなく、粘性も弱い。1㎜以下のローム粒子、2cm以下のロームブロックを多量に含む。炭化物も若干含む。

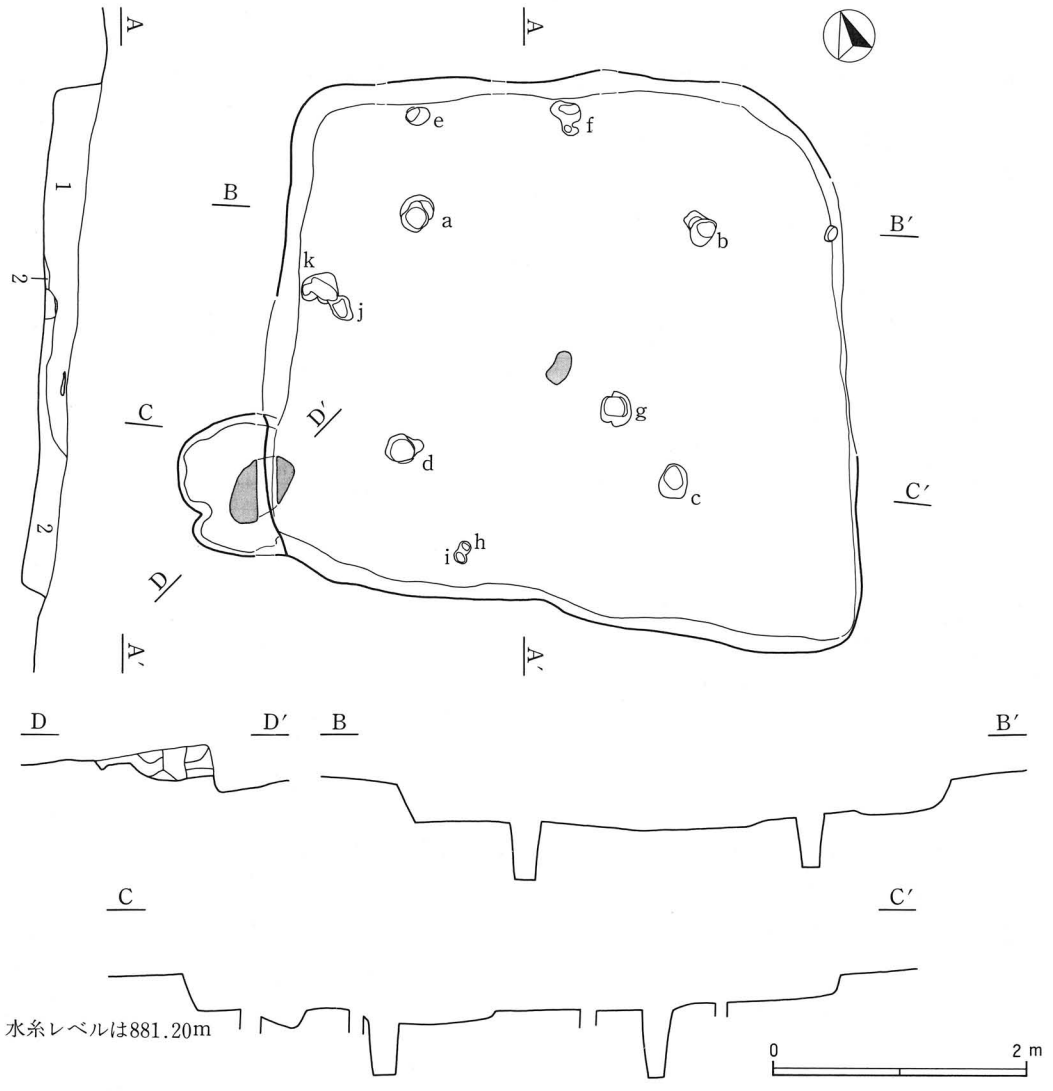
主な遺物には縄文施文土器・磨石がある。

30　C15号住居址（第34図、図版25－1）

本住居址は、台地平坦面から南斜面に掛かる所に位置している。平面形態はやや東西に長い隅丸方形を呈する。南東隅がやや広がっているが、掘りすぎの可能性がある。規模は長径455cm、短径420cm、壁高47cmを測る。長軸方向はN－68°－Wを指す。床面は傾斜しており、北と南では25cmほどの差が認められる。南西隅で、焼土の多量に入る土坑が重複するが、その焼土の分布から土坑が新しいと考えられる。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが47cm、ｂが45cm、ｃが60cm、ｄが61cmを測る。主柱穴と考えられる以外に８本のピットが検出されている。床面からの深さはｅが31cm、ｆが24cm、ｇが49cm、ｈが21cm、ｉが22cm、ｊが33cm、ｋが24cmを測る。炉は地床炉で、中央にある。周溝は見られない。

覆土は２層に分層できる。１層は黒褐色土で、粒子は細かいが締りはなく、粘性も弱い。２㎜以下のローム粒子、２cm以下のロームブロックを少量含む。２層は暗褐色土で、粒子は細かいが締りはなく、粘性も弱い。２㎜以下のローム粒子、３cm以下のロームブロックを少量含む。１層と２層の間に焼土層が認められる。

主な遺物には磨石がある。



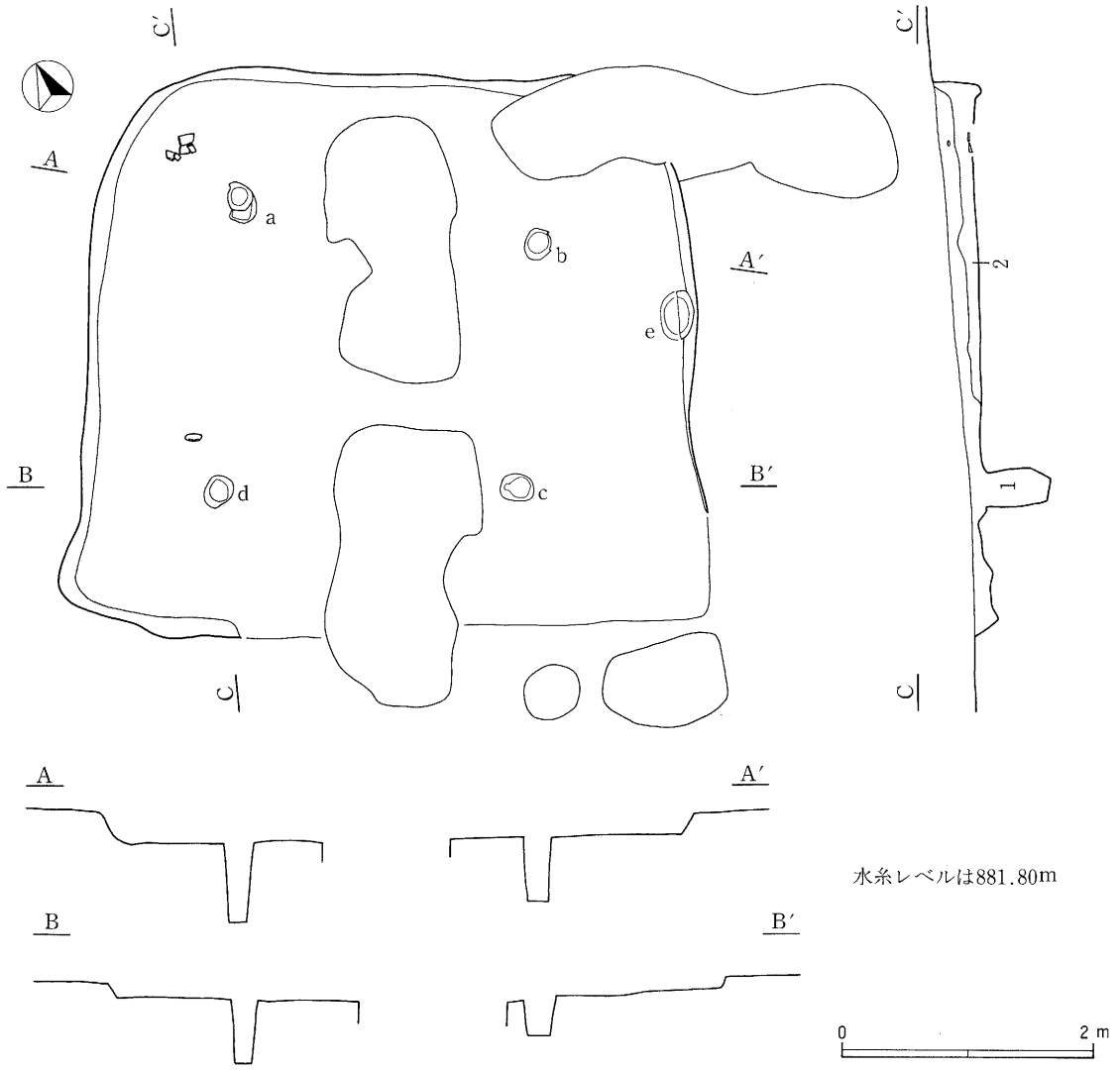
第34図　C15号住居址（1/60）

31　C16号住居址（第35図、図版25－2）

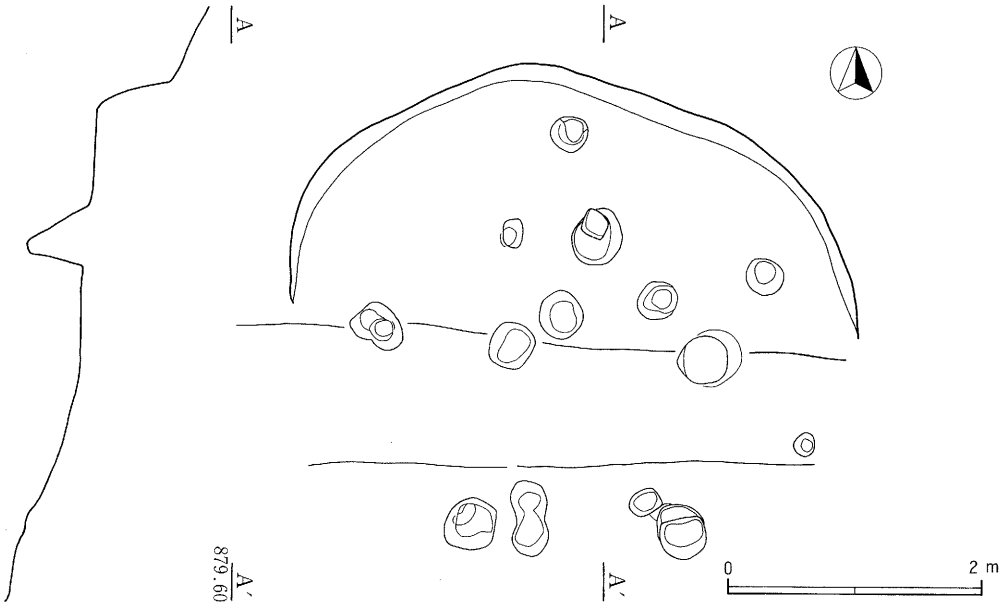
本住居址は、台地平坦面の南側に位置する。本址の東側は、C11号方形柱穴列と重複している。土層断面によっての新旧関係は確認できていないが、方形柱穴列の西辺の確認状況から、本址の方が新しいものと考えられる。平面形態はやや東西に長い隅丸方形を呈する。規模は長径489cm、短径457cm、壁高33cmを測る。長軸方向はN－58°－Wを指す。主柱穴はa～dの4本が考えられる。床面からの深さはaが71cm、bが54cm、cが37cm、dが54cmを測る。この他、東壁際の中央よりやや北側にeがあり、床面からの深さは22cmを測る。炉は他の住居址例からほぼ中央にあったと考えられるが、C11方形柱穴列の掘り下げを先に行ってしまっていたため、検出できなかった。周溝はない。

覆土は2層に分層できる。1層は暗黄褐色土で、粒子は細かいが、締りはなく、粘性は弱い。1㎜以下のローム粒子を少量、2cm以下のロームブロックを多量に含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かいが、締りはなく、粘性も弱い。1㎜以下のローム粒子、1cmほどのロームブロックを少量含む。

主な遺物にミニチュア土器があり、柱穴aから出土している。



第35図　C16号住居址（1/60）



第36図　C17号住居址（1/60）

32　C17号住居址（第36図、図版26）

本住居址は、台地の南斜面に位置している。平面形態は円形を呈するものと考えられるが、南側の半分以上を流失している。規模は長径450cm、短径は不明、壁高は60cmを測る。長軸方向は不明。柱穴は主柱穴・支柱穴を含め、多数の柱穴が検出されている。炉は流失してしまったと考えられる。周溝はない。

覆土の住居西半の床面に密着して焼土と炭化物が出土している。東半には焼土や炭は検出されない。北壁は高く、壁際には拳大のロームブロックが堆積していた。また、東壁際に黒曜石の集中している箇所があった。

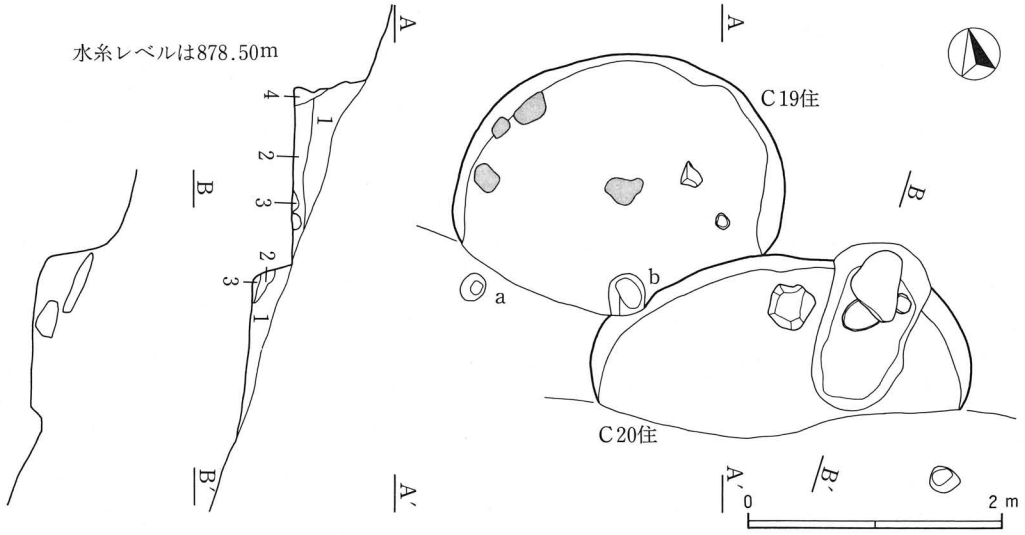
33　C18号住居址

台地の南斜面に位置し、C17号住居址とC19・20号住居址の間にある。平面形態は不整形を呈する。規模は不明である。長軸方向も不明。当初、住居址と考えたが、柱穴らしいピットはあるものの、他の住居址に比してそれぞれの大きさがまばらで、位置も一定しないことから、抜根の際の木の根の痕跡と考えた方が良いと思われ、欠番とした。遺物の出土もなかった。

34　C19号住居址（第37図、図版27）

本住居址は、台地の南斜面に位置している。平面形態は円形を呈するものと考えられるが、南半を流失している。C20号住居址と重複するが、新旧関係は不明である。規模は長径260cm、短径は不明、壁高は58cmを測る。長軸方向も不明。柱穴は主柱穴・支柱穴を含め、2本が確認できた。床面からの深さはaが17cm、bが21cmを測る。炉は地床炉で、中央にある。周溝は見られない。

覆土は4層に分層できる。1層は暗褐色土で、粒子は粗く、締りはなく、粘性も弱い。1～5㎜のローム粒子、1～3cmのロームブロックを多く含む。また、1～5㎜の炭化物を多く含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、締りもあるが、粘性は弱い。1～5㎜のローム粒子を多量に含む他、2～3cmのロームブロックを少量含む。また、5～20㎜の炭化物を多く含む。3層は黒褐色土で、締りはあるが、粘性は弱い。1～3㎜のローム粒子を少量含む。また、2～3㎜の炭化物を多量に含む。4層は暗褐色土で、締りはあるが、粘性は弱い。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。また、5㎜以下の炭化物を少量含む。



第37図　C19・20号住居址（1/60）

35　C20号住居址（第37図、図版27）

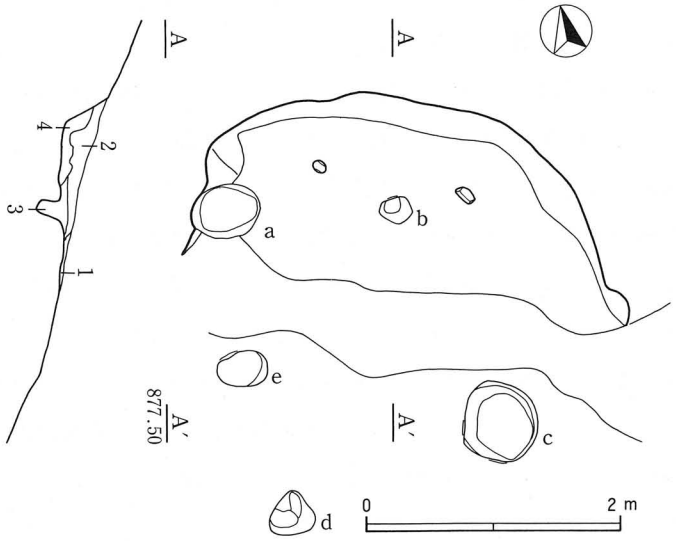
本住居址は台地の南斜面に位置している。平面形態は円形を呈するものと考えられるが、南半を流失している。C19号住居址・土坑と重複する。住居址との新旧関係は不明であるが、土坑との新旧関係については土坑に落込んだ礫の状況から土坑の方が新しいものと考えられる。規模は長径300cm、短径は不明、壁高は30cmを測る。長軸方向は不明。柱穴は主柱穴・支柱穴を含め、1本が確認できた。床面からの深さは41cmを測る。炉は未検出であるが、流失した中央部にあったものと考えられる。周溝は見られない。

覆土は3層に分層できる。1層は黄褐色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。1～3㎜のローム粒子、1～4cmのロームブロックを少量含む。2層は暗褐色土で、締りはあるが、粘性は弱い。1～2㎜のローム粒子、5㎜以下のロームブロックを少量含む。3層は2層よりやや明るい暗褐色土で、締りはあるが、粘性は弱い。1～4㎜のローム粒子、1cm以下のロームブロックを多量に含む。また、2～3㎜の炭化物を少量含む。

36　C21号住居址（第38図、図版28）

本住居址は、台地の南斜面に位置している。平面形態は円形を呈するものと考えられるが、南半が流失している。規模は長径357cm、短径は不明、壁高は35cmを測る。長軸方向は不明。柱穴は主柱穴・支柱穴を含め、5本が確認できた。床面からの深さはaが12cm、bが35cm、cが54cm、dが69cm、eが51cmを測る。cの壁面は直かやや袋状になっており、貯蔵穴になるものと思われる。炉は未検出であるが、流失した中央部にあったものと考えられる。周溝は見られない。

覆土は4層に分層が可能である。1層



第38図　C21号住居址（1/60）

は黒褐色土で、締りはなく、粘性も弱い。１～２㎜のローム粒子を多く含む。また、３㎜以下の炭化物を少量含む。２層は暗褐色土で、粒子は細かいが、締りはなく、粘性も弱い。１～３㎜のローム粒子、３㎝以上のロームブロックを多量に含む。また、１～３㎜の炭化物を多量に含む。３層は暗褐色土で、粒子はやや粗く、締りもない。１～２㎜のローム粒子、３㎝以上のロームブロックを少量含む。また、３㎝ほどの炭化物を少量と５～10㎜の焼土粒子をやや多めに含む。４層は黄褐色土で、粒子は粗いが、締っており、粘性は弱い。３～10㎜のローム粒子、３㎝以上のロームブロックを多量に含む。また、５㎜ほどの炭化物を少量含む。

主な遺物には磨石があり、床面より11㎝上で出土している。

37　C22号住居址（第39図、図版29）

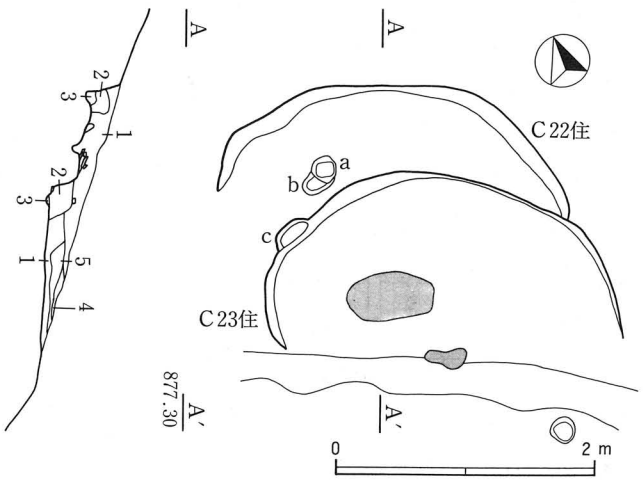
本住居址は、台地の南斜面に位置している。平面形態は円形を呈するものと考えられるが、南半を流失している。C23号住居址と重複しており、本址の方が新しい。規模は長径277㎝、短径は不明、壁高は27㎝を測る。長軸方向は不明。柱穴は主柱穴・支柱穴を含め、３本が確認できた。床面からの深さはａが27㎝、ｂが14㎝、ｃが15㎝を測る。炉は地床炉で、中央にある。

覆土は５層に分層できる。１層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。１～３㎜のローム粒子を少量含む他、３～５㎝のロームブロックを多量に含む。また、５㎜ほどの炭化物を少量含む。２層は暗褐色土で、粒子は粗く、締りもなく、粘性も弱い。１～３㎜のローム粒子を少量含む他、３～５㎝のロームブロックを多量に含む。ロームが主体で、壁の崩落と考えられる。３層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。２～３㎜のローム粒子を少量含む。４層は焼土層で、赤褐色を呈する。粒子は粗く、締りもなく、粘性も弱い。１～３㎜のローム粒子、１㎝以下のロームブロックを少量含む。また、１～３㎜の炭化物を多量に含む。５層も焼土層で、赤褐色を呈する。粒子は細かいが、締りはなく、粘性は弱い。１～３㎜のローム粒子を多量に含む他、５㎝以下のロームブロックを少量含む。また、１～３㎜の炭化物を少量含む。

38　C23号住居址（第39図、図版29）

本住居址は、台地の南斜面に位置している。平面形態は円形を呈するものと考えられるが、南半を流失している。C22号住居址と重複しており、本址の方が古い。規模は長径271㎝、短径は不明、壁高は20㎝を測る。長軸方向は不明。柱穴は主柱穴・支柱穴を含め、１本が確認できた。床面からの深さは35㎝を測る。炉は地床炉で、中央にある。周溝は見られない。

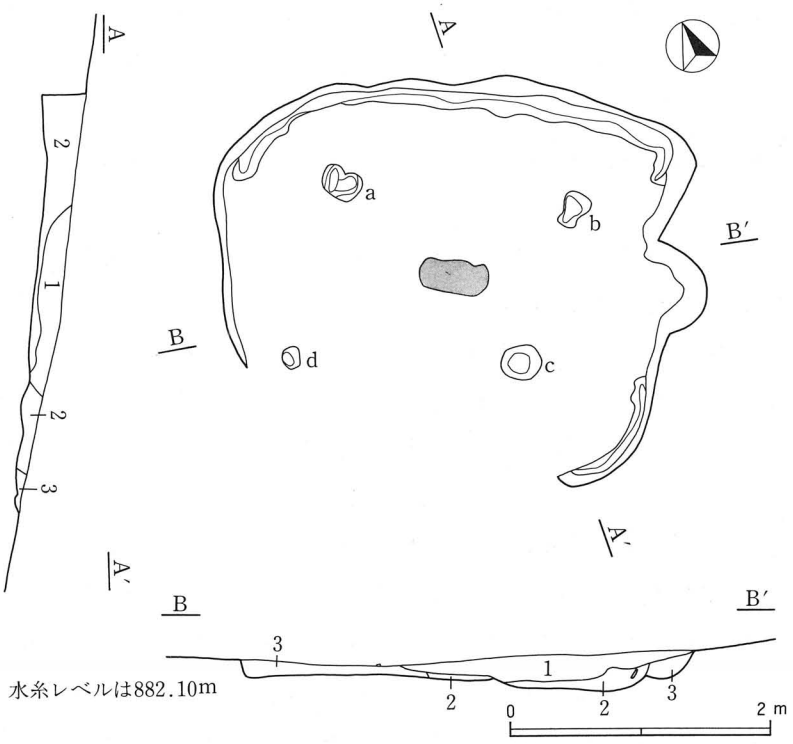
覆土は３層に分層できる。１層は暗褐色土で、粒子は細かいが、締りはなく、粘性は弱い。１～３㎜のローム粒子を多量に含む他、５㎜ほどのロームブロックを少量含む。また、１～３㎜の炭化物を少量含む。２層は暗褐色土で、粒子は細かいが、締りはなく、粘性は弱い。１～３㎜のローム粒子、５㎜以下のロームブロックを多量に含む。また、５㎝ほどの炭化物を少量含むが、炭化物粒子は多く含まれている。３層は淡い褐色土で、粒子は細かく、締っているが、粘性は弱い。１㎜ほどのローム粒子を多量に含む。



第39図　C22・23号住居址（1/60）

39　B24号住居址（第40図、図版30－１）

本住居址は、B区の南西隅にあり、斜面になるため一部のトレンチ調査により遺構確認を行っただけで残っていた箇所である。C区の南斜面で遺構が確認されたことにより、トレンチの周辺を拡張し検出された。平面形態は不整形を呈する。規模は長径380cm、短径310cm、壁高28cmを測る。長軸方向は不明。床面は、凹凸が激しく荒れている。主柱穴はａ～ｄの４本が考えられる。床面からの深さはａが21cm、ｂが31cm、ｃが19cm、ｄが22cmを測る。炉は地床炉で、中央にある。周溝は北壁と南東隅に認められる。



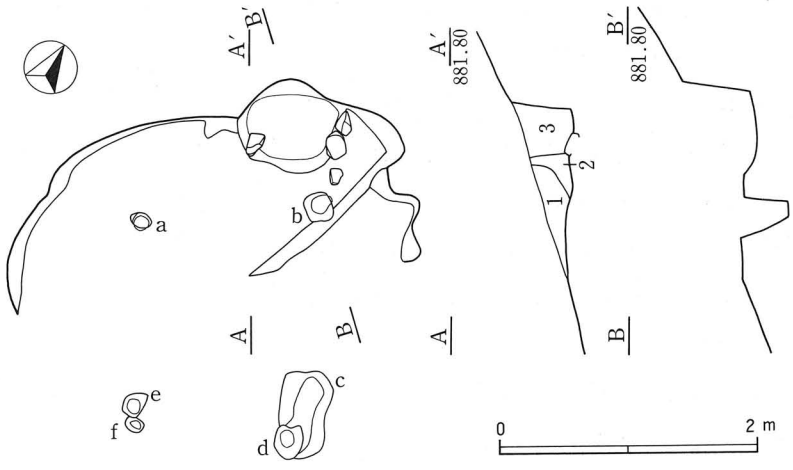
第40図　B24号住居址（1/60）

覆土は３層に分層できる。１層は黒褐色土で、粒子は細かいが、締りはなく、粘性も弱い。１㎜以下のローム粒子、１cm以下のロームブロックを少量含む。また、中央付近では、焼土粒子も若干混入する。２層は暗褐色土で、粒子は細かいが、締りはなく、粘性も弱い。１㎜以下のローム粒子、１cm以下のロームブロックを少量含む。３層は黄褐色土で、粒子は細かいが、締りはなく、粘性も弱い。２㎜以下のローム粒子、３cm以下のロームブロックを多量に含む。

40　B25号住居址（第41図、図版30－２）

本住居址は、台地の南斜面にあり、前年に調査を行ったB区とB′区の間に位置する。平面形態は円形を呈するものと考えられるが、南半を流失している。土坑と重複し、土坑が新しいと思われる。東西方向にクラックが入っている。規模は長径325cm、短径は不明、壁高は46cmを測る。長軸方向は不明。柱穴は主柱穴・支柱穴を含め、６本が確認できた。床面からの深さはａが37cm、ｂが35cm、ｃが43cm、ｄが65cm、ｅが69cm、ｆが66cmを測る。炉は未検出である。周溝も見られない。

覆土は３層に分層できる。１層は黒褐色土で、粒子は細



第41図　B25号住居址（1/60）

かく、締りもあるが、粘性は弱い。1㎜以下のローム粒子、5㎜以下のロームブロックを少量含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、締っており、粘性も強い。1㎜以下のローム粒子を多く含む他、2㎝以下のロームブロックを少量含む。3層は暗黄褐色土。

(2) 方形柱穴列

方形柱穴列は、A区で1棟、B・C区で19棟の、計20棟が検出されている。検出されたのは、台地のほぼ平坦になっている箇所で、その外側である、台地の平坦面から斜面にかかる位置に住居址がある。

本文及び表における、記述の仕方については、以下の基準によった。

規　模

柱穴数の多い辺を長軸とし、左右の短辺の柱穴中央までの長さを計測している。同じ様に柱穴数の少ない方を短軸とし、左右の長辺の柱穴中央までの長さを計測している。計測した数値によっては、長軸と短軸の長さが逆転している例もある。計測場所については、柱穴の底面中央を基準としている。柱穴によっては柱痕の検出されたものもあるので、柱痕の中心から中心までを計測すればよいが、柱痕の検出されない柱穴もあるので、統一するため同じ計測方法を取っている。壁が大幅に崩れていることが明らかな場合は、推定の数値を示してある。

なお、方形柱穴列の形態や規模は、地割れによって変ってしまったと考えられるものも多いが、特に考慮をせずそのまま計測している。

柱穴数

柱穴の数を長軸、短軸について掲載している。建物跡の規模をいう場合に、柱から柱までを1間として□間×□間とする言い方もあるが、本遺跡の場合平行する2辺の間の辺が外側に張り出しているため、柱穴の本数で表現している。

各柱穴の形態

平面形・断面形は、発掘調査でのメモによっており、図示した平面図及び断面図と必ずしも一致していない。

本遺跡で検出された方形柱穴列すべてのものについて、北西隅を基点として柱穴にａｂｃ順に番号を付けており、特に長辺から、あるいは短辺からとなっていない。

阿久尻遺跡で検出された方形柱穴列について、次の様な調査方法を取った。

①平面で各ピットに柱痕が有るかを確認する。

②柱痕が確認されたら、その平面形を図化した後、ピットを柱痕の中央が通るように半截し断面を図化する。また、この段階で柱痕が確認できなかった時には、ピットの覆土を縦に5～10㎝の間隔でスライスし、柱痕が確認できた段階で断面図を作成する。

特に平面で柱痕を確認できないものについて、覆土のスライスという方法で柱痕の確認を行ったが、平成2年度の調査では、断面で柱痕が確認できた時点で断面図を作成し、残りを全掘するという方法をとった。しかし、柱痕が二つ存在するピットがあることで分かるように、その後もスライスを継続していけば、違うピットが検出された可能性がある。そのため、平成3年度の調査では柱痕が確認された後もスライスを継続して行なっている。

1　A1号方形柱穴列（第42図、図版31－1）

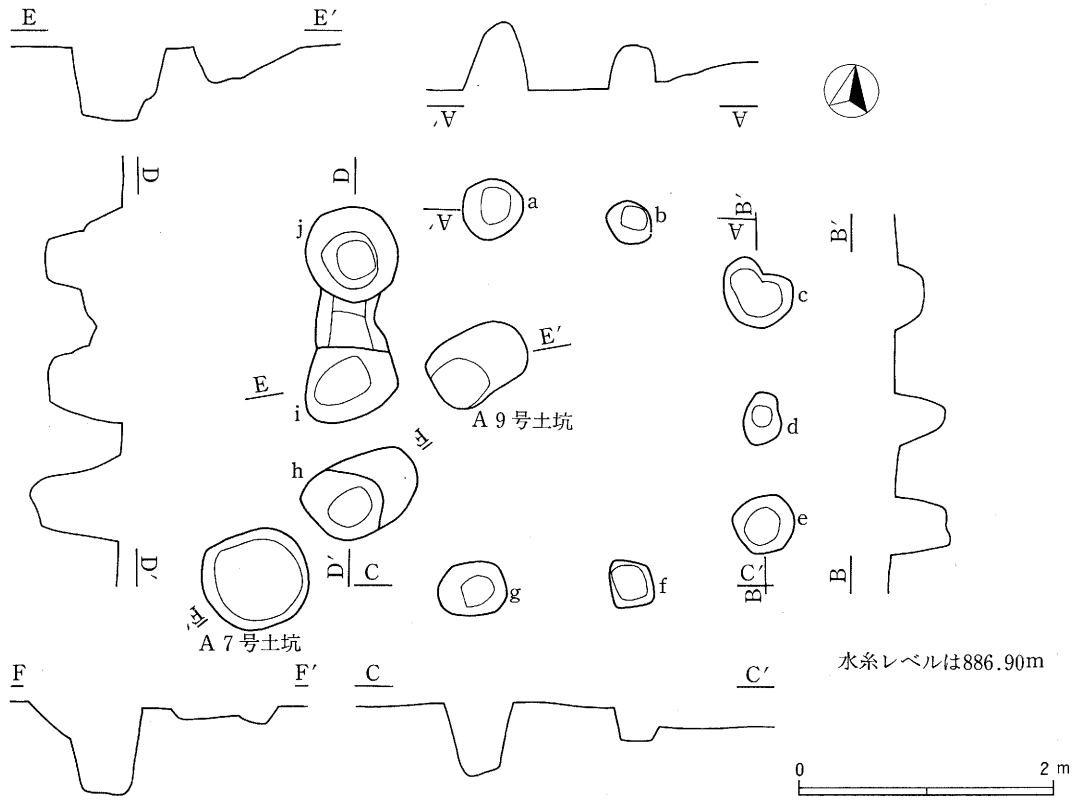
A区の平坦面はほぼ中央にある。A区唯一の方形柱穴列である。長辺3本、短辺2本の柱穴からなる。規模は、長軸300cm、短軸320cmを測る。長軸方向は、N－8°－Wを指す。当初、土坑として扱っており、それぞれに土坑番号を付していたが、B区の調査で方形柱穴列が検出されたことにより、土坑の配置を再検討し、存在が明かとなった。

a柱穴　北辺にある。平面形態は円形を呈する。底面は平でなく、先細りとなっている。規模は平面長径48cm、平面短径48cm、底面長径30cm、底面短径23cm、深さ52cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層。5cm程のロームブロックが混入する他、ローム粒子が均一に入る。良く締っているが、粘性に乏しい。調査開始当初はA34号土坑として扱っていた。

b柱穴　北辺にある。平面形態は円形を呈する。底面は北側に寄っており、北壁が直立する。規模は平面長径38cm、平面短径34cm、底面長径20cm、底面短径18cm、深さ33cmを測る。調査開始当初はA35号土坑として扱っていた。

c柱穴　東辺にある。平面形態は2つが重複しており、ハート型を呈する。西側が新しく、東側が古い。西側の新しい柱穴の方が一段低くなっている。規模は平面長径60cm、平面短径54cm、底面長径42cm、底面短径35cm、深さ20cmを測る。覆土は、東側は暗褐色土、西側は黒色土の単一層。調査開始当初はA36号土坑として扱っていた。

d柱穴　東辺にある。平面形態は楕円形を呈する。南北の壁の傾斜は緩い。規模は平面長径43cm、平面短径30cm、底面長径17cm、底面短径16cm、深さ40cmを測る。覆土は黒色土の単一層。調査開始当初はA37号土坑として扱っていた。



第42図　A1号方形柱穴列・A7・A9号土坑（1/60）

e柱穴　東辺にある。平面形態は円形を呈する。底面は中央にある。規模は平面長径49cm、平面短径47cm、底面長径31cm、底面短径26cm、深さ42cmを測る。覆土は黒色土の単一層。調査開始当初はA38号土坑として扱っていた。

f柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は平面長径38cm、平面短径33cm、底面長径28cm、底面短径24cm、深さ25cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層。ローム粒子の混入多い。良く締っており、粘性も有る。調査開始当初はA39号土坑として扱っていた。

g柱穴　南辺にある。平面形態は楕円形を呈する。規模は平面長径55cm、平面短径41cm、底面長径27cm、底面短径23cm、深さ57cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層。微細なローム粒子を混入する。硬く、良く締っている。中層にロームブロックが入るが、単一な層と理解される。調査開始当初はA3号土坑として扱っていた。

h柱穴　西辺にある。平面形態は楕円形を呈する。内側の中段に稜があり、広がっている。規模は平面長径92cm、平面短径62cm、底面長径35cm、底面短径29cm、深さ72cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層。微細なローム粒子が均一に入る他、3～10cmのロームブロックを含む。調査開始当初はA4号土坑として扱っていた。

i柱穴　西辺にある。平面形態は楕円形を呈する。規模は平面長径80cm、平面短径62cm、底面長径47cm、底面短径32cm、深さ56cmを測る。覆土は黒褐色土の単一層。下層はやや褐色味が強くなり、暗褐色となるが、徐々に変化しており、分層は難しい。調査開始当初はA5号土坑として扱っていた。北側でjと連結する。

J柱穴　西辺にある。平面形態は円形を呈する。規模は平面長径76cm、平面短径72cm、底面長径31cm、底面短径30cm、深さ63cmを測る。覆土は暗褐色土。微細なローム粒子が均一に入る他、5cm程のロームブロックが中層から下層にかけて入る。分層は難しく、単一層と理解される。調査開始当初はA6号土坑として扱っていた。南側でiと連結する。

2　BI号方形柱穴列（第43図、図版31－2、32・33）

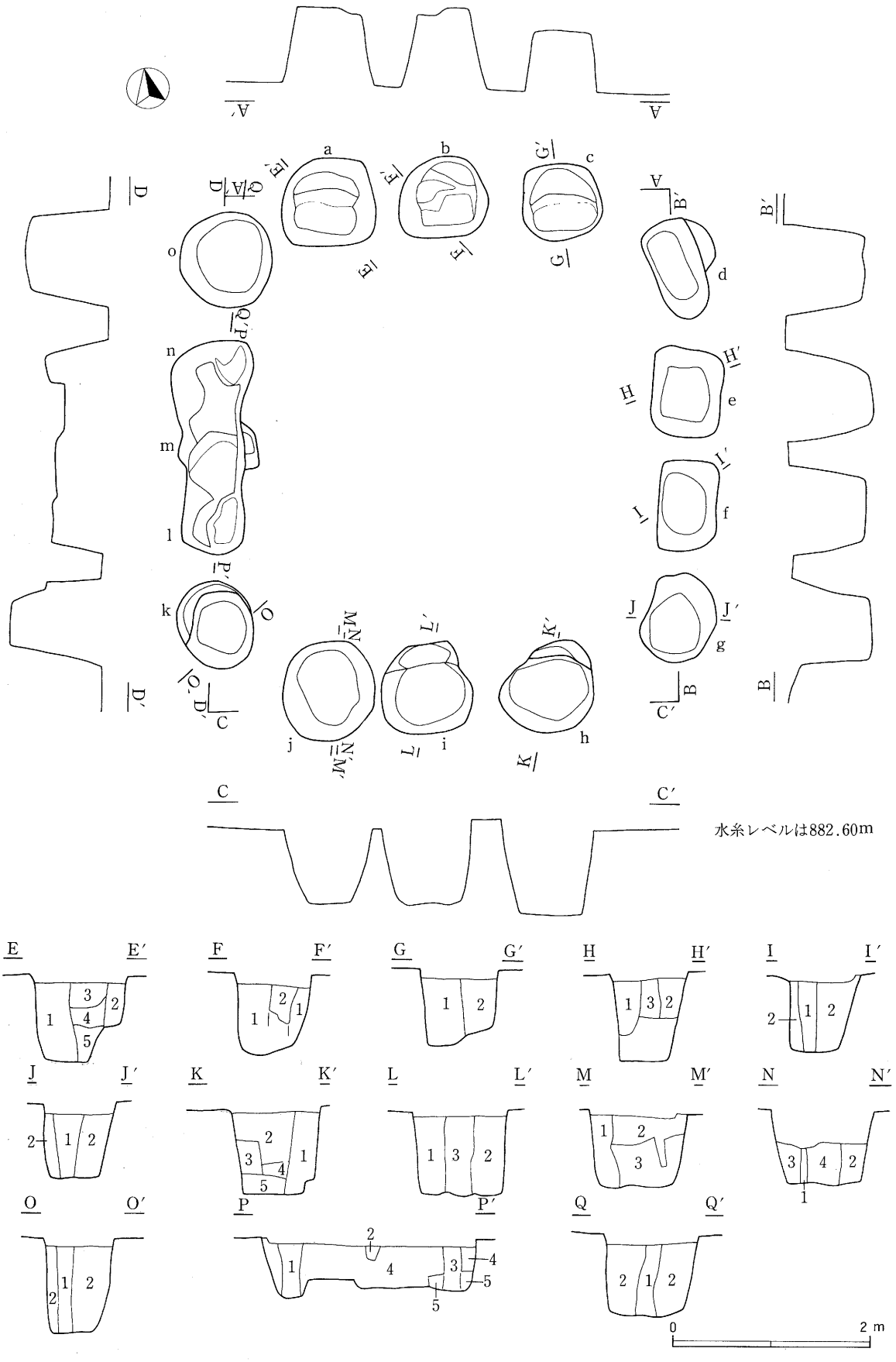
東西に延びる台地の平坦面の南側に位置する。長辺4本、短辺3本の柱穴からなる。規模は、長軸510cm、短軸470cmを測る。長軸方向は、N－15°－Eを指す。表中ではB1号方形柱穴列の長辺が4となっているが、片側は5つの柱穴が存在する。1つの柱穴内に柱が2本あった可能性もある。柱痕の数が同じとなる可能性もあるが、確認できていない。

a柱穴　北辺にある。平面形態は方形を呈する。底面は二段になっており、内側が深い。壁はほぼ直立しており、特に内側である南壁は垂直に近い。規模は平面長径100cm、平面短径90cm、底面長径64cm、底面短径32cm、深さ82cmを測る。覆土は5層に分層が可能である。①柱痕と考えられる。暗褐色土～黒褐色土。②暗褐色土。③暗褐色土。④明褐色土。⑤暗褐色土。柱痕は2個が東西の壁際にある。覆土は締りがなく、中央の硬く良く締った土と明確に区別できる。

b柱穴　北辺にある。平面形態は方形を呈する。規模は平面長径94cm、平面短径92cm、底面長径53cm、底面短径30cm、深さ84cmを測る。覆土は2層に分層が可能である。①柱痕。黒褐色土。②暗褐色土。柱痕は2個が南北壁際に寄る。

c柱穴　北辺にある。平面形態は方形を呈する。規模は平面長径80cm、平面短径80cm、底面長径64cm、底面短径28cm、深さ73cmを測る。覆土は2層に分層が可能である。①暗褐色土。②暗褐色土。柱痕か切り合いかは不明。

d柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。断面は西壁と北壁が直立する。規模は平面長径104cm、平面短径56cm、底面長径74cm、底面短径33cm、深さ84cmを測る。覆土は1～5cmのロームブロックが全体に



第43図　B１号方形柱穴列（1/60）

入る。明確な柱痕は検出できなかったが、掘り下げ途中では中央の西壁寄りにいくぶん黒褐色～黒色でロームブロックのない個所が見受けられた。線引きは出来なかったが、柱痕のあった可能性がある。

e柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。壁はほぼ直立する。規模は平面長径92cm、平面短径75cm、底面長径56cm、底面短径50cm、深さ86cmを測る。覆土は3層に分層が可能である。①柱痕と考えられる。暗褐色土。②柱痕と考えられる。暗褐色土。③暗褐色土。柱痕は2個が南北壁際にある。

f柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。壁は内側である西壁が特に直立する。規模は平面長径94cm、平面短径62cm、底面長径66cm、底面短径46cm、深さ80cmを測る。覆土は2層に分層が可能である。①柱痕と考えられる。暗褐色土。②暗褐色土。柱痕は西壁際に寄る。

g柱穴　東辺にある。平面形態は南北に長い長円形、底面は円形を呈する。壁は西壁と南壁が直立する。規模は平面長径92cm、平面短径72cm、底面長径62cm、底面短径52cm、深さ84cmを測る。覆土は2層に分層が可能である。①柱痕と考えられる。暗褐色土。炭化物が混入する。②暗褐色土。

h柱穴　南辺にある。平面形態は東西に長い長円形を呈する。内側の北壁に張り出しがあるが、底面までは至っていない。規模は平面長径95cm、平面短径94cm、底面長径86cm、底面短径62cm、深さ98cmを測る。覆土は5層に分層が可能である。①柱痕と考えられる。黒褐色土。②暗褐色土。③黒褐色土。④暗褐色土。⑤明褐色土。①③は焼土ブロック・炭化物が混入する。柱痕は北壁際に寄る。径30cmの柱痕がある。

i柱穴　南辺にある。平面形態は、北側が張り出す隅丸三角形を呈する。底面は東西壁が張り出しており、東西に長い隅丸長方形の穴と、北側にある円形の穴が重複している感じ。規模は平面長径92cm、平面短径92cm、底面長径82cm、底面短径72cm、深さ88cmを測る。覆土は3層に分層が可能である。①柱痕と考えられる。黒褐色土②柱痕と考えられる。暗褐色土～黒褐色土。③暗褐色土。覆土全体に焼土ブロックが入る。柱痕は2個が南北壁際に寄る。

j柱穴　南辺にある。平面形態はやや南北が長い長円形を呈する。壁は内側である北壁が直立する。規模は平面長径100cm、平面短径98cm、底面長径78cm、底面短径59cm、深さ78cmを測る。覆土は観察した面により、3～4層に分層が可能である。1：①柱痕と考えられる。黒褐色土。②暗褐色土。③明褐色土。2：①柱痕と考えられる。黒褐色土。②柱痕と考えられる。暗褐色土。③暗褐色土。④暗褐色土。

k柱穴　西辺にある。平面形態は南北に長い長円形。底面は円形を呈する。西壁、北壁の中程に段を有する。東壁はほぼ直立する。規模は平面長径90cm、平面短径76cm、底面長径52cm、底面短径51cm、深さ92cmを測る。覆土は2層に分層が可能である。①暗褐色土。炭化物が混入する。②暗褐色土。

l柱穴　西辺にある。平面形態は方形を呈する。底面は東半分が一段低くなっている。規模は平面長径64cm、平面短径56cm、底面長径56cm、底面短径42cm、深さ57cmを測る。覆土は3層に分層が可能である。③柱痕と考えられる。黒褐色土。④暗褐色土。⑤黒褐色土。径22cmの柱痕が、東壁から6cm離れて立つ。北側でmと連結する。

m柱穴　西辺にある。平面形態は方形を呈する。底面は南側が一段低くなる。一段高くなっている個所は、ほぼ同一レベルでnの底面と繋がっている。規模は平面長径68cm、平面短径58cm、底面長径58cm、底面短径60cm、深さ53cmを測る。覆土は2層に分層が可能である。②柱痕と考えられる。黒褐色土。④暗褐色土。径18cmの柱痕が、東壁から7cm離れて立つ。南が1、北がnと連結する。

n柱穴　西辺にある。平面形態は円形を呈する。外側である西壁はゆるい傾斜で底面に至るが、北壁、東壁は直立する。規模は平面長径110cm、平面短径86cm、底面長径80cm、底面短径62cm、深さ65cmを測る。覆土は2層に分層が可能である。①柱痕と考えられる。黒褐色土。④暗褐色土。径30cmの柱痕が、東に寄って立つ。

南がmと連結する。

o柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。西壁がやや傾斜する他は直立している。規模は平面長径97cm、平面短径94cm、底面長径74cm、底面短径68cm、深さ86cmを測る。覆土は2層に分層が可能である。①柱痕と考えられる。暗褐色土。②暗褐色土。径17cmの柱痕が、東壁中央に寄る。

C区の調査において、東西に延びるクラックが検出されたが、本址の柱穴に見られた段差のいくつかは、建て替えなどではなく断層によるものの可能性もある。

3　B2号方形柱穴列（第44図、図版34）

東西に延びる台地の平坦面に位置し、B1号方形柱穴列の北側にある。長辺4本、短辺3本の柱穴からなる。規模は、長軸420cm、短軸370cmを測る。長軸方向は、N－20°－Eを指す。

a柱穴　北辺にある。平面形態は東西に長い長円形を呈する。壁は西壁、南壁が直立する。規模は平面長径84cm、平面短径80cm、底面長径70cm、底面短径52cm、深さ42cmを測る。覆土は黒褐色土。上層はやや暗褐色気味であるが、漸次変化し、分層は難しい。1～2cmのロームブロックが全体に入る。壁際に1cm前後の炭が幾つか見られる。柱痕は検出されなかった。bと連結する。

b柱穴　北辺にある。平面形態は円形を呈する。底面はaより一段低い。西壁はaと連結する。それ以外の壁は直立する。規模は平面長径69cm、平面短径57cm、底面長径43cm、底面短径31cm、深さ56cmを測る。覆土は黒褐色土。上層はやや暗褐色気味であるが、漸次変化し、分層は難しい。1～2cmのロームブロックが全体に入る。壁際に1cm前後の炭が幾つか見られる。柱痕は検出されなかった。

c柱穴　北辺にある。平面形態は円形を呈する。規模は平面長径83cm、平面短径75cm、底面長径60cm、底面短径54cm、深さ33cmを測る。覆土は2cm程のロームが混入する。また、上面にロームを貼ったようにロームブロックの多い層があるが、分層は難しい。柱痕は検出されなかった。

d柱穴　東辺にある。平面形態は西壁が東壁よりも長い隅丸の台形を呈する。西壁がほぼ直立する。規模は平面長径92cm、平面短径81cm、底面長径65cm、底面短径49cm、深さ55cmを測る。覆土は黒褐色土。1cm前後のロームブロックが稀に入る。遺物は黒曜石チップ数十点が出土している。柱痕は検出されなかった。南でeと連結するが、境界は明確である。

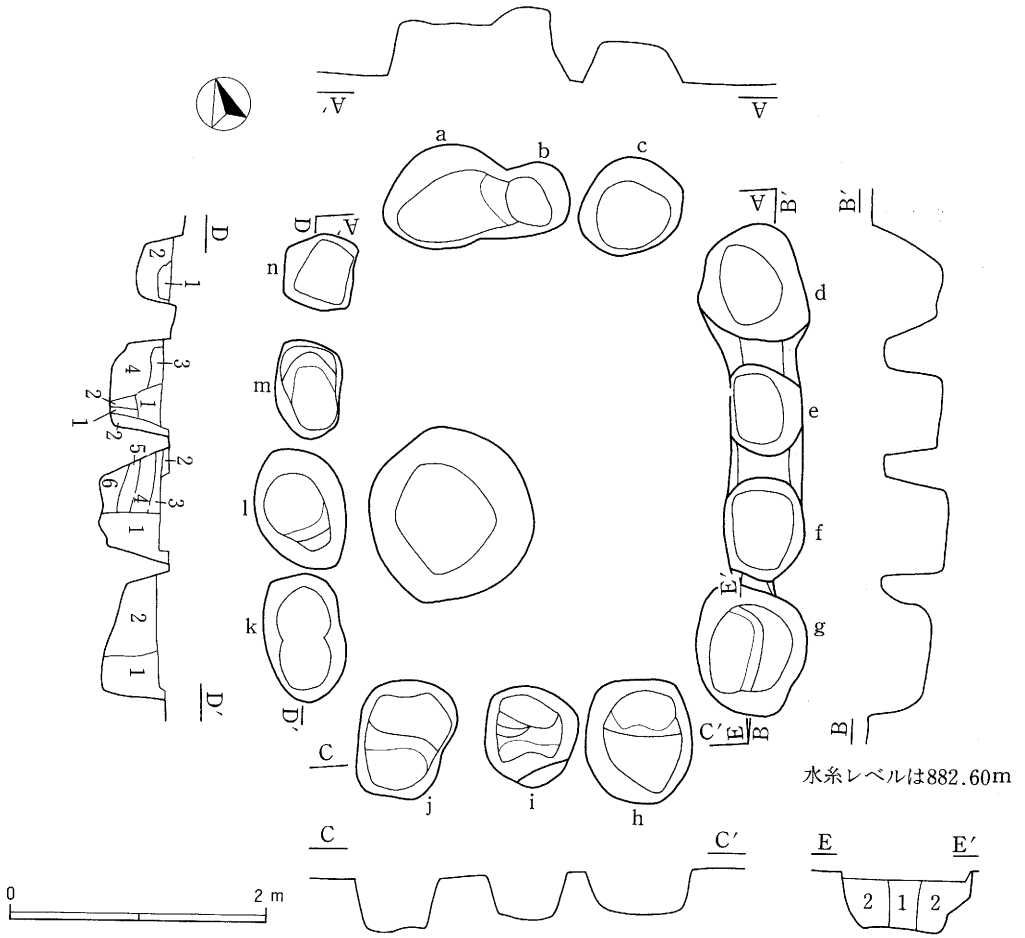
e柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。壁は4面とも直立する。規模は平面長径73cm、平面短径58cm、底面長径58cm、底面短径40cm、深さ55cmを測る。覆土は黒褐色土。1cm以下のロームブロックが稀に入る。柱痕は検出されなかった。北壁がd、南壁がfと連結するが、境界は明確である。

f柱穴　東辺にある。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。壁は4面とも直立する。規模は平面長径82cm、平面短径64cm、底面長径63cm、底面短径50cm、深さ61cmを測る。覆土は黒褐色土。1cm以下のロームブロックが稀に入る。柱痕は検出されなかった。北壁がe、南壁がgと連結するが、境界は明確である。

g柱穴　東辺にある。平面形態は円形、底面は西壁側が一段低くなっており、南北に長い長円形を呈する。西壁が直立する。規模は平面長径100cm、平面短径90cm、底面長径68cm、底面短径66cm、深さ50cmを測る。覆土は黒褐色土。覆土上層北側は10cm以上にわたってロームを貼った感じでロームブロックが多い。柱痕は中央にある。確認面で、柱を支えるように礫が斜に立つ。

h柱穴　南辺にある。平面形態は南北に長い長円形を呈する。底面は北側がやや低くなっており、2つが重なった感じである。規模は平面長径100cm、平面短径85cm、底面長径83cm、底面短径60cm、深さ37cmを測る。覆土は黒褐色土。1cm以下のロームブロックが稀に入る。柱痕は検出されなかった。

i柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。西壁中央に張り出しがあり、南北に2つあるようにも



第44図　B２号方形柱穴列（1/60）

見える。内側である北壁は直立する。規模は平面長径75cm、平面短径72cm、底面長径48cm、底面短径45cm、深さ37cmを測る。覆土は黒褐色土。１cm以下のロームブロックが稀に入る。柱痕は検出されなかった。

ｊ柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。底面は二段となっており、外側である南側が深い。規模は平面長径95cm、平面短径75cm、底面長径75cm、底面短径60cm、深さ40cmを測る。覆土は黒褐色土。１cm以下のロームブロックが稀に入る。柱痕は検出されなかった。

ｋ柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸長方形から長円形を呈する。壁はほぼ直立するが、特に東壁と西壁が直立。規模は平面長径103cm、平面短径62cm、底面長径83cm、底面短径43cm、深さ64cmを測る。覆土は３～５cmのロームブロックの混入が多い。柱痕は南壁際にある。

ｌ柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸三角形を呈する。壁は内側である東壁が直立気味である。規模は平面長径103cm、平面短径72cm、底面長径48cm、底面短径45cm、深さ70cmを測る。覆土は12～13cm程の厚さで、ロームブロックの多い層、ローム粒子の多い層と交互に見られるが、特に叩き固めた感じはない。柱痕は南壁際にある。

ｍ柱穴　西辺にある。平面形態は長円形を呈する。南壁は直立する。規模は平面長径78cm、平面短径52cm、底面長径51cm、底面短径35cm、深さ78cmを測る。柱痕部にはロームブロックは入らない。柱痕は南壁際にある。

ｎ柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。東壁と南壁は直立する。規模は平面長径60cm、平面短径54cm、底面長径47cm、底面短径41cm、深さ82cmを測る。

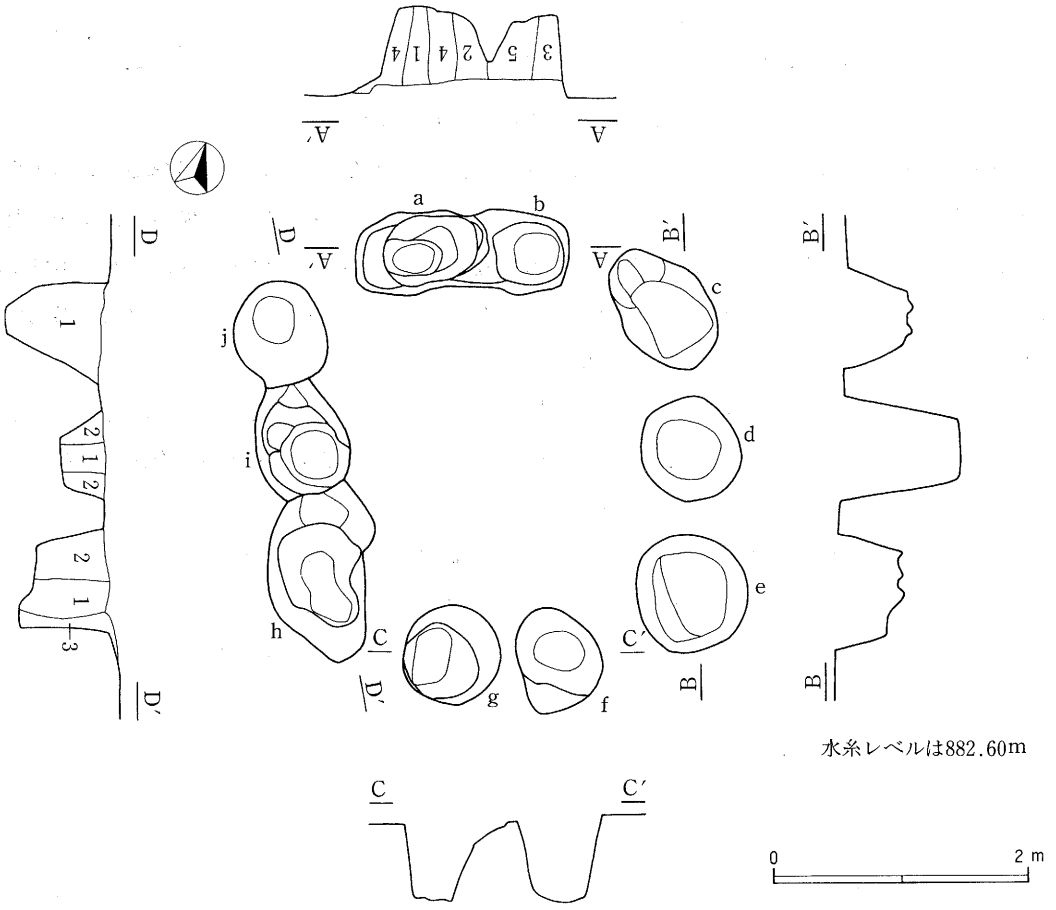
4　B３号方形柱穴列（第45図、図版35）

東西に延びる台地の平坦面中央に位置し、B２号方形柱穴列とB６号住居址の間にある。長辺３本、短辺２本の柱穴からなる。規模は、長軸320cm、短軸290cmを測る。長軸方向は、N－16°－Eを指す。

a柱穴　北辺にある。平面形態は東西に長い長円形を呈する。底面は北壁と東壁及び南壁の一部が一段高くなっており、南西隅が長円形で一段低くなっている。東壁は傾斜してbと連結するが、他の３壁は直立。規模は平面長径106cm、平面短径65cm、底面長径33cm、底面短径23cm、深さ60cmを測る。覆土は、３層に分層が可能である。①柱痕と考えられる。暗褐色土で、２cmほどのロームブロック、５mm以下のローム粒子を含むが、量は少ない。②柱痕と考えられる。暗褐色土で、２cm以下のロームブロックを混入するが、量は少ない。４層は暗褐色土で、３cm以下のロームブロックの混入が多い。柱痕は２個検出されている。

b柱穴　北辺にある。平面形態は方形を呈する。西壁は傾斜しており、上部でaと連結する。北・東・南の３壁は直立する。規模は平面長径62cm、平面短径58cm、底面長径35cm、底面短径33cm、深さ64cmを測る。覆土は２層に分層が可能である。③柱痕と考えられる。黒褐色土で、５mmから１cm以下のロームブロックを含むが、量は少ない。⑤黒褐色土で、１cmほどのロームブロックの混入が多く、３層と区別される。柱痕は東壁際にある。

c柱穴　東辺にある。平面形態は北西側が張り出す卵形を呈する。底面に小ピットが３個見られる。規模は平面長径106cm、平面短径72cm、底面長径61cm、底面短径47cm、深さ50cmを測る。覆土は２～３mmのロームブロックを混入する他、数mmのローム粒子を混入する。全体に黒褐色であるが、ローム粒子の混入が多く、明



第45図　B３号方形柱穴列（1/60）

るく感じる。

d柱穴　東辺にある。平面形態は円形、底面形は隅丸方形を呈する。壁はほぼ直立する。規模は平面長径83cm、平面短径76cm、底面長径52cm、底面短径47cm、深さ91cmを測る。覆土は2～3㎜のロームブロックを混入する他、数㎜のローム粒子を混入する。全体に黒褐色であるが、ローム粒子の混入が多く、明るく感じる。

e柱穴　東辺にある。平面形態は円形、底面形は隅丸方形を呈する。底面に小ピット4個を有する。規模は平面長径93cm、平面短径87cm、底面長径70cm、底面短径46cm、深さ50cmを測る。覆土は2～3㎜のロームブロックを混入する他、数㎜のローム粒子を混入する。全体に黒褐色であるが、ローム粒子の混入が多く、明るく感じる。

f柱穴　南辺にある。平面形態はやや東西が長い長円形を呈する。北壁は直立するが、南壁は傾斜をもつ。南壁上面の広がりは、崩れによるものか。規模は平面長径80cm、平面短径62cm、底面長径40cm、底面短径31cm、深さ68cmを測る。覆土は暗褐色土。3cm程のロームブロックを全体に混入するが、量は少ない。遺物は土器片が1点出土している。

g柱穴　南辺にある。平面形態は円形を呈する。底面も円形で、西に寄っている。北壁・東壁の広がりは、崩れによるものか。規模は平面長径78cm、平面短径76cm、底面長径49cm、底面短径28cm、深さ62cmを測る。覆土は暗褐色土。5㎜～1cm大のロームブロックが全体に混入するが、量は多くない。

h柱穴　西辺にある。平面形態は北東部が崩れており、不整形である。東壁・南壁は直立するが、北壁は上方でなだらかに傾斜し、iと連結する。南北2個のピットの合わさったものか。規模は平面長径85cm、平面短径65cm、底面長径60cm、底面短径28cm、深さ75cmを測る。柱痕は南壁際にある。

i柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。底面は南東に寄っており、円形を呈する。北壁は緩やかに傾斜し、jと連結する。南壁も直立した後、hと連結する。規模は平面長径73cm、平面短径68cm、底面長径38cm、底面短径37cm、深さ35cmを測る。柱痕は東壁際に寄る。

j柱穴　西辺にある。平面形態は円形を呈する。底面は北側に寄っており、円形を呈する。南壁が傾斜して、iと連結する。他の3壁は直立する。規模は平面長径84cm、平面短径72cm、底面長径38cm、底面短径33cm、深さ77cmを測る。覆土は暗褐色土で、下方にいくにしたがって黒色土となる。ロームブロックの混入は1cm程のものが見られ、上層がやや大きいが、量は他の穴に比して僅かである。

5　B4号方形柱穴列（第46図、図版37）

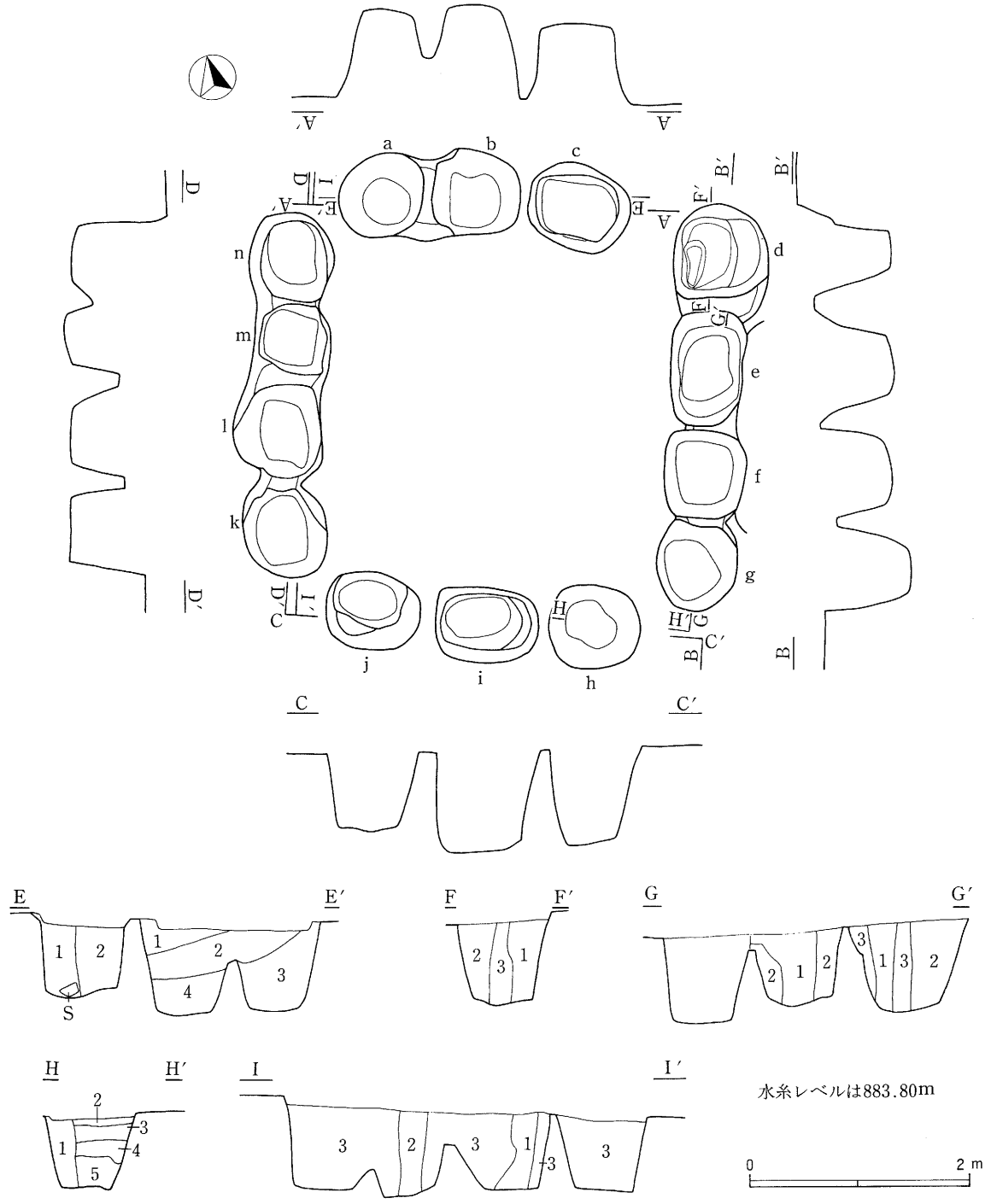
B区の中央に位置する。長辺4本、短辺3本の柱穴からなる。規模は、長軸390cm、短軸380cmを測る。長軸方向は、N－17°－Eを指す。

a柱穴　北辺にある。平面形態は平面形・底面形とも円形を呈する。東壁がbと連結する。規模は平面長径80cm、平面短径78cm、底面長径45cm、底面短径42cm、深さ82cmを測る。

b柱穴　北辺にある。平面形態は平面形・底面形とも方形を呈する。南壁がほぼ直立する。西壁がaと連結する。規模は平面長径80cm、平面短径76cm、底面長径47cm、底面短径47cm、深さ90cmを測る。

c柱穴　北辺にある。平面形態は平面形・底面形とも長方形を呈する。壁は4面とも直立する。規模は平面長径94cm、平面短径80cm、底面長径68cm、底面短径52cm、深さ75cmを測る。柱痕の下と思われる箇所の底面に赤化した礫が存する。

d柱穴　東辺にある。平面形態は平面形・底面形とも方形を呈する。底面は段があり、三段となっている。西壁はほぼ直立する。東壁側が浅く、西壁際が深い。南壁がeと連結する。規模は平面長径85cm、平面短径85cm、底面長径60cm、底面短径40cm、深さ81cmを測る。



第46図　B 4 号方形柱穴列（1/60）

e 柱穴　東辺にある。平面形態は平面形・底面形とも長方形を呈する。西壁はほぼ直立する。北壁がｄ、南壁がｆと連結する。規模は平面長径106cm、平面短径66cm、底面長径60cm、底面短径44cm、深さ78cmを測る。

f 柱穴　東辺にある。平面形態は平面形・底面形とも方形を呈する。西壁がやや短く、台形に近い。北壁がｅと連結する。規模は平面長径81cm、平面短径73cm、底面長径60cm、底面短径54cm、深さ70cmを測る。

g 柱穴　東辺にある。平面形態は平面形・底面形とも隅丸三角形を呈する。壁はほぼ直立する。規模は平面長径80cm、平面短径74cm、底面長径57cm、底面短径47cm、深さ80cmを測る。

h柱穴　南辺にある。平面形態は北壁は直線的であるが、平面形・底面形とも円形を呈する。北壁はほぼ直立する。規模は平面長径85cm、平面短径78cm、底面長径50cm、底面短径40cm、深さ88cmを測る。覆土は暗褐色土。ローム粒子の混入が多い。下層は5cm大のロームブロックが多く混入するが、上下に分層は難しい。

i柱穴　南辺にある。平面形態は平面形・底面形とも隅丸長方形を呈する。北壁はほぼ直立する。規模は平面長径95cm、平面短径68cm、底面長径60cm、底面短径37cm、深さ92cmを測る。黒褐色土。1～2cm大のロームブロックが全体に入る。ローム粒子の混入は、全体に少ない。断面のスライスを繰返したが、柱痕は検出できなかった。

j柱穴　南辺にある。平面形態は平面形・底面形とも隅丸方形を呈する。北壁はほぼ直立する。規模は平面長径88cm、平面短径72cm、底面長径55cm、底面短径37cm、深さ70cmを測る。覆土は暗褐色土。1cm大のロームブロックが全体に入る。稀に5cm大のロームブロックも見られる。柱痕は検出できなかった。

k柱穴　西辺にある。平面形態は平面形・底面形とも隅丸方形を呈する。壁はほぼ直立する。北壁の上部はlと連結する。規模は平面長径81cm、平面短径76cm、底面長径64cm、底面短径49cm、深さ71cmを測る。覆土は暗褐色土。1～2cm大のロームブロックが全体に入る。ローム粒子の混入も多い。柱痕は検出できなかった。

l柱穴　西辺にある。平面形態は長方形、底面形は台形を呈する。南壁がk、北壁がmと連結する。規模は平面長径86cm、平面短径82cm、底面長径55cm、底面短径45cm、深さ76cmを測る。覆土は暗褐色土。

m柱穴　西辺にある。平面形態は不明であるが、底面形は方形を呈する。南壁がl、北壁がnと連結する。規模は平面長径65cm、平面短径60cm、底面長径52cm、底面短径50cm、深さ85cmを測る。

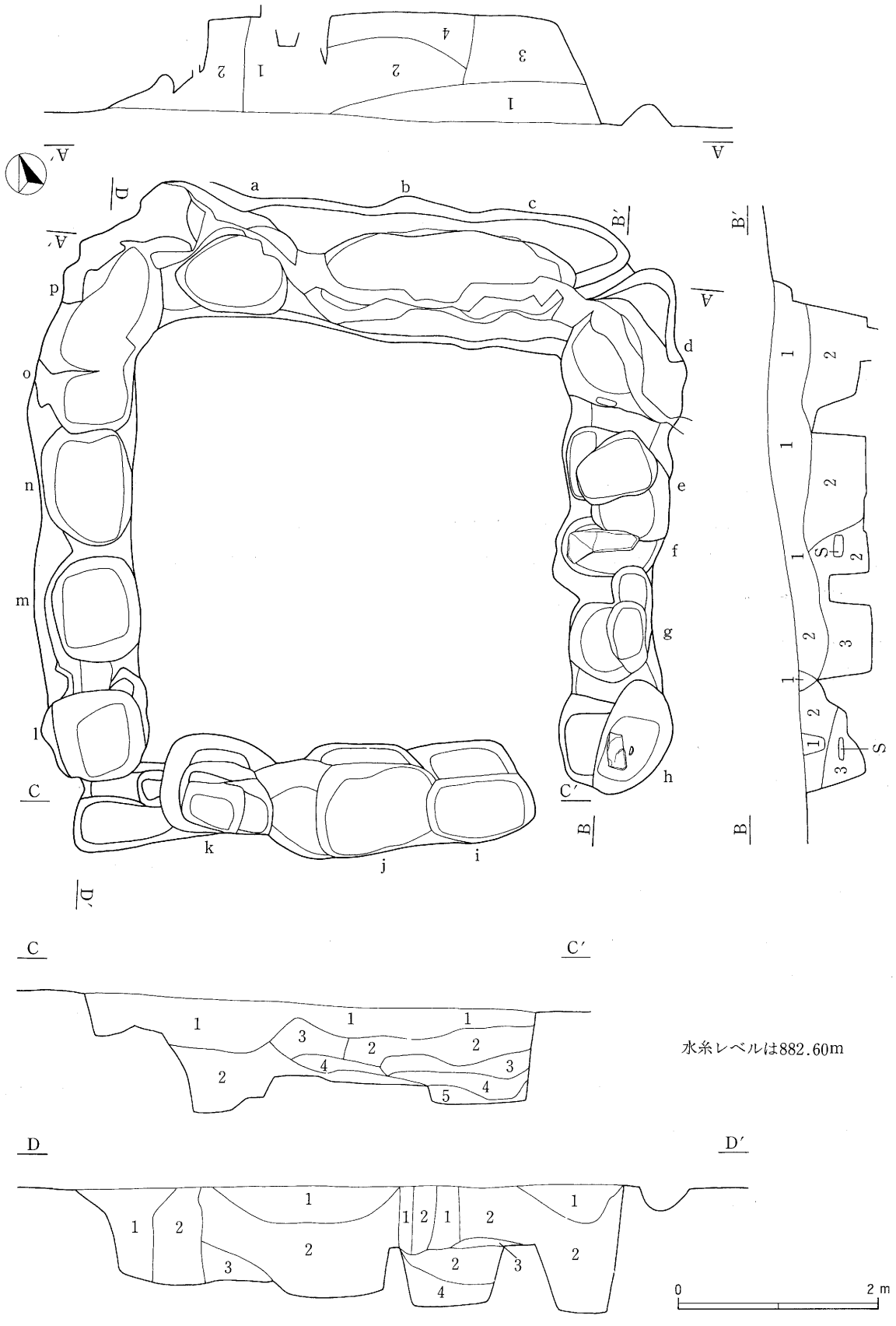
n柱穴　西辺にある。平面形態は不明であるが、底面形は長方形を呈する。南壁がmと連結する。規模は平面長径82cm、平面短径80cm、底面長径57cm、底面短径43cm、深さ83cmを測る。

6　C5号方形柱穴列（第47図、図版38－1）

長辺5本、短辺3本の柱穴からなる。規模は、長軸560cm、短軸530cmを測る。長軸方向は、N－22°－Eを指す。a・bの間にはブリッジがあるが、b・cはつながっている。b・Cは断面で2個の柱穴と考えたが、壁面を観察すると、4本の柱穴があったようにも見受けられる。北辺に5本の柱穴が同時にあったと考えるよりは、b・cの柱穴が立替えられていると考えた方が良いと思われる。東辺のd～hはつながっている。e・f間およびf・g間は、土層断面観察時にはブリッジが認められなかったが、残りを掘り下げてブリッジの痕跡を確認できた。fとhには底面から約25cmの高さに平石が置かれていたが、そのレベルで柱穴の深さは内側が浅く、外側が深くなっていた。おそらく内側の柱穴が新しく、その柱穴の底部に礫を置いたのではないかと考えられる。南辺のi～kはつながっており、ブリッジの痕跡が内側に僅かに残る。また、いずれも内側が1段浅くなっており、東辺と同じく立て替えられたものと考えられる。西辺はl・m間とm・n間はブリッジが残る。n・o・pは壁面に僅かにブリッジの痕跡が見られるがつながっている。底面に僅かに高低差が見られる。pは2つに分れる可能性もある。

a柱穴　北辺にある。覆土は①暗褐色土。5㎜以下のローム粒子を少量含む。②暗褐色土。5㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以上のロームブロックを少量含む。

b・c柱穴　北辺にある。b・cはつながっている。覆土は①黒褐色土。5㎜以下のローム粒子を少量含む他、6cm大の礫を稀に含む。②暗褐色土。5㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以上のロームブロックを稀に含む。③暗褐色土。5㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以上のロームブロックを稀に含む。④黄褐色土。1cmほどのローム粒子を多量に含む他、5cm以上のロームブロックを多量に含む。



第47図　C 5 号方形柱穴列（1/60）

d柱穴　東辺にある。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3㎝以上のロームブロックを多量に含む。また、2㎝程の炭化物を稀に含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5㎝以上のロームブロックを多量に含む。

e柱穴　東辺にある。平面形態は不明である。西壁は直立する。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、7㎝以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3㎝以上のロームブロックを少量含む。

f柱穴　東辺にある。e・f間には内側にわずかにブリッジが残るが、つながっている。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、2㎝以上のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5㎝以下のロームブロックを多量に含む。

g柱穴　東辺にある。底面から25㎝の所に平石をおいている。f・g間には内側にわずかにブリッジが残るがつながっている。覆土は①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、4㎝以下のロームブロックを稀に含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5㎝以下のロームブロックを多量に含む。

h柱穴　東辺にある。覆土は①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む。③暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3㎝以上のロームブロックを多量に含む。

i柱穴　南辺にある。内側と外側で25㎝程の段差がある。外側の深い方に平石がおかれるが、そのレベルが浅い内側のレベルと同じであることから、重複している内側の方が新しいと考えられる。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、4㎝以上のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、4㎝以上のロームブロックを多量に含む。また、1㎝以下の炭化物を少量含む。③黄褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、10㎝以上のロームブロックを多量に含む。④暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、3㎝以下のロームブロックを少量含む。⑤黄褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5㎝以上のロームブロックを多量に含む。

j柱穴　南辺にある。内側である北側が浅い。i～kの間にはブリッジの痕跡が内側にわずかに残る。覆土は①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、5㎝以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、4㎝以下のロームブロックを稀に含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5㎝以上のロームブロックを少量含む。④暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む。

k柱穴　南辺にある。内側である北側が浅い。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、5㎝以上のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5㎝以上のロームブロックを多量に含む。

l柱穴　西辺にある。内側である北側に中場が2ヵ所あり、建て替えが2度行われた可能性もある。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、2㎝以上のロームブロックを少量含む。

m柱穴　西辺にある。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5㎝以下のロームブロックを多量に含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む。③灰黄色土。1㎜以下のローム粒子を稀に含む。④黄褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、10㎝以上のロームブロックを多量に含む。

n柱穴　西辺にある。覆土は①黒褐色土。1㎜以上のローム粒子を多量に含む。②暗褐色土。1㎜以下のロ

ーム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。また、６cm以上の礫を含む。

o柱穴　西辺にある。覆土は①黒褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む。②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む他、３cm以下のロームブロックを稀に含む。

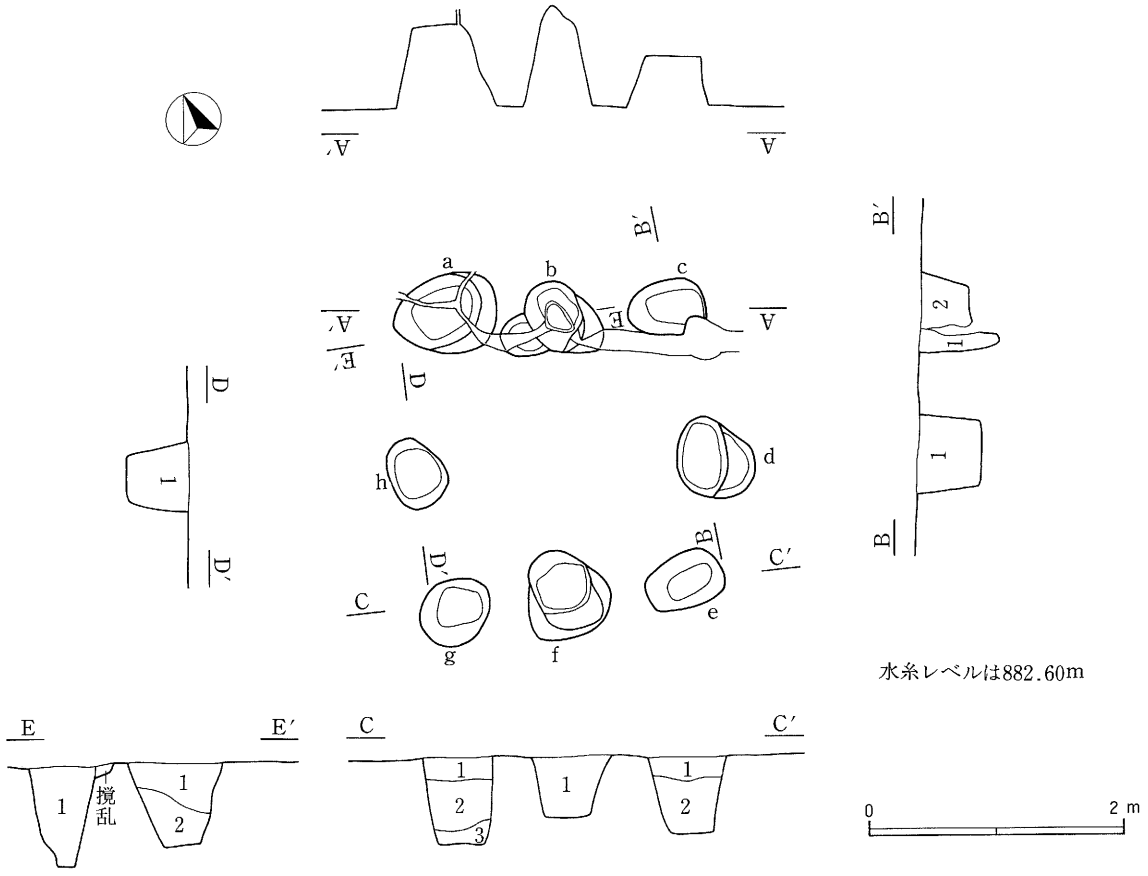
p柱穴　西辺にある。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む他、３cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを多量に含む。２個に別れるか。

7　Ｃ６号方形柱穴列（第48図、図版38－２）

Ｃ５号方形柱穴列の北に位置する。本遺跡で検出された方形柱穴列の中で最も柱穴数が少なく、規模も小さい。長辺３本、短辺１本の柱穴からなる。規模は、長軸220cm、短軸210cmを測る。長軸方向は、N－61°－Wを指す。北辺のａ・ｂ・ｃは、東西に断層が走り、切られている。ｃは２個の柱穴の並びか。東辺には１個の柱穴がある（ｄ）。底面には段差があり、外側が浅い。ｅも柱穴が２個の可能性がある。

a柱穴　北辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。クラックが入る。規模は平面長径83cm、平面短径64cm、底面長径50cm、底面短径37cm、深さ69cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、５㎜ほどのロームブロックを少量含む。3cmほどの大きさの、暗褐色の濁ったロームが斑状に入る。②黒褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む他、７㎜ほどのロームブロックを少量含む。

b柱穴　北辺にある。クラックが入る。北壁は直立。規模は平面長径57cm、平面短径45cm、底面長径34cm、



第48図　Ｃ６号方形柱穴列（1/60）

底面短径15cm、深さ73cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、5㎜ほどのロームブロックを少量含む。

c柱穴　北辺にある。平面形態は不明であるが、底面は長方形を呈する。クラックが入る。柱穴2個の並びか。規模は平面長径62cm、平面短径45cm、底面長径43cm、底面短径36cm、深さ44cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5㎜ほどのロームブロックを少量含む。断層に入り込んだ土で、柱穴とは関係ない。②黒褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、5㎜ほどのロームブロックを少量含む。

d柱穴　東辺にある。平面形態は不明であるが、底面は不整形を呈する。底面に段差があり、東側が浅い。規模は平面長径63cm、平面短径39cm、底面長径52cm、底面短径30cm、深さ51cmを測る。また、西側の柱穴の規模は、平面短径50cm、底面短径33cm、深さ46cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、3㎜ほどのロームブロックを少量含む。また、3㎜ほどの炭化物を稀に含む。cの②に比して、ロームブロックが若干小さく、明るい。

e柱穴　南辺にある。平面形態は長楕円形を呈する。柱穴2個か。東壁は直立。規模は平面長径61cm、平面短径45cm、底面長径40cm、底面短径20cm、深さ66cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、2㎜ほどのロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、7～10㎜のロームブロックを多量に含む。

f柱穴　南辺にある。平面形態は不明であるが、底面は長方形に近い。規模は平面長径51cm、平面短径46cm、底面長径41cm、底面短径36cm、深さ47cmを測る。また、南側の浅い柱穴の規模は平面長径67cm、底面長径45cm、深さ32cmを測る。覆土は①暗褐色土。下層にいくにしたがって、粘性は強くなるが、分層は難しい。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5㎜以上のロームブロックを多量に含む。特に上層に多く含まれるが、分層は難しい。

g柱穴　南辺にある。平面形態は円形もしくは隅丸方形を呈する。内側である北壁が直立。規模は平面長径57cm、平面短径54cm、底面長径37cm、底面短径30cm、深さ68cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子、5㎜ほどのロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、5㎜以上のロームブロックを多量に含む。柱穴f①と同一層。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、1cm以上のロームブロックを多量に含む。本遺構では他の柱穴に見られない土層。

h柱穴　西辺にある。平面形態は不明であるが、底面は円形を呈する。内側である東壁が直立気味。規模は平面長径57cm、平面短径45cm、底面長径40cm、底面短径37cm、深さ48cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子、5㎜以下のロームブロックを少量含む。また、稀に炭化物を混入する。

8　C7号方形柱穴列（第49図、図版39・40－1～4）

長辺5本、短辺3本の柱穴からなる。規模は、長軸570cm、短軸560cmを測る。長軸方向は、N－56°－Wを指す。

a柱穴　北辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。内側である南壁と西壁が直立気味、北壁は緩く傾斜している。規模は平面長径110cm、平面短径95cm、底面長径64cm、底面短径55cm、深さ82cmを測る。覆土は①黒色土。ローム粒子を少量含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。微細なローム粒子を少量含む他、1cm以下の礫を含む。③暗褐色土。②層より明るい。微細なローム粒子を多量に含む他、3cm以下の礫を含む。中央に径25cmの柱痕が検出されている。

b柱穴　北辺にある。平面形態は円形に近い。底面中央がやや低い。内側である南壁が直立気味、北壁は緩

く傾斜している。規模は平面長径102cm、平面短径90cm、底面長径67cm、底面短径53cm、深さ78cmを測る。覆土は①暗褐色土。微細なローム粒子を少量含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。内側に径40cmの柱痕が検出されている。

c柱穴　北辺にある。北辺の中ではすこし外側にはみ出している。内側である南壁と東壁が直立気味、北壁は緩く傾斜している。規模は平面長径115cm、平面短径81cm、底面長径72cm、底面短径58cm、深さ80cmを測る。覆土は①黒色土。ローム粒子を少量含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。微細なローム粒子を少量含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。1mm以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。④暗褐色土。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。径40cmの柱痕が東南壁際に寄る。

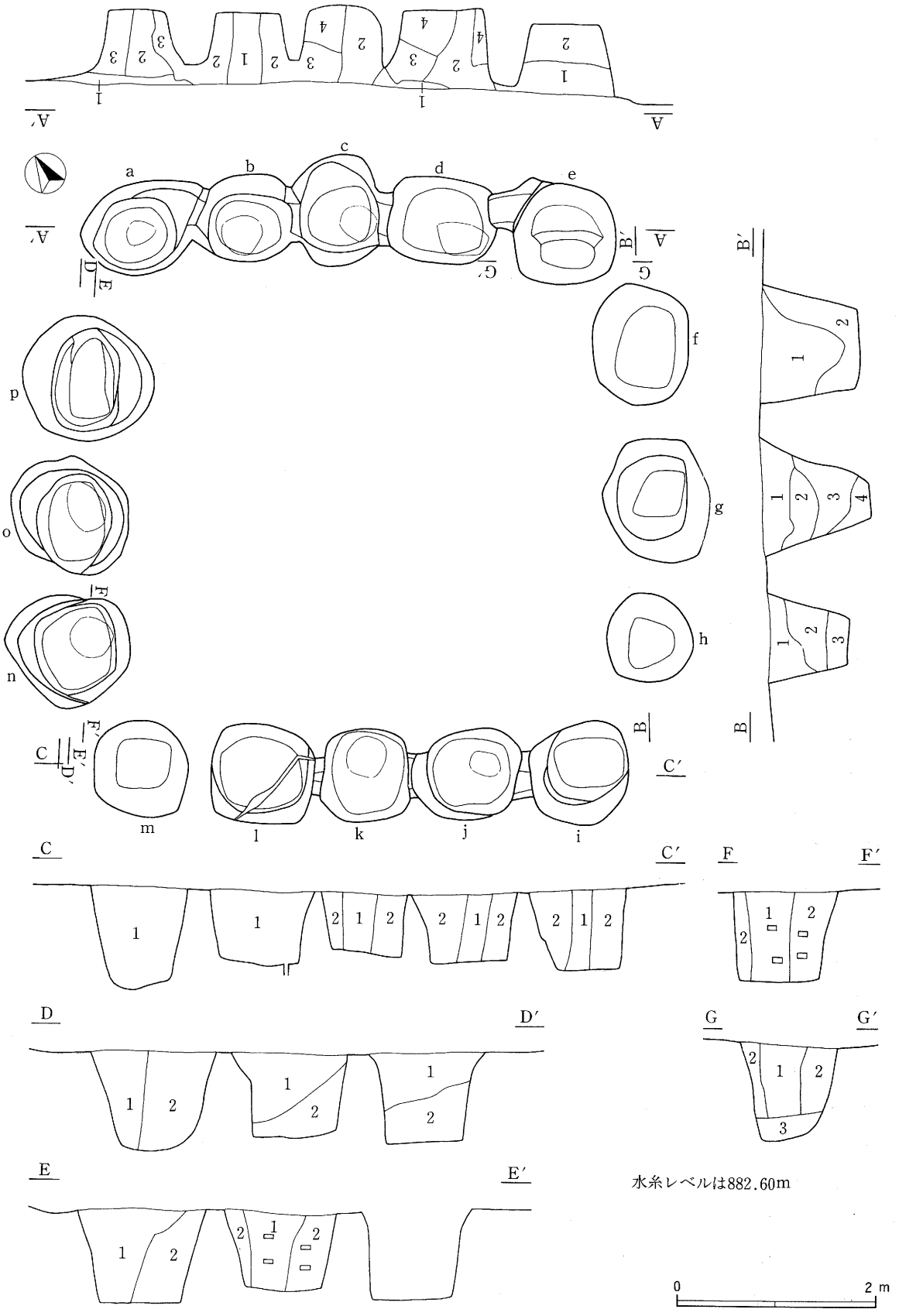
d柱穴　北辺にある。平面形態は南に広がる台形を呈する。内側である南壁が直立気味、北壁は緩く傾斜している。規模は平面長径110cm、平面短径87cm、底面長径82cm、底面短径76cm、深さ84cmを測る。覆土は①黒色土。ローム粒子を少量含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。微細なローム粒子を多量に含む他、2cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。1mm以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。④暗褐色土。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。径35～45cmの柱痕が東南際に寄る。

e柱穴　北辺にある。底面が二段となっており、内側である南側が浅い。内側である南壁が直立気味、北壁は緩く傾斜している。規模は平面長径104cm、平面短径103cm、底面長径70cm、底面短径65cm、深さ95cmを測る。覆土は①暗褐色土。1mm以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。1mm以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。径40cmの柱痕が、内側である南壁際に寄る。

f柱穴　東辺にある。軸線から底面がはずれる。壁面は直立気味。規模は平面長径125cm、平面短径95cm、底面長径86cm、底面短径57cm、深さ102cmを測る。覆土は①暗褐色土。微細なローム粒子を少量含む他、4cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。柱痕は検出できなかった。

g柱穴　東辺にある。平面形態は不明であるが、底面は隅丸方形を呈する。本址の中で最も小規模。断面形は摺り鉢状を呈する。壁面はどれも緩く傾斜している。規模は平面長径135cm、平面短径107cm、底面長径50cm、底面短径44cm、深さ108cmを測る。覆土は①暗褐色土。微細なローム粒子を少量含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。また、2cm以下の炭化物を少量含む。炭化物は中央部に集中する。③暗褐色土。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。また、1cm以下の炭化物を多量に含む。炭化物は中央部に集中する。④暗褐色土。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。柱痕は検出できなかった。

h柱穴　東辺にある。クラックが入り、横ズレしている。壁面は直立気味。規模は平面長径94cm、平面短径87cm、底面長径52cm、底面短径46cm、深さ89cmを測る。覆土は①暗褐色土。1mm以下のローム粒子を少量含む他、10cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。微細なローム粒子を多量に含む他、2cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。微細なローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロック



第49図　C７号方形柱穴列（1/60）

を少量含む。柱痕は検出できなかった。

ｉ柱穴　南辺にある。内側中央を向く。内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない。規模は平面長径115cm、平面短径96cm、底面長径70cm、底面短径50cm、深さ85cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む他、１cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを多量に含む。径20cmの柱痕が中央にある。

ｊ柱穴　南辺にある。平面形態は内側が広がる隅丸台形を呈する。内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない。規模は平面長径112cm、平面短径91cm、底面長径77cm、底面短径66cm、深さ76cmを測る。覆土は①暗褐色土。ローム粒子を少量含む。ローム粒子は散在している。１cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。ローム粒子を多量に含む。ローム粒子は散在している。５cm以下のロームブロックを少量含む。径30cmの柱痕が北東に寄る。

ｋ柱穴　南辺にある。平面形態は不明であるが、底面は南北に長い隅丸長方形を呈する。内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない。規模は平面長径95cm、平面短径88cm、底面長径84cm、底面短径70cm、深さ68cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む他、１cm以下のロームブロックを少量含む。また、0.5cm以下の炭化物を少量含む。②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを多量に含む。径40cmの柱痕が、内側である北壁際に寄る。

ｌ柱穴　南辺にある。平面形態は不明であるが、底面形は隅丸長方形を呈する。内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない。南壁は底面から緩やかに立ち上がり、上方で直立する。規模は平面長径105cm、平面短径100cm、底面長径81cm、底面短径75cm、深さ77cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、１cmから５cmのロームブロックを多量に含む。柱痕は検出できなかった。

ｍ柱穴　南辺にある。平面形態は不明であるが、底面形は円形を呈する。内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない。規模は平面長径100cm、平面短径96cm、底面長径54cm、底面短径51cm、深さ106cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、１cmから５cmのロームブロックを多量に含む。また、１㎜以下の炭化物を少量含む。柱痕は検出できなかった。

ｎ柱穴　西辺にある。平面形態は不明であるが、底面形は内側に広がる隅丸台形を呈する。内側である東壁が直立気味。上方はやや崩れている。規模は平面長径119cm、平面短径116cm、底面長径77cm、底面短径73cm、深さ98cmを測る。覆土は①暗褐色土。微細なローム粒子を多量に含む他、１cmから３cmのロームブロックを多量に含む。②黒褐色土。微細なローム粒子を少量含む他、３cm以下のロームブロックを多量に含む。径50cmの柱痕が、内側である東壁際に寄る。

ｏ柱穴　西辺にある。平面形態は長楕円形を呈する。東南隅には径25cmの凹みがある。内側である東壁が直立気味。上方はやや崩れている。規模は平面長径127cm、平面短径109cm、底面長径82cm、底面短径55cm、深さ93cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む他、３cmから５cmのロームブロックを少量含む。また、１cm以下の炭化物を稀に含む。②黄褐色土。微細なローム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを多量に含む。径40～50cmの柱痕が、内側である東壁際に寄る。

ｐ柱穴　西辺にある。内側である東壁が直立気味。上方はやや崩れている。規模は平面長径128cm、平面短径124cm、底面長径84cm、底面短径36cm、深さ108cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む他、１cm以下のロームブロックを少量含む。また、５㎜以下の炭化物を少量含む。②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、３cm以下のロームブロックを多量に含む。覆土は縦方向に分層できたが、他の柱穴に見られた柱痕と考えられる土層と異なっており、どちらも柱痕とは考えられない。

9　C８号方形柱穴列（第50図、図版40－５）

長辺３本、短辺２本の柱穴からなる。規模は、長軸380cm、短軸340cmを測る。長軸方向は、N－42°－Eを指す。当初、j・a・bを北辺とし、以下c・dが東辺、e・f・gが南辺、h・iを東辺とし、長軸規模3.5m、短軸規模3.9mで、長軸方向がN－57°－Wとなる方形柱穴列を考えていたが、整理作業に入り、写真や図面を検討の結果、上記の様な規模と長軸方向を持つものとの考えに至り、改めた。

a柱穴　北辺にある。底面は隅丸長方形を呈する。壁は底面から壁半ばまでは直立する。壁面はどれも崩れている。規模は平面長径100cm、平面短径84cm、底面長径64cm、底面短径48cm、深さ64cmを測る。覆土は２層に分層が可能である。①黒褐色土。２mm以下のローム粒子を多量に含む他、３cm以下のロームブロックを少量含む。②暗黄褐色土。２mm以下のローム粒子を多量に含む他、３cm以下のロームブロックを少量含む。

b柱穴　北辺にある。平面形・底面形とも隅丸方形を呈する。壁面はほぼ直立する。規模は平面長径84cm、平面短径77cm、底面長径42cm、底面短径36cm、深さ77cmを測る。覆土は①黒褐色土。②黒褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、３cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、２cm以下のロームブロックを少量含む。

c柱穴　東辺にある。平面径は不整形を呈する。壁面はどれも崩れている。西壁はほぼ直立するが、他の壁は半ばまで直立し、上方は広がる。規模は平面長径100cm、平面短径77cm、底面長径61cm、底面短径50cm、深さ70cmを測る。覆土は①黒褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。

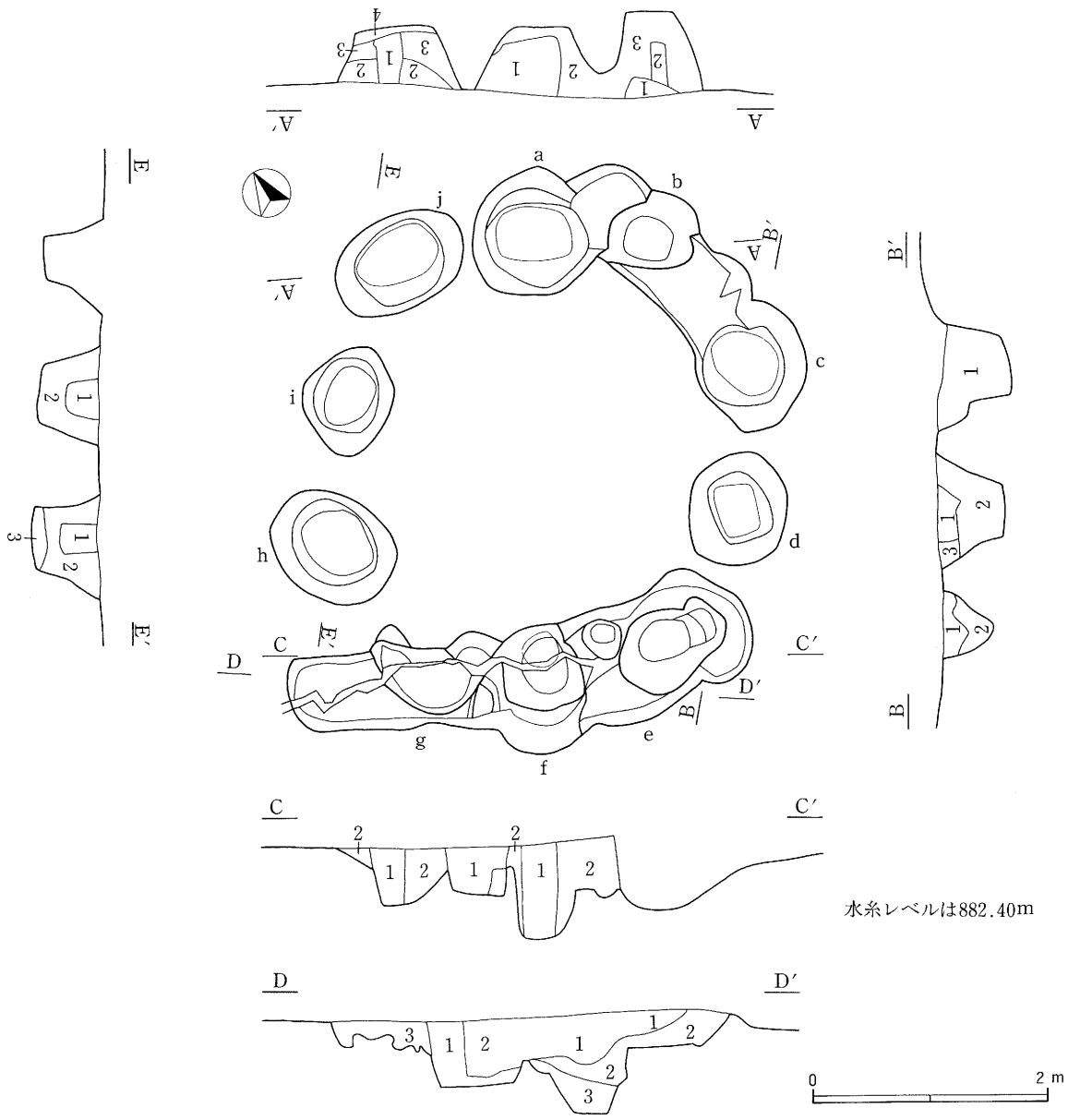
d柱穴　東辺にある。平面形は楕円形、底面形は長方形を呈する。壁面はどれも崩れており、上方で広がっている。規模は平面長径95cm、平面短径85cm、底面長径45cm、底面短径34cm、深さ61cmを測る。覆土は①黒褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、２cm以下のロームブロックを少量含む。③灰黄色土。ロームブロックの中に砂が混じっている。

e柱穴　東辺にある。クラックが東西に走る。e・f間の内側に別の柱穴がある。底面形は楕円形を呈する。規模は平面長径98cm、平面短径71cm、底面長径69cm、底面短径33cm、深さ65cmを測る。覆土は①暗褐色土。２mm以下のローム粒子を多量に含む。②黄褐色土。２mm以下のローム粒子を含み、10cm以上のロームブロックを多量に含む。西壁でgと連結する。

f柱穴　南辺にある。クラックが東西に走る。f・g間の内側に別の柱穴がある。底面は楕円形を呈する。北壁が直立気味。規模は平面長径75cm、平面短径66cm、底面長径48cm、底面短径39cm、深さ85cmを測る。覆土は①暗褐色土。２mm以下のローム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２mm以下のローム粒子を多量に含む他、５cm以上のロームブロックを多量に含む。③暗黄褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。東壁でe、西壁でgと連結する。

g柱穴　南辺にある。底面形は半円形を呈する。クラックが東西に走る。西側に別の柱穴がある。北壁が直立気味。規模は平面長径75cm、平面短径55cm、底面長径65cm、底面短径39cm、深さ58cmを測る。覆土は１：①暗褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、２cm以下のロームブロックを少量含む。②暗黄褐色土。２mm以下のローム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。２：①黒褐色土。２mm以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２mm以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。径30cmの柱痕が、内側である北壁際に寄る。東壁でgと連結する。

h柱穴　西辺にある。平面形は楕円形、底面形は円形を呈する。壁面はローム中は直立、漸移層になって広



第50図　C８号方形柱穴列（1/60）

がるが、崩れや掘りすぎもあるか。規模は平面長径110cm、平面短径88cm、底面長径63cm、底面短径54cm、深さ61cmを測る。覆土は１：①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子を少量含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２㎜以下のローム粒子を多量に含む他、２cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。２㎜以下のローム粒子を少量含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。２：①黒褐色土。２㎜以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを少量含む。

ｉ柱穴　西辺にある。平面形は不整形、底面形は隅丸方形を呈する。壁面はローム中は直立、漸移層になって広がるが、崩れや掘りすぎもあるか。規模は平面長径95cm、平面短径74cm、底面長径52cm、底面短径39cm、深さ58cmを測る。覆土は①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子を少量ふくむ。②暗褐色土。２㎜以下のローム粒子を少量含む。

ｊ柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸長方形、底面は長円形を呈する。底面から壁半ばまでは直立し、上方

は広がる。壁面はどれも崩れている。規模は平面長径116cm、平面短径81cm、底面長径73cm、底面短径45cm、深さ51cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む。③暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。④暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、5cm以下のロームブロックを少量含む。

10　C9号方形柱穴列（第51図、図版41）

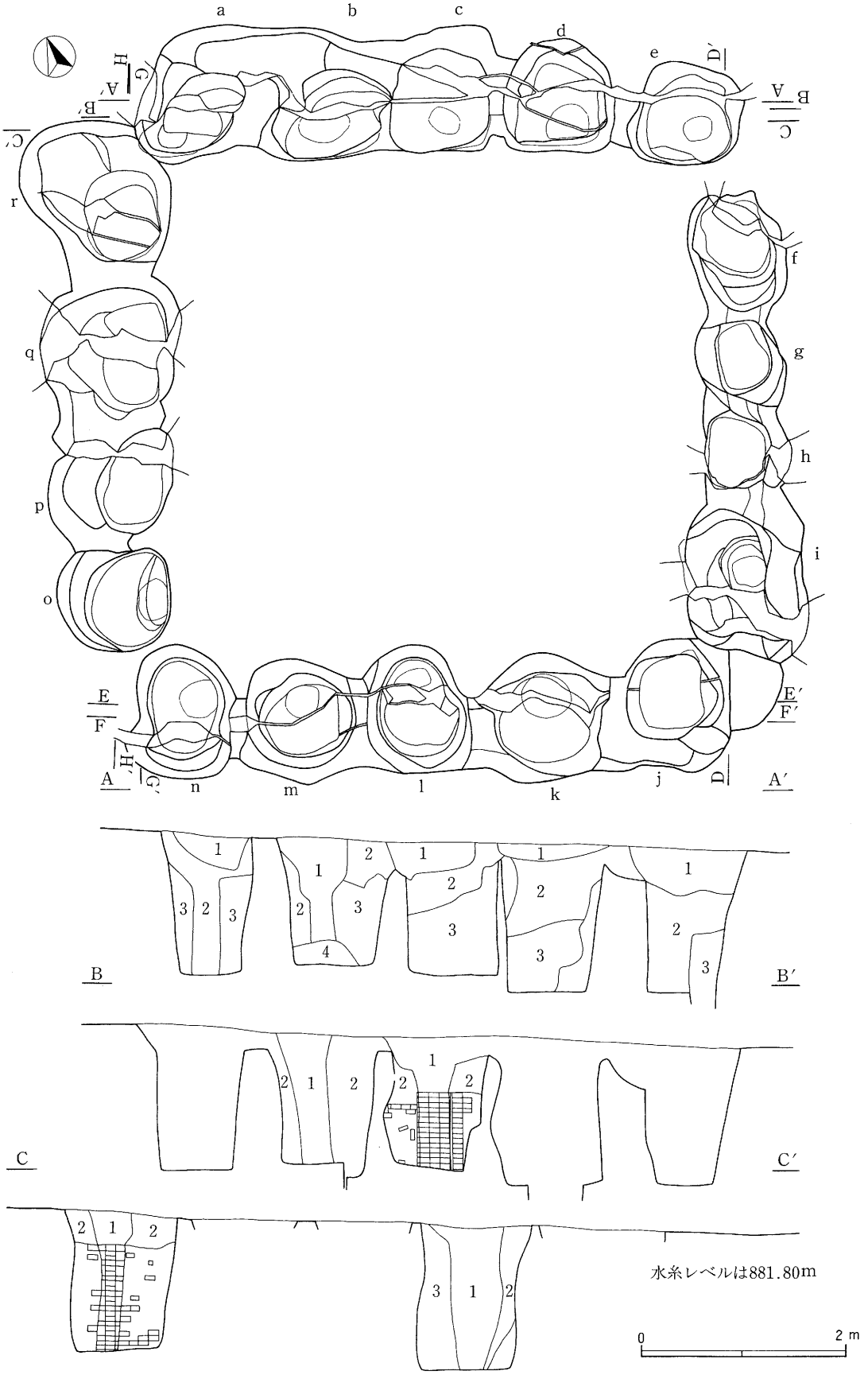
長辺5本、短辺4本の柱穴からなる。規模は、長軸590cm、短軸600cmを測る。長軸方向は、N－68°－Wを指す。本遺跡で検出された方形柱穴列の中で最も柱穴数が多く、規模も大きい。北辺に東西に断層が走る。

a柱穴　北辺にある。平面形は不整形を呈する。ほぼ中央に東西にクラックが走る。段差はほとんどないが、横ズレが20cm以上ある。南壁はほぼ直立、北壁は傾斜し上方で大きく広がっている。東壁と西壁にはクラックが入りはっきりしないが、ほぼ直立している。規模は平面長径160cm、平面短径130cm、底面長径80cm、底面短径53cm、深さ145cmを測る。覆土は①暗褐色土。3㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む。

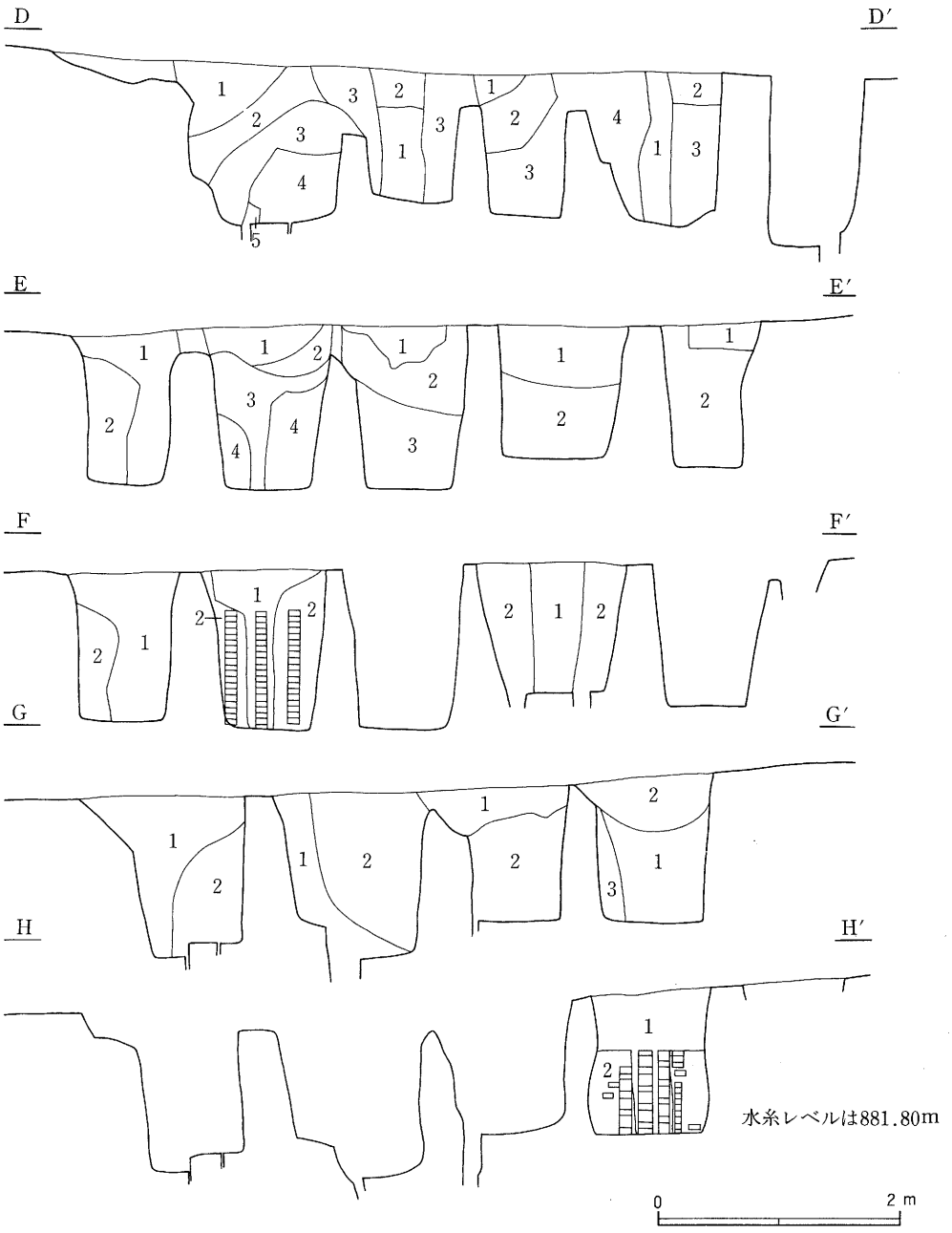
b柱穴　北辺にある。クラックが中央よりやや北側を東西に走る。横ズレが認められるが、段差はほとんどない。南壁・東壁は直立、北壁と西壁は傾斜している。北壁は上方で大きく広がっている。規模は平面長径125cm、平面短径100cm、底面長径85cm、底面短径70cm、深さ151cmを測る。覆土は1：①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。2：①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と4cm以下のロームブロックを少量含む。全体に炭化物を含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。また、5㎜以下の炭化物を少量含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。径50cmの柱痕がある。

c柱穴　北辺にある。内側である南壁側は直線的で、北壁側は曲線的。南壁はやや袋状となるがほぼ直立、東壁・西壁もほぼ直立するが、北壁は傾斜している。規模は平面長径123cm、平面短径95cm、底面長径100cm、底面短径95cm、深さ136cmを測る。覆土は1：①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。3㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。2：①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。また、稀に炭化物を含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。径30cmほどの柱痕が、底面中央にある。

d柱穴　北辺にある。底面は東西に長い隅丸長方形を呈するが、北壁側は丸みを帯びる。南東隅から北東隅へのクラックが走り、南側が10cm程低い。また、底面の北壁よりにもクラックが入り、南側が10cm程低い。どちらも若干の横ズレが認められる。南壁は直立しており、やや袋状となる。他はやや傾斜している。規模は平面長径113cm、平面短径108cm、底面長径80cm、底面短径72cm、深さ133cmを測る。覆土は1：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。④暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む。2：①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と



第51図　C 9 号方形柱穴列(1) (1/60)



第52図　C９号方形柱穴列(2)（1/60）

３cm以下のローム ブロックを少量含む。②暗褐色土。２mm以下のローム粒子と10cm以下のローム ブロックを多量に含む。径40cmほどの柱痕が、南東壁寄りにある。

e柱穴　北辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。クラックが中央よりやや北側を東西に走る。南壁は直立、東壁は直立した後やや広がる。西壁は傾斜しており、北壁は内湾気味に立ち上がる。規模は平面長径103cm、平面短径103cm、底面長径83cm、底面短径77cm、深さ141cmを測る。覆土は１：①暗褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、３cm以下のローム ブロックを多量に含む。②暗黄褐色土。２mm以下のローム粒子と５cm以下のローム ブロックを多量に含む。③黄褐色土。２mm以下のローム粒子と５cm以下のローム ブロックを多量に含む。２：①黒褐色土。１mm以下のローム粒子と３cm以下のローム ブロックを少量含む。②暗褐色土。１mm以下のローム粒子と５cm以下のローム ブロックを多量に含む。径30cmの柱痕が、底面中央よりやや東寄りにある。

f柱穴　東辺にある。平面形態は楕円形を呈する。クラックが北側を東西に走る。西壁・北壁・東壁は直立よりも袋状に近い。南壁は傾斜している。規模は平面長径118cm、平面短径93cm、底面長径105cm、底面短径63cm、深さ132cmを測る。覆土は①黒褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②黒褐色土。2mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。2mm以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。④黄褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。

g柱穴　東辺にある。平面形態は長楕円形を呈する。西壁は直立した後やや広がる。北壁・南壁はほぼ直立、東壁は傾斜している。規模は平面長径107cm、平面短径85cm、底面長径70cm、底面短径50cm、深さ122cmを測る。覆土は①黒褐色土。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。③黄褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。

h柱穴　東辺にある。クラックが底面と南壁の間に入る。東西の壁面上半にかなり開いており、壁面は崩れている。それぞれの壁面は直立しているが、東壁は上面で広がっている。規模は平面長径85cm、平面短径80cm、底面長径68cm、底面短径55cm、深さ112cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2mm以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。

i柱穴　東辺にある。平面形は不整形を呈する。クラックが東西に走り、東壁で約25cm、西壁で約50cm開いている。南半分はクラックによりかなり崩れている。西壁は直立よりも袋状に近い。他は傾斜しており、上方で広がる。規模は平面長径130cm、平面短径115cm、底面長径32cm、底面短径27cm、深さ143cmを測る。覆土は①黒褐色土。2mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。1mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。④暗褐色土。2mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを多量に含む。⑤暗褐色土。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。

j柱穴　南辺にある。平面形は楕円形、底面形は隅丸方形を呈する。クラックが東西に走る。壁はどれも直立に近い。規模は平面長径92cm、平面短径82cm、底面長径72cm、底面短径61cm、深さ119cmを測る。覆土は①暗褐色土。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。

k柱穴　南辺にある。平面形態は楕円形を呈する。北壁はやや袋状となるがほぼ直立、東壁と西壁もほぼ直立する。規模は平面長径120cm、平面短径105cm、底面長径90cm、底面短径88cm、深さ110cmを測る。覆土は1：①暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2mm以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。2：①暗褐色土。2mm以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2mm以下のローム粒子と、5cm以下のロームブロックを多量に含む。径50cmほどの柱痕が、内側である東壁寄りにある。

l柱穴　南辺にある。平面形態は楕円形を呈する。クラックにより南北に広がる。北壁はやや袋状となるがほぼ直立、他の壁は緩やかに広がる。規模は平面長径130cm、平面短径100cm、底面長径75cm、底面短径72cm、深さ135cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。2mm以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。

m柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。北東壁と南西壁コーナーが袋状となる。規模は平面長径125cm、平面短径106cm、底面長径72cm、底面短径67cm、深さ138cmを測る。覆土は1：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と、3cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。④黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。2：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。径30cmの柱痕が、内側である東壁寄りにある。

n柱穴　南辺にある。平面形態は楕円形を呈する。南壁を除いて直立または袋状となる。規模は平面長径135cm、平面短径94cm、底面長径95cm、底面短径70cm、深さ124cmを測る。覆土は1：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と、7cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。2：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。径40cmの柱痕が南壁寄りにある。

o柱穴　西辺にある。クラックによる横ズレと段差が認められる。底面形は不整円形で北壁側は直線に近い。底面東よりに径15cmの凹み。北壁・東壁・南壁が袋状で、西壁が直立した後広がっている。規模は平面長径111cm、平面短径98cm、底面長径85cm、底面短径75cm、深さ120cmを測る。覆土は1：①黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と、2cm以下のロームブロックを多量に含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と3cm以上のロームブロックを多量に含む。2：①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と4cm以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を少量含む。②暗褐色土。1cm以下のローム粒子を少量含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。径40cmの柱痕が南壁寄りにある。

p柱穴　西辺にある。底面は西から中央に向かい傾斜している。クラックにより横ズレ。東壁は直立、南壁は直立気味。規模は平面長径120cm、平面短径110cm、底面長径65cm、底面短径54cm、深さ113cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と、2cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。1㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。

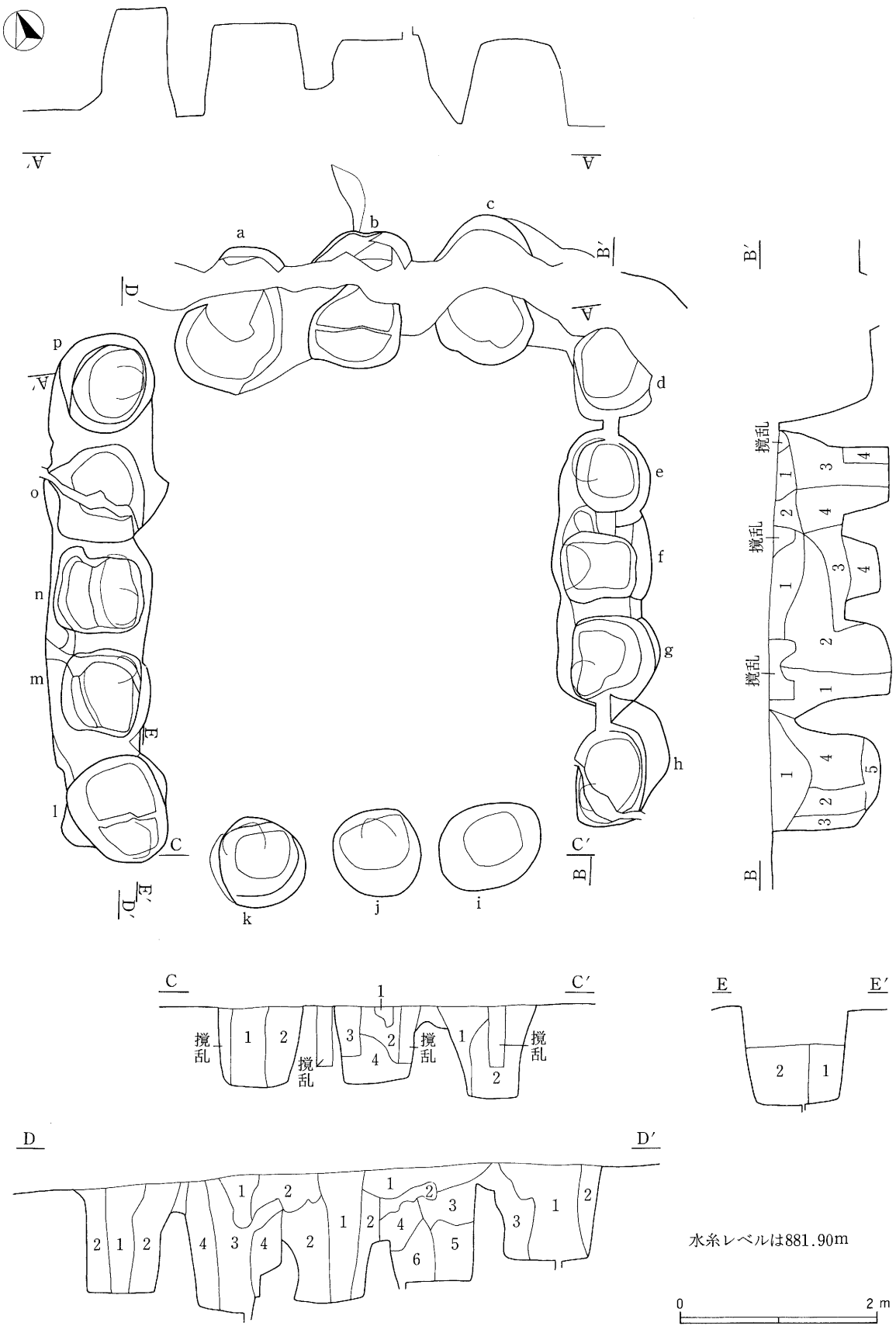
q柱穴　西辺にある。クラックが入り、かなりの段差と横ズレが認められる。底面の段差は北が低く、25cmほどある。東壁は直立。規模は平面長径132cm、平面短径130cm、底面長径100cm、底面短径54cm、深さ141cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。

r柱穴　西辺にある。クラックが入る。東壁から南壁にかけては袋状になった後直立している。規模は平面長径170cm、平面短径122cm、底面長径78cm、底面短径62cm、深さ134cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。

II　C10号方形柱穴列（第53図、図版42）

長辺5本、短辺3本の柱穴からなる。規模は、長軸540cm、短軸490cmを測る。長軸方向は、N－20°－Eを指す。北辺に東西に大きな断層が走る。西辺はどの壁も耕作による畝で上半が削られている。a～dは大きな断層にかかっていたため、丸掘りしている。

a柱穴　北辺にある。クラックにより北側が大きく落込む。南壁はほぼ直立。規模は平面長径は計測不可能、



第53図　C10号方形柱穴列（1/60）

平面短径105cm、底面長径も計測不可能、底面短径83cm、深さ93cmを測る。

b柱穴　北辺にある。クラックにより北側が大きく落込む。南壁はほぼ直立。規模は平面長径は計測不可能、平面短径95cm、底面長径も計測不可能、底面短径77cm、深さ87cmを測る。

c柱穴　北辺にある。クラックにより北側が大きく落込む。南壁はほぼ直立。規模は平面長径は計測不可能、平面短径99cm、底面長径も計測不可能、底面短径70cm、深さ81cmを測る。

d柱穴　東辺にある。クラックにより北側が大きく落込む。西壁は直立、南壁は傾斜している。北壁ははっきりしない。規模は平面長径・辺面短径・底面長径とも計測不可能、底面短径55cm、深さ92cmを測る。

e柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。西壁・北壁・東壁はほぼ直立、南壁はわずかに傾斜している。規模は平面長径85cm、平面短径55cm、底面長径84cm、底面短径47cm、深さ115cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。2mm以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。④暗褐色土。2mm以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。径45cmの柱痕が、内側である西壁際に寄る。

f柱穴　東辺にある。平面形態はやや東西に長い隅丸方形を呈する。西壁は直立、東壁は直立した後わずかに広がる。規模は平面長径77cm、平面短径64cm、底面長径70cm、底面短径45cm、深さ113cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。④暗褐色土。2mm以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。径45cmの柱痕が、内側である西壁際に寄る。

g柱穴　東辺にある。平面形は西壁は直線的で、東壁は丸みを帯びる。西壁は直立して上方でわずかに広がる。他の壁はわずかに傾斜する。東壁上方は掘りすぎか。規模は平面長径87cm、平面短径70cm、底面長径83cm、底面短径65cm、深さ128cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2mm以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。径40cmの柱痕が、内側である西壁際に寄る。

h柱穴　東辺にある。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。クラックにより南北に10～15cm開く。西壁は直立、他は直立した後広がる。規模は平面長径104cm、平面短径85cm、底面長径70cm、底面短径56cm、深さ105cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。2mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを多量に含む。④暗褐色土。2mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを多量に含む。⑤黄褐色土。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを僅かに含む。径27cmの柱痕が、内側である西壁際に寄る。

i柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。北壁は直線的、南壁は丸みを帯びる。内側中央を向く。北壁は直立する。規模は平面長径105cm、平面短径57cm、底面長径89cm、底面短径47cm、深さ95cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。2mm以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。

j柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。北壁は直線的、南壁は丸みを帯びる。北壁は直立する。規模は平面長径90cm、平面短径70cm、底面長径87cm、底面短径50cm、深さ80cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子を少量含む。②暗褐色土。2mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを

多量に含む。③暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。④暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。

ｋ柱穴　南辺にある。平面形態はほぼ円形を呈する。西壁は耕作の畝で検出できない。北壁は直立する。規模は平面長径94cm、平面短径55cm、底面長径86cm、底面短径47cm、深さ80cmを測る。覆土は①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と２㎜以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを多量に含む。径45cmの柱痕が、内側である北壁際に寄る。

ｌ柱穴　西辺にある。内側中央を向く。中央にクラックが入るが形状は変らない。東壁は直立、南壁もほぼ直立、北壁・西壁は傾斜している。規模は平面長径110cm、平面短径90cm、底面長径93cm、底面短径63cm、深さ100cmを測る。覆土は１：①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。２：①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子を多量に含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。

ｍ柱穴　西辺にある。クラックが走る。底面は二段となっており、内側である東側が深い。北壁・東壁は直立、南壁もほぼ直立、西壁は内湾気味に立ち上がる。西壁上半は畝によって削られている。規模は平面長径89cm、平面短径68cm、底面長径80cm、底面短径60cm、深さ121cmを測る。覆土は①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを少量含む。④暗褐色土。２㎜以下のローム粒子を少量含むほか、20cmものローム塊も認められた。⑤暗黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを多量に含む。⑥黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。径42cmの柱痕が、内側である東壁際に寄る。

ｎ柱穴　西辺にある。底面は二段となっており、内側である東側が深い。東壁はほぼ直立、西壁上半は畝で削られている。規模は平面長径90cm、平面短径71cm、底面長径77cm、底面短径60cm、深さ135cmを測る。覆土は①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。径36cmの柱痕が、内側である東壁際に寄る。

ｏ柱穴　西辺にある。クラックが走る。南側が高いのはクラックの所為か。15cmの段差がある。南壁は直立、西壁は緩やかに傾斜している。規模は平面長径100cm、平面短径65cm、底面長径95cm、底面短径63cm、深さ135cmを測る。覆土は①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と１cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを多量に含む。④黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と５㎜以下のロームブロックを多量に含む。径45cmの柱痕が、内側である東壁際に寄る。

ｐ柱穴　西辺にある。クラックが走るが、段差は少ない。東壁上半と西壁上半は畝により削られている。北壁・東壁・南壁は直立、西壁は傾斜している。規模は平面長径103cm、平面短径68cm、底面長径95cm、底面短径55cm、深さ111cmを測る。覆土は①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。径33cmの柱痕が、内側である東壁際に寄る。

12　Ｃ11号方形柱穴列（第54図、図版43）

長辺４本、短辺３本の柱穴からなる。規模は、長軸450cm、短軸480cmを測る。長軸方向は、Ｎ－37°－Ｅを

指す。C16号住居址と重複する。本址検出時において、南辺及び西辺が検出できず、北辺と東辺よりも一段低い高さで検出したこと、検出時に縄文土器が他の方形柱穴列に比して多い割合で出土していることなどから、南辺と西辺の上にはC16号住居址の覆土が覆っていたと考えられ、検出状況からではあるが、住居址よりも古いと考えられる。

a柱穴　北辺にある。平面形態は円形を呈する。いずれの壁も緩やかに傾斜しており、直立した壁がない。規模は平面長径98cm、平面短径82cm、底面長径50cm、底面短径45cm、深さ73cmを測る。覆土は①畝攪乱。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを稀に含む。③暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。

b柱穴　北辺にある。平面形態は東西に長い長円形を呈する。いずれの壁も緩やかに傾斜しており、直立した壁がない。規模は平面長径103cm、平面短径86cm、底面長径65cm、底面短径22cm、深さ83cmを測る。覆土は①畝攪乱。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む。③暗褐色土。3㎜以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。④暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、5cm以下のロームブロックを少量含む。

c柱穴　北辺にある。いずれの壁も緩やかに傾斜しており、直立した壁がない。規模は平面長径100cm、平面短径94cm、底面長径85cm、底面短径55cm、深さ81cmを測る。覆土は①畝攪乱。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを稀に含む。④暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、4cm以下のロームブロックを多量に含む。

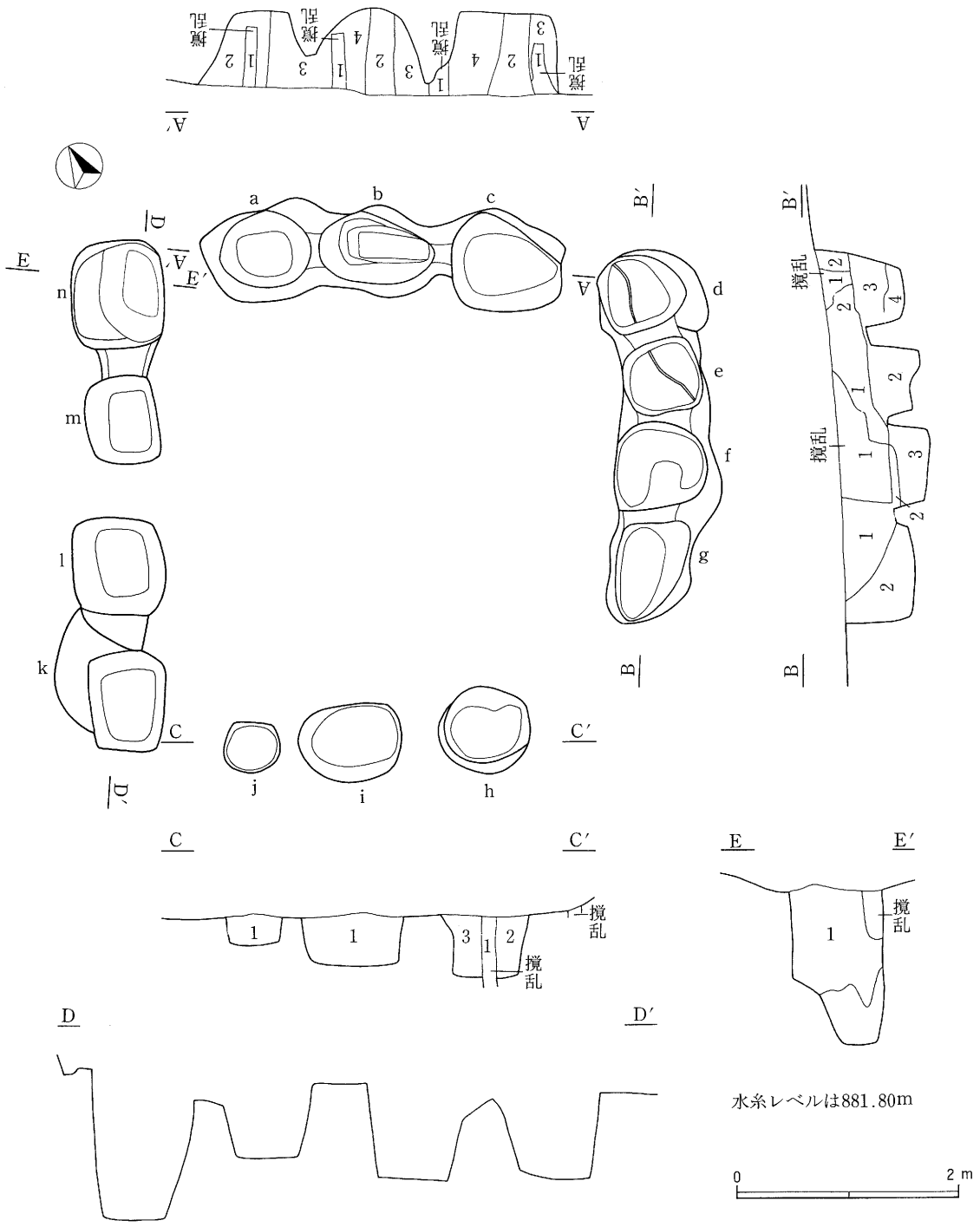
d柱穴　東辺にある。平面形態は三角形を呈する。クラックが走るが、段差は少ない。西壁・北壁は直立、東壁と南壁は傾斜している。規模は平面長径96cm、平面短径75cm、底面長径59cm、底面短径55cm、深さ75cmを測る。覆土は①畝攪乱。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロックを少量含む。③黄褐色土。2㎜以下のローム粒子を多く含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。④暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。

e柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。クラックが入り、段差は5cmほど。東壁・西壁は直立、北壁・南壁は傾斜している。規模は平面長径71cm、平面短径65cm、底面長径63cm、底面短径57cm、深さ78cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、7cm以下のロームブロックを多量に含む。

f柱穴　東辺にある。底面は不整形を呈する。クラックの所為か。元は隅丸方形を呈していたものと思われる。規模は平面長径93cm、平面短径80cm、底面長径80cm、底面短径70cm、深さ86cmを測る。覆土は①畝攪乱。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、2cm以下のロームブロックを少量含む。③黄褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。

g柱穴　東辺にある。平面形態は南北に長い長円形を呈する。西壁は直立、南壁は内湾気味に立ち上がる。東壁は傾斜している。北壁はfとのブリッジが低く、5cmほど。規模は平面長径93cm、平面短径75cm、底面長径34cm、底面短径38cm、深さ68cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、7cm以下のロームブロックを多量に含む。

h柱穴　南辺にある。平面形態は東西に長い楕円形を呈する。壁はすべてほぼ直立している。規模は平面長径80cm、平面短径79cm、底面長径66cm、底面短径50cm、深さ60cmを測る。覆土は①畝攪乱。②暗褐色土。2



第54図　C11号方形柱穴列（1/60）

mm以下のローム粒子を少量含む他、5cm以下のロームブロックを稀に含む。③黄褐色土。2mm以下のローム粒子を多量に含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。

i柱穴　南辺にある。平面形態は東西に長い楕円形を呈する。北壁は直立、南壁は傾斜、東壁・西壁は耕作による攪乱の為、壁の検出は出来ない。規模は平面長径93cm、平面短径71cm、底面長径78cm、底面短径53cm、深さ48cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。

j柱穴　南辺にある。特に小さく浅い。北壁と東壁が直立気味、他は傾斜している。規模は平面長径52cm、

平面短径48cm、底面長径47cm、底面短径41cm、深さ27cmを測る。覆土は①黄褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、２cm以下のロームブロックを少量含む。

k柱穴　西辺にある。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。東壁と南壁は直立、北壁はわずかに傾斜する。西壁はわずかに傾斜した後上方で広がる。規模は平面長径92cm、平面短径66cm、底面長径66cm、底面短径48cm、深さ88cmを測る。覆土は①暗褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、３cm以下のロームブロックを少量含む。

l柱穴　西辺にある。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。東壁は直立、他は傾斜している。規模は平面長径89cm、平面短径85cm、底面長径61cm、底面短径45cm、深さ87cmを測る。覆土は①暗褐色土。２mm以下のローム粒子を多量に含む他、２cm以上のロームブロックを多量に含む。

m柱穴　西辺にある。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。東壁は直立、北壁・南壁はわずかに傾斜、西壁は緩やかに傾斜している。規模は平面長径81cm、平面短径64cm、底面長径56cm、底面短径36cm、深さ74cmを測る。

n柱穴　西辺にある。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。底面は二段となっており、内側である東側が深い。高い方の西側の高さはk・l・mとほぼ同じ。北壁・東壁はほぼ直立、南壁はわずかに傾斜。西壁は中段から下は内湾気味に立ち上がり、上方は直立。規模は平面長径98cm、平面短径84cm、底面長径56cm、底面短径31cm、深さ150cmを測る。覆土は①暗褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、３cm以下のロームブロックを少量含む。

l3　C12号方形柱穴列（第55図、図版44－１）

長辺３本、短辺２本の柱穴からなる。規模は、長軸300cm、短軸290cmを測る。長軸方向は、N－63°－Wを指す。

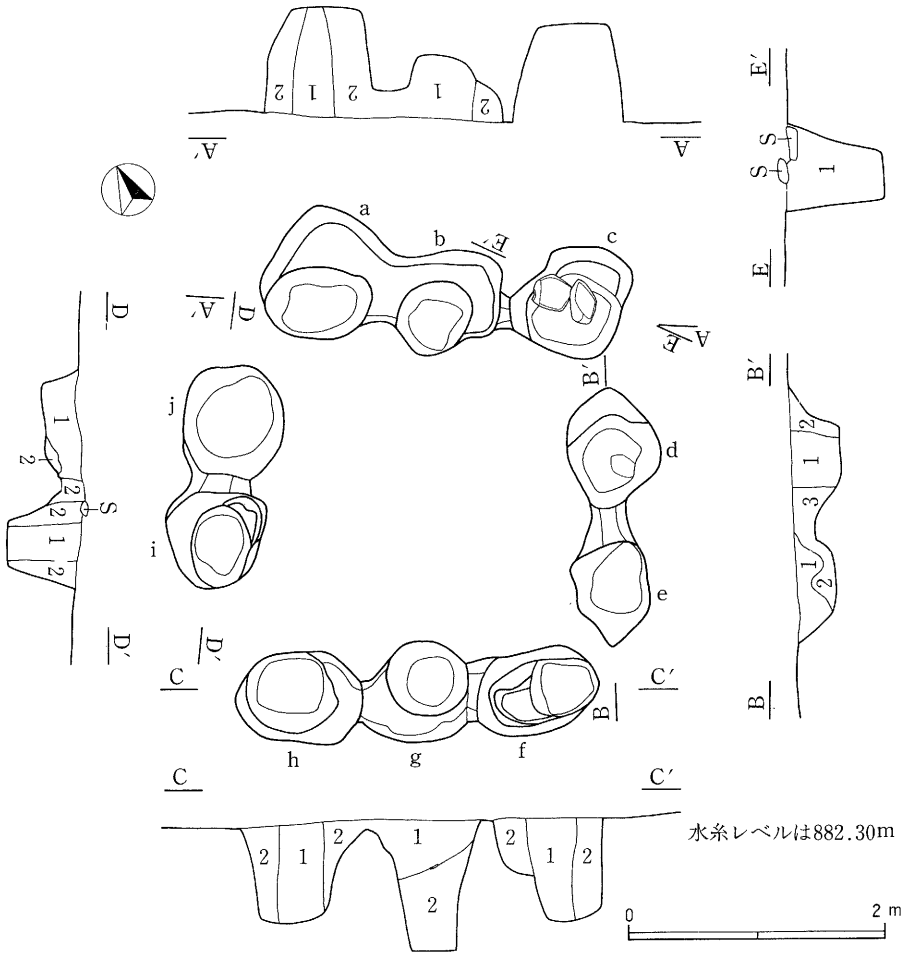
a柱穴　北辺にある。平面形態は東西に長い長円形を呈する。南壁は直立、東壁・西壁は傾斜、北壁は傾斜して立ち上がり、中ほどで大きく広がる。規模は平面長径86cm、平面短径57cm、底面長径55cm、底面短径35cm、深さ90cmを測る。覆土は①暗褐色土。微細なローム粒子を少量含む他、１cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。１cm以下のローム粒子を多量に含む他、２cm以上のロームブロックを多量に含む。

b柱穴　北辺にある。平面形態は不整形。小さく、浅い。北壁は中ほどで大きく広がる。規模は平面長径60cm、平面短径55cm、底面長径38cm、底面短径35cm、深さ53cmを測る。覆土は①暗褐色土。１mm以下のローム粒子を多量に含む他、１cm以上のロームブロックを少量含む。

c柱穴　北辺にある。平面形態は隅丸方形。確認面で、礫２個が出土している。南壁は直立、東壁もほぼ直立する。西壁は傾斜しており、北壁は中ほどから広がる。規模は平面長径87cm、平面短径65cm、底面長径63cm、底面短径48cm、深さ75cmを測る。覆土は①暗褐色土。１mm以下のローム粒子を多量に含む他、２cm以上のロームブロックを多量に含む。

d柱穴　東辺にある。平面形態は不整形を呈する。壁はいずれもしっかりしておらず、浅い。規模は平面長径75cm、平面短径73cm、底面長径50cm、底面短径40cm、深さ45cmを測る。覆土は①暗褐色土。１mm以下のローム粒子を少量含む他、３cm以上のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む。③黄褐色土。10cm以上のロームブロックを多く含む。

e柱穴　東辺にある。平面形態は不整形を呈する。北壁は直立し、他はわずかに傾斜している。規模は平面長径73cm、平面短径58cm、底面長径57cm、底面短径37cm、深さ41cmを測る。覆土は①暗褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む。②黄褐色土。10cm以上のロームブロックを多量に含む。



第55図　C12号方形柱穴列（1/60）

f柱穴　南辺にある。平面形態は東西に長い長円形を呈する。底面は段になっており、東が深く、西が浅い。北壁と東壁は直立、西壁は傾斜しており、西に大きく広がる。規模は平面長径95cm、平面短径63cm、底面長径42cm、底面短径40cm、深さ79cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、2cm以上のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、2cm以上のロームブロックを多量に含む。

g柱穴　南辺にある。平面形態は平面・底面とも円形を呈する。北壁と南壁は直立し、しっかりしているが、南壁は上方で広がる。東壁・西壁はわずかに傾斜している。f・hに比して深い。規模は平面長径65cm、平面短径59cm、底面長径39cm、底面短径37cm、深さ107cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、1cm以上のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、1cm以上のロームブロックを少量含む。

h柱穴　南辺にある。平面形態は円形、底面形は隅丸方形を呈する。北壁と南壁は直立し、しっかりしている。東壁・西壁はわずかに傾斜している。規模は平面長径75cm、平面短径64cm、底面長径51cm、底面短径43cm、深さ83cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、2cm以上のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、4cm以上のロームブロックを少量含む。

i柱穴　西辺にある。平面形態は長円形を呈する。壁は東壁の南から南壁にかけてほぼ直立するが、他は傾斜しながら立ち上がり、上方で広がる。規模は平面長径78cm、平面短径55cm、底面長径48cm、底面短径40cm、

深さ59cmを測る。覆土は①暗褐色土。２mm以下のローム粒子を多量に含む。②暗褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、５cm以上のロームブロックを多量に含む。

ｊ柱穴　西辺にある。平面形態はほぼ円形を呈する。壁はいずれもしっかりしていない。浅く、底面も凹凸が激しい。規模は平面長径87cm、平面短径78cm、底面長径69cm、底面短径56cm、深さ32cmを測る。覆土は①暗褐色土。１mm以下のローム粒子を少量含む他、５cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。２mm以下のローム粒子を少量含む他、５cm以上のロームブロックを多量に含む。

14　Ｃ13号方形柱穴列（第56図、図版44－２）

長辺４本、短辺３本の柱穴からなる。規模は、長軸380cm、短軸380cmを測る。長軸方向は、Ｎ－50°－Ｗを指す。

ａ柱穴　北辺にある。平面形態は不整形、底面は隅丸長方形を呈する。北壁はわずかに傾斜するが、ほぼ直立、他の壁はクラックが入り、しっかりしていない。規模は平面長径73cm、平面短径68cm、底面長径49cm、底面短径38cm、深さ48cmを測る。覆土は暗褐色土。１mm以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを少量含む。稀に炭化物を混入する。

ｂ柱穴　北辺にある。クラックが東西に走る。ｂ・ｃはつながっており、さらに別の柱穴があるのか間が一段低い。底面はｂがｃより一段低い。北壁は直立、西壁は傾斜している。南壁はクラックの為しっかりしていない。東壁の上方は大きく崩れる規模は平面長径98cm、平面短径61cm、底面長径42cm、底面短径29cm、深さ65cmを測る。覆土は暗褐色土。１mm以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。

ｃ柱穴　北辺にある。クラックが東西に走る。北壁・西壁はほぼ直立、南壁は内湾気味に立ち上がる。規模は平面長径83cm、平面短径57cm、底面長径59cm、底面短径45cm、深さ62cmを測る。覆土は暗褐色土。１mm以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを少量含む。

ｄ柱穴　北辺にある。クラックが東西に走る。東壁と北壁は傾斜している。東壁と南壁はクラックの所為かしっかりしていない。規模は平面長径107cm、平面短径94cm、底面長径55cm、底面短径37cm、深さ59cmを測る。覆土は暗褐色土。１mm以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを少量含む。

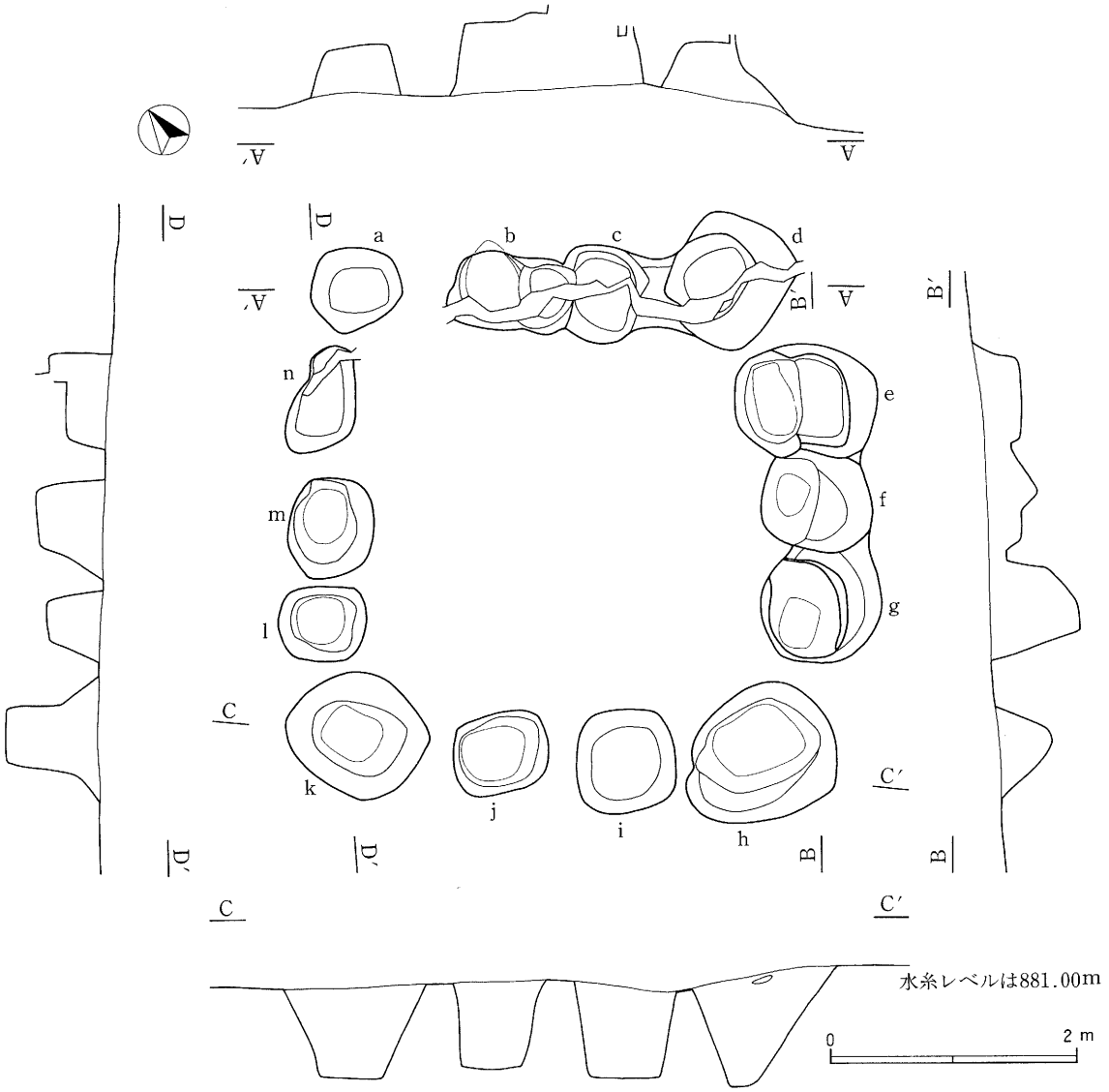
ｅ柱穴　東辺にある。底面が二段となっており、内側である西側が30cmほど低い。西壁は直立、東壁はどちらも傾斜している。規模は平面長径118cm、平面短径90cm、底面長径61cm、底面短径30cm、深さ66cmを測る。覆土は暗褐色土。１mm以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを少量含む。

ｆ柱穴　東辺にある。底面が二段となっており、内側である西側が30cmほど低い。西壁は直立、東壁はどちらも傾斜している。規模は平面長径92cm、平面短径79cm、底面長径37cm、底面短径26cm、深さ67cmを測る。覆土は黄褐色土。１mm以下のローム粒子を少量含む他、２cm以下のロームブロックを多量に含む。

ｇ柱穴　東辺にある。東壁上方が広がるのは崩れによるものか。西壁は直立、他は傾斜している。規模は平面長径100cm、平面短径92cm、底面長径42cm、底面短径32cm、深さ75cmを測る。覆土は暗褐色土。１mm以下のローム粒子と４cm以下のロームブロックを少量含む。

ｈ柱穴　南辺にある。平面形態は楕円形を呈する。内側中央を向く。底面は二段となっており、北側が低い。北壁は直立、他の壁は傾斜している。規模は平面長径132cm、平面短径108cm、底面長径67cm、底面短径52cm、深さ98cmを測る。覆土は暗褐色土。１mm以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを少量含む。

ｉ柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸方形で、外側である南側がやや張り出す。壁はすべてほぼ直立する。規模は平面長径84cm、平面短径80cm、底面長径60cm、底面短径55cm、深さ84cmを測る。覆土は暗褐色土。下部は、底面から50cmほど締りがなくなるが、分層は難しい。１mm以下のローム粒子を少量含む他、３cm以下



第56図　C13号方形柱穴列（1/60）

のロームブロックを多量に含む。

j柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。底面内側に張り出しがあり、たいらでない。壁はすべてほぼ直立する。規模は平面長径79cm、平面短径65cm、底面長径52cm、底面短径43cm、深さ72cmを測る。覆土は暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。

k柱穴　南辺にある。内側中央を向く。上方はいずれも大きく崩れている。中央にはクラックが入る。南壁・北壁は直立、東壁・西壁は緩く傾斜している。規模は平面長径109cm、平面短径96cm、底面長径48cm、底面短径38cm、深さ79cmを測る。覆土は暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。

l柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。浅い。壁はすべて緩く傾斜している。規模は平面長径71cm、平面短径62cm、底面長径42cm、底面短径41cm、深さ47cmを測る。覆土は暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。

m柱穴　西辺にある。内側が直線的で、外側が丸みを持つ。東壁はほぼ直立するが、上方で広がる。他の壁は緩く傾斜している。規模は平面長径84cm、平面短径70cm、底面長径45cm、底面短径38cm、深さ57cmを測る。覆土は黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。また、稀に炭化物を含む。

n柱穴　西辺にある。平面形態は北側にクラックが東西に走るが元は南北に長い隅丸長方形か。浅い。規模は平面長径90cm、平面短径48cm、底面長径73cm、底面短径34cm、深さ36cmを測る。覆土は暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。

15　C14号方形柱穴列（第57図、図版45）

長辺5本、短辺3本の柱穴からなる。規模は、長軸550cm、短軸620cmを測る。長軸方向は、N－44°－Wを指す。

a柱穴　北辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。内側中央を向く。壁はほぼ直立する。規模は平面長径98cm、平面短径83cm、底面長径70cm、底面短径50cm、深さ98cmを測る。覆土は1：暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。2：①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子と3㎜以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と10cm以下のロームブロックを多量に含む。

b柱穴　北辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。東西に小さなクラックが走る。南壁は直立するが、北壁は内湾気味に大きく傾斜する。東壁・西壁は中ほどで袋状となる。南壁際が4cmほど高くなっているのは、クラックによるものか。規模は平面長径76cm、平面短径88cm、底面長径72cm、底面短径47cm、深さ119cmを測る。覆土は①暗褐色土。3㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。3㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。

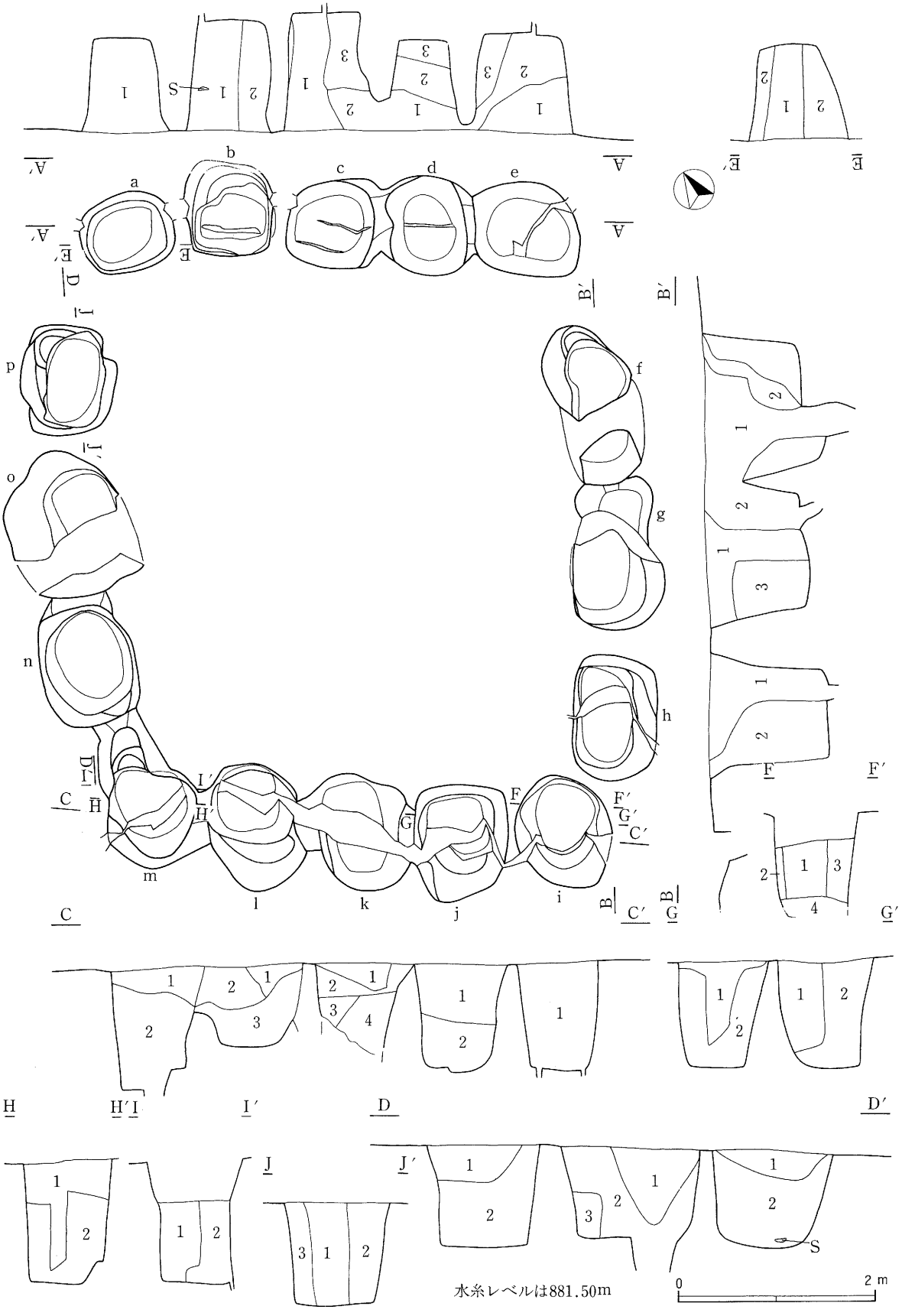
c柱穴　北辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。中央を東西にクラックが走る。壁はすべてほぼ直立する。規模は平面長径91cm、平面短径90cm、底面長径70cm、底面短径59cm、深さ123cmを測る。覆土は①暗褐色土。3㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。3㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。3㎜以下のローム粒子と10cm以下のロームブロックを多量に含む。

d柱穴　北辺にある。平面形態は長円形を呈する。中央を東西にクラックが走る。南壁・東壁及び西壁はほぼ直立するが、北壁は緩く傾斜している。規模は平面長径105cm、平面短径77cm、底面長径68cm、底面短径53cm、深さ93cmを測る。覆土は①暗褐色土。3㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。5㎜以下のローム粒子と10cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。

e柱穴　北辺にある。平面形態は長円形を呈する。中央を東西にクラックが走る。壁はすべてほぼ直立する。規模は平面長径110cm、平面短径96cm、底面長径76cm、底面短径65cm、深さ105cmを測る。覆土は①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。5㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。③黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。

f柱穴　東辺にある。南側にクラックが入り、上面で80cm、底面で25cmほど広がっているため平面形は不明である。西壁と北壁は直立しているが、上方で広がっている。東壁と南壁は傾斜している。規模は平面は歪が大きく計測が不可能であるが、底面長径80cm、底面短径53cm、深さ99cmを測る。覆土は①暗褐色土。3㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。1cm以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。

g柱穴　東辺にある。中央を東西にクラックが走り、平面形は不明である。北側にクラックがあるためか、北壁は袋状となる。西壁は直立、東壁・南壁は傾斜している。規模は平面は歪が大きく計測は不可能である



第57図　C14号方形柱穴列（1/60）

が、底面長径95cm、底面短径61cm、深さ106cmを測る。覆土は①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。③黄褐色土。5㎜以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。

h柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。中央にクラックが入り、底面で15cmほどひらいているが、段差はない。西壁と北壁は直立、東壁と南壁は直立した後広がる。規模は平面長径130cm、平面短径87cm、底面長径95cm、底面短径52cm、深さ119cmを測る。覆土は①暗褐色土。3㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。

i柱穴　南辺にある。平面形態は楕円形を呈する。南壁際にクラックが走る。北壁は直立、東壁と西壁も直立気味であるが、南壁は傾斜している。規模は平面長径115cm、平面短径100cm、底面長径71cm、底面短径59cm、深さ112cmを測る。覆土は1：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。2：①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と10cm以下のロームブロックを多量に含む。3：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を少量含む他、5cm以下のロームブロックを多量に含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、7cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と10cm以下のロームブロックを多量に含む。④黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。

j柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。南壁にクラックが入る。北壁は直立、東壁・西壁も直立気味、南壁は傾斜している。規模は平面長径120cm、平面短径95cm、底面長径60cm、底面短径58cm、深さ112cmを測る。覆土は1：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と4cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。2：①黒褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。

k柱穴　南辺にある。平面形態は長円形、底面は隅丸長方形を呈する。南側は一段高くなっているが、クラックによるものか。北壁は直立、他は傾斜している。規模は平面長径125cm、平面短径95cm、底面長径94cm、底面短径50cm、深さ84cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。③黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。④黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。

l柱穴　南辺にある。平面形態は不整形を呈する。中央にクラックが入り、北が深い。段差は大きく22cmほど。北壁は直立、他の壁は傾斜している。規模は平面長径134cm、平面短径95cm、底面長径63cm、底面短径60cm、深さ84cmを測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。

m柱穴　南辺にある。平面形態は不整形を呈する。クラックによる段差は大きく24cmほど。北壁と西壁は直立、他は傾斜している。規模は平面長径110cm、平面短径106cm、底面長径80cm、底面短径80cm、深さ133cmを測る。覆土は1：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを多量に含む。2：①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブ

ロックを多量に含む。３：①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子を少量含む他、７cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と15cm以下のロームブロックを多量に含む。

ｎ柱穴　西辺にある。平面形態は長円形を呈する。東壁は直立、他は傾斜している。規模は平面長径120cm、平面短径98cm、底面長径90cm、底面短径65cm、深さ99cmを測る。覆土は①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを多量に含む。

ｏ柱穴　西辺にある。クラックが東西に走る。南側は大きく開口しており、壁面観察が出来ない。他は傾斜している。規模は平面は歪が大きく計測は不可能であるが、底面長径125cm、底面短径55cm、深さ89cmを測る。覆土は①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを少量含む。②黒褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。

ｐ柱穴　西辺にある。平面形態は南北に長い隅丸方形を呈する。東壁は直立、北壁・南壁も直立気味、西壁は傾斜している。規模は平面長径113cm、平面短径88cm、底面長径98cm、底面短径50cm、深さ104cmを測る。覆土は①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と７cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。２cm以下のローム粒子と７cm以下のロームブロックを多量に含む。２：①暗褐色土。２㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを多量に含む。②黄褐色土。２㎜以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。

16　Ｃ15号方形柱穴列（第58図、図版46－１）

長辺４本、短辺２本の柱穴からなる。規模は、長軸360cm、短軸350cmを測る。長軸方向は、Ｎ－37°－Ｅを指す。

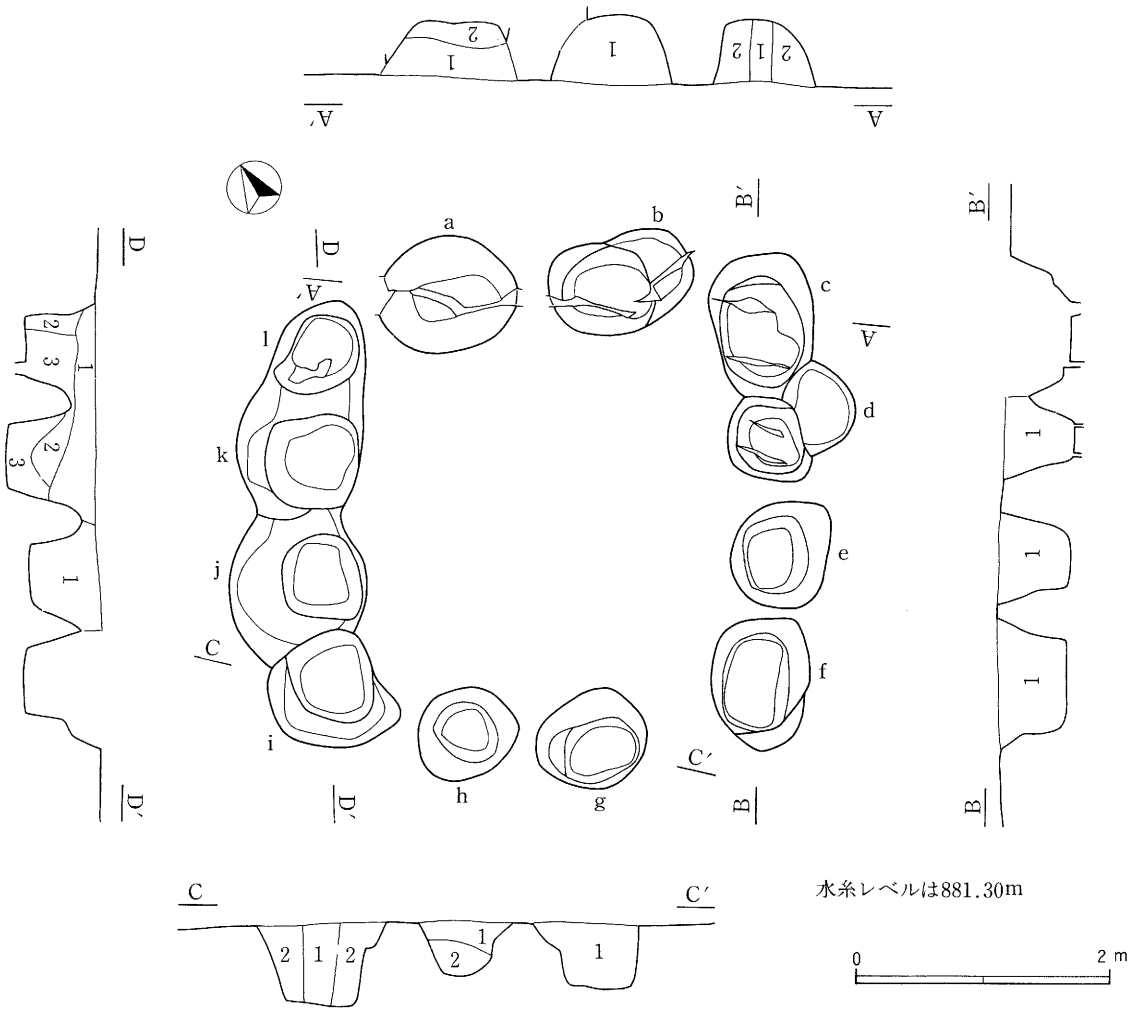
ａ柱穴　北辺にある。平面形態は長円形を呈する。中央にクラックが東西に走る。壁面はいずれも緩く傾斜している。規模は平面長径110cm、平面短径92cm、底面長径64cm、底面短径30cm、深さ50cmを測る。覆土は①黒褐色土。１㎜以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を稀に含む。②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子と１cm以下のロームブロックを少量含む。

ｂ柱穴　北辺にある。平面形態は長円形を呈する。南側にクラックが入る。東側に浅い掘り込みが重複している。壁面はいずれも傾斜している。規模は平面長径82cm、平面短径75cm、底面長径73cm、底面短径42cm、深さ59cmを測る。覆土は①黒褐色土。１㎜以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を稀に含む。

ｃ柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。クラックが東西に2本入る。壁面はいずれも傾斜している。西壁がやや直立気味か。規模は平面長径106cm、平面短径77cm、底面長径82cm、底面短径50cm、深さ54cmを測る。覆土は①黒褐色土。１㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を稀に含む。②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、３cm以下のロームブロックを少量含む。

ｄ柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。クラックが東西に２本走る。ｃ・ｄにかかる浅い掘り込みがある。西壁・北壁・南壁は直立、東壁は傾斜している。規模は平面長径70cm、平面短径66cm、底面長径38cm、底面短径32cm、深さ57cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子と１cm以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を少量含む。

ｅ柱穴　東辺にある。平面形態は楕円形、底面形は隅丸長方形を呈する。西壁は直立気味、他は傾斜している。規模は平面長径86cm、平面短径73cm、底面長径45cm、底面短径37cm、深さ59cmを測る。覆土は暗褐色土。



第58図　C15号方形柱穴列（1/60）

1㎜以下のローム粒子と3㎝以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を少量含む。

f柱穴　東辺にある。平面形態は長円形を呈する。クラックが東西に走る。壁はいずれも直立した後広がる。規模は平面長径111㎝、平面短径76㎝、底面長径69㎝、底面短径40㎝、深さ52㎝を測る。覆土は暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と3㎝以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を少量含む。

g柱穴　南辺にある。平面形態は楕円形を呈する。クラックが東西に走る。北壁と西壁は直立した後広がる。東壁と南壁は傾斜している。規模は平面長径92㎝、平面短径77㎝、底面長径57㎝、底面短径35㎝、深さ51㎝を測る。覆土は黒褐色土。分層は出来なかったが、西側はローム粒子が少なく、ロームブロックは2㎜以下、東側はローム粒子が大きく多い。

h柱穴　南辺にある。平面形態は円形を呈する。クラックが入る。壁はいずれも傾斜している。規模は平面長径79㎝、平面短径74㎝、底面長径36㎝、底面短径33㎝、深さ45㎝を測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と5㎜以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を稀に含む。②黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と5㎜以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を少量含む。

i柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。東壁は直立、他は傾斜している。西壁と南側はクラックで掘りすぎ。規模は平面長径95㎝、平面短径63㎝、底面長径55㎝、底面短径53㎝、深さ68㎝を測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2㎝以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を少量含む。

②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子と５㎜以下のロームブロックを多量に含む。また、炭化物を少量含む。

ｊ柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。東壁と北壁は直立、南壁と西壁は傾斜している。西に大きく広がるが掘りすぎか。規模は平面長径66cm、平面短径63cm、底面長径50cm、底面短径40cm、深さ59cmを測る。覆土は暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む。

ｋ柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。東壁は直立、他は傾斜している。西に広がるが掘りすぎか。規模は平面長径76cm、平面短径71cm、底面長径55cm、底面短径50cm、深さ71cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を多量に含む他、２cm以下のロームブロックを少量含む。②黒褐色土。１㎜以下のローム粒子と１cm以下のロームブロックを少量含む。③黄褐色土。１㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを多量に含む。

ｌ柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸三角形を呈する。底面の南にクラックが入る。東壁と北壁は直立気味、西壁と南壁は傾斜している。規模は平面長径73cm、平面短径56cm、底面長径48cm、底面短径42cm、深さ55cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子と１cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子と５㎜以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。１㎜以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを多量に含む。

17　Ｃ16号方形柱穴列（第59図、図版46－２）

長辺５本、短辺３本の柱穴からなる。規模は、長軸490cm、短軸450cmを測る。長軸方向は、Ｎ－30°－Ｅを指す。

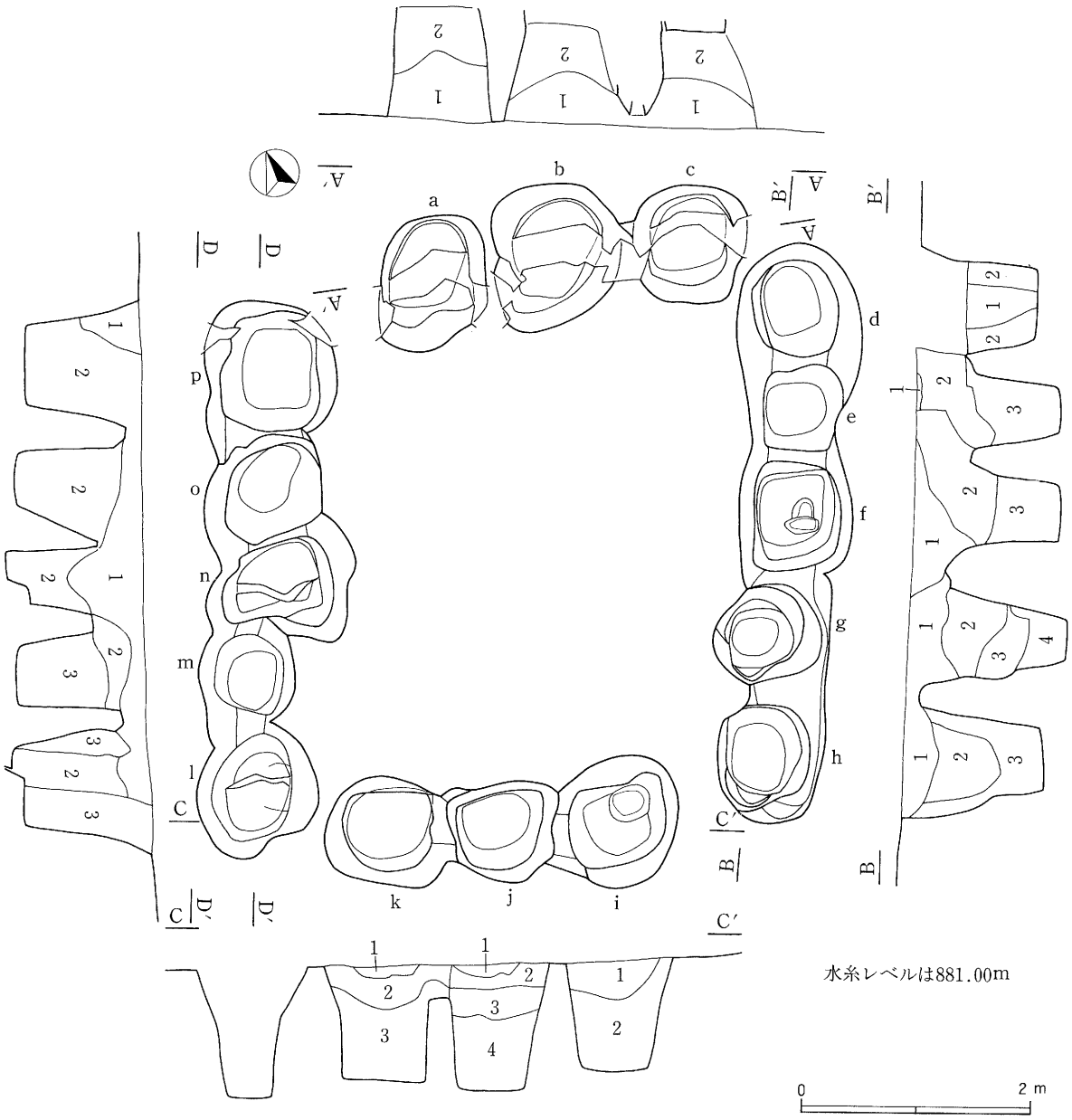
ａ柱穴　北辺にある。平面形態は長円形を呈する。底面で27cmほどのクラックが東西に走る。北壁と西壁は傾斜、東壁は直立した後広がる。内側である南壁が大きく傾斜するが、クラックの所為か。底面は北が平で南に傾斜している。規模は平面長径119cm、平面短径90cm、底面長径83cm、底面短径58cm、深さ117cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。②黒褐色土。１㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。

ｂ柱穴　北辺にある。平面形態は楕円形を呈する。東西にクラックが走る他、横ズレも認められる。クラックによる段差は10～15cm、幅は30cmほど。北壁と西壁は直立した後広がる。東壁と南壁は傾斜している。規模は平面長径130cm、平面短径113cm、底面長径85cm、底面短径63cm、深さ104cmを測る。覆土は①黒褐色土。１㎜以下のローム粒子と１cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。１㎜以下のローム粒子と４cm以下のロームブロックを多量に含む。

ｃ柱穴　北辺にある。東西にクラックが走る他、横ズレも認められる。クラックによる段差は大きく、10cm以上。底面は南が直線的で、北が曲線的。北壁・東壁及び西壁は直立気味、南壁は傾斜している。規模は平面長径105cm、平面短径98cm、底面長径62cm、底面短径59cm、深さ90cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜以下のローム粒子と１cm以下のロームブロックを少量含む。②黒褐色土。１㎜以下のローム粒子と１cm以下のロームブロックを少量含む。

ｄ柱穴　東辺にある。平面形態は楕円形を呈する。北壁と西壁は直立した後広がる。東壁と南壁は傾斜している。規模は平面長径107cm、平面短径100cm、底面長径57cm、底面短径47cm、深さ106cmを測る。覆土は①暗褐色土。８㎜以下のローム粒子と３cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。１cm以下のローム粒子と５cm以下のロームブロックを多量に含む。

ｅ柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。北壁と西壁は直立、東壁と南壁は傾斜している。規模は平面長径80cm、平面短径72cm、底面長径52cm、底面短径47cm、深さ130cmを測る。覆土は①暗褐色土。１㎜



第59図　C16号方形柱穴列（1/60）

以下のローム粒子を少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と4㎝以下のロームブロックを少量含む。③黄褐色土。1㎜以下のローム粒子と5㎝以下のロームブロックを多量に含む。

f柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。クラックが入る。底面に少ピット2がある。北壁と西壁は直立、東壁と南壁は傾斜している。規模は平面長径97㎝、平面短径95㎝、底面長径60㎝、底面短径55㎝、深さ135㎝を測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と1㎝以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2㎝以下のロームブロックを多量に含む。③黄褐色土。1㎜以下のローム粒子と5㎝以下のロームブロックを多量に含む。

g柱穴　東辺にある。平面形態は楕円形を呈する。西壁は直立、他は傾斜している。規模は平面長径102㎝、平面短径84㎝、底面長径43㎝、底面短径35㎝、深さ141㎝を測る。覆土は①暗褐色土。2㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3㎝以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。2㎜以下のローム粒子と5㎝以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2㎝以下のロームブロックを少量含む。

④黄褐色土。10cm以上のロームブロックの層。

h柱穴　東辺にある。平面形態は長円形を呈する。西壁は直立、他は傾斜している。規模は平面長径103cm、平面短径90cm、底面長径61cm、底面短径46cm、深さ125cmを測る。覆土は①暗褐色土。1mm以下のローム粒子と4cm以下のロームブロックを少量含む。②黄褐色土。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。1mm以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。

i柱穴　南辺にある。平面形態は楕円形を呈する。東西壁北側にクラックが入る。底面にピット1がある。北壁は直立の後広がる。他の壁は傾斜している。底面北東角が一段低いが、クラックによるものか。規模は平面長径115cm、平面短径93cm、底面長径55cm、底面短径55cm、深さ101cmを測る。覆土は①暗褐色土。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。

j柱穴　南辺にある。平面形態は楕円形を呈する。クラックが北側に入るが小さい。北壁は直立の後広がる。他の壁は傾斜している。規模は平面長径90cm、平面短径90cm、底面長径59cm、底面短径45cm、深さ114cmを測る。覆土は①黒褐色土。1mm以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。③黒褐色土。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。④黒褐色土。1mm以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を少量含む。

k柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。北壁・東壁及び西壁は直立の後広がる。特に東壁は袋状となっている。南壁は傾斜している。規模は平面長径100cm、平面短径100cm、底面長径73cm、底面短径60cm、深さ102cmを測る。覆土は①黒褐色土。1mm以下のローム粒子を少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。

l柱穴　西辺にある。平面形態は楕円形を呈する。中央にクラックと段差があり、北が10cmほど低い。東側上部が広がるのはクラックによる掘りすぎか。東壁は直立、南北壁も直立気味で、西壁は傾斜している。規模は平面長径108cm、平面短径106cm、底面長径70cm、底面短径55cm、深さ111cmを測る。覆土は①暗褐色土。2mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。1mm以下のローム粒子と、3cm以下のロームブロックを多量に含む。

m柱穴　西辺にある。平面形態は円形、底面は隅丸長方形を呈する。いずれの壁も直立の後広がる。規模は平面長径85cm、平面短径82cm、底面長径52cm、底面短径40cm、深さ114cmを測る。覆土は①暗褐色土。1mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。1mm以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。

n柱穴　西辺にある。平面形態は不整形を呈する。クラックが入る。東壁は直立の後広がる。南壁は傾斜している。北壁から西壁にかけては直立気味で、特に北壁は袋状となっている。クラックの所為か。規模は平面長径123cm、平面短径90cm、底面長径75cm、底面短径52cm、深さ129cmを測る。覆土は①暗褐色土。1mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1mm以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを多量に含む。

o柱穴　西辺にある。平面形態は不整形、底面はハート型を呈する。小さいクラックが入っており、その為

にズレた可能性もある。東壁は直立、北壁は袋状、南壁と西壁は傾斜している。規模は平面長径103cm、平面短径85cm、底面長径64cm、底面短径44cm、深さ116cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。

p柱穴　西辺にある。平面形態は平面・底面とも隅丸長方形を呈する。北側にクラックが入るが、底面への影響はなさそう。北壁と東壁は直立の後広がる。南壁と西壁は傾斜している。規模は平面長径115cm、平面短径113cm、底面長径70cm、底面短径60cm、深さ106cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを多量に含む。

I8　C17号方形柱穴列（第60図、図版47）

長辺4本、短辺3本の柱穴からなる。規模は、長軸510cm、短軸450cmを測る。長軸方向は、N－40°－Eを指す。

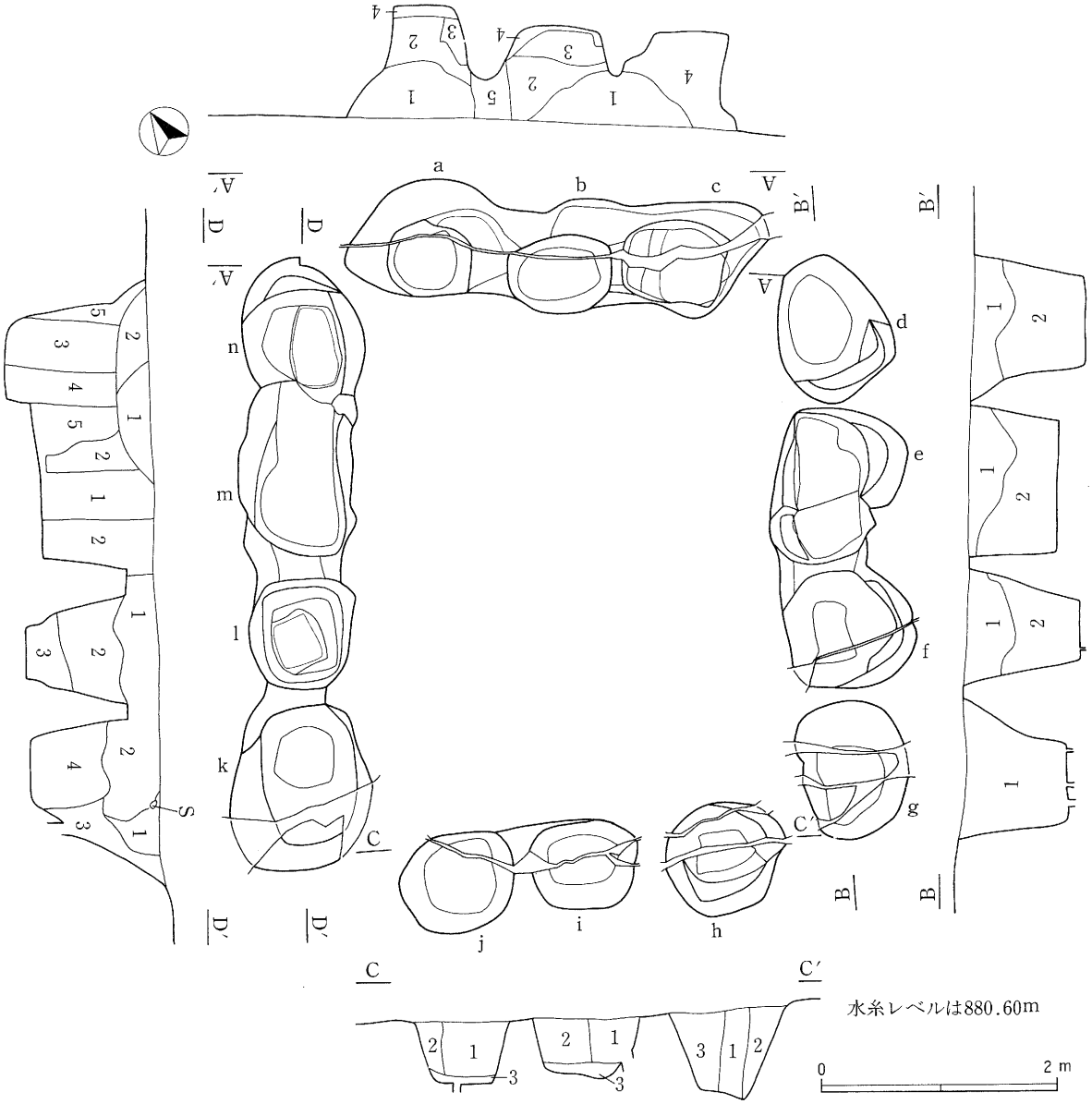
a柱穴　北辺にある。平面形態は不整形だが、下半は円形を呈する。底面北壁際にクラックが走る。南壁は直立、他の壁は直立した後広がる。規模は平面長径70cm、平面短径66cm、底面長径53cm、底面短径46cm、深さ99cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を稀に含む。②黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。また、炭化物を稀に含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。ロームブロックは50%以上。また、稀に炭化物を含む。④黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。⑤暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、1cm以下のロームブロックを少量含む。また、稀に炭化物を含む。

b柱穴　北辺にある。平面形態は長円形を呈する。中央にクラックが東西に走る。南壁は直立、他の壁は直立した後広がる。規模は平面長径90cm、平面短径67cm、底面長径68cm、底面短径44cm、深さ86cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを多量に含む。②黒褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、1cm以下のロームブロックを多量に含む。③黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。④黄褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。また、炭化物を少量含む。

c柱穴　北辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。中央にクラックが東西に走る。西側に一段高い箇所がある。東側の広がりは崩落によるものか。規模は平面長径86cm、平面短径72cm、底面長径92cm、底面短径67cm、深さ86cmを測る。覆土はbにまとめて記載した。

d柱穴　東辺にある。平面形態は楕円形を呈する。西壁は直立、南北壁は直立気味に立ち上がった後広がる。東壁は傾斜して広がった後、さらに中段を持って広がる。規模は平面長径123cm、平面短径97cm、底面長径78cm、底面短径54cm、深さ99cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と4cm以下のロームブロックを多量に含む。②黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。ロームブロックは北側に集中するが、分層は難しい。

e柱穴　東辺にある。平面形態は不整形を呈する。北壁と西壁の北2/3は直立、南1/3はクラックのためかしっかりしていない。東壁は逆に北2/3が傾斜を持ち、南1/3は直立気味である。南壁は直立する。規模は平面長径133cm、平面短径108cm、底面長径117cm、底面短径51cm、深さ81cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と4cm以下のロームブロックを少量含む。②黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と5cm以下のロ



第60図　C17号方形柱穴列（1/60）

ームブロックを少量含む。②層の中央にロームブロックを含まない間層が見られたが、分層は難しい。

f柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。クラックが東西に走っているが、形状を変えるほどではない。西壁は直立、他は傾斜しているが、特に東壁は上方でさらに広がっている。規模は平面長径107cm、平面短径100cm、底面長径53cm、底面短径27cm、深さ102cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多く含む他、4cm以下のロームブロックを少量含む。②黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②層の南壁際から底面にかけてはロームブロックの入らない層があるが、分層は難しい。

g柱穴　東辺にある。平面形態は楕円形を呈する。中央と南の2ヵ所にクラックが東西に走る。西壁と南壁は直立しているが、北壁と東壁は傾斜している。底面の東側が深くなっているが、クラックによるもの。規模は平面長径120cm、平面短径90cm、底面長径70cm、底面短径57cm、深さ88cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と5cm以下のロームブロックを少量含む。下部は若干黒味を帯びるが、分層は難しい。

h柱穴　南辺にある。平面形態は不整形を呈する。中央にクラックが東西に走り、わずかに横ズレしている。北壁にかかるように大きなクラックが入る。壁はいずれもしっかりしておらず、傾斜している。南壁は中段に中場を持つ。規模は平面長径106cm、平面短径96cm、底面長径50cm、底面短径35cm、深さ74cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を多量に含む他、3cm以下のロームブロックを少量含む。

i柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸長方形を呈する。中央と北壁にかかるようにクラックが走る。北壁はほぼ直立、他は傾斜している。規模は平面長径94cm、平面短径78cm、底面長径60cm、底面短径41cm、深さ59cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。また、稀に炭化物を含む。

j柱穴　南辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。h・iで底面中央を走っていたクラックは北側による。北壁はクラックが入り、検出できない。他の壁は傾斜している。規模は平面長径98cm、平面短径85cm、底面長径64cm、底面短径59cm、深さ61cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と7cm以下のロームブロックを少量含む。

k柱穴　西辺にある。平面形態は楕円形を呈する。遺構確認面で東壁南で70cm、西壁南で50cmのクラックが入り、形状を大きく変えている。北壁・東壁・南壁が傾斜、西壁は途中まで傾斜した後広がっている。規模は平面長径144cm、平面短径118cm、底面長径52cm、底面短径50cm、深さ112cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。④暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と5㎜以下のロームブロックを多量に含む。

l柱穴　西辺にある。底面にクラックが入る。東で2本のクラックであったものが、中央で交わり、1本のクラックとなって西へ抜けている。底面西側が一段低くなっている。東壁・南壁は直立、北壁と西壁は直立気味でわずかに傾斜している。規模は平面長径94cm、平面短径86cm、底面長径65cm、底面短径56cm、深さ119cmを測る。覆土は①黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、3cm以下のロームブロックを多量に含む。③暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と4cm以下のロームブロックを多量に含む。

m柱穴　西辺にある。平面形態は不整形を呈する。nとつながっている。東壁と南壁は直立、西壁は直立気味に立ち上がった後広がる。規模は平面は不明であるが、底面長径99cm、底面短径66cm、深さ105cmを測る。覆土は①暗褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。②暗褐色土。1㎜以下のローム粒子を少量含む他、4cm以下のロームブロックを多量に含む。掘り下げ当初はmとnはロームのブリッジで別れていたが、埋められたロームであり、つながってしまった。建て替えが行われた可能性もある。

n柱穴　西辺にある。平面形態は不整形を呈する。mとはつながっているが、底面は一段低くなっている。東壁はほぼ直立、北壁は直立した後上方で広がる。北壁は内湾気味に外へ広がる。規模は平面長径は不明、平面短径103cm、底面長径75cm、底面短径61cm、深さ124cmを測る。覆土は①黄褐色土。1㎜以下のローム粒子と3cm以下のロームブロックを多量に含む。②黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。③黒褐色土。1㎜以下のローム粒子と2cm以下のロームブロックを少量含む。また、稀に

炭化物を含む。④暗褐色土。１㎜以下のローム粒子を少量含む他、３cm以下のロームブロックを多量に含む。ロームブロックは上部に集中する。⑤黄褐色土。１㎜以下のローム粒子と２cm以下のロームブロックを多量に含む。

19　C18号方形柱穴列（第61図、図版48－１）

長辺５本、短辺３本の柱穴からなる。規模は、長軸510cm、短軸470cmを測る。長軸方向は、N－41°－Eを指す。遺構検出時に耕作による攪乱が激しく、土層の堆積状態の観察が不可能と考えられたため、半截することなく全掘した。隣接する17号住居址や周辺から考えても、40～50cm高い位置に掘り込み面があったものと考えられる。本文及び表中の深さは現確認面からのものである。

a柱穴　北辺にある。平面形態は円形を呈する。南壁及び西壁はほぼ直立する。北壁は直立した後広がる。東壁はクラックが入りはっきりしないが、かなり傾斜している。また、上方で広がるが、耕作により壁が削られ、崩れたもの。規模は平面長径95cm、平面短径92cm、底面長径79cm、底面短径74cm、深さ69cmを測る。中央やや南にクラックが東西に走る。

b柱穴　北辺にある。平面形態は不整形を呈する。辺にそって長い。２個の柱穴に別れる可能性もあるが、対する南辺の柱穴が３個であるので、一応１個の柱穴としておく。東壁はなく、cとつながっている。底面はcよりも一段高い。南壁及び北壁はほぼ直立するが、西側はやや傾斜する。西壁は内湾しながら立ち上がる。規模は平面長径148cm、平面短径59cm、底面長径116cm、底面短径40cm、深さ55cmを測る。底面東側から円礫が１個出土している。

c柱穴　北辺にある。平面形態は楕円形を呈する。南壁は直立、北壁と東壁は直立した後わずかに広がる。西壁はなく、bとつながるが、bの底面とcとの間にわずかに残る西壁上場との間に、緩く傾斜する中場がある。規模は平面長径125cm、平面短径83cm、底面長径66cm、底面短径56cm、深さ81cmを測る。

d柱穴　東辺にある。平面形態は平面形・底面形とも楕円形を呈する。２個の重複か。ほぼすべての壁面が直立している。南壁及び北壁はわずかに内湾気味。規模は平面長径126cm、平面短径101cm、底面長径75cm、底面短径48cm、深さ88cmを測る。

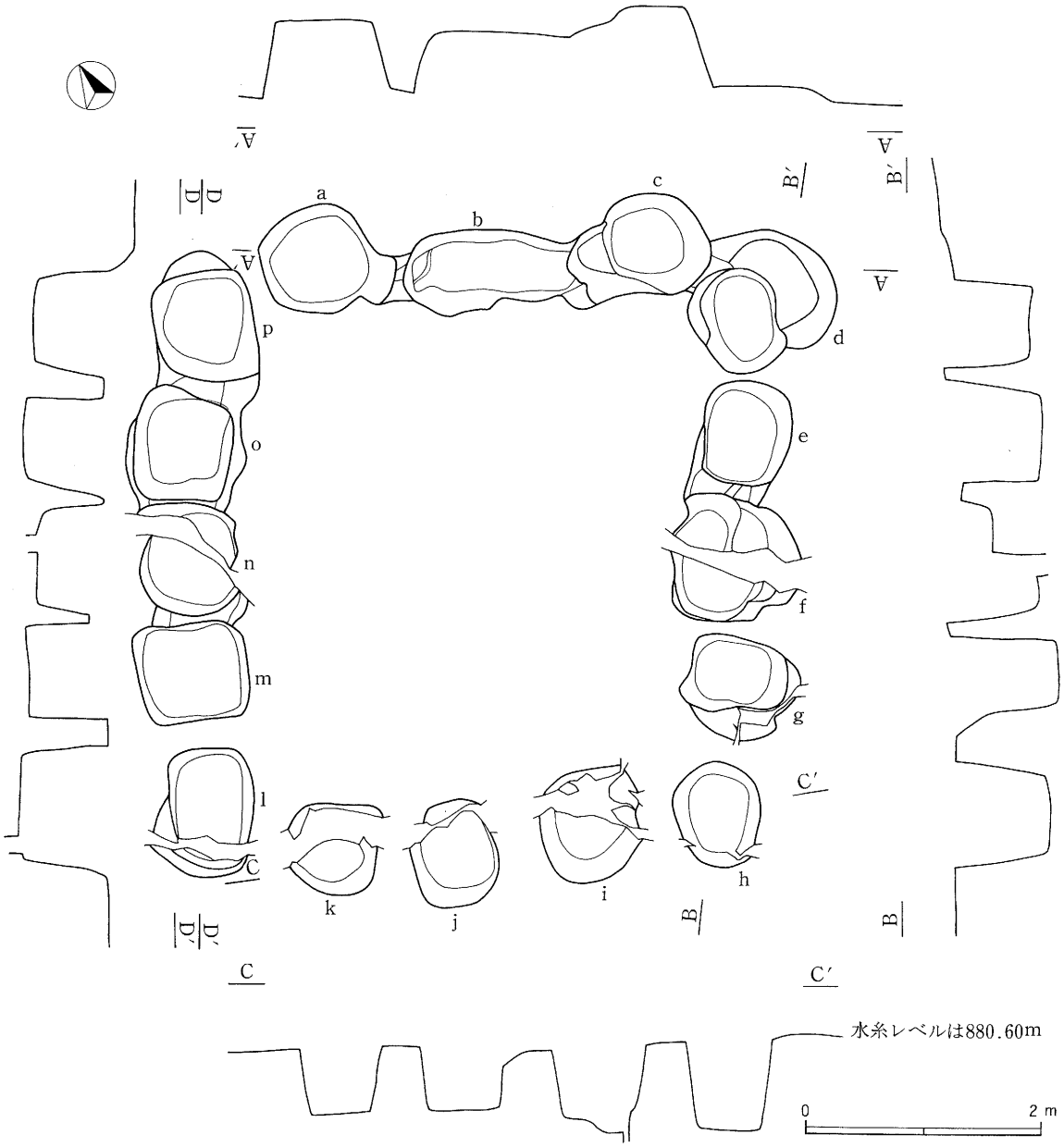
e柱穴　東辺にある。平面形態は平面形・底面形と隅丸方形を呈する。底面南に小さなクラックが入るが、形状には影響を与えていない。西壁は直立で、他の壁もほぼ直立している。規模は平面長径90cm、平面短径74cm、底面長径76cm、底面短径58cm、深さ91cmを測る。

f柱穴　東辺にある。平面形態は不整形を呈する。南北に段差が認められるのはクラックによるもの。底面の北東に一段高い中場がある。西壁は直立、南壁もほぼ直立するが、北壁及び東壁は傾斜している。東西にクラックが走り南北に20cm程広がり、段差も20cmほどある。また、横ズレも認められる。段差は北が高く、南が低い。規模は平面長径112cm、平面短径106cm、底面は不明であるが、深さ83cmを測る。

g柱穴　東辺にある。平面形態は不整形を呈する。西壁は直立、北壁は内湾気味に立ち上がり、中程より上でやや袋状となっている。東壁から南壁にかけてクラックが入っており、壁の状態は悪い。規模は平面長径94cm、平面短径85cm、底面長径66cm、底面短径50cm、深さ98cmを測る。

h柱穴　東辺にある。平面形態は楕円形を呈する。北壁はクラックが入りズレている。西壁と東壁は直立、南壁は内湾気味に直立する。南壁際にも小さいクラックが入るが、形状を変えるほどではない。規模は平面長径92cm、平面短径70cm、底面長径69cm、底面短径49cm、深さ81cmを測る。

i柱穴　南辺にある。北側にクラックが東西に走り、底面を大きく広げている。北壁は内湾気味に直立する。他の壁は内湾気味に直立している。規模は平面長径94cm、平面短径84cm、底面長径は不明であるが、底面短



第61図　C18号方形柱穴列（1/60）

径59cm、深さ68cmを測る。

j柱穴　南辺にある。平面形態は平面形・底面形とも隅丸方形を呈する。北側にクラックが15～20cmの幅で走っている。北壁は直立、東西の壁も直立気味で、南壁はわずかに傾斜している。規模は平面長径90cm、平面短径70cm、底面長径64cm、底面短径59cm、深さ58cmを測る。

k柱穴　南辺にある。内面である北壁側が直線的で、外側の南壁側が曲線的。北側に20～25cm幅でクラックが走っている。大きく形状を変えており、不整形を呈する。北壁は直立、他はわずかに傾斜している。規模は平面長径77cm、平面短径73cm、底面長径は不明であるが、底面短径57cm、深さ60cmを測る。

l柱穴　西辺にある。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。南側にクラックが走る。東壁・北壁・南壁は直立、西壁は直立した後広がるが、クラックによるものか。規模は平面長径114cm、平面短径74cm、底面長径91cm、底面短径59cm、深さ76cmを測る。

m柱穴　西辺にある。平面形態はやや東西に長い隅丸方形を呈する。壁はすべて直立。規模は平面長径96cm、平面短径84cm、底面長径85cm、底面短径76cm、深さ72cmを測る。

n柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。クラックにより多少横ズレが認められる。規模は平面・底面とも不明であるが、深さは78cmを測る。

o柱穴　西辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。壁はすべて直立。北壁はわずかに袋状となる。規模は平面長径104cm、平面短径87cm、底面長径73cm、底面短径66cm、深さ96cmを測る。

p柱穴　西辺にある。平面形態はやや南北に長い隅丸方形を呈する。壁はすべて直立。規模は平面長径114cm、平面短径84cm、底面長径78cm、底面短径66cm、深さ89cmを測る。

20　C19号方形柱穴列（第62図、図版48－1）

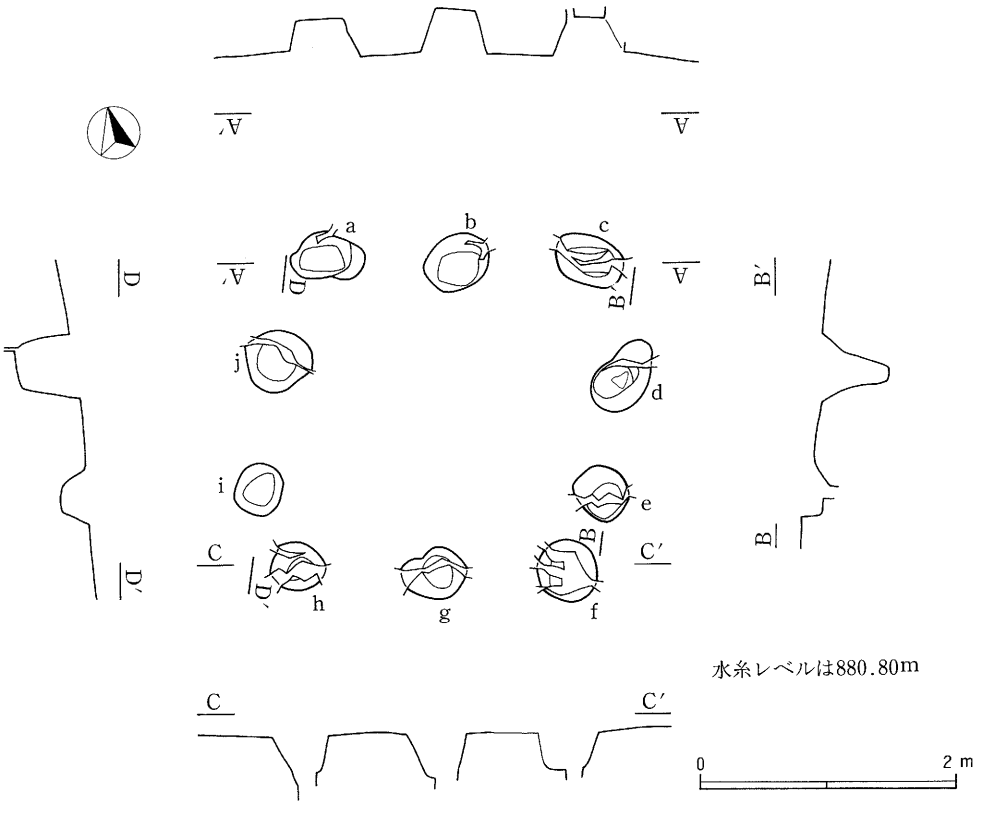
長辺3本、短辺2本の柱穴からなる。規模は、長軸270cm、短軸250cmを測る。長軸方向は、N－68°－Wを指す。

a柱穴　北辺にある。平面形態は不整形を呈する。壁の状態は良くない。規模は平面長径56cm、平面短径36cm、底面長径37cm、底面短径21cm、深さ33cmを測る。

b柱穴　北辺にある。平面形態は平面形、底面形とも楕円形を呈する。南壁は直立し、他は傾斜している。規模は平面長径55cm、平面短径42cm、底面長径36cm、底面短径29cm、深さ41cmを測る。

c柱穴　北辺にある。平面形態は不整形を呈する。壁の状態は良くない。規模は平面長径55cm、平面短径40cm、底面長径39cm、底面短径23cm、深さ34cmを測る。中央にクラックが入る。

d柱穴　東辺にある。平面形態は隅丸方形を呈する。壁はいずれも傾斜している規模は平面長径61cm、平面短径40cm、底面長径14cm、底面短径11cm、深さ60cmを測る。クラックが入る。



第62図　C19号方形柱穴列（1/60）

e柱穴　東辺にある。平面形態は不整形を呈する。浅い。規模は平面長径47cm、平面短径41cm、底面長径30cm、底面短径25cm、深さ28cmを測る。クラックが入る。

f柱穴　南辺にある。平面形態は円形を呈する。底面はクラックが入り、凹凸が激しい。壁は北西側が直立している。規模は平面長径47cm、平面短径47cm、底面長径32cm、底面短径28cm、深さ31cmを測る。

g柱穴　南辺にある。平面形態は不整形を呈する。壁は北壁が直立で、他は傾斜している。規模は平面長径50cm、平面短径42cm、底面長径28cm、底面短径22cm、深さ44cmを測る。クラックが入る。

h柱穴　南辺にある。平面形態は不整形を呈する。やや深いが、クラックの所為か。規模は平面長径44cm、平面短径39cm、底面長径23cm、底面短径15cm、深さ53cmを測る。

i柱穴　西辺にある。平面形態は円形を呈する。浅く、壁もしっかりしていない。規模は平面長径41cm、平面短径33cm、底面長径29cm、底面短径22cm、深さ27cmを測る。

j柱穴　西辺にある。平面形態は円形を呈する。底面はクラックが入り、凹凸が激しい。壁は北壁が直立で、他はわずかに傾斜している。規模は平面長径52cm、平面短径48cm、底面長径34cm、底面短径30cm、深さ52cmを測る。

(3)　土坑・集石土坑・集石（図版49～51）

今回の報告に掲載できなかったが、この他に検出された遺構に土坑と集石土坑・集石がある。

土坑は57基が検出されている。A区では29基の土坑が検出されている。当初、A1号方形柱穴列の各柱穴を土坑として扱っていたが、A区には柱穴状の土坑と、皿状の土坑がある。皿状の土坑は、平面形は不整形で、非常に浅いものが多い。A1号土坑の様に一括土器を出土したものでも、深さは遺構確認面から20cmを僅かに超えるにすぎない。A1号土坑の他に遺物を出土した土坑には、A3号土坑があり、黒曜石製のスクレイパーを出土している。しかし、ほとんどの土坑からは、遺物は何も出土していない。

B・C区からは28基の土坑が検出されている。その内の5基は陥し穴と考えられる。その他のB・C区で検出された土坑は、A区に比してやや深いものの、浅いものが多い。本遺跡における土坑の分布は、3～4基の土坑がまとまる例はあるものの、全体として数も少なく、集落内に土坑群を形成している様子も見られない。

時期については土器を出土したA1号土坑は縄文時代前期前半と考えられる。南斜面の縄文時代中期と考えられる住居址と重複している土坑も幾つか検出されているが、それらの土坑は土層断面、あるいは土坑に落ち込んだ礫の出土状態から住居址よりも新しいことが、確認されている。それ以外のものについては不明といわざるを得ないが、その多くは住居址や方形柱穴列に近い時期なのではないかと推測される。陥し穴の時期については、その内の1基がB6号住居址と重複しており、住居址に貼り床がなされていたと考えられることから、縄文時代前期前半よりも古い時期のものと考えられる。

なお、集石土坑と集石は、一段低いB′区で各1基が検出されている。B′区からは、量は少ないものの、撚糸文土器を始め、押型文土器、中期の土器など様々な時期の土器が出土しており、時期については不明と言わざるを得ない。

第２節　平安時代

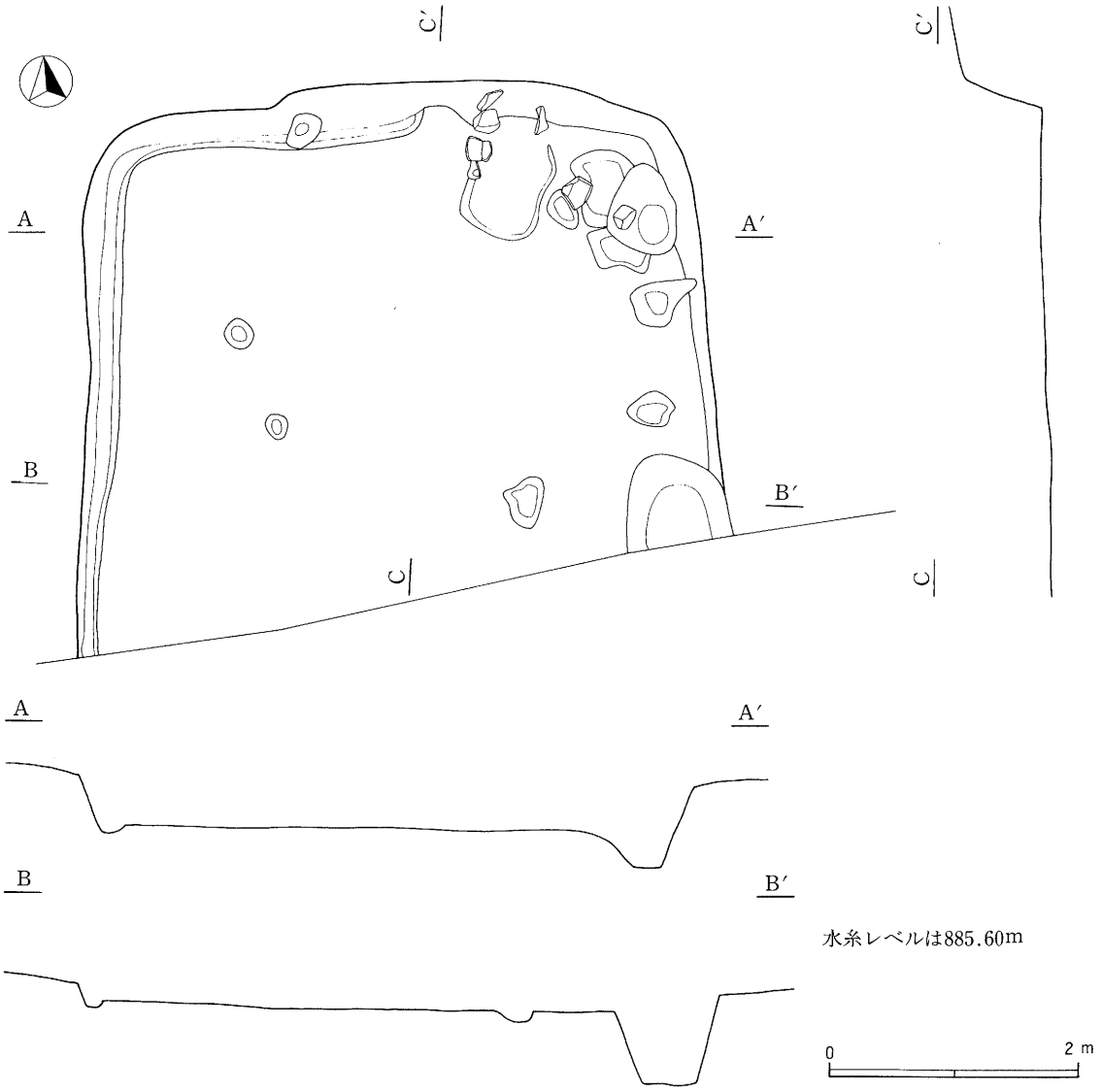
平安時代と考えられるものには、住居址がある。

(1)　住居址

住居址は、Ａ区で１軒が検出されている。

１　Ａ９号住居址（第63図、図版11）

本住居址は、台地南斜面の中段にあり、今回の調査区の南端に位置する。平面形態は方形を呈するものと考えられるが、南側が斜面となっており、用地外へ続くため、土手を残しての調査となり、南壁の検出は出来なかった。規模は東西528cm、南北は不明、壁高は60cmを測る。長軸方向はＮ－08°－Ｅを指す。主柱穴と考えられるものは見られなかったが、９～45cmのピットが７と、深さ60cmの土坑状の落込みが東壁際にある。カマドは石組カマドで、北壁中央よりやや東に寄った所にある。周溝は北壁側と西壁側で検出されたが、東壁側には見られない。南壁側は不明。



第63図　Ａ９号住居址（1/60）

第Ⅴ章　下原山茂佐久保遺跡の調査

本文は、調査終了後、調査を担当された県埋蔵文化財センター派遣の上田典男、町田勝則両調査研究員によって提出された文書を元に、編者が一部を改変した後再録した。遺構の検出状況、遺物の出土状態の図版等を省略したことにより、文意が伝わらなかったとすれば、編者の責任である。

第１節　調査の方法と経過

調査は、文化課の指導による４地点（Ａ～Ｄ地点）の面的な調査と、文化課の試掘トレンチNo.５～７の間を補足するトレンチ調査を実施した。手順としては、Ａ・Ｄ地点の面的調査及び補足のトレンチ調査（No.23～25）と、Ｂ・Ｃ地点の面的調査の二手に分れ着手した。なお、Ｃ地点については落葉松林という現況にあったため、No.13トレンチで検出されていた土器集中を精査したのち、伐採・抜根、そして面的調査へと進めた。調査にあたっては、試掘トレンチの断面観察後、バックフォーを使用し、表土及びローム層への漸移層を除去し、人力により遺構検出するという方法をとった。また、状況に応じてブルトーザーを使用し、表土の除去を行った。

調査期間中に造成工事が開始され、当初「緩衝地帯」として造成工事が行われないＡ地点の東側部分が、重機の侵入路となった。その結果、重機の轍がローム層上面にまで達し、この部分の斜面部がほとんどローム面を露出する事態となり、この地区についても発掘調査することを余儀なくされた（Ａ′地点）。したがって、調査総面積は18,000㎡と膨大な面積となり、伐採・抜根作業の遅れも加わり、調査期間が予定を上回ることとなった。なお、調査期間は平成３年７月８日から同年８月３日までである。

測量方法は、平板測量を基本に、部分的に簡易遣り方測量を用いた。標高は、阿久尻遺跡Ｃ区のＢ．Ｍ（882.000m）を基準とし、Ｃ地点にＢ．Ｍ．Ｃ（892.965m）、Ｄ地点にＢ．Ｍ．Ｄ（884.365m）を設けた。

調査日誌抄

７月８日　Ｃ地点：文化課試掘トレンチ（No.12～15）の断面図作成。No.13トレンチ内で検出されていた土器集中の精査及び平面図作成。

Ｄ地点：No.１とNo.２トレンチの間を重機により表土の除去。

７月９日　Ｃ地点：伐採作業。

Ｄ地点：No.１トレンチの断面図作成。No.２とNo.５トレンチの間を重機により表土及び漸移層の除去。

７月10日　Ｂ地点：重機による表土除去。No.５とNo.６トレンチの間に、尾根の傾斜に沿う形でNo.23トレンチを入れる。

７月11日　Ａ地点：重機による表土除去。

７月15日　Ｄ地点：調査終了。

７月17日　Ａ地点：調査終了。

Ｂ地点：調査終了。

Ｃ地点：重機による抜根と表土除去。

７月22日　Ｃ地点：１号土坑検出。

７月23日　Ｃ地点：２号土坑検出。１号遺物集中の精査。

７月25日　Ｃ地点：１号遺物集中より押型文土器と石鏃等出土。

7月26日　A′地点：重機による表土除去と遺構検出。調査終了。

7月29日　C地点：3号土坑検出。No.6とNo.7トレンチの間にNo.24・25トレンチを傾斜に沿った形で入れる。

8月1日　C地点：2号遺物集中精査。

8月3日　C地点：1・2号遺物集中とも農道側等に調査区を拡張する。調査終了。

第2節　調査概要

A地点：ローム層の上に表土がのる。地主の話では、水田造成の際に削平し、埋まった部分は畠地として利用したとのこと。また、A地点西端部からC地点に通ずる農道のあたりに、かつて堤があったそうである。A地点を削平した土が利用されたことも考えられる。この話を聞いた時点で、人力による遺構検出を中止し、調査終了とした。なお、遺存するローム面は平坦であり、遺構・遺物とも何等検出されなかった。

A′地点：A地点同様ローム層の上に表土がのる。地主の話では削平はA地点からとのことであるが、土層の堆積状況からすればこの地点もそれが及んでいるだろう。遺存するローム面では、農道の北側4～8mのところが尾根頂部となっており、そこから北へはやや傾斜がきつくなっており、南へは緩やかな傾斜となる。断層による溝状の落ち込みが尾根方向を斜めに走っている。土器の小破片が1点、この落ち込みから出土した。

B地点：A地点同様ローム層の上に表土がのる。この部分も、水田造成等の際に削平が行われたとのこと。当時の「ムロ」が斜面部で検出されている。遺存するローム面には機械耕作の痕跡が生々しい。ここでも断層による溝状の落ち込みが検出された。遺構・遺物とも皆無である。

C地点：保存状況が良い地点であり、縄文後期の一括土器、遺物集中箇所、縄文中期の遺物集中箇所、縄文早期（押型文期）の遺物集中箇所、時期不明の土坑3基、遺物集中箇所が検出された。遺物では、当該時期の土器片と石鏃・特殊磨石・剝片類などが出土した。幾らか斜面部に移行しており、農道において遺物が数多く表採されることなどからも、しっかりとした生活の痕跡は平坦面の広がる原村分にあるものと思われる。

D地点：部分的に暗褐色土の遺物包含層が残る（No.4～No.5トレンチの間の農道際）が、他はローム漸移層の上に表土がのる。この地点についても農地等の造成のために削平があったことが土層の堆積状況から知ることができた。遺物は表土中から縄文中期の土器片が2点出土したのみで、ローム層を掘り込むような遺構は検出されなかった。生活の痕跡があるとすれば、No.4～No.5トレンチの間でも農道際の原村分にあると予想される。

No.23～25トレンチ：No.23トレンチの東半部で暗褐色土の遺物包含層がみられたが、遺物・遺構とも検出されなかった。No.24・25トレンチを入れた地区は、地形図上比較的平坦で遺構の存在等が予想されたが、土層の堆積状況から後世の人為的な地形改変により、原地形をとどめていないものと判断した。

茂佐久保遺跡では、縄文早期・中期・後期と微弱ではあるが生活の痕跡が捉えられた。しかし遺跡の立地環境は、阿久尻遺跡よりもさらに平坦面の面積が狭い痩せ尾根であり、湧水や大早川が北側にあるものの、集団が長期にわたって生活を営む上では不都合であったものと考えられる。今回の調査区（茅野市分）は、斜面部が多く、また、結果的に農地造成のために削平を受けている地点の調査となってしまったため、遺跡の性格を知る上で満足のいく調査成果を上げられなかった。また、阿久尻遺跡との関係や両遺跡に挟まれる谷部の古環境なども不明である。

第VI章　方形柱穴列柱痕の土壌化学分析報告

第１節　はじめに

阿久尻遺跡（長野県茅野市金沢木舟所在）は、八ヶ岳西南麓から延びる台地の先端部（標高860m）に立地する。同じ台地上には国指定史跡の阿久遺跡が隣接している。

今回の発掘調査により、縄文時代早期から平安時代にわたる遺構・遺物が検出されている。とくに縄文時代前期前半の方形柱穴列と集落が確認された。発掘調査において方形柱穴列の断ち割り調査が行われ、柱穴の土層断面観察が詳細に行われた。その結果、柱穴内に柱痕を示唆する断面構造が確認された。しかし、柱穴に柱自体は残存しておらず、柱が立てられたまま自然に朽ちたものなのか、あるいは人為的に抜き取られたものなのか発掘調査の課題とされた。この調査課題は、方形柱穴列がどのような目的で構築されたものかを考える上で最も重要であり、集落の形成・廃絶を論じるために解決しなければならない課題でもある。

今回、茅野市教育委員会より上記課題の自然科学的方法による分析調査が当社に依頼された。当社では本遺跡の現地踏査を行った上で分析調査内容について協議し、土壌理化学分析を中心とする自然科学分析調査を実施することとした。なお、分析項目および分析点数は、土壌理化学分析IIIが126点である。

第２節　分析調査課題の設定

柱の分析調査は、一般的に柱穴覆土中に遺存している炭化材・炭化物の種類を同定し、柱材として使用された木材の種類を推定する方法が多い。しかし、今回は柱材の一部と推定される炭化材はほとんど遺存しておらず、その種類を知ることは不可能と判断した。次に問題となったのは、柱痕とみられる覆土は、柱を抜き取った後に周辺と土壌が流入したものか、柱が自然に朽ちて形成された土壌なのかという点であった。

ところで、柱穴内で柱材がそのまま朽ちた場合には、柱材を構成する有機物などが分解した成分が覆土中に残存すると予想される。また、人為的に柱を抜き取った場合には、他の要因による何らかの汚染がないかぎりは、その後に覆土中に周囲の土壌と同様な成分が含有されていると予想される。両者の判別には、土壌化学性の違いを明らかにすることが有効と考えられる。

そこで、今回の分析調査では、上記の仮定に基づいて柱穴の覆土と周囲の土壌の土壌化学性の違いを比較・検討することで、柱材の痕跡の有無、すなわち柱穴の覆土の形成過程を推定する。なお、今回は土壌化学性の中でも特に生物（植物）に関連の深い腐植とリンに関する分析項目を選択した。

ａ．腐植分析

柱材、つまり木材成分のほとんどは有機物である。土壌中に埋積した柱材は、土壌微生物の分解活動が充分な条件（酸化的条件）で分解が進み、最終的には炭酸ガスと水になる。その分解過程で比較的分解されにくいものが土壌腐植として残存する。つまり、柱穴内で柱材が朽ちた場合には従来の土壌よりも腐植含量が高くなると考えられる。本分析では、柱痕内外の覆土で土壌腐植含量および組成の違いがあるか否かを確認する。

b．リン分析

木材には有機物だけでなく、リン・石灰・カリなどの無機成分も含まれる。腐植同様に柱穴内で柱材が朽ちた場合には、覆土中にこれら成分が蓄積すると予想される。このうち、リンは土壌中を移動しにくく、しかも土壌本来の含有量が比較的少ない。したがって、外的要因による差異が明確に現れる。本分析では、柱痕内外の覆土にリン含量の違いがあるか否かを確認する。

第3節　試　　料

今回の分析調査では、茅野市教育委員会より採取されたC区の7号方形柱穴列、9号方形柱穴列の2基を分析対象とした。試料は、それぞれの柱穴列に設けられた覆土層観察用の断面から採取された。その際、柱穴覆土中の腐植およびリンの濃集を平面的・層位的に検討するために、層厚5㎝程度の層位試料採取場所が数列設定された。採取された試料の中から、7号方形柱穴列では8点（ピットo－2で4点、ピットn－3で4点）、9号方形柱穴列では118点（ピットe－2で30点、ピットm－2で20点、ピットc－2で26点、ピットo－2で19点、ピットd－2で23点）を選択して各分析に供した（図64･65）。したがって、分析総点数は合計126点である。

第4節　分析項目と方法

分析は、土壌標準分析・測定法（土壌標準分析・測定法委員会編，1986）、土壌養分測定法（土壌養分測定法委員会編，1981）、農芸化学実験書（京都大学農学部農芸化学教室，1957）、標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局，1967）、土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）、分析化学便覧（日本分析化学会編，1991）、熊田・太田法（熊田・太田，1963）、弘法・大羽法（大羽，1964）などを参考にした。以下に各項目の操作行程を示す。

(1)　分析試料の調製

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。この一部を細かく粉砕し、0.5㎜の篩を全通させる（微粉砕試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。

(2)　炭素含量、窒素含量およびC／N比（炭素率）の測定

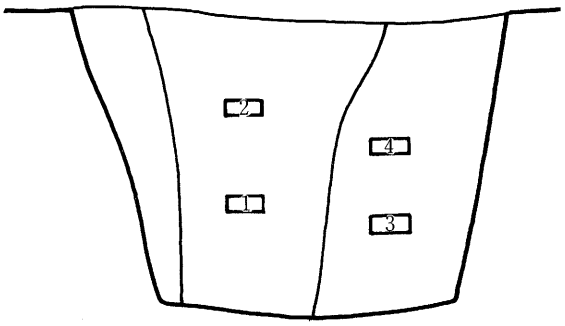
微粉砕試料100～1,000㎎を正確にはかり、助燃剤（酸化コバルト）5ｇと混合する。これをサンプルボードに乗せて、CNコーダー（柳本制作所製）に挿入する。挿入された試料をキャリアガス（He）気流中で950℃に加熱燃焼する。発生した燃焼ガスを純化させ、CO_2及びN_2の組成にする。次いで希釈、分取の工程を経て、TCD検出器により炭素及び窒素の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたりの炭素含量（T－C％）と窒素含量（T－N％）を求める。また、求められた炭素含量と窒素含量の比からC／N比（炭素率：以下、C／N比とする）を算出する。

(3)　腐植分析

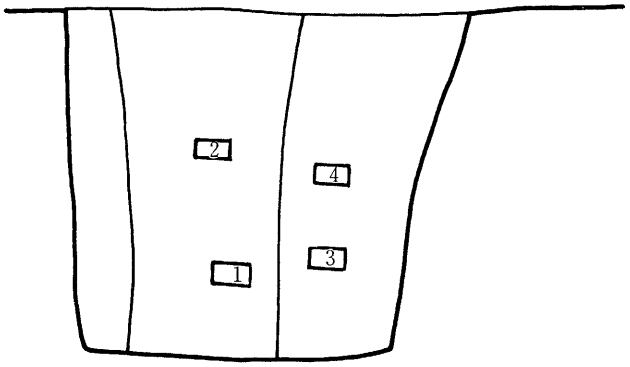
a．浸出法

有機炭素量約100㎎に相当する重量の微粉砕試料を100ml三角フラスコに正確に秤りとる。これに0.1N水酸化ナトリウム溶液30mlを加え、沸騰湯浴中に浸積して30分間加熱する。冷却後、硫酸ナトリウム飽和水溶液

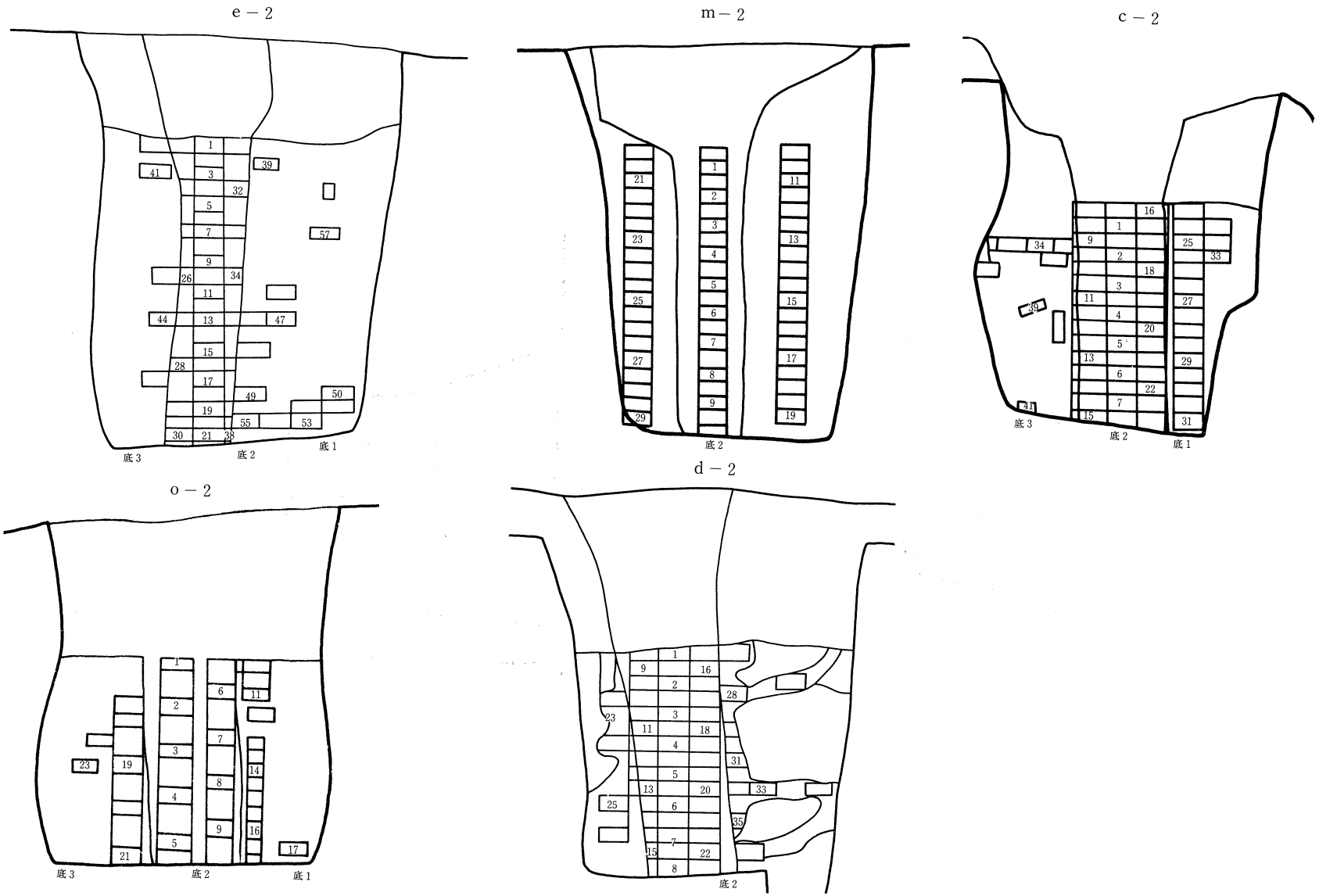
o－2



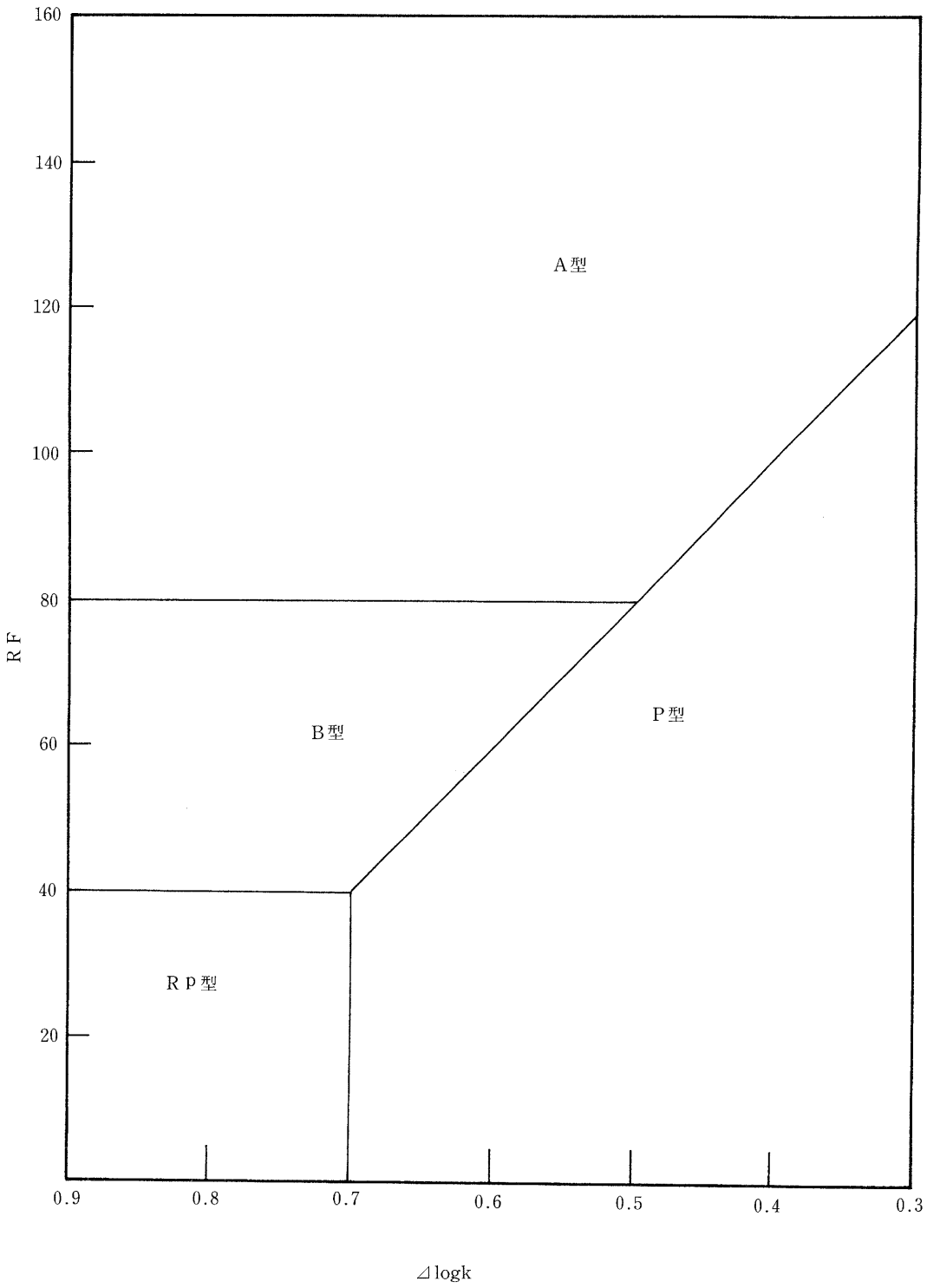
n－3



第64図　Ｃ７号方形柱穴列の分析試料採取層位



第65図　Ｃ９号方形柱穴列の分析試料採取層位



第66図　腐植酸の分類図

熊田（1977）を基に、一部を加筆した。A型、P型、B型、Rp型は、それぞれ腐植酸の分類型を示す。

を2.5ml加えて攪拌し、遠心分離によって透明な腐植溶液を得る。また、抽出液と同じ濃度の溶液20mlで残渣を洗浄・遠心分離し、抽出液に合わせて100mlに定容する（抽出腐植液）。

b．腐植酸・フルボ酸の分別

抽出腐植溶液20mlを200ml容三角フラスコにとり、濃硫酸0.2ml（抽出腐植溶液に対して1/10量）を加えて小ガラス棒を用いて約30秒間激しく攪はんし、一夜放置する。これを小型のロートと乾燥ろ紙を用いて100mlメスフラスコにろ別する（フルボ酸液）。なお、ろ紙上の沈澱物は硫酸（１＋100）で洗浄する。その際の洗液はろ液と合わせて100mlに定容する。ろ紙上の沈澱物とロートを250mlメスフラスコ上に移し、0.1N水酸化ナトリウム溶液で沈澱物を溶解し、同溶液で250mlに定容する（腐植酸液）。

c．腐植酸の吸光度測定

腐植酸液の一定量を採取して0.1N水酸化ナトリウム溶液で正確に希釈し、600nmの吸光度を0.1～0.2程度になるようにする（腐植酸比色液）。この液について分光光度計を用いて400nmと600nmの吸光係数を測定する。ただし、腐植酸液の吸光度がこの範囲またはそれ以下の場合は腐植酸液そのもので測定する。

d．酸化滴定

必要に応じて適当に希釈したフルボ酸液、腐植酸液の一定量をそれぞれ200ml三角フラスコに採取する（以下、この２種の試料液は同じ操作をする。）。これに1/10N過マンガン酸カリウム溶液（0.1N$KMnO_4$）20mlを正確に加え、硫酸（１：10）10mlを加えた後に全液量を水を用いて50mlとする。これを激しく沸騰している湯浴中に正確に15分間浸積して加温して取り出した後、直ちに0.1Nシュウ酸25mlを正確に加えて１～２分間湯浴上で温めて脱色させる。その後、1/10N過マンガン酸カリウム溶液を用いて液が淡紅色になるまで滴定し、その消費量を求める。この消費量から、腐植抽出液とフルボ酸液１ml当たりの1/10N過マンガン酸カリウム溶液消費量（単位：ml）と腐植酸比色液30ml当たりの1/10N過マンガン酸カリウム溶液消費量（単位：ml）を算出する。

e．結果の表示と項目の内容

ａ～ｄによって求められた測定値から以下に示す項目を算出する。また、これらの結果から熊田（1977）の方法に基づいて腐植酸の型を決定する。これらの項目は腐植の研究に精通されていない方には馴染みにくい項目なので、ここでは各項目の内容についても若干解説しておくことにする。

①腐植酸とフルボ酸の含量

腐植酸は土壌１ｇ当たりの抽出腐植酸量（単位：ml）、フルボ酸は1/10N過マンガン酸カリウム溶液消費量（単位：ml）にそれぞれ換算する。

腐植酸は、黄褐色あるいは黒褐色の無定形の不均質な重縮合物質群であり、土壌に加えられた有機物が分解－重縮合の腐植化過程を経て生成される。分子量は数万程度で、結晶化せず、一定の融点をもたない酸性物質であり、炭素50～60%、酸素30～40%、水素３～６%、窒素２～６%を含む。カルシウム、マグネシウム、カリウムなどの陽イオンを保持する能力である陽イオン交換容量は200～800me/100ｇと大きく、これは腐植化度が高いほど増大する。腐植酸は、腐植物質の性質を代表するものであるが、腐植化度の程度によって腐朽物質（生物遺体が分解する過程における初期段階の未熟なもの）、真正腐植酸（腐植化度の高いもの）

と呼ぶ。

フルボ酸は、腐植酸よりも分子量が小さな黄色の物質群、および多種の物質を含む非腐植物質群からなっている。この黄色の物質群は、腐植酸と同様な構造を持っているが、腐植化の程度が低い。フルボ酸はキレート化合物を形成して、金属元素を可給態化する能力が大きい点で、土壌中で重要な役割を果たしている。また、腐植酸／フルボ酸比は、腐植化度を示すひとつの指標となっている（三好ら，1983）。

②沈澱部割合（PQ%）

抽出された腐植中の腐植酸部の占める割合を示すものであり、腐植酸をａ（ml）、フルボ酸をｂ（ml）として、PQ＝ａ／（ａ＋ｂ）×100の式により算出する。

水酸化ナトリウムを溶媒として抽出した場合、有機質土壌(泥炭質あるいは黒泥質)では、この値が70～80%の極めて高い値を示す。しかし、無機質土壌の表層土では、腐植の多い火山灰土壌で60～70%の値を示す以外はおおむね50%内外の値を示す。ただし、腐植の著しく少ない土壌では、30%ぐらいまで低下することがある。また、下層土においては一般に表層土に比べ低い値となり、とくに腐植含量の極めて少ない土壌やポドソル性土壌などでは、10～20%程度の低い値となることがある（大羽，1964）。

③色調係数（⊿logk）

後述のRF値とともに腐植酸の腐植化度を示す指標である。⊿logk＝logk400－logk600の式で算出する。⊿logkが小さいほど、つまり吸光曲線の傾斜が低いほど腐植化度は高い。一般にこの⊿logkとRFとの間には一定のほぼ逆比例的な関係がある。⊿logk値は、最高のRF値をもつ火山灰土壌の腐植酸で0.48程度であり、RF値が30～50程度の低い値となる洪積層土壌や泥炭質土壌の腐植酸では、⊿logkは0.9～1.0前後の高い値となる（大羽，1964）。

④相対色度（RF）

この値は、腐植化度の程度をあらわす指標のひとつで、この値が高いほど腐植化度は高い（大羽,1964）。

$$RF=\frac{\text{腐植酸比色液の600nm吸光係数（k600）}}{\text{腐植酸比色液30mlあたりの1/10N過マンガン酸カリウム溶液消費量（ml）}}\times 1{,}000$$

上記の式より算出する。

(4)　リン分析

風乾細土試料2.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）５mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量（P_2O_5mg/ｇ）を求める。

第５節　結果・考察

全体の測定結果を表１・表２に、炭素、窒素、Ｃ／Ｎ比、腐植組成（腐植酸、フルボ酸、PQ値、⊿logk、RF値、腐植の型）、リンの各遺構･ピット毎の状態を図67～73に示す。また、熊田（1977）による腐植酸の分類と結果を図66に示す。以下、各遺構・ピット毎に述べる。

(1) Ｃ７号方形柱穴列

ａ．ピットｏ－２（表１・図67）

・炭素含量

柱痕内試料（試料番号１・２）の炭素含量と柱痕外試料（試料番号３・４）では、明らかに柱痕内試料で高い含量が認められる。また、柱痕外試料では試料間のばらつきが大きいのに対し、柱痕内試料では試料間の値が近似している。

土壌中の有機炭素は、土壌腐植（以後、単に腐植と略記する）を構成する主要な元素であり、腐植の約58％（近似値）を占める。また、有機炭素の1.724倍が腐植量と考えられる。したがって、ここでの炭素含量の差は腐植の差として把えることができ、柱痕内試料で腐植量が多いことを示唆する。ただし、柱痕内の覆土が腐植を多量に含有する腐植質火山灰土（いわゆる黒ボク土；以後、黒ボク土と呼称する）であるのに対して、柱痕外の覆土では黒ボク土に腐植含量の少ない黄褐色火山灰土（いわゆるローム）が混入している。炭素含量の違いは、土壌の違いを反映している可能性がある。この点については、後述する腐植組成の結果をふまえて検討する。

・窒素含量

炭素含量と同様に柱痕内試料と柱痕外試料に差異が認められる。これより、炭素含量と同様なことが考えられる。

・Ｃ／Ｎ比

柱痕内試料で高い値が認められる。Ｃ／Ｎ比は炭素と窒素の量比で表すもので、10～12前後の値であることが多い。しかし、有機物の分解程度の低い場合あるいは有機物の腐植化の進んだ場合は、20を越える土壌もある(大羽ら，1988)。一般的に黒ボク土などは、腐植化の進んだ土壌の代表としてＣ／Ｎ比が高い。柱痕内の覆土で高い原因も、柱痕内の土壌が黒ボク土であるためと考えられる。

・腐植組成

柱痕内試料では、ａ値、ｂ値、PQ値、RF値ともに柱痕外試料より高く、⊿logkが低い値を示す。このことから、柱痕内試料の方がより腐植化の進んだ腐植物質を含有していると考えられる。ただし、これらの値はいずれも黒ボク土の一般的な腐植組成と傾向が同じである。一方、熊田（1977）の方法に基づく腐植酸の型は、いずれもＡ型腐植酸であり、型の違いは認められない。したがって、柱痕内で炭素含量、窒素含量が高い原因は、覆土が腐植含量の高い黒ボク土であることによるものと考えられる。

・リン含量

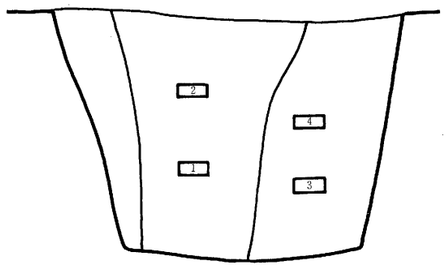
各試料とも2.5～2.7P_2O_5mg/ｇ前後の比較的近似した値を示すが、相対的には柱痕内で0.1P_2O_5mg/ｇ程度高いことが認められる。しかし、一般的に腐植含量の高い土壌はリン含量も相対的に高いとされることから、この差は覆土の違いによるものと考えられる。

ｂ．ピットｎ－３（表１・図68）

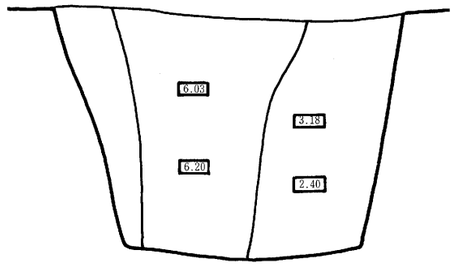
・炭素含量

柱痕内試料では、ピットｏ－２の柱痕内試料とほぼ同じ含量が認められる。しかし、試料番号３ではその約半分の値を示し、両者に明らかな差異が認められる。ただし、試料番号３の土質は黒ボク土にロームが極めて多く含まれている。含量の低い原因は、ローム混入によるものと考えられる。また、含量の高い３試料（試料番号１・２・４）についても、ロームの混入量に応じた差異が認められる。

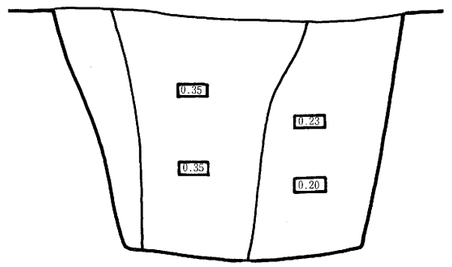
試料採取層位



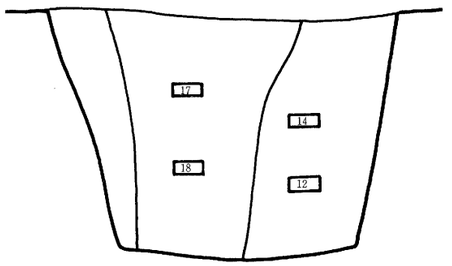
全炭素量（%）



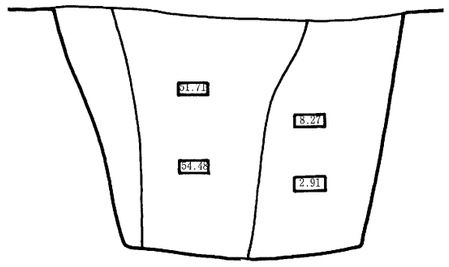
全窒素量（%）



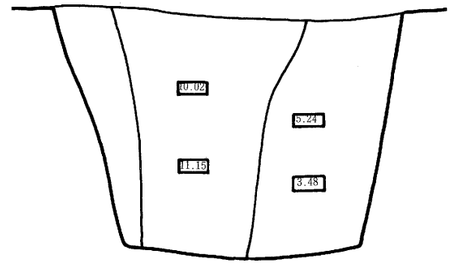
C／N比



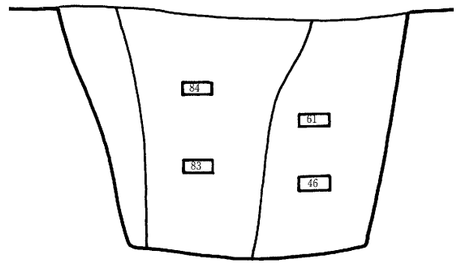
土壌１ｇあたりの抽出腐植酸の1/10N
過マンガン酸カリウム消費量（ml）



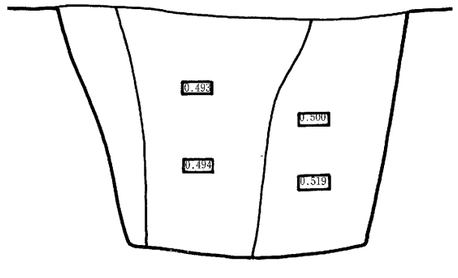
土壌１ｇあたりの抽出フルボ酸の1/10N
過マンガン酸カリウム消費量（ml）



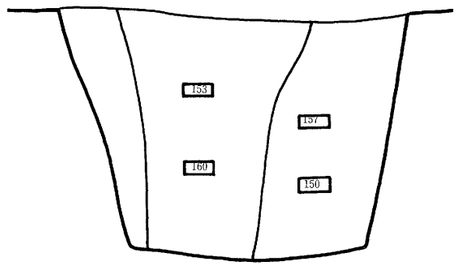
可溶性腐植あたりの
腐植酸の割合（%）



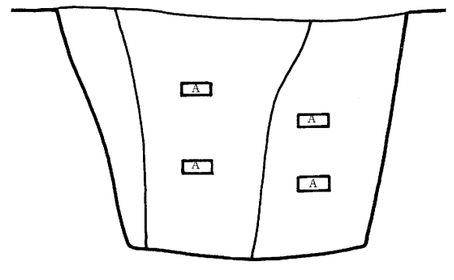
⊿logk



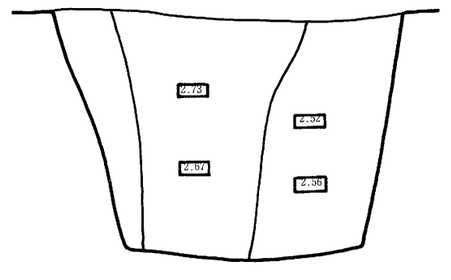
腐植酸単位あたりの
相対色度



分類型



乾土１ｇあたりの
全リン酸量（mg）



第67図　Ｃ７号方形柱穴列ｏ－２の土壌理化学性

第１表　Ｃ７号方形柱穴列の腐植分析（腐植組成と腐植酸の光学的性質）とリン分析の結果

ピット	試料番号	C[*1] %	N[*2] %	C/N比[*3]	腐植組成 a[*4]	腐植組成 b[*5]	腐植組成 PQ%[*6]	腐植酸 Δlogk[*7]	腐植酸 RF[*8]	腐植酸 型[*9]	T-P_2O_5[*10] mg/g	土色・土性[*11]	
o－2	1	6.20	0.35	18	54.48	11.15	83	0.494	160	A	2.67	黒褐色（5YR3/1）	CL
	2	6.03	0.35	17	51.71	10.02	84	0.493	153	A	2.73	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）微量）	CL
	3	2.40	0.20	12	2.91	3.48	46	0.519	150	A	2.56	褐色（7.5YR4/3）	CL
	4	3.18	0.23	14	8.27	5.24	61	0.500	157	A	2.52	暗褐色（10YR3/4）	CL
n－3	1	6.14	0.35	17	55.27	11.38	83	0.497	164	A	2.72	黒褐色（7.5YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）微量）	CL
	2	6.79	0.39	17	105.19	12.92	89	0.499	113	A	2.78	黒褐色（10YR2/2）	CL
	3	3.70	0.24	15	10.15	5.82	64	0.501	168	A	2.76	暗褐色（7.5YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）極富）	CL
	4	6.45	0.38	17	65.68	11.71	85	0.494	151	A	2.64	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL

注）＊1：全炭素量，　＊2：全窒素量，　＊3：炭素率（全炭素量÷全窒素量），　＊4：土壌1gあたりの抽出腐植酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊5：土壌1gあたりの抽出フルボ酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊6：可溶性腐植あたりの腐植酸の割合，　＊7：logk400－logk600，　＊8：腐植酸単位あたりの相対色度，　＊9：熊田(1977)の腐植酸分類図より分類された型，　＊10：乾土1gあたりの全リン酸量(mg)，　＊11：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）。；土性：土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談会編，1984）による（CL…埴壌土，　L…壌土，　SiL…シルト質壌土，　HC…重粘土）

・窒素含量

炭素含量とほとんど同様な結果であり、ピットｏ－２の値と近似している。

・Ｃ／Ｎ比

試料間の差は炭素含量、窒素含量と同様であり、値はピットｏ－２と大きく変わらない。

・腐植組成

試料間に炭素含量の違いによる差異は認められるものの、各項目の値はピットｏ－２と近似する。腐植酸の型も、すべてＡ型である。

・リン含量

各試料間にほとんど差異は認められない。しかし、炭素含量の低い試料番号３で柱痕内試料とほぼ同じ含量が認められる。これは、ピットｏ－２とやや異なる傾向である。

(2)　Ｃ９号方形柱穴列

ａ．ピットｅ－２（表２－その１－，図69）

・炭素含量

柱痕内試料では、含量範囲が2.52～5.08%、平均値4.13%（標準偏差SD：0.657，変動係数CV：15.9）を示す。柱痕内試料の中で平均値よりも低い値を示す試料が柱穴の底部に集中し、あきらかに上部試料と差異が認められる。しかし、各試料の土色からは、底部付近の試料でロームの混じり込みが顕著で、その多少により炭素含量が異なる傾向が示唆される。このことは、７号方形柱穴列でも同様な結果であり、覆土の炭素含量の違いが反映されているものと推定される。

一方、柱痕外試料では含量範囲が2.37～4.14%、平均値3.40%（SD：0.6604，CV：17.8）、柱穴底の地山部分の試料の含量範囲が1.46～1.53%、平均値1.53%（SD：0.035，CV：2.3）を示す。両者ともに柱穴内よりも低い平均含量が認められる。しかし、この差異も覆土の違いに起因すると推定される。

なお、標準偏差（以下、SDとする）と変動係数（以下、CVとする）は、共に統計学上の測定値のばらつきを表す相対尺度である。今回は、この二つの尺度から測定値のばらつきを見ることにより、土壌化学成分の濃集状態を考える。SDは、各々の値と平均値の差の２乗の和を標本（試料）数でわった値の平方根で求める。一般に測定値が非常に多いときは、平均値を原点にとると吊り鐘状の左右対称の曲線を描くことができる。これは確率論によると測定値が平均値±標準偏差の間にある確率は68.3%で、平均値±２倍の標準偏差の間にある確率は95.4%となる。とくに後者の範囲をはずれる測定値は極希な現象とされる。CVは平均値に対する標準偏差の割合をパーセント（%）で表したものである。標準偏差が大きかったり小さかったりするのは、平均値の大きさに左右されることから、平均値に対する標準偏差の割合を%で表した方がよいことがある。

・窒素含量

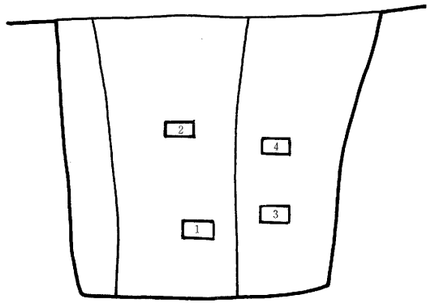
柱痕内試料では、範囲が0.26～0.40%、平均値0.31%（SD：0.043，CV：13.6）を示す。柱痕外試料では、範囲が0.18～0.39%、平均値0.26%（SD：0.057，CV：21.9）を示す。柱穴底の地山試料（試料番号底１～底３）では、範囲が0.13～0.15%、平均値0.14%（SD：0.012，CV：8.1）を示す。

柱痕内外での窒素の含まれ方は、炭素含量でのそれと類似しており、炭素含量と同様なことが推定される。

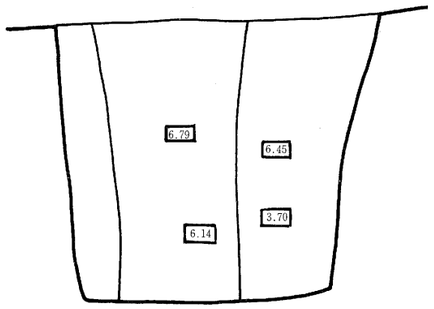
・Ｃ／Ｎ比

柱痕内試料では、範囲が９～17、平均値13（SD：2.3，CV：17.3）を示す。柱痕外試料では、範囲が

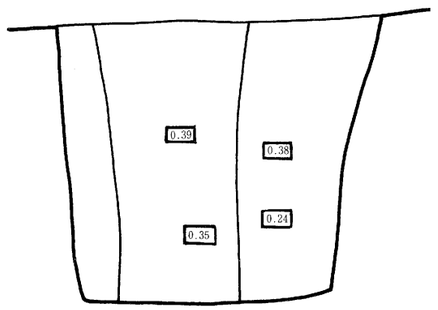
試料採取層位



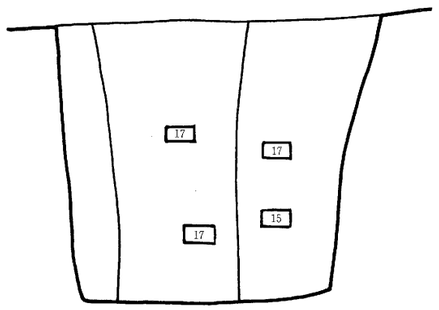
全炭素量（%）



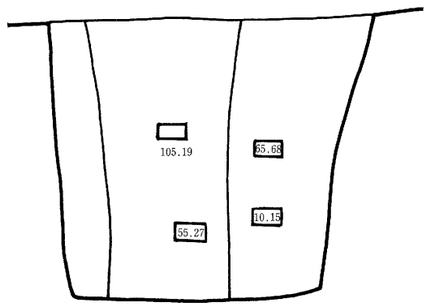
全窒素量（%）



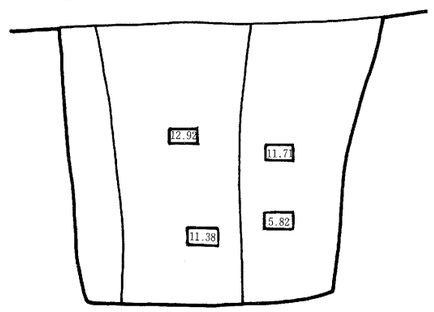
C／N比



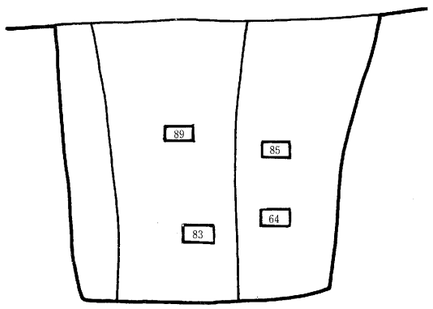
土壌１ｇあたりの抽出腐植酸の1/10N
過マンガン酸カリウム消費量（ml）



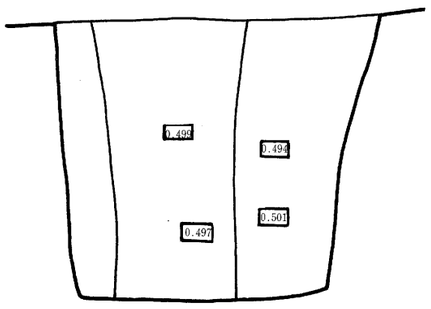
土壌１ｇあたりの抽出フルボ酸の1/10N
過マンガン酸カリウム消費量（ml）



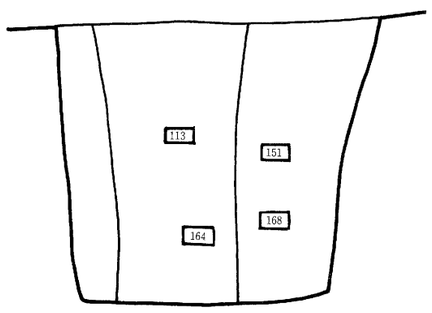
可溶性腐植あたりの
腐植酸の割合（%）



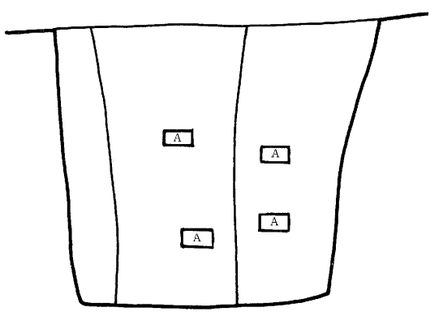
⊿logk



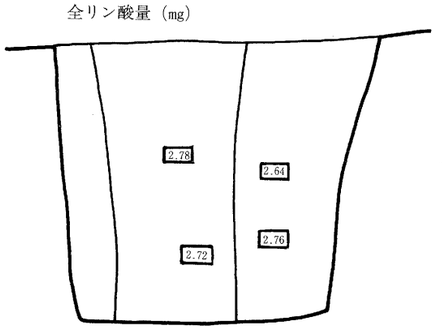
腐植酸単位あたりの相対色度



分類型



乾土１ｇあたりの
全リン酸量（mg）



第68図　Ｃ７号方形柱穴列ｎ－３の土壌理化学性

11～14、平均値13（SD：1.0，CV：7.7）を示す。柱穴底の地山試料では、範囲が10～11、平均値10（SD：0.6，CV：5.6）の数値を示す。

各試料ともにC／N比が20を越えるものはなく、未熟な有機物を含む状態の土壌ではなく、黒ボク土であることが示唆される。

・腐植組成

柱痕内試料では、a値の範囲が8.63～24.85ml/g、平均値15.71ml/g（SD：4.799，CV：30.5）、b値の範囲が1.39～8.89ml/g、平均値5.78ml/g（SD：1.920，CV：33.2）、PQ値の範囲が66～94%で平均値73%（SD：6.3，CV：8.7）、⊿logk値の範囲が0.524～0.553、平均値0.535（SD：0.0092，CV：1.7）、RF値の範囲が126～150、平均値139（SD：6.8，CV：4.9）を示す。柱痕外試料では、a値の範囲が2.96～16.23ml/g、平均値10.41ml/g（SD：4.401，CV：42.3）、b値の範囲が2.31～6.02ml/g、平均値4.92ml/g（SD：1.140，CV：23.2）、PQ値の範囲が56～76%、平均値66%（SD：7.1，CV：10.7）、⊿logk値の範囲が0.527～0.557、平均値0.540（SD：0.0088，CV：1.6）、RF値の範囲が128～172、平均値143（SD：13.4，CV：9.4）を示す。柱穴底の地山試料（試料番号底1～底3）では、a値の範囲が0.07～0.10ml/g、平均値0.08ml/g（SD：0.015，CV：18.3）、b値の範囲が0.74～1.07ml/g、平均値0.95ml/g（SD：0.185，CV：19.4）、PQ値の範囲が7～9%、平均値8%（SD：1.2，CV：13.9）、⊿logkの範囲が0.626～0.659、平均値0.645（SD：0.0171，CV：2.6）、RF値の範囲が76～93、平均値82（SD：9.8，CV：12.0）を示す。

以上の結果から、a値、b値、PQ値では平均値において柱痕内試料で高い傾向が認められる。しかし、これらの値は炭素含量と同様にロームの混入量によって左右されている。すなわち、柱穴内における有機物の供給の差ではなく、覆土そのものの腐植組成を示しているみのと推定される。言い換えれば黒ボク土の腐植組成そのものが現れているとみられる。この点については、⊿logk、RF値などの腐植酸の光学的性質が各試料とも類似していること、あるいはそれから区分される腐植酸の型が黒ボク土のA型と同じであることからも推定される。

・リン含量

柱痕内試料では、範囲が2.45～2.82P_2O_5mg/g、平均値2.65P_2O_5mg/g（SD：0.109，CV：4.1）を示す。柱痕外試料では、範囲が1.99～2.73P_2O_5mg/g、平均値2.42P_2O_5mg/g（SD：0.258，CV：10.6）を示す。柱穴底の地山試料（試料番号底1～底3）では、範囲が2.85～2.88P_2O_5mg/g、平均値2.86P_2O_5mg/g（SD：0.0153，CV：0.5）を示す。

平均値だけで比較すると柱穴底の地山試料（試料番号底1～底3）で最も高く、次いで柱痕内試料、柱痕外試料の順である。しかし、柱痕外試料ではCV値からもわかるように値のばらつきが大きく、柱痕内試料と有為な差があるかは疑わしい。また、柱痕内試料においても木材の成分の残留を示唆する特徴的な濃集は認められず、覆土本来の含量を反映しているように思われる。

c．ピットm－2（表2－その2－，図70）

・炭素含量

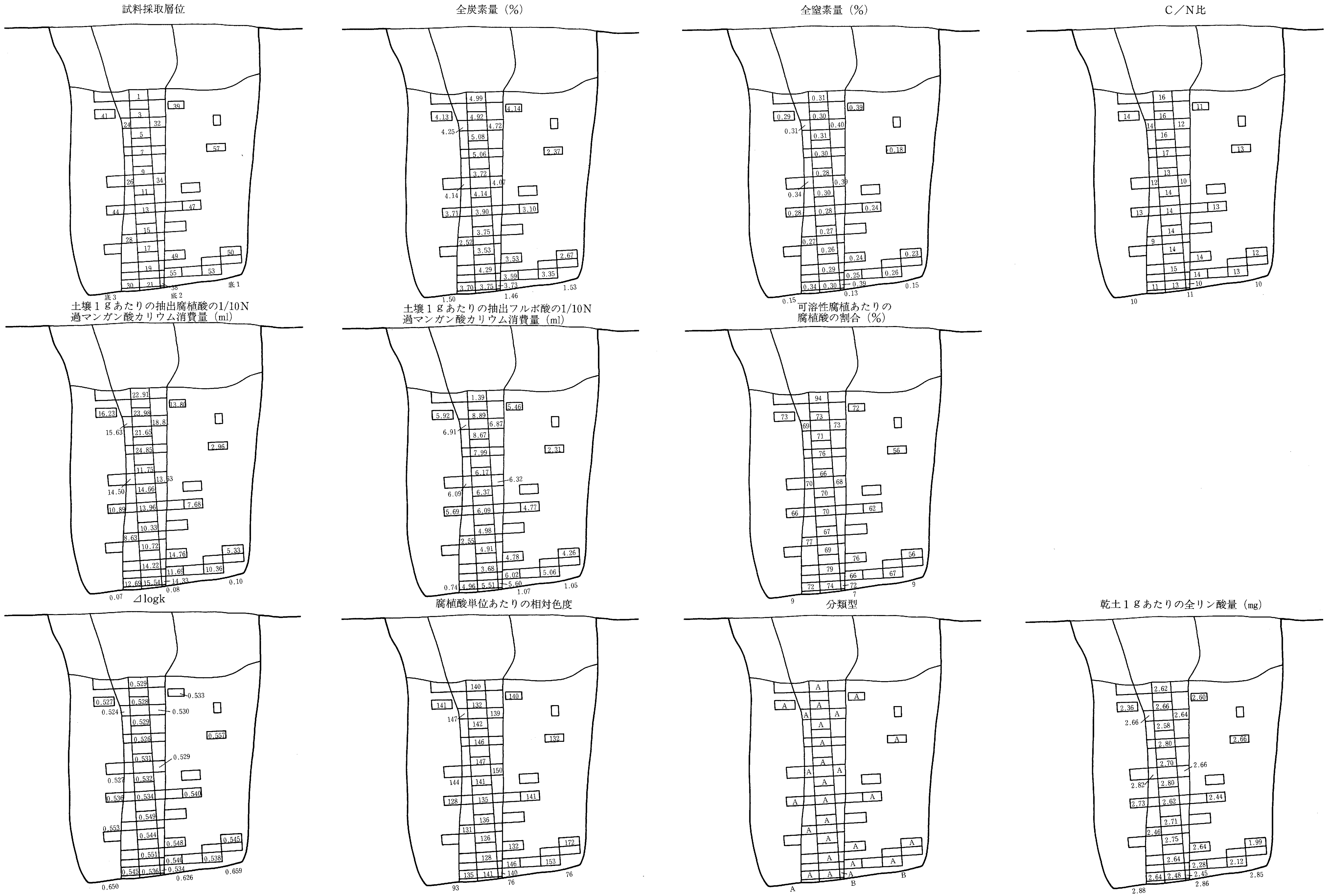
柱痕内試料の含量範囲は4.27～4.82%、平均値4.56%（SD：0.173，CV：3.8）を示す。各試料とも近似した値を示し、柱穴内での有為な差は認められない。柱痕外試料の含量範囲は3.27～4.34%、平均値3.69%（SD：0.353，CV：9.6）である。柱穴底の地山試料（試料番号底2）では0.92%を示す。

両者ともに柱穴内よりも低い平均含量が認められる。しかし、各試料のロームの混入状態を見る限りでは、

第２表　Ｃ９号方形柱穴列の腐植分析（腐植組成と腐植酸の光学的性質）とリン分析の結果　－その１－

ピット	試料番号	C[*1] %	N[*2] %	C/N比[*3]	腐植組成 a[*4]	腐植組成 b[*5]	腐植組成 PQ%[*6]	腐植酸 Δlogk[*7]	腐植酸 RF[*8]	腐植酸 型[*9]	T-P_2O_5[*10] mg/g	土色・土性[*11]
e－2	1	4.99	0.31	16	22.91	1.39	94	0.529	140	A	2.62	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	3	4.92	0.30	16	23.98	8.89	73	0.528	132	A	2.66	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	5	5.08	0.31	16	21.65	8.67	71	0.529	142	A	2.58	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	7	5.06	0.30	17	24.85	7.99	76	0.526	146	A	2.80	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） L
	9	3.72	0.28	13	11.75	6.17	66	0.531	147	A	2.70	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	11	4.14	0.30	14	14.66	6.37	70	0.532	141	A	2.80	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	13	3.90	0.28	14	13.96	6.09	70	0.534	135	A	2.62	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	15	3.75	0.27	14	10.33	4.98	67	0.549	136	A	2.71	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	17	3.53	0.26	14	10.72	4.91	69	0.544	126	A	2.75	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	19	4.29	0.29	15	14.22	3.68	79	0.551	128	A	2.64	暗褐色（10YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	21	3.75	0.30	13	15.54	5.51	74	0.536	141	A	2.48	暗褐色（10YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	24	4.25	0.31	14	15.63	6.91	69	0.524	147	A	2.66	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） L
	26	4.14	0.34	12	14.50	6.09	70	0.527	144	A	2.82	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） L
	28	2.52	0.27	9	8.63	2.55	77	0.553	131	A	2.46	黒褐色（10YR3/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） L
	30	3.70	0.34	11	12.69	4.96	72	0.545	135	A	2.64	暗褐色（10YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） L
	32	4.72	0.40	12	18.81	6.87	73	0.530	139	A	2.64	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	34	4.07	0.39	10	13.63	6.32	68	0.529	150	A	2.66	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	38	3.73	0.39	10	14.33	5.60	72	0.534	140	A	2.45	暗褐色（7.5YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	39	4.14	0.39	11	13.80	5.46	72	0.533	140	A	2.60	黒褐色（7.5YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	41	4.13	0.29	14	16.23	5.92	73	0.527	141	A	2.36	黒褐色（10YR3/1）（橙色（7.5YR6/8）微量） L
	44	3.71	0.28	13	10.89	5.69	66	0.536	128	A	2.73	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）微量） L
	47	3.10	0.24	13	7.68	4.77	62	0.540	141	A	2.44	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	49	3.53	0.24	14	14.76	4.78	76	0.548	132	A	2.64	黒褐色（10YR3/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	50	2.67	0.23	12	5.33	4.26	56	0.545	172	A	1.99	暗褐色（10YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	53	3.35	0.26	13	10.36	5.06	67	0.538	153	A	2.12	暗褐色（10YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	55	3.59	0.25	14	11.69	6.02	66	0.540	146	A	2.28	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	57	2.37	0.18	13	2.96	2.31	56	0.557	132	A	2.66	褐色（10YR4/6）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	底1	1.53	0.15	10	0.10	1.05	9	0.659	76	B	2.85	褐色（7.5YR4/6） CL
	底2	1.46	0.13	11	0.08	1.07	7	0.626	76	B	2.86	褐色（10YR4/6） CL
	底3	1.50	0.15	10	0.07	0.74	9	0.650	93	A	2.88	黄褐色（10YR5/8） L

注）＊1：全炭素量，　＊2：全窒素量，　＊3：炭素率（全炭素量÷全窒素量），　＊4：土壌1gあたりの抽出腐植酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊5：土壌1gあたりの抽出フルボ酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊6：可溶性腐植あたりの腐植酸の割合，　＊7：logk400－logk600，　＊8：腐植酸単位あたりの相対色度，　＊9：熊田(1977)の腐植酸分類図より分類された型，　＊10：乾土1gあたりの全リン酸量(mg)，　＊11：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）。；土性：土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談会編，1984）による（CL…埴壌土，　L…壌土，　SiL…シルト質壌土，　HC…重粘土）



第69図　Ｃ９号方形柱穴列ｅ－２の土壌理化学性

この差異はｅ－２と同様に覆土の炭素含量の違いが反映されているものと推定される。

・窒素含量

柱痕内試料の範囲は0.27～0.31％で平均値0.29％（SD：0.011，CV：3.9）、柱痕外試料の含量範囲は0.22～0.29％、平均値0.25％（SD：0.024，CV：9.3）、柱穴底の地山試料（試料番号底２）では0.08％を示す。

柱痕内外での窒素の含まれ方は、炭素含量でのそれと類似しており、炭素含量と同様なことが推定される。

・Ｃ／Ｎ比

柱痕内試料９点の範囲は15～16で平均値16（SD：0.4，CV：2.8）、柱痕外試料の範囲は14～16で平均値15（SD：0.7，CV：4.6）、柱穴底の地山試料（試料番号底２）は11の数値を示す。各試料ともにＣ／Ｎ比が20を越えるものはなく、未熟な有機物を含む状態の土壌ではなく、黒ボク土であることが示唆される。

・腐植組成

柱痕内試料では、ａ値の範囲が12.17～23.34ml/ｇ、平均値18.72ml/ｇ（SD：3.768，CV：20.1）、ｂ値の範囲が6.26～9.45ml/ｇ、平均値7.97ml/ｇ（SD：0.975，CV：12.2）、PQ値の範囲が60～74％、平均値70％（SD：3.9，CV：5.7）、⊿logk値の範囲が0.526～0.530、平均値0.528（SD：0.0016，CV：0.3）、RF値の範囲が129～151、平均値141（SD：6.9，CV：4.9）を示す。柱痕外試料では、ａ値の範囲が8.65～18.65ml/ｇ、平均値12.83ml/ｇ（SD：3.611，CV：28.2）、ｂ値の範囲が4.98～6.93ml/ｇ、平均値5.67ml/ｇ（SD：0.764，CV：13.5）、PQ値の範囲が62～79％、平均値69％（SD：4.8，CV：7.0）、⊿logk値の範囲が0.520～0.544、平均値0.530（SD：0.0079，CV：1.5）、RF値の範囲が84～147平均値132（SD：17.9，CV：13.6）を示す。柱穴底の地山試料（試料番号底２）では、ａ値が0.06ml/ｇ、ｂ値が1.09ml/ｇ、PQ値が5％、⊿logk値が0.824、RF値が25を示す。

このように、柱痕内試料ではａ値・ｂ値の平均値があきらかに高い。しかし、⊿logk、RF値にみられる腐植酸の光学的性質は柱痕内外に大きな違いはなく、黒ボク土の組成を反映していることが示唆される。また、腐植酸の型も底２の試料をのぞき、すべてＡ型である。

・リン含量

柱痕内試料では、範囲が2.29～2.64P_2O_5mg/ｇ、平均値2.41P_2O_5mg/ｇ（SD：0.128，CV：5.3）、柱痕外試料では、範囲が2.16～2.75P_2O_5mg/ｇ、平均値2.53P_2O_5mg/ｇ（SD：0.177，CV：7.0）、柱穴底の地山試料では、2.84P_2O_5mg/ｇを示す。

平均値だけで比較すると、柱穴底の地山試料（試料番号底２）が最も高く、次いで柱痕外試料、柱痕内試料の順である。しかし、柱穴内外に有為な差は認められない。また、柱痕内だけをみても木材の成分の残留を示唆する特徴的な濃集は認められず、柱材の成分が残留しているとは考えにくい。

ｄ．ピットｃ－２（表２－その３－，図71）

・炭素含量

柱痕内試料の含量範囲は2.18～3.67％、平均値2.94％（SD：0.405，CV：13.8）を示し、柱穴内での差が認められる。しかし、ここでも土色などから判断してロームの混入量の違いによるものと推定される。

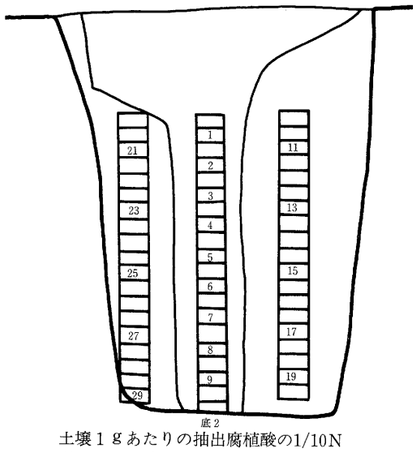
一方、柱痕外試料の含量範囲は1.97～4.29％、平均値3.29％（SD：0.848，CV：25.7）である。また、柱穴底の地山試料（試料番号底１～底３）の含量範囲は1.53～1.68％、平均値1.58％（SD：0.084，CV：5.3）を示す。

第2表　C9号方形柱穴列の腐植分析（腐植組成と腐植酸の光学的性質）とリン分析の結果　－その2－

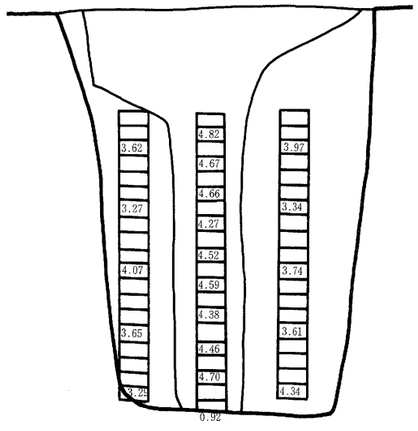
ピット	試料番号	C[*1] %	N[*2] %	C/N比[*3]	腐植組成 a[*4]	腐植組成 b[*5]	腐植組成 PQ%[*6]	腐植酸 Δlogk[*7]	腐植酸 RF[*8]	腐植酸 型[*9]	T-P_2O_5[*10] mg/g	土色・土性[*11]
m－2	1	4.82	0.30	16	23.34	9.45	71	0.528	135	A	2.29	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	2	4.67	0.29	16	22.63	8.82	72	0.526	139	A	2.29	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	3	4.66	0.29	16	22.23	7.78	74	0.526	135	A	2.35	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	4	4.27	0.27	16	17.47	7.68	69	0.526	146	A	2.30	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	5	4.52	0.28	16	19.63	7.92	71	0.527	144	A	2.32	黒褐色（10YR3/1）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	6	4.59	0.29	16	19.12	8.74	69	0.528	151	A	2.47	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	7	4.38	0.29	15	17.38	6.96	71	0.530	129	A	2.51	黒褐色（7.5YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	8	4.46	0.29	16	12.17	8.14	60	0.530	146	A	2.52	黒褐色（7.5YR3/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	9	4.70	0.31	15	14.55	6.26	70	0.529	143	A	2.64	黒褐色（7.5YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	11	3.97	0.27	15	9.74	5.12	66	0.535	132	A	2.46	暗褐色（7.5YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	13	3.34	0.24	14	9.02	5.06	64	0.544	131	A	2.44	暗褐色（7.5YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） SiL
	15	3.74	0.28	14	18.65	5.09	79	0.531	84	A	2.66	黒褐色（7.5YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	17	3.61	0.26	14	8.65	5.27	62	0.539	133	A	2.64	黒褐色（7.5YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	19	4.34	0.29	15	13.77	6.87	67	0.532	145	A	2.75	黒褐色（7.5YR3/1）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	21	3.62	0.23	16	13.94	5.90	70	0.527	129	A	2.39	黒褐色（7.5YR3/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	23	3.27	0.23	14	10.33	5.25	66	0.522	137	A	2.16	暗褐色（7.5YR3/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	25	4.07	0.27	15	17.81	6.93	72	0.520	147	A	2.49	黒褐色（7.5YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	27	3.65	0.25	15	15.24	6.26	71	0.522	143	A	2.56	黒　色（7.5YR2/1）（橙色（7.5YR6/8）含む） HC
	29	3.29	0.22	15	11.11	4.98	69	0.525	140	A	2.71	黒褐色（7.5YR3/1）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	底2	0.92	0.08	11	0.06	1.09	5	0.824	25	Rp	2.84	黄橙色（10YR7/8） L

注）＊1：全炭素量，　＊2：全窒素量，　＊3：炭素率（全炭素量÷全窒素量），　＊4：土壌1gあたりの抽出腐植酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊5：土壌1gあたりの抽出フルボ酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊6：可溶性腐植あたりの腐植酸の割合，　＊7：logk400－logk600，　＊8：腐植酸単位あたりの相対色度，　＊9：熊田(1977)の腐植酸分類図より分類された型，　＊10：乾土1gあたりの全リン酸量(mg)，　＊11：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）。；土性：土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談会編，1984）による（CL…埴壌土，　L…壌土，　SiL…シルト質壌土，　HC…重粘土）

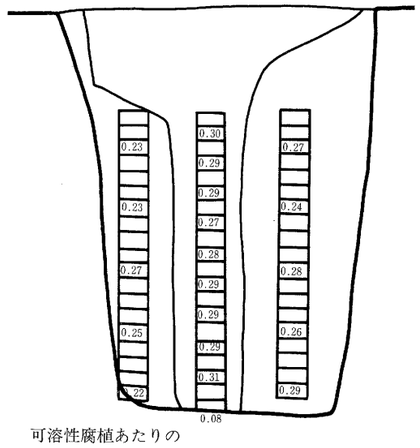
試料採取層位



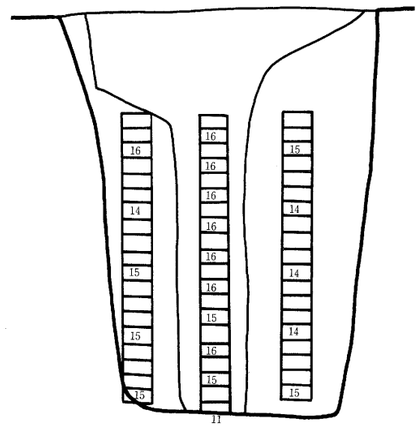
全炭素量（%）



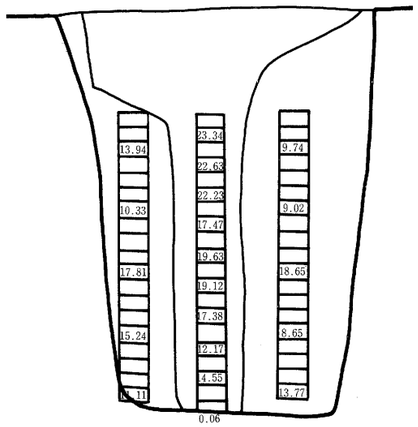
全窒素量（%）



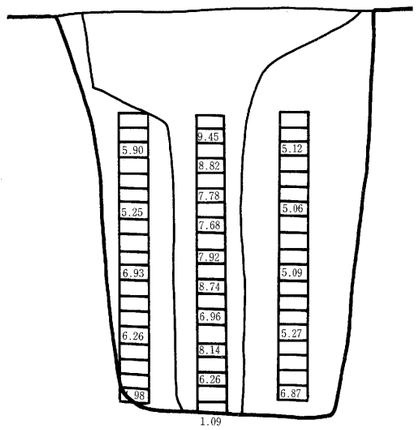
C／N比



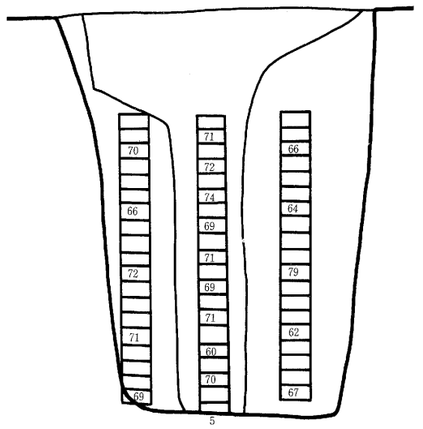
土壌１ｇあたりの抽出腐植酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量（ml）



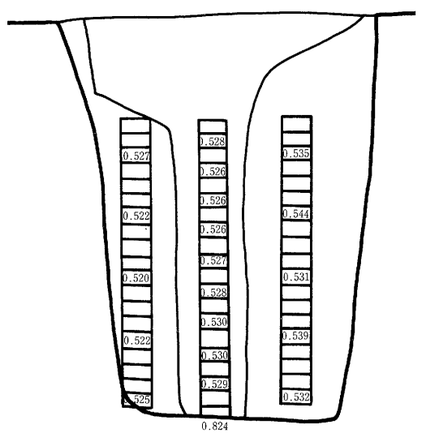
土壌１ｇあたりの抽出フルボ酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量（ml）



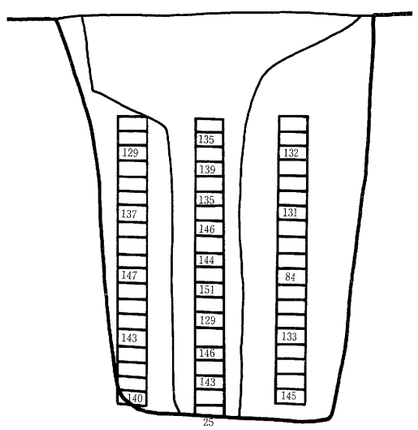
可溶性腐植あたりの腐植酸の割合（%）



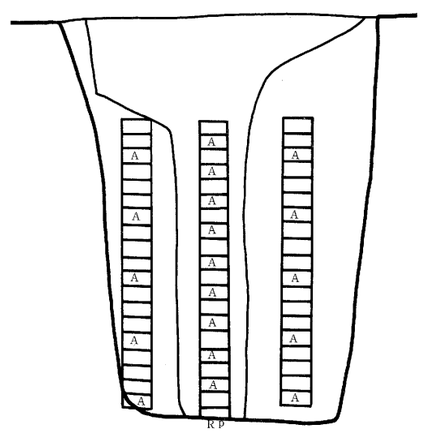
⊿logk



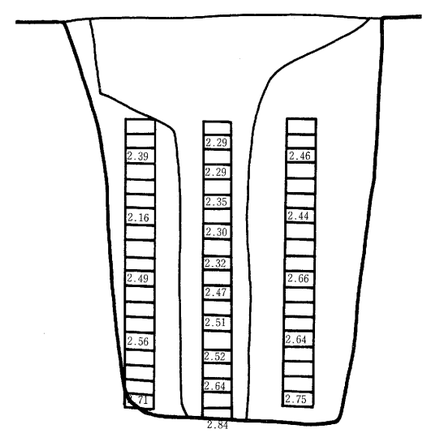
腐植酸単位あたりの相対色度



分類型



乾土１ｇあたりの全リン酸量（mg）



第70図　Ｃ９号方形柱穴列ｍ－２の土壌理化学性

ここでは柱痕内よりも柱痕外で平均含量の高い値が認められるが、CV値などのばらつき、ローム の混入量を考えると有為な差とは認めにくい。

・窒素含量

柱痕内試料の範囲は0.19～0.25％で平均値0.22％（SD：0.016，CV：7.4）、柱痕外試料の含量範囲は0.20～0.31％、平均値 0.25％（SD：0.041，CV：16.3）、柱穴底の地山試料（試料番号底１～底３）の範囲は0.17～0.20％、平均値0.18％（SD：0.015，CV：8.3）を示す。

柱痕内外での窒素の含まれ方は炭素含量と類似しており、炭素含量と同様なことが推定される。

・Ｃ／Ｎ比

柱痕内試料の範囲は11～15、平均値13（SD：1.2，CV：8.8）である。柱痕外試料の範囲は10～15、平均値13（SD：1.6，CV：12.5）である。柱穴底の地山試料の範囲は８～９、平均値９（SD：0.6，CV：6.7）を示す。

各試料ともにＣ／Ｎ比が20の数値を越えるものはなく、有機物を含む状態の土壌ではないことから、黒ボク土であることが示唆される。また、柱穴内外に大きな差異は認められない。

・腐植組成

柱痕内試料では、ａ値の範囲が4.92～19.38ml/ｇ、平均値13.26ml/ｇ（SD：3.930，CV：29.6）、ｂ値の範囲が2.75～7.02ml/ｇ、平均値5.14ml/ｇ（SD：1.248，CV：24.3）、PQ値の範囲が61～83％、平均値71％（SD：5.1，CV：7.1）、⊿logk値の範囲が0.515～0.537、平均値0.525（SD：0.0057，CV：1.1）、RF値の範囲が124～162、平均値146（SD：8.4，CV：5.8）を示す。柱痕外試料では、ａ値の範囲が3.85～16.02ml/ｇ、平均値11.96ml/ｇ（SD：4.119，CV：34.4）、ｂ値の範囲が2.73～7.32ml/ｇ、平均値5.55ml/ｇ（SD：1.501，CV：27.0）、PQ値の範囲が59～74％、平均値67％（SD：4.8，CV：7.2）、⊿logk値の範囲が0.522～0.544、平均値0.530（SD：0.0073，CV：1.4）、RF値の範囲が132～157、平均値138（SD：8.1，CV：5.9）を示す。柱穴底の地山試料（試料番号底１～底３）では、ａ値の範囲が0.04～0.09ml/ｇ、平均値0.07ml/ｇ（SD：0.026，CV：37.8）、ｂ値の範囲が1.15～1.25ml/ｇ、平均値1.20ml/ｇ（SD：0.050，CV：4.2）、PQ値の範囲が３～７％、平均値６％（SD：2.3，CV：40.8）、⊿logk値の範囲が0.651～0.662、平均値0.658（SD：0.0062，CV：0.9）、RF値の範囲が132～157、平均値138（SD：8.1，CV：5.9）を示す。

以上のように、柱痕内試料で各値の平均値が高い傾向が認められる。しかし、これらの値は炭素含量と同様にロームの混入量によって左右されている。すなわち、柱穴内における有機物の供給の差ではなく、覆土の腐植組成を示していると推定される。また、腐植酸の型は黒ボク土のＡ型と同じである。

・リン含量

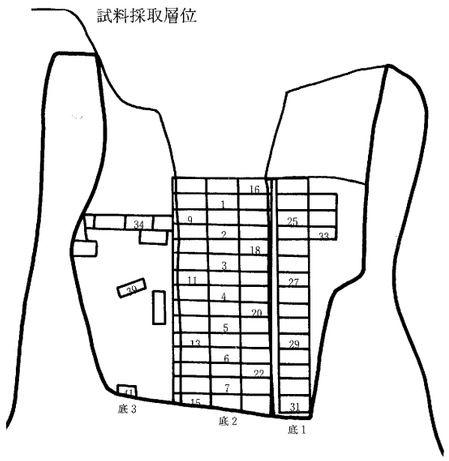
柱痕内試料では範囲が2.06～2.68P_2O_5mg/ｇ、平均値2.42P_2O_5mg/ｇ（SD：0.213，CV：8.8）である。柱痕外試料では範囲が2.26～2.68P_2O_5mg/ｇ、平均値2.52P_2O_5mg/ｇ（SD：0.138，CV：5.5）である。柱穴底の地山試料では2.92～3.04P_2O_5mg/ｇ、平均値2.99P_2O_5mg/ｇ（SD：0.0611，CV：2.1）を示す。

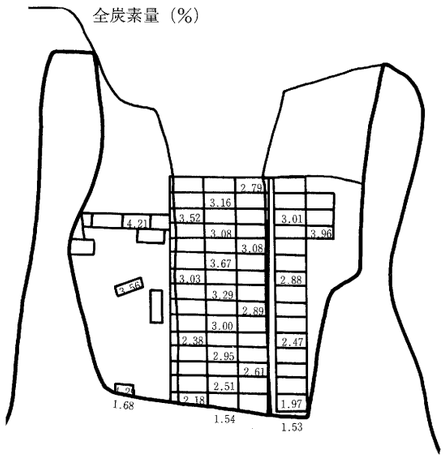
平均値だけで比較すると、柱穴底の地山試料（試料番号底１～底３）が最も高く、次いで柱痕外試料、柱痕内試料の順である。したがって、柱穴内に特徴的な濃集は認められず、覆土内に柱材の成分が残留しているとは考えにくい。

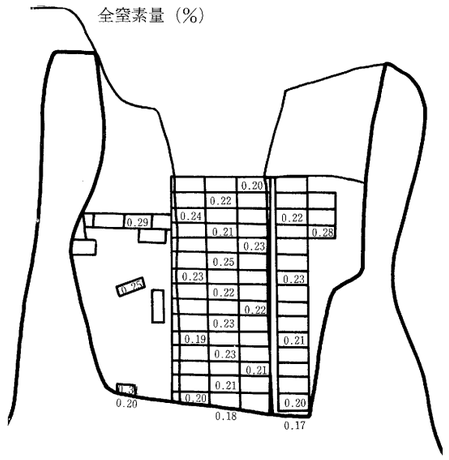
第2表　C 9号方形柱穴列の腐植分析（腐植組成と腐植酸の光学的性質）とリン分析の結果　－その3－

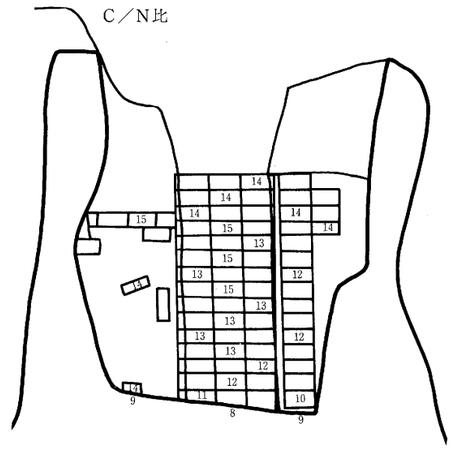
ピット	試料番号	C[*1] %	N[*2] %	C/N比[*3]	腐植組成 a[*4]	腐植組成 b[*5]	腐植組成 PQ%[*6]	腐植酸 Δlogk[*7]	腐植酸 RF[*8]	腐植酸 型[*9]	T-P_2O_5[*10] mg/g	土色・土性[*11]
c－2	1	3.16	0.22	14	14.23	5.23	73	0.524	148	A	2.06	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	2	3.08	0.21	15	12.83	4.94	72	0.523	145	A	2.05	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	3	3.67	0.25	15	19.38	7.02	73	0.524	146	A	2.60	黒褐色（7.5YR3/1）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	4	3.29	0.22	15	14.83	5.39	73	0.520	152	A	2.32	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	5	3.00	0.23	13	11.42	5.10	69	0.527	148	A	2.39	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） L
	6	2.95	0.23	13	12.28	5.51	69	0.528	151	A	2.50	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	7	2.51	0.21	12	8.86	5.73	61	0.536	136	A	2.68	黒褐色（10YR3/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	9	3.52	0.24	14	18.45	6.83	73	0.522	162	A	2.65	黒褐色（7.5YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	11	3.03	0.23	13	15.92	5.61	74	0.523	140	A	2.59	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	13	2.38	0.19	13	8.51	3.47	71	0.527	146	A	2.28	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	15	2.18	0.20	11	4.92	2.90	63	0.537	124	A	2.31	褐　色（7.5YR4/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	16	2.79	0.20	14	13.69	2.75	83	0.522	151	A	2.14	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	18	3.08	0.23	13	17.53	6.08	74	0.515	149	A	2.55	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	20	2.89	0.22	13	14.87	5.54	73	0.522	144	A	2.53	黒褐色（7.5YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	22	2.61	0.21	12	11.19	5.01	69	0.527	147	A	2.60	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	25	3.01	0.22	14	16.02	5.56	74	0.526	135	A	2.49	黒褐色（10YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	27	2.88	0.23	12	13.86	5.55	71	0.527	135	A	2.53	黒褐色（7.5YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	29	2.47	0.21	12	9.43	4.16	69	0.529	141	A	2.51	黒褐色（7.5YR3/1）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	31	1.97	0.20	10	3.85	2.73	59	0.544	136	A	2.68	黒褐色（10YR3/2）（橙色（7.5YR6/8）極富） CL
	33	3.96	0.28	14	14.16	6.57	68	0.528	132	A	2.26	暗褐色（7.5YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	34	4.21	0.29	15	15.10	6.85	69	0.526	139	A	2.42	黒褐色（10YR3/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	39	3.56	0.25	14	9.22	5.69	62	0.538	132	A	2.60	黒褐色（10YR2/3）（橙色（7.5YR6/8）富む） CL
	41	4.29	0.31	14	14.03	7.32	66	0.522	157	A	2.67	黒褐色（7.5YR2/2）（橙色（7.5YR6/8）含む） CL
	底1	1.53	0.17	9	0.08	1.15	7	0.651	124	A	3.00	黄褐色（10YR5/6） CL
	底2	1.54	0.18	8	0.09	1.19	7	0.662	116	A	2.92	褐　色（10YR4/6） CL
	底3	1.68	0.20	9	0.04	1.25	3	0.661	150	A	3.04	褐　色（10YR4/6） CL

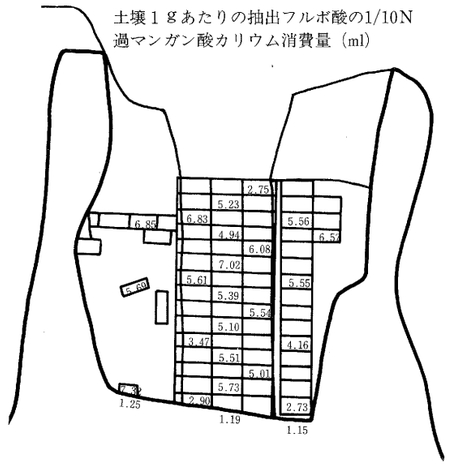
注）＊1：全炭素量，　＊2：全窒素量，　＊3：炭素率（全炭素量÷全窒素量），　＊4：土壌1gあたりの抽出腐植酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊5：土壌1gあたりの抽出フルボ酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊6：可溶性腐植あたりの腐植酸の割合，　＊7：logk400－logk600，　＊8：腐植酸単位あたりの相対色度，　＊9：熊田(1977)の腐植酸分類図より分類された型，　＊10：乾土1gあたりの全リン酸量(mg)，　＊11：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）。；土性：土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談会編，1984）による（CL…埴壌土，　L…壌土，　SiL…シルト質壌土，　HC…重粘土）

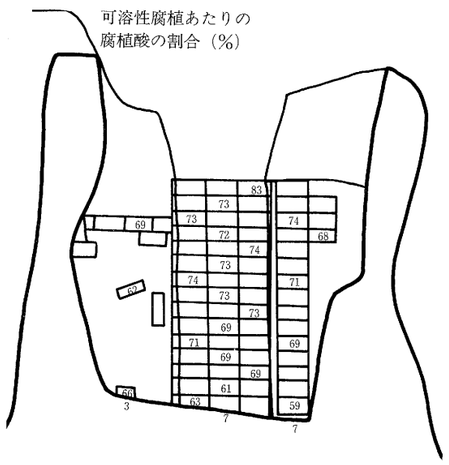


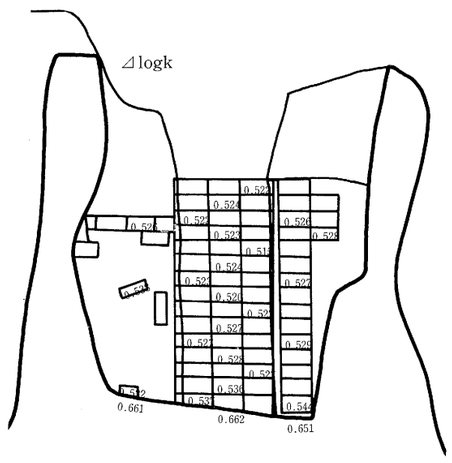


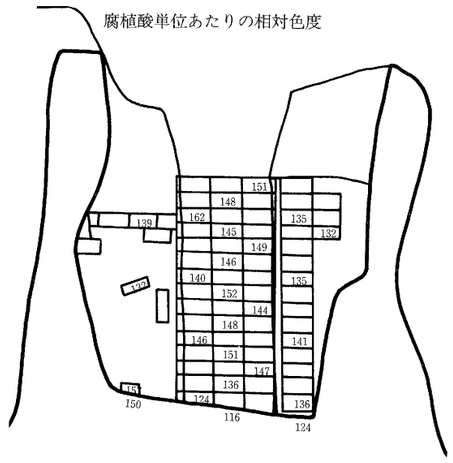


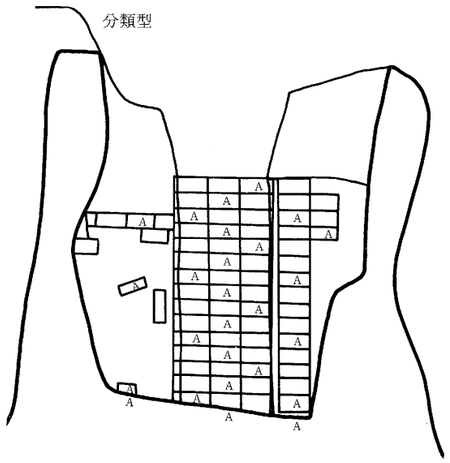


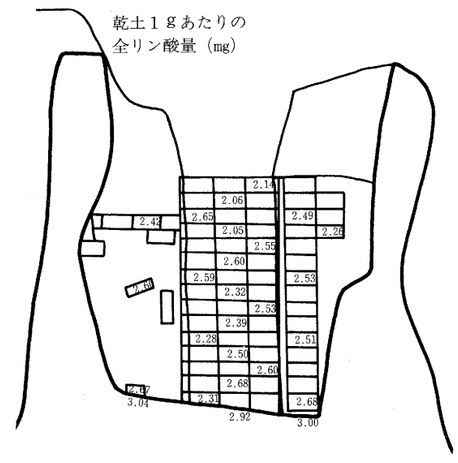












第71図　Ｃ９号方形柱穴列ｃ－２の土壌理化学性

e．ピットｏ－２（表２－その４－，図72）

・炭素含量

柱痕内試料の含量範囲は4.00～4.92%、平均値4.59%(SD：0.306，CV：6.7)を示し、試料間に大きなばらつきは認められない。一方、柱痕外試料の含量範囲は3.45～4.63%、平均値4.07%(SD：0.403，CV：9.9)である。柱穴底の地山試料（試料番号底１～底３）の含量範囲は1.37～1.62%、平均値1.47%（SD：0.131，CV：8.9）を示す。

柱痕外試料および地山試料ともに、柱穴内よりも平均含量は低い。しかし、この差異はピットｅ－２などと同様に覆土の炭素含量の違いが反映されているものと推定される。

・窒素含量

柱痕内試料の範囲は0.30～0.33%、平均値0.31%（SD：0.009，CV：3.0）である。柱痕外試料の範囲は0.27～0.30%、平均値0.29%（SD：0.014，CV：4.7）である。柱穴底の地山試料（試料番号底１～底３）の範囲は0.15～0.16%、平均値0.15%（SD：0.006，CV：2.8）を示す。

柱痕内外での窒素の含まれ方は炭素含量と類似していることから、炭素含量と同様なことが推定される。

・Ｃ／Ｎ比

柱痕内試料の範囲は13～16、平均値15(SD：0.9，CV：5.9)、柱痕外試料の範囲は13～15で平均値14(SD：0.8，CV：5.8)、柱穴底の地山試料の範囲は９～10、平均値10(SD：0.6，CV：6.0)を示す。各試料ともにＣ／Ｎ比が20を越えるものはなく、未熟な有機物を含む状態の土壌ではなく、黒ボク土であることが示唆される。

・腐植組成

柱痕内試料では、ａ値の範囲が12.35～24.86ml/ｇ、平均値17.33ml/ｇ(SD：4.216，CV：24.3)、ｂ値の範囲が6.88～9.21ml/ｇ、平均値8.16ml/ｇ（SD：0.793，CV：9.7)、PQ値の範囲が62～73%、平均値68%（SD：3.5，CV：5.2)、⊿logk値の範囲が0.516～0.533、平均値0.522（SD：0.0052，CV：0.9)、RF値の範囲が124～192、平均値149(SD：19.0，CV：12.8)を示す。柱痕外試料では、ａ値の範囲が8.83～34.21ml/ｇ、平均値17.31ml/ｇ(SD：10.030，CV：58.0)、ｂ値の範囲が5.68～8.07ml/ｇ、平均値6.90ml/ｇ(SD：0.838，CV：12.1)、PQ値の範囲が61～81%、平均値68%（SD：8.0，CV：11.8)、⊿logk値の範囲が0.517～0.543、平均値0.526(SD：0.0086，CV：1.6)、RF値の範囲が118～321、平均値175(SD：66.3，CV：37.9)を示す。柱穴底の地山試料では、ａ値の範囲が0.02～0.17ml/ｇ、平均値0.08ml/ｇ(SD：0.078，CV：93.2)、ｂ値の範囲が1.00～1.15ml/ｇ、平均値1.07ml/ｇ（SD：0.076，CV：7.1)、PQ値の範囲が２～15%、平均値７%(SD：6.9，CV：92.8)、⊿logk値の範囲が0.727～0.766、平均値0.741(SD：0.0217，CV：2.8)、RF値の範囲が17～120平均値68（SD：51.5，CV：75.8）を示す。

以上のように、ロームの混入量によって腐植組成も左右される傾向が認められる。しかし、腐植酸の光学的性質はほとんど変化が認められない。また、腐植酸の型は黒ボク土のＡ型と同じである。したがって、柱穴内における有機物の供給の差ではなく、覆土内に柱材の成分が残留しているとは考えにくい。

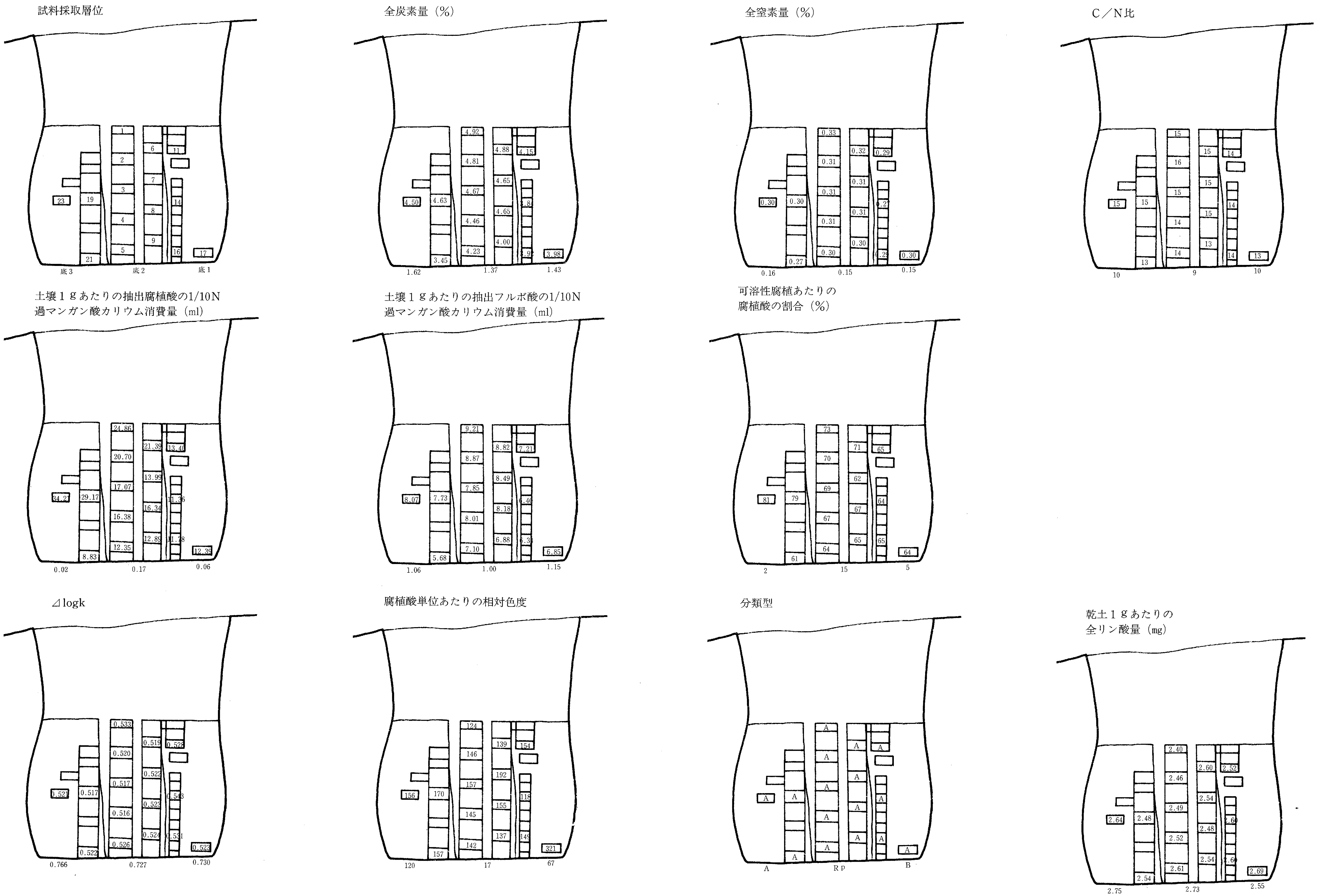
・リン含量

柱痕内試料では、範囲が2.40～2.61P_2O_5mg/ｇ、平均値2.52P_2O_5mg/ｇ(SD：0.067，CV：2.7)、柱痕外試料では、範囲が2.48～2.69P_2O_5mg/ｇ、平均値2.58P_2O_5mg/ｇ(SD：0.073，CV：2.8)、柱穴底の地山試料では、範囲が2.55～2.75P_2O_5mg/ｇ、平均値2.68P_2O_5mg/ｇ（SD：0.110，CV：4.1）を示す。平均値だけで比較すると柱穴底の地山試料（試料番号底１～底３）で最も高く、次いで柱痕外試料、柱痕内試料の順である。

第2表　C 9号方形柱穴列の腐植分析（腐植組成と腐植酸の光学的性質）とリン分析の結果　－その4－

ピット	試料番号	C[*1] %	N[*2] %	C/N[*3]比	腐植組成 a[*4]	腐植組成 b[*5]	腐植組成 PQ%[*6]	腐植酸 Δlogk[*7]	腐植酸 RF[*8]	腐植酸 型[*9]	T-P_2O_5[*10] mg/g	土色・土性[*11]		
o－2	1	4.92	0.33	15	24.86	9.21	73	0.533	124	A	2.40	黒褐色（5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）微量）	L
	2	4.81	0.31	16	20.70	8.87	70	0.520	146	A	2.46	黒褐色（5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）微量）	L
	3	4.67	0.31	15	17.07	7.85	69	0.517	157	A	2.49	黒褐色（10YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	4	4.46	0.31	14	16.38	8.01	67	0.516	145	A	2.52	黒褐色（10YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	5	4.23	0.30	14	12.35	7.10	64	0.526	142	A	2.61	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	6	4.88	0.32	15	21.39	8.82	71	0.519	139	A	2.60	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）微量）	CL
	7	4.65	0.31	15	13.99	8.49	62	0.522	192	A	2.54	黒褐色（7.5YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）微量）	CL
	8	4.65	0.31	15	16.34	8.18	67	0.523	155	A	2.48	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	9	4.00	0.30	13	12.89	6.88	65	0.524	137	A	2.54	黒褐色（7.5YR2/3）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	11	4.15	0.29	14	13.40	7.21	65	0.528	154	A	2.52	黒褐色（7.5YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	14	3.84	0.27	14	11.36	6.40	64	0.543	118	A	2.60	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	16	3.92	0.29	14	11.78	6.34	65	0.531	149	A	2.60	黒褐色（10YR2/3）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	17	3.98	0.30	13	12.39	6.85	64	0.523	321	A	2.69	黒褐色（10YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	19	4.63	0.30	15	29.17	7.73	79	0.517	170	A	2.48	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	21	3.45	0.27	13	8.83	5.68	61	0.522	157	A	2.54	暗褐色（7.5YR3/3）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	23	4.50	0.30	15	34.21	8.07	81	0.521	156	A	2.64	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	底1	1.43	0.15	10	0.06	1.15	5	0.730	67	B	2.55	黄褐色（10YR5/8）		CL
	底2	1.37	0.15	9	0.17	1.00	15	0.727	17	Rp	2.73	褐　色（10YR4/6）		CL
	底3	1.62	0.16	10	0.02	1.06	2	0.766	120	A	2.75	黄褐色（10YR5/8）		CL

注）＊1：全炭素量，　＊2：全窒素量，　＊3：炭素率（全炭素量÷全窒素量），　＊4：土壌1gあたりの抽出腐植酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊5：土壌1gあたりの抽出フルボ酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊6：可溶性腐植あたりの腐植酸の割合，　＊7：logk400－logk600，　＊8：腐植酸単位あたりの相対色度，　＊9：熊田(1977)の腐植酸分類図より分類された型，　＊10：乾土1gあたりの全リン酸量(mg)，　＊11：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）。；土性：土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談会編，1984）による（CL…埴壌土，　L…壌土，　SiL…シルト質壌土，　HC…重粘土）



第72図　Ｃ９号方形柱穴列ｏ－２の土壌理化学性

また、柱痕内試料においても内容物による影響を示唆する特徴的な濃集は認められない。この点からも、覆土内に柱材の成分が残留しているとは考えにくい。

f．ピットd－2（表2－その5－，図73）

・炭素含量

柱痕内試料の含量範囲は3.77～5.12%、平均値4.34%(SD：0.418，CV：9.6)を示す。各試料の差は、ロームの混入量の違いによるものと思われる。一方、柱痕外試料の含量範囲は3.47～3.76%、平均値3.68%（SD：0.108，CV：2.9）である。柱穴底の地山試料（試料番号底2）では1.55%を示す。両者ともに柱穴内よりも低い平均含量が認められる。しかし、この差異はローム の混入状態の違いによるものと推定される。

・窒素含量

柱痕内試料の範囲は0.27～0.32%で平均値0.29%(SD：0.016，CV：5.4)である。柱痕外試料の含量範囲は0.25～0.28%で、平均値0.27%（SD：0.010，CV：3.9）である。柱穴底面の地山試料（試料番号底2）の含量は0.17%を示す。

柱痕内外での窒素の含まれ方は、炭素含量でのそれと類似しており、炭素含量と同様なことが推定される。

・C／N比

柱痕内試料の範囲は14～17で平均値15(SD：0.9，CV：6.0)、柱痕外試料の範囲は13～14で平均値14(SD：0.5，CV：4.1)、柱穴底の地山試料（試料番号底2）は9の数値を示す。各試料ともに20を越えるものはなく、未熟な有機物を含む状態の土壌ではなく、黒ボク土であることが示唆される。

・腐植組成

柱痕内試料では、a値の範囲が8.06～46.23ml/g、平均値17.88ml/g（SD：10.475，CV：58.6)、b値の範囲が5.96～9.57ml/g、平均値7.37ml/g（SD：1.054，CV：14.3)、PQ値の範囲が 57～83%、平均値68%（SD：7.4，CV：10.8)、⊿logk値の範囲が0.502～0.529、平均値0.512（SD：0.0067，CV：1.3)、RF値の範囲が80～204、平均値156（SD：26.2，CV：16.8）を示す。

柱痕外試料では、a値の範囲が5.28～14.79ml/g、平均値8.80ml/g（SD：3.88，CV：44.1)、b値の範囲が5.39～9.81、平均値6.20ml/g（SD：0.838，CV：13.5)、PQ値の範囲が48～65%、平均値57%（SD：8.2，CV：14.5)、⊿logk値の範囲が0.508～0.521、平均値0.513（SD：0.0046，CV：0.9)、RF値の範囲が137～166、平均値152(SD：11.3，CV：7.4)を示す。柱穴底面の地山試料(試料番号底2)では、a値が0.08ml/g、b値が1.15ml/g、PQ値が7%、⊿logk値が0.632、RF値が88を示す。

以上の結果から、a値、b値、PQ値では平均値において柱痕内試料で高い傾向が認められる。しかし、これらの値は炭素含量と同様にローム の混入量によって左右されていると考えられる。また、⊿logk、RF値などの腐植酸の光学的性質は各試料とも類似し、腐植酸の型はほとんどがA型である。

・リン含量

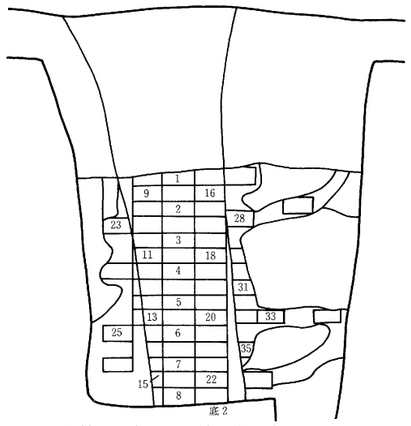
柱痕内試料では、範囲が2.36～2.68P_2O_5mg/g、平均値2.54P_2O_5mg/g(SD：0.079，CV：3.1)、柱痕外試料では、範囲が2.38～2.58P_2O_5mg/g、平均値2.48P_2O_5mg/g(SD：0.075，CV：3.0)、柱穴底の地山試料では、2.90P_2O_5mg/gを示す。平均値を比較すると柱痕内試料、柱痕外試料ともに有為な差異は認められない。また、柱痕内試料においても木材による影響を示唆する特徴的な濃集はない。したがって、覆土内に柱材の成分が残留しているとは考えにくい。

第２表　Ｃ９号方形柱穴列の腐植分析（腐植組成と腐植酸の光学的性質）とリン分析の結果　－その５－

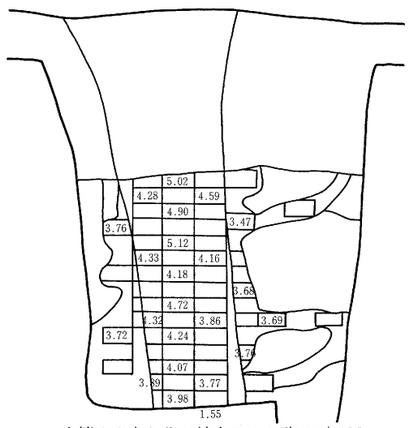
ピット	試料番号	C[*1] %	N[*2] %	C/N比[*3]	腐植組成 a[*4]	腐植組成 b[*5]	腐植組成 PQ%[*6]	腐植酸 Δlogk[*7]	腐植酸 RF[*8]	腐植酸 型[*9]	T-P_2O_5[*10] mg/g	土色・土性[*11]		
d－2	1	5.02	0.32	16	20.27	8.62	70	0.506	150	A	2.49	黒褐色（10YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	2	4.90	0.30	17	19.40	8.64	69	0.510	152	A	2.36	黒褐色（10YR2/3）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	3	5.12	0.32	16	46.23	9.57	83	0.502	153	A	2.54	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	SiL
	4	4.18	0.27	15	14.03	6.75	68	0.511	152	A	2.46	暗褐色（7.5YR3/3）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	5	4.72	0.30	16	19.77	8.26	71	0.514	138	A	2.55	黒褐色（7.5YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	6	4.24	0.29	15	14.14	7.32	66	0.511	152	A	2.53	黒褐色（10YR2/3）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	7	4.07	0.29	14	26.00	7.67	77	0.510	80	B	2.52	黒褐色（10YR2/3）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	8	3.98	0.28	14	11.59	6.43	64	0.529	141	A	2.54	黒褐色（10YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	9	4.28	0.29	15	13.73	6.93	66	0.523	156	A	2.60	黒褐色（7.5YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）極富）	CL
	11	4.33	0.29	15	10.09	6.04	63	0.509	165	A	2.46	黒褐色（10YR2/3）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	13	4.32	0.30	14	12.14	7.32	62	0.511	182	A	2.53	黒褐色（10YR2/3）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	15	3.89	0.28	14	11.25	6.56	63	0.515	155	A	2.48	黒褐色（10YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	16	4.59	0.30	15	36.77	8.30	82	0.502	156	A	2.56	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	18	4.16	0.28	15	12.43	7.07	64	0.511	177	A	2.61	黒褐色（10YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	20	3.86	0.27	15	10.22	6.40	61	0.513	175	A	2.66	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）含む）	CL
	22	3.77	0.27	14	8.06	5.96	57	0.511	204	A	2.68	黒褐色（10YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）極富）	CL
	23	3.76	0.27	14	9.95	6.00	62	0.515	140	A	2.49	暗褐色（10YR3/3）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	25	3.72	0.26	14	11.34	6.23	65	0.511	160	A	2.40	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	28	3.47	0.25	14	5.85	5.39	52	0.521	137	A	2.51	黒褐色（10YR2/3）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	31	3.68	0.27	13	5.58	5.94	48	0.510	153	A	2.58	黒褐色（10YR3/2）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	32	3.69	0.27	13	5.28	5.81	48	0.512	155	A	2.50	黒褐色（7.5YR3/3）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	35	3.76	0.28	13	14.79	7.81	65	0.508	166	A	2.38	黒褐色（7.5YR2/2）	（橙色（7.5YR6/8）富む）	CL
	底2	1.55	0.17	9	0.08	1.15	7	0.632	88	A	2.90	黄褐色（10YR5/6）		CL

注）＊1：全炭素量，　＊2：全窒素量，　＊3：炭素率（全炭素量÷全窒素量），　＊4：土壌1gあたりの抽出腐植酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊5：土壌1gあたりの抽出フルボ酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量(mℓ)，　＊6：可溶性腐植あたりの腐植酸の割合，　＊7：logk400－logk600，　＊8：腐植酸単位あたりの相対色度，　＊9：熊田(1977)の腐植酸分類図より分類された型，　＊10：乾土1gあたりの全リン酸量(mg)，　＊11：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）。；土性：土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談会編，1984）による（CL…埴壌土，　L…壌土，　SiL…シルト質壌土，　HC…重粘土）

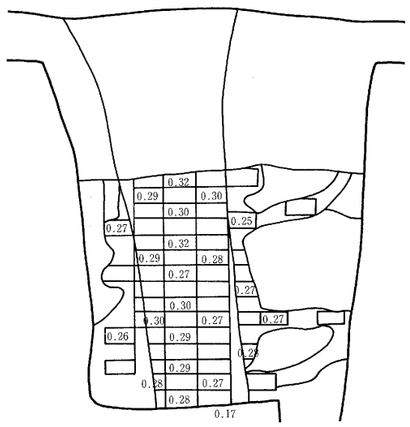
試料採取層位



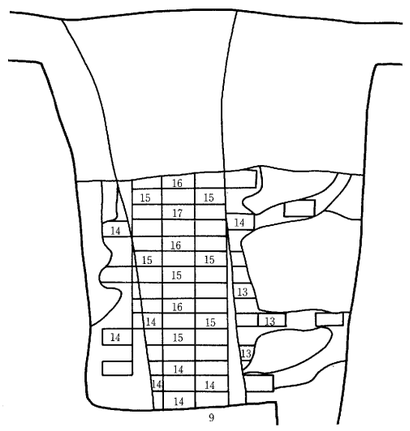
全炭素量（%）



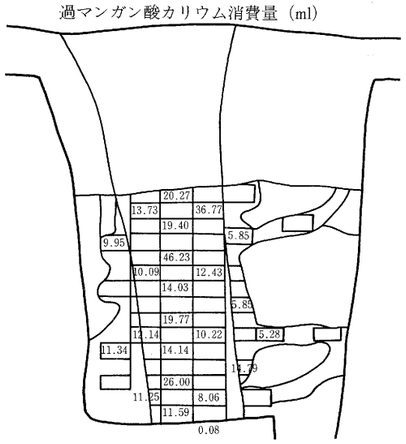
全窒素量（%）



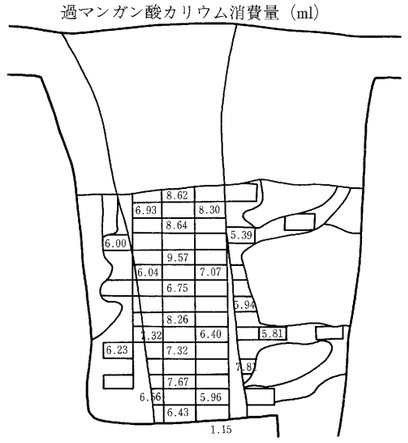
C／N比



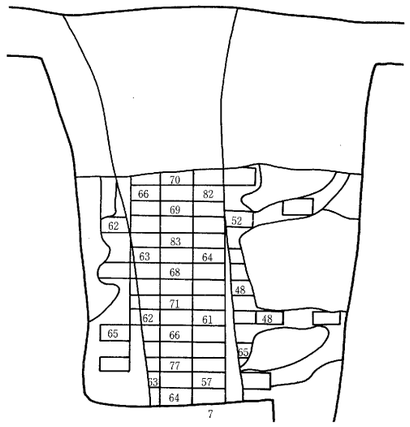
土壌１ｇあたりの抽出腐植酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量（ml）



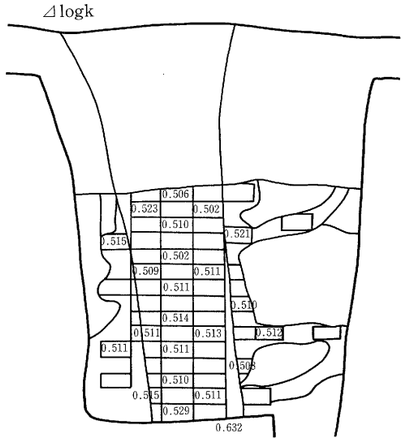
土壌１ｇあたりの抽出フルボ酸の1/10N過マンガン酸カリウム消費量（ml）



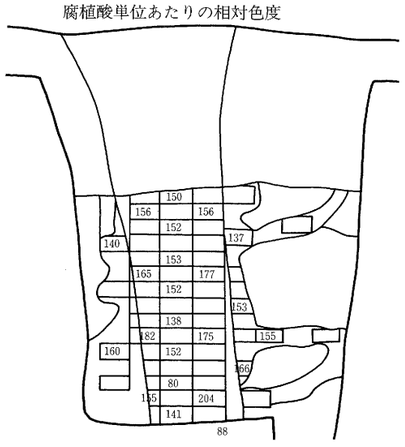
可溶性腐植あたりの腐植酸の割合（%）



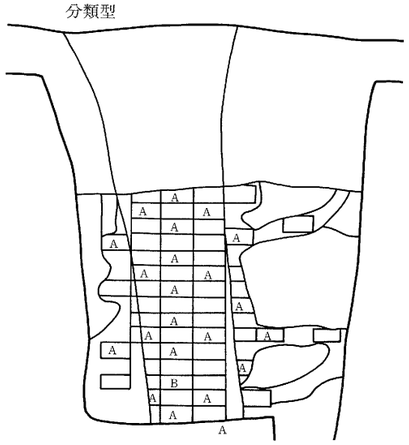
⊿logk



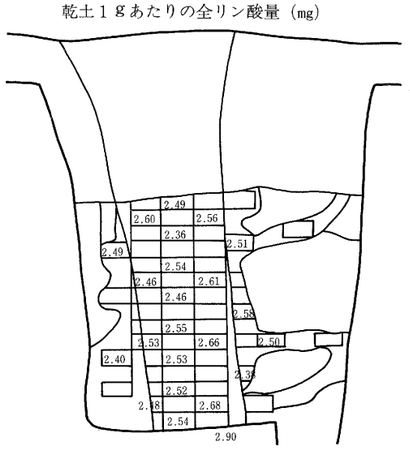
腐植酸単位あたりの相対色度



分類型



乾土１ｇあたりの全リン酸量（mg）



第73図　Ｃ９号方形柱穴列ｄ－２の土壌理化学性

第6節　柱材の痕跡について

今回は、柱材が柱穴内で自然に朽ちたと仮定して、C区7号・C区9号の各方形柱穴列の柱穴覆土を対象として土壌理化学分析を試みた。その結果、柱材の痕跡を積極的に示唆する分析結果は得られず、むしろ周囲の土壌と同様な傾向が認められた。したがって、現段階では柱材が柱穴内で自然に朽ちた可能性は低いと考える。

このような分析調査事例は、これまでにほとんど行われておらず、試料の採取方法や分析項目の選択など調査方法に関しても検討の余地が残される。今回は上記のような問題を解決するための端緒として、土壌理化学的な資料を得ることができたと考える。今後、他の方形柱穴列も対象として、同様な土壌理化学分析調査事例を蓄積する必要がある。また、分析手法ばかりでなく、土質工学、建築学などの観点からも検討を加え、堆積構造を理解して、今回の調査結果を再評価する必要があろう。

〈引用文献〉

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354Ｐ．,博友社．
土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440Ｐ．,養賢堂．
熊田恭一（1977）土壌有機物の化学．220Ｐ．,東大出版会．
熊田恭一・太田信婦（1963）腐植の抽出について．土肥誌，34，Ｐ.417－422．
京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書 第1巻．411Ｐ．,産業図書．
久馬一剛・永塚鎮男(1987)土壌学と考古学．214Ｐ．,博友社．
三好　洋・嶋田永生・石川昌男・伊達　昇（1983）土壌肥料用語事典．259Ｐ．,農文協．
日本分析化学会編（1991）分析化学便覧．1426Ｐ，丸善．
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖．
大羽　裕（1964）弘法・大羽法．ペドロジスト，8，Ｐ.108－116．
大羽　裕・永塚鎮男（1988）土壌生成分類学．338Ｐ．,養賢堂．
ペドロジスト懇談会編（1984）野外土性の判定．「土壌調査ハンドブック」，Ｐ.39－40，博友社．

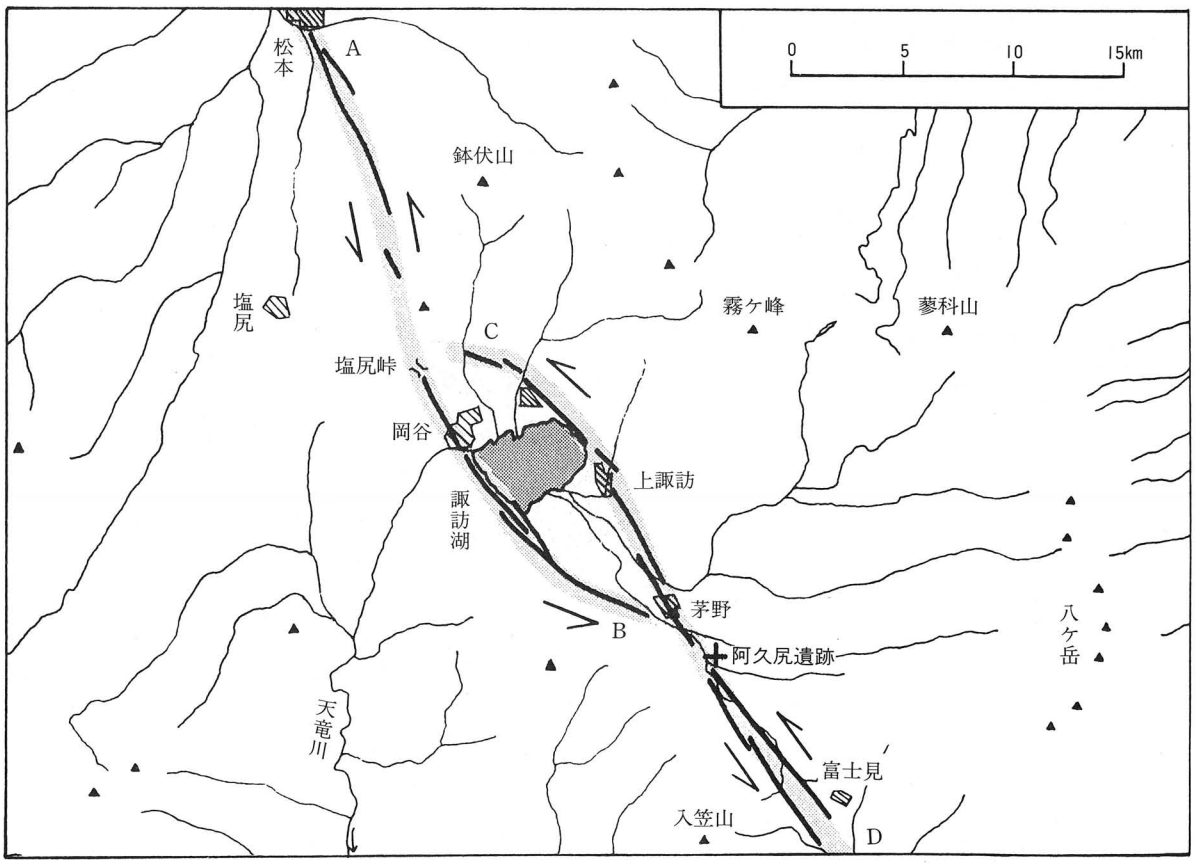
第Ⅶ章　阿久尻遺跡の地形地質

第１節　阿久尻遺跡の地形的な位置

阿久尻遺跡は茅野市の中心部から南東へ４㎞、市のはずれに位置し、原村との境界部にある。付近一帯は八ヶ岳の裾野に広がる広大な火山麓扇状地の最末端部にあたる。遺跡のある丘は火山麓扇状地面では最高位にあたり、第１段丘面（茅野市史自然編）、または茅野面（東郷正美，1987）・１面（藤森孝俊，1991）などと呼ばれている（第74図）。

火山麓扇状地は放射谷によって開析が進んでおり、遺跡の南側には阿久川、北側には大早川がある。遺跡の西端部では放射谷が宮川に向かって落ちこんでいるため、谷が急激に深く掘り込まれ、火山麓扇状地が分断され、河間地に取り残された馬の背状の丘陵地形になっている。なお、阿久尻とは原村の阿久遺跡から300ｍ余離れた位置にあり、阿久の丘の尻にあたるところから名前が由来したという。

阿久尻の末端は糸魚川－静岡構造線（以下、糸静線と記す）によってたち切られ、宮川に面する急崖でもって終わっている。糸静線までは150ｍ余の近距離にある。



第74図　諏訪盆地周辺の糸魚川―静岡構造線と阿久尻遺跡の位置
（原図は金子，1972にもとづき、松田，1992により加筆されたもの）
糸魚川―静岡構造線がA―BとC―Dのように雁行している。地盤が矢印よりに（左ずれに）動いているため、BC間の距離が長くなり、その間が引っ張られて陥没する。こうして諏訪盆地（諏訪湖）がつくられた。阿久尻遺跡はC―D断層の茅野市街地の南東に位置している。

第２節　阿久尻遺跡に発見された地割れ群

遺跡は、ゆるくうねった馬の背状の台地上にあり、長さ400m、幅80mの広がりを見せ、縄文前期前半とされる住居址群および方形柱穴列群からなる。柱穴列群が中央に、それをとりまいて住居址群が配置されている（第75図）。

台地の表層は数mに達する風成のテフラが被覆している。テフラのことを一般に“赤土”と呼んでいて、遺跡調査は表土から赤土までを剝ぎとるように進められる。表土が剝ぎ取られ、一面に赤褐色の赤土が現れたとき、住居址や柱穴列の部分だけ黒っぽい土によってその存在が認知できる。阿久尻の場合、ひときわ目立つのが柱穴列で、黒土がつまった円形の柱穴が赤土とのコントラストによって鮮やかに確認できる。

こうした状況の中で、地割れが発見された。赤土を割るようにして黒土がつまっている。たぶん、赤土の台地にぱっくりと割れ目が口をあけ、割れ目の中を黒土が充塡してしまった。これは、自然現象による割れ目であることが判然としたものである。さらに、調査が進むと地割れがあちこちに走っており、阿久尻台地の一帯に広がっていることがわかったのである（写真２、第75図）。こうした地割れは、地震によって生じることがおおい。

阿久尻台地は東西に細長く伸びている。その伸びの方向に地割れ群の伸びの方向もほぼ一致していて、西北西－東南東の走向を示している。

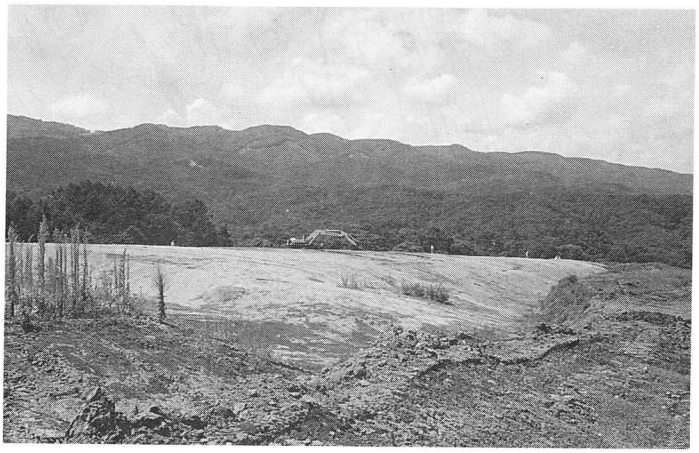
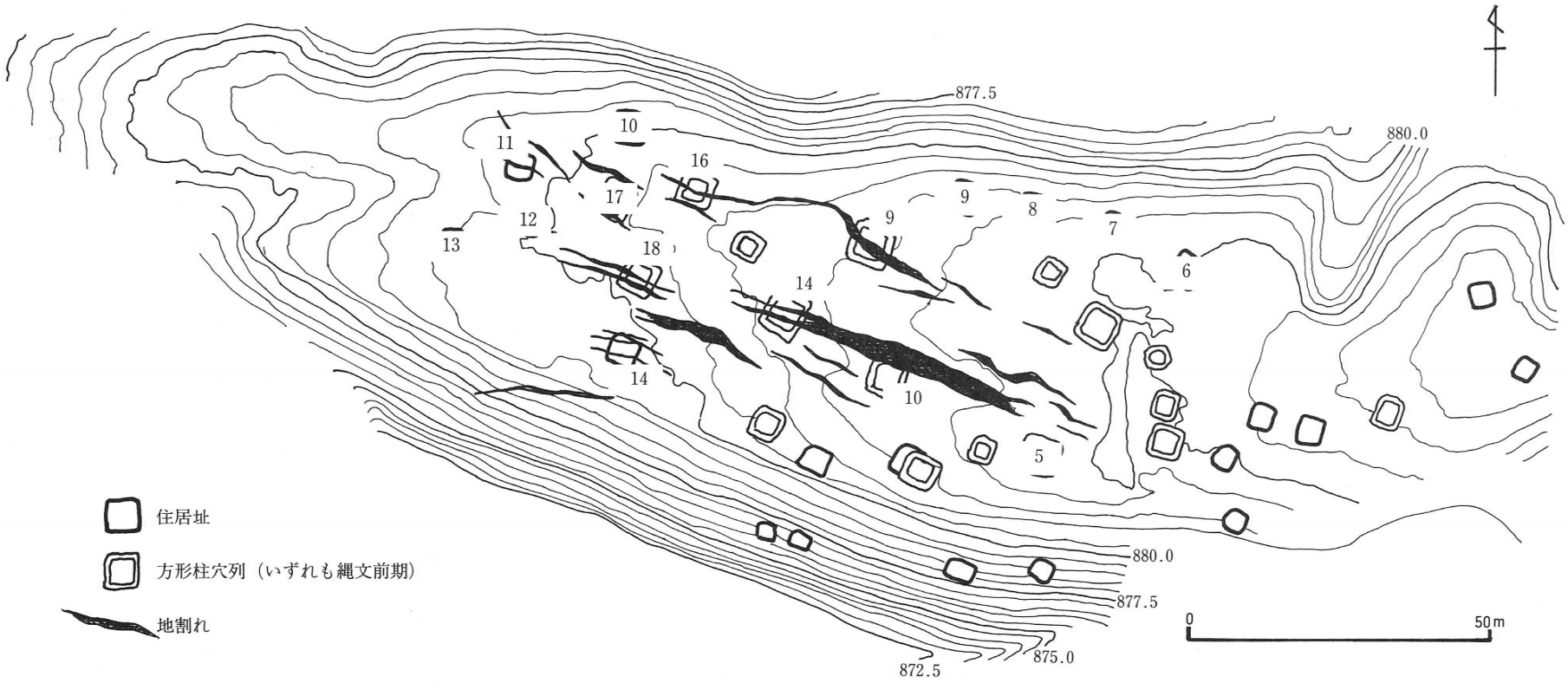


写真１　調査地の全景。東から西方を見る。背景は南アルプス側の山地。

写真２　地割れ調査のため重機で掘る。写真中央は10号柱穴列で地割れを充塡する黒土帯が手前から、柱穴列に向かってのびている。この走向はN70Wで、地割れの一般走向を表している。



第75図　阿久尻遺跡（1991年調査Ｃ区）の遺構と地割れの分布

第３節　地割れの形態

(1)　Ｃ10号方形柱穴列を切る地割れ

方形柱穴列群の中央部にＣ10号方形柱穴列がある（第75図）。柱穴は一辺が５本の柱からなる正方形で、北側の柱穴列を地割れが切っている（第76図、写真３～７）。Ｃ10号の場合、地割れが柱穴の底面を切り、約20㎝の落差があらわれている。このことから、阿久尻地割れ群は方形柱穴列群より新しいことを示している。地割れの発生年代がわかれば阿久尻遺跡の年代がそれより古いということになる。

(2)　開口落下型の地割れ－Ｃ18号方形柱穴列の場合（写真８～14、第77図のａ）

18号柱穴列のトレンチ調査では幅２ｍ余、深さ3.4ｍのトレンチを掘った。この地割れは幅が1.1～1.3ｍの開口落下型の地割れで、両側のクラックが並行するように深部へ伸び、クラックにはさまれた部分は下方に落ち込んでいる。3.4ｍ下のトレンチの底のにも生々しい黒土が充填する８～10㎝幅のクラックが走り（写真

第76図　阿久尻遺跡Ｃ10号方形柱穴列を切る地割れの平面図（茅野市教育委員会原図）

写真３　10号柱穴列を通る地割れを西方から見る。
地割れは手前正面から奥に向かってのびている。走向はＮ70Ｗ。

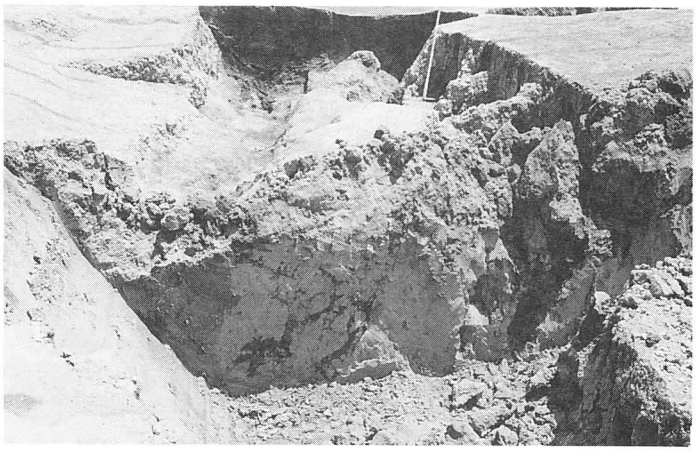


写真４　写真３の手前の部分で柱穴を切る地割れの断面を示す。
トレンチの深さは約２m。

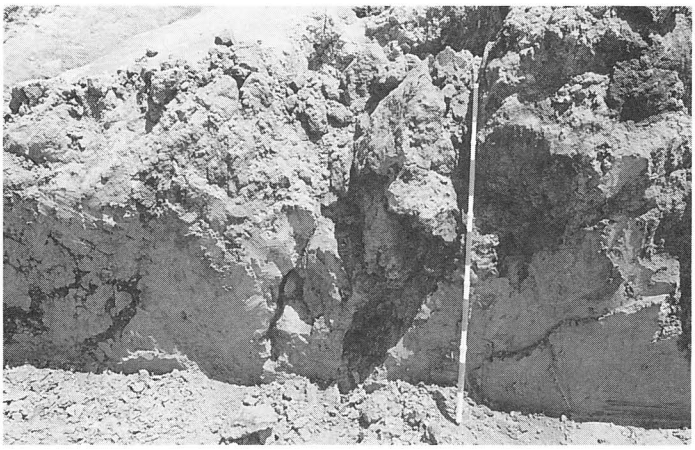


写真５　写真４の右側部分を示す。
地割れは北落ちで落差約40cmを示す。この割れ目は図76で西側の柱穴底を落差20cmで切る。

写真６　写真５の割れ目をアップしたもの。

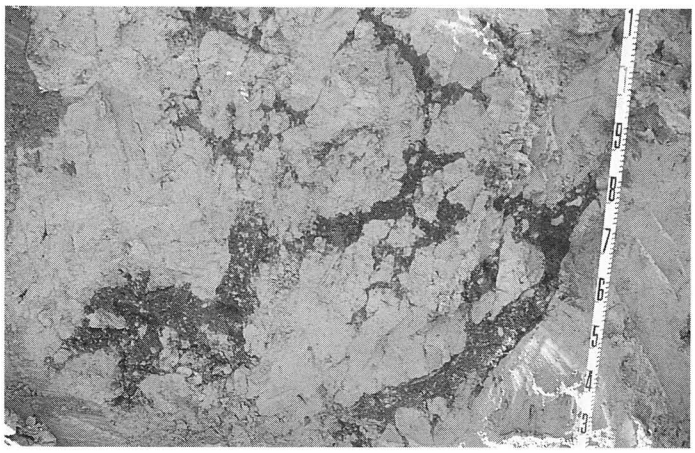


写真７　写真５の左側の割れ目をアップしたもの。
この割れ目の上部左側で、図76に示されるように北側柱穴列を北落ちの落差約20cmで切っている。

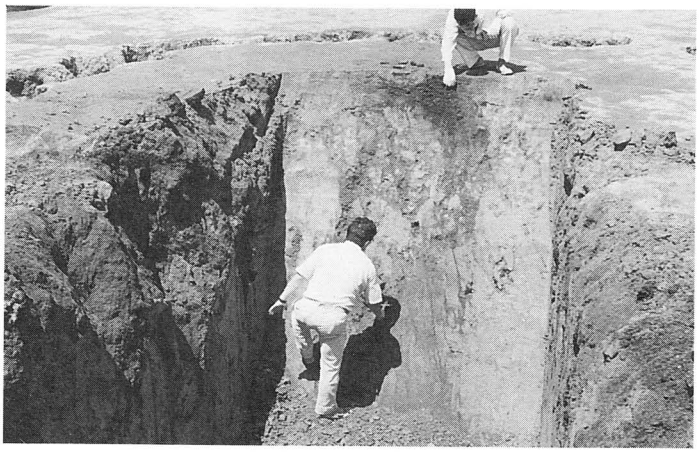


写真８　18号柱穴列①
壁面をねじり鎌でクリーニングする山梨大学の今泉俊文先生

写真９　18号柱穴列②、クリーニング終了。
トレンチの深さ3.4m、幅２mである。地割れは底まで達していて下限はわからない。写真右側が北。

写真10　18号柱穴列③、壁面で見られる地割れの全容。
クラックが２本平行して底まで達し、２本のクラックの間の赤土が菱形のブロックにくだけて下に落ち込んでいる。
２本のクラックの幅は1.1～1.3mあり、底へ向かってだんだん狭くなる。

写真11　18号柱穴列④、トレンチの側面と底面までの全容。
トレンチの底は深さ3.4mで、そこに御嶽—三岳スコリア層をはさんでいる。スコリア層はクラックをはさんでくいちがっている。２本のクラックにはさまれた中央部分は60cm下に落ちこんでいることがわかる。

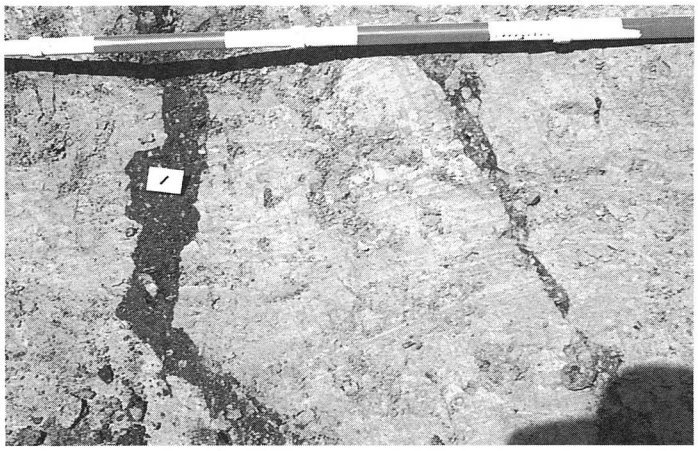
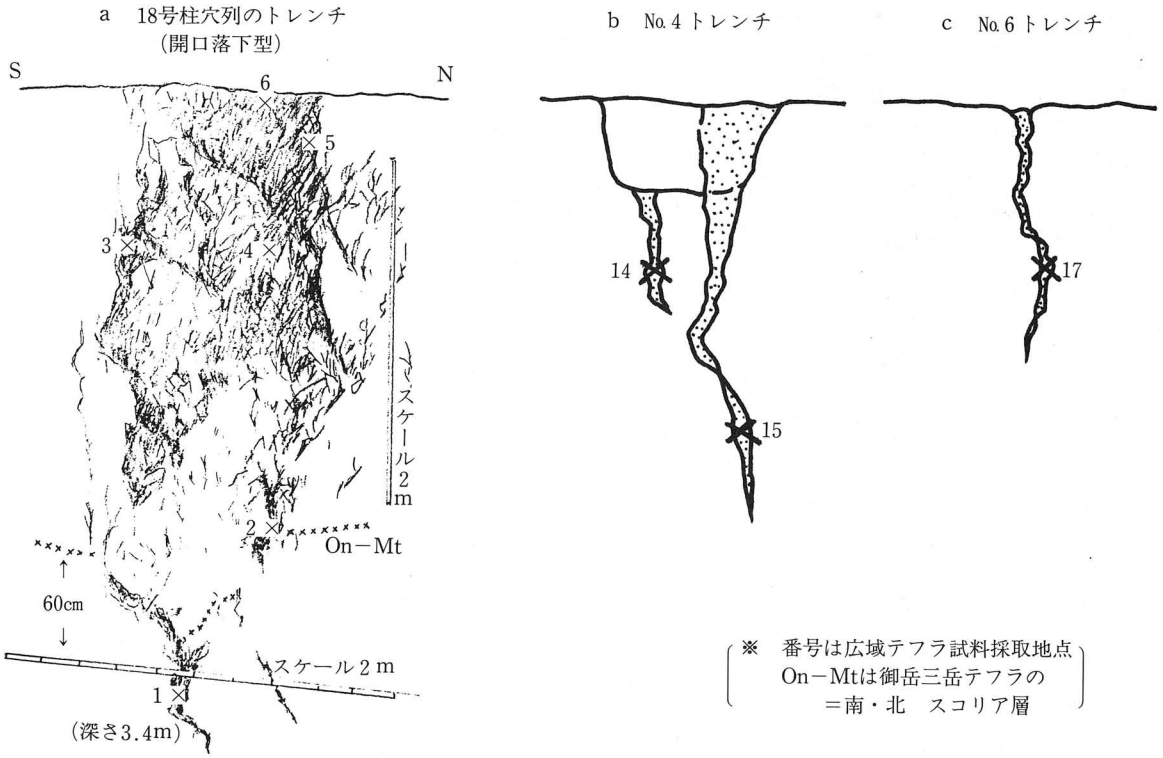


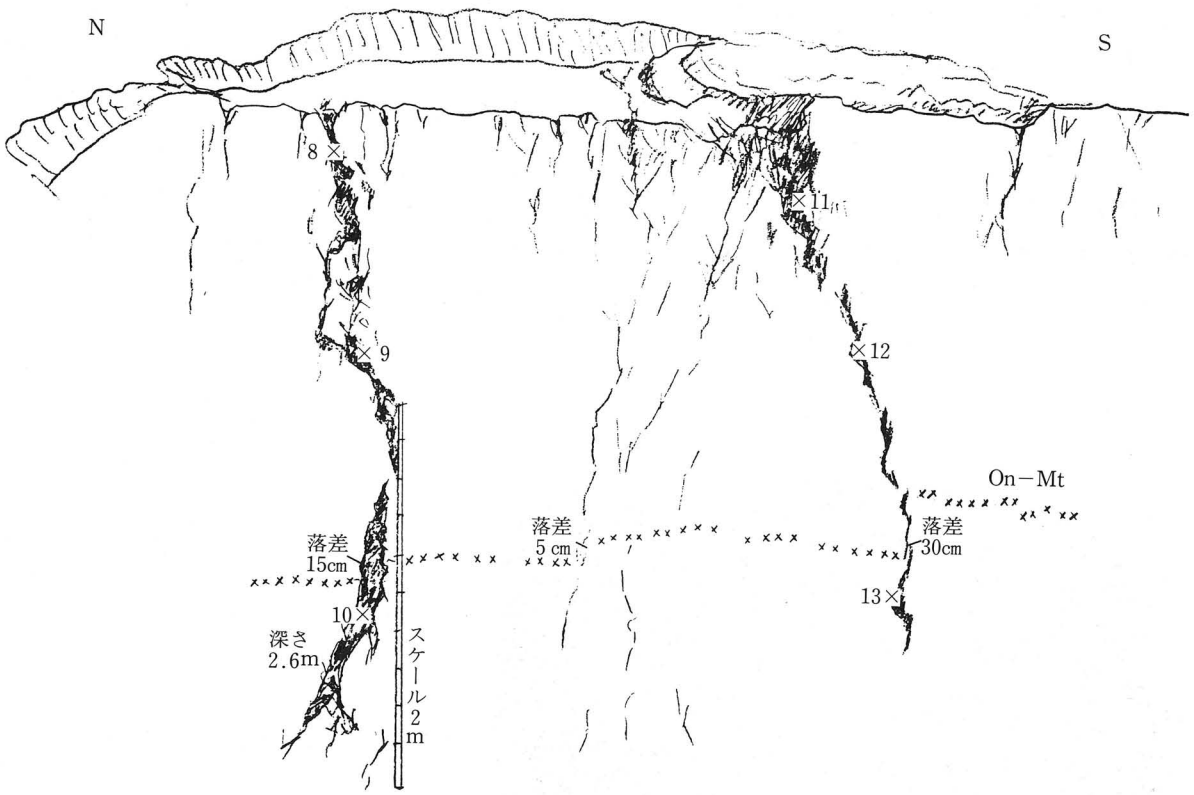
写真12　18号柱穴列⑤
地割れの底部で深さ3.4mの部分。南側のクラックは８－10cmの幅に開いており、新鮮な黒土がつまっている。そこの黒土（サンプルNo.１）から適量のAT火山ガラスが検出された（第３表）。

写真13　18号柱穴列⑥、地割れの上部。
サンプルNo.３は南側クラックで、深さ１m、ATの混入は僅少。
サンプル４と５は北側クラックでATの混入はほとんどなし。

12)、地割れの底はどこまで達しているかわからない。地割れは想像以上に深いものだと実感できる。底部での両クラックの幅は約50cmで割れ目がだんだんせばまっている。底部の近くに御岳三岳テフラ※のスコリア層があり、クラックによって切られている。スコリア層のくいちがいにより、地割れの間が60cm落ちていることがわかる。



d　14号住居址のトレンチ（北落ち正断層型）



第77図　地割れのスケッチと広域テフラ試料採取地点(1)

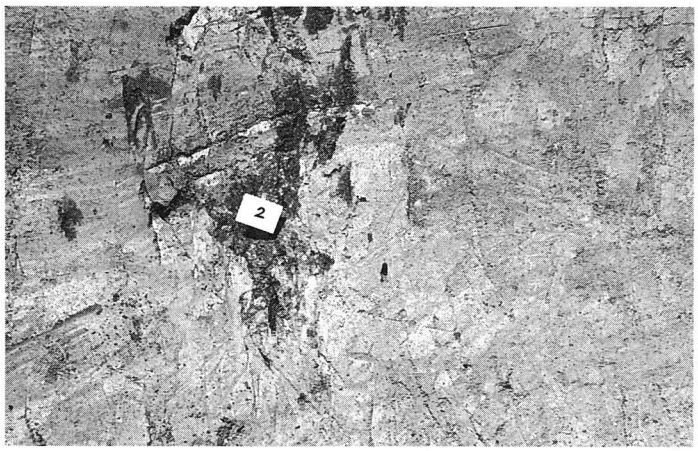


写真14　18号柱穴列⑦、地割れの下部。
サンプルNo.２は深さ2.8mで、北側のクラック。サンプリングの上下に御嶽—三岳スコリヤがある。No.２の黒土から小量のATが検出された。

地割れによって開口した部分には黒土がつまっている。特に地表部では陥没部を埋めて大量の黒土がつまっている。深部へのびている両側のクラックではところどころに空隙ができている。地割れは電光型に屈曲しており、二系統に走るクラック系によって菱形のような赤土の大小ブロックが乱雑につまったような見かけを呈している。広域テフラの姶良Ｔｎテフラ（以下、ＡＴと記す）は深さ3.4mのクラック内でＡＴ降下層準に匹敵する量の混入があった。反面最上部の黒土内ではＡＴの混入が極めて微々たるものであった。

※テフラの名称は火山灰アトラス（町田・新井1992）による。

(3)　正断層型の地割れ－Ｃ14号住居址の場合（写真15～18、第77図のｄ）

14号住居址も地割れ群によって切られている。ここでは幅５ｍ余、深さ3.8mのトレンチを掘って観察した。床面を切る２本の地割れと床の南縁をかすめるものと計３本の地割れがあり、さらに分岐するものも含めて地下では４本の地割れがある。トレンチ内の深さ2.0～2.6m付近に御岳三岳テフラがはさまれており地割れの部分でテフラ層がくいちがっている。どの割れ目でも北落ちの落差が認められ、割れ目ごとに階段状に下がっている。こうした様子から正断層型の地割れとした。

地割れの１本ごとの幅は小さい。地表部で30～40cmあるが、赤土のなかでは20cm以下である。割れ目の屈曲もあまりはげしくない。北側の地割れの深さ2.6mから採取したNo.10サンプル中には少量のＡＴ火山ガラスが混入している。この地割れではNo.８～10の３点からＡＴが検出されており、ＡＴ火山ガラスの混入度が良い。

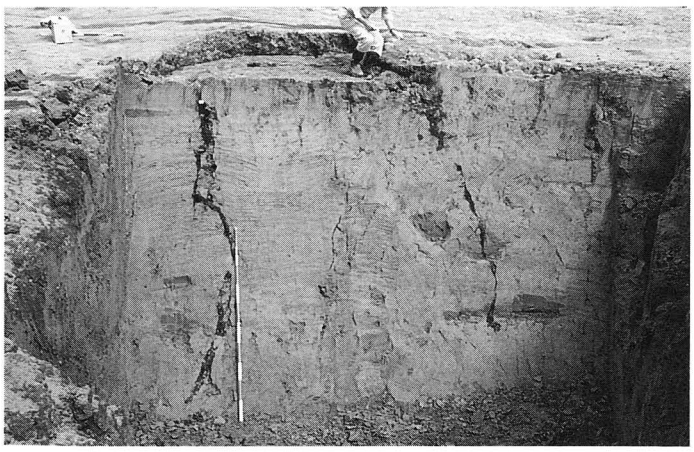


写真15　14号住居址①、住居址を切る地割れの全容。
床面を２本の地割れが通り、どちらも北側が落ち込んでいる（写真左が北）。南側で深２mのところに御嶽—三岳スコリヤ層がある。

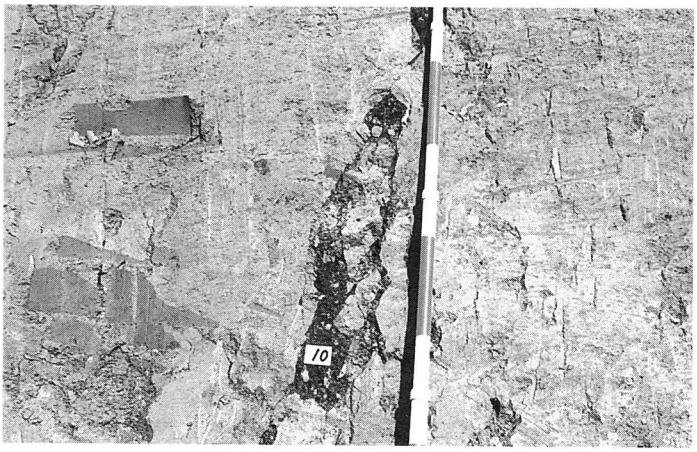


写真16　14号住居址②、北側の地割れ。
深2.6mの位置、ポールの右側とクラックの左側とで三岳スコリヤが落差15cmで北側に落ち込んでいる。サンプルNo.10の黒土からAT火山ガラスが検出されている。

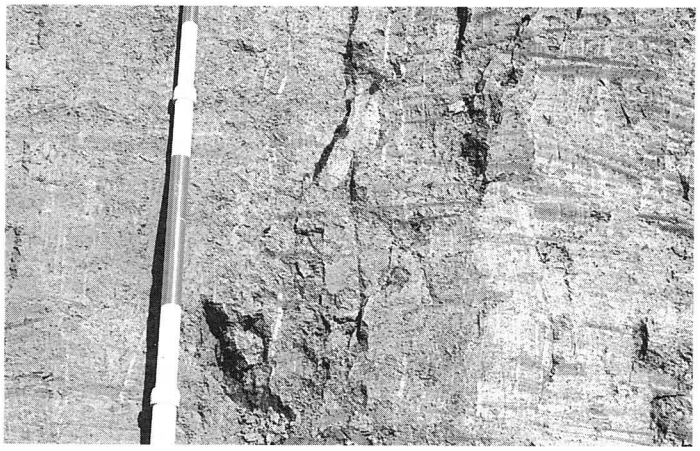


写真17　14号住居址③、床面を切る南側の地割れから分岐したクラックが中央部をとおっている。
写真は深さ2.2mで三岳スコリヤを切るクラック。ここでもスコリヤ層のくいちがいにより、北落ちで落差5cmである。

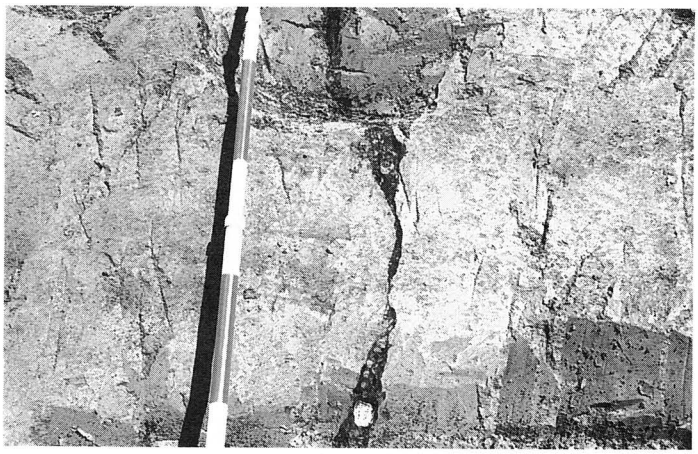


写真18　14号住居址④、床面を切る南側の地割れの下部。
深さ2.6m、地割れをはさんで、三岳スコリアがはいっており、そのくいちがいによって北落ちで30cmの落差がある。地割れ最下部がサンプルNo.13。僅少のATが検出された。

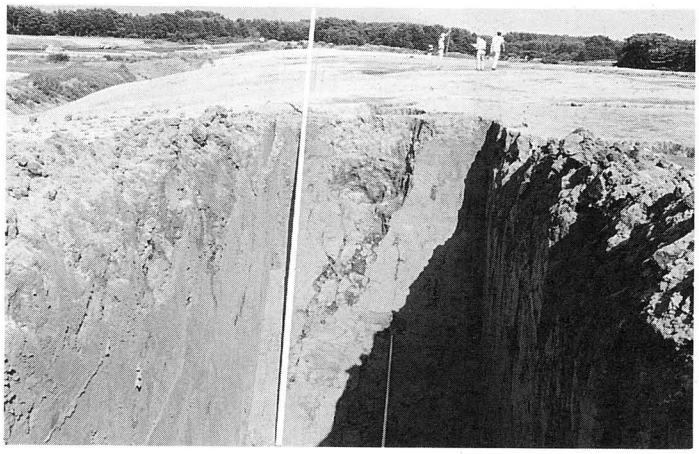


写真19　16号柱穴列①、AT火山ガラスのサンプルNo.16を採集した地割れ。
開口型の地割れで、割れ目の向きが北傾斜。

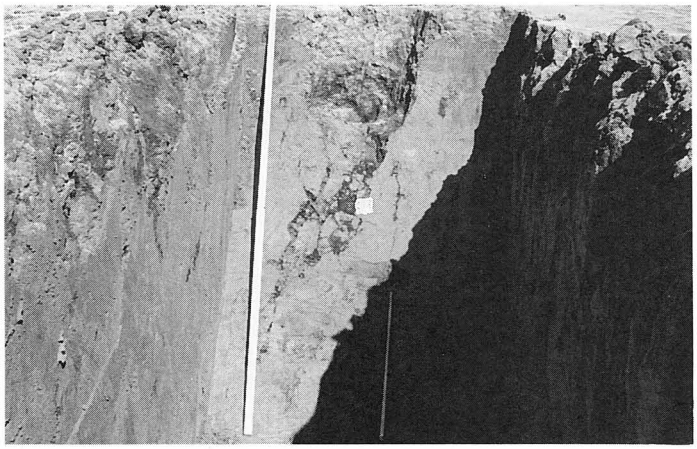


写真20　16号柱穴列②、サンプルNo.16、採取部を示す。
採取部の下の深さ2.1mのところに三岳スコリヤがある。三岳スコリアは割れ目の北側で数cm落ちている。

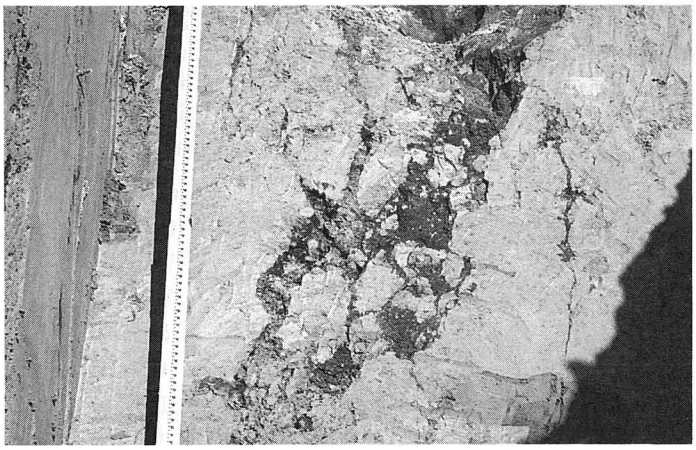


写真21　16号柱穴列③、サンプルNo.16、採取部をアップしたもの。
地割れの中の赤土のブロックとその間のすき間を充填する黒土の様子を示す。

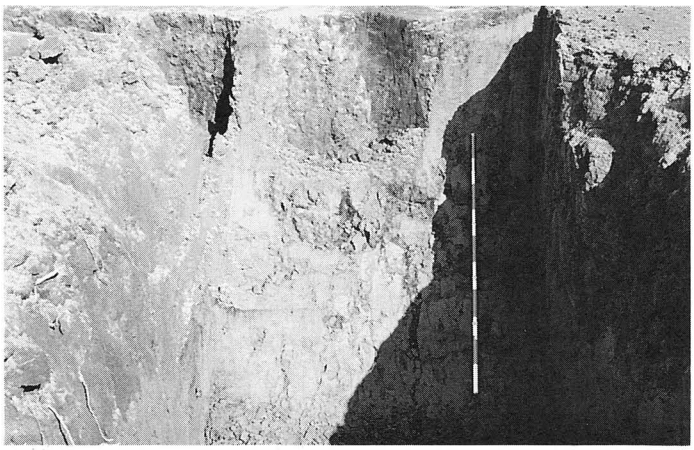


写真22　17号柱穴列①、開口型の地割れで、左右のクラックの間の幅は80cm。

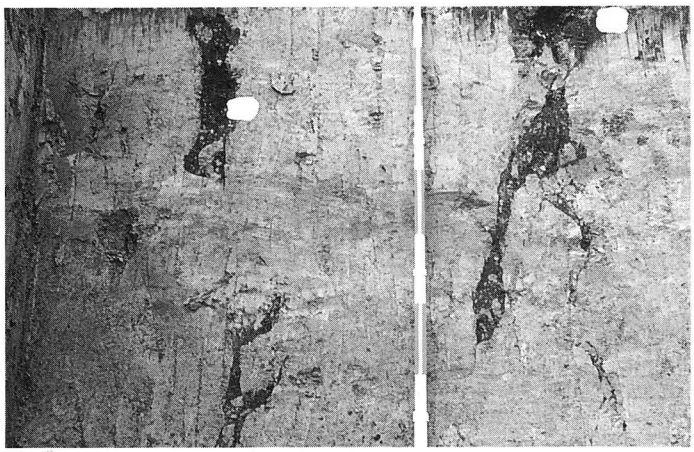
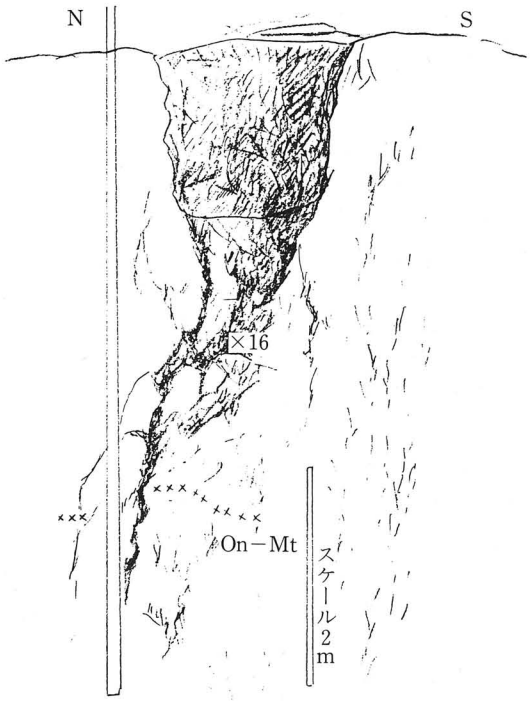
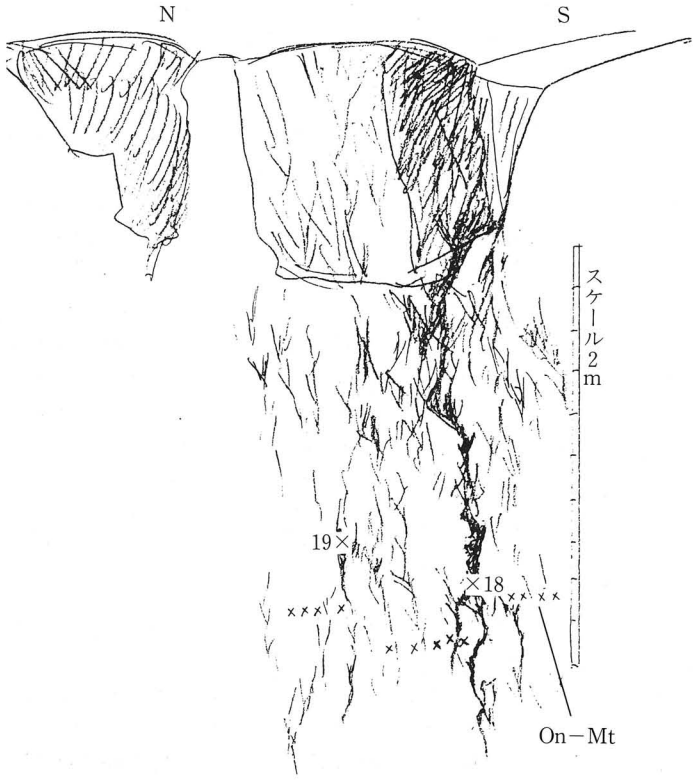


写真23　17号柱穴列②、サンプルNo.18がポールの右側、No.19がポールの左側。
18は深さ2.1mでATが検出された。深さ2.6mに三岳スコリヤ層があり、スコリヤ層は左右のクラックの中で20cm落ちている。

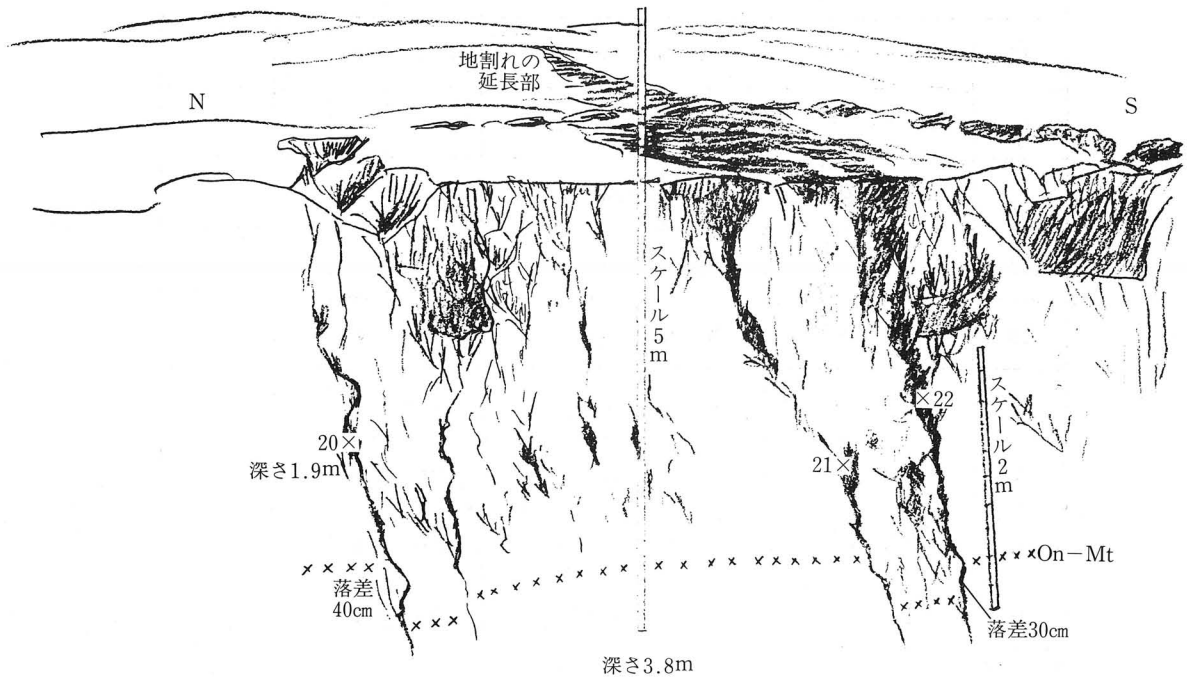
e　16号柱穴列のトレンチ



f　17号柱穴列のトレンチ



g　9号柱穴列のトレンチ（2組の開口落下型地割れ）



第78図　地割れのスケッチと広域テフラ試料採取地点(2)

第3表　地割れを充填する黒土の分析結果

試料採集地点	トレンチの場所	主な鉱物		火山ガラス		その他
		重鉱物	軽鉱物	bw	pm	
1	18号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl＞qz	●	・	
2	18号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl＞qz	●		
3	18号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl＞qz	・		
4	18号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl＞qz	●		
5	18号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl＞qz	●		br
6	18号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl＞qz	●		br
7	18号柱穴列 (On-Mt)	hy＞mg≫au	fl			
8	14号住居址	hy＞mg＞au＞ho	fl≫qz	●	・	
9	14号住居址	hy＞mg＞au＞ho	fl≫qz	●	・	
10	14号住居址	hy＞mg＞au＞ho	fl≫qz	●	・	br
11	14号住居址	hy＞mg＞au＞ho	fl≫qz	・	・	
12	14号住居址	hy＞mg＞au＞ho	fl≫qz	●	・	br
13	14号住居址	hy＞mg＞au＞ho	fl≫qz	●	・	
14	No.4トレンチ	hy＞mg＞au＞ho	fl≫qz	●		
15	No.4トレンチ	hy＞mg＞au＞ho	fl≫qz	●		
16	16号柱穴列	hy＞mg＞au	fl≫qz	●		
17	No.6トレンチ	hy＞mg＞au＞ho	fl≫qz	・		
18	17号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl≫qz	●		
19	17号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl≫qz	・		
20	9号柱穴列	hy＞mg＞au	fl≫qz	●		
21	9号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl≫qz	●		
22	9号柱穴列	hy＞mg＞au≫ho	fl≫qz	●		

凡　例

〔鉱物〕ol：かんらん石　au：普通輝石　hy：しそ輝石　ho：角閃石　di：黒雲母
mg：磁鉄鉱　qz：石英　fl：長石
（　）はごくわずか含まれるもの

〔火山ガラス〕bw：バブル型火山ガラス　pm：軽石型火山ガラス　br：褐色ガラス
ガラスの含有量　● 10%以上　● 1～10%　・ 1%以下

第４表　地割れを充填する黒土中の火山ガラスの屈折率
（測定及び同定は東京都立大学町田洋教授による）

試料採集地点	トレンチの場所	火山ガラスの含有量	ガラスの屈折率	同　定
1	18号柱穴列	中	1.498～1.501	AT
2	18号柱穴列	稀	1.497～1.500	AT
3	18号柱穴列	非常に稀	1.497～1.499	AT？
8	14号住居址	稀	1.498～1.501	AT
9	14号住居址	稀	1.498～1.501	AT
10	14号住居址	稀	1.498～1.501	AT
13	14号住居址	非常に稀	1.498～1.500	AT
15	No.４トレンチ	稀	1.498～1.500	AT
16	16号柱穴列	非常に稀	1.500±	AT
17	No.６トレンチ	非常に稀	1.499～1.500	AT
18	17号柱穴列	稀	1.498～1.501	AT
20	９号柱穴列	稀	1.498～1.501	AT
21	９号柱穴列	稀	1.498～1.500	AT
22	９号柱穴列	稀	1.498～1.501	AT

(4)　地割れと広域テフラの産状

広域テフラの分析はトレンチ調査をした７ヶ所の地割れにつまっている黒土から、22個の試料採取をおこなった（第３・４表）。すべての試料からＡＴ火山ガラスが認められる。しかし、ＡＴの混入量からみると、割れ目の中の下の方からおおく検出される傾向があらわれた（第５表）。反対に、割れ目の上部からはごく僅か検出されるのみ、または検出されないのもあった。地割れができる前に表層にあった黒土層は約40cmの厚さである。地割れ発生によって、この黒土層が割れ目の中へ落下したと思う。ＡＴ降下層準にあたる下層の黒土層ほど深く落下したのではないかと推測される。第５表のように、ＡＴ火山ガラス層準は平均的に約2.3mほど落下している。

第５表　地割れに落ちこんだ
ＡＴ火山ガラスの深さ

試料NO.	深さ（m）
1	3.4
10	2.6
18	2.6
20	1.9
21	1.7
22	1.6
平　均	2.3

(5)　２組の開口落下型地割れが並ぶ－Ｃ９号方形柱穴列の場合

Ｃ９号柱穴列を横切る幅７ｍ、深さ3.5mの大きなトレンチを掘った（写真24～29、第78図のｇ）。この壁面には２組の開口落下型地割れがみられる。南側の地割れ（試料採取No.21と22の地割れ）は、南へ傾斜した２組のクラックが底部に向かって伸びており、底部に向かうにつれて間隔がせばまっている。地表部の幅は1.5m、3.5mの深さで0.5mとなる。それぞれのクラックとも、上部ほど幅が広い。約３ｍの深さの層準に御岳三岳テフラのスコリア層がある。このスコリア層にくいちがいが認められ、開口部が30cm落ち込んでいることを示している。

北側の地割れ（試料採取No.20の地割れ）は、地表部が北側柱穴列の部分と一致している。この開口落下型地割れは地表部の幅が1.4m、3.5mの深さで0.8mとなる。御岳三岳テフラ層の層準では落下部が40cm落ちている。北側の地割れと南側の地割れの中間では３本のクラックがある。２mの深さの部分で、それらのクラックが口をあけている。開口地割れの部分でも、同じレベルでクラックが広がっている傾向を示す。これと、

写真24　9号柱穴列①、このトレンチは幅7m、深さ3.5mと大きく掘ってみた。
左右に開口型の地割れが並んでいる。

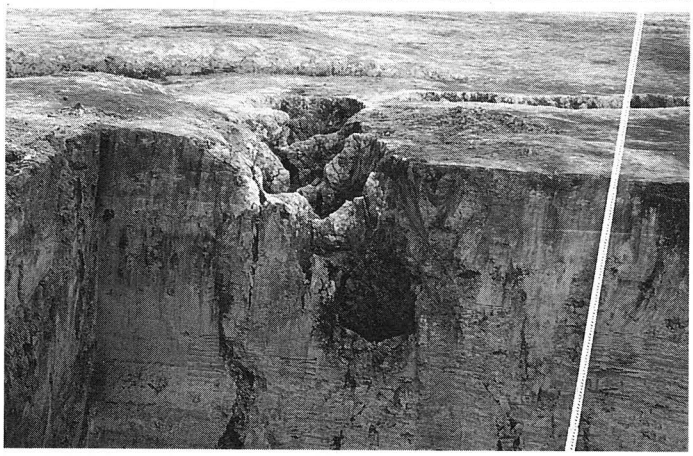


写真25　9号柱穴列②、北側の柱穴列の部分に開口型の地割れがある。
3mの深さに三岳スコリヤ層があり、開口部で40cm落ち込んでいることがわかる。

写真26　9号柱穴列③、テフラ調査のサンプリング位置を示す。
北（左）より南（右）へNo.20、21、22の順である。

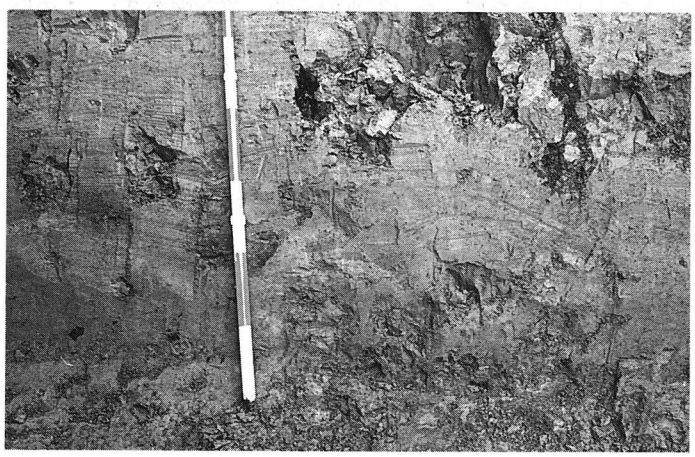


写真27　9号柱穴列④、北側（左）のNo.20の位置より下側をアップしたもの。
ポールのところと写真右側のクラックの間で三岳スコリヤ層が40cm落ち込んでいる。

写真28　9号柱穴列⑤、写真27の三岳スコリヤ層の部をアップする。
40cmの落差が見えている部分。

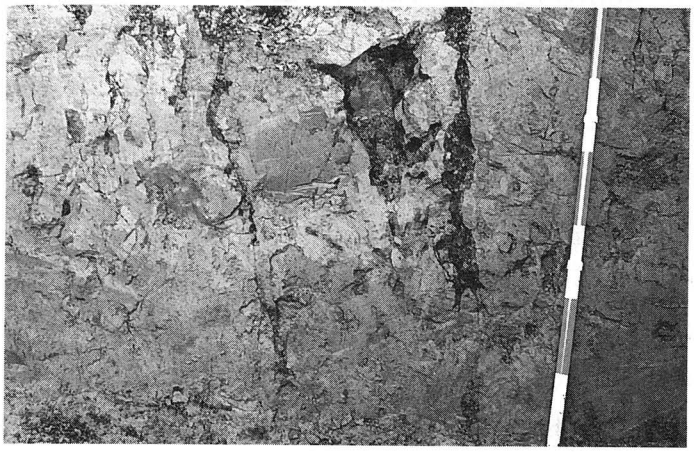


写真29　9号柱穴列⑥、テフラサンプルNo.21と22の位置の下の部分。
ここの開口割れ目の中は、三岳スコリヤ層によって30cm落ち込んでいることがわかる。

ＡＴ火山ガラスの落下部位とが一致しているようにも推測される。

第４節　地割れの傾向

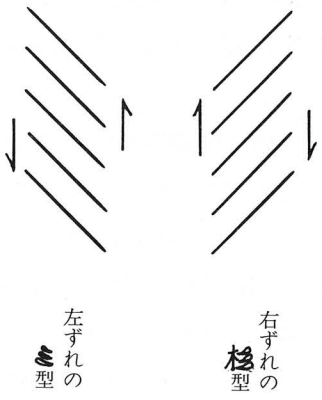
阿久尻遺跡の地割れはどんなものか気づいたことをまとめる。

①　台地状の調査地一帯に分布する。一部、斜面にも認められるが、平坦な台地上に集中する。地割れの一般走向はＮ70°Ｗで東西に近い。

②　調査した地割れの大部分は開口落下型で開口部の幅は地表で１～1.5mあり、下に向かってだんだんせばまっていく。トレンチは深さ3.5mまで掘ったが、地割れの底には達していない。3.5m付近での開口部の幅は0.5～0.8mくらいである。もし、開口部が単純なクサビ型モデルとするならば、地割れの深さは７～10mに達するものと推定される。

③　開口した地割れの間は落下している。深さ２～2.5mの部分に御岳三岳テフラのスコリア層がはさまれている。このスコリア層によって、その深さでの落ち込み量がわかる。大小さまざまの落下量を示し、５～60cmが確認された。開口部の幅がせまいと落下量が大きく、幅が広い場合は落下量が小さいといえそうな傾向を見せている。つまり、開口した割れ目がせまいと、割れ目が並行していて地下深くまで達している可能性を示している。

④　前項と同様な傾向を示す資料としてＡＴ火山ガラスの落下量がある。ＡＴは地表をおおう厚さ40cmの黒土の下位がその層準と推定される。Ｃ18号



第79図　雁行状割れ目の配列

柱穴列の地割れでは深さ3.4mのところにＡＴ集中の黒土があったので、ＡＴの落下量は３ｍである。この地割れは、地下深くまで達しているものと想像される。

⑤　地割れ群の並び方

阿久尻遺跡の地割れ群の並び方は「杉型」である（第79図）。地割れの分布を第75図で見ると杉型に配置しているからである。こうした割れ目は右ずれ雁行割れ目とも呼ばれており、右ずれの引張力で生じる。阿久尻の場合、遺跡のある尾根状の台地の北側は右へ向かって引張られ、南側は左へ向かって引張られたために生じた地割れである。

第５節　地割れはいつできたか

(1)　地割れ内を充填する黒土中の広域テフラ

２節で記述したように地割れの発生源は地震であり、その震源となったのは、糸魚川－静岡構造線の活動であろうと推定するのが、もっとも妥当と考えられる。地割れが地震による開口割れ目とすると、まさに“地震の化石”にほかならない。では、いつの地震であろうかという課題が重要な問題となってくる。

地割れのできた年代を決め出したいため、地割れの中を充填する黒土を採集し、黒土中に混入する広域テフラを分析した。予想としては、南九州姶良カルデラ起源のＡＴが多分検出されるであろう。さらに、南九州鬼界カルデラ起源の鬼界アカホヤテフラ（以下Ｋ－Ａｈと記す）が検出されるかどうかが年代を決める鍵になりそうである。何故なら、Ｋ－Ａｈの噴出は約6,300年前であり、阿久尻遺跡の縄文前期前半とされる年代と一致してくるからである。

試料の収集は、７地点の地割れから22試料と地表での試料を加えたものである。地割れでの試料収集個所は第77・78図に示してあり、各試料の分析結果は第３・４表のようである。各試料とも広域テフラであろうと予想されるバブル型火山ガラスが混入している。その中で15試料の火山ガラスの屈折率を測定した。ＡＴかＫ－Ａｈかの決定はガラスの屈折率を測定するのが確実で手っとり早い方法である。測定は東京都立大学の町田洋教授にお願いした。第４表の結果から明らかなように、15試料の火山ガラスの屈折率は各試料ともＡＴの屈折率である1.498～1.501に一致している。Ｋ－Ａｈの屈折率である1.508～1.516に相当する火山ガラスは皆無である。

Ｋ－Ａｈが地割れの中に入っていないことから地割れ（地震）はＫ－Ａｈの降下期より前であることが判明した。Ｋ－Ａｈの年代は6,300年前であるから、6,300年前より古いことが確認できる。またＡＴの存在から２万1,000年前よりは新しいことになる。

遺跡が縄文前期前半であるとされていることから、地割れは遺構を切っているため、地震発生の年代は6,300年前より、わずかに古いと推定できる。

(2)　阿久尻遺跡のテフラについて

遺跡では４ｍ以上のテフラによっておおわれている。地割れ調査のための14号住居址トレンチでは3.4mまでのテフラの断面が観察できた（第80図）。最上部は約40cmの黒土で、その下位にＡＴ火山ガラスが含まれている。深さ２～2.5mのところに御岳三岳テフラがあり、そこまでが新期御嶽テフラの上部層である。下部層は御岳三岳テフラの下から出ているが、調査地点では御岳第１テフラまでは掘られていない。遺跡の南側斜面で御岳第１テフラが確認できた。したがって、阿久尻遺跡における風成テフラ層は４～５ｍの厚さがあり、御岳第１テフラまでが見られる。阿久尻遺跡から原村菖蒲沢に通じる道路ぎわで、中央道より200m西側にテ

	柱状図	特　　徴	主な鉱物		火山ガラス		その他
			重鉱物	軽鉱物	bw	pm	
0 cm		黒土	hy>mg>au>ho	fl>qz	●		br
50 cm		褐色火山灰　ハード	hy>mg>au≫ho	fl≫qz	・	・	
			hy>mg>au≫ho	fl≫qz	・		
100 cm		褐色火山灰　ややソフト	hy>mg>au≫ho	fl≫qz			
			hy>mg>au≫ho	fl≫qz			
			hy>mg>au≫ho	fl≫qz			
150 cm			hy>mg>au≫ho	fl			岩片＋
			hy>mg>au≫ho	fl			岩片＋
			hy>mg>au≫ho	fl			岩片＋＋
200 cm			hy>mg>au	fl			岩片＋
			hy>mg>au	fl			岩片＋
250 cm	▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲	赤褐色スコリア On-Mt	hy>mg	fl			
		黄褐色火山灰　ややハード	hy>mg>ho≫au	fl	・		軽鉱物多
			hy>mg>ho≫au	fl			軽鉱物多
300 cm		黄褐色火山灰　ソフト	hy>mg>ho≫au	fl			軽鉱物多
			hy>mg>ho	fl	・		軽鉱物多
		340cm					

凡　例

〔鉱物〕ol：かんらん石　au：普通輝石　hy：しそ輝石　ho：角閃石　bi：黒雲母
mg：磁鉄鉱　qz：石英　fl：長石
（　）はごくわずか含まれているもの

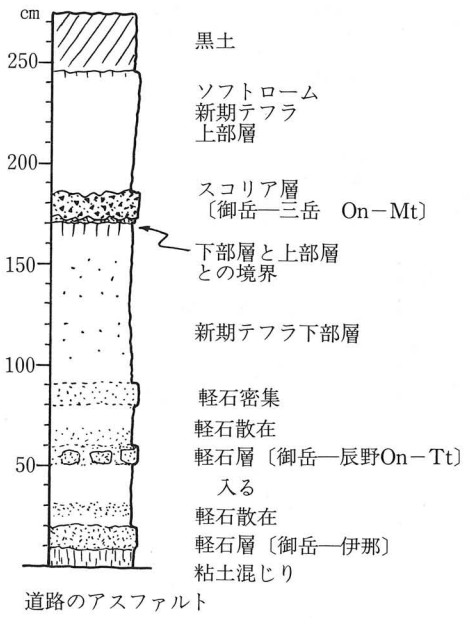
〔火山ガラス〕bw：バブル型火山ガラス　pm：軽石型火山ガラス　br：褐色ガラス
ガラスの含有量　● 10%以上　● 1～10%　・ 1%以下

〔柱状図〕△ 軽石　▲ スコリア　⁝⁝ 砂～泥　○ 礫　■ 角礫　No. 黒土
白抜きは火山灰

第80図　C14号住居祉のトレンチにおけるテフラ柱状図

フラの自然露頭がある(第81図)。ここでは道路面に御岳伊那テフラがあり、その上に、御岳辰野テフラ、御岳三岳テフラが重なる。黒土までの全層厚は2.45mである。

阿久尻は八ヶ岳山麓の火山麓扇状地面にあたり、当地域の地形面としては一番古く、茅野市・原村から富士見町一帯にかけて御岳第1テフラ層以上が風成テフラとして被覆している。



第81図　阿久尻遺跡近傍のテフラ露頭
(中央道より200m阿久尻より)

第6節　阿久尻遺跡の地割れ群と糸魚川－静岡構造線の活動

(1)　糸魚川－静岡構造線と諏訪盆地の形成

本州を横断している糸静線は活断層として活発な動きを持つ代表的な断層である。諏訪盆地は地震をおこしながら沈降を続けてきた歴史をもっており、沈降量が大きいので八ヶ岳山麓から流れ集まる宮川や上川の水が盆地内に貯水され、諏訪湖となっている。

諏訪湖のボーリングによれば(山崎ほか，1987)、諏訪市渋崎において深度250mまで砂・シルトの互層を主としており、泥炭層や宮川から流入した軽石や安山岩礫もふくまれている。深度66.3mには南九州からのＡＴ火山ガラスが含まれており、２万1,000年間の堆積速度は1,000年あたり3.1mとなる。深度210.5mには御岳第１テフラが含まれており、８万年間の堆積速度は1,000年あたり2.6.mとなる。下の地層ほど、圧密作用をうけているのでだんだんと堆積速度が増したとはいえない。平均して３mくらいの堆積が進行してきたのではないかと述べられている。これを裏がえしていうならば、諏訪湖を中心にして1,000年間あたり約３mずつ沈降し続けているといえる。

同じく、渋崎での天然ガス調査ボーリングによると(本島ほか，1953)、深度371mまで砂・粘土がくりかえされており、基盤岩には達していない。岡谷市下浜では深度400mまで砂・粘土が続いている（市川，1954)。

こうした事実から、諏訪湖、つまり、諏訪盆地は地震による盆地の沈降と湖面の拡大、続いておこる砂・粘土などの堆積作用で湖面が徐々に縮小していく、こうした過程を何回となく、くり返すことによって現在の姿が生まれてきたのである。

山崎ほか（1990）によれば、渋崎周辺のボーリング調査によって珪藻化石分析が行われている。湖が拡大したときは浮遊性の珪藻が大量に含まれてくる。深度70m（約３万年前）までは河成氾濫原が今より拡大しており湖水域は縮小していた。しかし、この期間に数回の湖の拡大が認められる。特に最近の４～5,000年前に湖水域が拡大し、現在は徐々に縮小している。こうしたサイクルは気候変動より短周期で起きており、湖水域の変化は盆地縁辺部での断層運動、つまり、地震活動を反映していると推定されている。

こうした諏訪盆地はいつごろ誕生したのであろうか。諏訪盆地の中には400m以上の厚い堆積物がつまっている。長い間の造盆地運動の結果として厚い堆積物がつもり積もったわけであるから、盆地底をつくる基盤が見つかれば沈降運動がいつから始まったかがわかるが、今のところボーリングでは見つかっていない。盆地周辺の山地には、古い火山砕屑岩類からなる塩嶺累層が広く分布している。諏訪盆地の開裂は塩嶺累層の堆積後であって、120～150万年前ごろからはじまったと考えられている（藤森，1991)。

諏訪湖の成因は古くから火山説が有力だった。火山説を否定し、断層説が主張されはじめたのは60年前こ

ろからである(三沢, 1930)。諏訪盆地は北東縁と南西縁の山麓に断層が生じ、断層にはさまれた盆地部が沈降をくり返して諏訪湖ができたと説明されるようになった。

現在、一般的に認められているところの、糸静線の動きによる横ずれ堆積盆（プルアパートベイズン）として諏訪盆地が沈降したという提唱は金子（1972）による。いまから20年前である。

金子（1972）によれば、諏訪盆地は糸静線の屈曲部が左横ずれ断層の動きによって生じた横ずれ堆積盆であると明確に図示されている(第74図)。阿久尻遺跡のすぐ横を通っている糸静線は今まで述べたような諏訪盆地の形成とかかわって活動を続けてきた代表的な断層である。

(2) 茅野市を通る糸静線の茅野断層について

糸静線の主断層は茅野市の市街中心部を通りぬけ、阿久尻遺跡から150m離れた南西側を通過している。この主断層は東郷(1987)によって茅野断層と命名されている。茅野断層についてはさらに藤森(1991)、藤森・太田（1992）により報告されている。藤森によると茅野断層は左横ずれ変位を示し、平均変位速度は1,000年あたり８～10mに達し、日本で最大級の変位速度をもつＡ級活断層と指摘されている。なお茅野断層の縦ずれ変位速度は1,000年あたり0.2～0.4mで、横ずれ変位速度の1/20～1/50とされている（藤森, 1991)。

諏訪地区の糸静線は、左横ずれ変位をもつ活断層であることが知られている。左ずれ変位がもっとも明瞭に示されている事実として中央構造線の左横ずれ変位量の12kmがある。12kmの変位量は諏訪盆地が開口を開始したと考えられる120～150万年前から今までの総変位量となる。そうしたとき、茅野断層の変位速度である1,000年あたり８～10mは矛盾しない変位速度である。

茅野断層でみられる変位量は藤森（1991）によると、茅野市坂室において550mとされている（第82図)。この変位量は６万5,000～５万5,000年前から開始されたものとしている。６万5,000年前というのは、御岳三岳テフラの降下年代に相当するから、同テフラが降下した頃、ないし、その直後から茅野断層の変位が地形に記録されているということになる。坂室における変位地形から、糸静線の左横ずれ変位がはっきりするわけであるが、諏訪盆地周辺において、坂室のように明確な変位地形を残しているところは他にない。坂室は阿久尻と近接する場所で、しかも、糸静線を代表する茅野断層による変位地形が唯一明瞭に残っている場所として重要である。

現在、坂室では茅野断層に沿ってＪＲ中央線と、国道20号線が通っていて地形改変が著しいけれど、坂室の観音堂のある小山（830m）は茅野断層による閉塞丘（シャッターリッジ）として学術的価値が高く、地形景観として保全すべきものである。この閉塞丘の北西側と20号線との間の谷は茅野断層による載頭谷であって典型的な横ずれ谷の形態を残している。こうした閉塞丘と載頭谷をセットにした景観保全指定が望ましい。

(3) 阿久尻の地割れ群と糸静線活断層系の活動について

阿久尻遺跡に地震による開口割れ目があることが、茅野市教育委員会からの依頼で1991年６月３日に現地を予察してみてわかった。その後、市教委では地震考古学の寒川旭氏に連絡、７月末に同氏が現地を訪れた。この結果は寒川（1992）により簡単にふれられている。

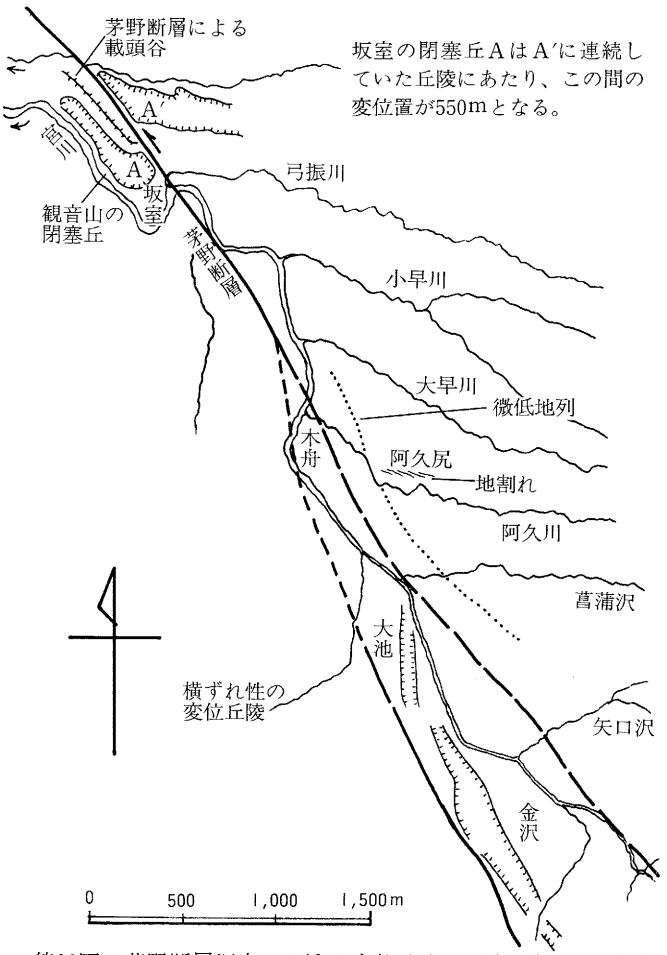
地割れの本調査は遺跡調査終了後の８月９日に重機を入れ、トレンチを掘っておこなわれた。このときはわれわれ２名のほかに、数回にわたる糸静線のトレンチ調査に加わっている山梨大学の今泉俊文氏も参加された。こうした経過で実態を見せた地割れ群について、特に活発な活動をくり返している糸静線とどのようにかかわっているのか考察する。

諏訪郡内の糸静線は何ヶ所かでトレンチ調査が実施されており糸静線活断層系によるイベントが明らかになっている。この成果と阿久尻遺跡の発生年代を対比したのが第6表である。これからつぎのような興味深い“古地震”が示唆される。

① 阿久尻の地割れと同じ年代に並ぶのではないかと推定されるイベントが金沢の大沢断層トレンチにおける5,500～6,500年前のもの、富士見の若宮断層トレンチにおける7,000年前以後のものである。仮に、一致した場合、3者の年代がそろうのは6,300～6,500年前となる。

② 阿久尻の地割れは茅野断層の活動によるものと推定されるから、茅野－富士見間がセットになって糸静線が活動したと考えられる。

③ 岡谷市中島断層トレンチにおける4,000～5,000年前のイベントは、諏訪市湖南野荒神山遺跡の縄文中期半ばの住居址床面を切る活断層と一致するかも知れない。糸静線活断層系の活断層は岡谷－諏訪間がセットになっている可能性がある。事実、中島断層－荒神山断層は諏訪湖の開裂をおこしている同一系列の断層系である。これに対し、茅野－富士見間では糸静線の活動によって横ずれ性の変位丘陵（テクトニックバルジ）



第82図 茅野断層坂室における変位地形と阿久尻周辺の地形

第6表 糸静線トレンチ調査等で識別されたイベント年代と阿久尻の地割れ年代との対比
（1万年前より新しいイベントのみ対比した）

年 代	岡谷市今井 中島トレンチ	茅野市金沢 大沢トレンチ	富士見町 若宮トレンチ	古文書および荒神山遺跡と阿久尻の地割れの推定年代
5000 — 10000	より新しいかも 2200～2300 4000～5000 9000～10000	1200 5500～6500 9300～14000	7000以後	841（承和8）信濃国の大地震① 4500 荒神山遺跡の活断層② 6300以前 阿久尻の地割れ
文 献	岡谷断層発掘グループ（1988）	糸静線発掘調査研究グループ（1988-a）	糸静線発掘調査研究グループ（1988-b）	① 続日本後記 ② 松島・伴（1979）

列をつくりだしているというように、地形をつくる変動の様式が全く異なっている。

④　大沢断層の最新の活動は1,200年前と推定されている。糸静線発掘調査グループによればこのイベントは『続日本後記』に記される“承和８年（841A.D.）２月の信濃国地震”にあたる可能性があると述べている。

⑤　糸静線のトレンチ調査で検出されたすべての断層・活断層による変位地形・住居址床面を切る断層などこれらすべての断層は左横ずれ変位を示している。

(4)　地割れの成因と糸静線との関係

阿久尻の地割れ群は杉型割れ目で、右ずれの引張力場のもとで開裂したものである。開裂は日本で最大級に活動的だとされている茅野断層の動きと関連しているかどうか、その可能性を検討したい。そこで、地割れが生じている周辺の地形を調査した。

丘陵状に残っている火山麓扇状地は阿久尻遺跡の北側から大早川・阿久川・菖蒲沢・矢口沢などによって下刻され、先端部が尾根状になって宮川に面する急崖で切られている。阿久尻の南側には阿久川が流れており、遺跡のある台地の末端部付近から急に北西へ向きを変え、台地を深く侵食しながら木舟集落の北端で宮川に流れ込んでいる。この流路のとり方は奇妙であって、阿久川の末端部が500mにわたり茅野断層とほぼ平行して流れている。阿久尻遺跡と阿久川をはさんでのびてきた南側の扇状地も、その末端部が阿久川の屈曲により、阿久尻遺跡の西側にへばりつくように北西へ400mにわたって細長くのびている。こうした地形配列は茅野断層と平行する副断層ができていて、その断層の影響で阿久川が屈曲したと推定できるような状況である。

遺跡のすぐ西側の阿久川屈曲部をさらに調べると、河床に沿う崖に火山麓扇状地を構成している火山角礫岩層や砂礫層が露出している。それらの地層の上に御岳第１テフラも重なっている。御岳第１テフラの位置は遺跡での標高より低い。だから、阿久川の流れは御岳第１テフラの降下年代より前に、すでに、現在のように屈曲した流れ方をとっていたことになる。

阿久尻遺跡の分布する馬の背状の火山麓扇状地の末端部は、茅野断層の通る宮川の河谷によって直線的に切断され、扇面と40m以上の標高差ができている。こうした末端部の扇面上を注意してみると複雑で微妙な微地形がみられる。注目すべき微地形は宮川の崖に面してごくわずかの高まりをもつ小丘列が茅野断層と平行して並んでいることと、小丘列の東側に微低地列が同じように平行して並ぶことである。こうした、微妙な地形のセットは阿久尻台地の北端部から1.5kmほどにわたって断続的に続いている。扇状地面を下刻する大早川から矢口川までの間にあたる。この間の茅野断層は木舟集落から矢口川の出合いにかけてわずかな湾曲を示している。南西に凸面を向けた弧を描いている。扇状地末端部の微地形列もこの弧に調和して並んでいる。

阿久尻遺跡の位置は茅野断層が示すゆるやかな弧の中央部内側に位置する。そして、茅野断層から鋭角に派出する形で地割れ群が並んでいる。地割れは右ずれ割れ目として生じていることから、茅野断層の左横ずれ変位に伴って副次的に生じた引っ張り断裂系として説明できるのではないだろうか（第82図）。

横ずれ断層に伴う変形の事例は世界各地で数多く研究されている。主断層の活動に伴って阿久尻の地割れのような変形があり得るのであろうか――、この疑問を解くためにPrice･Cosgrove（1990）を調べてみた。その結果を第83図に示す。

a，主圧縮方向とそれぞれ30°の方向に横ずれ断層（左ずれ）と横ずれ断層に対する補足的なねじれ（右ず

れ）が初生的に生じる例。

b，横ずれ断層（左ずれ）から約60°で派生する生断層ができる例。

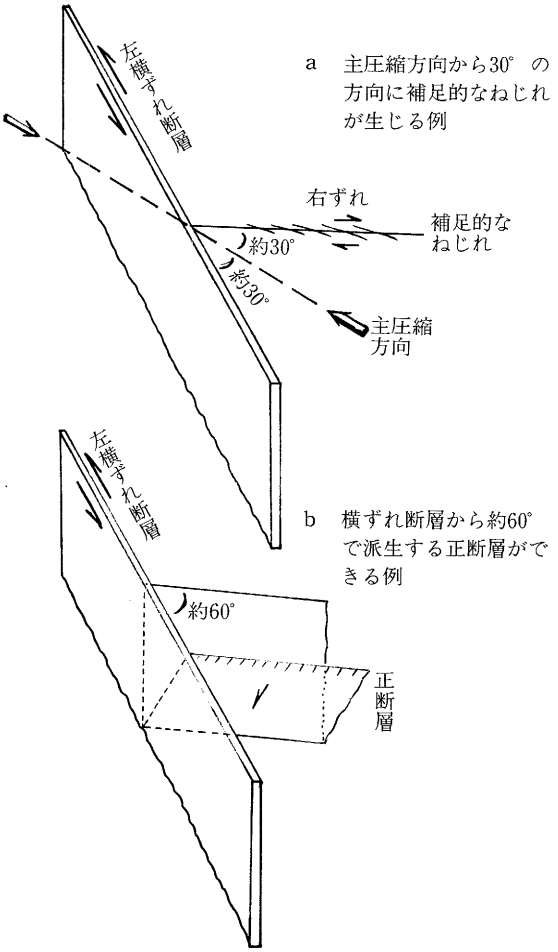
第83図のモデルは茅野断層と阿久尻の地割れについて合致する事例である。その理由を次に記す。

① 茅野断層にたいし阿久尻地割れ群は一般走向約60°で分岐している。

② 地割れが示す右ずれ雁行割れ目は左横ずれ断層に伴って生じたねじれとして説明できる。

③ 地割れ群は北落ちの正断層系としてあらわれている。その場合も横ずれ断層に対し、約60°の関係である。

④ こうした分岐断裂系が生じる原因は横ずれ断層が微妙な曲がりをもっているためである。



第83図 主断層と副次的に生じる断裂系
（PriceとCosgroveによる）

第7節 まとめ

阿久尻遺跡の地割れ群は地震による開口割れ目と断定できる。震源となった断層は遺跡と近接している糸静線活断層系の中で、もっとも活動的な茅野断層と想定される。地震の発生年代を推定するため、地割れ内を充填する黒土を分析し、含まれている広域テフラの検討を行った。その結果、全試料から姶良Ｔｎテフラ（ＡＴ）が検出された。反面、鬼界アカホヤテフラ（Ｋ－Ａｈ）は検出されなかった。このことは、地震発生が6,300年前より古いと決められる。これまで糸静線活断層系の中で、阿久尻に近い茅野市大沢断層と富士見町若宮断層でトレンチ調査が実施されている。２トレンチで検出されたイベントの年代と阿久尻の地割れ年代とが合致するのは6,300～6,500年前となる。したがって、この年代が地割れを発生させた地震の年代であると推定したい。

［引用文献］

藤森孝俊（1991）活断層からみたプルアパートベイズンとしての諏訪盆地の形成．地理学評論，64Ａ－10，665－696.

藤森孝俊・太田陽子（1992）諏訪盆地の活断層詳細図－試作例－．活断層研究，10，27－39.

市川渡（1954）諏訪湖堆積物中の化石珪藻について．石油技報，19，５，168－175.

糸静線発掘調査研究グループ（1988ａ）1983年糸静線活断層系（茅野地区）トレンチ調査．活断層研究，５，18－22.

糸静線発掘調査研究グループ（1988ｂ）1983年糸静線活断層系（富士見地区）トレンチ調査．活断層研究，５，11－17.

金子史朗（1992）地形図説２．古今書院，229ｐ.

町田洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東大出版会，276ｐ.

松島義章・伴信夫（1979）糸魚川－静岡構造線の活動によって変位した諏訪湖南東岸の縄文住居址．第四紀研究，18，155－164.
松田時彦（1992）動く大地を読む．岩波書店，158ｐ（ｐ．142－147）.
三沢勝衛（1930）諏訪盆地の地質構造に関する考察の一端．諏訪史第２巻　前編.
両角昭二・北沢和男（1986）茅野市史別巻自然（地質）．茅野市，７－88.
本島公司・品田芳二朗・牧真一（1953）諏訪湖天然ガス鉱床調査報告．地質調査所月報，４巻，９号.
岡谷断層発掘グループ（1988）1983年糸静線活断層系（岡谷地区中島Ａ遺跡）トレンチ調査．活断層研究，５，３－10.
Price・Cosgrove (1990) Analysis of geological Structures. Cambridge University Press, 502ｐ（ｐ．139－160）.
寒川旭（1992）地震考古学．中央公論社，251ｐ（ｐ．124－128）.
東郷正美（1987）茅野市坂室付近の糸静線活断層系による変位地形．活断層研究，４，42－46.
山崎晴雄・長岡信治・吉川清志・下川浩一（1987）諏訪湖の古環境変遷と地殻変動．日本第四紀学会講演要旨集．17，88－89.
山崎晴雄・下川浩一・水野清秀・鹿島薫（1990）諏訪盆地の地下地質構造と活断層．日本第四紀学会講演要旨集．20，80－81.

第Ⅷ章　ま　と　め

第１節　縄文時代前期前半の住居址

本遺跡からは、Ａ区で16軒、Ｂ・Ｃ区で24軒の住居址が検出されている。この中にはＡ区の平安住居址１軒（Ａ９号住居址）、Ｂ・Ｃ区の縄文早期住居址１軒（Ｂ４号住居址）、縄文中期住居址７軒（Ｃ17・Ｃ19～Ｃ23・Ｂ25号住居址）を含んでいる。それ以外の住居址はＣ12号住居址・Ｃ14号住居址の様に、地文に縄文をもつ神ノ木式期かと思われるものもあるものの、いずれも縄文時代前期前半の中越式土器を伴っている。特に、Ａ14号住居址は、唯一の石囲炉をもつ住居址でもあった。

(1)　平面形態

住居址の平面形は、円形のもの、隅丸方形のもの、隅丸長方形のもの、楕円形に近いものなどがある。これらの住居址はすべて中越期のものと考えられるが、重複しているものはないものの、かなり近接しているものがあることから、ほぼ同一時期と考えられるものの、何回かの位置を変えての建て替えが行われているものと思われる。また、同一場所での拡張と考えられる住居址も、Ａ３号住居址とＢ３号住居址の2軒が確認されている。Ａ８号住居址も４本の主柱穴中の３本に近接する柱穴が検出されていることから、拡張された可能性がある。

各住居址の主柱穴は、斜面にあって、半分以上が流失してしまっており、柱穴が検出できなかった例もあるが、基本的にはどれも４本であったと考えられる。例外と考えられるものもあるが、それについては後述する。

支柱穴としたものには、幾つかの住居址で規則的な支柱穴の在り方を示し、主柱穴と共に住居址の上屋構造をなす上に、無くてはならないと考えられる配置を示すものと、その在り方が不規則で、主柱穴の補助的な役割を示すのではないかと考えられるものの二者がある。

遺物の検討はほとんど行なってないものの、平面形態その他の気づいたことをまとめてみたい。

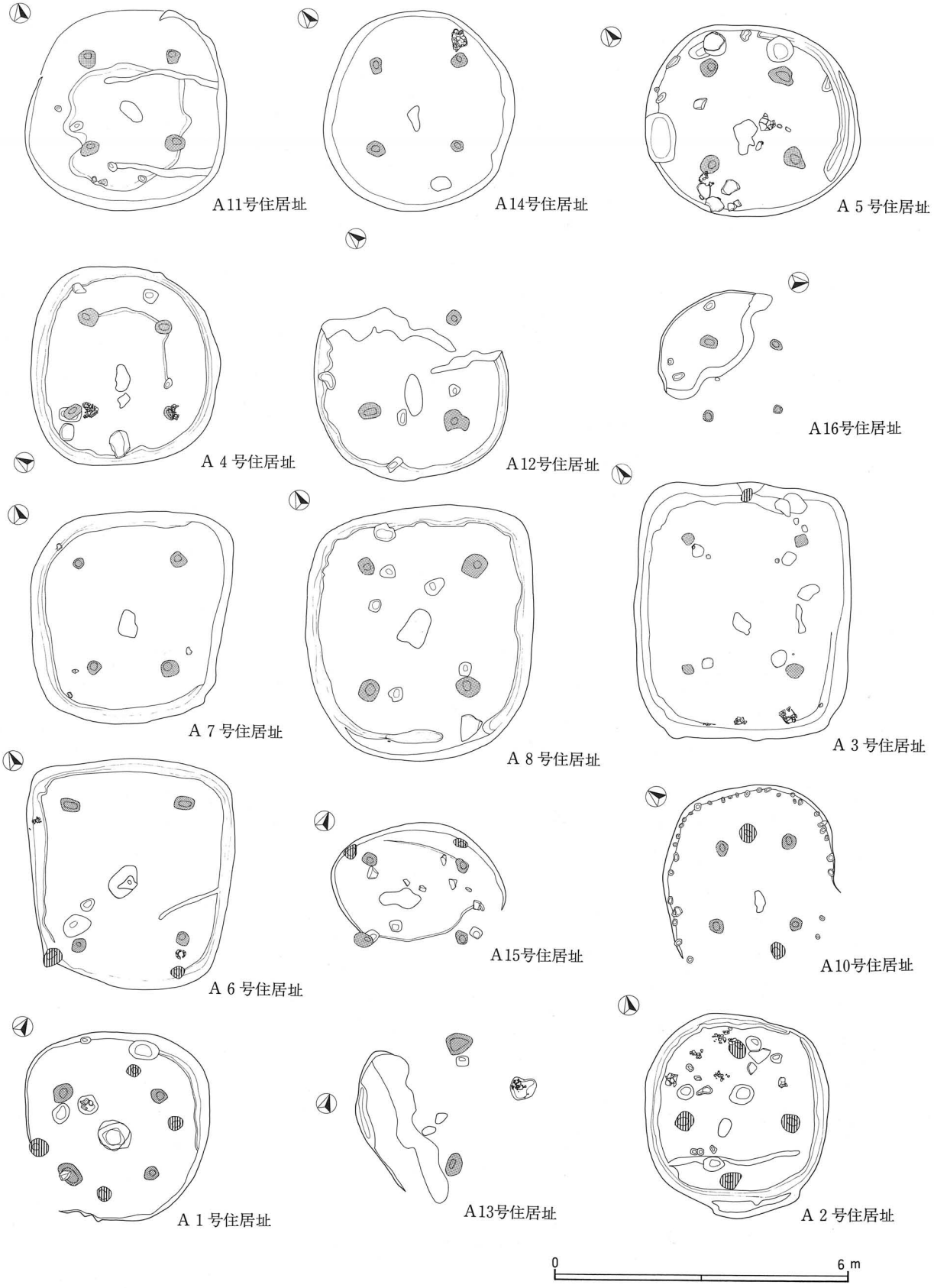
Ａ区の縄文時代前期前半の住居址

Ａ区の住居址の平面形には、円形のもの、隅丸方形のもの、隅丸長方形のもの、楕円形に近いものなどがある。

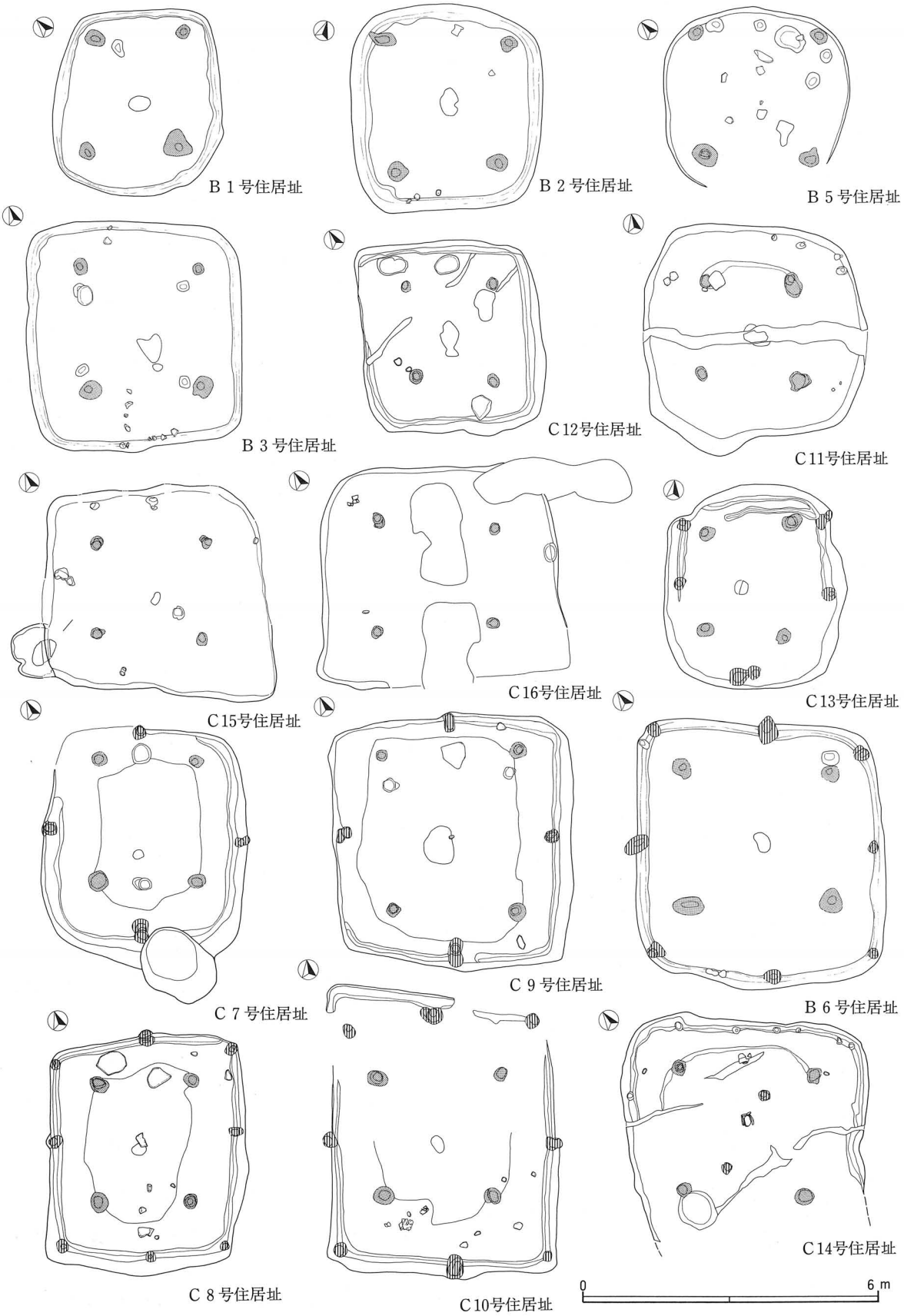
Ａ11・Ａ14・Ａ５・Ａ４・Ａ16号住居址は、円形ないしやや胴の張る隅丸方形を呈する住居址で規則的な支柱穴をもたないと考えられるものである。Ａ12号住居址は３本の主柱穴が確認されただけであるが、断層によって失われていると考えられ、これも４本の主柱穴をもつ住居址になると考えられる。Ａ５号住居址には、北側壁際に２本の支柱穴があるが、上屋構造に関わるものではなく、入口施設になるものと考え、同一に扱っている。周溝の認められないもの、一部に認められるもの、全周するものの三者がある。

隅丸方形または隅丸長方形の住居址は、Ａ３・Ａ６・Ａ７・Ａ８号住居址の４軒である。長軸方向もほぼ同じで、台地の平坦面に菱形をなすようにきれいに配置されている。規模も、円形の住居址に比してやや大きめである。また、掘り込みも深く、しっかりした住居址であった。Ａ３号住居址には、北側の短辺壁際中央で支柱穴が検出されている。また、Ａ６号住居址では、南側の短辺の両隅で支柱穴が検出されている。

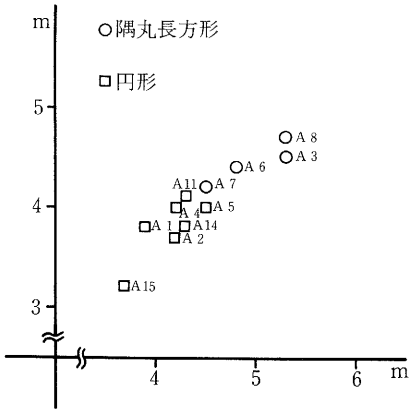
Ａ15号住居址は、南半分が流失しており、全体の支柱穴の構成は不明であるが、壁際に２本の支柱穴が検出されている。



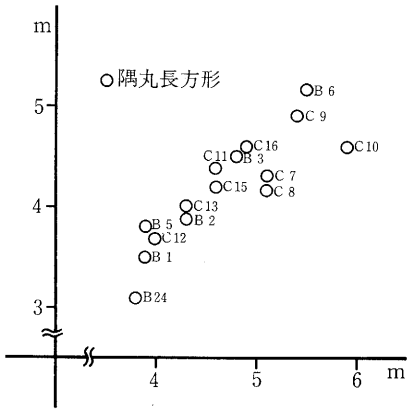
第84図　A区住居址の形態（1/120）



第85図　B・C区住居址の形態（1/120）



第86図　A区住居址の規模



第87図　B・C区住居址の規模

A10号住居址は、南側が流失しているが、長円形を呈し、4本の主柱穴の他に、長軸に沿って2本の支柱穴が検出されている。

A1号住居址は、4本の主柱穴の他に、各壁の中央近くに、支柱穴をもつ。調査時には、各主柱穴の建て替えと理解していたが、上屋構造に関わるものかもしれない。

A13号住居址は、柱穴が2本検出されただけである。断層によって切られているため、全体の構造がつかめないが、主柱穴は4本なかった可能性もある。

A2号住居址は、柱穴の本数は多いものの、円形からどちらかというと胴の張った隅丸方形に近い形態の中で、各壁の中央付近にあるため、主柱穴のない支柱穴による4本柱としたが、これが上屋を支えていたと考えられることから、配置の異なった4本の主柱穴による住居としてもよいものである。

B・C区の縄文時代前期前半の住居址

B・C区の縄文時代前期前半の住居址は、すべて隅丸方形あるいは隅丸長方形の住居址であり、A区の様な円形を呈する住居址は検出されていない。しかし、住居址の支柱穴の配置や、長軸方向などから、さらに細分できる。

主柱穴が4本で、規則的な支柱穴をもたない住居址はB1・B2・B3・B5・C11・C12・C15・C16・B24号住居址の9軒である。B1・B2・B5号住居址の3軒は、主柱穴が壁際近くにあり、他と異なっている。B5・C11・C15・C16号住居址からは周溝は検出されていない。また、C15・C16・B24号住居址は南斜面にかかるところに位置し、平面形態がやや台形に近いこと、長軸方向が東西方向を向いていることなどの違いも認められる。

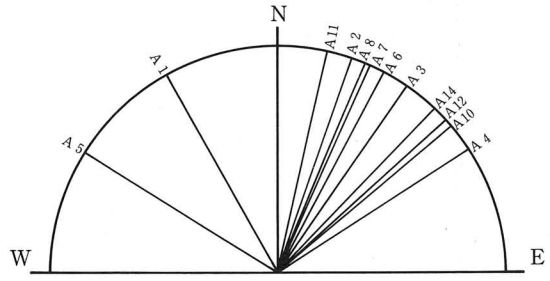
C13号住居址は、支柱穴が北側にある短辺の東西隅と、東西の長辺の中央、南側の短辺の中央の5本が検出されている。

C7・C9号住居址は、主柱穴4本の他に、各壁際の各辺中央で支柱穴が検出されている。

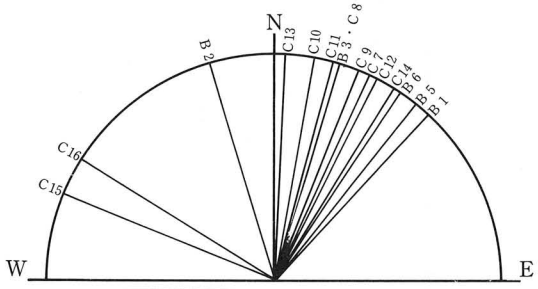
B6・C8・C10号住居址は、主柱穴が4本ある他に、壁際の四隅と各壁の中央に支柱穴が検出されている。

C14号住居址は、本遺跡で唯一の石囲炉をもつ住居址であるが、主柱穴の内側に2本の支柱穴が設けられている。

主柱穴が、他の住居址の主柱穴と同様屋根を支える柱だとすれば、壁際にある柱穴は、何に用いられたものであろうか。壁際中央の柱穴は棟持ち柱としての役割も考えることが出来ようが、それ以外に壁際の四隅にある柱穴の存在と合せて、壁際で屋根を支えたのではないだろうか。そこからは屋根と地表の間にある壁



第88図　A区住居址の長軸方向



第89図　B・C区住居址の長軸方向

を強く感じることが出来る。

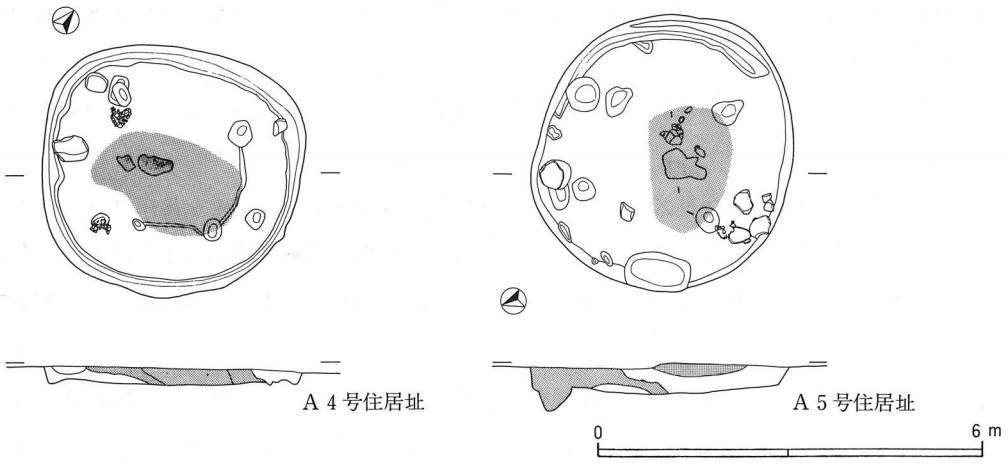
(2)　長軸方向

A区の住居址の長軸方向を見ると、A１・A５号住居址の様に西を向くものもあるが、これ以外はA11号住居址のN－13°－EからA４号住居址のN－57°－Eまで広がっている。この中に、前述の隅丸方形あるいは隅丸長方形の住居址が４軒ある（A３・A６・A７・A８号住居址）が、長軸方向も北から東へ23～35度と似通った数値を示している。この４軒の住居址を除いて長軸方向を見てみると、A２・A11号住居址の様にほぼ北を指す住居址と、A４・A10・A12・A14号住居址の様に、ほぼ45度東を指すものに分けることが出来る。

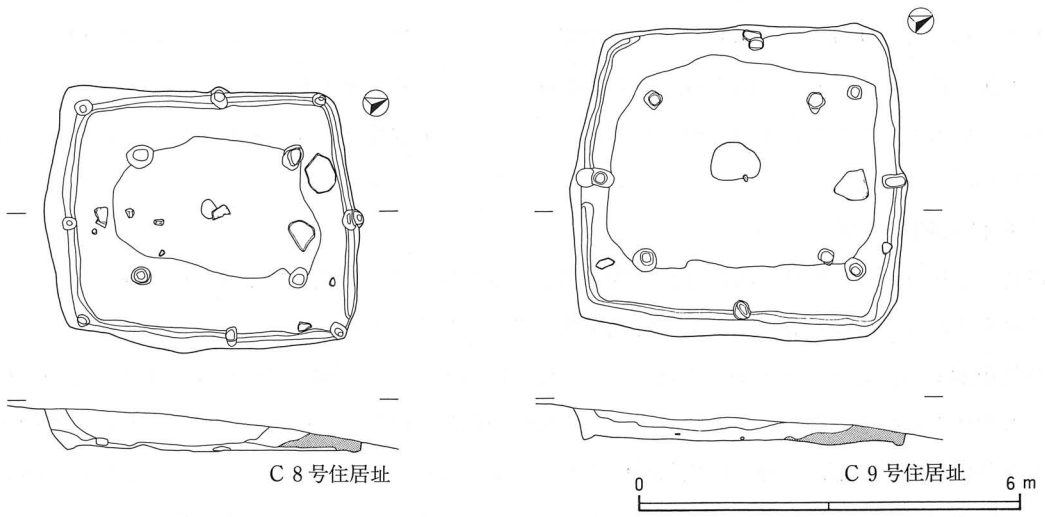
B・C区の住居址の長軸方向を見ると、北側斜面にかかる５軒の住居址を含めて、C13号住居址のN－３°－EからB１号住居址のN－43°－Eにまで方向が広がり、これといった特徴を見出せない。ただ、北側に広がる２つの谷に挟まれたところに張り出したB２号住居址が、ほぼ北を向くとはいえ、やや西向きである。また、C15・C16号住居址は、南斜面にかかる住居址であるが、58度から68度西を指しており、長辺が南北にある形となっている。C12・C14号住居址は、出土遺物に他よりもやや新しいと考えられる縄文施文土器を伴出した住居址であるが、27度から32度東を向いており、他の多くの住居址と異なった様子は認められない。

(3)　覆土の状態

まず、A４号住居址とA５号住居址の覆土の堆積状態に注目したい。どちらも中間層にロームブロックの層が堆積している。このロームブロック層の上下に一括土器の出土が見られたが、このロームブロックは人為的な投込みと考えられる。おそらく、この住居址の廃絶後、隣接地に住居を構築した人々が、掘り上げたロームをこの住居址に投込んだのではないかと考えられる。遺物の分析が行われていない中での推測に過ぎ



第90図　A４・５号住居址覆土堆積状態（1/120）



第91図　Ｃ８・９号住居址覆土堆積状態（1/120）

ず、それより新しい住居址がどれと特定できないが、少なくともこれより新しい住居址が存在すると考えてよいであろう。

また、Ｃ区の北斜面にある住居址（Ｃ８・Ｃ９号住居址）の覆土の堆積状態も、他の住居址と異なった堆積状態を示している。住居址はどちらも自然堆積と考えられるが、壁際の土層の堆積状態について他の住居址と際だった違いが見られた。南壁際の、ロームへの掘り込みが深く、壁が高い箇所については、壁の崩れによると考えられるロームブロックやローム粒子の混入が少なく、逆にロームへの掘り込みが浅い北壁際にロームブロックやローム粒子の混入が著しく多い状況を観察できた。通常、同じ条件の中で壁の崩落が起きた時には、ロームの壁の高い方に多くのロームブロックやローム粒子の混入が多いと考えられるが、逆となっている。このことから北側の、斜面の下にあたる箇所に多くのロームが存在していたと考えられる。ローム面までの剝ぎ取りを行なってしまっているので想像するしかないが、斜面での構築の場合、掘り上げたロームを斜面の低い側に壁面の高さを同じ位にまで積み上げて土壁としていたのではないかと思われる。その土壁が崩れたため、ロームの壁面が最初から充分あった南壁側はそれほどローム粒子の混じった土層の堆積が見られず、逆にローム壁の低かった北壁側にロームブロックやローム粒子の混入の多く見られる土層が堆積しているのではなかろうか。なお、台地中央の比較的平坦な所に構築された住居址では、それぞれの壁面に均等にローム粒子の入った土層が見られる。

これら北側斜面の住居址は、平面形態の項でも述べているように、壁際に支柱穴が存在していた。こうした支柱穴が、盛り上げたロームを支えただけのものであるか、更にその上にまで壁が延びていたのかは明らかでないが、ここでは積極的に壁の存在を考えておきたい。

第２節　方形柱穴列

(1)　方形柱穴列の名称

方形柱穴列とは柱穴が数個ずつ方形に並ぶ為付けられた名称で、かつて阿久遺跡では方形柱列と呼称されていた。方形配列土坑と呼称されることもあるが、その中に柱痕を有するものもあるので、柱穴と考えて間違いないものと思われる。また、長方形となるものについては、掘立柱建物址などとも呼称されている。今回、茅野市の各遺跡で検出されているものと同様に方形柱穴列の名称を用いたが、特に固執するつもりはな

い。将来、方形柱穴列の具体的な構造や用途が明らかになったとき、改めて名称について考えていきたい。

しかし、掘立柱建物址という名称には、柱穴間をその長さは別として１間と数えて何間×何間などという言い方を思い浮べる。しかし、阿久尻遺跡の方形柱穴列には、柱穴間が極めて狭いこともあって、所謂、何間という言い方がそぐわないように感じられるのである。今回検出された方形柱穴列の連続した柱穴からは、柱だけしか思い浮かばない。

(2)　方形柱穴列の時期

本遺跡で検出された方形柱穴列には、遺物が出土する例はなく、時期を特定するのは難しい。しかし、本遺跡で検出された住居址を見ると、縄文時代早期と考えられる住居址と平安時代に属する住居址が各１軒、縄文時代中期と考えられる住居址が７軒で、その他の住居址はすべて縄文時代前期前半の中越の時期である。また、方形柱穴列のすべてがその環状に広がる住居址の内側に位置している。このことから、本遺跡で検出された方形柱穴列の時期は、縄文時代前期前半としてよいものと考えられる。また、方形柱穴列同志で重複している例はないものの、かなり近接しているものも見られること、Ｃ11号方形柱穴列とＣ16号住居址が重複することから、ある程度の時間幅の中で、建て替えられていたものと考えられる。

(3)　調査の方法

阿久尻遺跡で検出された方形柱穴列について、次の様な調査方法を取った。

①平面で各ピットに柱痕が有るか無いかを確認する。

②柱痕が確認されたら、その平面形を図化した後、ピットを柱痕の中央が通るように半截し断面を図化する。また、この段階で柱痕が確認できなかった時には、ピットの覆土を縦に５～10㎝の間隔でスライスし、柱痕が確認できた段階で断面図を作成する。

特に平面で柱痕を確認できないものについて、覆土のスライスという方法で柱痕の確認を行ったが、平成２年度の調査では、断面で柱痕が確認できた時点で断面図を作成し、残りを全掘するという方法をとった。しかし、柱痕が二つ存在するピットがあることで分かるように、その後もスライスを継続していけば、違う柱痕が検出された可能性がある。そのため、平成３年度の調査では柱痕が確認された後もスライスを継続して行なっている。

スライスの仕方については、平成２年度は辺に直交してスライスを行い、平成３年度は辺に平行してスライスを行っている。検出された柱痕の在り方を見ると、柱穴の内側で検出される例や、辺に直交して２本の柱痕のある例が多い。このことから、辺に平行してスライスを行うより、直交してスライスを行う方が、良かったのではないかと思われる。

(4)　柱穴数と規模

ｉ　柱穴数

長辺及び短辺の柱穴数によって、６に分類が可能である。

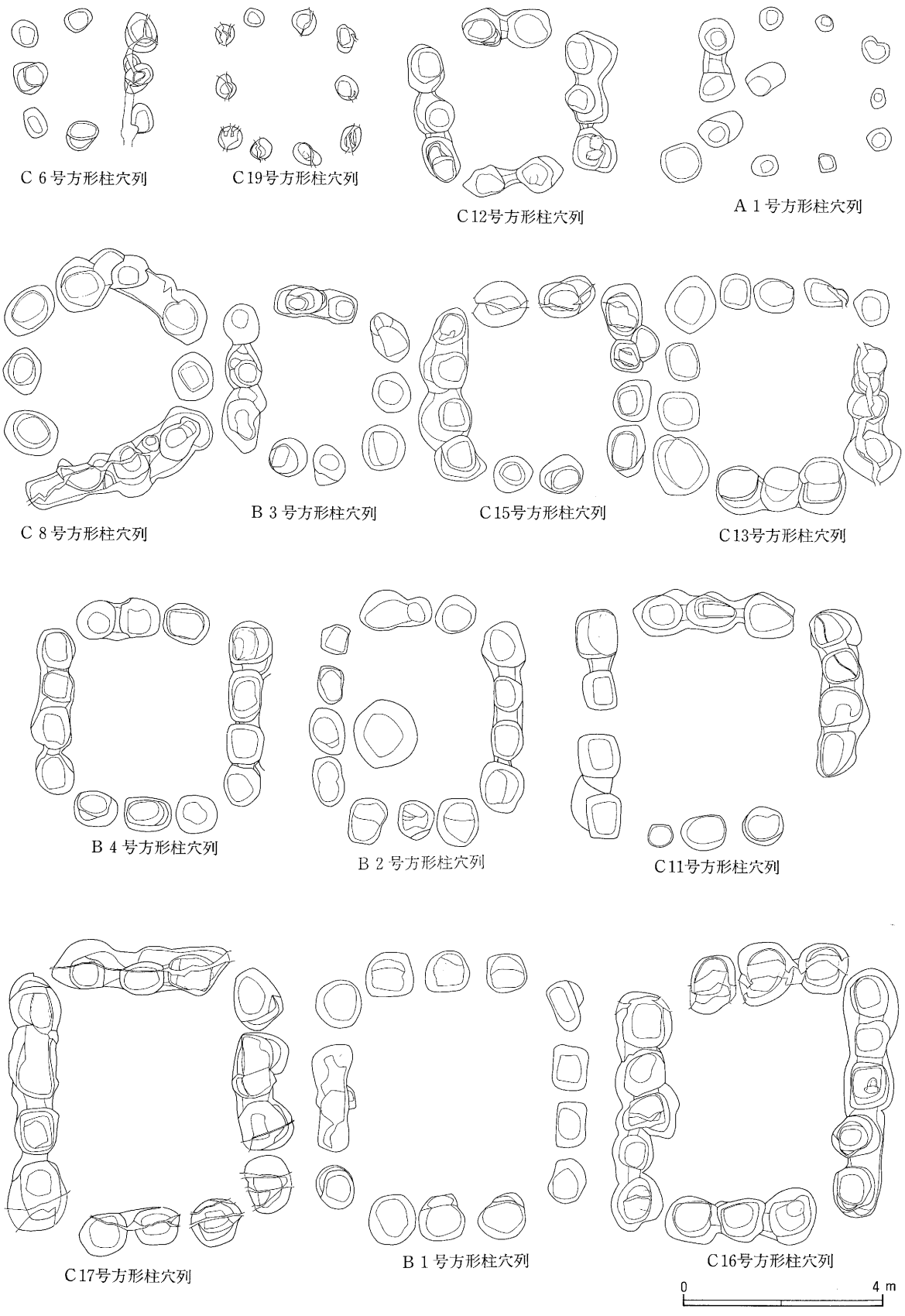
３－１型　柱穴数が長辺３本、短辺１本のもの。Ｃ６号方形柱穴列がこれにあたる。

３－２型　柱穴数が長辺３本、短辺２本のもの。Ａ１・Ｂ３・Ｃ８・Ｃ12・Ｃ19号方形柱穴列の５棟がこれにあたる。

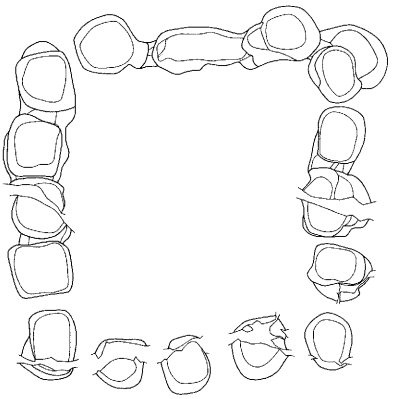
４－２型　柱穴数が長辺４本、短辺２本のもの。Ｃ15号方形柱穴列がこれにあたる。

４－３型　柱穴数が長辺４本、短辺３本のもの。Ｂ１・Ｂ２・Ｂ４・Ｃ11・Ｃ13・Ｃ17号方形柱穴列の６棟がこれにあたる。

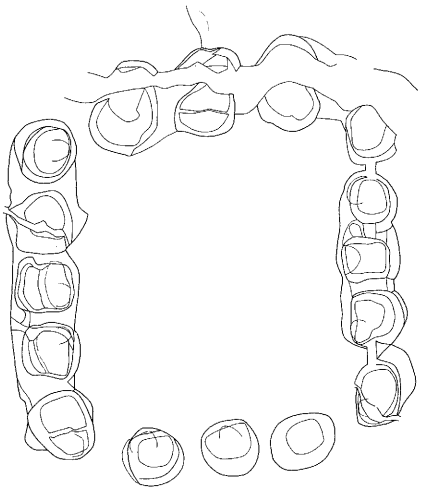
５－３型　柱穴数が長辺５本、短辺３本のもの。Ｃ５・Ｃ７・Ｃ10・Ｃ14・Ｃ16・Ｃ18号方形柱穴列の６棟がこれにあたる。



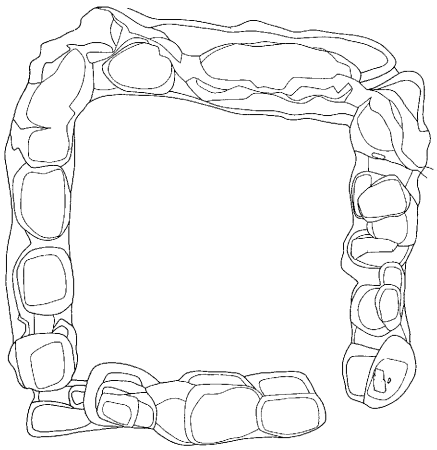
第92図　方形柱穴列の形態(1)（1/120）



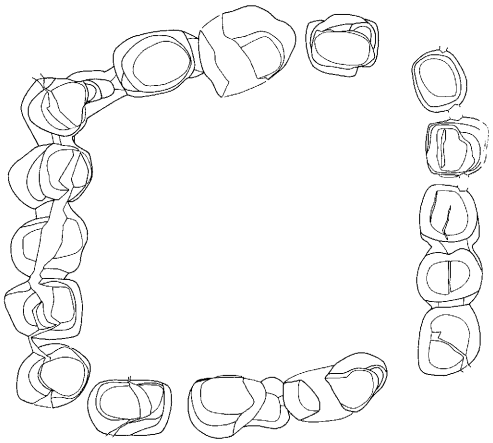
C18号方形柱穴列



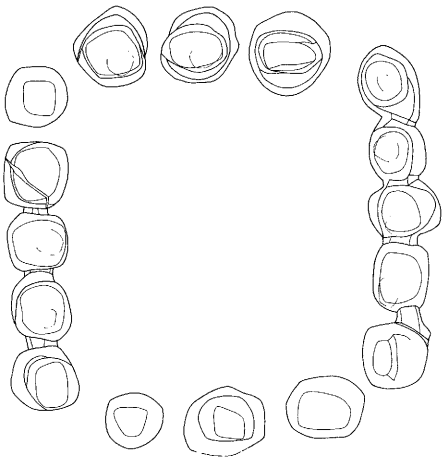
C10号方形柱穴列



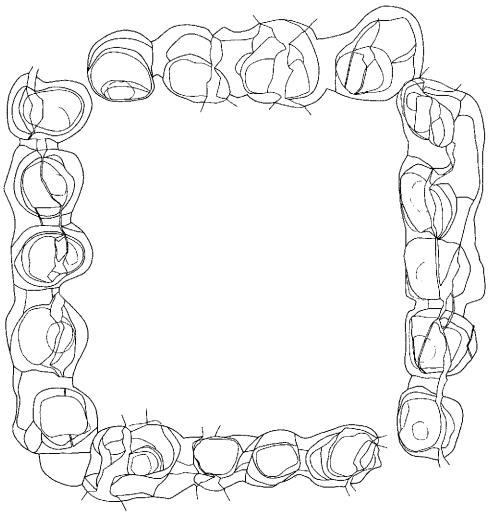
C 5 号方形柱穴列



C14号方形柱穴列



C 7 号方形柱穴列



C 9 号方形柱穴列

0 4 m

第93図　方形柱穴列の形態(2)（1/120）

５－４型　柱穴数が長辺５本、短辺４本のもの。Ｃ９号方形柱穴列がこれにあたる。

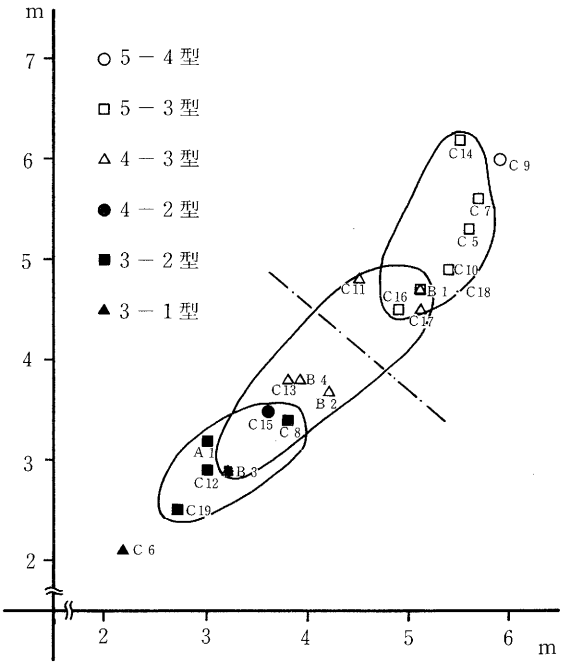
３－１型、４－２型、５－４型はそれぞれ１棟ずつ検出されただけであり、３－２型、４－３型、５－３型が基本になるのであろうか。

2　規　模

規模は、柱穴数の最も少ない３－１型のＣ６号方形柱穴列が１辺２ｍ余と最も小さく、柱穴数の最も多い５－４型のＣ９号方形柱穴列が１辺６ｍ程と、最も大きい結果となっている。

複数の類例をもつ３－２型と５－３型が、ある程度似通った規模を示すのに対し、４－３型は規模にバラつきが見られる。柱穴数に関係なく、１辺が４ｍ以下のものと、4.5m以上のものに大きく分れる可能性もある。

規模の大きいものは、各柱穴の掘り方も大きく、中には柱痕が２個検出されたものもあった。また、柱穴規模の小さいものは、住居址の柱穴と同じくらいの規模のものもあった。



第94図　方形柱穴列の規模

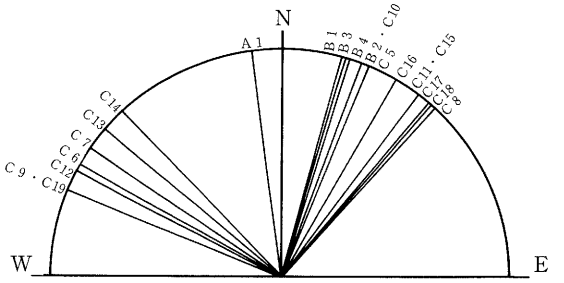
(5)　構造上の特徴

方形柱穴列の隣接する柱穴と柱穴との間隔が非常に狭い。中には柱穴が連続しており、溝状となっているものがあるが、建て替えによるものの他に、意識してつなげてあるのではないかと思われるものもあった。

また、四隅に柱穴がなく、面取りされたような感じとなっている。長辺と短辺の柱穴の本数が異なるにもかかわらず、平面形態はほぼ方形となっている。

(6)　長軸方向

方形柱穴列は、全体図で見るとその方向は比較的一定しており、整然と並んでいるかの印象を受ける。しかし、これの長軸方向を見ると、北から44～68度西へ向くもの（C14・C13・C７・C６・C12・C９・C19号方形柱穴列）と、15～42度東へ向くもの（Ｂ１・Ｂ３・Ｂ４・Ｂ２・C10・Ｃ５・C16・C11・C15・C17・C18・Ｃ８号方形柱穴列）の二者に分れるようである。Ａ１号方形柱穴列はＮ－８°－Ｗを差し、特異な存在になっている。二者に分れたものの片方を90度ずらし、短軸方向で見ると、両者はほとんど同じ方向となるのであるが、柱穴数によって、上部構造が異なるとすれば、素直に二者（Ａ１号方形柱穴列を含めれば三者）に分れている現象を捉らえるべきであろう。



第95図　方形柱穴列の長軸方向

前述の柱穴数による分類毎に見ると、３－１型はＣ６号方形柱穴列の１例であるが、西を向いている。また、４－２型のC15号方形柱穴列は東を向き、５－４型のＣ９号方形柱穴列は西を向いている。複数の類例があった、３－２型は西を向くものがC12・C19号方形柱穴列の２例、北を向くものがＡ１号方形柱穴列の１例、東を向くものがＢ３・Ｃ８号方形柱穴列の２例あり、４－３型は西を向くものがC13号方形柱穴列の

1例、東を向くものがＢ１・Ｂ２・Ｂ４・Ｃ11・Ｃ17号方形柱穴列の５例あった。５－３型は西を向くものがＣ７・Ｃ14号方形柱穴列の２例、東を向くものがＣ５・Ｃ10・Ｃ16・Ｃ18号方形柱穴列の４例あった。

以上見たように、柱穴数と長軸方向との関係も様々に分れており、一定の傾向を見て取るまでには至らない。

(7) 各柱穴の掘り方

各柱穴の形態には、円形のもの、隅丸方形のもの、隅丸長方形のもの、隅丸の三角形のものを始め、様々な形態が認められる。壁の状態を観察すると、ほとんどの柱穴が、方形柱穴列の内側となる壁が直立気味で、他の壁は緩やかに傾斜している。柱痕の検出できた場所も内側が多いことから、各柱穴の壁面の状態が、柱を立てた場所と密接な関係にあることが窺える。

(8) 柱　痕

調査時において、柱穴の覆土を観察すると、周辺にロームブロックやローム粒子が非常に多く、中央にロームの混入の極めて少ない黒色から黒褐色の土層が検出された。また、暗褐色土でローム粒子やロームブロックを含んでいるものの、他と比べればロームブロックの入り方が少ない程度のものも見られた。これらを柱の立ち腐れ、あるいは抜き取り痕ではないかと考え、本文ではどちらも柱痕と表現している。これについては、パリノ・サーヴェイ株式会社に分析を依頼し、第Ⅵ章で報告が為されている。詳細な分析については本文に譲るが、我々が調査中に柱痕と考えた土層と、埋土と考えた土層との間には、視覚以上の差が見出せなかったようである。今後、より多くの調査例の分析を繰り返し行うことはもちろんのこと、今回行った各種の分析以外の方法も考えていく必要があるものと考える。

ここでは、調査時に柱痕と考えたものについて、その在り方を考えてみたい。

柱痕は、方形柱穴列の内側に検出される例が多い。また、１つの柱穴に２つの柱痕が確認されたものも有る。この場合は、辺に対して並列するものは少なく、直交するものが多かった。

まず、ピットの中に二つの柱痕が確認されたものが有ることについて注目したい。特に平面で柱痕を確認できないものについて、覆土のスライスという方法で柱痕の確認を行ったが、断面で柱痕が確認できた時点で断面図を作成し、残りを全掘するという方法をとったが、柱痕が二つ存在する柱穴があることで分かるように、その後もスライスを継続していけば、違う柱痕が検出された可能性がある。また、柱痕が２個確認されたことにより残りを全掘した場合も有り、３個以上の柱痕の有る可能性を見逃しているとも言える。

見学会の時に同じ柱穴内にある柱痕は同時存在である可能性だけでなく、建て替えの可能性もあると指摘されたが、柱がある状態であっても、引き抜かれてしまった状態であっても、新たに柱穴を掘る行為は繰り返されると考えられるので、柱痕が２つ検出されることはないであろう。余程大きな柱穴でない限り、一つの柱穴に複数の柱痕が検出された場合には、同時存在と考えてよいものと考える。

(9) 柱穴以外の施設

方形柱穴列の柱穴以外の付属施設についてであるが、平成３年度の調査においては、遺構確認面を前年に比べて30㎝以上高いところにおいている。層位的には平成２年度がローム面であったのに対し、平成３年度はローム漸移層よりも高いところにおき、人力によって掘り下げながらプランの検出を行なっている。本遺跡の層序は耕作土層の下はほぼローム漸移層となっており、遺物包含層がほとんどない状態であるため、すでに削平されている可能性はあるが、柱穴の内側や周辺には炉などの付属施設は検出できていない。また、遺物の出土状態も特に方形柱穴列の内側に出土が多いなどの状況は認められなかった。

⑽　方形柱穴列の性格と上屋構造

各方形柱穴列からは、柱穴以外の付属施設が検出できていない。柱穴間も狭く、壁の存在を意識することが難しいのであるが、柱だけが林立する姿を想像してみても異様なものを感じてしまう。やはり、方形柱穴列には何等かの上屋構造があったと考えるべきであろう。

また、阿久尻遺跡からは、31軒の同時期と考えられる竪穴住居址が検出されており、方形柱穴列との性格の違いを考えねばならない。方形柱穴列からは、炉址等の検出はなく、遺物の出土状態も極めて少なかったことは前述の通りである。方形柱穴列が高床式の建物であったとしても、住居としての生活空間があったとすれば、何等かの遺物が出土するものと考えられる。それが祭祀に関わるような建物であったとしても、それに関わる何等かの遺物は出土するのではないだろうか。方形柱穴列には土器や石器、その他の遺物の存在しない建物を考えるべきであると考える。望楼等の考えもあるようであるが、B・C区に至っては竪穴住居址を上回る数の方形柱穴列が検出されていること、台地平坦面に広く分布することなどから、否定せざるを得ない。住居址に取り囲まれた広場にあり、地面に他の施設を持たず、土器や石器などの生活用具を有しない建物には、主に食料を貯蔵する高床式の倉庫などの施設が考えられよう。狭い間隔で立てられた柱穴は、屋根を支えると同時に、床をも支えていたと考えられる。

第３節　阿久尻遺跡における縄文時代前期前半の集落

平成３年度の調査で、A区の西側で、平成２年度にトレンチ調査によって、遺構はないであろうと推測されたA区とB区の間についても全面表土を剥ぎ、遺構確認を行なったが、遺構の検出はなく、阿久尻遺跡はほぼ同じ時期と考えられるA区とB・C区の集落に大きく分けられることが確認できた。

A区は住居址の数がB・C区とほぼ同じであるにもかかわらず、方形柱穴列は小形のものが１基だけである。これに対してB・C区は住居址を上回る数の方形柱穴列が検出されている。また、A区は平坦面のごく狭い範囲に方形柱穴列を中心とした住居群が検出されているのに対し、B・C区では広い平坦面の内側を方形柱穴列群が占め、その外側の北斜面や南斜面にかかるところ、あるいは台地先端から住居址群が検出されている。

各区で検出された遺構が、同時に存在したのではないであろうことは今まで本文で述べてきたとおりであるが、A区は１基の方形柱穴列を中心としてその周りに住居址が回っていること、B区からC区にかけては、台地中央の平坦面に方形柱穴列が19基存在し、その周辺である台地北斜面、南斜面及び台地先端付近に住居址が分布しているという、まったく異なった集落構造を窺い知ることが出来た。

B・C区には円形の住居址が検出されておらず、すべてが隅丸方形あるいは隅丸長方形の住居址であることから、そこに存在する方形柱穴列もこれらの住居址のどれかとグループをなしていくことは明らかであるが、A区の方形柱穴列は、隅丸方形を呈するA７号住居址とA１号方形柱穴列が近接しすぎていることなどから、隅丸方形あるいは隅丸長方形の住居址ではなく、むしろ円形の住居址のいずれかとグループをなすのではないかと考えられる。

また、隣接する阿久遺跡にも同時期の集落があることから、これも含めて、近接する3つの集落が、時期をほぼ同じくして存在していたことになり、興味深い。

第４節　阿久尻遺跡の縄文時代中期の遺構について

阿久尻遺跡で検出された縄文時代中期の遺構は、南斜面に限られている。平坦な部分で検出された遺構の

中で、時期の明らかでない土坑からも中期の遺物の出土したものはなかった。すべての住居址は南側を流出しており、全体の規模を明らかに出来るものはなかったが、規模はかなり小さそうである。また、すべての住居址が南側を流失していることから、縄文時代中期においては現在よりも斜面の傾斜はかなり緩く、阿久川の浸食によって現在の地形が形成されていったものと考えられる。原地形においては阿久川は今より高いところを流れており、集落を営むに適した環境であったのではなかろうか。

第5節　阿久尻遺跡の断層について

阿久尻遺跡からは、台地に沿って東西に走る何本もの溝状の落込みが検出された。調査の過程でこれらが断層であることが判明したが、かなりの段差をもって上下にずれるものや、ほんの数cmの地割れまであった。これらの断層については、第Ⅶ章で松島信幸先生、寺平　宏先生により詳細な報告が為されている。なお、降下火山灰の分析は東京都立大学理学部地理学教室の町田　洋先生にお願いした。

断層に落ち込んだ土層中の降下火山灰の調査は、約6,300年前とされる鬼界カルデラの降下火山灰であるアカホヤの検出を目的として行った。阿久尻遺跡で検出された断層が、アカホヤ降下時期以前に埋没しているとすれば、断層内に落ち込んだ土層中からはアカホヤは検出されないであろう。また、アカホヤ降下時期以後に断層が生じた場合には落ち込んだ土層中からもアカホヤが検出されるはずである。分析によると、断層に落ち込んだ土層から採取した試料の、どれからもアカホヤは検出されなかった。

このことから、地震による断層や地割れは、少なくともアカホヤの降下する以前に埋没を終わっていたと考えることが出来る。今回検出された阿久尻遺跡の縄文時代前期前半の中越期は、6,500年ほど前と考えられることから、断層は中越期以後、鬼界カルデラのアカホヤが噴出した6,300年前までの間に生じたと考えられる。想像を膨らませるなら、阿久尻遺跡の縄文時代前期前半の中越期の集落は、この時の地震とそれによる断層によって壊滅的な打撃を受け、集落を放棄した可能性も考えられる。

少なくとも、阿久尻遺跡に再び人々の痕跡が現れるのは、縄文時代中期になってからのことである。また、ほぼ同時期の集落があった阿久遺跡でも、やはり中越期の後、一時期集落が途絶え、再び大きな発展を見せるのは黒浜期である。

第6節　下原山茂佐久保遺跡について

長野県教育委員会による詳細分布調査、茅野市教育委員会による今回の発掘調査と行われる中で、縄文時代早期・中期・後期の遺物が出土している。その量はごく僅かで、C・D地点の遺構・遺物の検出状態から遺跡の主体は農道を挟んだ原村側の平坦面にあるのではないかと推測した。

平成4年度、この原村地籍が原村教育委員会によって調査されたが、遺物が僅かに出土しただけで、遺構等は検出されなかったようである。尾根の北側を西流する大早川はかなりの比高差をもっていること、南の阿久川へは谷と阿久尻遺跡の立地する尾根を越えねばならないことなどが、この下原山茂佐久保遺跡に人々の痕跡が少ない理由の一つに上げられるのではないかと考えられる。

あとがき

本遺跡は、国史跡阿久遺跡に隣接することから、調査開始当初から注目され、その関係に関心が寄せられていた。また、原村教育委員会で行った阿久遺跡の範囲確認調査も、この地が茅野市に含まれることから調査が及んでおらず、更に範囲の拡大する可能性も残されていた。

調査の結果、阿久遺跡と本遺跡との間には、約300mにわたって遺構や遺物の検出されない箇所のあることが確認されたものの、本遺跡からも阿久遺跡で検出された縄文時代前期前半の住居址や方形柱穴列が多数検出されるに至り、本遺跡と阿久遺跡とが密接な関係にあったことが実証された。また、阿久遺跡の調査範囲の多くの箇所が、縄文時代前期後半の遺構検出面で調査を終わっているため、阿久遺跡の縄文時代前期前半を理解する上にも、本遺跡の重要性は高く評価された。

その様な中で、遺跡の全面保存とまでは至らなかったが、事業関係者の理解のもと、阿久遺跡に近いA区4,000㎡を保存して頂くこととなった。A区の保存にあたっては、事業者である県商工部振興課・県土地開発公社を始め、東洋バルヴ株式会社に御理解頂き、設計の変更を行って頂いた。特に記して感謝したい。なお、保存のための盛土工事は、平成3年9月に行われた。

その間、長野県教育委員会文化課には、事業者と調査を行う市教育委員会の間に入り、保護協議を繰り返し行って頂いた。また、長野県考古学会は、本遺跡の重要性を早くから取り上げ、部分的な保存になってしまったものの、A区の保存に大いに貢献頂いている。

茂佐久保遺跡の調査では、長野県埋蔵文化財センターからは、多忙な中2名の調査研究員を1ヶ月間にわたり派遣頂いている。また、炭化材の保存についても調査研究員の指導を受けている。

茅野市教育委員会では、平成2年6月30日に研究会「阿久尻集落の方形柱穴列をめぐって」を開催している。今回、残念ながらその記録は、本報告書には掲載できなかったが、研究会の開催にあたり、宮坂光昭氏、石井　寛氏、秋元信夫氏、南　久和氏、小杉　康氏の各氏には、御多忙中にもかかわらず、快く講師の依頼を引き受けて頂いた。また、コーディネーターを務めていただいた戸沢充則明治大学教授には、調査における指導ばかりでなく、研究会の講師の選定から始り、多大な御協力を頂いた。また、長野県考古学会からは、研究会の後援を頂いた。合せて感謝いたします。

この他、調査期間中度々遺跡を訪れ、指導・助言頂いた、地元の多くの研究者のみなさまに感謝いたします。

遺物の詳細な検討もないまま、遺構についてのみ記述してきたが、遺物を検討することにより、更にこの阿久尻遺跡の性格が明らかになって行くものと思われる。今回の報告書作成にあたって、当初執筆を予定していた各調査員が、その後に担当した遺跡の調査や報告書の作成等、多忙を極め、執筆が困難となってしまった。しかし、阿久尻遺跡の重要性は、それぞれの調査員も十分認識しているところであり、今後少しずつでも公表していきたいと考えている。

今後とも、御指導・御助言をお願いしたい。

参考文献

長野県教育委員会　1991「県営金沢工業団地造成計画にかかる下原山茂佐久保遺跡の詳細分布調査」『リゾート等開発地域内の埋蔵文化財分布調査報告書』

原村教育委員会　1979　『阿久遺跡（第5次調査）－重要遺跡範囲確認緊急調査報告書－』

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会　1982　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村その5－昭和51・52・53年度』

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会　1975　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市その3－昭和49年度』

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会　1976　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市その4－昭和50年度』

長野県考古学会諏訪地区会　1991　「学習会　中越文化の諸問題」『長野県考古学会誌61・62』長野県考古学会

長野県考古学会諏訪地区会　1992「中越文化の集落と住居と建物－阿久尻遺跡をめぐって－」『長野県考古学会誌67』長野県考古学会

茅野市教育委員会　1991　『阿久尻集落の方形柱穴列をめぐって』

茅野市教育委員会　1986　『高風呂遺跡』

宮田村教育委員会　1990　『中越遺跡発掘調査報告書』

長崎元広　1979　「中部地方における縄文前期の竪穴住居」『信濃』第31巻　第2号　信濃史学会

研究会等の資料の他にも、遺跡の概要を幾つかに発表しているが、調査途中でのものもあり、一部所見を改めた箇所もあるので、本報告をもってこれらに変えたい。

これらの資料を用いたり、自身で見学された結果をもとに、阿久尻遺跡について述べた文献も散見されるが、ここでは省略する。

第７表　住居址一覧表

地区	番号	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	壁高(cm)	長軸方向	入口	炉址	炉位置	周　溝	遺　物	特殊遺物	平石	時　期	備　考
A	1	円形	388	383	32	N-29°-W		なし	中央	北東隅にだけ見られる		石匙３		前期前半中越	
A	2	円形	423	368	34	N-19°-E	北	地床炉	中央よりやや南側に寄っている	北側の一部が切れている他は全周		一括土器は北側に集中	北側に１	前期前半中越	南側に東西方向にクラックが走る
A	3	隅丸長方形	525	445	42	N-35°-E		地床炉	中央	全周している		南壁際に一括土器が３点	北側に２	前期前半中越	焼失住居。柱穴に炭化材。保存処置
A	4	円形	415	400	25	N-57°-E		地床炉	中央よりやや西に寄っている	全周している	一括土器が２個体	石皿	北東隅、北西隅及び西壁際中央に各１	前期前半中越	床面の中央がやや荒れている
A	5	やや東西に長い円形	445	403	32	N-58°-W	北東	地床炉	中央	東側1/3に見られる	中層に大礫。北西隅の柱穴ｅに礫が数個入る	中層と床面直上に一括土器。石皿	大礫が数点。床面密着には石皿	前期前半中越	北西の壁際に土坑状の掘り込み。新旧関係は不明
A	6	隅丸長方形	480	438	32	N-27°-E	南	地床炉	中央	南壁を除く各壁にある		南東隅柱穴ｃとｅの間に伏甕。西壁北寄りに黒曜石集中	なし	前期前半中越	クラックが東西に走る
A	7	隅丸方形	447	415	47	N-24°-E		地床炉	中央よりやや南に寄っている	北東隅と東壁を除く各壁にある	確認面から２０cm程で黒曜石コアが数点			前期前半中越	炉の南側に深さ１２cmの小ピット
A	8	隅丸長方形	528	470	50	N-23°-E		地床炉	中央	南壁東側が切れている他は、ほぼ全周している		抉入部のある両尖七首が２本	南東隅に１	前期前半中越	
A	9	方形？	528		60	N-08°-E		石組カマド	北壁中央よりやや東に寄っている	東壁には見られない。南壁は不明				平安	
A	10	長円形		357	23	N-50°-E		地床炉	中央よりやや南西に寄っている	見られないが、壁際に小ピットが並ぶ			なし	前期前半中越	南西側が斜面で流失
A	11	円形	430	410	27	N-13°-E		地床炉	中央	なし	遺物は少ない		なし	前期前半中越	床面は中央が一段低くなっている。東西にクラックが２本走る
A	12	円形		405	28	N-48°-E		地床炉	中央よりかなり南西にあり、ｂｃ間の軸線近くにまで寄っている	斜面のため流失している北西側を除き見られることから、全周していたものと考えられる			なし	前期前半中越	南東から北西に向かってクラックが走る

地区	番号	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	壁高(cm)	長軸方向	入口	炉址	炉位置	周　溝	遺　物	特殊遺物	平石	時　期	備　考
A	13	円形？						地床炉	南西壁から1,2mの箇所に2に別れてある。ピットの位置からすると、かなり南西側に寄っていると考えられる	南西隅に一部見られるが、クラックの可能性もある	遺物は多い	黒曜石の原石・剥片等の集積	なし	前期前半中越	斜面のためほとんどが流失している他、クラックが走っており、形状は明らかでない
A	14	円形	426	382	24	N-44°-E		地床炉	中央	なし		北東隅に一括土器。口縁から底部		前期前半中越	焼失住居。全体に焼土・炭化物多い
A	15	不整形	365	323	24			地床炉	４本の主柱穴の中央よりやや西側に寄っている	なし	遺物の出土は有るものの、一括での出土はない		30cmほどの礫が、柱穴ａに隣接	前期前半中越	斜面のため壁が流失。内側が一段低くなっている
A	16	円形？			11			地床炉	４本の主柱穴の中央よりかなり南側に寄っている。焼土範囲も径１０cmほどと小さいが、流失している可能性が強い	なし			なし	前期前半中越	斜面でほとんどが流失。南東から北西に向かってクラックが走る
B	1	隅丸方形	388	350	11	N-43°-E		地床炉	中央	全周している	凹石		なし	前期前半中越	南壁がやや張る。柱穴はどれも中央側の壁が内傾。壁際は周溝とともに壁柱穴が連続
B	2	隅丸方形	428	394	35	N-17°-W		地床炉	中央	全周している	北壁際中央に一括土器、東壁際の一括土器は床面から５cmほど浮く。南壁際西寄り床面に凹石	南西ピット内から花崗岩	なし	前期前半中越	東南のピットは内側にロームを詰めた痕跡が有る。柱の径はピット径の半分ほど。床面は凸凹が激しく、小ピット多数
B	3	隅丸方形	478	447	24	N-17°-E		地床炉	中央のやや南寄りに位置する	全周している		黒曜石石匙。南壁際、床から５cm上に礫が10点	柱穴ｅの上に径40cmほどの礫	前期前半中越	
B	4	円形？西壁側を欠いている	457		16			なし		なし	押型文土器		なし	早期	
B	5	隅丸方形	390	380	10	N-39°-E		地床炉	中央のやや南寄りにある	なし			なし	前期前半中越	

地区	番号	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	壁高(cm)	長軸方向	入口	炉址	炉位置	周　溝	遺　物	特殊遺物	平石	時　期	備　考
B	6	隅丸方形	547	515	40	N-34°-E	北	地床炉	中央	全周している		未焼成粘土塊	なし	前期前半中越	
C	7	南北に長い隅丸長方形	507	430	57	N-25°-E	北	地床炉	中央やや南寄り	北西隅が流失しているが、全周していたものと考えられる			なし	前期前半中越	主柱穴の内側が周辺より硬くなっている。南壁で土坑と重複するが、本住居址が新
C	8	南北に長い長方形	509	415	58	N-17°-E	北	地床炉	中央	北東隅で僅かに切れている他は、全周している		磨石	北に2	前期前半中越	主柱穴の内側が周辺より硬くなっている
C	9	やや南北に長い隅丸方形	535	493	45	N-23°-E	北	地床炉	中央やや西寄り	東壁と南壁及び北壁の東半分に見られる			北に1	前期前半中越	主柱穴の内側が周辺より硬くなっている
C	10	長方形	590	460	32	N-10°-E	北	地床炉	中央	北側の掘り込みが浅く、北壁の東半と西壁の北側で切れているが、全周していたと思われる	床面直上南壁寄りに一括土器		なし	前期前半中越	主柱穴の内側が周辺より硬くなっている。北側1/3は流失しており、周溝と柱穴が残るだけ
C	11	隅丸方形	460	435	40	N-15°-E		地床炉	中央	なし			北西柱穴脇に1	前期前半中越	中央がやや凹んでいる。住居址の中央を東西方向にクラックが入っており、焼土や遺物が落込む
C	12	やや南北に長い隅丸方形	398	368	40	N-27°-E		地床炉	中央	北・東・南壁のすべてと西壁の南半に見られる		一括土器に縄文施文	南北に各1	前期前半中越	焼失住居。東西方向に2本のクラックが入る
C	13	南北に長い隅丸長方形	427	397	35	N-03°-E		地床炉	中央やや西寄り	北壁と東西壁の北半にある	凹石		なし	前期前半中越	北壁近くを断層が東西に走っている
C	14	隅丸方形？	495		30	N-32°-E		石囲炉	中央やや北寄り	北壁及び東西壁の北側にある	磨石	縄文施文	なし	前期前半中越	北側の主柱穴の内側が一段低くなっている。東西に2本の断層が走っており、斜面の下側である南側の方が、若干高くなっている
C	15	やや東西に長い隅丸方形	455	420	47	N-68°-W		地床炉	中央	なし	磨石		なし	前期前半中越	南東隅がやや広がっている。床面は傾斜しており、北と南では25cmほどの差が認められる。南西隅で、焼土の

≪このレコードは次ページに続きます。≫

地区	番号	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	壁高(cm)	長軸方向	入口	炉址	炉位置	周　溝	遺　物	特殊遺物	平石	時　期	備　考
															多量に入る土坑が重複するが、その焼土の分布から土坑が新
C	16	やや東西に長い隅丸方形	489	457	33	N-58°-W			他の住居址例からほぼ中央にあったと考えられるが、C11方形柱穴列と重複しており、検出できなかった	なし	柱穴aからミニチュア土器		なし	前期前半中越	C１１号方形柱穴列と重複
C	17	円形？	450		60				流失してしまったと考えられる	なし		黒曜石の集中		中期	
C	18	不整形								なし	なし		なし		欠番
C	19	円形？	260		58			地床炉	中央	なし			なし	中期	南半が流失。C２０号住居址と重複するが、新旧関係は不明
C	20	円形？	300		30			未検出であるが、流失した中央部にあったものと考えられる		なし			なし	中期	南半が流失。C１９号住居址・土坑と重複する。住居址との新旧関係は不明、土坑との新旧関係は土坑に落込んだ礫の状況から土坑の方が新
C	21	円形？	357		35			未検出であるが、流失した中央部にあったものと考えられる		なし	磨石が床面より11cm上で出土		なし	中期	南半が流失
C	22	円形？	277		27			地床炉	中央	なし			なし	中期	南半が流失。C２３号住居址と重複し、本址の方が新
C	23	円形？	271		20			地床炉	中央	なし			なし	中期	南半が流失。C２２号住居址と重複し、本址の方が古
B	24	不整形	380	310	28			地床炉	中央	北壁と東南隅に認められる			なし	前期前半中越	床面の凸凹が激しい
B	25	円形？	325		46			未検出		なし			なし	中期	南半が流失。土坑と重複し、土坑が新。東西方向にクラックが入る

第8表　方形柱穴列一覧表

区	番号	長辺柱数(本)	短辺柱数(本)	長軸規模(cm)	短軸規模(cm)	長軸方向	備　　考
A	1	3	2	300	320	N-8°-W	
B	1	4	3	510	470	N-15°-E	
B	2	4	3	420	370	N-20°-E	
B	3	3	2	320	290	N-16°-E	
B	4	4	3	390	380	N-17°-E	
C	5	5	3	560	530	N-22°-E	東西に断層が走る
C	6	3	1	220	210	N-61°-W	北辺のa･b･cは、東西に断層が走り切られている
C	7	5	3	570	560	N-56°-W	東西に断層が走る
C	8	3	2	380	340	N-42°-E	
C	9	5	4	590	600	N-68°-W	北辺に東西に断層が走る
C	10	5	3	540	490	N-20°-E	北辺に東西に断層が走る
C	11	4	3	450	480	N-37°-E	C16号住居址と重複する
C	12	3	2	300	290	N-63°-W	
C	13	4	3	380	380	N-50°-W	
C	14	5	3	550	620	N-44°-W	
C	15	4	2	360	350	N-37°-E	
C	16	5	3	490	450	N-30°-E	
C	17	4	3	510	450	N-40°-E	
C	18	5	3	510	470	N-41°-E	
C	19	3	2	270	250	N-68°-W	

第９表　方形柱穴列個別柱穴一覧表

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
A	1	a	北	円形	底面は平ではなく、先細りとなっている	48	48	30	23	52		A34号土坑
A	1	b	北	円形	底面は北側に寄っており、北壁が直立	38	34	20	18	33		A35号土坑
A	1	c	東	２つが重複しており、ハート型。西側が新しく、東側が古い	西側の新しい柱穴の方が一段低くなっている	60	54	42	35	20		A36号土坑
A	1	d	東	楕円形	南北の壁の傾斜は緩い	43	30	17	16	40		A37号土坑
A	1	e	東	円形	底面は中央にある	49	47	31	26	42		A38号土坑
A	1	f	南	隅丸方形		38	33	28	24	25		A39号土坑
A	1	g	南	楕円形		55	41	27	23	57		A3号土坑
A	1	h	西	楕円形	内側の中段に稜があり、広がっている	92	62	35	29	72		A4号土坑
A	1	i	西	楕円形		80	62	47	32	56		A5号土坑。北側でｊと連結
A	1	j	西	円形		76	72	31	30	63		A6号土坑。南側でｉと連結
B	1	a	北	方形	底面は二段になっており、内側が深い。壁はほぼ直立しており、特に内側である南壁は垂直に近い	100	90	64	32	82	２個が東西の壁際にある。覆土は締りがなく、中央の硬く良く締った土と明確に区別できる	
B	1	b	北	方形		94	92	53	30	84	２個が南北壁際に寄る	
B	1	c	北	方形		80	80	64	28	73		柱痕か切り合いかは不明
B	1	d	東	隅丸方形	西壁と北壁が直立	104	56	74	33	84	明確な柱痕は検出できなかったが、掘り下げ途中では中央の西壁寄りにいくぶん黒褐色～黒色でロームブロックのない箇所が見受けられた。線引は出来なかったが、柱痕のあった可能性がある	
B	1	e	東	隅丸方形	壁はほぼ直立	92	75	56	50	86	２個が南北壁際にある	
B	1	f	東	隅丸方形	内側である西壁が特に直立	94	62	66	46	80	西壁際に寄る	
B	1	g	東	南北に長い長円形、底面は円形	西壁と南壁が直立する	92	72	62	52	84		
B	1	h	南	東西に長い長円形	内側の北壁に張り出しがあるが、底面までは至っていない	95	94	86	62	98	北壁際に寄る。径30㎝	
B	1	i	南	北側が張り出す隅丸三角形。底面は東西壁が張り出しており、東西に長い隅丸長方形の穴と、北側にある円形の穴が重複している感じ		92	92	82	72	88	２個が南北壁際に寄る	
B	1	j	南	やや南北に長い長円形	内側である北壁が直立	100	98	78	59	78		
B	1	k	西	南北に長い長円形。底面は円形	西壁・北壁の中程に段を有する。東壁はほぼ直立	90	76	52	51	92		
B	1	l	西	方形	底面は東半分が一段低くなっている	64	56	56	42	57	径22㎝の柱痕が、東壁から6㎝離れて立つ	北側でｍと連結
B	1	m	西	方形	底面は南側が一段低くなる。一段高くなっている箇所はほぼ同一レベルでｎの底面と繋がっている	68	58	60	58	53	径18㎝の柱痕が、東壁から7㎝離れて立つ	南がｌ、北がｎと連結
B	1	n	西	円形	外側である西壁はゆるい傾斜で底面に至るが、北壁・東壁は直立	110	86	80	62	65	径30㎝の柱痕が、東に寄って立つ	南がｍと連結
B	1	o	西	隅丸長方形	西壁がやや傾斜する他は直立	97	94	74	68	86	径17㎝の柱痕が、東壁中央に寄る	
B	2	a	北	東西に長い長円形	西壁・南壁が直立	84	80	70	52	42	なし	ｂと連結

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
B	2	b	北	円形？底面はａより一段低い	西壁はａと連結。それ以外は直立	69	57	43	31	56	なし	ａと連結
B	2	c	北	円形	浅い	83	75	60	54	33	なし	
B	2	d	東	西壁が東壁よりも長い隅丸の台形	西壁がほぼ直立	92	81	65	49	55	なし	南でｅと連結するが境界は明確
B	2	e	東	隅丸長方形	壁は４面とも直立	73	58	58	40	55	なし	北壁がｄ、南壁がｆと連結するが、境界は明確
B	2	f	東	南北に長い隅丸長方形	壁は４面とも直立	82	64	63	50	61	なし	北壁がｅ、南壁がｇと連結するが、境界は明確
B	2	g	東	円形。底面は西壁側が一段低くなっており、南北に長い長円形	西壁が直立	100	90	68	66	50	中央にある	確認面で、柱を支えるように礫が斜に立つ
B	2	h	南	南北に長い長円形。底面は北側がやや低くなっており、２つが重なった感じ		100	85	83	60	37	なし	
B	2	i	南	隅丸方形。西壁中央に張り出しがあり、南北に２つあるようにも見える	内側である北壁は直立	75	72	48	45	37	なし	
B	2	j	南	隅丸長方形。底面は二段となっており、外側である南側が深い		95	75	75	60	40	なし	
B	2	k	西	隅丸長方形から長円形	壁はほぼ直立。特に東壁と西壁が直立	103	62	83	43	64	南壁際にある	
B	2	l	西	隅丸三角形	内側である東壁が直立気味	103	72	48	45	70	南壁際にある	
B	2	m	西	長円形	南壁は直立	78	52	51	35	78	南壁際にある	
B	2	n	西	隅丸方形	東壁と南壁は直立	60	54	47	41	82	なし	
B	3	a	北	東西に長い長円形、底面は北壁と東壁及び南壁の一部が一段高くなっており、南西隅が長円形で一段低くなっている	東壁は傾斜してｂと連結するが、他の３壁は直立	106	65	33	23	60	２個	
B	3	b	北	方形	西壁は傾斜しており、上部でａと連結する。北・東・南の３壁は直立	62	58	35	33	64	東壁際にある	
B	3	c	東	北西側が張り出す卵形。底面に小ピットが３個見られる		106	72	61	47	50	なし	
B	3	d	東	平面形は円形、底面形は隅丸方形	ほぼ直立	83	76	52	47	91	なし	
B	3	e	東	平面形は円形、底面形は隅丸方形。底面に小ピット４個を有する		93	87	70	46	50	なし	
B	3	f	南	やや東西に長い長円形	北壁は直立するが、南壁は傾斜をもつ。南壁上面の広がりは、崩れによるものか	80	62	40	31	68	なし	土器１点
B	3	g	南	平面形は円形、底面も円形で、西に寄っている	北壁・東壁の広がりは、崩れによるものか	78	76	49	28	62	なし	
B	3	h	西	平面形は、北東部が崩れており、不整形	東壁・南壁は直立するが、北壁は上方でなだらかに傾斜し、ｉと連結。南北２個のピットの合わさったものか	85	65	60	28	75	南壁際にある	
B	3	i	西	平面形は隅丸方形、底面は南東に寄っており、円形	北壁は緩やかに傾斜し、ｊと連結する。南壁も直立した後、ｈと連結する	73	68	38	37	35	東壁際にある	
B	3	j	西	平面形は円形、底面は北側に寄っており、円形	南壁が傾斜して、ｉと連結。他の３壁は直立	84	72	38	33	77	なし	
B	4	a	北	平面形・底面形とも円形	東壁がｂと連結	80	78	45	42	82		
B	4	b	北	平面形・底面形とも方形	南壁がほぼ直立。西壁がａと連結	80	76	47	47	90		

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
B	4	c	北	平面形・底面形とも長方形	壁は4面とも直立	94	80	68	52	75	柱痕の下と思われる箇所の底面に赤化した礫がある	
B	4	d	東	平面形・底面形とも方形。底面は段があり、三段となっている	西壁はほぼ直立する。東壁側が浅く、西壁際が深い。南壁がeと連結	85	85	60	40	81		
B	4	e	東	平面形・底面形とも長方形	西壁はほぼ直立する。北壁がd、南壁がfと連結	106	66	60	44	78		
B	4	f	東	平面形・底面形とも方形。西壁がやや短かく、台形に近い	北壁がeと連結	81	73	60	54	70		
B	4	g	東	平面形・底面形とも隅丸三角形	壁はほぼ直立	80	74	57	47	80		
B	4	h	南	北壁は直線的であるが、平面形・底面形とも円形	北壁はほぼ直立	85	78	50	40	88		
B	4	i	南	平面形・底面形とも隅丸長方形	北壁はほぼ直立	95	68	60	37	92	断面のスライスを繰返すが、柱痕は検出できなかった	
B	4	j	南	平面形・底面形とも隅丸方形	北壁はほぼ直立	88	72	55	37	70	検出できなかった	
B	4	k	西	平面形・底面形とも隅丸方形	壁はほぼ直立。北壁の上部はlと連結	81	76	64	49	71	検出できなかった	
B	4	l	西	平面形は長方形、底面形は台形	南壁がk、北壁がmと連結	86	82	55	45	76		
B	4	m	西	底面形は方形	南壁がl、北壁がnと連結	65	60	52	50	85		
B	4	n	西	底面形は長方形	南壁がmと連結	82	80	57	43	83		
C	5	a	北					100	70	99		
C	5	b	北	b・cはつながっている						111		
C	5	c	北							112		
C	5	d	東		西壁は直立			85	70	94		
C	5	e	東	e・f間には内側にわずかにブリッジが残るが、つながっている				76	52	94		
C	5	f	東	fは底面から25cmの所に平石をおいている。f・g間には内側にわずかにブリッジが残るがつながっている		102		97	48	78		
C	5	g	東				85			85		
C	5	h	東	内側と外側で25cm程の段差がある。外側の深い方に平石がおかれるが、そのレベルが浅い内側のレベルと同じであることから、重複している内側の方が新しいと考えられる						63		
C	5	i	南	内側である北側が浅い。i～kの間にはブリッジの痕跡が内側にわずかに残る		110	104			97		
C	5	j	南	内側である北側が浅い			108			80		
C	5	k	南	内側である北側に中場が2ヵ所あり、建て替えが2度行われた可能性もある			98			75		
C	5	l	西			92	87	67	52	132		
C	5	m	西			105	87	75	67	123		
C	5	n	西			114	90	103	70	110		
C	5	o	西			100		65	53	101		
C	5	p	西	2個に別れるか			95	135	52	98		
C	6	a	北	隅丸方形		83	64	50	37	69		クラックが走る
C	6	b	北		北壁は直立	57	45	34	15	73		クラックが走る
C	6	c	北	底面は長方形。柱穴2個の並びか		62	45	43	36	44		クラックが走る

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
C	6	d	東	底面は不整形。底面に段差があり、東側が浅い		63	39	52	30	51		
C	6	e	南	長楕円形。柱穴2個か	東壁は直立	61	45	40	20	66		
C	6	f	南	底面は長方形に近い		51	46	41	36	47		
C	6	g	南	円形もしくは隅丸方形	内側である北壁が直立	57	54	37	30	68		
C	6	h	西	底面は円形	内側である東壁が直立気味	57	45	40	37	48		
C	7	a	北	隅丸方形	内側である南壁と西壁が直立気味、北壁は緩く傾斜	110	95	64	55	82	中央に径26cmの柱痕	
C	7	b	北	円形に近い。底面中央がやや低い	内側である南壁が直立気味、北壁は緩く傾斜	102	90	67	53	78	径40cmの柱痕が、内側である南壁際に寄る	
C	7	c	北	東辺の中ではすこし外側にはみ出している	内側である南壁と東壁が直立気味、北壁は緩く傾斜	115	81	72	58	80	径40cmの柱痕が東南側に寄る	
C	7	d	北	南に広がる台形	内側である南壁が直立気味、北壁は緩く傾斜	110	87	82	76	84	径35～40cmの柱痕が東南側に寄る	
C	7	e	北	底面が二段となっており、内側である南側が浅い	内側である南壁が直立気味、北壁は緩く傾斜	104	103	70	65	95	径40cmの柱痕が、内側である南壁際に寄る	
C	7	f	東	軸線から底面がはずれる	壁面は直立気味	125	95	86	57	102	検出できなかった	
C	7	g	東	底面は隅丸方形。本址の中で最も小規模	摺り鉢状。壁面はどれも緩く傾斜	135	107	50	44	108	検出できなかった	
C	7	h	東		壁面は直立気味	94	87	52	46	89	検出できなかった	クラックが走り、横ズレしている
C	7	i	南	内側中央を向く	内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない	115	96	70	50	85	径20cmの柱痕が中央にある	
C	7	j	南	内側が広がる隅丸台形	内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない	112	91	77	66	76	径30cmの柱痕が北東側に寄る	
C	7	k	南	底面は南北に長い隅丸長方形	内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない	95	88	84	70	68	径40cmの柱痕が、内側である北壁際に寄る	
C	7	l	南	底面形は隅丸長方形	内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない。南壁は底面から緩やかに立ち上がり、上方で直立	105	100	81	75	77	検出できなかった	
C	7	m	南	底面形は円形	内側である北壁が直立気味であるが、他とそれほど差はない	100	96	54	51	106	検出できなかった	
C	7	n	西	底面形は内側に広がる隅丸台形	内側である東壁が直立気味。上方はやや崩れている	119	116	77	73	98	径50cmの柱痕が内側である東壁際に寄る	
C	7	o	西	長楕円形。東南隅には径25cmの凹み	内側である東壁が直立気味。上方はやや崩れている	127	109	82	55	93	径40～50cmの柱痕が、内側である東壁際に寄る	
C	7	p	西		内側である東壁が直立気味。上方はやや崩れている	128	124	84	36	108	縦方向に覆土を分層できたが、他の柱穴に見られる土層とは異なっており、どちらも柱痕とは考えられない	
C	8	a	北	底面は隅丸長方形	底面から壁半ばまでは直立する。壁面はどれも崩れている	100	84	64	48	64		
C	8	b	北	平面径・底面径とも隅丸方形	壁面はほぼ直立する	84	77	42	36	77		
C	8	c	東	不整形	壁面はどれも崩れている。西壁はほぼ直立するが、他の壁は半ばまで直立し、上方は広がる	100	77	61	50	70		
C	8	d	東	平面形は楕円形、底面形は長方形	壁面はどれも崩れており、上方で広がっている	95	85	45	34	61		

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
C	8	e	東	e・f間の内側に別の柱穴がある。底面形は楕円形		98	71	69	33	65		クラックが東西に走る。西壁でgと連結
C	8	f	南	f・g間の内側に別の柱穴がある。底面形は楕円形	北壁が直立気味	75	66	48	39	85		クラックが東西に走る。東壁でe、西壁でgと連結
C	8	g	南	底面形は半円形。西側に別の柱穴がある	北壁が直立気味	75	55	65	39	58	径30cmの柱痕が、内側である北壁際に寄る	クラックが東西に走る。東壁でgと連結
C	8	h	西	平面形は楕円形、底面形は円形	壁面はローム中は直立、漸移層になって広がるが、崩れや掘りすぎもあるか	110	88	63	54	61		
C	8	i	西	平面形は不整形、底面形は隅丸方形	壁面はローム中は直立、漸移層になって広がるが、崩れや掘りすぎもあるか	95	74	52	39	58		
C	8	j	西	隅丸長方形、底部は長円形	底面から壁半ばまでは直立し、上方は広がる。壁面はどれも崩れている	116	81	73	45	51		
C	9	a	北	平面形は不整形。段差はほとんどないが、横ズレが20cm以上ある	南壁はほぼ直立、北壁は傾斜し上方で大きく広がっている。東壁と西壁にはクラックが入りはっきりしないが、ほぼ直立	160	130	80	53	145		ほぼ中央に東西にクラックが走る
C	9	b	北	横ズレが認められるが、段差はほとんどない	南壁・東壁は直立、北壁と西壁は傾斜。北壁は上方で大きく広がっている	125	100	85	70	151	径50cm	クラックがやや北側を東西に走る
C	9	c	北	内側である南壁側は直線的で、北壁側は曲線的	南壁はやや袋状となるがほぼ直立、東壁・西壁もほぼ直立するが、北壁は傾斜	123	95	100	95	136	径30cmほどの柱痕が、底面中央にある	
C	9	d	北	底面は東西に長い隅丸長方形、北壁側は丸みを帯びる。南東隅から北東隅へのクラックが走り、南側が10cm程低い。また、底面の北壁寄りにもクラックが入り、南側が10cm程低い。どちらも若干の横ズレが認められる	南壁は直立しており、やや袋状となる。他はやや傾斜	113	108	80	72	133	径40cmほどの柱痕が、南東壁寄りにある	
C	9	e	北	隅丸方形	南壁は直立、東壁は直立した後やや広がる。西壁は傾斜しており、北壁は内湾気味に立ち上がる	103	103	83	77	141	径30cmの柱痕が、底面中央よりやや東寄りにある	クラックが中央よりやや北側を東西に走る
C	9	f	東	楕円形	西壁・北壁・東壁は直立よりも袋状に近い。南壁は傾斜	118	93	105	63	132		クラックが中央よりやや北側を東西に走る
C	9	g	東	長楕円形	西壁は直立した後やや広がる。北壁・南壁はほぼ直立、東壁は傾斜	107	85	70	50	122		
C	9	h	東	クラックが底面と南壁の間に入る。東西の壁面上半にかなり開いており、壁面は崩れている	それぞれの壁面は直立しているが、東壁は上方で広がっている	85	80	68	55	112		
C	9	i	東	平面形は不整形。クラックが東西に走り、東壁で約25cm、西壁で約50cm開いている。南半分はクラックによりかなり崩れている	西壁は直立よりも袋状に近い。他は傾斜しており、上方で広がる	130	115	32	27	143		
C	9	j	南	平面形は楕円形、底面形は隅丸方形	壁はどれも直立に近い	92	82	72	61	119		クラックが東西に走る
C	9	k	南	楕円形	北壁はやや袋状となるがほぼ直立、東壁と西壁もほぼ直立	120	105	90	88	110	径50cmほどの柱痕が、内側である東壁寄りにある	
C	9	l	南	楕円形を呈する。クラックにより南北に広がる	北壁はやや袋状となるがほぼ直立、他の壁は緩やかに広がる	130	100	75	72	135		

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
C	9	m	南	隅丸方形	北東壁と南西壁コーナーが袋状	125	106	72	67	138	径30cmの柱痕が、内側である東壁寄りにある	
C	9	n	南	楕円形	南壁を除いて直立または袋状	135	94	95	70	124	径40cmの柱痕が南壁寄りにある	
C	9	o	西	クラックによる横ズレと段差。底面形は不整円形で北壁側は直線に近い。底面東寄りに径15cmの凹み	北壁・東壁・南壁が袋状で、西壁が直立した後広がっている	111	98	85	75	120	径40cmの柱痕が南壁寄りにある	
C	9	p	西	底面は西から中央に向かい傾斜している。クラックにより横ズレ	東壁は直立、南壁は直立気味	120	110	65	54	113		
C	9	q	西	クラックが入り、かなりの段差と横ズレが認められる。底面の段差は北が低く、25cmほど	東壁は直立	132	130	100	54	141		
C	9	r	西		東壁から南壁にかけては袋状になった後直立	170	122	78	62	134		クラックが走る
C	10	a	北	クラックにより北側が大きく落込む	南壁はほぼ直立		105		83	93		
C	10	b	北	クラックにより北側が大きく落込む	南壁はほぼ直立		95		77	87		
C	10	c	北	クラックにより北側が大きく落込む	南壁はほぼ直立		99		70	81		
C	10	d	東	クラックにより北側が大きく落込む	西壁は直立、南壁は傾斜。北壁ははっきりしない					92		
C	10	e	東	隅丸方形	西壁・北壁・東壁はほぼ直立、南壁はわずかに傾斜	85	55	84	47	115	径45cmの柱痕が内側である西壁際に寄る	
C	10	f	東	やや東西に長い隅丸方形	西壁は直立、東壁は直立した後わずかに広がる	77	64	70	45	113	径45cmの柱痕が内側である西壁際に寄る	
C	10	g	東	西壁は直線的で、東壁は丸みを帯びる	西壁は直立して上方でわずかに広がる。他はわずかに傾斜。東壁上方は掘りすぎか	87	70	83	65	128	径45cmの柱痕が内側である西壁際に寄る	
C	10	h	東	南北に長い隅丸長方形。クラックにより南北に10～15cm開く	西壁は直立、他は直立した後広がる	104	85	70	56	105	径45cmの柱痕が内側である西壁際に寄る	
C	10	i	南	隅丸長方形。北壁は直線的、南壁は丸みを帯びる。内側中央を向く	北壁は直立	105	57	89	47	95		
C	10	j	南	隅丸長方形。北壁は直線的、南壁は丸みを帯びる	北壁は直立	90	70	85	50	80		
C	10	k	南	ほぼ円形。西壁は耕作の畝で検出できない	北壁は直立	94	55	86	47	80	径45cmの柱痕が内側である北壁際に寄る	
C	10	l	西	内側中央を向く。中央にクラックが入るが形状は変わらない	東壁は直立、南壁もほぼ直立、北壁・西壁は傾斜	110	90	93	63	100		
C	10	m	西	底面は二段となっており、内側である東側が深い	北壁・東壁は直立、南壁もほぼ直立、西壁は内湾気味に立ち上がる。西壁上半は畝によって削られている	89	68	80	60	121	径42cmの柱痕が内側である東壁際に寄る	クラックが走る
C	10	n	西	底面は二段となっており、内側である東側が深い	東壁はほぼ直立、西壁上半は畝で削られている	90	71	77	60	135	径36cmの柱痕が内側である東壁際に寄る	
C	10	o	西	南側が高いのはクラックの所為か。15cmの段差がある	南壁は直立、西壁は緩やかに傾斜	100	65	95	63	135	径45cmの柱痕が内側である東壁際に寄る	クラックが走る
C	10	p	西	クラックが走るが、段差は少ない。北壁・東壁・南壁は直立、西壁は傾斜している。東壁上半と西壁上半は畝により削られている	北壁・東壁・南壁は直立、西壁は傾斜	103	68	95	55	111	径33cmの柱痕が内側である東壁際に寄る	

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
C	11	a	北	円形	いすれの壁も緩やかに傾斜しており、直立した壁がない	98	82	50	45	73		
C	11	b	北	東西に長い長円形	いずれの壁も緩やかに傾斜しており、直立した壁がない	103	86	65	22	83		
C	11	c	北		いずれの壁も緩やかに傾斜しており、直立した壁がない	100	94	85	55	81		
C	11	d	東	三角形。クラックが走るが、段差は少ない	西壁・北壁は直立、東壁と南壁は傾斜	96	75	59	55	75		
C	11	e	東	隅丸方形。クラックが入り、段差は5㎝ほど	東壁・西壁は直立、北壁・南壁は傾斜	71	65	63	57	78		
C	11	f	東	底面は不整形。クラックの所為か。元は隅丸方形か		93	80	80	70	86		
C	11	g	東	南北に長い長円形	西壁は直立、南壁は内湾気味に立ち上がる。東壁は傾斜。北壁はfとのブリッジが低く、5㎝ほど	93	75	38	34	68		
C	11	h	南	東西に長い楕円形	壁はすべてほぼ直立	80	79	66	50	60		
C	11	i	南	東西に長い楕円形	北壁は直立、南壁は傾斜、東壁・西壁は耕作による攪乱の為、壁の検出は出来ない	93	71	78	53	48		
C	11	j	南	特に小さく浅い	北壁と東壁が直立気味、他は傾斜	52	48	47	41	27		
C	11	k	西	南北に長い隅丸長方形	東壁と南壁は直立、北壁はわずかに傾斜。西壁はわずかに傾斜した後上方で広がる	92	66	66	48	88		
C	11	l	西	南北に長い隅丸長方形	東壁は直立、他は傾斜	89	85	61	45	87		
C	11	m	西	南北に長い隅丸長方形	東壁は直立、北壁・南壁はわずかに傾斜、西壁は緩やかに傾斜	81	64	56	36	74		
C	11	n	西	南北に長い隅丸長方形。底面は二段となっており、内側である東側が深い。高い方の西側の高さはk・l・mとほぼ同じ	北壁。東壁はほぼ直立、南壁はわずかに傾斜。西壁は中段から下は内湾気味に立ち上がり、上方は直立	98	84	91	57	150		
C	12	a	北	東西に長い長円形	南壁は直立、東壁・西壁は傾斜、北壁は傾斜して立ち上がり、中ほどで大きく広がる	86	57	55	35	90		
C	12	b	北	不整形。小さく、浅い	北壁は中ほどで大きく広がる	60	55	38	35	53		
C	12	c	北	隅丸方形。確認面で、礫2個が出土している	南壁は直立、東壁もほぼ直立する。西壁は傾斜、北壁は中ほどから広がる	87	65	63	48	75		
C	12	d	東	不整形	壁はいずれもしっかりしておらず、浅い	75	73	50	40	45		
C	12	e	東	不整形	北壁は直立し、他はわずかに傾斜	73	58	57	37	41		
C	12	f	南	東西に長い長円形。底面は段になっており、東が深く、西が浅い	北壁と東壁は直立、西壁は傾斜し、西に大きく広がる	95	63	42	40	79		
C	12	g	南	平面・底面とも円形	北壁と南壁は直立し、しっかりしているが、南壁は上方で広がる。東壁・西壁はわずかに傾斜。f・hに比して深い	65	59	39	37	107		
C	12	h	南	円形、底面形は隅丸方形	北壁と南壁は直立し、しっかりしている東壁・西壁はわずかに傾斜	75	64	51	43	83		
C	12	i	西	長円形	壁は東壁の南から南壁にかけてほぼ直立	78	55	48	40	59		

≪このレコードは次ページに続きます。≫

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
					するが、他は傾斜しながら立ち上がり、上方で広がる							
C	12	j	西	ほぼ円形	壁はいずれもしっかりしていない。浅く、底面も凸凹が激しい	87	78	69	56	32		
C	13	a	北	不整形、底面は隅丸長方形	北壁はわずかに傾斜するが、ほぼ直立、他はクラックが入り、しっかりしていない	73	68	49	38	48		
C	13	b	北	b・cはつながっており、さらに別の柱穴があるのか間が一段低い。底面はbがcより1段低い	北壁は直立、西壁は傾斜。南壁はクラックの為しっかりしていない。東壁の上方は大きく崩れる	98	61	42	29	65		クラックが東西に走る
C	13	c	北		北壁・西壁はほぼ直立、南壁は内湾気味に立ち上がる	83	57	59	45	62		クラックが東西に走る
C	13	d	北		東壁と北壁は傾斜。東壁と南壁はクラックの所為かしっかりしていない	107	94	55	37	59		クラックが東西に走る
C	13	e	東	底面が2段となっており、内側である西側が30cmほど低い	西壁は直立、東壁は傾斜	118	90	61	30	66		
C	13	f	東	底面が2段となっており、内側である西側が30cmほど低い	西壁は直立、東壁は傾斜	92	79	37	26	67		
C	13	g	東	東壁上方が広がるのは崩れによるものか	西壁は直立、他は傾斜	100	92	42	32	75		
C	13	h	南	楕円形。内側中央を向く。底面は2段となっており、北側が低い	北壁は直立、他は傾斜	132	108	67	52	98		
C	13	i	南	隅丸方形で、外側である南側がやや張り出す	壁はすべてほぼ直立	84	80	60	55	84		
C	13	j	南	隅丸方形。底面内側に張り出しがあり、たいらでない	壁はすべてほぼ直立	79	65	52	43	72		
C	13	k	南	内側中央を向く。上方はいずれも大きく崩れている	南壁・北壁は直立、東壁・西壁は緩く傾斜	109	96	48	38	79		中央にはクラックが走る
C	13	l	西	隅丸方形。浅い	壁はすべて緩く傾斜	71	62	42	41	47		
C	13	m	西	内側が直線的で、外側が丸みを持つ	東壁はほぼ直立するが、上方で広がる。他は緩く傾斜	84	70	45	38	57		
C	13	n	西	元は南北に長い隅丸長方形か。浅い		90	48	73	34	36		北側にクラックが東西に走る
C	14	a	北	隅丸長方形。内側中央を向く	壁はほぼ直立	98	83	70	50	98		
C	14	b	北	隅丸方形	南壁は直立するが、北壁は内湾気味に大きく傾斜。東壁・西壁は中ほどで袋状となる。南壁際が4cmほど高くなっているのは、クラックによるものか	76	88	72	47	119		東西に小さなクラックが走る
C	14	c	北	隅丸方形	壁はすべてほぼ直立	91	90	70	59	123		中央を東西にクラックが走る
C	14	d	北	長円形	南壁・東壁及び西壁はほぼ直立、北壁は緩く傾斜	105	77	68	53	93		中央を東西にクラックが走る
C	14	e	北	長円形	壁はすべてほぼ直立	110	96	76	65	105		中央を東西にクラックが走る
C	14	f	東	南側にクラックが入り、上面で80cm、底面で25cmほど広がっているため平面形は不明	西壁と北壁は直立した後、上方で広がっている。東壁と南壁は傾斜			80	53	99		

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
C	14	g	東	中央を東西にクラックが走り、平面形は不明	北側にクラックがあるためか、北壁は袋状となる。西壁は直立、東壁・南壁は傾斜			95	61	106		
C	14	h	東	隅丸長方形。中央にクラックが入り、底面で15cmほどひらいているが、段差はない	西壁と北壁は直立、東壁と南壁は直立した後広がる	130	87	95	52	119		
C	14	i	南	楕円形	北壁は直立、東壁と西壁も直立気味であるが、南壁は傾斜	115	100	71	59	112		南壁際にクラックが走る
C	14	j	南	隅丸長方形	南壁にクラックが入る。北壁は直立、東壁・西壁も直立気味、南壁は傾斜	120	95	60	58	112		
C	14	k	南	長円形、底面は隅丸長方形。南側は一段高くなっているが、クラックによるものか	北壁は直立、他は傾斜	125	95	94	50	84		
C	14	l	南	不整形。中央にクラックが入り、北が深い。段差は大きく22cmほど	北壁は直立、他は傾斜	134	95	63	60	84		
C	14	m	南	不整形。クラックによる段差は大きく24cmほど	北壁と西壁は直立、他は傾斜	110	106	80	80	133		
C	14	n	西	長円形	東壁は直立、他は傾斜	120	98	90	65	99		
C	14	o	西		南側は大きく開口しており、壁面観察が出来ない。他は傾斜			125	55	89		クラックが東西に走る
C	14	p	西	南北に長い隅丸方形	東壁は直立、北壁・南壁も直立気味、西壁は傾斜	113	88	98	50	104		
C	15	a	北	長円形	壁面はいずれも緩く傾斜	110	92	64	30	50		中央にクラックが東西に走る
C	15	b	北	長円形。東側に浅い掘り込みが重複している	壁面はいずれも傾斜	82	75	73	42	59		南側にクラックが走る
C	15	c	東	隅丸長方形	壁面はいずれも傾斜。西壁がやや直立気味か	106	77	82	50	54		クラックが東西に2本走る
C	15	d	東	隅丸方形。c・dにかかる浅い掘り込みがある	西壁・北壁・南壁は直立、東壁は傾斜	70	66	38	32	57		クラックが東西に2本走る
C	15	e	東	楕円形、底面形は隅丸長方形	西壁は直立気味、他は傾斜	86	73	45	37	59		
C	15	f	東	長円形	壁はいずれも直立した後広がる	111	76	69	40	52		クラックが東西に走る
C	15	g	南	楕円形	北壁と西壁は直立した後広がる。東壁と南壁は傾斜	92	77	57	35	51		クラックが東西に走る
C	15	h	南	円形	壁はいずれも傾斜	79	74	36	33	45		クラックが走る
C	15	i	西	隅丸方形	東壁は直立、他は傾斜。西壁と南側はクラックで掘りすぎ	95	63	55	53	68		
C	15	j	西	隅丸方形	東壁と北壁は直立、南壁と西壁は傾斜。西に大きく広がるが掘りすぎか	66	63	50	40	59		
C	15	k	西	隅丸方形	東壁は直立、他は傾斜。西に広がるが掘りすぎか	76	71	55	50	71		
C	15	l	西	隅丸三角形。底面の南にクラックが入る	東壁と北壁は直立気味、西壁と南壁は傾斜北壁と西壁は傾斜、東壁は直立した後	73	56	48	42	55		
C	16	a	北	長円形。底面で27cmほどのクラックが東西に走る	広がる。内側である南壁が大きく傾斜する	119	90	83	58	117		

≪このレコードは次ページに続きます。≫

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
					が、クラックの所為か。底面は北が平らで南に傾斜							
C	16	b	北	楕円形。東西にクラックが走る他、横ズレも認められる。クラックによる段差は10～15cm、幅は30cmほど	北壁と西壁は直立した後広がる。東壁と南壁は傾斜	130	113	85	63	104		
C	16	c	北	東西にクラックが走る他、横ズレも認められる。クラックによる段差は大きく、10cm以上。底面は南が直線的で、北が曲線的	北壁・東壁及び西壁は直立気味、南壁は傾斜	105	98	62	59	90		
C	16	d	東	楕円形	北壁と西壁は直立した後広がる。東壁と南壁は傾斜	107	100	57	47	106		
C	16	e	東	隅丸方形	北壁と西壁は直立、東壁と南壁は傾斜	80	72	52	47	130		
C	16	f	東	隅丸方形。底面に小ピット２がある	北壁と西壁は直立、東壁と南壁は傾斜	97	95	60	55	135		クラックが走る
C	16	g	東	楕円形	西壁は直立、他は傾斜	102	84	43	35	141		
C	16	h	東	長円形	西壁は直立、他は傾斜	103	90	61	46	125		
C	16	i	南	惰円形。東西壁北側にクラックが入る。底面にピット１がある	北壁は直立の後広がる。他の壁は傾斜。底面北東隅が一段低いが、クラックによるものか	115	93	55	55	101		
C	16	j	南	楕円形	北壁は直立の後広がる。他の壁は傾斜	90	90	59	45	114		クラックが北側を走るが小さい
C	16	k	南	隅丸方形	北壁・東壁及び西壁は直立の後広がる。特に東壁は袋状となっている。南壁は傾斜	100	100	73	60	102		
C	16	l	西	惰円形。中央にクラックと段差があり、北が10cmほど低い。東側上部が広がるのはクラックによる掘りすぎか	東壁は直立、南北壁も直立気味で、西壁は傾斜	108	106	70	55	111		
C	16	m	西	円形、底面は隅丸長方形	いずれの壁も直立の後広がる	85	82	52	40	114		
C	16	n	西	不整形	東壁は直立の後広がる。南壁は傾斜。北壁から西壁にかけては直立気味で、特に北壁は袋状となっている。クラックの所為か	123	90	75	52	129		クラックが走る
C	16	o	西	不整形、底面はハート型。小さいクラックが入っており、その為にズレた可能性もある	東壁は直立、北壁は袋状、南壁と西壁は傾斜している	103	85	64	44	116		
C	16	p	西	平面・底面とも隅丸長方形。北側にクラックが入るが、底面への影響はなさそう	北壁と東壁は直立の後広がる。南壁と西壁は傾斜	115	113	70	60	106		
C	17	a	北	不整形だが、下半は円形。底面北壁際にクラックが走る	南壁は直立、他の壁は直立した後広がる	70	66	53	46	99		
C	17	b	北	長円形	南壁は直立、他の壁は直立した後広がる	90	67	68	44	86		中央にクラックが東西に走る
C	17	c	北	隅丸長方形。西側に一段高い箇所がある。東側の広がりは崩落によるものか		86	72	92	67	86		中央にクラックが東西に走る
C	17	d	東	惰円形	西壁は直立、南北壁は直立気味に立ち上がった後広がる。東壁は傾斜して広がった後、さらに中段を持って広がる	123	97	78	54	99		

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
C	17	e	東	不整形	北壁と西壁の北2/3は直立、南1/3はクラックのためかしっかりしていない。東壁は逆に北2/3が傾斜を持ち、南1/3は直立気味。南壁は直立	133	108	117	51	81		
C	17	f	東	隅丸方形。クラックが東西に走っているが、形状を変えるほどではない	西壁は直立、他は傾斜しているが、特に東壁は上方でさらに広がっている	107	100	53	27	102		
C	17	g	東	惰円形。中央と南の２ヵ所にクラックが東西に走る。底面の東側が深くなっているが、クラックによるもの	西壁と南壁は直立しているが、北壁と東壁は傾斜している	120	90	70	57	88		
C	17	h	南	不整形。中央にクラックが東西に走り、わずかに横ズレしている	北壁にかかるように大きなクラックが入る。壁はいずれもしっかりしておらず、傾斜。南壁は中段に中場を持つ	106	96	50	35	74		
C	17	i	南	隅丸長方形。中央と北壁にかかるようにクラックが走る	北壁はほぼ直立、他は傾斜	94	78	60	41	59		
C	17	j	南	隅丸方形。ｈ・ｉで底面中央を走っていたクラックは北側による	北壁はクラックが入り、検出できない。他の壁は傾斜	98	85	64	59	61		
C	17	k	西	楕円形。遺構確認面で東壁南で70㎝、西壁南で50㎝のクラックが入り、形状を大きく変えている	北壁・東壁・南壁が傾斜、西壁が途中まで傾斜した後広がっている	144	118	52	50	112		
C	17	l	西	底面にクラックが入る。東で２本のクラックであったものが、中央で交わり、１本のクラックとなって西へ抜けている。底面西側が一段低くなっている	東壁・南壁は直立、北壁と西壁は直立気味でわずかに傾斜	94	86	65	56	119		
C	17	m	西	不整形。ｎとつながっている	東壁と南壁は直立、西壁は直立気味に立ち上がった後広がる			99	66	105		掘り下げ当初はｍとｎはロームのブリッジで別れていたが、埋められたロームであり、つながってしまった。建て替えが行われた可能性もある
C	17	n	西	不整形。ｍとはつながっているが、底面は一段低くなってる	東壁はほぼ直立、北壁は直立した後上方で広がる。北壁は内湾気味に外へ広がる		103	75	61	124		
C	18	a	北	円形	南壁及び西壁はほぼ直立する。北壁は直立した後広がる。東壁はクラックが入りはっきりしないが、かなり傾斜。また、上方で広がるが、耕作により壁が削られ、崩れたもの	95	92	79	74	69		中央やや南にクラックが東西に走る
C	18	b	北	不整形。辺にそって長い。２個の柱穴に別れる可能性もある。東壁はなく、ｃとつながっている。底面はｃよりも一段高い	南壁及び北壁はほぼ直立するが、西側はやや傾斜する。西壁は内湾しながら立ち上がる	148	59	116	40	55		底面東側から円礫が１個出土

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
C	18	c	北	惰円形	南壁は直立、北壁と東壁は直立した後わずかに広がる。西壁はなく、bとつながるが、bの底面とcとの間にわばかに残る西壁上場との間に、緩く傾斜する中場がある	125	83	66	56	81		
C	18	d	東	平面形・底面形とも楕円形。2個の重複か	ほぼすべての壁面が直立。南壁及び北壁はわずかに内湾気味	126	101	75	48	88		
C	18	e	東	平面形・底面形とも隅丸方形。底面南には小さなクラックが入るが、形状には影響を与えていない	西壁は直立で、他の壁もほぼ直立	90	74	76	58	91		
C	18	f	東	不整形。南北に段差が認められるのはクラックによるもの。底面の北東に一段高い中場がある	西壁は直立、南壁もほぼ直立するが、北壁及び東壁は傾斜。東西にクラックが走り南北に20cm程広がり、段差も20cmほどある。また、横ズレも認められる。段差は北が高く、南が低い	112	106			83		
C	18	g	東	不整形	西壁は直立、北壁は内湾気味に立ち上がり、中程より上でやや袋状となる。東壁から南壁にかけてクラックが入っており、壁の状態は悪い	94	85	66	50	98		
C	18	h	東	楕円形	北壁はクラックが入りズレている。西壁と東壁は直立、南壁は内湾気味に直立。南壁際にも小さいクラックが入るが、形状を変えるほどではない	92	70	69	49	81		
C	18	i	南	北側にクラックが東西に走り、底面を大きく広げている	北壁は内湾気味に直立する。他の壁は内湾気味に直立	94	84		59	68		
C	18	j	南	平面形・底面形とも隅丸方形。北側にクラックが15～20cmの幅で走っている	北壁は直立、東西の壁も直立気味で、南壁はわずかに傾斜	90	70	64	59	58		
C	18	k	南	内面である北壁側が直線的で、外側の南壁側が曲線的。北側に20～25cm幅でクラックが走っている。大きく形状を変えており、不整形	北壁は直立、他はわずかに傾斜	77	73		57	60		
C	18	l	西	南北に長い隅丸長方形	東壁・北壁・南壁は直立、西壁は直立した後広がるが、クラックによるものか	114	74	91	59	76		南側にクラックが走る
C	18	m	西	やや東西に長い隅丸方形	壁はすべて直立	96	84	85	76	72		
C	18	n	西	隅丸方形。クラックにより多少横ズレが認められる						78		
C	18	o	西	隅丸方形	壁はすべて直立。北壁はわずかに袋状となる	104	87	73	66	96		
C	18	p	西	やや南北に長い隅丸方形	壁はすべて直立	114	84	78	66	89		
C	19	a	北	不整形	壁の状態は良くない	56	36	37	21	33		
C	19	b	北	平面形・底面形とも楕円形	南壁は直立し、他は傾斜	55	42	36	29	41		
C	19	c	北	不整形	壁の状態は良くない	55	40	39	23	34		中央にクラックが入る
C	19	d	東	隅丸方形	壁はいずれも傾斜	61	40	14	11	60		クラックが入る
C	19	e	東	不整形	浅い	47	41	30	25	28		クラックが入る

区	番号	柱穴	辺	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	柱痕	備考
C	19	f	南	円形。底面はクラックが入り、凸凹が激しい	壁は北西側が直立	47	47	32	28	31		
C	19	g	南	不整形	壁は北壁が直立で、他は傾斜	50	42	28	22	44		クラックが入る
C	19	h	南	不整形	やや深いが、クラックの所為か	44	39	23	15	53		
C	19	i	西	円形	浅く、壁もしっかりしていない	41	33	29	22	27		
C	19	j	西	円形。底面はクラックが入り、凸凹が激しい	壁は北壁が直立で、他はわずかに傾斜	52	48	34	30	52		

図　　版

阿久尻遺跡全景

図版　2

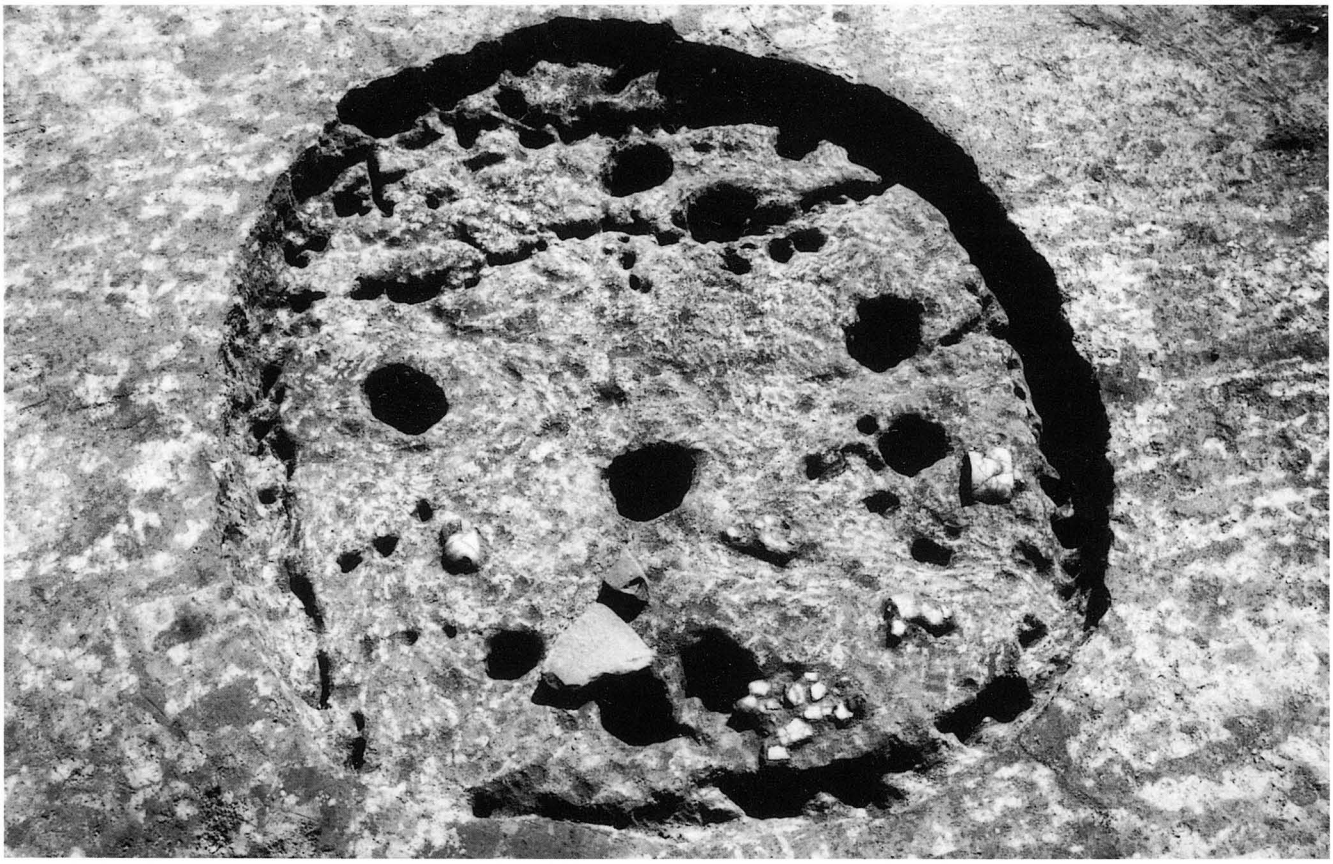
(1) A区全景

(2) B区全景

(1) B・C区全景

(2) A１号住居址（南西から）

図版　4

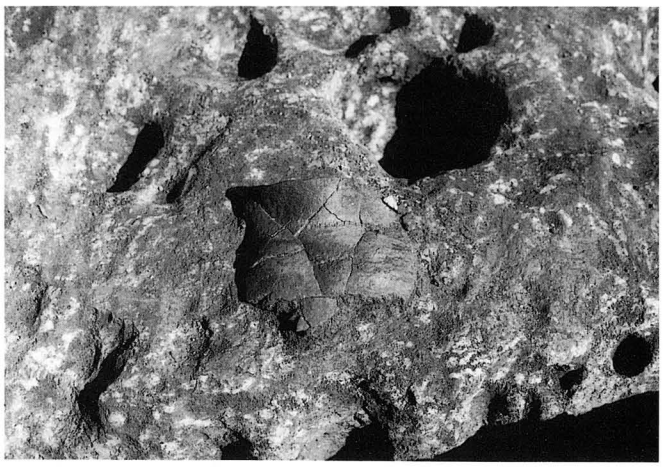


(1) A 2 号住居址

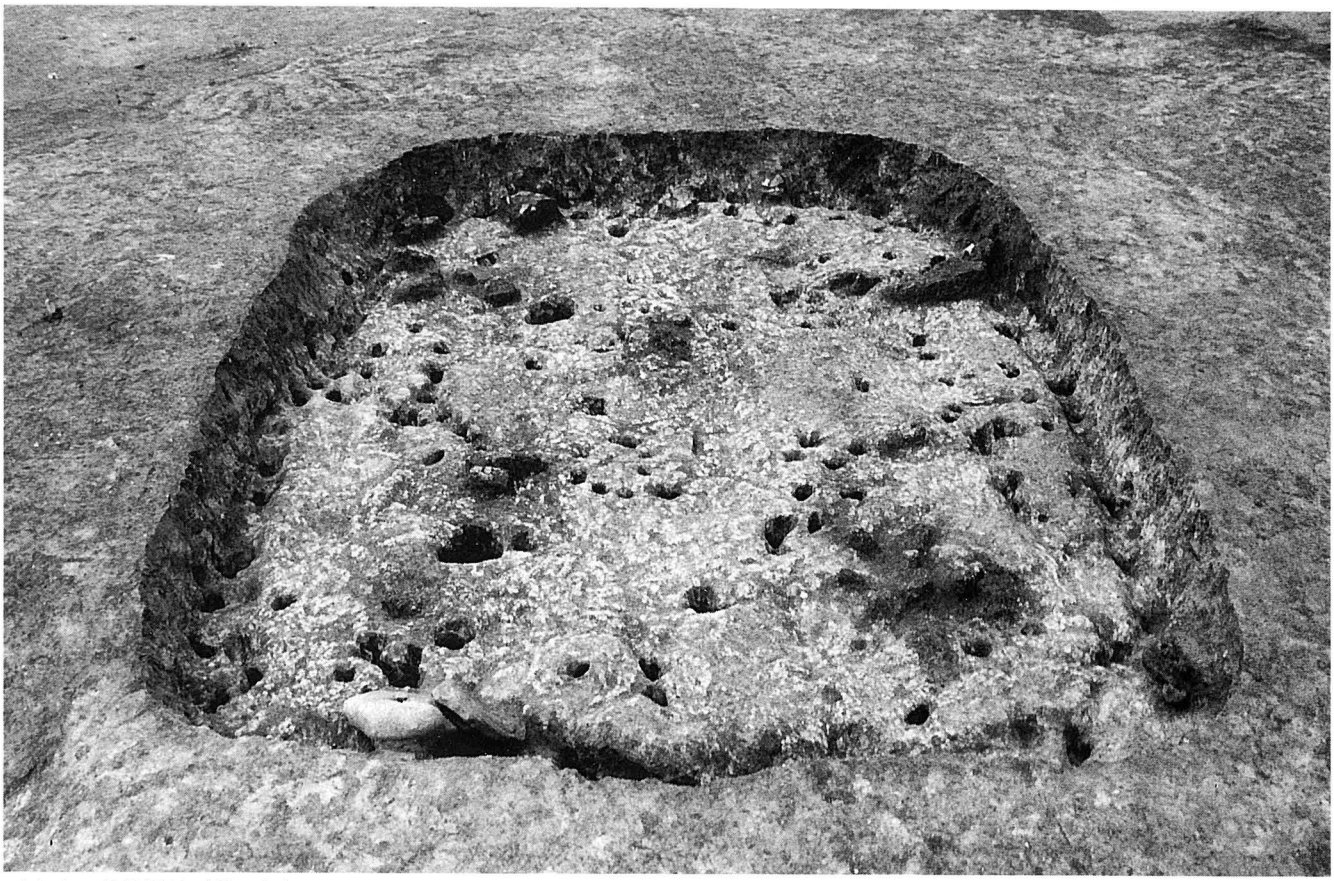
(2) A 2 号住居址遺物出土状態

(3) A 2 号住居址遺物出土状態

(4) A 2 号住居址遺物出土状態

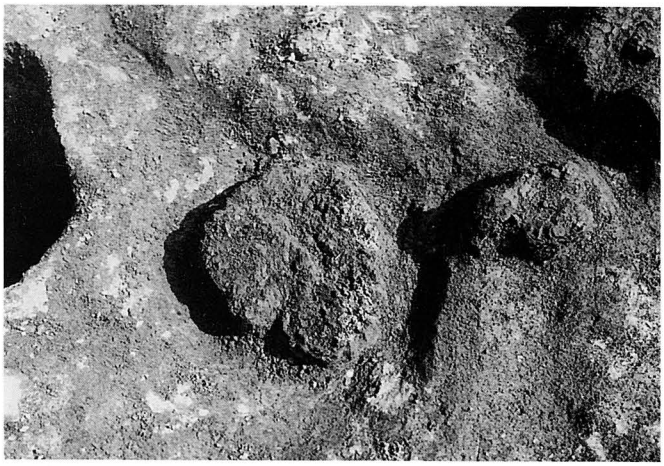


(5) A 2 号住居址遺物出土状態



(1) A 3 号住居址（北から）

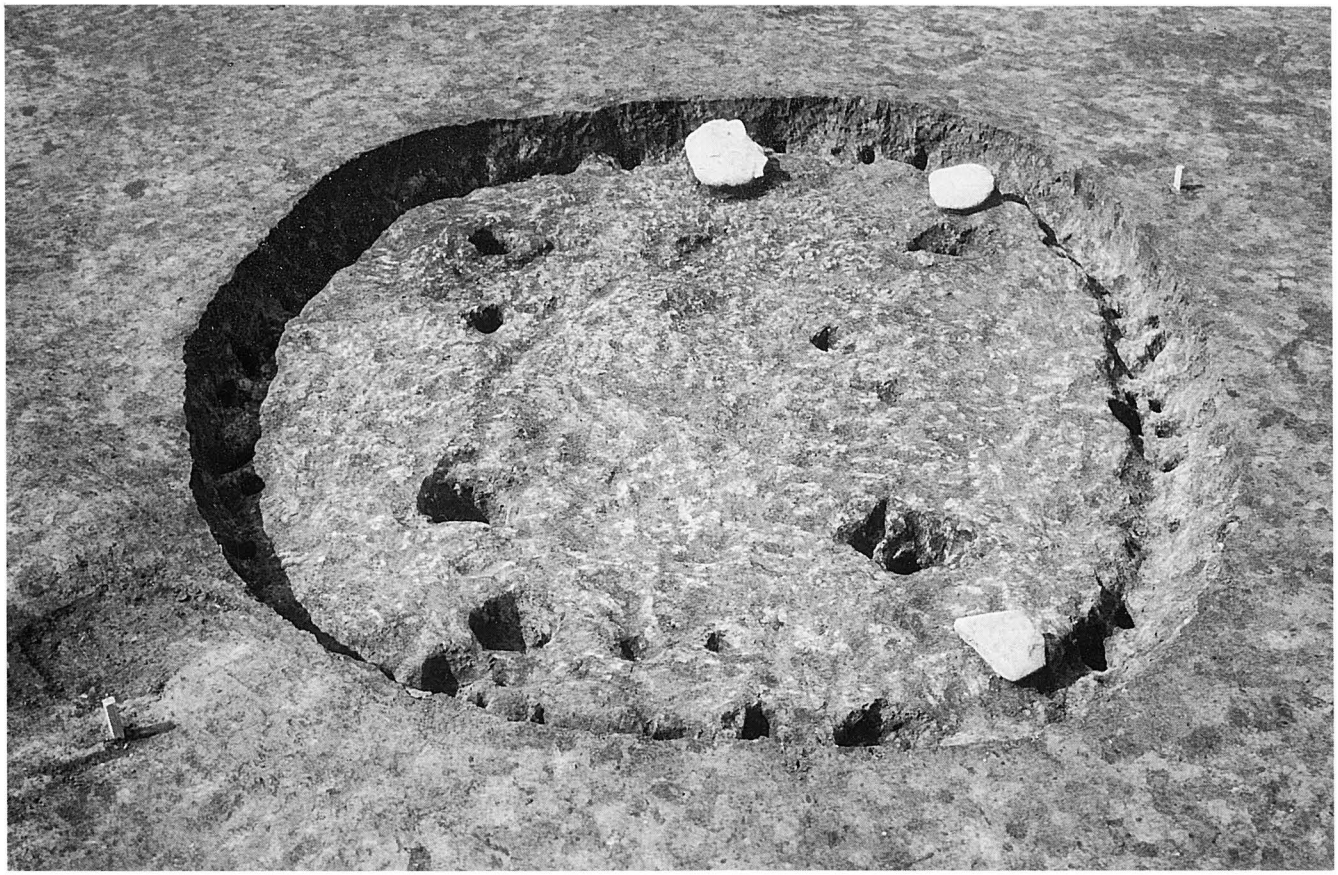
(2) A 3 号住居址遺物出土状態



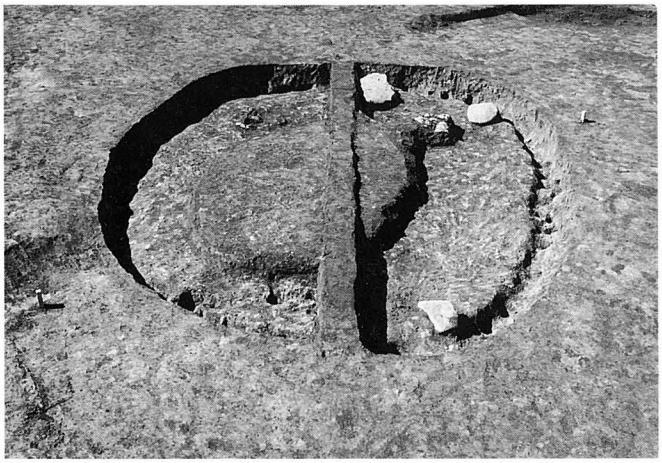
(3) A 3 号住居址炭化柱

(4) A 3 号住居址礫出土状態

(5) A 3 号住居址

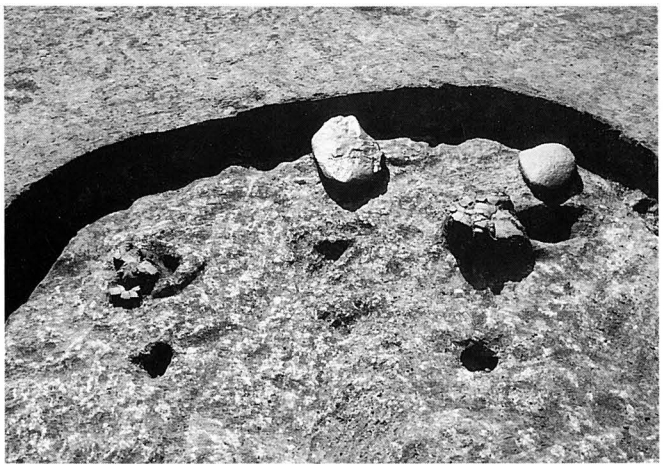


(1) A 4 号住居址（北から）

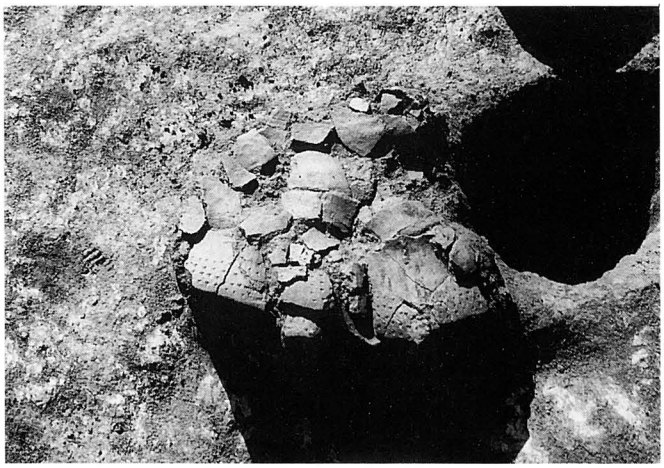


(2) A 4 号住居址投げ込みロームの状態

(3) A 4 号住居址セクション



(4) A 4 号住居址遺物出土状態



(5) A 4 号住居址遺物出土状態

(1) A 5 号住居址

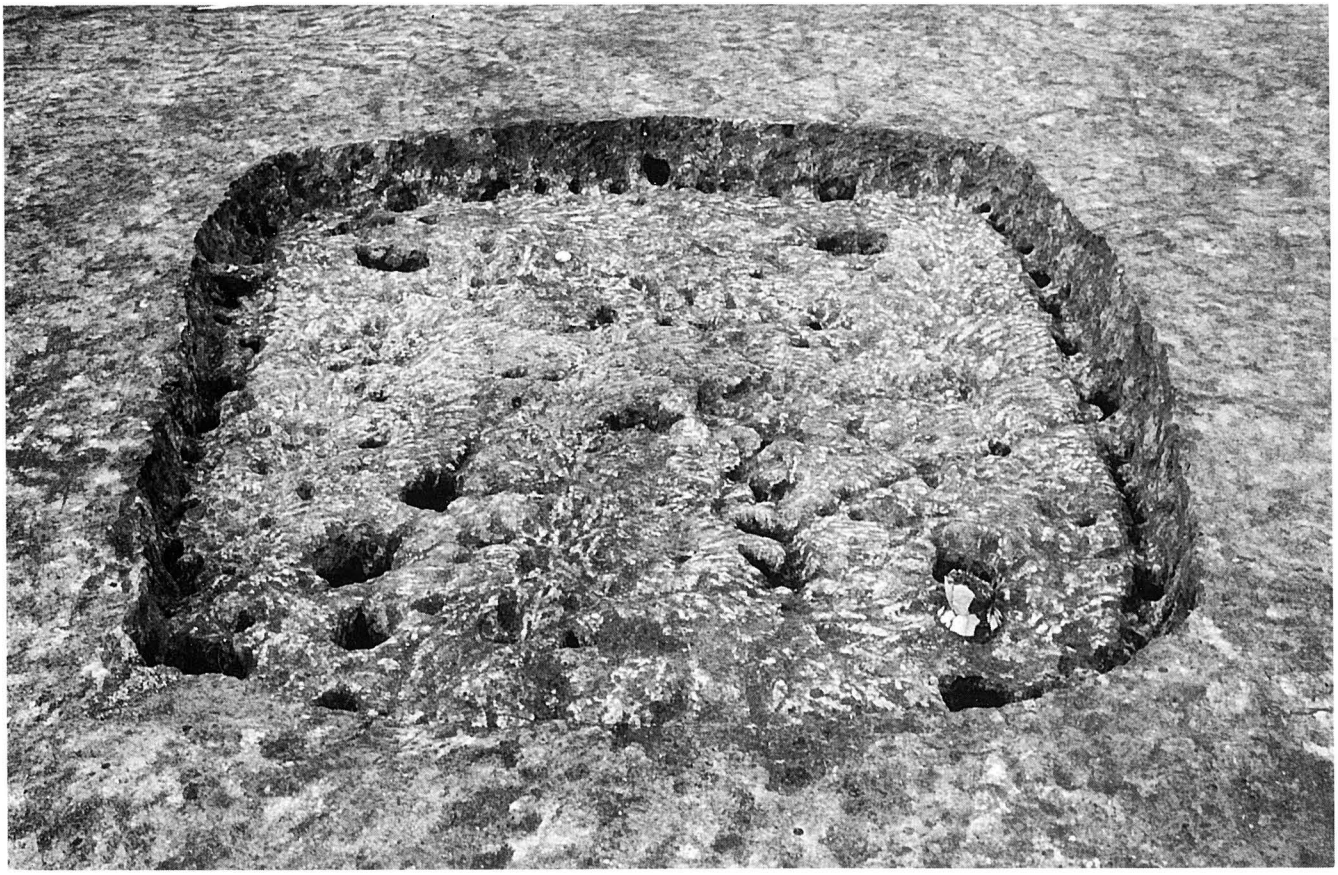
(2) A 5 号住居址投げ込みロームの状態

(3) A 5 号住居址遺物出土状態

(4) A 5 号住居址セクション

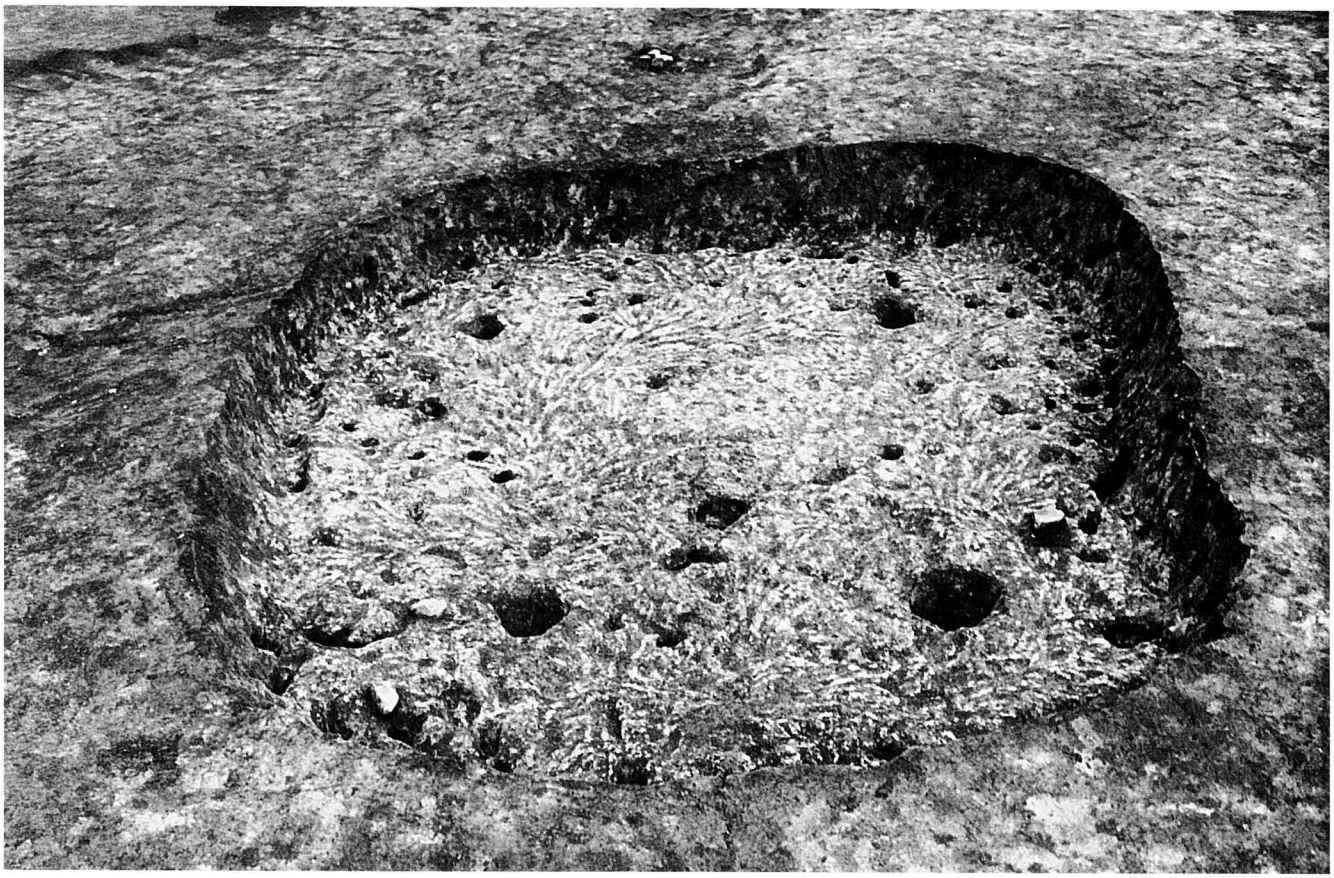
(5) A 5 号住居址セクション（部分）

図版　8

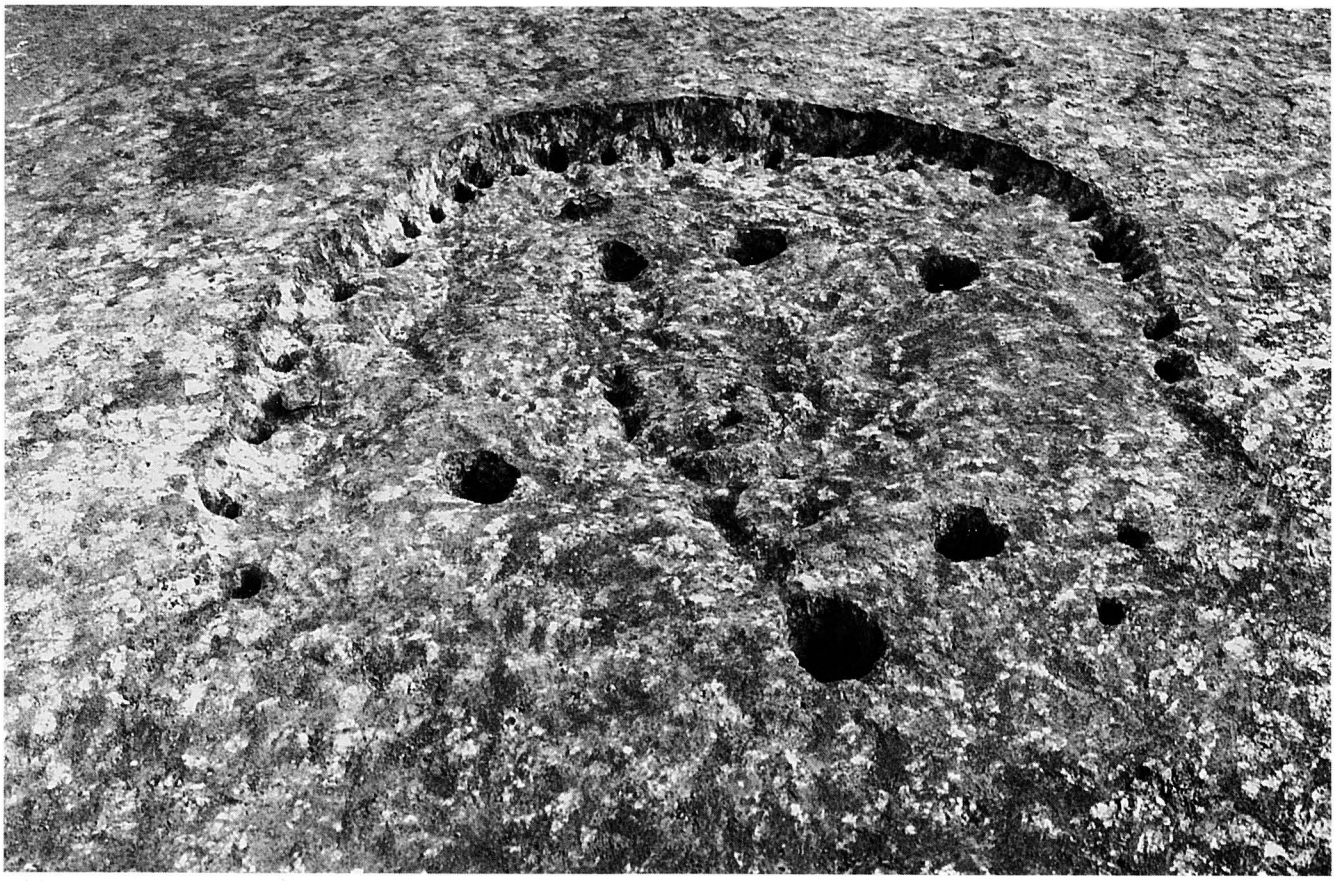


(1) A 6 号住居址（南から）

(2) A 6 号住居址遺物出土状態

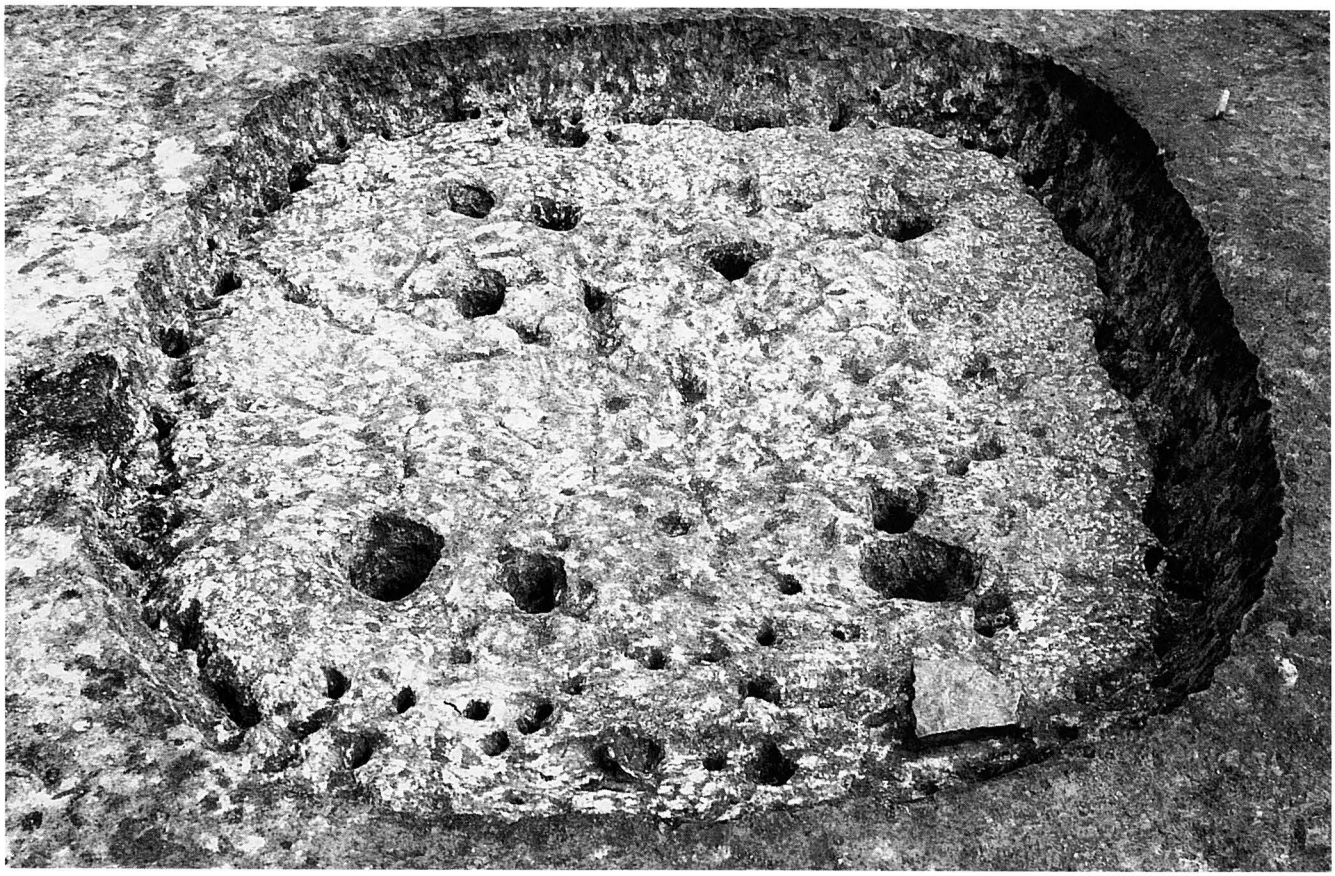


(1) A 7 号住居址（南から）



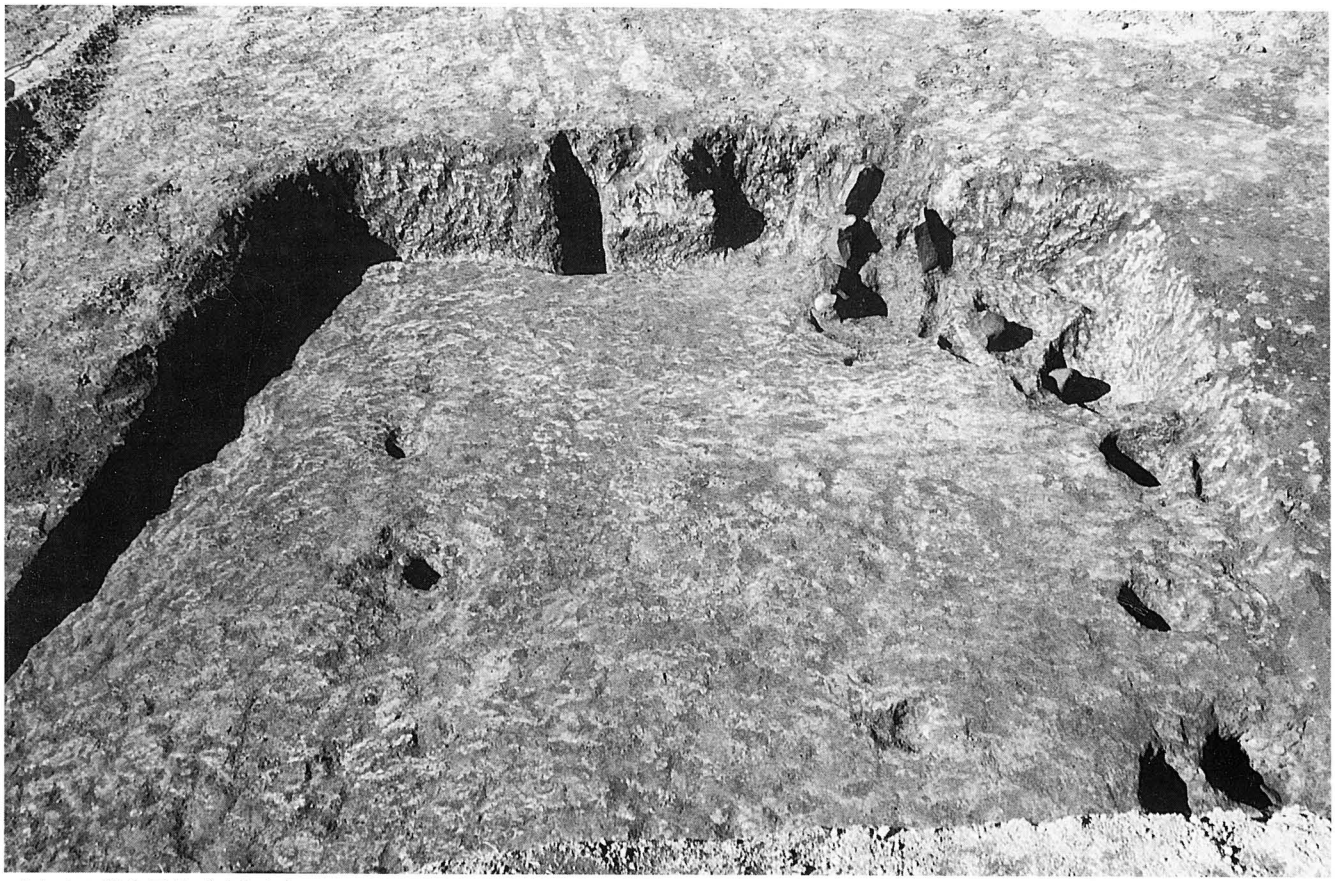
(2) A10号住居址（南西から）

図版　10



(1) A 8 号住居址（南から）

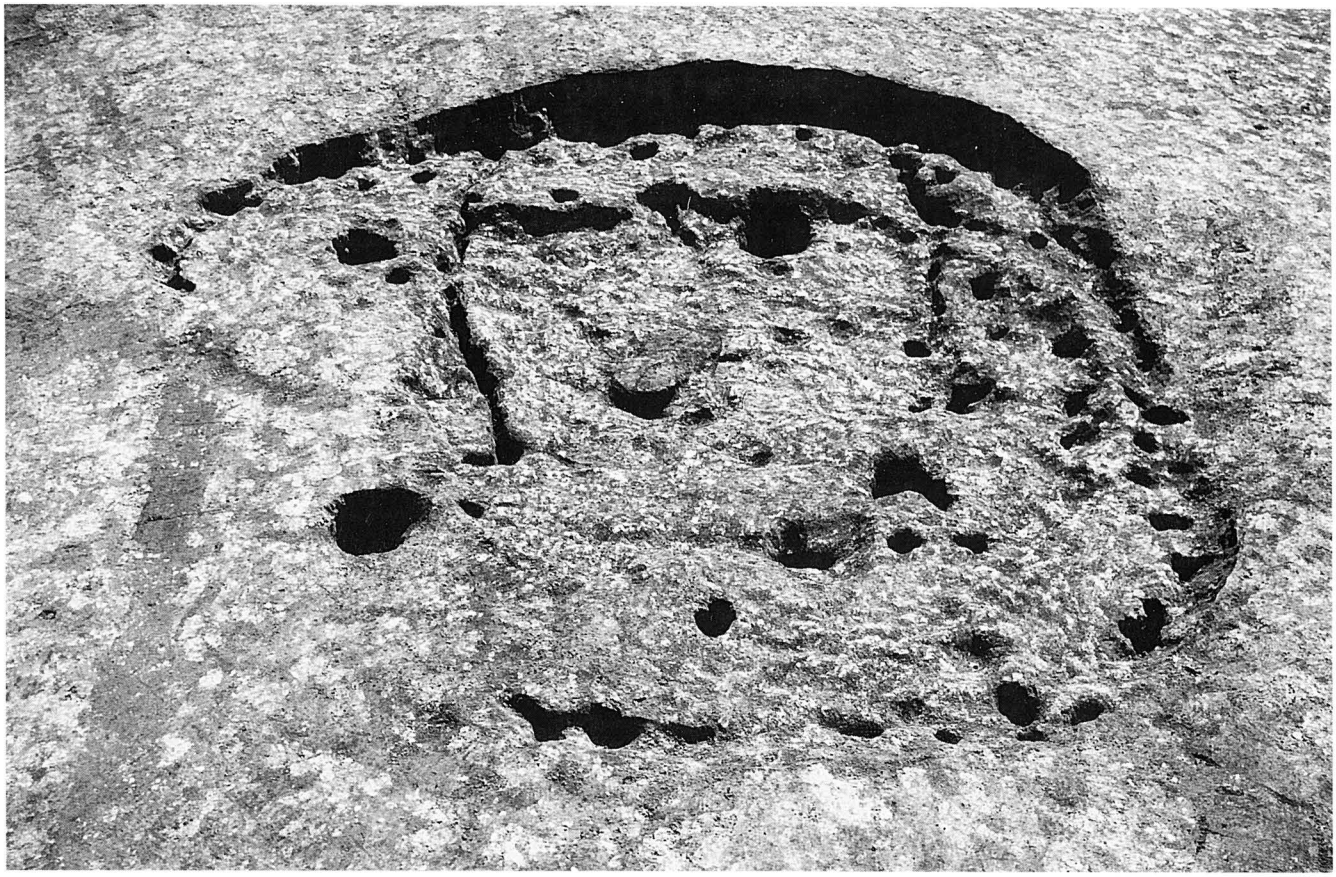
(2) A 8 号住居址両尖匕首出土状態



(1) A 9号住居址（南から）

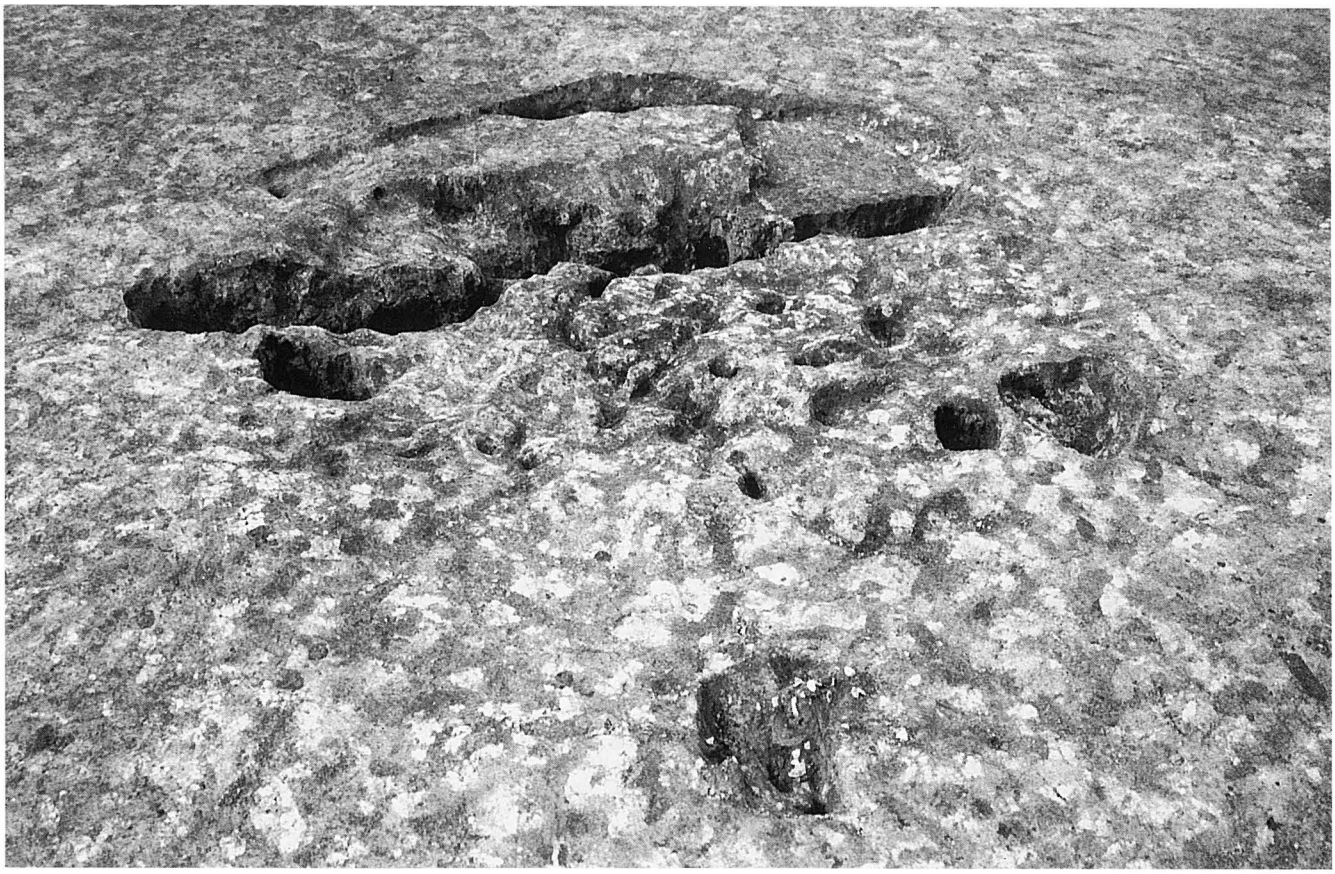
(2) A 9号住居址カマド（南から）

図版　12



(1) A11号住居址

(2) A12号住居址



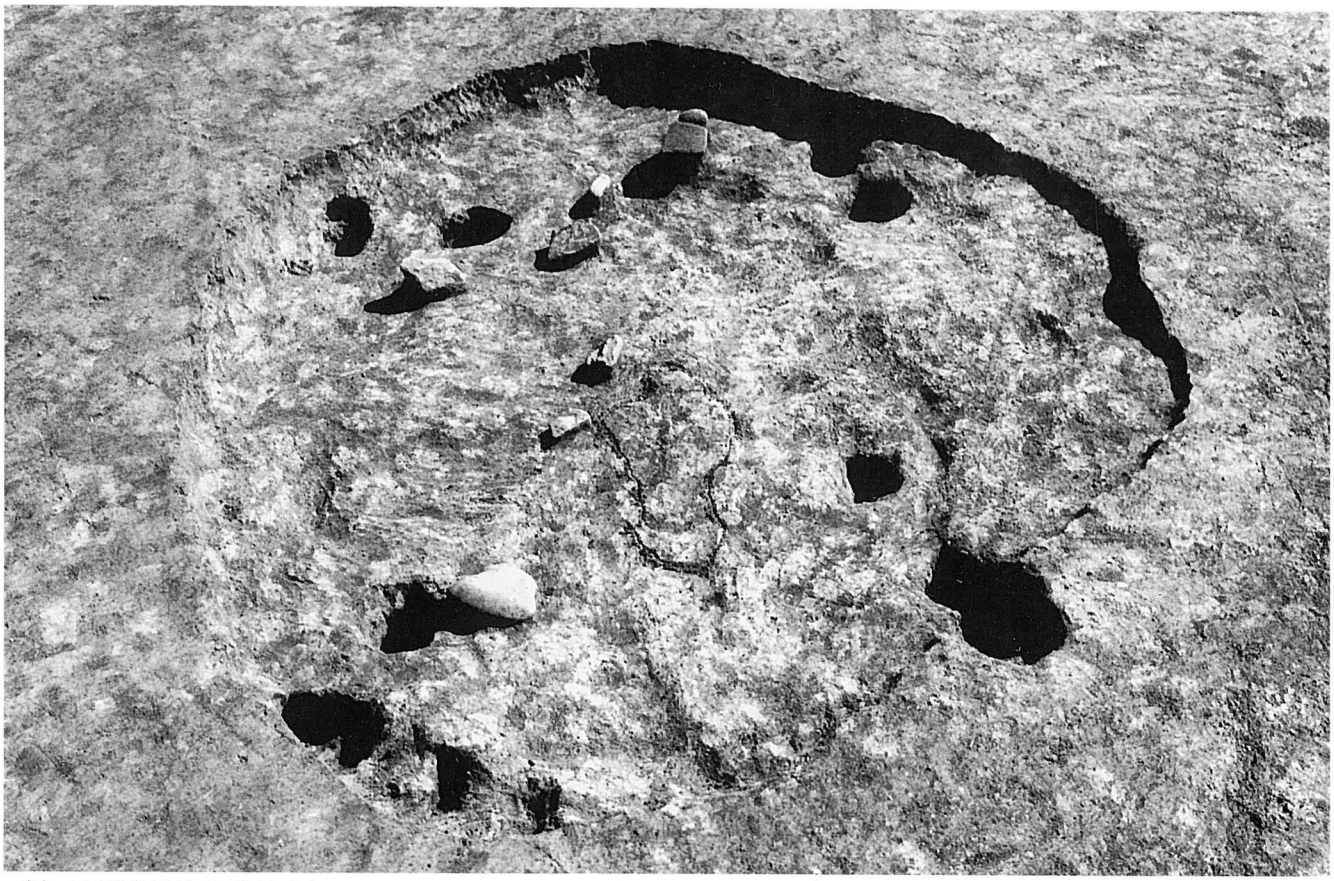
(1) A13号住居址（北から）

(2) A13号住居址黒曜石集中個所

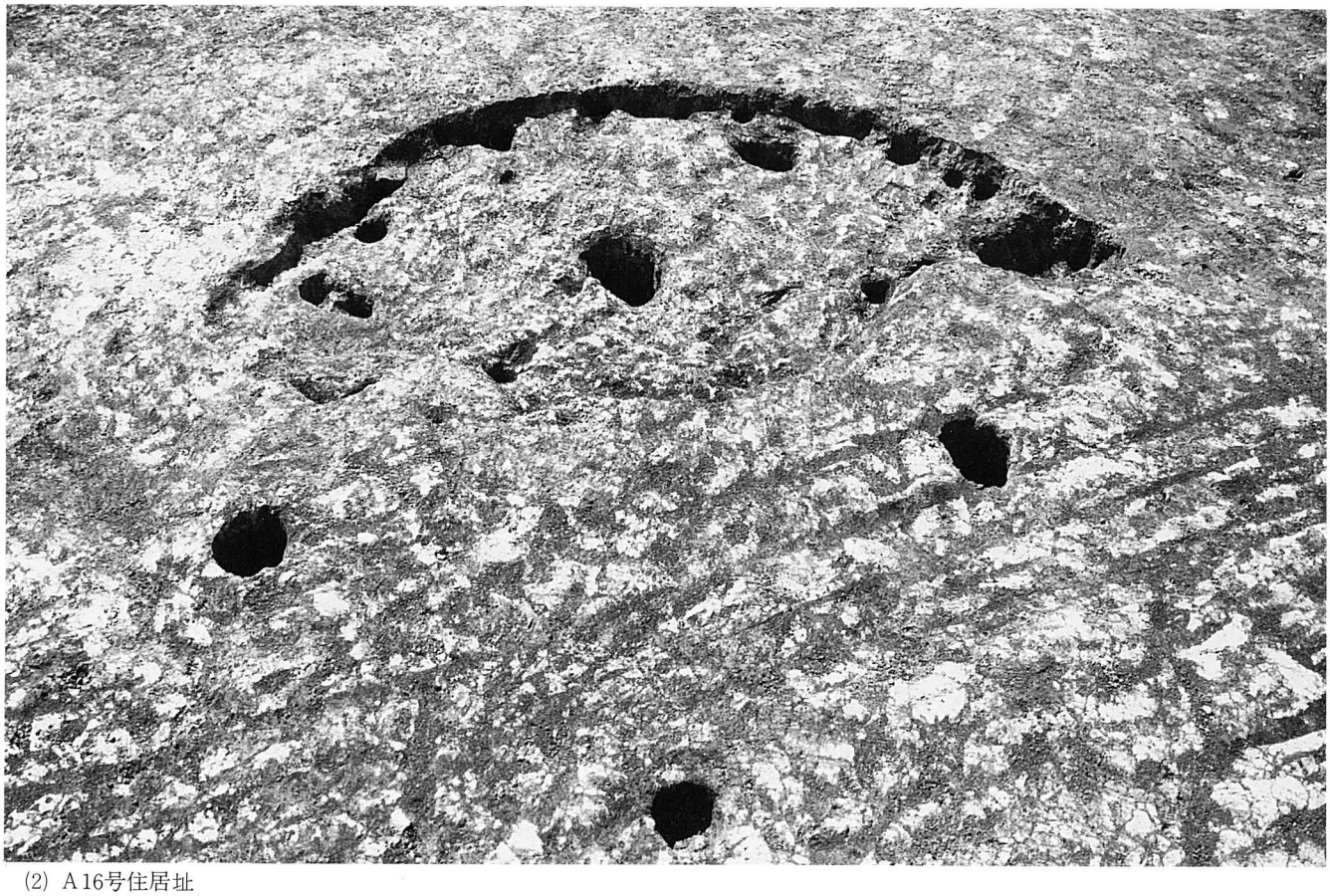
図版　14

(1) A14号住居址（北から）

(2) A14号住居址遺物出土状態

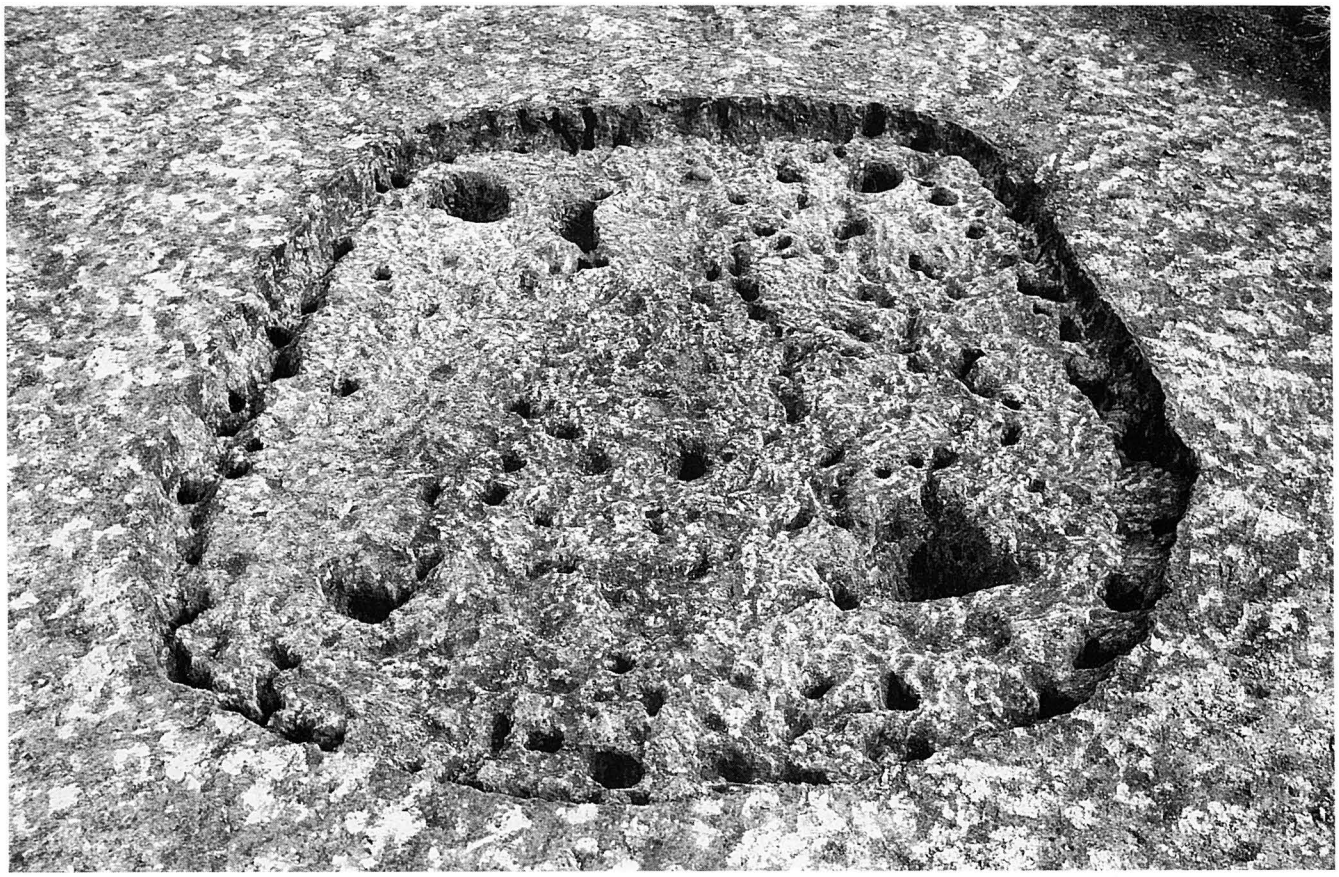


(1) A15号住居址（南西から）



(2) A16号住居址

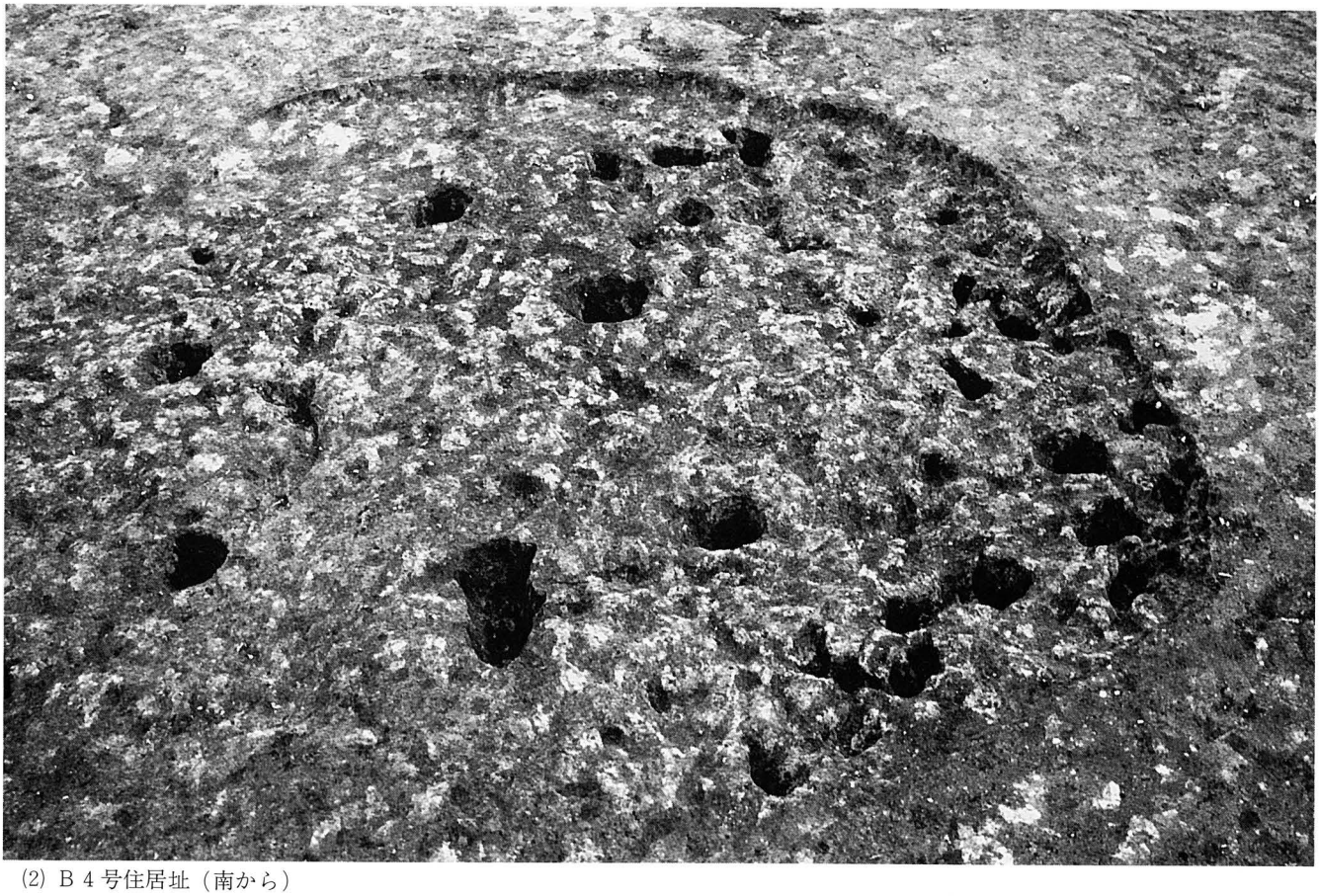
図版　16



(1) Ｂ１号住居址（南から）

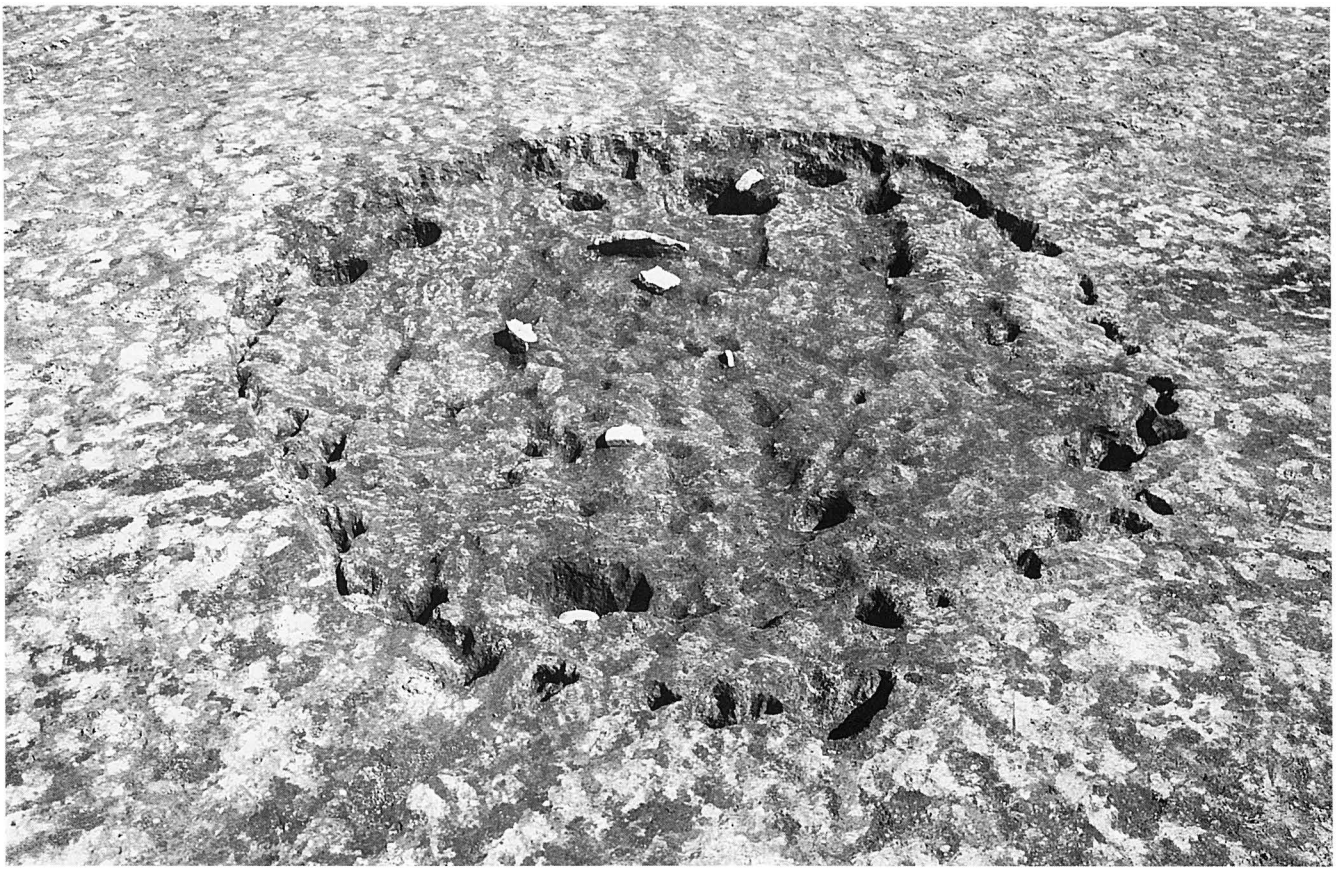
(2) Ｂ２号住居址（南から）

(1) B 3 号住居址（南から）

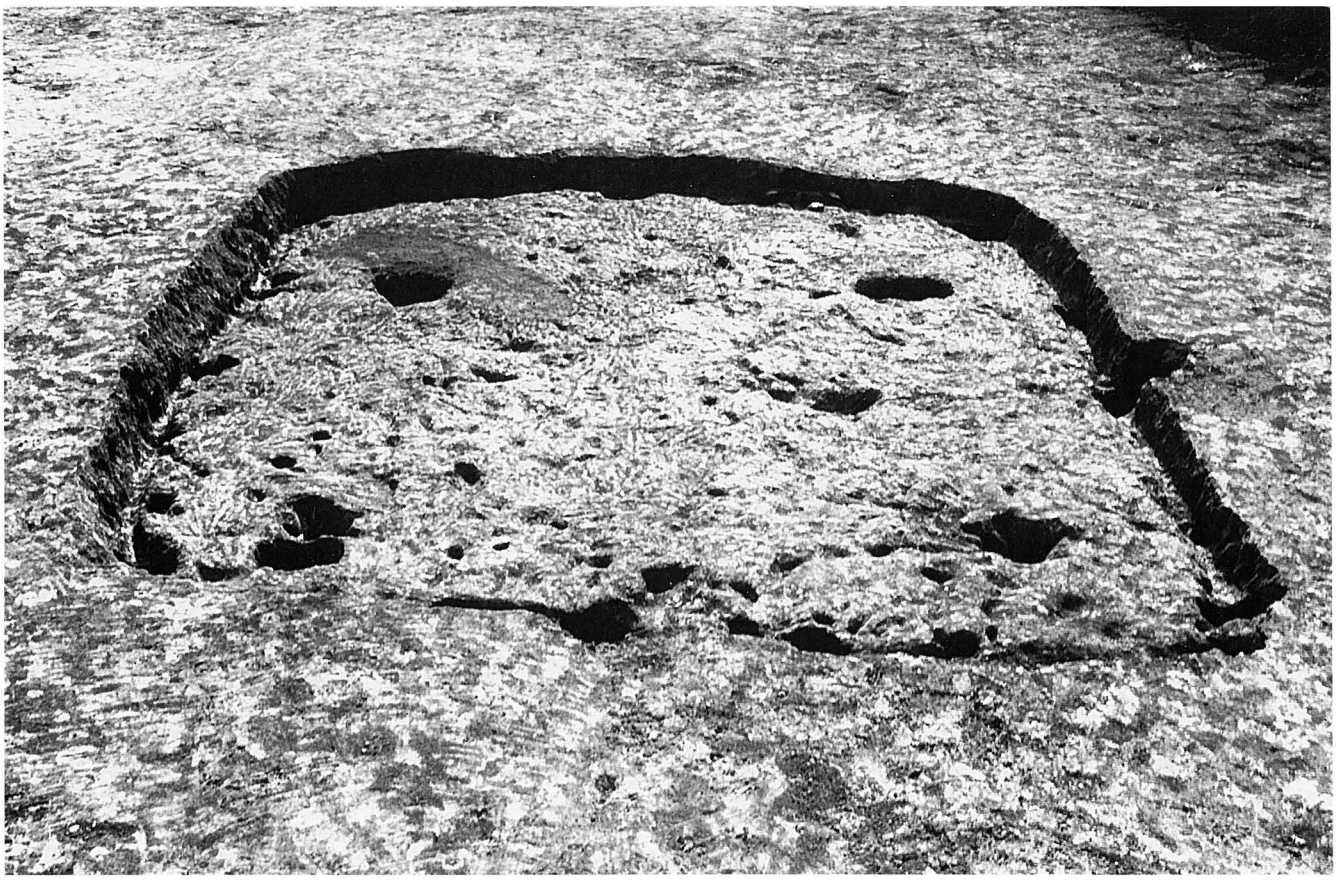


(2) B 4 号住居址（南から）

図版　18



(1) B 5 号住居址（南から）

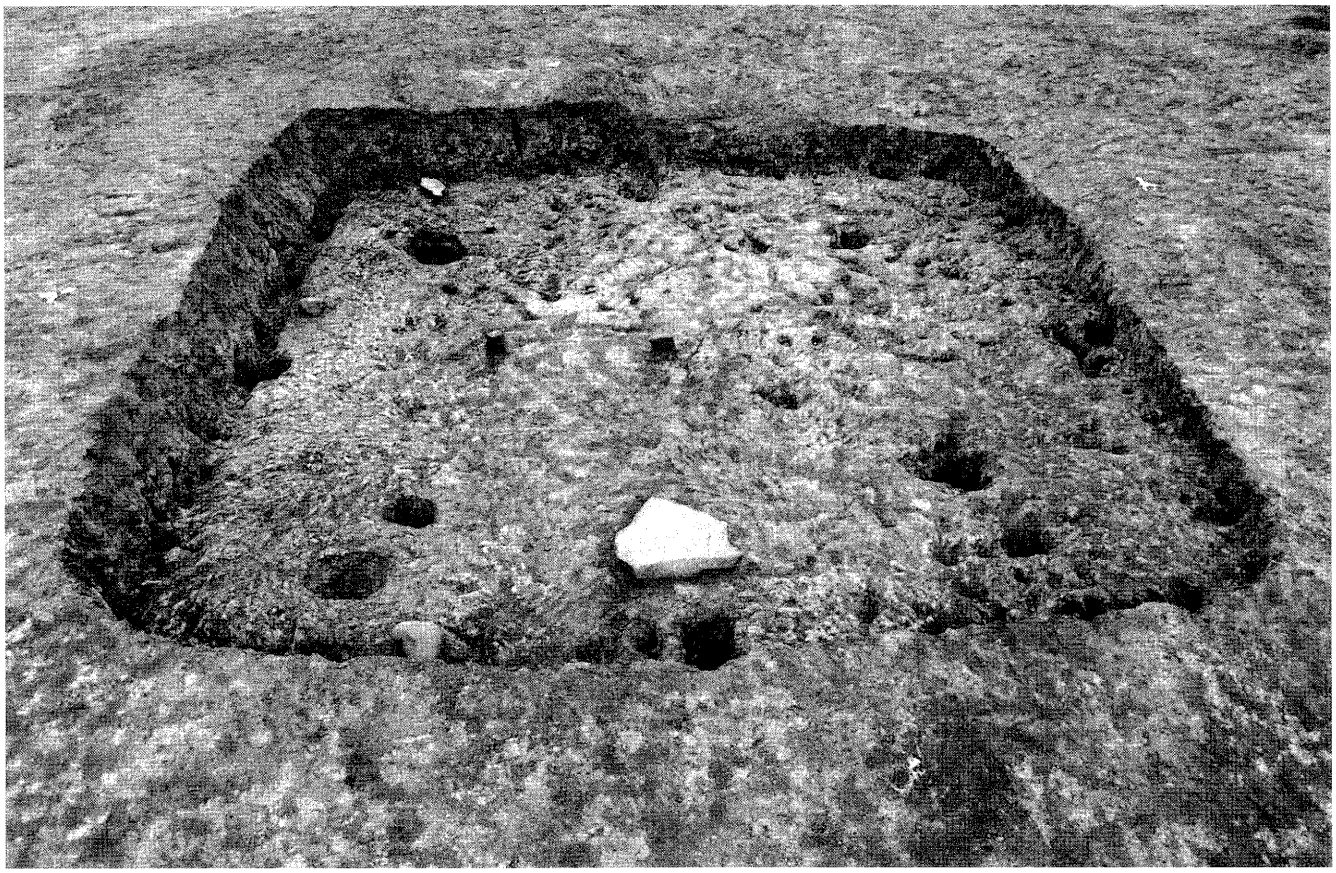


(2) B 6 号住居址（北から）

(1) C 7 号住居址（北から）

(2) C 8 号住居址（北から）

図版　20



(1) C 9 号住居址（北から）

(2) C13号住居址（北から）

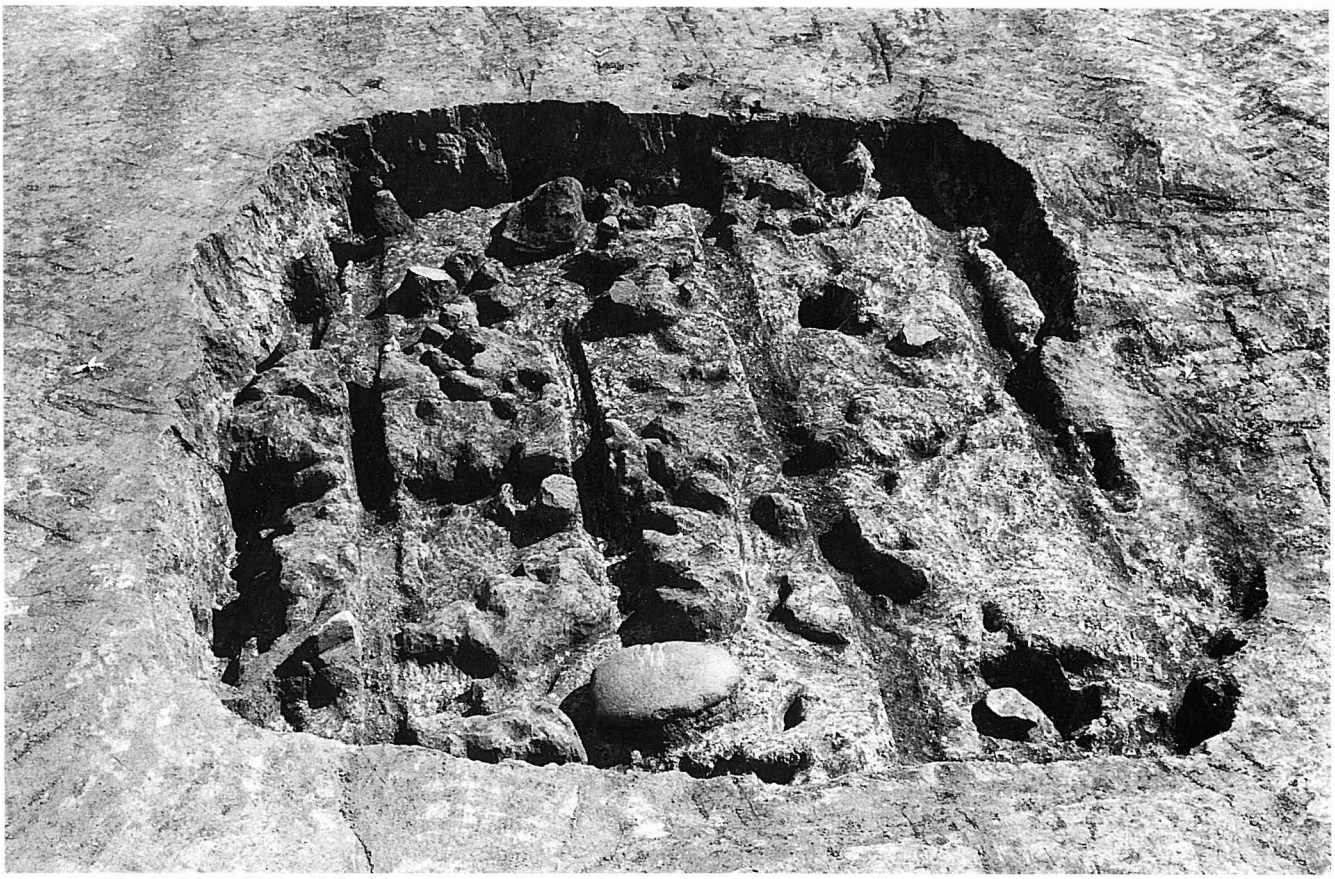
(1) C10号住居址（北から）

(2) C10号住居址遺物出土状態（北から）

図版　22

(1) C11号住居址（北から）

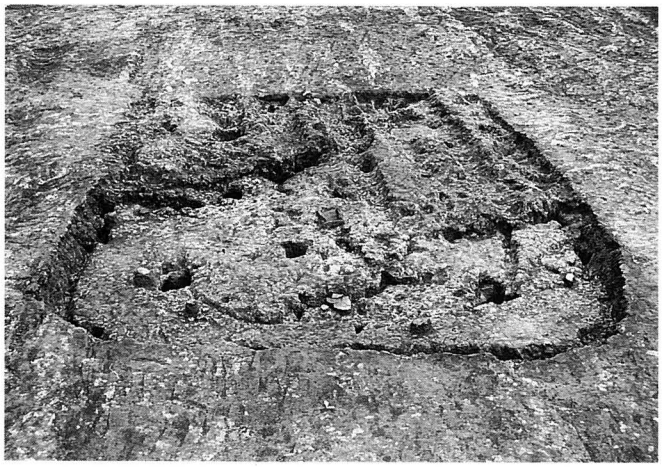
(2) C11号住居址（東から）



(1) C12号住居址焼土掘り下げ前（北から）

(2) C12号住居址（北から）

(1) C14号住居址（南から）



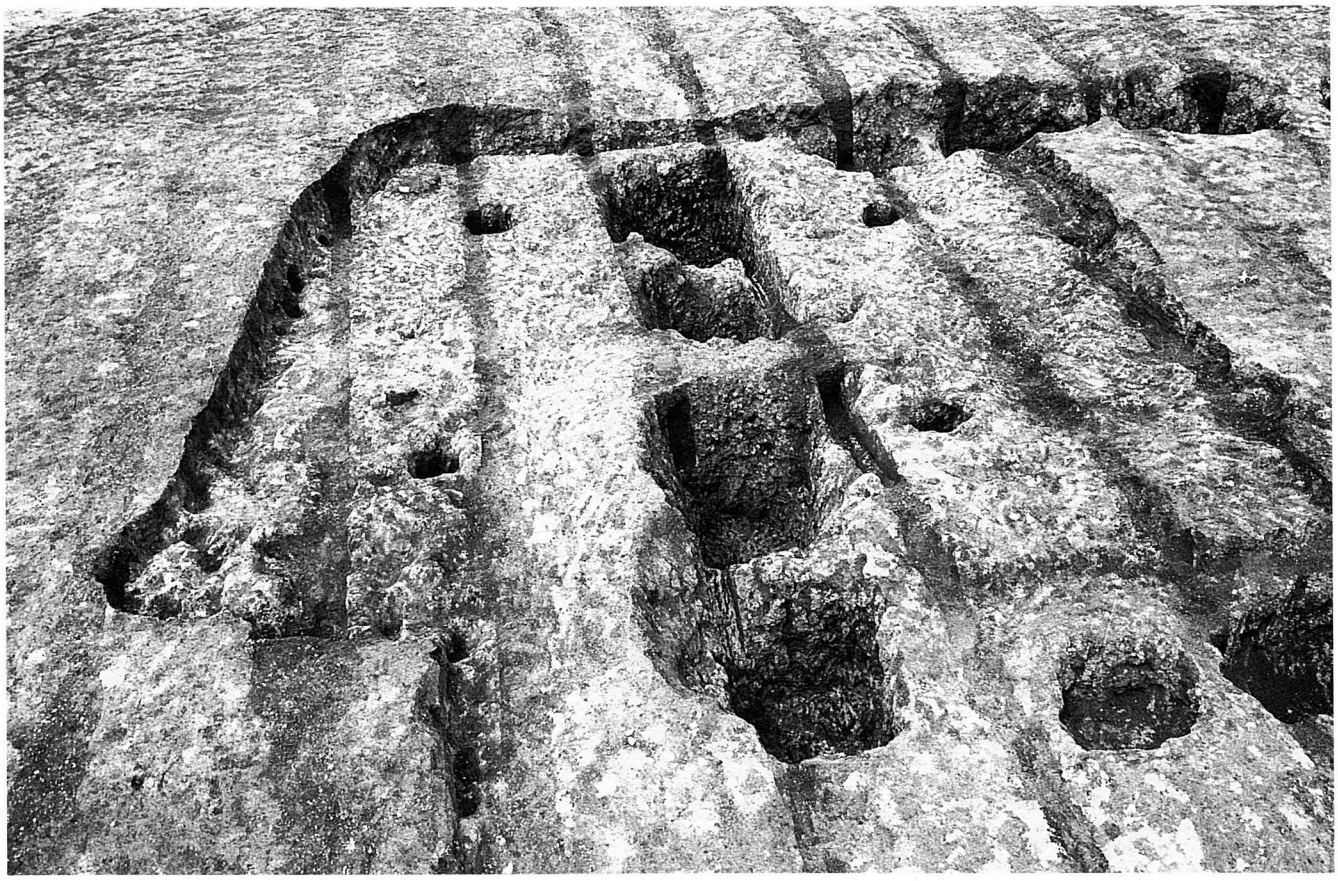
(2) C14号住居址（北から）

(3) C14号住居址遺物出土状態（北から）

(4) C14号住居址部分（東から）

(5) C14号住居址炉

(1) C15号住居址（南から）



(2) C16号住居址（南から）

図版　26

(1) C17号住居址（南から）

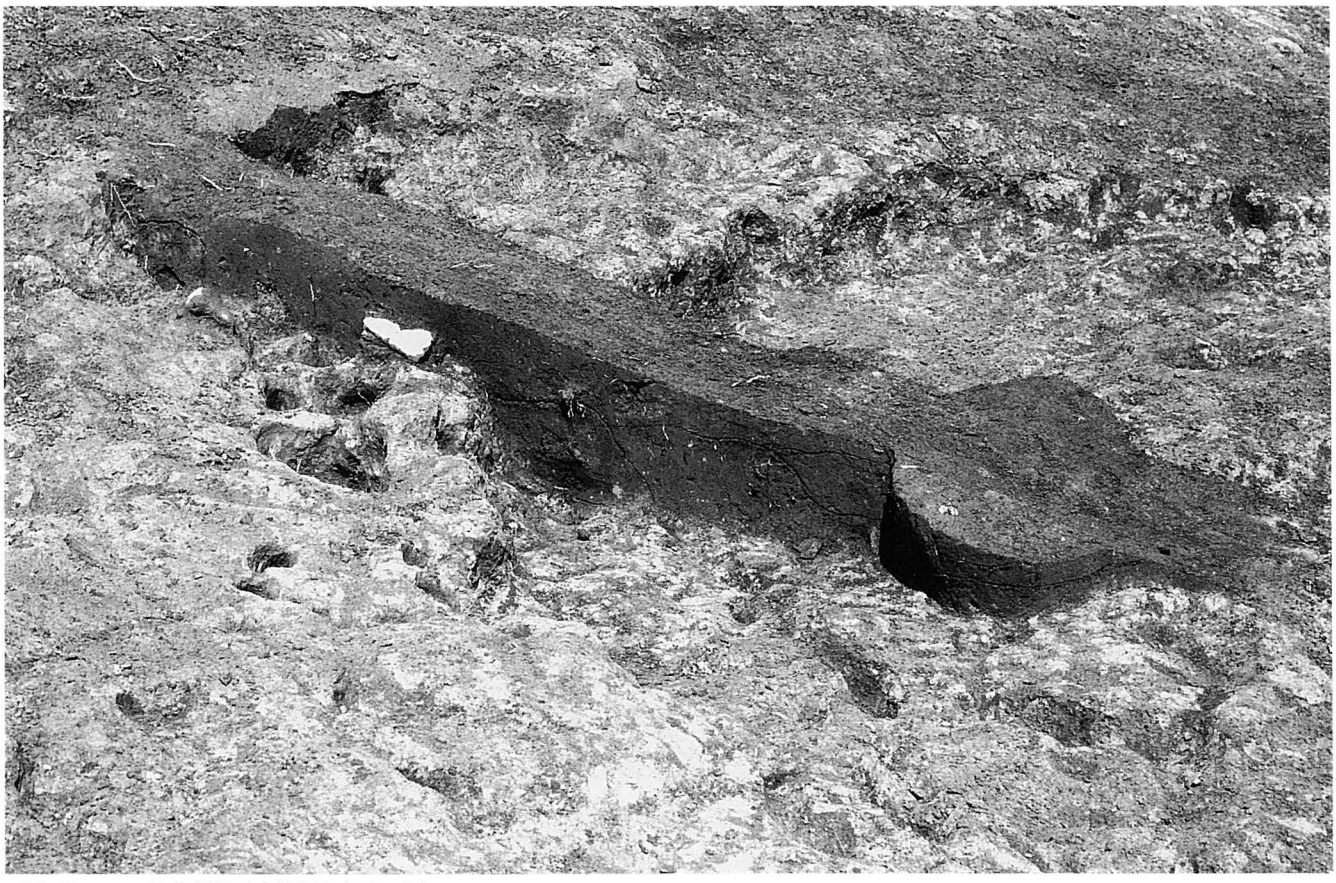
(1) C19・20号住居址（南から）

(2) C19・20号住居址土層断面（西から）

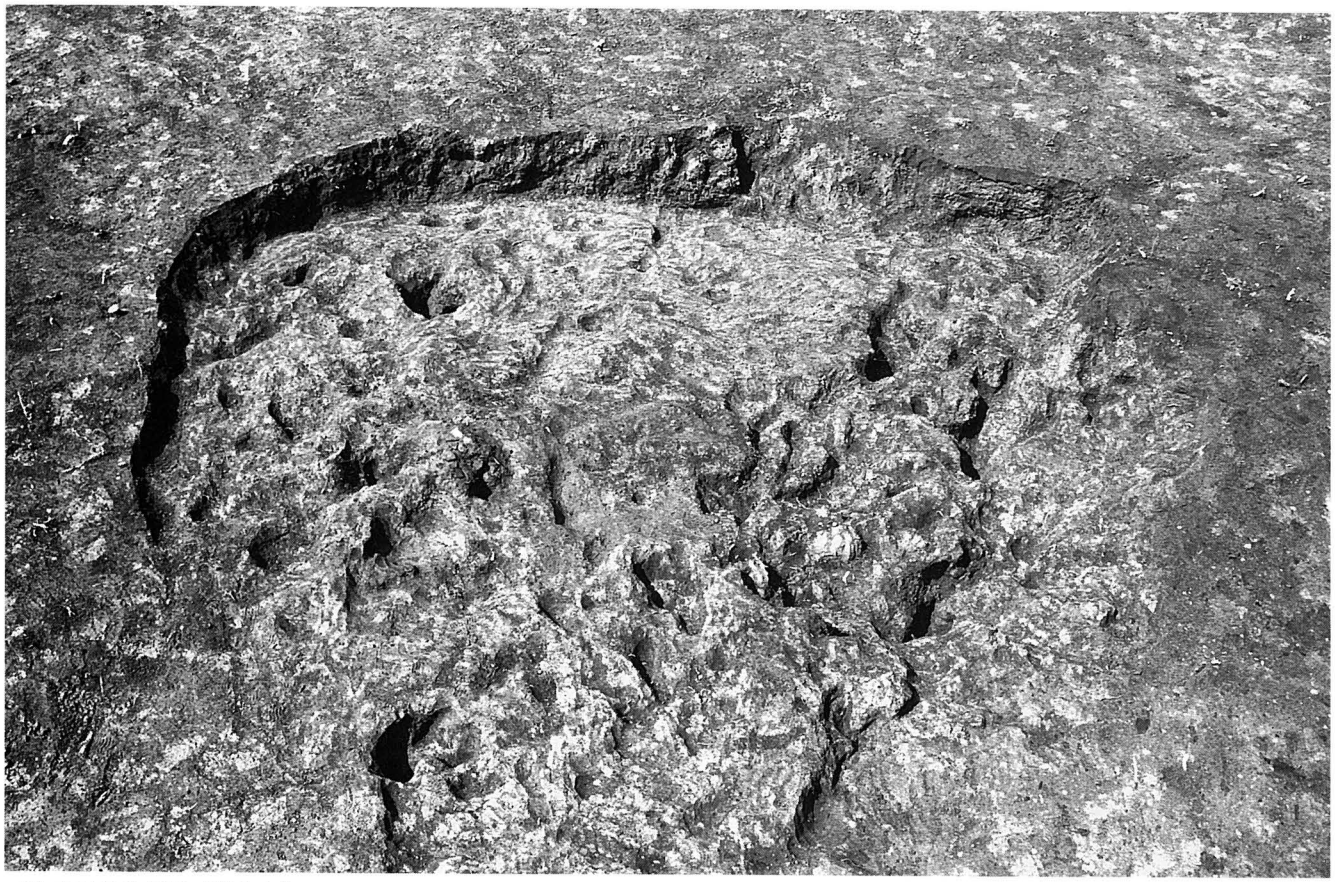
(1) C21号住居址（南から）

(2) C21号住居址土層断面（西から）

(1) C22・23号住居址（南から）

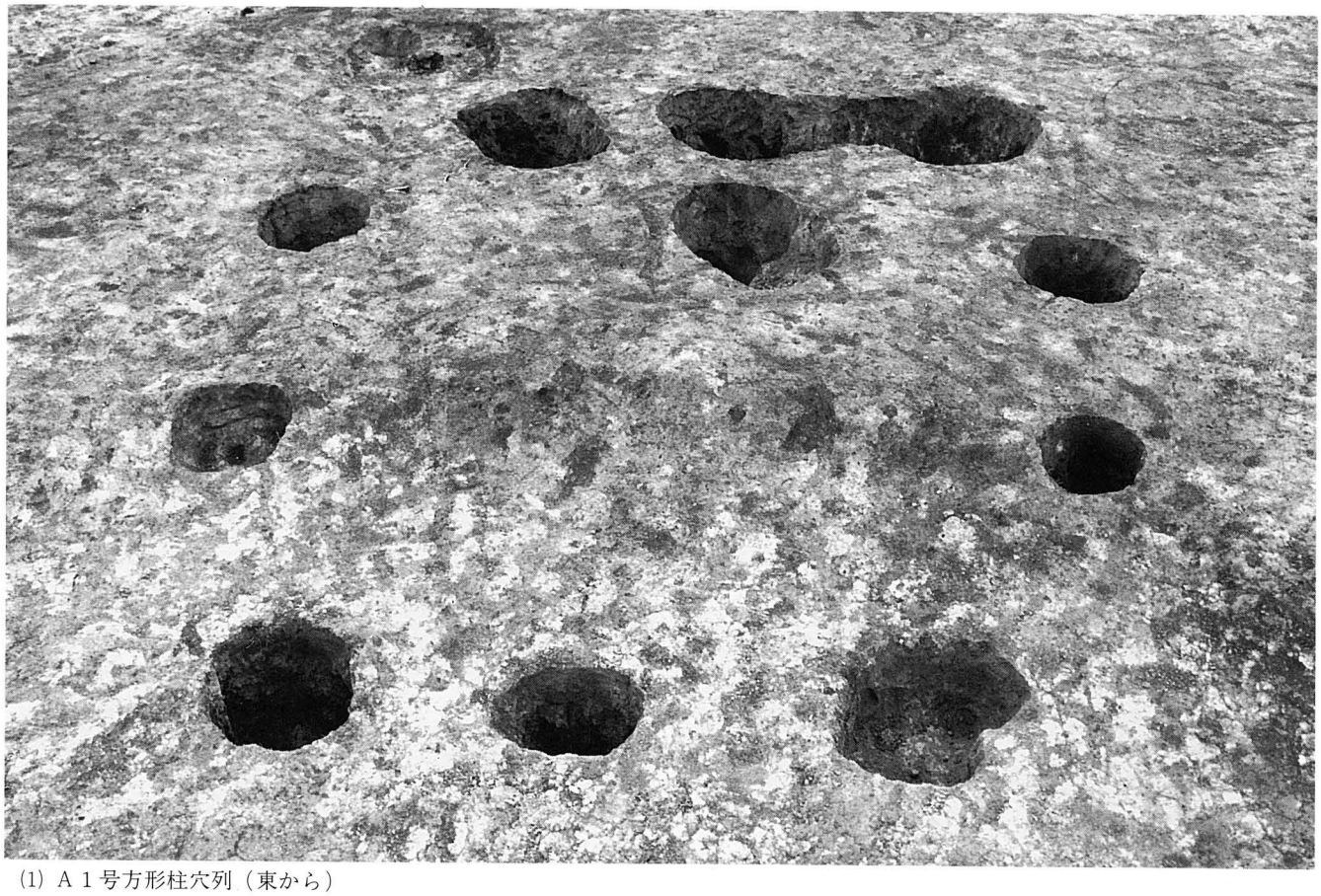


(2) C22・23号住居址土層断面（西から）



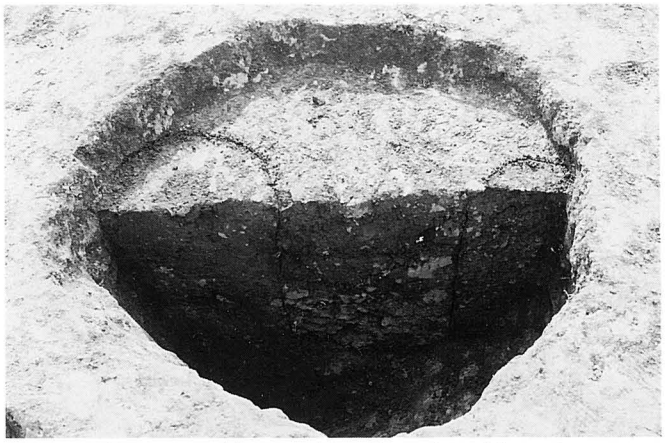
(1) C24号住居址（南から）

(2) C25号住居址（南から）

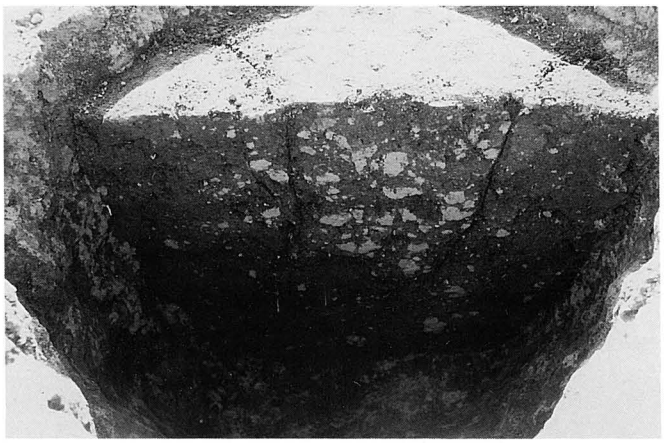


(1) Ａ１号方形柱穴列（東から）

(2) Ｂ１号方形柱穴列（西から）



(1) Ｂ１号方形柱穴列ａピット断面柱痕確認（北から）

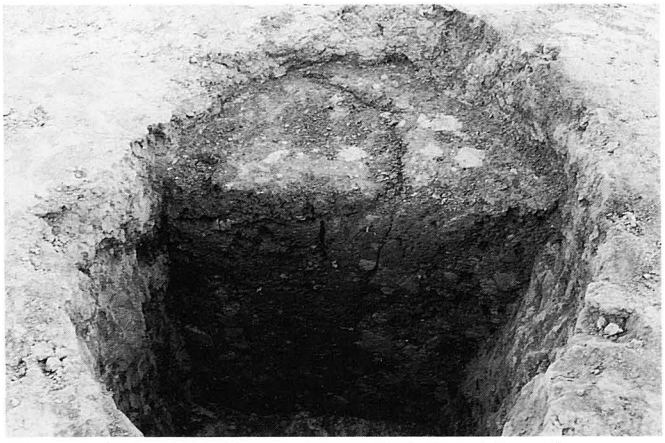


(2) Ｂ１号方形柱穴列ｂピット断面柱痕確認（西から）

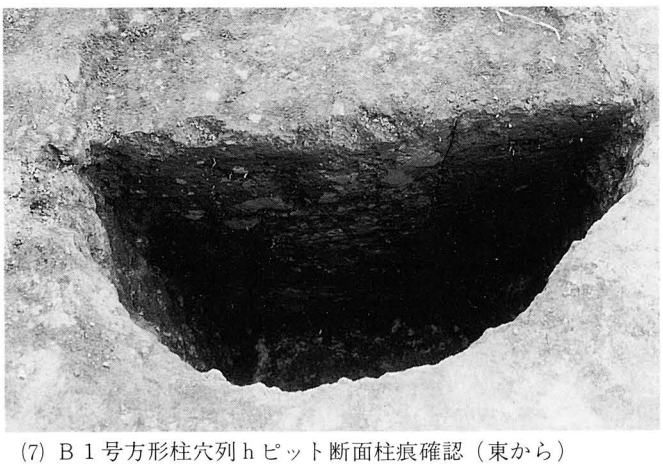
(3) Ｂ１号方形柱穴列ｃピット断面柱痕確認（東から）

(4) Ｂ１号方形柱穴列ｅピット平面柱痕確認（東から）

(5) Ｂ１号方形柱穴列ｅピット断面柱痕確認（東から）

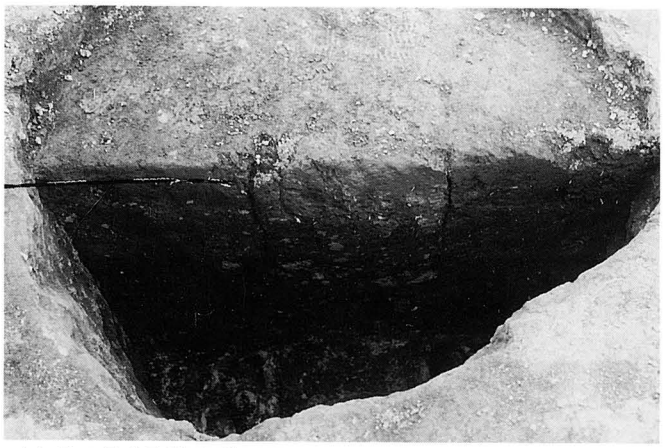


(6) Ｂ１号方形柱穴列ｇピット断面柱痕確認（南から）

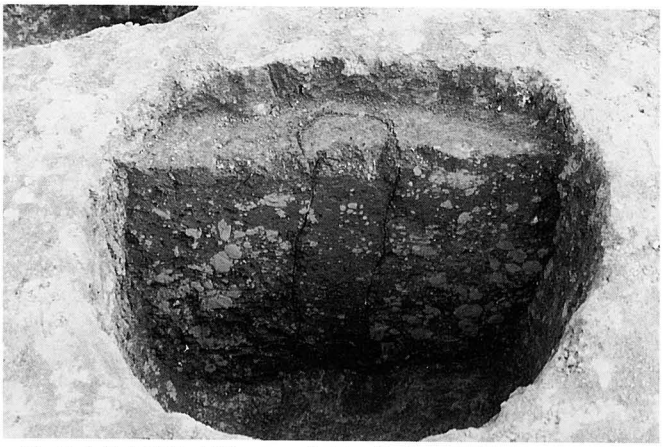


(7) Ｂ１号方形柱穴列ｈピット断面柱痕確認（東から）

(8) Ｂ１号方形柱穴列ｈピット断面柱痕確認（西から）



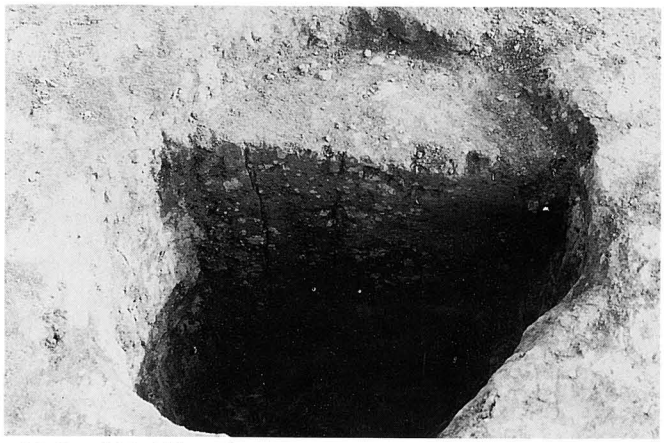
(1) Ｂ１号方形柱穴列ｉピット断面柱痕確認（東から）



(2) Ｂ１号方形柱穴列ｉピット断面柱痕確認（西から）

(3) Ｂ１号方形柱穴列ｉ・ｊ（前）ピット断面柱痕確認（東から）

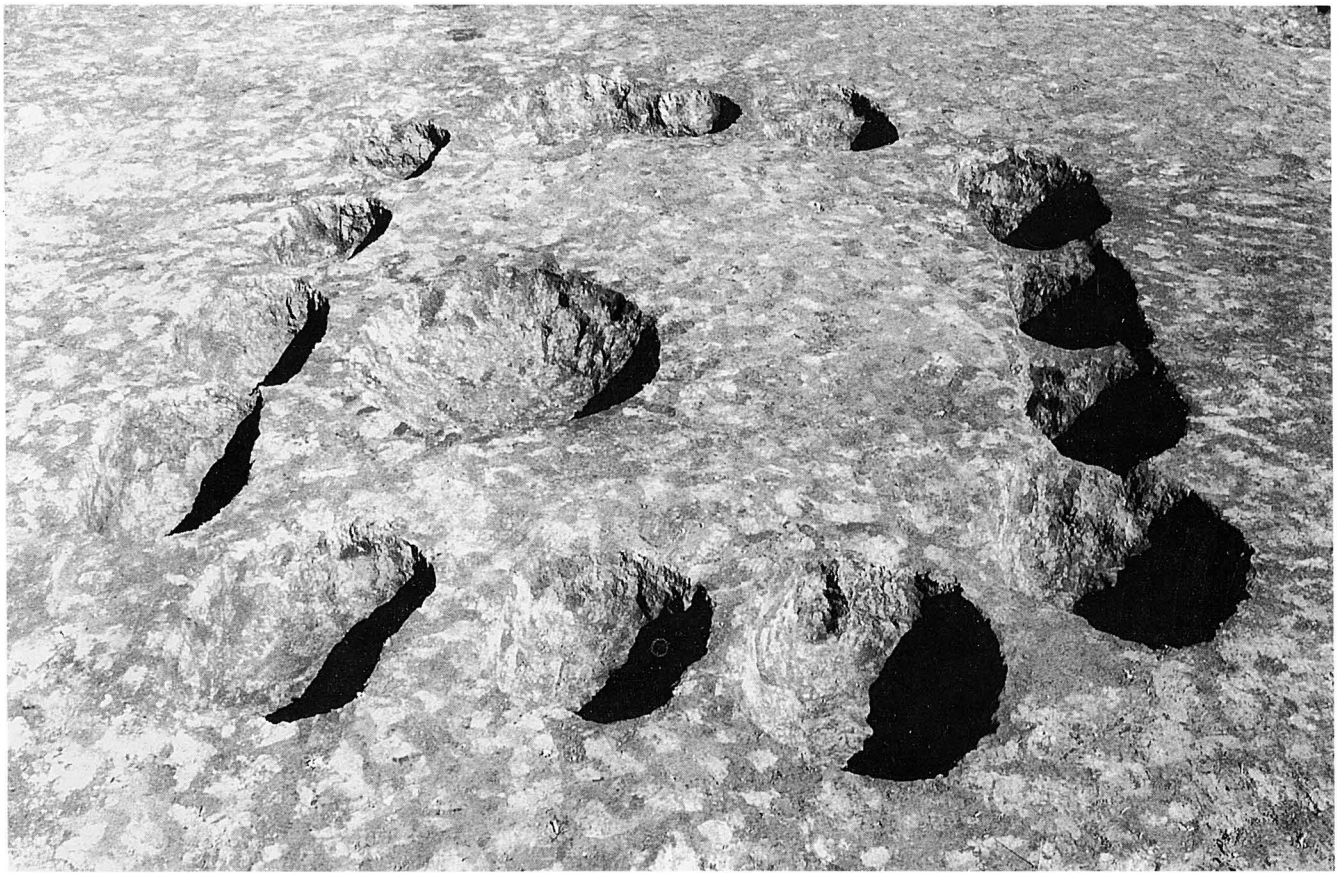
(4) Ｂ１号方形柱穴列ｊ②ピット断面柱痕確認（西から）



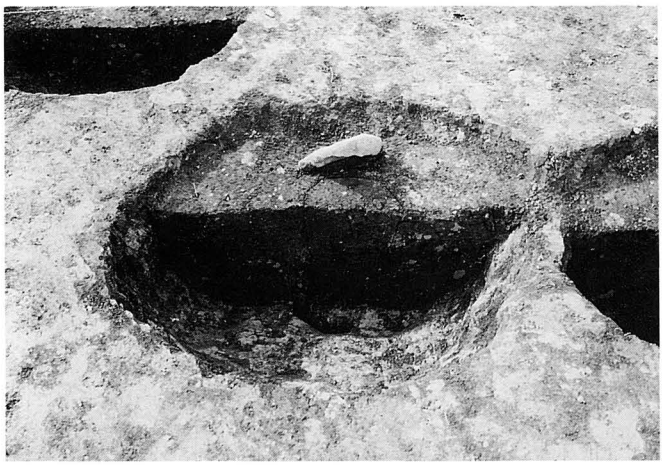
(5) Ｂ１号方形柱穴列ｋピット断面柱痕確認（西から）

(6) Ｂ１号方形柱穴列ｎ・ｍ・ｌピット断面柱痕確認（西から）

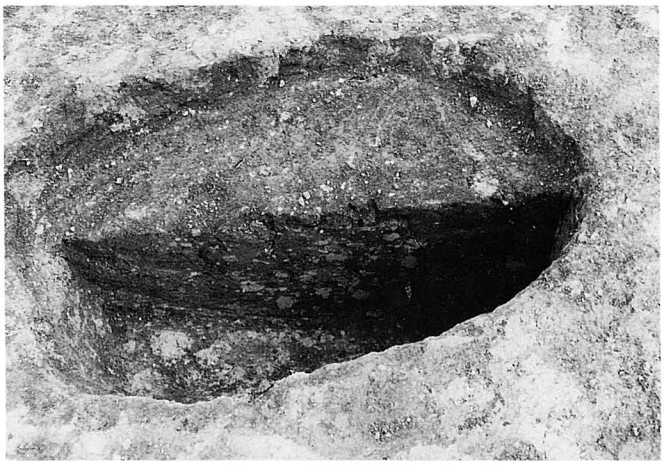
(7) Ｂ１号方形柱穴列ｎ・ｍ・ｌピット断面柱痕確認（西から）



(1) B 2 号方形柱穴列（南から）

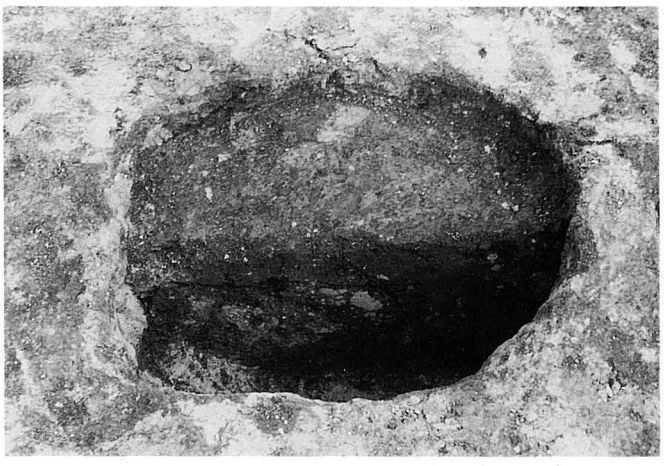


(2) B 2 号方形柱穴列 g ピット断面柱痕確認（東から）



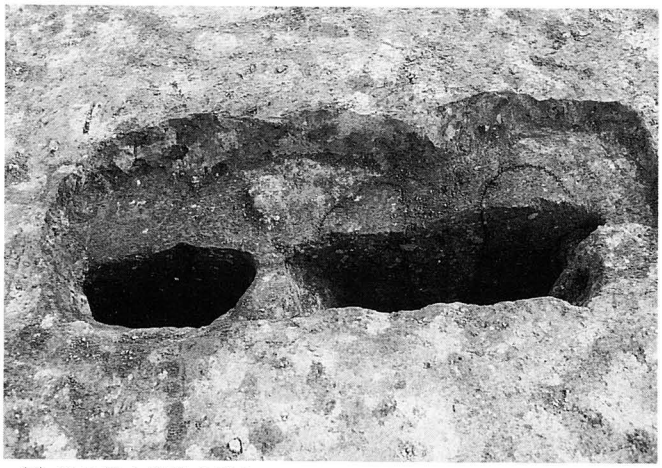
(3) B 2 号方形柱穴列 k ピット断面柱痕確認（西から）

(4) B 2 号方形柱穴列 l ピット断面柱痕確認（西から）



(5) B 2 号方形柱穴列 m ピット断面柱痕確認（西から）

(1) B 3 号方形柱穴列（南から）

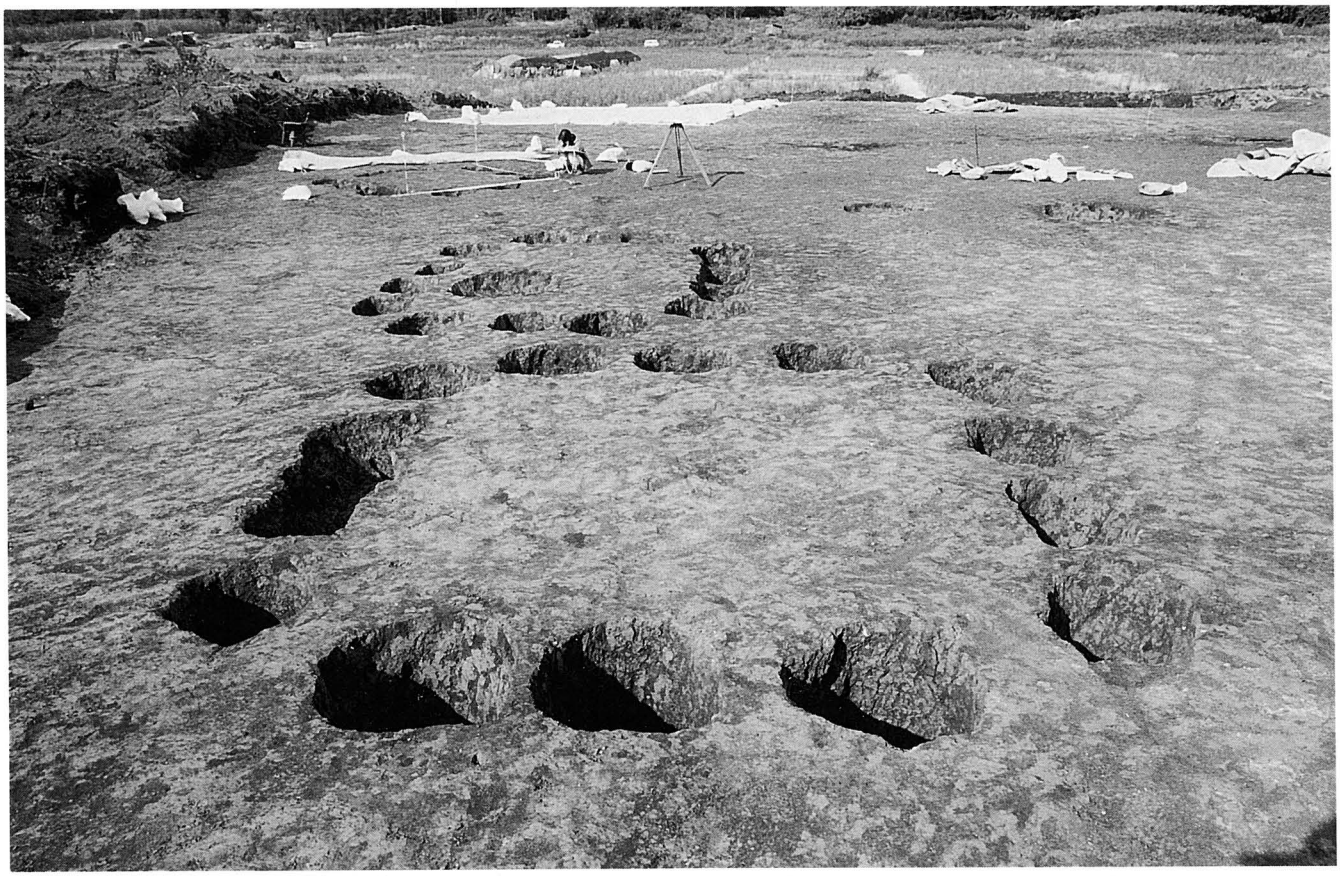


(2) B 3 号方形柱穴列 b ・ a ピット断面柱痕確認（北から）

(3) B 3 号方形柱穴列 a ピット断面柱痕確認（北から）

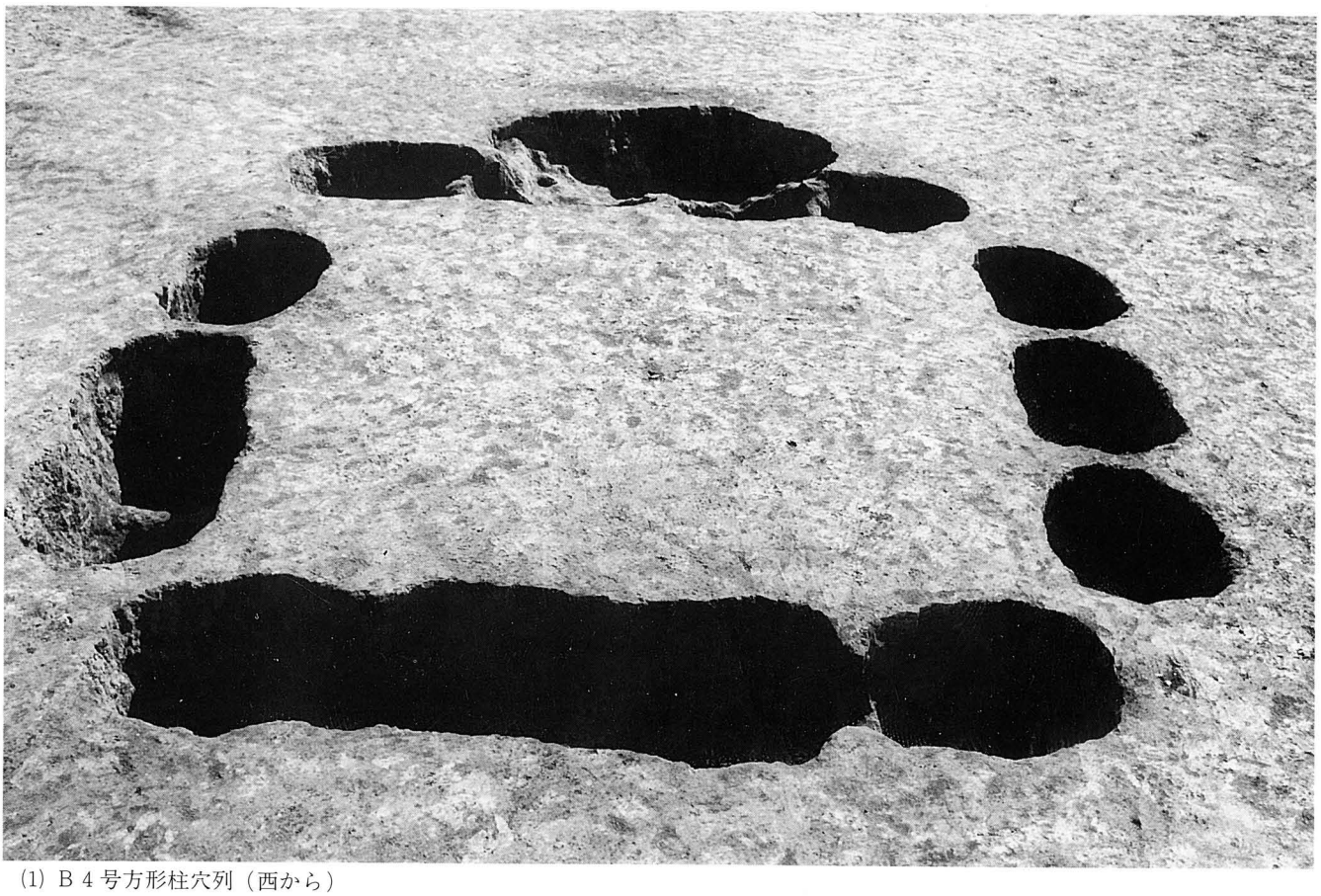
(4) B 3 号方形柱穴列 b ピット断面柱痕確認（北から）

(5) B 3 号方形柱穴列 i ピット断面柱痕確認（北から）



(1) Ｂ１～３号方形柱穴列（南から）

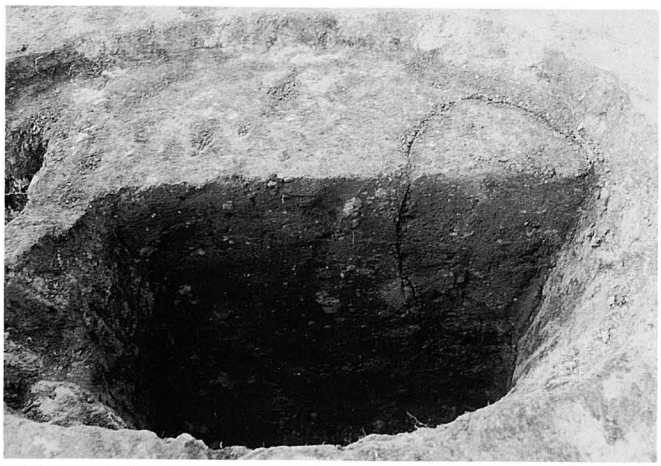
(2) 手前からＢ３・２・１方形柱穴列（北西から）



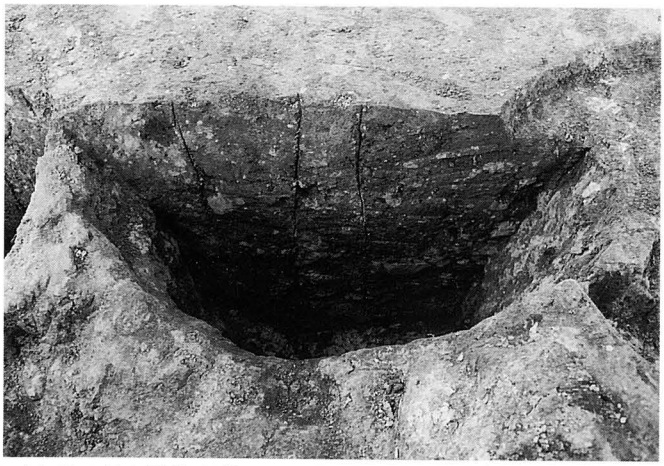
(1) B 4 号方形柱穴列（西から）

(2) B 4 号方形柱穴列ピット a(左)b(右) 断面柱痕確認（南から）

(3) B 4 号方形柱穴列 c ピット断面柱痕確認（南から）



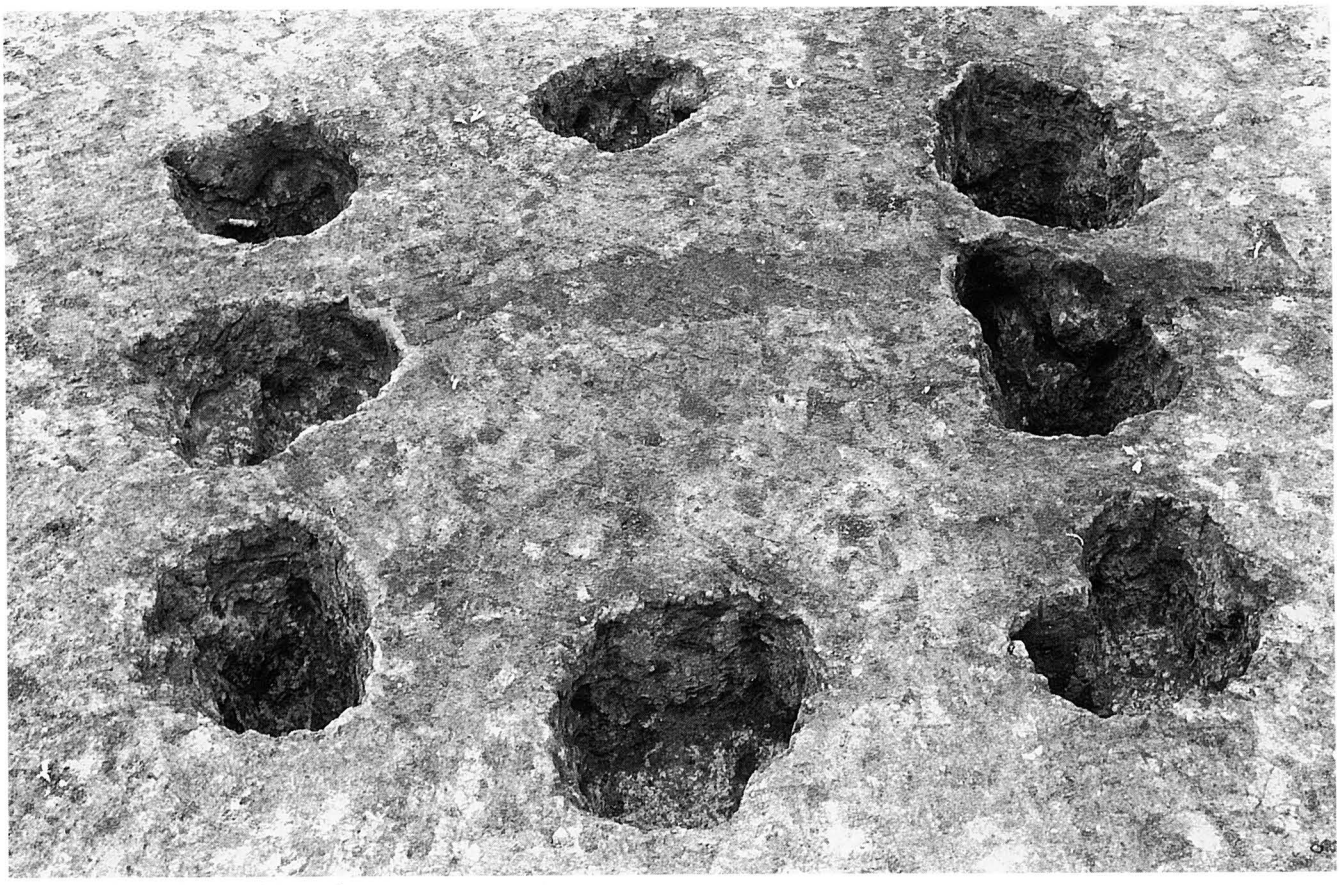
(4) B 4 号方形柱穴列 d ピット断面柱痕確認（東から）



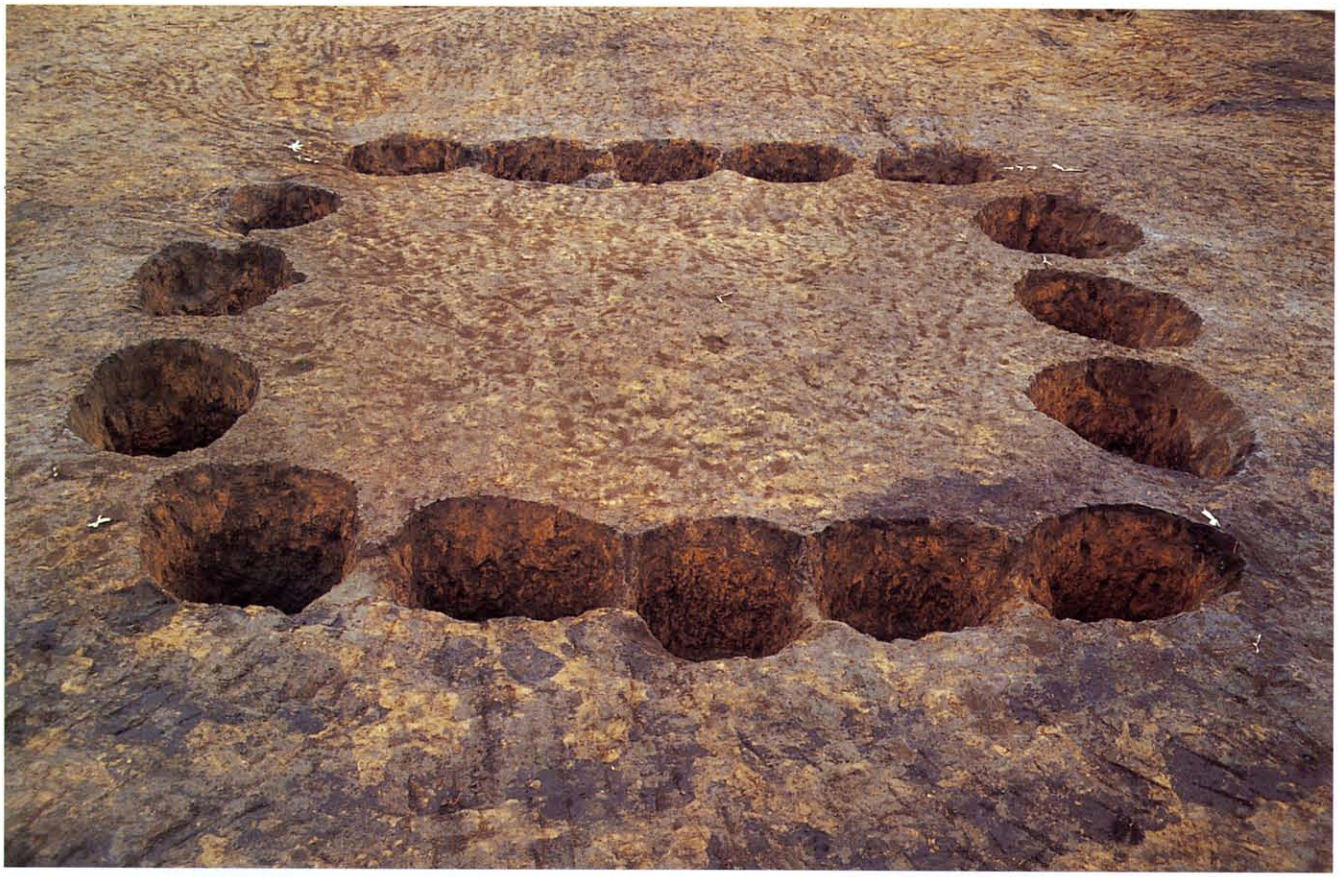
(5) B 4 号方形柱穴列 e ピット断面柱痕確認（東から）

図版　38

(1) Ｃ５号方形柱穴列（北から）



(2) Ｃ６号方形柱穴列（東から）



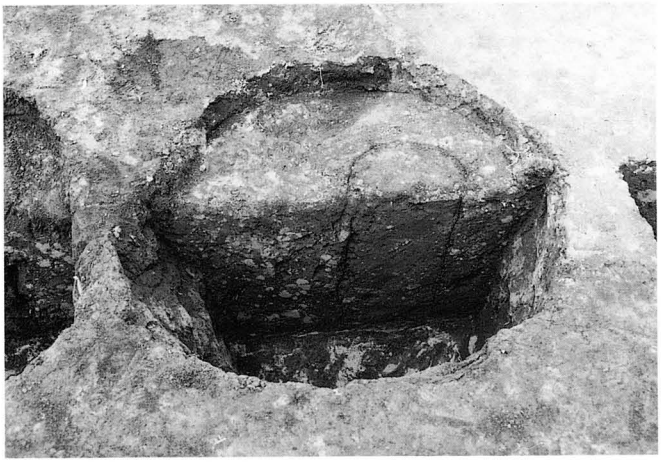
(1) Ｃ７号方形柱穴列（北から）

(2) Ｃ７号方形柱穴列ａピット断面柱痕確認（北から）

(3) Ｃ７号方形柱穴列ｂピット断面柱痕確認（北から）

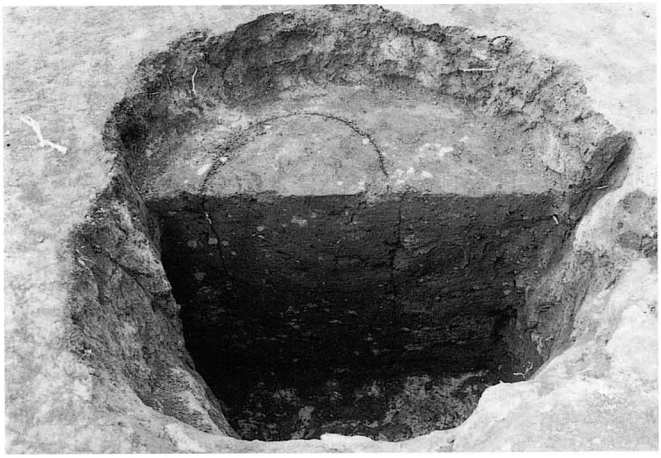
(4) Ｃ７号方形柱穴列ｃピット断面柱痕確認（北から）

(5) Ｃ７号方形柱穴列ｄピット断面柱痕確認（北から）

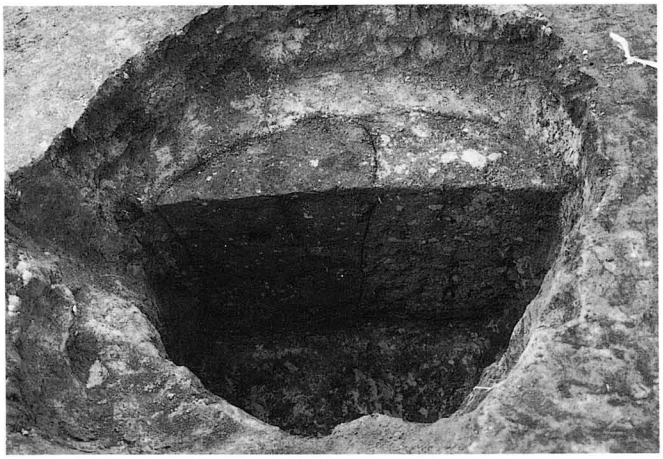


(1) Ｃ７号方形柱穴列ｄピット断面柱痕確認（南から）

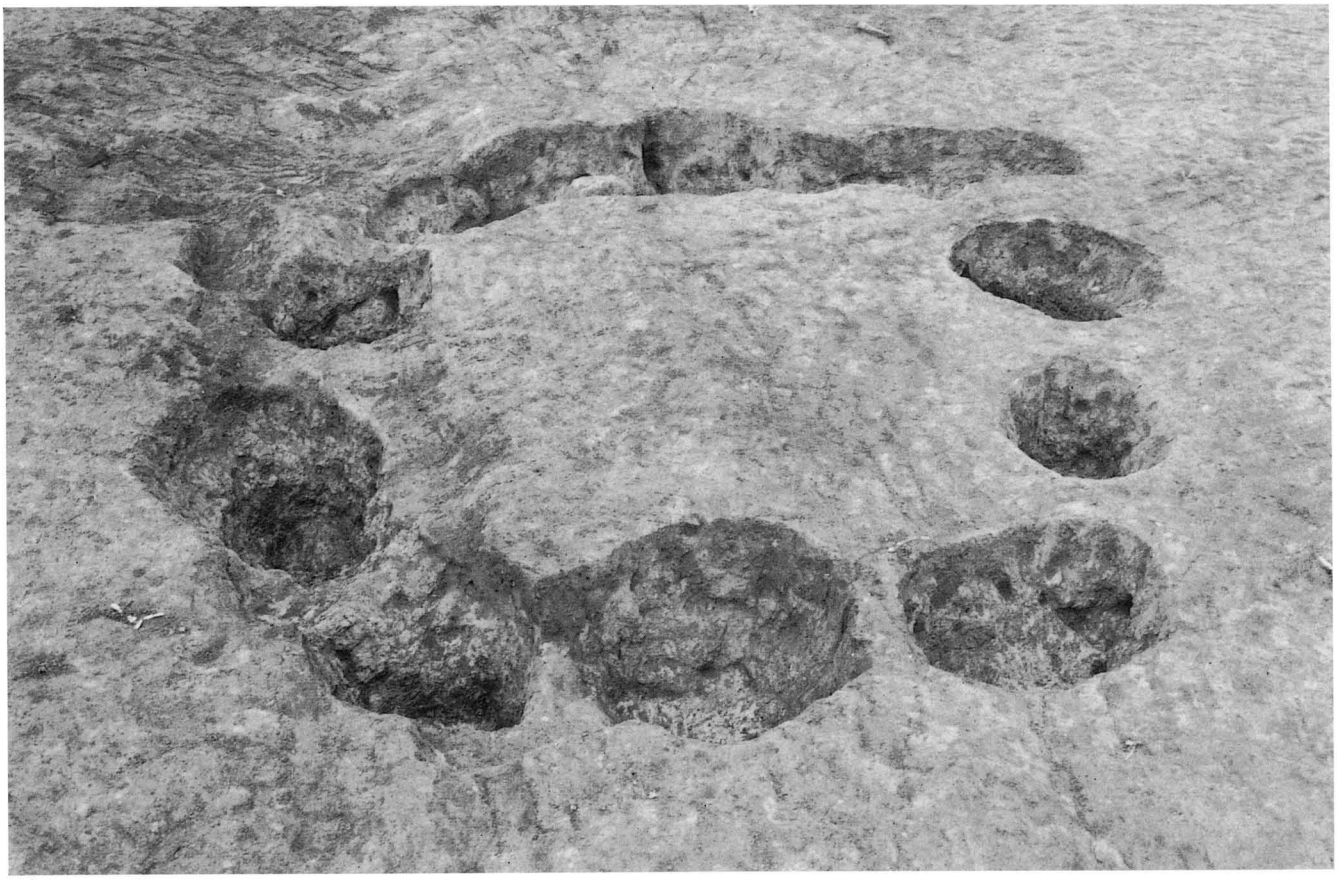
(2) Ｃ７号方形柱穴列ｋピット断面柱痕確認（南から）



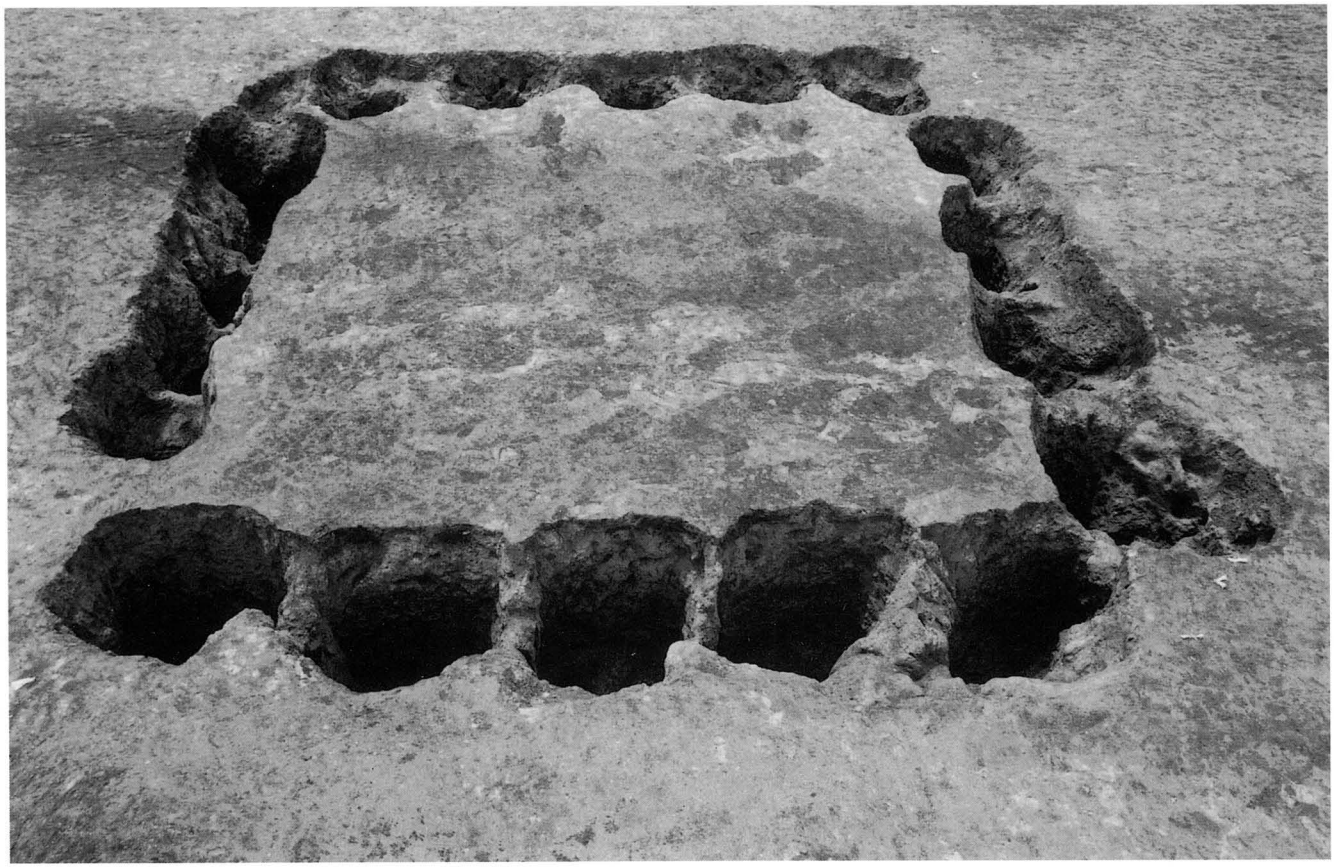
(3) Ｃ７号方形柱穴列ｎ－３ピット断面柱痕確認（西から）



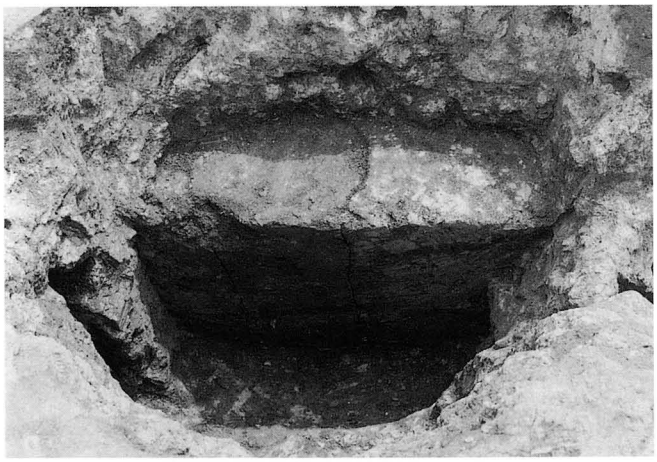
(4) Ｃ７号方形柱穴列ｏ－２ピット断面柱痕確認（西から）



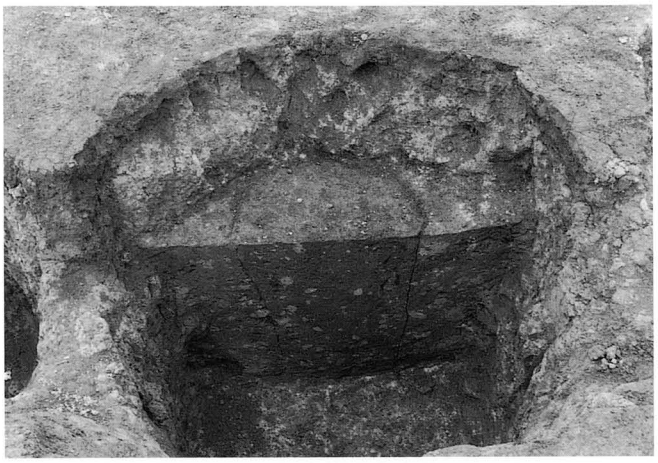
(5) Ｃ８号方形柱穴列



(1) Ｃ９号方形柱穴列（北から）

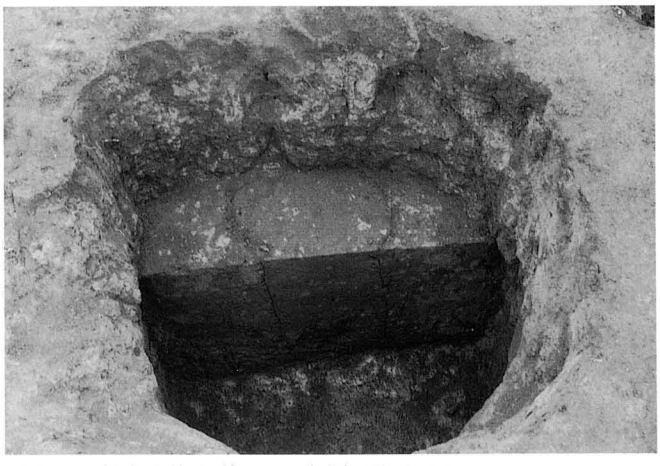


(2) Ｃ９方形柱穴列ｄピット断面柱痕確認（北から）



(3) Ｃ９号方形柱穴列ｋピット断面柱痕確認

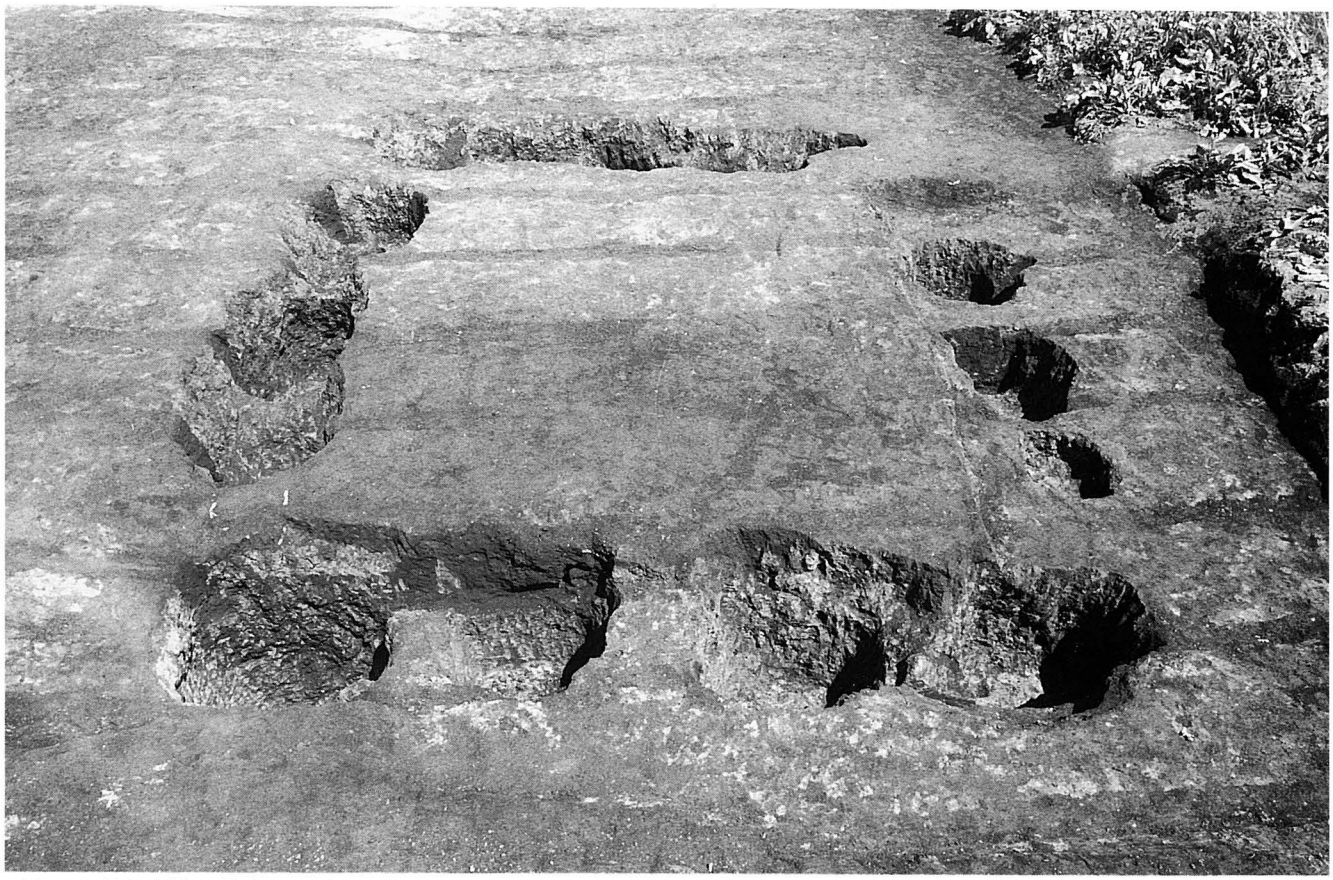
(4) Ｃ９号方形柱穴列ｍピット断面柱痕確認



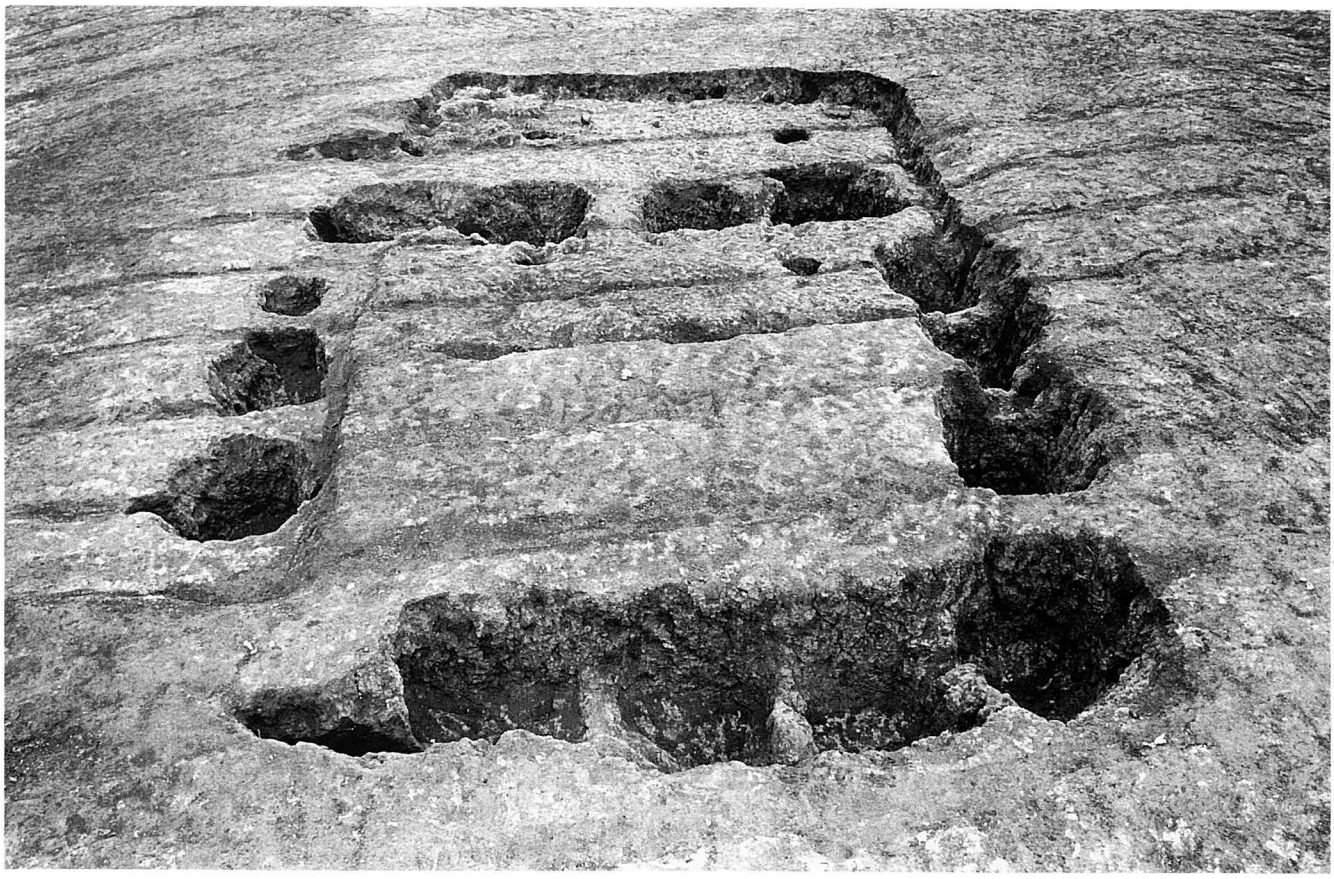
(5) Ｃ９号方形柱穴列ｏピット断面柱痕確認

(1) C10号方形柱穴列（北から）

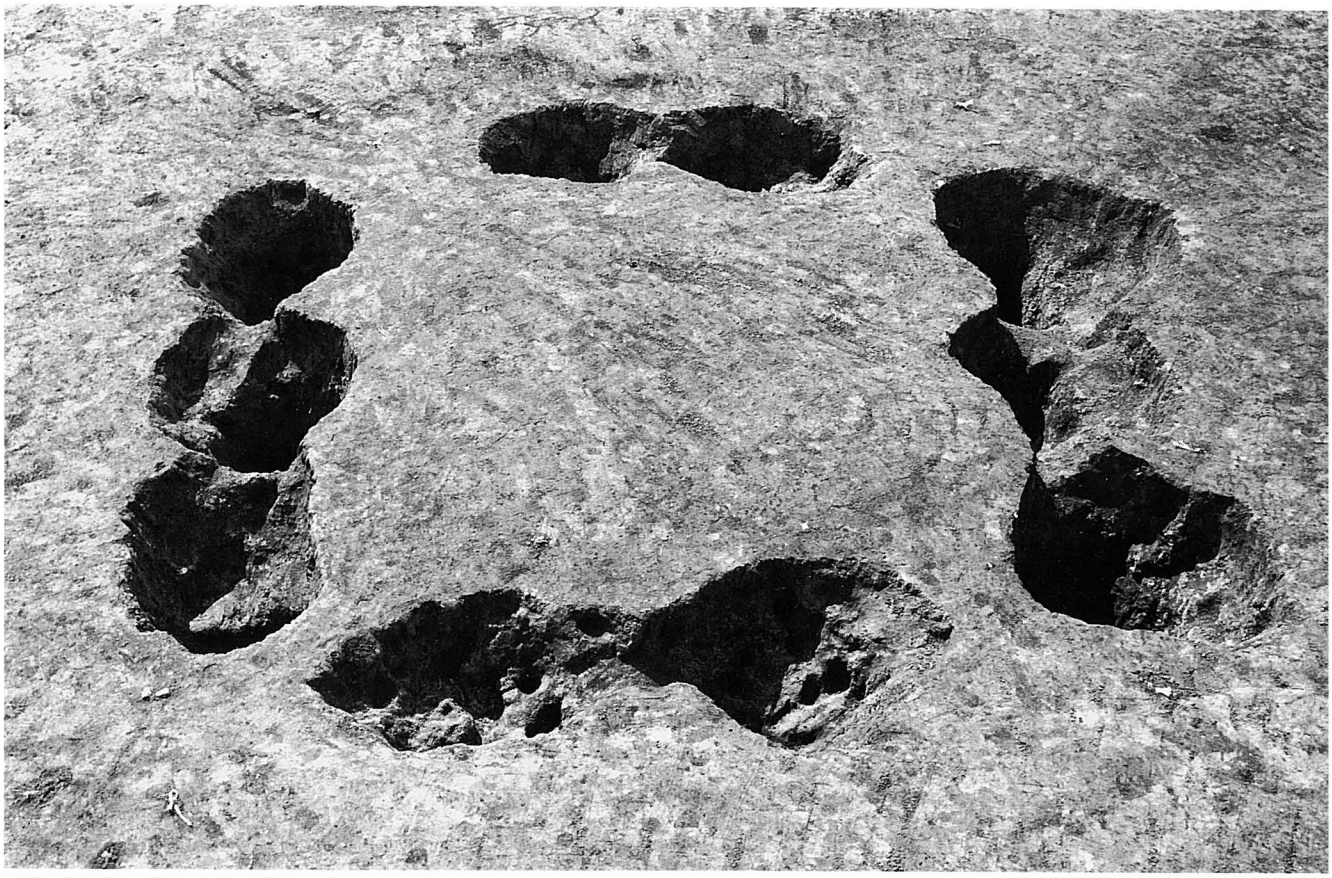
(2) C10号方形柱穴列（東から）



(1) C11号方形柱穴列（西から）



(2) C11号方形柱穴列（手前）・C16号住居址（東から）

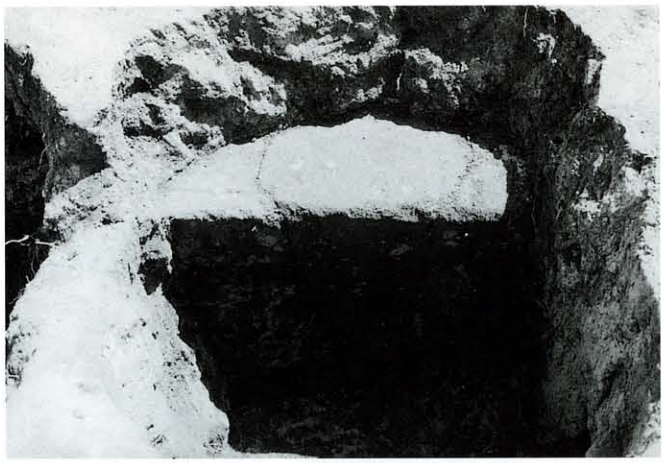


(1) C12号方形柱穴列（東から）

(2) C13号方形柱穴列（北から）

(1) C14号方形柱穴列（北から）

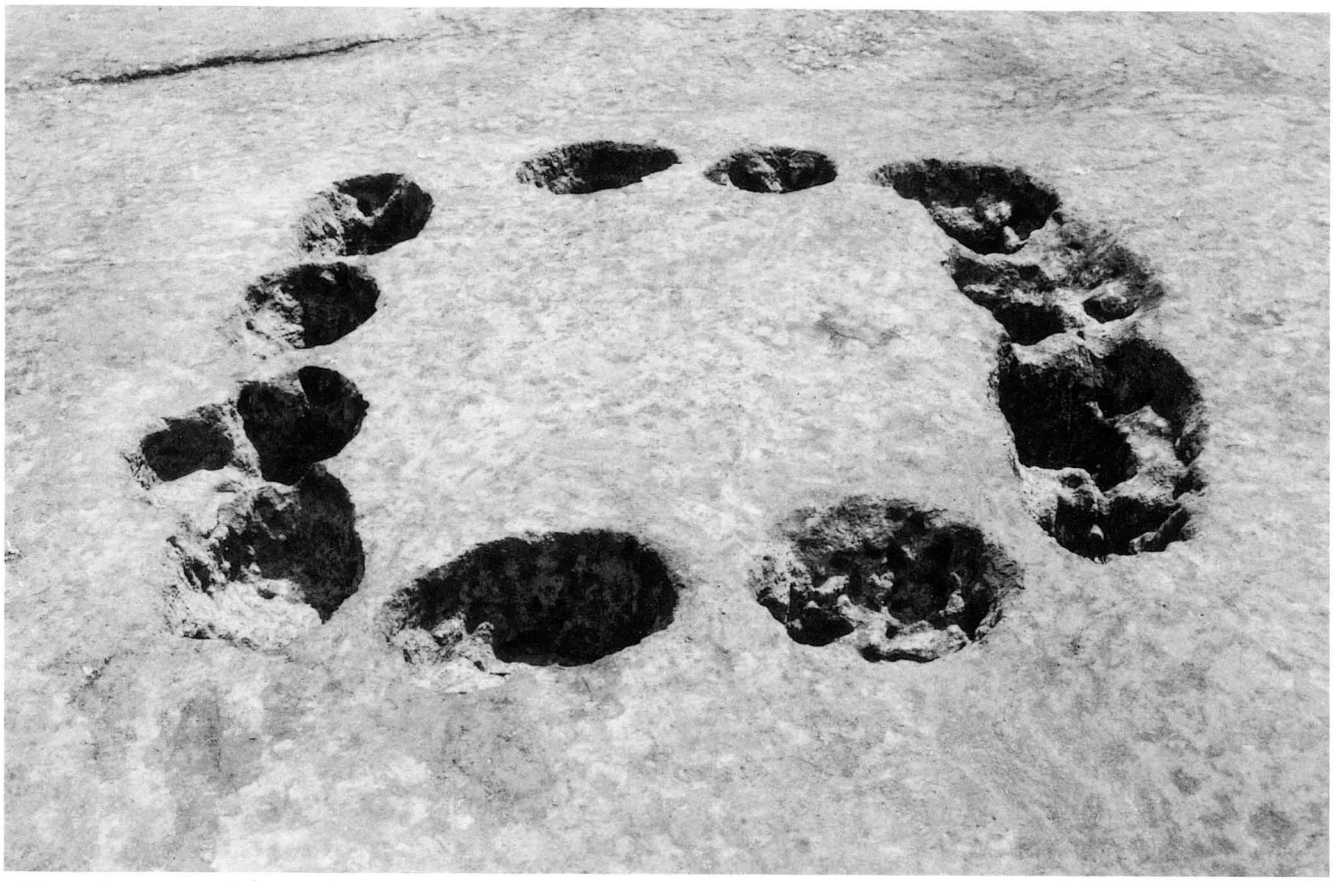
(2) C14号方形柱穴列 i ピット断面柱痕確認



(3) C14号方形柱穴列 j ピット断面柱痕確認（南から）

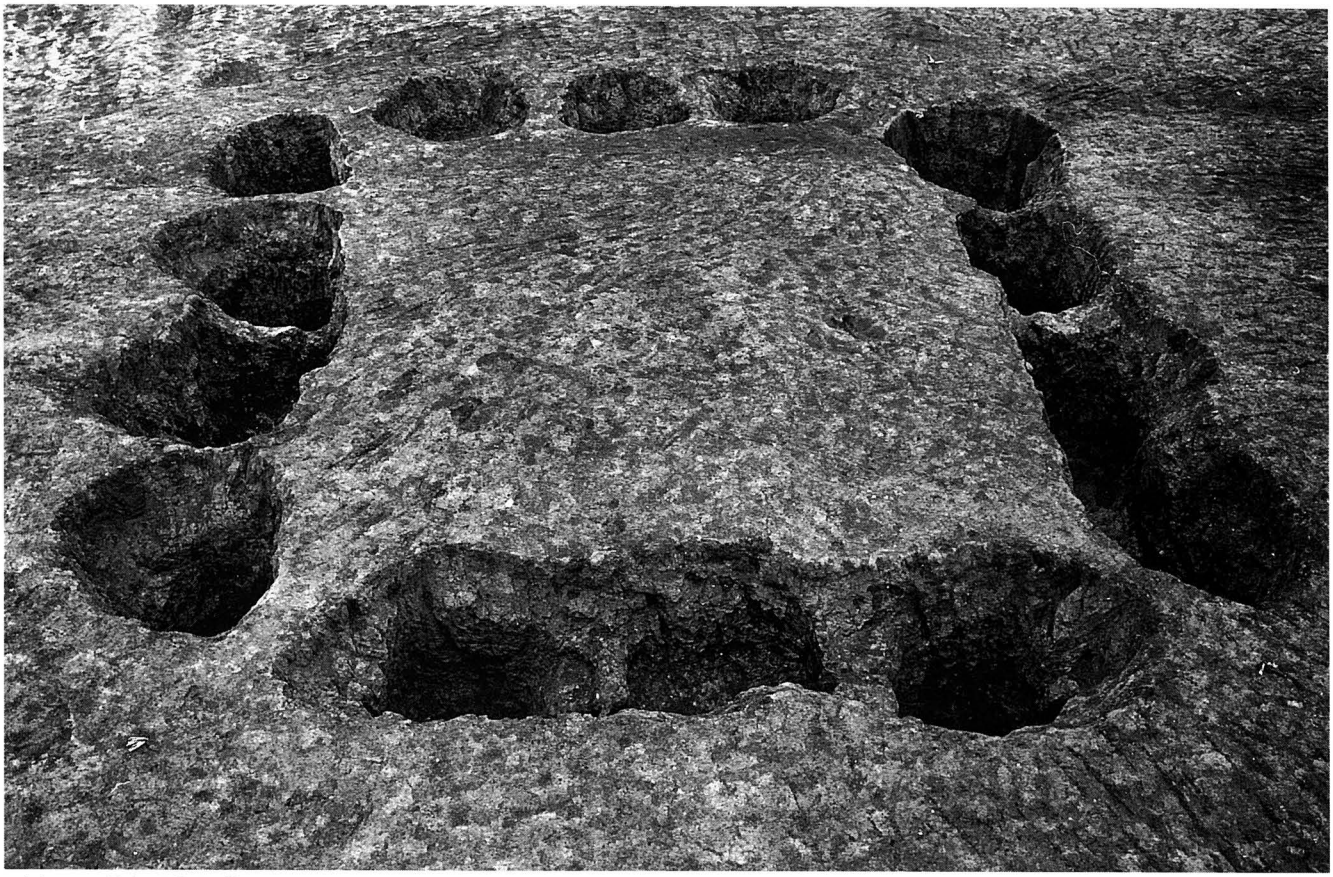
(4) C14号方形柱穴列 m ピット断面柱痕確認（南から）

(5) C14号方形柱穴列 p ピット断面柱痕確認（西から）



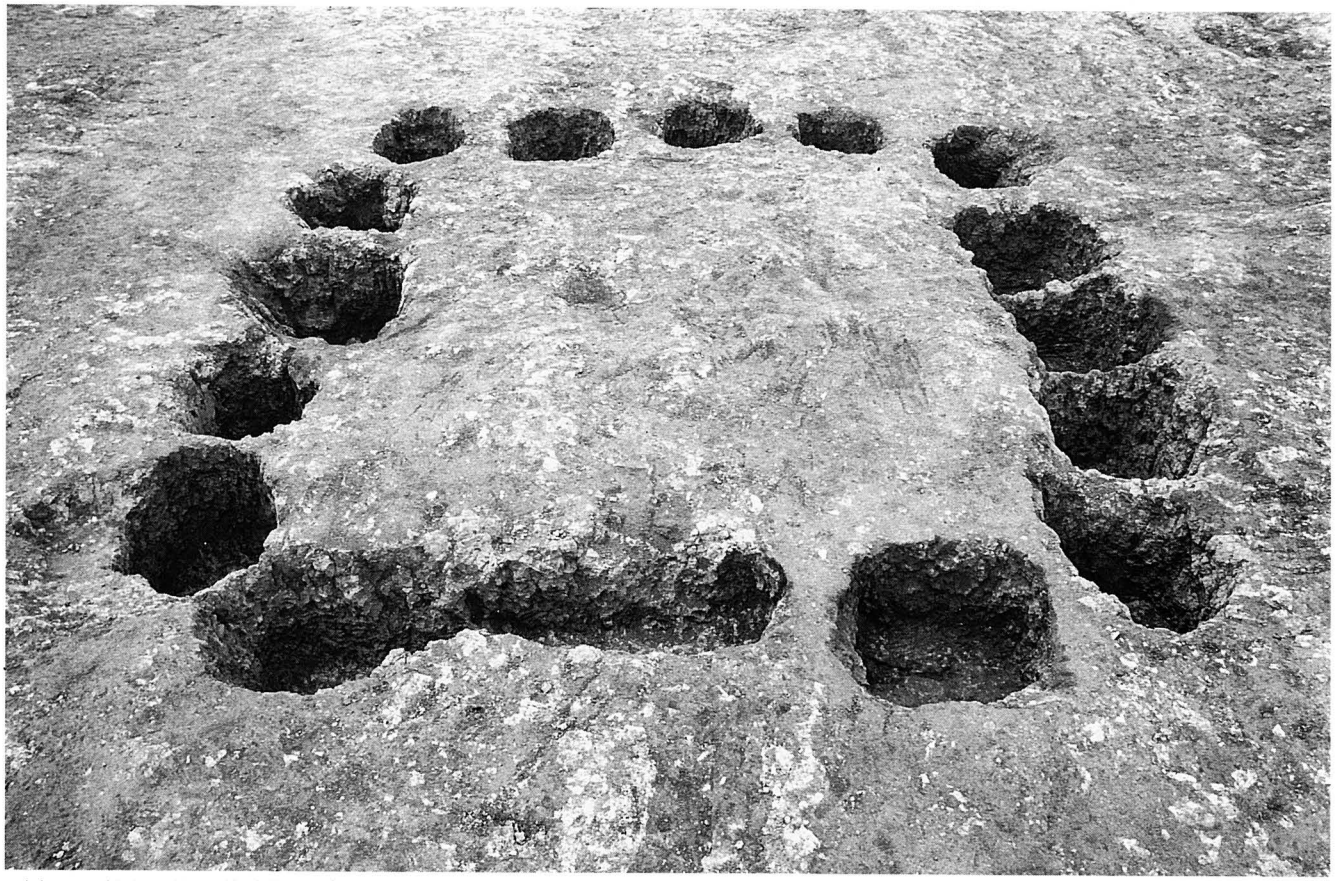
(1) C15号方形柱穴列（北から）

(2) C16号方形柱穴列（北から）



(1) C17号方形柱穴列

(2) C17号方形柱穴列mピット断面柱痕確認（西から）

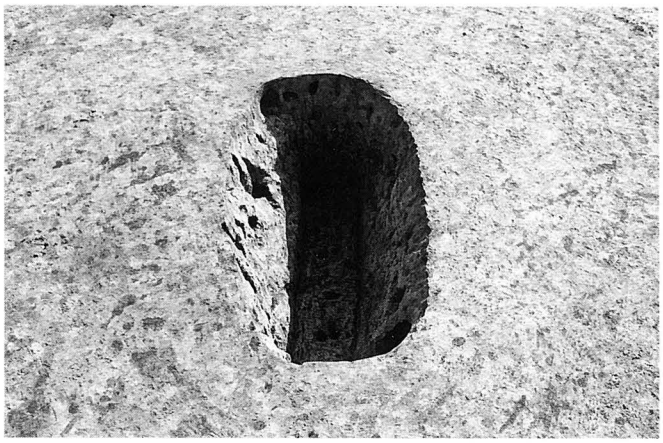


(1) C18号方形柱穴列（北から）

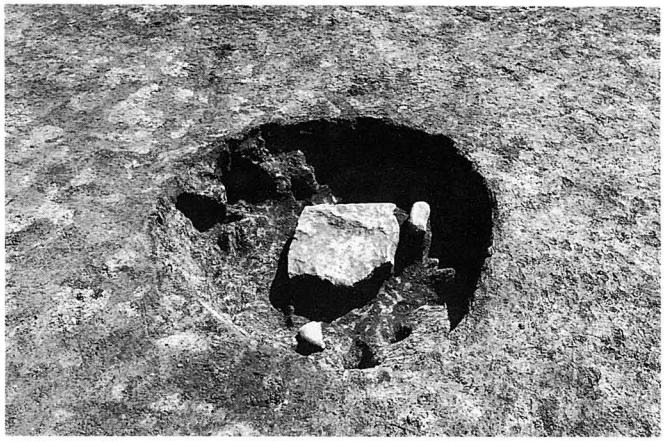
(2) C19号方形柱穴列（北から）

(1) A 1 号土坑一括土器

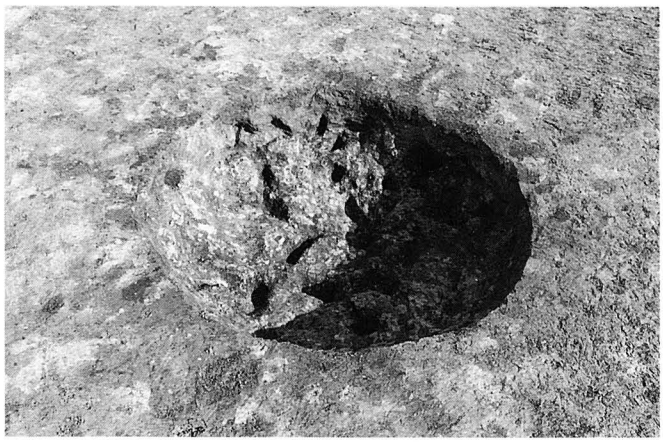
(2) A33号土坑（東から）



(3) B 1 号土坑完掘（南から）

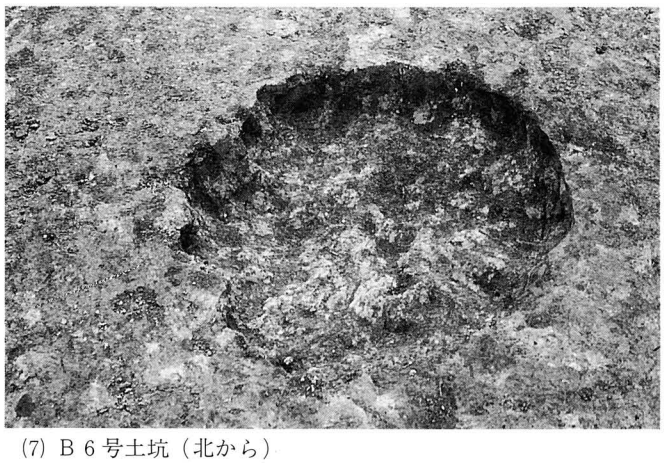


(4) B 3 号土坑

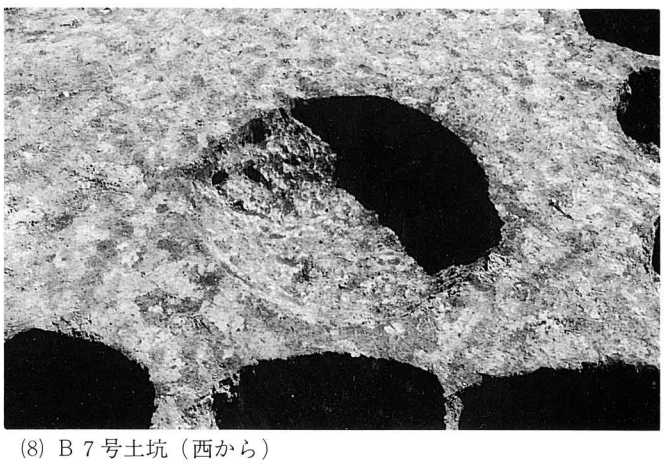


(5) B 4 号土坑（西から）

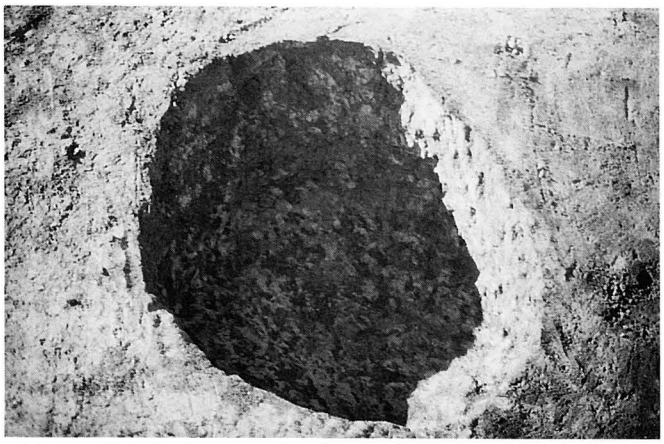
(6) B 5 号土坑（北から）



(7) B 6 号土坑（北から）

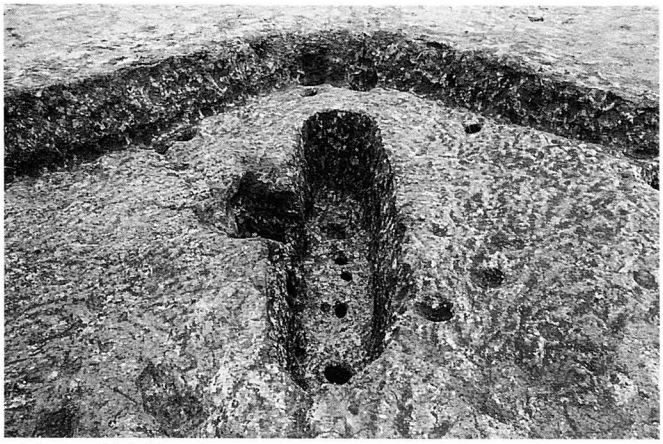


(8) B 7 号土坑（西から）



(1) B 8号土坑（北側斜面）（東から）

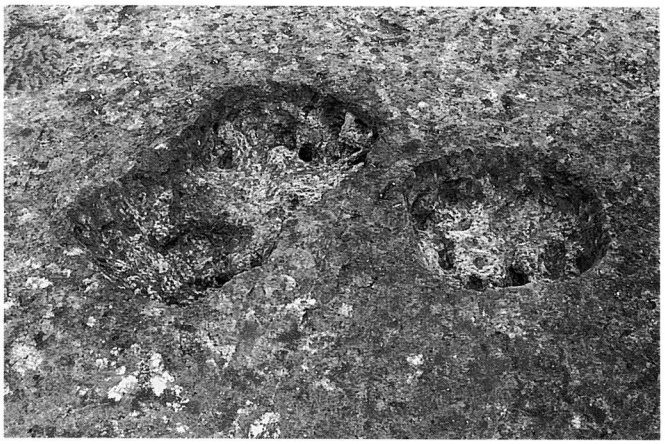
(2) B 9号土坑（北側斜面）陥し穴（東から）



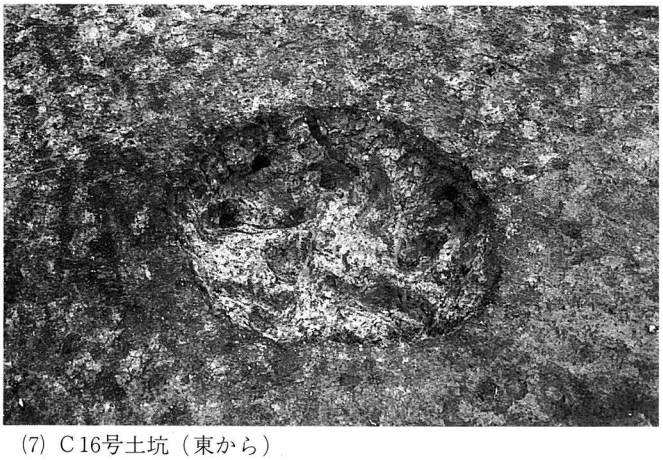
(3) B 6号住居址内土坑（北から）

(4) C11号土坑（北から）

(5) C12号土坑（北から）

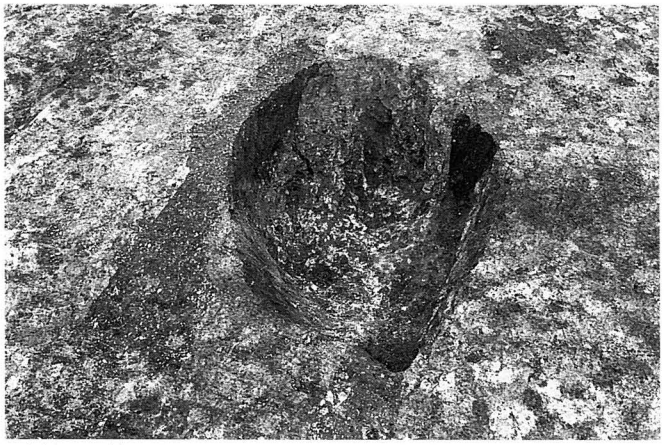


(6) C13・14・15土坑（北から）

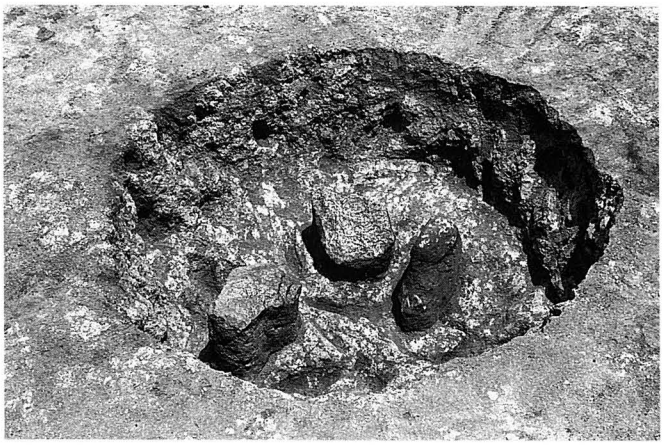


(7) C16号土坑（東から）

(8) C17号土坑



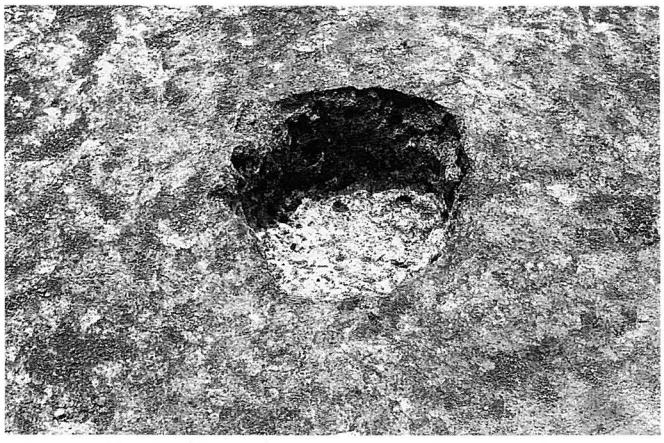
(1) C18号土坑



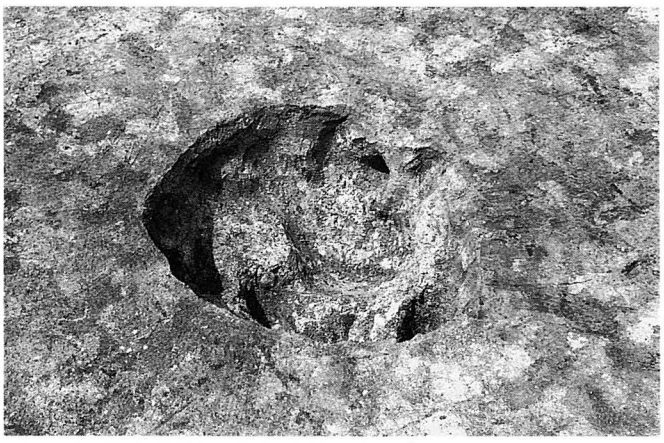
(2) C19号土坑（南から）

(3) C20号土坑

(4) C21号土坑（北から）



(5) C22号土坑（北から）



(6) C23号土坑（北から）

(7) C24号土坑（上から）

(8) C25号土坑（南から）

(1) C10号方形柱穴列断層（東から）

(2) C10号方形柱穴列断層（北東から）

(1) 断層調査

(2) 断層調査

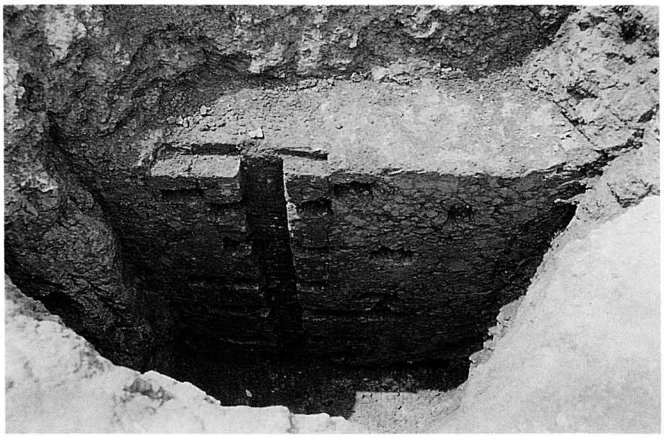
(1) 断層調査

(2) C11号住居址（東から）

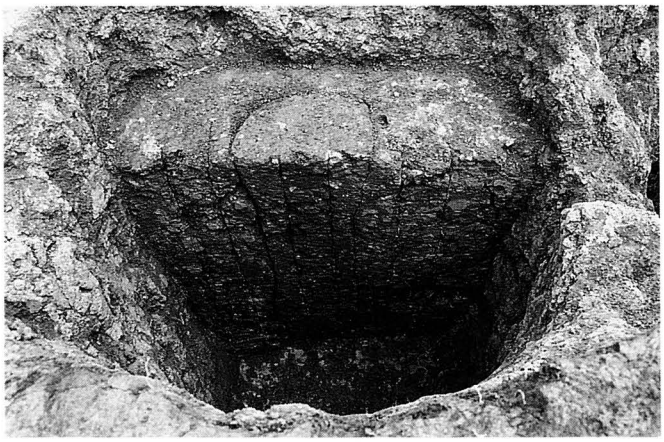
(1) Ｃ９号方形柱穴列ｃピット土壌サンプルの採取前

(2) Ｃ９号方形柱穴列ｃピット土壌サンプルの採取（北から）

(3) Ｃ９号方形柱穴列ｄピット土壌サンプルの採取



(4) Ｃ９号方形柱穴列ｅピット土壌サンプルの採取



(5) Ｃ９号方形柱穴列ｍピット土壌サンプルの採取前（南から）

(6) Ｃ９号方形柱穴列ｍピット土壌サンプルの採取後（南から）

(7) Ｃ９号方形柱穴列ｏピット土壌サンプルの採取前（西から）

(8) Ｃ９号方形柱穴列ｏピット土壌サンプルの採取後

阿久尻遺跡

県営金沢工業団地建設に伴う造成工事に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成5年3月20日　印刷
平成5年3月27日　発行

編集
発行　長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
茅野市教育委員会

印刷　ほおずき書籍株式会社